

岩手県埋文センター文化財調査報告書第34集

金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書

— II —

# 水 沢 市 膳 性 遺 跡

(第1分冊)

(財)岩手県埋蔵文化財センター  
建設省岩手工事事務所

金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書

— II —

# 水 沢 市 膳 性 遺 跡

(第1分冊)

# 序

岩手県は四国四県に匹敵する広大な面積を有し、その広大な県土に存在する埋蔵文化財包蔵地は、県教育委員会文化課調査によりますと4,719ヶ所の多きとなっております。この数は今後の精密な分布調査によって更に増加するものと考えられます。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先の貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を守り伝えることが我々の責務と考えている所であります。

岩手県を南から北に縦断する国道4号線は181.8kmの長きにわたっております。この国道4号線は自動車時代の到来により交通事情が悪化し、特に市街地における交通渋滞を引き越こし、市民生活へも影響をもたらしております。これの解消のため県下各地においてバイパス開道の要望が高まっております。

本報告書にかかわる金ヶ崎バイパスも金ヶ崎町中心部を通る国道4号線の交通渋滞緩和のため建設省岩手工事事務所によって建設されるものであります。このバイパス路線内に6ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が存在してございました。これらの包蔵地は建設省と県文化課との協議によって調査の上記録保存することとしました。

発掘調査は昭和51年度から行われ、昭和55年度をもって終了いたしました。本報告書に収録いたしました膳性遺跡は古墳時代から平安時代までの複合集落址で、大型の住居址を含む89棟もの住居址が検出され、水沢市における同期の一大集落であることが明らかにされました。出土遺物としては圭頭の太刀の柄頭、6世紀製作の須恵器などが注目されます。

本年度はセンターに新たに資料課を設置し、鋭意報告書作成に取り組みました。本報告書の内容については不十分な点が多々あるとは思いますが、いささかでも関係各位の参考に供され斯学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教委、委託者をはじめ関係各位に多大のご協力、ご援助を頂きましたことを厚く感謝申し上げます、今後のご指導、ご協力を合せてお願い申し上げます。

昭和57年3月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

## (財) 岩手県埋蔵文化財センター組織図

役員		
理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	中原 良一	(県教育次長)
常務理事	菅原 一郎	(県埋蔵文化財センター所長)
理事	吉田 良和	(県農政部次長)
〃	田代 太志	(県林業水産部次長)
〃	後藤 光雄	(県土木部次長)
〃	板橋 源	(県立博物館長)
〃	草間 俊一	(県立盛岡短大長)
〃	小形 信夫	(県民俗の会々長)
監事	白石 丈雄	(県教委総務課長)
〃	及川 久男	(県教委財務課長)

職員	
所長	菅原 一郎
副所長	小野寺 登
総務課長	小笠原喜一
庶務係長	岡沢成治
主事	佐藤久四郎
〃	戸草内幸男
〃	立花多加志
技能員	佐藤春男

調査課長 嶋 千秋

主任専門調査員 近藤宗光

〃 遠藤勝博

〃 国生 尚

専門調査員 村上達夫

〃 梶山靖彦

〃 朝野孝二

〃 菊池利和

〃 鈴木恵治

〃 小平忠孝

〃 大原一則

〃 田鎖寿夫

〃 佐々木嘉直

〃 柄沢満郎

専門調査員 平井 進

〃 種市 進

〃 鈴木隆英

〃 三浦謙一

〃 岩渕 久

〃 光井文行

〃 佐藤 勝

〃 高橋義介

〃 佐々木清文

〃 酒井宗孝

資料課長 瀬川司男

専門調査員 高橋与右エ門

〃 四井謙吉

〃 本沢慎輔

〃 工藤利幸

〃 高橋文夫

〃 中川重紀

〃 松野恒夫

岩手県立  
埋蔵文化財センター

文化財専門員 渡辺洋一

## 例 言

1. 本報告書は水沢市佐倉河字膳性地内に所在する膳性遺跡に対する発掘調査の結果を集録し、金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅱとしてまとめたものである。

2. 本遺跡に対する発掘調査は、金ヶ崎バイパス工事に関連する事前緊急調査であり、調査は建設省岩手工事事務所と岩手県教育委員会文化課との協議を経て(財)岩手県埋蔵文化財センターが担当した。

3. 現地での発掘調査は、昭和53年7月16日より開始され、その後、3ヶ年間に第6次調査まで継続され、昭和55年8月26日で全て終了した。各調査年度と調査次は以下の通りである。

昭和53年度(第1次・2次調査) 昭和53年7月16日～11月13日

昭和54年度(第3次～5次調査) 昭和54年4月6日～6月14日・9月27日～11月29日

昭和55年度(第6次調査) 昭和55年4月10日～8月26日

4. 各調査次と調査担当者は「調査の経過」に記した。

5. 調査対象面積は6,000㎡であり、そのほぼ全面積を発掘した。

6. 本遺跡の調査で検出された遺構は次の通りである。

① 竪穴住居址	89棟	② 掘立柱建物跡	4棟
③ 土坑類	15基	④ 溝跡	17条

7. 本遺跡の発掘調査によって多数の遺物が出土し、その中から1,346点を本報告書に掲載したが、種類別の掲載点数は以下の通りである。

① 土師器	805点	② 須恵器	285点	③ 紡錘車	27点
④ 土製勾玉	17点	⑤ 土製丸玉	49点	⑥ 水晶切子玉	1点
⑦ 琥珀玉	5点	⑧ 鉄器類(古銭含)	55点	⑨ 砥石	16点
⑩ 縄文時代石器	38点	⑪ 縄文時代土器	43点	⑫ 磁器破片	4点

8. 整理作業の中で、遺物の水洗は現地で行ったが、其の後の作業については現地での調査が終了後に各調査次ごとに調査担当者が行ったが、最終的な点検は高橋与右エ門が行った。

9. 本報告書の執筆分担は次の通りであるが、各文末に氏名を記し、文責を明らかにした。

I. 調査に至る経過	瀬川司男
II. 3ヶ年の調査経過	瀬川司男
III. 調査の方法	高橋与右エ門
IV. 地形と周囲の環境	山口了紀、高橋与右エ門
V. 基本層序	高橋与右エ門
VI. 検出遺構と出土遺物	遠藤勝博、山口了紀、鈴木恵治、吉田 洋

高橋与右エ門、高橋義介

Ⅶ. まとめ

鈴木恵治、高橋与右エ門

Ⅷ. さいごに

高橋与右エ門

10. 調査結果の中から、次の問題については次の方々に分析や鑑定を依頼した。(敬称略)
- ① 土師器の靫痕について 佐藤敏也 (稲作史研究会会員)
  - ② 須恵器、土師器、粘土の胎土分析 照井一明 (岩手県立種市高等学校)
  - ③ 琥珀玉の材質鑑定と産地同定 岩手県立博物館<sup>1</sup>
11. 現地調査や整理報告に当り、次の方々より御教授をいただいた。(敬称略)
- 東北歴史資料館 藤沼邦彦 (財)福島県文化センター 玉川一郎  
大谷女子大学 中村 浩 岩手県教育委員会文化課 相原康二、齊藤 淳
12. 本遺跡の調査に使用した基準点の測量はアジア航測 KKに依託した。
13. 本遺跡の調査では、2次調査・3次調査・6次調査での現地説明会資料と、53年度・54年度・55年度の各調査略報が中間報告として公表されているが、其の後の検討によって若干訂正や補正した部分があるので、本報告書をもって正しいものとし、訂正しておく。
14. 本報告書の全体的な編集、レイアウト、校正は高橋与右エ門が担当した。

# 本文目次

## 序

### 例言

I. 調査に至る経過	2	6. 表採や粗掘りの出土遺物	440
II. 3ヶ年の調査経緯	4	7. 集落に先行する遺物	445
III. 調査の方法	6	8. 磁器	449
1. 野外調査	6	VII. まとめ	458
2. 室内整理	10	1. 遺構	458
3. 報告	10	(1) 住居址	458
IV. 地形と周囲の環境	13	(2) 掘立柱建物跡	496
1. 地形	13	(3) 土坑	503
2. 遺跡の立地と環境	16	(4) 溝跡	506
3. 周辺の遺跡	16	2. 遺物	509
V. 基本層序	19	(1) 縄文・弥生時代の遺物	509
VI. 検出遺構と出土遺物	22	(2) 古代の遺物	510
1. 住居址	22	(3) 中世の遺物	553
2. 掘立柱建物跡	384	3. 土師器の編年的位置づけ	553
3. 土坑	398	4. 集落期区分	568
4. 溝跡	417	VIII. さいごに	573
5. 遺構不明の出土遺物	440		

# 付編目次

付編 1	575	付編 3	586
付編 2	577		

# 図版目次

第1図 岩手県全図	1	第4図 グリッド配置図	7・8
第2図 遺跡位置図	3	第5図 地形・周辺遺跡図	14
第3図 調査範囲・遺跡付近の地形図	5	第6図 基本層序	21

第7図	A-1住居址(遺構)	23	第39図	C-3住居址-2(遺構)	68
第8図	A-1住居址(遺物)	23	第40図	C-3住居址-2(遺物)	68
第9図	A-2住居址(遺構)	25	第41図	C-6住居址-1A(遺構-1)	70
第10図	A-2住居址(遺物)	25	第42図	C-6住居址-1A・1B(遺構-2)	71
第11図	A-4住居址(遺構)	27	第43図	C-6住居址-1B(遺構-3)	72
第12図	A-4住居址(遺物)	28	第44図	C-6住居址-1A(遺物-1)	73
第13図	A-5住居址(遺構)	30	第45図	C-6住居址-1A(遺物-2)	74
第14図	A-5住居址(遺物)	31	第46図	C-6住居址-1A(遺物-3)	75
第15図	B-2住居址(遺構)	34	第47図	C-6住居址-2A・2B(遺構-1)	79
第16図	B-2住居址(遺物)	35	第48図	C-6住居址-2A・2B(遺構-2)	80
第17図	B-3住居址(遺構)	37	第49図	C-6住居址-2A(遺物)	81
第18図	B-3住居址(遺物)	38	第50図	C-9住居址(遺構)	85
第19図	B-5住居址(遺構)	41	第51図	C-9住居址(遺物-1)	86
第20図	B-5住居址(遺物-1)	42	第52図	C-9住居址(遺物-2)	87
第21図	B-5住居址(遺物-2)	43	第53図	C-9住居址(遺物-3)	88
第22図	B-5住居址(遺物-3)	44	第54図	C-9住居址(遺物-4)	89
第23図	B-6住居址(遺構)	47	第55図	C-9住居址(遺物-5)	90
第24図	B-6住居址(遺物)	48	第56図	C-11住居址(遺構)	91
第25図	B-7住居址(遺構)	50	第57図	C-12住居址(遺構)	93
第26図	B-7住居址(遺物-1)	51	第58図	C-12住居址(遺物)	94
第27図	B-7住居址(遺物-2)	52	第59図	C-13住居址(遺構)	96
第28図	C-1住居址(遺構)	54	第60図	C-13住居址(遺物-1)	97
第29図	C-1住居址(遺物)	54	第61図	C-13住居址(遺物-2)	98
第30図	C-2住居址(遺構)	56	第62図	C-13住居址(遺物-3)	99
第31図	C-2住居址(遺物-1)	57	第63図	C-13住居址(遺物-4)	100
第32図	C-2住居址(遺物-2)	58	第64図	C-13住居址(遺物-5)	101
第33図	C-3住居址-1(遺構-1)	61	第65図	D-2住居址(遺構)	103
第34図	C-3住居址-1(遺構-2)	62	第66図	D-2住居址(遺物)	104
第35図	C-3住居址-1(遺物-1)	63	第67図	D-4住居址-1(遺構)	107
第36図	C-3住居址-1(遺物-2)	64	第68図	D-4住居址-2(遺構)	108
第37図	C-3住居址-1(遺物-3)	65	第69図	D-4住居址-1・2(遺構-3)	109
第38図	C-3住居址-1(遺物-4)	66	第70図	D-4住居址-1(遺物-1)	110



第71図	D-4住居址-1(遺物-2) ……………	111	第102図	E-7住居址-1(遺物) ……………	157
第72図	D-8住居址-1(遺構-1) ……………	116	第103図	E-7住居址-2(遺構) ……………	158
第73図	D-8住居址-1(遺構-2) ……………	117	第104図	E-7住居址-2(遺物) ……………	159
第74図	D-8住居址-1(遺物-1) ……………	118	第105図	F-3住居址-1(遺構) ……………	161
第75図	D-8住居址-1(遺物-2) ……………	119	第106図	F-3住居址-1(遺物) ……………	162
第76図	D-8住居址-1(遺物-3) ……………	120	第107図	F-3住居址-2(遺構-1) ……………	165
第77図	D-8住居址-1(遺物-4) ……………	121	第108図	F-3住居址-2(遺構-2) ……………	166
第78図	D-8住居址-1(遺物-5) ……………	122	第109図	F-3住居址-2(遺物-1) ……………	167
第79図	D-8住居址-2(遺構-1) ……………	124	第110図	F-3住居址-2(遺物-2) ……………	168
第80図	D-8住居址-2(遺構-2) ……………	125	第111図	F-4住居址-1(遺構-1) ……………	171
第81図	D-8住居址-2(遺物) ……………	125	第112図	F-4住居址-1(遺構-2) ……………	172
第82図	D-12住居址(遺構-1) ……………	128	第113図	F-4住居址-1(遺物-1) ……………	173
第83図	D-12住居址(遺構-2) ……………	129	第114図	F-4住居址-1(遺物-2) ……………	174
第84図	D-12住居址(遺物-1) ……………	130	第115図	F-4住居址-1(遺物-3) ……………	175
第85図	D-12住居址(遺物-2) ……………	131	第116図	F-4住居址-1(遺物-4) ……………	176
第86図	D-12住居址(遺物-3) ……………	132	第117図	F-4住居址-1(遺物-5) ……………	177
第87図	D-12住居址(遺物-4) ……………	133	第118図	F-4住居址-2(遺構) ……………	178
第88図	E-2住居址-1 ……………	136	第119図	F-5住居址-1(遺構) ……………	182
	E-2住居址-2(遺構) ……………	136	第120図	F-5住居址-2(遺構) ……………	183
第89図	E-2住居址-1(遺物) ……………	137	第121図	F-5住居址-3(遺構) ……………	184
第90図	E-3住居址-1(遺構-1) ……………	140	第122図	F-5住居址-1(遺物-1) ……………	185
第91図	E-3住居址-1(遺構-2) ……………	141	第123図	F-5住居址-1(遺物-2) ……………	186
第92図	E-3住居址-1(遺物-1) ……………	141	第124図	F-6住居址(遺構-1) ……………	190
第93図	E-3住居址-1(遺物-2) ……………	142	第125図	F-6住居址(遺構-2) ……………	191
第94図	E-3住居址-2(遺構) ……………	144	第126図	F-6住居址(遺物-1) ……………	191
第95図	E-4住居址(遺構-1) ……………	147	第127図	F-6住居址(遺物-2) ……………	192
第96図	E-4住居址(遺構-2) ……………	148	第128図	F-6住居址(遺物-3) ……………	193
第97図	E-4住居址(遺物) ……………	148	第129図	F-11住居址(遺構-1) ……………	196
第98図	E-6住居址(遺構-1) ……………	150	第130図	F-11住居址(遺構-2) ……………	197
第99図	E-6住居址(遺構-2) ……………	151	第131図	F-11住居址(遺物-1) ……………	198
第100図	E-6住居址(遺物) ……………	152	第132図	F-11住居址(遺物-2) ……………	199
第101図	E-7住居址-1(遺構) ……………	156	第133図	F-12住居址(遺構) ……………	201

第134图	F-12住居址(遺物)	201	第166图	G-15住居址(遺構-2)	244
第135图	F-13住居址(遺構-1)	203	第167图	G-15住居址(遺物)	245
第136图	F-13住居址(遺構-2)	204	第168图	H-2住居址-1(遺構-1)	248
第137图	F-13住居址(遺物-1)	205	第169图	H-2住居址-1(遺構-2)	249
第138图	F-13住居址(遺物-2)	206	第170图	H-2住居址-1(遺物-1)	250
第139图	G-3住居址(遺構-1)	209	第171图	H-2住居址-1(遺物-2)	251
第140图	G-3住居址(遺構-2)	210	第172图	H-2住居址-1(遺物-3)	252
第141图	G-3住居址(遺物-1)	210	第173图	H-2住居址-1(遺物-4)	253
第142图	G-3住居址(遺物-2)	211	第174图	H-2住居址-2(遺構)	255
第143图	G-4住居址(遺構-1)	214	第175图	H-2住居址-2(遺物-1)	256
第144图	G-4住居址(遺構-2)	215	第176图	H-2住居址-2(遺物-2)	257
第145图	G-4住居址(遺物-1)	216	第177图	H-3住居址(遺構)	258
第146图	G-4住居址(遺物-2)	217	第178图	H-3住居址(遺物-1)	260
第147图	G-6住居址(遺構)	220	第179图	H-3住居址(遺物-2)	261
第148图	G-6住居址(遺物-1)	221	第180图	H-4住居址(遺構)	264
第149图	G-6住居址(遺物-2)	222	第181图	H-4住居址(遺物-1)	265
第150图	G-6住居址(遺物-3)	223	第182图	H-4住居址(遺物-2)	266
第151图	G-8住居址-1(遺構-1)	224	第183图	H-5住居址(遺構)	268
第152图	G-8住居址-1(遺構-2)	225	第184图	H-5住居址(遺物)	269
第153图	G-8住居址-1(遺物-1)	227	第185图	H-6住居址(遺構-1)	271
第154图	G-8住居址-1(遺物-2)	228	第186图	H-6住居址(遺構-2)	272
第155图	G-8住居址-2(遺構-1)	231	第187图	H-6住居址(遺物)	273
第156图	G-8住居址-2(遺構-2)	232	第188图	H-11住居址(遺構-1)	276
第157图	G-8住居址-2(遺物-1)	233	第189图	H-11住居址(遺構-2)	277
第158图	G-8住居址-2(遺物-2)	234	第190图	H-11住居址(遺物-1)	278
第159图	G-8住居址-2(遺物-3)	235	第191图	H-11住居址(遺物-2)	279
第160图	G-8住居址-2(遺物-4)	236	第192图	H-11住居址(遺物-3)	280
第161图	G-8住居址-2(遺物-5)	237	第193图	I-3住居址(遺構)	283
第162图	G-9住居址(遺構-1)	239	第194图	I-4住居址(遺構-1)	286
第163图	G-9住居址(遺構-2)	240	第195图	I-4住居址(遺構-2)	287
第164图	G-9住居址(遺物)	240	第196图	I-4住居址(遺物-1)	288
第165图	G-15住居址(遺構-1)	243	第197图	I-4住居址(遺物-2)	289

第198图	I-5住居址(遺構-1)	292	第230图	K-6住居址群(遺物)	339
第199图	I-5住居址(遺構-2)	293	第231图	K-11住居址(遺構)	341
第200图	I-5住居址(遺物-1)	294	第232图	K-11住居址(遺物)	342
第201图	I-5住居址(遺物-2)	295	第233图	K-15住居址(遺構)	343
第202图	I-9住居址(遺構-1)	298	第234图	K-15住居址(遺物)	344
第203图	I-9住居址(遺構-2)	299	第235图	L-3住居址(遺構)	345
第204图	I-9住居址(遺物-1)	299	第236图	L-3住居址(遺物)	345
第205图	I-9住居址(遺物-2)	300	第237图	L-7住居址(遺構)	348
第206图	J-4住居址(遺構-1)	303	第238图	L-7住居址(遺物-1)	349
第207图	J-4住居址(遺構-2)	304	第239图	L-7住居址(遺物-2)	350
第208图	J-4住居址(遺物)	305	第240图	L-13住居址(遺構)	352
第209图	J-6住居址(遺構)	308	第241图	M-5住居址群(遺構)	354
第210图	J-6住居址(遺物)	309	第242图	M-5住居址-1(遺物)	355
第211图	J-7住居址(遺構-1)	312	第243图	M-6住居址(遺構)	358
第212图	J-7住居址(遺構-2)	313	第244图	M-6住居址(遺物)	358
第213图	J-7住居址(遺物-1)	314	第245图	M-7住居址(遺構)	360
第214图	J-7住居址(遺物-2)	315	第246图	M-14住居址(遺構)	362
第215图	J-7住居址(遺物-3)	316	第247图	M-14住居址(遺物)	363
第216图	K-3住居址(遺構)	318	第248图	N-6住居址(遺構)	364
第217图	K-3住居址(遺物-1)	319	第249图	N-6住居址(遺物)	365
第218图	K-3住居址(遺物-2)	320	第250图	N-7住居址(遺構)	367
第219图	K-4住居址(遺構)	323	第251图	N-7住居址(遺物)	368
第220图	K-4住居址(遺物-1)	324	第252图	O-13住居址(遺構-1)	371
第221图	K-4住居址(遺物-2)	325	第253图	O-13住居址(遺構-2)	372
第222图	K-4住居址(遺物-3)	326	第254图	O-13住居址(遺物-1)	373
第223图	K-5住居址-1(遺構)	330	第255图	O-13住居址(遺物-2)	374
第224图	K-5住居址-1(遺物-1)	331	第256图	O-13住居址(遺物-3)	375
第225图	K-5住居址-1(遺物-2)	332	第257图	O-15住居址(遺構)	377
第226图	K-5住居址-1(遺物-3)	333	第258图	P-11住居址(遺構-1)	380
第227图	K-5住居址-2(遺構)	335	第259图	P-11住居址(遺構-2)	381
第228图	K-6住居址-1(遺構)	337	第260图	P-11住居址(遺物)	382
第229图	K-6住居址-2(遺構)	339	第261图	P-13住居址(遺構)	383

第262図	B-7建物跡(遺構)	385	第292図	溝跡(遺構)	432
第263図	C-6建物跡(遺構)	387	第293図	溝跡(遺構)	434
第264図	G-6建物跡(遺構)	388	第294図	溝跡(遺物)	436
第265図	O-18建物跡(遺構)	392	第295図	溝跡(遺物)	437
第266図	B-7建物跡	393	第296図	溝跡(遺物)	438
	G-6建物跡(遺物)	393	第297図	溝跡(遺物)	439
第267図	B-2区付近柱穴状土坑群	394	第298図	遺構不明	441
第268図	D-4区付近柱穴状土坑群	395	第299図	遺構不明	442
第269図	K-19区付近柱穴状土坑群	396	第300図	表採・粗掘	443
第270図	O-15溝付近柱穴状土坑群	397	第301図	表採・粗掘	444
第271図	B-5土坑(遺構)	399	第302図	集落に先行する遺物-①	446
第272図	B-6土坑(遺構)	401	第303図	集落に先行する遺物-②	447
第273図	B-8土坑-1	404	第304図	集落に先行する遺物-③	450
	B-8土坑-2(遺構)	404	第305図	集落に先行する遺物-④	451
第274図	B-8土坑-1(遺物)	404	第306図	集落に先行する遺物-⑤	452
第275図	B-9土坑(遺構)	405	第307図	集落に先行する遺物-⑥	453
第276図	B-9土坑(遺物)	405	第308図	集落に先行する遺物-⑦	454
第277図	B-10土坑(遺物)	407	第309図	住居址の規模分布図	459
第278図	C-1土坑(遺構)	408	第310図	主軸方位分布図	465
第279図	C-1土坑(遺物)	408	第311図	カマドの種類	469
第280図	C-9土坑群・E-7土坑(遺構)	410	第312図	カマドの偏在	471
第281図	G-13土坑(遺構)	411	第313図	柱穴の位置	475
第282図	I-13土坑(遺構)	413	第314図	貯蔵穴状土坑をもつ平安時代 以前の住居址	479
第283図	I-13土坑(遺物)	413	第315図	住居址型態分類図-①	485
第284図	J-6土坑(遺構)	414	第316図	住居址型態分類図-②	489
第285図	J-6土坑(遺物)	414	第317図	岩手県内の古墳時代に属する 竪穴住居址例	495
第286図	L-13土坑(遺構・遺物)	415	第318図	古代集落に伴う建物跡例 (岩手県内のみ)	499
第287図	M-5土坑(遺構)	416	第319図	甕形土器の法量分布図	512
第288図	B-2溝跡・B-4溝跡(遺構)	419	第320図	I群土器一括資料	515
第289図	溝跡(遺構)	423			
第290図	C-10溝跡(遺構)	425			
第291図	溝跡(遺構)	429			

第321図	坏形土器の法量分布図(Ⅱ群) ……	517	第330図	坏形土器分類図(Ⅲ群) ……	539
第322図	坏形土器分類図(Ⅱ群) ……	519	第331図	高台付坏形土器分類図(Ⅲ群) ……	541
第323図	高坏形土器分類図(Ⅱ群) ……	521	第332図	甕形土器分類図(Ⅲ群) ……	543
第324図	甕形土器分類図(Ⅱ群) ……	523	第333図	鉢形土器(Ⅲ群) ……	545
第325図	鉢形土器分類図(Ⅱ群) ……	526	第334図	羽釜(Ⅲ群) ……	545
第326図	甗形土器分類図(Ⅱ群) ……	529	第335図	鍋(Ⅲ群) ……	545
第327図	小型土器分類図(Ⅱ群) ……	532	第336図	須恵器杯形土器分類図(Ⅲ群) ……	547
第328図	須恵器破片と出土遺構 ……	534	第337図	紡錘車分類図 ……	549
第329図	坏形土器の法量分布図(Ⅲ群) ……	537	第338図	D-8住居址-1出土の割石 ……	551

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡地名表 ……	15	第13表	甕形土器分類基準(Ⅲ群) ……	543
第2表	古代建物跡検出遺跡 ……	498	第14表	須恵器坏形土器分類基準(Ⅲ群) ……	547
第3表	遺物の種類別出土点数 ……	511	第15表	住居址一覧表 ……	589
第4表	須恵器の遺構別種類別出土点数 ……	514	第16表	土坑一覧表 ……	591
第5表	坏形土器分類基準(Ⅱ群) ……	519	第17表	掲載土師器・須恵器観察表 ……	593
第6表	高坏形土器分類基準(Ⅱ群) ……	521	第18表	紡錘車計測表 ……	625
第7表	甕形土器分類基準(Ⅱ群) ……	523	第19表	琥珀玉計測表 ……	625
第8表	鉢形土器分類基準(Ⅱ群) ……	526	第20表	切子玉計測表 ……	625
第9表	甗形土器分類基準(Ⅱ群) ……	529	第21表	古銭計測表 ……	625
第10表	小型土器分類基準(Ⅱ群) ……	532	第22表	鉄器計測表 ……	625
第11表	坏形土器分類基準(Ⅲ群) ……	539	第23表	土玉計測表 ……	627
第12表	高台付坏形土器分類基準(Ⅲ群) ……	541	第24表	勾玉計測表 ……	627

## 写 真 目 次

P L-1	遺跡遠景(空中写真) ……	631	B	遺構検出作業 ……	633
P L-2 A	遺跡近景 ……	632	P L-4 A	検出状況 ……	634
B	調査時の現況 ……	632	B	検出状況 ……	634
P L-3 A	重機による粗掘り作業 ……	633	P L-5 A	現地説明会(昭和53年度) ……	635

B	現地説明会(昭和55年度) ……	635	P L -21 A	E - 2 住居址-1 ……	651
P L -6 A	現地説明会(昭和55年度) ……	636	B	E - 2 住居址-2 ……	651
B	基本土層 ……	636	C	E - 3 住居址-2 ……	651
P L -7 A	基本土層 ……	637	P L -22 A	E - 3 住居址-1 ……	652
B	基本土層 ……	637	B	E - 4 住居址 ……	652
P L -8 A	完掘後全景 ……	638	P L -23 A	E - 6 住居址 ……	653
B	完掘後全景(空中撮影) ……	638	B	E - 7 住居址 -1 ……	653
P L -9 A	A-1住居址 ……	639	P L -24	F - 3 住居址群 ……	654
B	A-2住居址 ……	639	P L -25 A	F - 4 住居址-1 ……	655
P L -10 A	A-4住居址 ……	640	B	F - 5 住居址 ……	655
B	A-5住居址 ……	640	P L -26 A	F - 6 住居址-1 ……	656
P L -11 A	B-2住居址 ……	641	B	F - 11住居址 ……	656
B	B - 3 住居址 ……	641	P L -27 A	F - 12住居址 ……	657
P L -12	B - 5 住居址 ……	642	B	F - 13住居址 ……	657
P L -13 A	B - 6 住居址 ……	643	P L -28 A	G - 3 住居址 ……	658
B	B - 7 住居址 ……	643	B	G - 4 住居址 ……	658
P L -14 A	C - 1 住居址 ……	644	P L -29 A	G - 6 住居址 ……	659
B	C - 2 住居址 ……	644	B	G - 8 住居址-1 ……	659
P L -15 A	C - 3 住居址-1 ……	645	P L -30	G - 8 住居址-2 ……	660
B	C - 3 住居址-2 ……	645	P L -31 A	G - 9 住居址 ……	661
P L -16 A	C - 6 住居址-1 ……	646	B	G - 15住居址 ……	661
B	C - 6 住居址-2 ……	646	P L -32 A	H - 2 住居址-1 ……	662
P L -17 A	C - 9 住居址-1 ……	647	B	H - 2 住居址-2 ……	662
B	C - 11住居址-1 ……	647	P L -33 A	H - 3 住居址 ……	663
P L -18 A	C - 12住居址 ……	648	B	H - 4 住居址 ……	663
B	C - 13住居址 ……	648	P L -34 A	H - 5 住居址 ……	664
P L -19 A	D - 2 住居址 ……	649	B	H - 6 住居址 ……	664
B	D - 4 住居址-1 ……	649	P L -35 A	H - 11住居址 ……	665
C	D - 4 住居址-2 ……	649	B	I - 3 住居址 ……	665
P L -20 A	D - 8 住居址-1 ……	650	P L -36 A	I - 4 住居址 ……	666
B	D - 8 住居址-2 ……	650	B	I - 5 住居址 ……	666
- C	D - 12住居址 ……	650	P L -37 A	I - 9 住居址 ……	667

B J-4住居址	667	PL-52A B-9土坑	682
C J-6住居址	667	B B-10土坑	682
PL-38A J-7住居址	668	PL-53A C-1土坑	683
B K-3住居址	668	B C-9土坑-1	683
PL-39A K-4住居址	669	PL-54A C-9土坑-2	684
B K-5住居址-1	669	B E-7土坑	684
PL-40A K-5住居址-2	670	PL-55A J-6土坑	685
B K-6住居址-1	670	B L-13土坑	685
PL-41A K-6住居址-2	671	C M-5土坑	685
B K-11住居址	671	PL-56A G-13土坑	686
PL-42A K-15住居址	672	B I-13土坑	686
B L-3住居址	672	PL-57A B-2溝跡	687
PL-43A L-7住居址	673	B B-4溝跡	687
B L-13住居址	673	C B-7溝跡	687
PL-44A M-5住居址-1	674	PL-58A C-2溝跡	688
B M-6住居址	674	B C-10溝跡	688
PL-45A M-7住居址	675	C D-17溝跡	688
B M-14住居址	675	D F-4溝跡	688
C N-6住居址	675	PL-59A G-15溝跡	689
PL-46A N-7住居址	676	B G-17溝跡	689
B O-15住居址	676	C O-15溝跡	689
PL-47A O-13住居址	677	D 溝跡重複狀況	689
B P-11住居址	677	PL-60A 溝跡重複狀況	690
PL-48A B-7建物跡	678	B O-15·J-18·D-17各溝跡	690
B G-6建物跡	678	PL-61遺物A A-1住居址	691
PL-49A O-18建物跡	679	B A-2住居址	691
B K-19柱穴狀土坑群	679	C A-4住居址	691
PL-50A B-5土坑	680	PL-62遺物 A-5住居址	692
B B-6土坑	680	PL-63遺物A B-2住居址	693
C B-5·B-6土坑重複狀況	680	B B-3住居址	693
PL-51A B-8土坑-1	681	PL-64遺物 B-5住居址-①	694
B B-8土坑-2	681	PL-65遺物 B-5住居址-②	695

P L -66遺物 A	B-5住居址-③	696	P L -89遺物	D-12住居址-④	719
	B B-6住居址	696	P L -90遺物 A	E-2住居址-1	720
	C B-7住居址-①	696		B E-3住居址-1-①	720
P L -67遺物	B-7住居址-②	697	P L -91遺物 A	E-3住居址-1-②	721
P L -68遺物 A	C-1住居址	698		B E-4住居址	721
	B C-2住居址-①	698	P L -92遺物 A	E-6住居址	722
P L -69遺物 A	C-2住居址-②	699		B E-7住居址-①	722
	B C-3住居址-A-①	699	P L -93遺物	E-7住居址-②	723
P L -70遺物	C-3住居址-A-②	700	P L -94遺物 A	E-7住居址-③	724
P L -71遺物 A	C-3住居址-A-③	701		B F-3住居址-①	724
	B C-3住居址-B	701	P L -95遺物	F-3住居址-2-①	726
P L -72遺物	C-6住居址-1-①	702	P L -96遺物	F-4住居址-1-①	726
P L -73遺物 A	C-6住居址-1-②	703	P L -97遺物	F-4住居址-1-②	727
	B C-6住居址-2	703	P L -98遺物	F-5住居址-①	728
P L -74遺物	C-9住居址-①	704	P L -99遺物	F-5住居址-②	729
P L -75遺物	C-9住居址-②	705	P L -100遺物	F-6住居址-①	730
P L -76遺物	C-9住居址-③	706	P L -101遺物 A	F-6住居址-②	731
P L -77遺物 A	C-12住居址	707		B F-11住居址-①	731
	B C-13住居址-①	707	P L -102遺物	F-11住居址-②	732
P L -78遺物	C-13住居址-②	708	P L -103遺物 A	F-11住居址-③	733
P L -79遺物	C-13住居址-③	709		B F-12住居址	733
P L -80遺物	C-13住居址-④	710		C F-13住居址-①	733
P L -81遺物 A	C-13住居址-⑤	711	P L -104遺物	F-13住居址-②	734
	B D-2住居址	711	P L -105遺物 A	F-13住居址-③	735
P L -82遺物	D-4住居址	712		B G-3住居址-①	735
P L -83遺物	D-8住居址-1-①	713	P L -106遺物 A	G-3住居址-②	736
P L -84遺物	D-8住居址-1-②	714		B G-4住居址-①	736
P L -85遺物 A	D-8住居址-1-③	715	P L -107遺物 A	G-4住居址-②	737
	B D-8住居址-2	715		B G-6住居址-①	737
P L -86遺物	D-12住居址-①	716	P L -108遺物	G-6住居址-②	738
P L -87遺物	D-12住居址-②	717	P L -109遺物 A	G-6住居址-③	739
P L -88遺物	D-12住居址-③	718		B G-8住居址-1-①	739



PL-110遺物 A	G-8住居址-1-②	740	C	J-7住居址-①	760
B	G-8住居址-2-①	740	PL-131遺物	J-7住居址-②	761
PL-111遺物	G-8住居址-2-②	741	PL-132遺物	J-7住居址-③	762
PL-112遺物	G-8住居址-2-③	742	PL-133遺物 A	K-3住居址	763
PL-113遺物	G-8住居址-2-④	743	B	K-4住居址-①	763
PL-114遺物 A	G-9住居址	744	PL-134遺物	K-4住居址-②	764
B	G-15住居址-①	744	PL-135遺物 A	K-4住居址-③	765
PL-115遺物 A	G-15住居址-②	745	B	K-5住居址-①	765
B	H-2住居址-1-①	745	PL-136遺物	K-5住居址	766
PL-116遺物	H-2住居址-1-②	746	PL-137遺物 A	K-6住居址-1	767
PL-117遺物 A	H-2住居址-1-③	747	B	K-11住居址	767
B	H-2住居址-2-①	747	C	K-15住居址	767
PL-118遺物	H-2住居址-2-②	748	PL-138遺物 A	L-3住居址	768
PL-119遺物	H-3住居址	749	B	L-7住居址-①	768
PL-120遺物	H-4住居址-①	750	PL-139遺物 A	L-7住居址-②	769
PL-121遺物 A	H-4住居址-②	751	B	M-5住居址-①	769
B	H-5住居址	751	PL-140遺物 A	M-5住居址-②	770
C	H-6住居址-①	751	B	M-6住居址-①	770
PL-122遺物 A	H-6住居址-②	752	PL-141遺物 A	M-7住居址	771
B	H-11住居址-①	752	B	M-14住居址	771
PL-123遺物	H-11住居址-②	753	C	N-6住居址	771
PL-124遺物	H-11住居址-③	754	D	N-7住居址-①	771
PL-125遺物 A	H-11住居址-④	755	PL-142遺物 A	N-7住居址-②	772
B	I-4住居址-①	755	B	O-13住居址-①	772
PL-126遺物 A	I-4住居址-②	756	PL-143遺物	O-13住居址-②	773
B	I-5住居址-①	756	PL-144遺物	O-13住居址-③	774
PL-127遺物	I-5住居址-②	757	PL-145遺物 A	O-13住居址-④	775
PL-128遺物 A	I-5住居址-③	758	B	P-11住居址-①	775
B	I-9住居址-①	758	PL-146遺物 A	P-11住居址-②	776
PL-129遺物	I-9住居址-②	759	B	B-7建物跡	776
PL-130遺物 A	J-4住居址	760	C	G-6建物跡	776
B	J-6住居址	760	PL-147遺物 A	B-8土坑	777

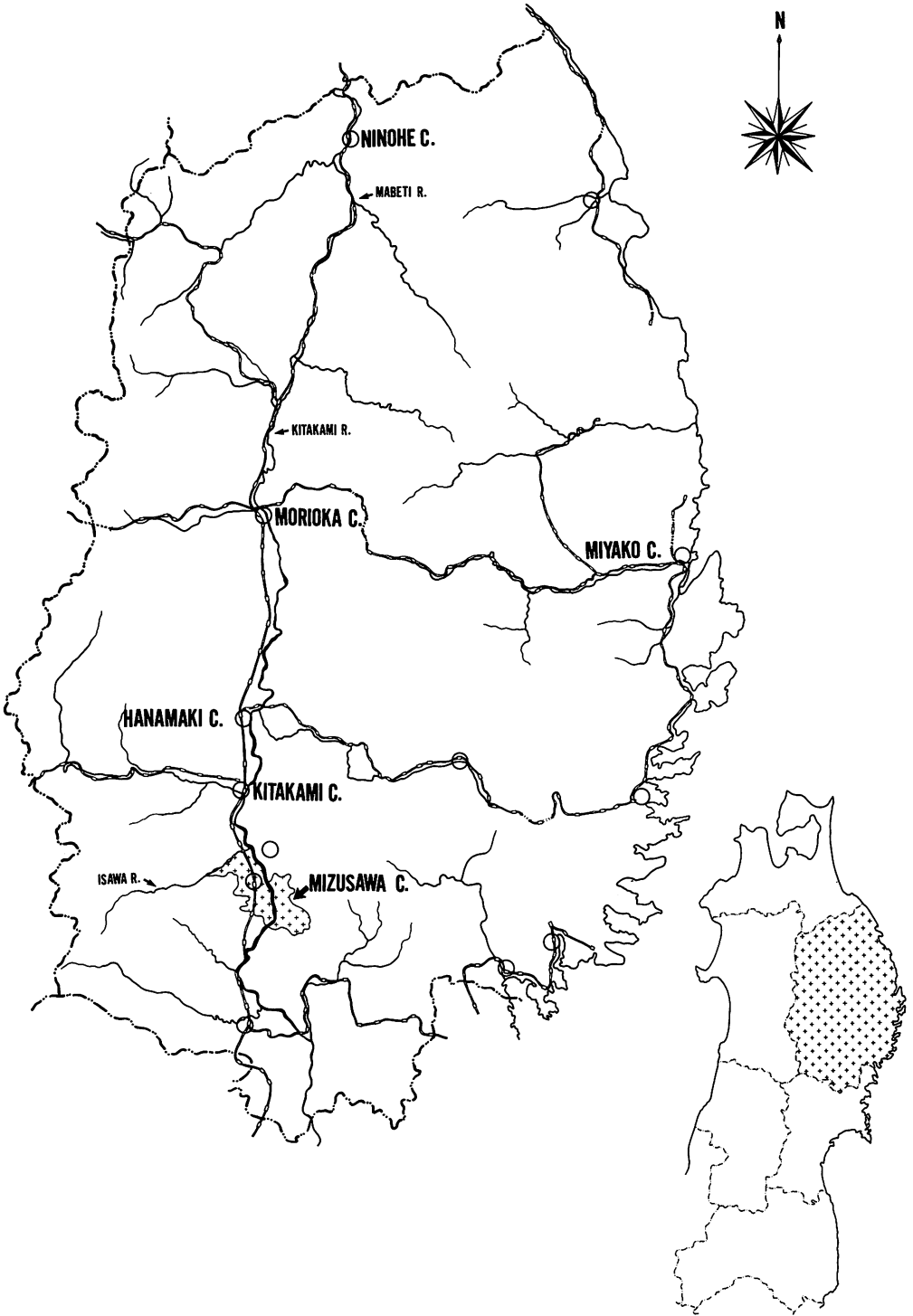
B	B-9 土坑	777	E	O-18溝跡	780
C	C-1 土坑	777	PL-151遺物A	遺構不明	781
PL-148遺物A	I-13土坑	778	B	表採粗掘-①	781
B	J-6 土坑	778	PL-152遺物	表採粗掘-②	782
C	L-13土坑	778	PL-153	A 表採粗掘-③	783
D	B-2 溝跡	778	B	集落に先行する遺物-①	783
E	B-7 溝跡-①	778	PL-154	集落に先行する遺物-②	784
PL-149遺物A	B-7 溝跡-②	779	PL-155	集落に先行する遺物-③	785
B	C-2 溝跡	779	PL-156	集落に先行する遺物-④	786
C	D-17溝跡	779	PL-157	A 集落に先行する遺物-⑤	787
PL-150遺物A	G-15溝跡	780	B	黒曜石破片	787
B	G-17溝跡	780	C	琥珀玉(D-8住-1)	787
C	H-3 溝跡	780	D	琥珀玉(C-3住-1)	787
D	O-15溝跡	780			

## 付編写真目次

写真-1	580	写真-4	583
写真-2	581	写真-5	584
写真-3	582	写真-6	585

## 水 沢 市 膳 性 遺 跡

遺 跡 所 在 地	水沢市佐倉河字膳性地内
事 業 主 体	建設省岩手工事事務所
事 業 名	金ヶ崎バイパス建設関連事業
調 査 主 体	(財) 岩手県埋蔵文化財センター
調 査 対 象 面 積	6,000㎡
発 掘 面 積	6,000㎡
調 査 担 当 者	昭和53年度 遠藤勝博、高橋与右エ門、高橋義介 昭和54年度 山口了紀、鈴木恵治、吉田 洋 遠藤勝博、高橋与右エ門、高橋義介 昭和55年度 高橋与右エ門、吉田 洋
調 査 協 力 員	昭和53年度 宮 康男、藤原 彰
調 査 期 間	昭和53年 7月16日～11月13日 昭和54年 4月6日～6月14日、9月27日～11月29日 昭和55年 4月10日～8月26日
協 力 機 関	水沢市教育委員会



第 1 図 岩手県全図

## I 調査に至る経過

列島改造論が昭和40年代を支配し、開発の波が全国に押し寄せ、全国各地に工事の音が高々と響きわたっていた。この波の押し寄せの遅れていた岩手県にも、東北縦貫自動車道、東北新幹線の二大公共事業が同時に押し寄せてきた。これらの開発は当然埋蔵文化財包蔵地を内包することとなり、両工事併せて、150ヶ所余が予定地内で確認された。この予定地内の遺跡の調査を含む対応が文化財保護行政側に迫られる事となった。

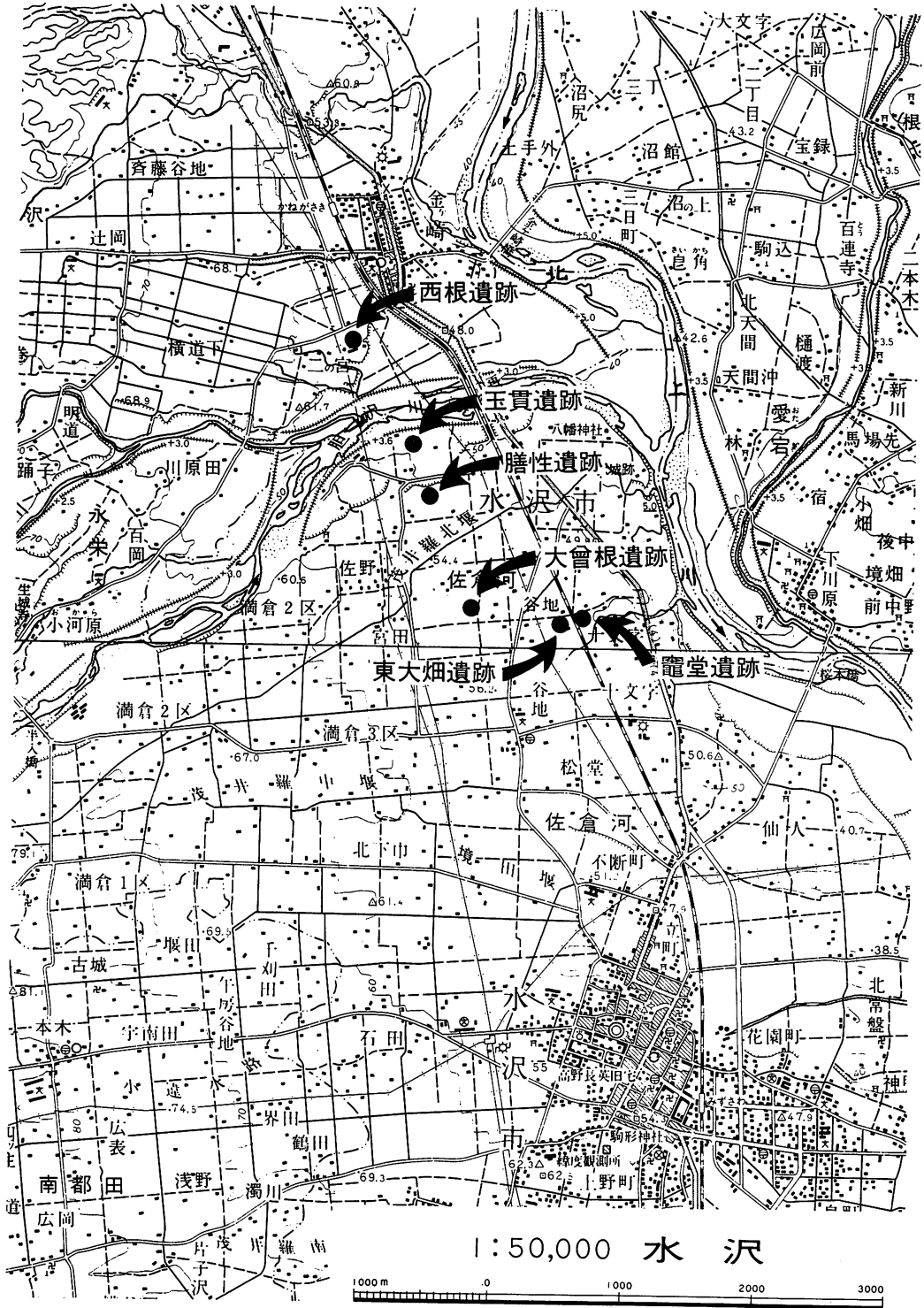
岩手県では、この二大公共事業に対応するため昭和47年4月岩手県教育委員会事務局社会教育課に埋蔵文化財調査班を設置し、調査専門職員4名と臨時職員5名を配置し、これに当たさせた。その後、10月2名、11月1名と調査専門職員を補充したが、48年以降の工事計画と、それに対応する調査は不可能であった。また、二大公共事業の他に公共事業の見直しが必要となり建設省関係の事業計画のうち、48年度において御所ダム建設が開始されること及びその予定地内に多くの遺跡のある事、49年度には二戸バイパス工事が開始され、これについても遺跡が存在する事も明らかになった。

これらの状況をふまえて、岩手県教育委員会は事務局内に文化行政全般を統轄する文化課を新設し、一般文化行政、一般文化財と共に埋蔵文化財発掘調査に力点を置き、その専門職員を大巾に増員した。調査体制としては、縦貫道班2、新幹線班1、一般公共班1となった。

昭和48年に建設省岩手工事事務所より、金ヶ崎町教委を通して、金ヶ崎バイパス工事にかかる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての協議が持ち込まれた。県教委文化課においては、これの協議に一般公共班が当たり、路線内分布調査の結果6ヶ所の遺跡を確認した。この結果をふまえて、建設省岩手工事事務所、金ヶ崎町教委、県教委文化課の三者協議、金ヶ崎町を除く二者協議が断続的に行われた。この協議の中心は、西根古墳群の取扱いであった。協議の結果は、残存古墳は過去に伊藤玄三氏（現法政大学教授）によって調査済みである事から、調査記録保存することとなった。

この協議によって、工事行程と発掘計画が両者によって詰められ、一般道路の跨線橋、東北本線の跨線橋を優先調査し、次いで水沢流通団地取付けに関連する所とすることとなった。この合意に基づいて、一般道路の跨線橋関係として大曾根遺跡が県文化課一般公共班によって調査された。

昭和52年4月（財）岩手県埋蔵文化財センターが設立されるに及んで、金ヶ崎バイパス関係調査も移行され、52年竈堂、東大畑遺跡、53年膳性遺跡（東西道路部分）、54年膳性（南側部分）玉貫、西根古墳の各遺跡、55年膳性遺跡（残地関係）の調査が行われて終了した。



第2図 遺跡位置図

調査遺跡の時期は奈良時代が中心であり、水沢、金ヶ崎地方の当時の隆盛ぶりを示すものと  
考えられる。 (瀬川司男)

## Ⅱ 3ヶ年の調査経緯

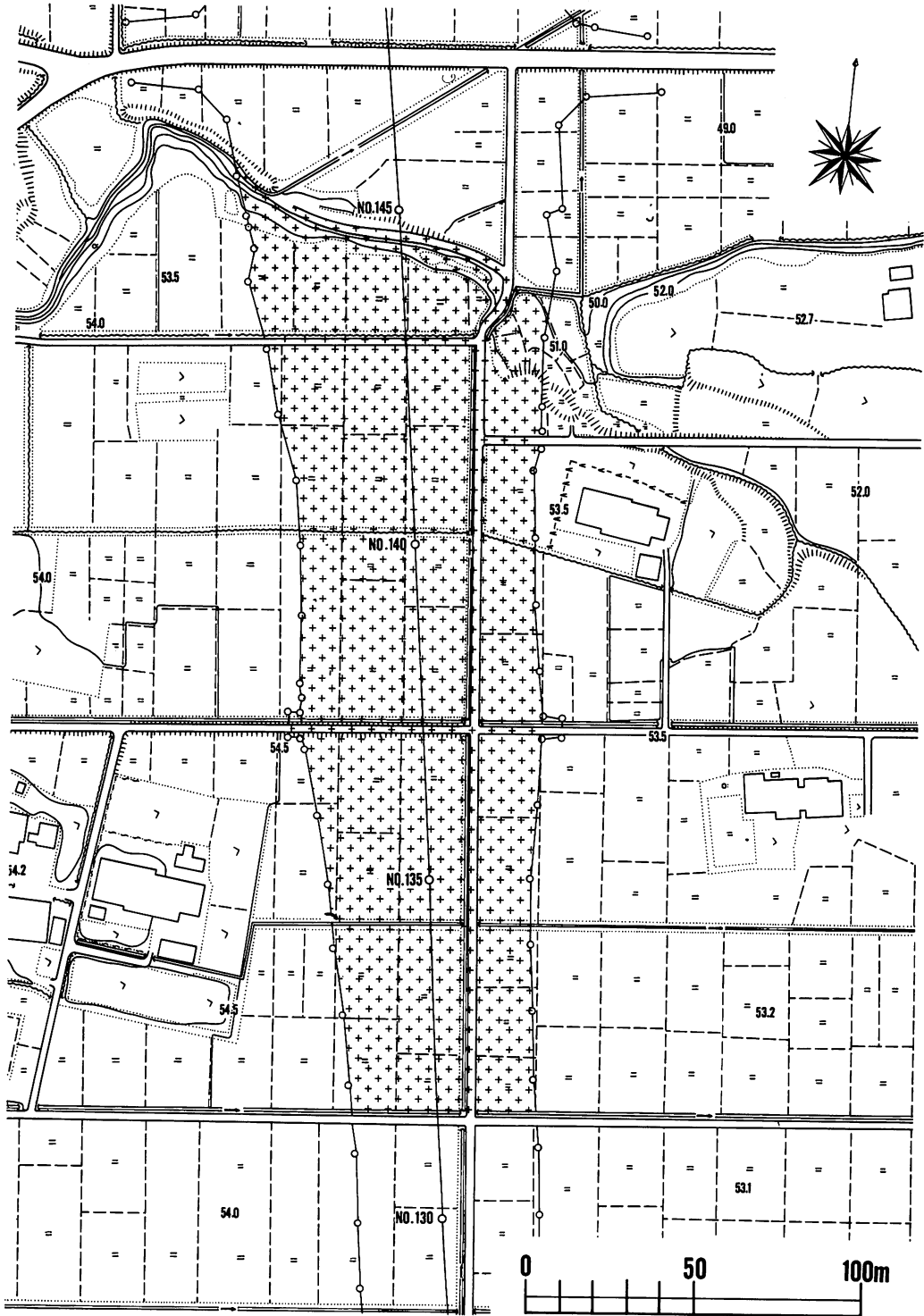
金ヶ崎バイパス関連膳性遺跡は3ヶ年に亘って調査が行われた。この経緯について簡単に述べてみる。

昭和52年4月に(財)岩手県埋蔵文化財センター(以下埋文センター)が設立され、岩手県教育委員会事務局文化課(以下県文化課)から発掘調査業務が一部東北縦貫道関係を除いて移管された。これによって金ヶ崎バイパスを含む建設省岩手工事事務所(以下岩手工事)に係わる発掘調査全てが移管された。当時岩手工事に係わる発掘調査は二戸バイパス、雫石バイパス、金ヶ崎バイパスの三工事関係であった。この三工事に係わる遺跡調査を短期間で終了する事は人的にも不可能なことから、工事計画との関連で調査計画を組み立てざるを得なかった。調査計画作成のための協議を岩手工事、県文化課、埋文センターの三者でしばしば行った。その結果バイパスの必要性、部分開通の可能性の有無などから、二戸バイパスに主力を注ぎ込み雫石、金ヶ崎バイパスを併行して調査することとした。

金ヶ崎バイパス関連遺跡の発掘調査計画は次の様に予定された。52年度竈堂遺跡、東大畑遺跡……7月～10月、53年度膳性遺跡……8月～10月、54年度玉貫遺跡、西根遺跡。

52年度調査は予定通り竈堂遺跡から開始し、順調に推移したが、東大畑遺跡で大きく期間延長となった。それは東大畑遺跡の地目が水田であったことから、遺構の残存の可能性はないものと予想していた。しかし粗掘検出によって30棟を越える住居址が発見された。この調査によって、同一条件にある膳性遺跡の計画見直しをせざるを得なくなった。事実再度遺跡を訪れると、民有地との境界畦畔に焼失住居址が顔を出していた。

53年度調査については、計画修正を協議し粗掘を全面にかけた後再協議する方向へ変更した。7月よりの粗掘の結果60棟を越える奈良、平安期の集落が検出された。再協議が三者で行われ、53年度は当面供用道路となる側道部分を中心に調査し、54年度は残りの側道部分とし、中央部残地については当分調査しないと提起されたが、残地については引続き協議することとした。これに基づいて53年度は東側道全域、西側道北側部分の調査を行った。ところが54年度全体協議に際して、水沢市より流通団地への進入路としての必要性から建設促進方と調査促進方の陳情がなされ、調査期間後半に予定していた西側道南側部分と、北端付近を横断する水路について4月より調査し引き渡すこととした。その後工事開始寸前に設計見直しの結果法面の幅員が



第3図 調査範囲・遺跡付近の地形図



不足している事が判明し、岩手工事事務所のたつての要請で急換10月から再調査を行い、更に再調査中に北端部の水路問題が持ちあがり11月に追加調査をせざるを得なかった。

本遺跡の調査は工事計画の変更などで振りまわされ、供用道路部分のみの調査での引き渡しが三回も小間切れで行わざるを得なかった。なお、55年度は残地部分の調査について岩手工事事務所の同意をとりつけて行い道路予定地内の調査を全て終了させた。

調査年度と各調査次の調査担当者は次の通りである。

昭和53年度	第1次調査	遠藤勝博・高橋与右ヱ門・高橋義介 協力員：宮 康夫・藤原 彰	
	第2次調査	第1次調査と同じ	
昭和54年度	第3次調査	山口了紀・鈴木恵治・吉田 洋	
	第4次調査	遠藤勝博・高橋与右ヱ門・高橋義介	
	第5次調査	第4次調査と同じ	
昭和55年度	第6次調査	高橋与右ヱ門・吉田 洋	(瀬川司男)

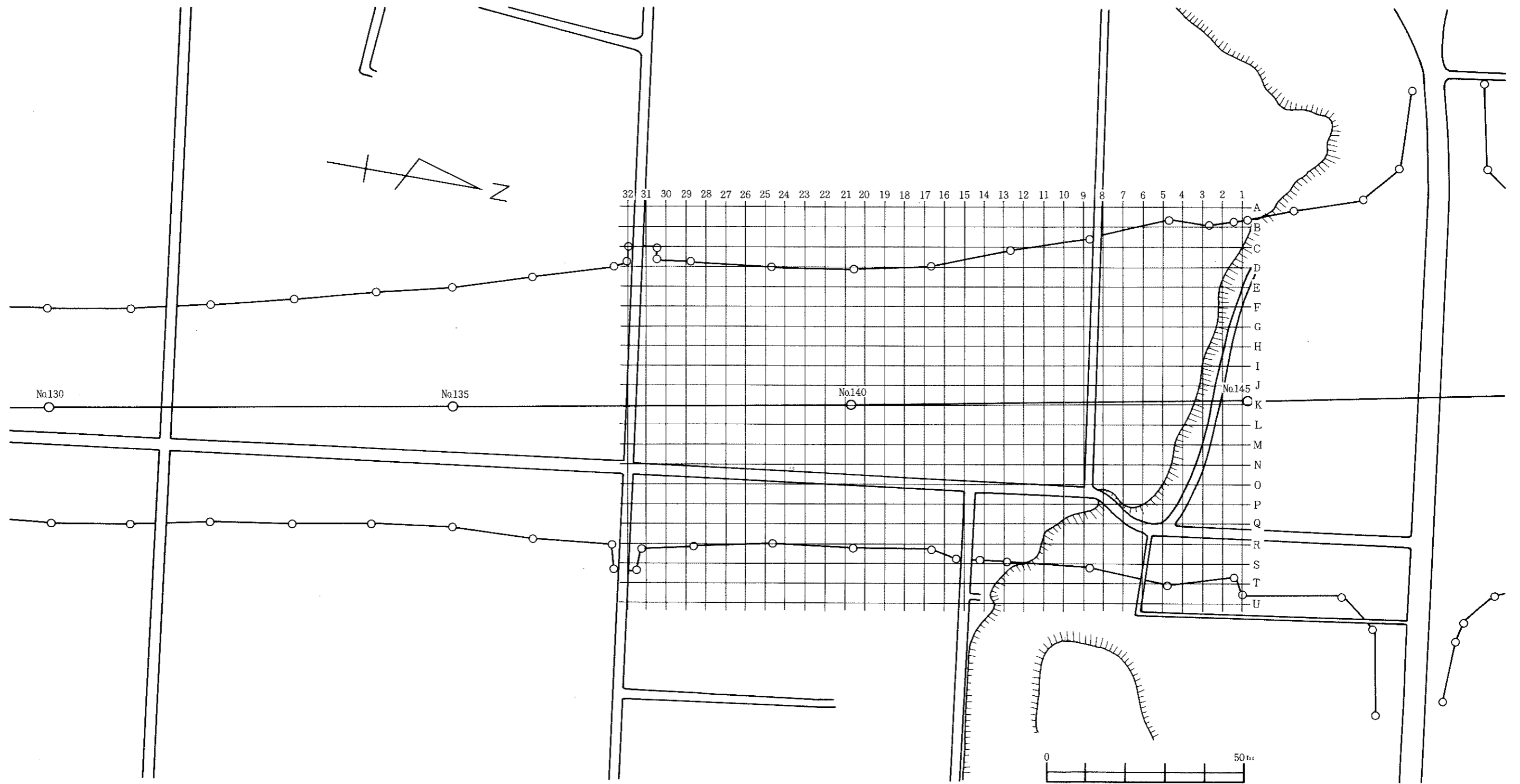
### Ⅲ 調査の方法

#### 1. 野外調査

##### 〔調査区の設定と遺構の命名〕

調査区は、当初、道路中心杭を利用して設定することで計画したが、現地で確認しえた中心杭はいずれも腐敗が著しく、使用に耐える様な状態ではなかったので、遺跡の南端に「基点-1」( $X=-91373.44\text{m}$ 、 $Y=+25174.54\text{m}$ 、 $H=53.502\text{m}$ )と北端に「基点-2」( $X=-91242.28\text{m}$ 、 $Y=+25151.89\text{m}$ 、 $H=53.174\text{m}$ )の任意の基点を二ヶ所設定し、「基点-1」と「基点-2」の2点間を直線に結んで中軸線とした。調査区はさらに、中軸線を基線として東西方向に5mごと、南北方向は「基点-2」の位置で中軸線に直交する線を基線としてそれぞれ5mごとに遺跡全面を区画した。従って、調査区の最小単位は5m×5mとなる。グリッド軸の呼称は、南北は北より1～30まで、東西は西よりA～Rまでとし、グリッド名はこれらの組み合わせによって、北西隅の交点をグリッド名としA-1・A-2という様に呼称した。なお「基点-2」はグリッドでは「K-4」の交点になる。

遺構名は遺跡内での位置をも表すことを考えて、グリッド名と遺構名とを組合わせてA-1住居址、A-1土坑・A-1溝跡という様に命名した。遺構位置の表し方は、当初、遺構北西



第4図 グリッド配置図

部分のグリッド名を使用することにしたが、調査が進むにつれて、重複関係を示す遺構が非常に多いことが判明してきたため、まぎらわしい呼称で混乱が生じることを避ける様に留意し、次の様にした。遺構名の次にアラビア数字を加え、A-1住居址-1。A-1住居址-2とし、その場合は0-0住居址-1は新しい遺構を、0-0住居址-2は古い遺構であることを表している。この命名方法は他の遺構も同様である。

#### 〔粗掘りと遺構検出〕

本遺跡の調査指定総面積は約14,000㎡であり、北端の段丘崖より南へ約230mもの距離がある。調査前の現地踏査では段丘崖寄りで遺物の表面採集が可能であったものの、調査指定範囲全域では採集できなかった。また、調査範囲は数年前まで水田として利用されていたことや、現状が雑草の生い茂る荒地であったことから、遺跡の性格や範囲を推定するにはいささか問題があった。以上の様な諸条件の中で調査方法を検討した結果、遺構や遺物の遺存状態や遺跡の範囲を正確に把握することが急務と考えられたことから、粗掘りはパワーシャベルを利用して行うことで計画立案され、その様に実施された。重機によって除去した土層は表土層(耕作土)だけに止どめ、その後、作業員による遺構検出作業が行われた。実際に遺構が検出されたのは基本層序第Ⅲ層の暗褐色を呈するシルト面であり、基本層序第Ⅱ層の黒色シルトの面では検出されていない。しかし、粗掘り作業中や遺構検出作業中に基本層序第Ⅱ層から土師器や須恵器の破片が出土しており、奈良・平安時代の生活面であろうと推定された。この様に遺構が検出されるまでも土師器や須恵器の破片が出土しているが、小破片であることや原位置を保っていないものと判断し、出土層位と出土地点を確認の上一括して収納した。なお、粗掘り作業は前項で述べた様に昭和53年度と翌54年度の2ヶ年に分けて行ったのであるが、初年度は道路巾の東側と西側を各10m巾について行い、その結果、北端の段丘崖より南へ100m位の範囲で遺物が出土し、それより南では遺物が全く出土しなかった。翌54年度の粗掘りは前年の結果を参考にして、北端段丘崖より南150m地点までを全面に亘る粗掘りと遺構検出を行った。その結果、北端の段丘崖沿いを中心に南約70m位の範囲に住居址が数多く密集している事が判明した。

#### 〔遺構精査〕

遺構の精査は住居址4分法・土坑2分法を原則としたが、重複が多い為に随時土層観察用の畦を残した。溝跡や掘立柱建物跡は適宜土層観察用の畦を残した。実際の発掘には分層発掘に努力し、埋土上位での出土遺物は出土層位を確認の上一括して収納した。しかし、完形土器や大型破片・特殊遺物は床面が検出されるまでそのまま残置し、平面図に記入の後収納した場合もある。床面直上や床上10cm以内での出土遺物は平面図に記入し、写真撮影の後収納した。

## 〔記 録〕

実測図は平面図・土層図ともに $\frac{1}{50}$ で作製した。実測作業は作業員の中から2人1組で6組の実測班を編成して行い、実測班に対する指示や指導および実測図の点検は調査員が行った。遺構の中で一部の溝跡は平板を利用して $\frac{1}{50}$ で実測したが、他の遺構は地面にグリッド軸に沿って1 m×1 mで水糸を張って実測した。

土層に対する注記は調査員が行い、土層名は、基本層序はローマ数字で上位層よりⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層とし、遺構埋土はアラビア数字で上位層より1層・2層・3層と命名した。なお、土層の色調は新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修）に従った。

写真撮影は6 cm×7 cm版1台（モノクロ）と35mm版2台（モノクロ・カラーリバーサル）を1組にして撮影し、適宜使い分けた。実際の撮影は埋土土層・遺構全景・出土遺物・炉やカマドを中心に行った。

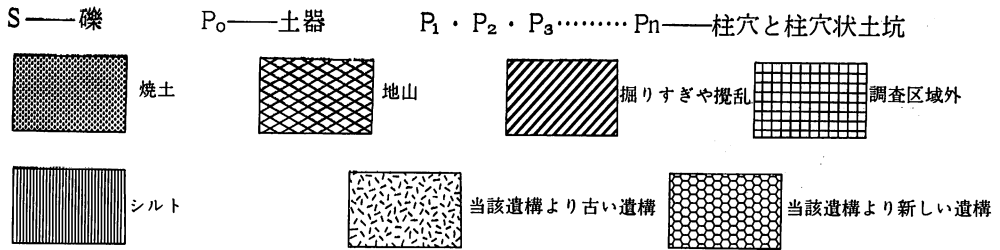
## 2. 室内整理

遺物の水洗いは、現地での野外調査中に雨天日等を利用して行い、ほぼ終了して室内整理に入った。しかし、ラベル記入は遺物量も多いことから、ほとんど手がつかない状態であった。室内整理の最初の作業は遺物を各遺構ごとに仕分けすることから始まった。引き続き接合復元の作業とラベル記入を併行して行った。復元された遺物は実測作業に入り、土器以外の土製品・鉄製品・石製品等も実測された。実測のできない遺物で報告を要するもの（須恵器破片・縄文土器破片等）は拓本図を作製した。各種の遺物実測図や拓本図は実物大で作製され、それらの実測図をトレースして本報告書に掲載した。遺構に関する図面の点検・修正は現地ではほぼ終了していたが、再度点検をし誤りがないかどうかを確認の上報告書用トレースを行った。以上の作業は調査員の指示のもとに室内整理事業員がそれぞれを分担して行い、調査員が指導点検した。また、本報告書に掲載した遺構関係の写真は、現地で撮影したものの中から選択して使用した。

本報告書の全体的な凡例は次の通りである。

### 〔遺構関係〕

遺構配置図は現地で作製した $\frac{1}{50}$ の平面図を $\frac{1}{100}$ に縮小して作製し、本報告書では縮尺 $\frac{1}{200}$ で掲載した。遺構個々の平面図や土層図は規模により $\frac{1}{50}$ ・ $\frac{1}{100}$ となる様に心懸けたが、溝跡は不定縮尺とし、各遺構ごとにスケールを付している。住居址の中でカマド部分の図面は縮尺 $\frac{1}{50}$ で統一した。それらの遺構図面の中で、礫・土器・柱穴状土坑・焼土・地山・掘りすぎや攪乱・調査区域外・新旧関係は次の様なアルファベットやスクリーントーンで図示した。



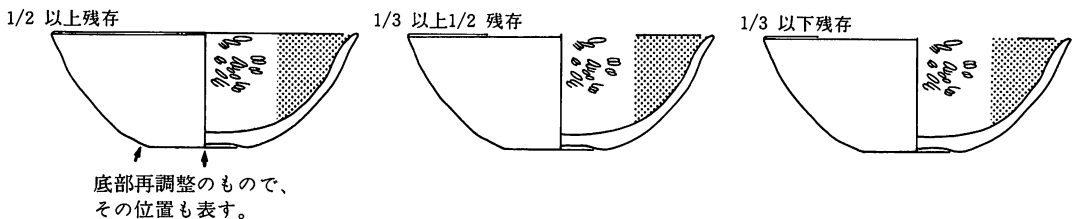
〔遺物関係〕

遺物には土器・土製品・石製品・鉄製品等が含まれているが、土器は口縁部か底部が $\frac{1}{3}$ 以上残存しているものは全て実測し、それ以下の残存でも1ヶ体しかない場合には可能な限り図化して掲載した。その他の遺物は図化できるものは全て実測して掲載した。須恵器の中で実測不可能な大甕や大壺の体部小破片は、内外面とも拓本図を作製して掲載したが、数が多いことから、各遺構ごとに叩き技法と、推定される器種が網羅される様に選択した。縄文式土器や弥生式土器は小破片であるので拓本図を作製して掲載したが、口縁部破片や文様の明確なものに限定した。また、土製品・石製品・鉄製品等は所属時期や出土状況の如何にかかわらず実測して掲載した。実測図は全て実物大で作製したが、本報告書では次の様に縮小して掲載した。土師器や須恵器の実測図・須恵器拓本図・大型石製品は $\frac{1}{3}$ 、土製品・小型石製品・鉄製品・縄文土器や弥生式土器の拓本等は $\frac{1}{3}$ 、古銭は実物大としたが、それぞれにスケールを付している。

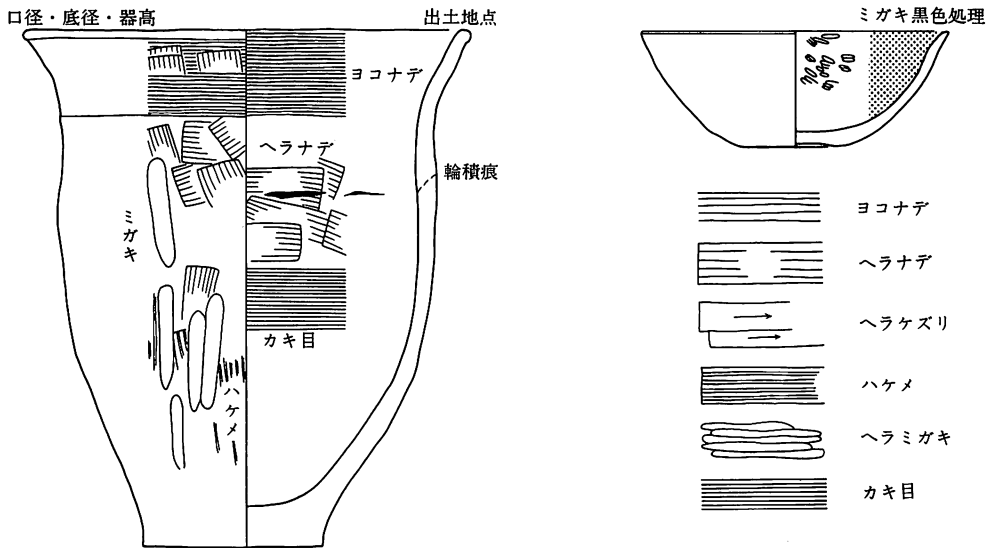
以上の様な実測図や拓本図は出土した遺構の図版と同じページに掲載した。

土師器や須恵器は残存する程度を実測図の中軸線両側の口縁部をあける程度によって下記の様に表示している。また、調整技法は下記の様に表示している。土師器と須恵器の区別は、須恵器の断面を黒く塗りつぶすことで表した。

凡例—1 残存程度



凡例—2. 調整技法の表現



〔写真関係〕

遺構や遺物出土状況の写真は野外調査中に現地撮影したものの中から選択して使用し、一部の遺構・溝跡・掘立柱建物跡に撮影漏れがあったものの、ほぼ報告全遺構について掲載した。遺物写真は当埋蔵文化財センター内の写真担当協力員が撮影したものを使用した。実測図や拓本図を掲載したものは写真も全て収録する様努力したが、紙数の関係で次の様に割愛した。土師器や須恵器は $\frac{1}{2}$ 以上残存するものを主体とし、それぞれの遺構より出土した遺物の全器種が網羅される様に配慮した。特殊遺物（土製品・石製品・鉄製品等）や拓本図を掲載した遺物については全て掲載した。

〔執筆分担〕

本遺跡の調査は前述の通り3年間に6次まで継続されて終了しているが、調査員の中で1次調査より6次調査まで担当したものは一人もいない。その中で本報告書の編集を行った高橋が3次調査に参加しないだけで、他は全て参加していることから、整理・報告の作業を進め、その間に調査に参加した調査員と連絡を取り合い、指示を受けた。報文執筆についても高橋が中心となり、各調査員も執筆を分担した。まとめ、考察については、担当調査員で討議し、鈴木

と高橋(与)が執筆した。具体的な報筆分担については巻頭例言に記したが、各文末には執筆者名を記し、文責を明らかにした。

(高橋与右エ門)

## Ⅳ 地形と周囲の環境

### 1. 地 形

北上川は、岩手県岩手町に源流をもち、北上山地の西縁寄りに沿って岩手県の中央から県南部を縦断した後、宮城県石巻湾で太平洋に注ぐ全流路243km、長さでは日本で第5位の川である。その流域面積は、奥羽脊梁山脈・北上山地から流れ込む多数の支流域も合せて約11万km<sup>2</sup>である。<sup>①</sup>

北上川流域は地理学的特性から5地区に大別され、金ヶ崎バイパス関連6遺跡の所在する金ヶ崎～水沢の地域は、そのうちの盛岡～前沢地区の西岸に属している。<sup>②</sup>

金ヶ崎～水沢の地域では、夏油川によって形成された六原扇状地と胆沢川によって形成された胆沢扇状地が大部分を占め、残りは北上川流域及びその支流域に広がる氾濫原と沖積地である。扇状地は数階に段丘化しており、地形・構成層・被覆層の特徴から時期的に3群に分かれる。六原扇状地は、夏油川・黒沢川・北上川に囲まれた地域であり、新期の扇状地が、開析された中期・古期の扇状地を半ば埋める形で発達している。段丘区分では上位から下位へ西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘の3段丘に大別される。<sup>③</sup>胆沢扇状地は、胆沢川・衣川・北上川に囲まれた地域で、多くの段丘面が形成されている。段丘区分では上位から下位へ一首坂段丘、胆沢段丘、水沢段丘に大別され、六原扇状地での段丘区分に対比される。中位の胆沢段丘は、東部でさらに上野原・横道・堀切・福原の各段丘に細分され、下位の水沢段丘も2面に分かれている。胆沢扇状地では、南から北へ順次新期の段丘が配列しており、北端縁は東流する胆沢川の崖線となっている。<sup>④</sup>

北上川を挟んで対峙している東岸の江刺市西部及び水沢市東部は、北上山地の西縁沿いの地域で、北上川流域の沖積平野が大部分を占めている。沖積平野には旧河道が数多く観察され、自然堤防とみられる微高地が多く形成されている。微高地は生活の場として広く利用されて来ている。

(山口了紀)



第5図 地形・周辺遺跡図



第1表 周辺の遺跡地名表

記号	遺跡名称 (縄文・弥生時代)	所在地	記号	遺跡名称	所在地	記号	遺跡名称	所在地	記号	遺跡名称	所在地
1	櫛引沢	金ヶ崎町	52	新小路	水沢市	ウ	寒入田	金ヶ崎町	139	北鶴ノ木	水沢市
2	長坂前	〃	53	里槍	〃	エ	玉貫	水沢市	140	北鶴ノ木	〃
3	堀切	〃	54	巾下	〃	オ	膳性	〃	141	鶴ノ木	〃
4	横沢	〃	55	八幡巾	〃	カ	今泉	〃	142	鶴ノ木	〃
5	長坂下	〃	56	根ヶ岸	〃	キ	權現堂	〃	143	明後沢	前沢町
6	不動沢	〃	57	互ヶ田	〃	ク	面塚	〃	144	目呂木	〃
7	清清水	〃	58	桐ヶ山	〃	ケ	東大畑	〃	145	竹沢	〃
8	関谷	〃	59	常盤町	〃	コ	へっつい堂	〃	146	一首坂	〃
9	平林後	〃	60	杉の堂	〃	サ	石田	〃	147	坂子沢	〃
10	笹の台	〃	61	沼尻南	〃	シ	沢田	胆沢町	148	養ヶ森	〃
11	二の田	〃	62	北鶴ノ木	〃	ス	杭地	〃	149	上の原	〃
12	川口田	〃	63	鶴ノ木	〃	セ	二本木	〃	150	古城方八丁	〃
13	西浦	〃	64	鶴ノ木	住吉				151	谷地	江刺市
14	窟木	〃	65	鶴ノ木	新田				152	瀨谷子窠跡	〃
15	花沢	〃	66	鶴ノ木	新田地	101	西根	金ヶ崎町	153	薦の木	〃
16	北荒巻	〃	67	台大沢	〃	102	西根	〃	154	五十瀬神社	〃
17	菖蒲沢	〃	68	鶴ノ木	新田南	103	鳥海柵跡	〃	155	鶴羽衣台	〃
18	後生平	〃	69	下川原	〃	104	鳥海	〃	156	鶴羽衣柵跡	〃
19	尼坂	胆沢町	70	白石沢	〃	105	前谷地	〃	157	沼尻	〃
20	小十文字	〃	71	西館	〃	106	下田谷	〃	158	十三	〃
21	北赤堰	〃	72	鬼ヶ	江刺市	107	長坂裏	〃	159	稻瀬中学校	〃
22	念仏塚	〃	73	鹿野	水沢市	108	北荒巻	〃	160	大迫山居	〃
23	恩俗根	〃	74	五十瀬神社	前江刺市	109	荒巻北	〃	161	寺岡	〃
24	小田切	〃	75	葛の木	〃	110	胆沢口	水沢市	162	宝録	〃
25	大畑	〃	76	寺岡	〃	111	八ツ	〃	163	別当	〃
26	油地	〃	77	板橋	〃	112	膳性	〃	164	東間	〃
27	船戸	〃	78	根岸洞窟跡	〃	113	西館	〃	165	根岸	〃
28	南笹森	〃	79	宝生寺跡	〃	114	吉小路	〃	166	男力	〃
29	芦ノ随	〃	80	沼の上	〃	115	南矢中	〃	167	耳取	〃
30	田中坂	前沢町	81	百連寺	〃	116	西田	〃	168	北天間	〃
31	赤坂	〃	82	杉の町	〃	117	前谷地	〃	169	阿弥陀堂跡	〃
32	泊ヶ崎	〃	83	中野	〃	118	袖谷	〃	170	林	〃
33	櫓前	〃	84	高山	水沢市	119	見分	〃	171	馬場先	〃
34	白鳥長沢	〃		[古墳]		120	須恵	〃	172	宮地	〃
35	古城外ヶ沢	〃	あ	道場	金ヶ崎町	121	大壇	〃	173	杉の町	〃
36	古城上野	〃	い	飛鳥田	〃	122	林前	〃	174	観音堂沖Ⅰ	〃
37	道場	〃	う	揚場	〃	123	寺ヶ	〃	175	観音堂沖Ⅱ	〃
38	小林繁長	〃	え	三反田	〃	124	四丑	〃	176	橋本	〃
39	川岸場	〃	お	西根	〃	125	キ入	〃	177	落合	〃
40	赤岡	〃	か	角塚	胆沢町	126	石田	〃	178	朴の木	〃
41	大谷地	〃	き	今泉	水沢市	127	要害	〃	179	豊田館	〃
42	新城	〃	く	稻瀬	江刺市	128	塚田	〃	180	豊田館Ⅱ	〃
43	生母宿	〃	け	佐野山	〃	129	国分	〃	181	力石	〃
44	合野	水沢市	こ	神明館	〃	130	片子沢北	〃	182	鴻ノ巣館	〃
45	小森	〃	さ	四天坊	〃	131	竜ヶ馬場	〃	183	中屋敷	〃
46	小東上野	〃	し	裏手丘	〃	132	堤ヶ沢	〃	184	鹿野	〃
47	小林崎	〃	す	重染分	〃	133	折居	〃	185	駒込	〃
48	小林前	〃	せ	見分森	水沢市	134	小十文字	胆沢町	186	鶴ヶ	〃
49	石名坂	〃		[奈良時代]		135	貞城ヶ丘団地	水沢市	187	柏山館	金ヶ崎町
50	橋本	〃	ア	西根	金ヶ崎町	137	鶴ノ木	〃	188	石田	水沢市
51	梨田	〃	イ	上餅田	〃	138	北鶴ノ木	〃			

## 2. 遺跡の立地と環境

本遺跡は水沢市では北端に近い水沢市佐倉河字膳性に所在し、東北本線水沢駅の北方約4km、胆沢城跡の西方約1kmの地点に位置している。

遺跡は、胆沢川によって形成された胆沢扇状地の扇端部に近い北側段丘崖沿いの標高約53.2mを測る地点に立地し、段丘面区分では低位の水沢段丘に相当する。遺跡の立地する段丘崖直下の低地は胆沢川の旧氾濫原であり、現河道との間には自然堤防が形成され、自然堤防上には玉貫遺跡（奈良時代集落）が立地している。胆沢川は遺跡の北方500mを東流し、約1.5km東方で南流する北上川に合流している。遺跡の東方は巾20mほどの沢が段丘を開析しているが、沢の更に東は本遺跡の載る段丘と同位の段丘面が続き、土師器や須恵器の破片が採集される。南側には同位の段丘面が続いているが、若干の起伏を示している。本遺跡の南方500m位の所に位置する東大畑遺跡や竈堂遺跡の立地する段丘と同一面である。西方100mほどの地点には巾20mほどの沢が段丘を開析し、沢の更に西方には同位の段丘面が続き、本遺跡の西方300mには今泉遺跡が立地している。なお、本遺跡の標高は53m～54mの範囲であり、東と北に向かって緩やかな傾斜を示している。胆沢川の現河床との比高は7m前後を測る。

（高橋与右エ門）

## 3. 周辺の遺跡

（第5図）

六原扇状地、胆沢扇状地、沖積平野の微高地及び山麓部は古くから人間の生活の場として利用されて来た。昭和49年3月岩手県教育委員会作成の埋蔵文化財分布地図から摘出した遺跡の分布状況が第5図に示している。中世以降を除いた時代毎でみると縄文時代83ヶ所、弥生時代6ヶ所、古墳14ヶ所、奈良時代14ヶ所、平安時代88ヶ所合計205ヶ所の多くを数える。これらの遺跡の中には、既に発掘調査のなされた西根原添下、膳性、東大畑、石田の各遺跡等でみられる様に複合遺跡もかなりある。

遺跡の分布状況を地形との関連でみていくと、縄文時代後期までの遺跡は、沖積平野には少なく、沖積平野をとりまく北上山地西縁部や扇状地の各段丘を開析する小規模な河川に沿って分布している。縄文時代晩期から弥生時代になると低位の金ヶ崎段丘、水沢段丘さらに沖積平野の微高地に生活面が移動している。晩期では里槍・杉の堂・鶺ノ木の各遺跡、弥生時代では長坂下・清水・沼の上・兎Ⅱ・橋本・常盤広町の各遺跡があげられる。古墳時代に位置づけられる古墳は前方後円墳の北限として知られる胆沢町の角塚古墳のみで、円筒埴輪や形象埴輪が出土している。金ヶ崎町館山遺跡（柏山館）でも昭和55年調査で同類の円筒埴輪が出土したが、

古墳に付随したものではない。道場古墳をはじめとする古墳は、円墳であり末期古墳に属するものであり、地形では金ヶ崎段丘の南端崖縁及び北上山地の西縁で確認されている。西根遺跡の古墳群もその一つである。この時期で竪穴住居址が検出されている遺跡は、高山・西大畑・面塚の各遺跡で、水沢段丘の北端縁辺部に近い。奈良時代の遺跡は、北上川の東岸では顕著ではなくいずれも西岸にあり、胆沢川を狭んで金ヶ崎・水沢段丘面で確認されているものが多い。金ヶ崎段丘では、西根原添下・上餅田の各遺跡、水沢段丘では、石田・今泉・権現堂の各遺跡、金ヶ崎バイパス関連遺跡の大曾根・竈堂・東大畑・膳性の各遺跡がそれぞれあげられる。大曾根遺跡では、竪穴住居址4棟、平安時代のもの1棟、竈堂遺跡では、勾玉・土玉を伴う竪穴住居址1棟が検出されている。膳性遺跡は、段丘の北端崖縁にあり、古墳時代から平安時代にわたる竪穴住居址が89棟、掘立柱建物跡などが重複して検出されている。その中で1辺が9mを越え、北カマドをもつ大型住居址から青銅製圭頭太刀の柄頭、須恵器の高坏などが出土している。平安時代になると胆沢段丘の東端縁沿い及び北上川東岸の沖積平野の微高地に遺跡が集中している。水沢市の南矢中・真城が丘団地の各遺跡をはじめ、江刺市では力石Ⅱ・兔Ⅱ・落合Ⅲ・宮地の各遺跡などがあげられる。江刺市のこれらの遺跡では、奈良時代末に比定される竪穴住居址から始まりその後平安時代の竪穴住居址が主力をなしている状況が報告されている。

岩手県の平安時代初期は、西暦802年(延暦21年)に北上川と胆沢川の合流点の南西岸(水沢段丘の北東端)に胆沢城が設置され、さらに志波城・徳丹城を拠点にして中央の勢力が岩手県北までおよんできた時代である。この時代に胆沢地方で、特に北上川東岸の沖積平野の微高地に居住地が増加した理由は、河川道の変化による自然的環境の変化、生産基盤の拠所の変化などによる可能性も上げられるが、より以上に政治的環境の変化によるとみるのが妥当であろう。伊藤は「胆沢城周辺における古代村落について、奈良時代の村落を自然村落、平安時代のそれを計画村落と位置づけ、胆沢城の造営に伴って自然村落はいったん解体され、律令の支配体系に再編されて計画村落が作られた。」としている。今後、遺跡の発掘調査数が増加するにしたがい集落と占地との関連がさらに明確にされていくものと考えられる。

(山口了紀)

#### 引用文献

- 註1. 中川久夫 「北上川西岸の投影面図について」『北上川低地帯鮮新統第四系地形』日本地質学会第80年総会 1973年
- 註2. 中川久夫他 「北上川上流沿岸の第四系および地形——北上川流域の第四紀地史(1)」『地質学雑誌第69巻第811号』 1963年
- 註3. 註1に同じ
- 註4. 水沢市教育委員会 「林前遺跡」 1979年

- 註5. 中川久夫他 「北上川上流沿岸の第四系および地形——北上川流域の第四紀地史(2)」『地質学雑誌第70巻第812号』
- 註6. 草間俊一 「金ヶ崎町西根遺跡第1次調査報告」金ヶ崎町教育委員会 1959年  
伊東信雄・伊藤玄三・草間俊一他 「金ヶ崎町西根竪穴住居址第三次調査報告」『岩手県金ヶ崎町西根古墳と住居址』 1968年
- 註7. 岩手県埋蔵文化財センター 「膳性遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告第6集・第9集』 1978年・1979年
- 註8. 岩手県埋蔵文化財センター 「東大畑遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告第1集』 1977年
- 註9. 岩手県教育委員会 「石田遺跡」『岩手県文化財調査報告書第61集』
- 註10. 桜井清彦・杉山莊平 「岩手県水沢市杉の堂遺跡調査概報」『史観』 61
- 註11. 草間俊一・伊藤鉄夫他 「鶴の木遺跡」『水沢の原始・古代遺跡』水沢市教育委員会 1965年
- 註12. 伊藤陽夫 「長坂下遺跡出土の合口土器について」『岩手史学研究』 47
- 註13. 伊藤鉄夫 「沼ノ上遺跡調査報告書」江刺市教育委員会 1973年  
岩手県埋蔵文化財センター 「江刺市沼ノ上遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書第5集』 1977年
- 註14. 岩手県埋蔵文化財センター 「兎Ⅱ遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書第8集』 1979年
- 註15. 伊藤鉄夫 「水沢の歴史——平安以前」水沢市教育委員会 1969年
- 註16. 伊藤信雄 「岩手県佐倉河村発見の弥生式土器」『古代学三-2』 1954年
- 註17. 林謙作・伊藤鉄夫・高橋信雄 「角塚古墳」胆沢町教育委員会 1976年
- 註18. 筆者も調査に参加
- 註19. 註6に同じ
- 註20. 高山遺跡調査会 「高山遺跡」水沢市教育委員会 1978年
- 註21. 岩手県教育委員会 「西大畑遺跡」『岩手県文化財調査報告書第60集』 1981年
- 註22. 西野 修 「面塚遺跡発掘調査の成果」『みずさわ散歩第24号』 1980年
- 註23. 岩手県教育委員会 「上餅田遺跡」『岩手県文化財調査報告書第61集』 1980年
- 註24. 岩手県教育委員会 「今泉遺跡」『岩手県文化財調査報告書第60集』 1981年
- 註25. 調査者の高橋信雄氏の御教示による。
- 註26. 岩手県埋蔵文化財センター 「竈堂遺跡」『岩手県埋文センター文化財報告書第1集』 1977年
- 註27. 岩手県教育委員会 「南矢中遺跡」『岩手県文化財調査報告書第60集』 1981年
- 註28. 水沢市教育委員会 「上野団地遺跡緊急調査現地説明会資料」 1972年
- 註29・30. 註13に同じ
- 註31. 岩手県教育委員会 「宮地遺跡」『岩手県文化財調査報告書第48集』 1980年
- 註32. 伊藤博幸 「胆沢城と古代村落——自然村落と計画村落——」『日本史研究』 1980年

#### 参考文献

- 岩手県埋蔵文化財センター 「主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書」 1978年
- 経済企画庁 「土地分類基本調査地形分類水沢5万分の1、地形分類北上5万分の1」
- 斎藤享治 「岩手県胆沢川流域における段丘形成」『地理学評論51-12』 1978年
- 水沢市 「水沢市史Ⅰ 原始・古代」 1974年
- 庄野貞雄・小野剛志 「岩手県北上市付近の火山灰土壌の生成について」『第四紀研究 第16巻 第4号』 1978年

## V 基本層序

本遺跡は前述の様に扇状地形の扇端部に立地していることから、シルト層や砂層・砂礫層が多く観察されている。また、以前は水田として利用されていたことやその水田が区画整理の工事を経ているといったことから、表土層は攪乱が著しかった。以下にその概要を記すが、土層名は上位層よりローマ数字でⅠ層・Ⅱ層・……Ⅷ層とし、それぞれの中で細分された場合はアルファベット（小文字）で上位より a・b・c とした。（第6図、PL 6B・7A・B）

第Ⅰ層……7.5YR 2/2 黒褐色・粘土質シルト・微量の砂粒が混入している。現在の表土で耕作土として利用している。遺跡全面を覆い、土師器や須恵器の小破片が混在している。層厚は15cm～20cm位である。

第Ⅱ層……7.5YR 2/1 黒色・粘土質シルト・Ⅰ層の起源となった土層であるが、砂粒の混入がほとんど観察されない。遺跡全面を覆い、土師器や須恵器の破片が多く混在しており、奈良・平安時代の生活面と推定される。層厚は20cm位である。本遺跡で検出された古代の遺構は本層から掘り込まれているらしいが、遺構が実際に確認されるのは本層の下位面である。

第Ⅲ層……本層は色調の変化からさらに細分される。検出遺構はほとんど本層上面で検出されている。

a層……7.5YR 2/3 極暗褐色、粘土質シルト、良く締まっている。縦方向に、植生痕と考えられる酸化鉄の集積がみられる。Ⅲb層と色調を除けば差がみられず、Ⅲb層のよごれた土で遺跡全面を覆っている。本層の上面にはまれに土師器や須恵器の破片が混じっている。層厚は5cm～6cmである。

b層……7.5YR 2/4 褐色、土性はⅢa層とほぼ同じである。微量の凝灰質砂粒が混入している。ほぼ遺跡全面で観察され、層厚は15cm前後である。無遺物層である。

第Ⅳ層……本層は段丘崖沿いで多く観察され色調の変化によってさらに細分される。無遺物層である。

a層……7.5YR 2/2 黒褐色、粘土質シルト、良く締まり、凝灰質砂粒（粒径0.5mm～1.5mm）を多く混入する。若干の酸化鉄の集積が観察されるが、Ⅲ層ほどではない。縦方向に入る酸化鉄はほとんどない。層厚は15cm位で遺跡全面を覆う。

b層……7.5YR 2/4 褐色、Ⅳa層と質的に差がなく、Ⅳa層の起源となった土層と考える。層厚は5cm前後で、部分的に観察される土層である。

第Ⅴ層……7.5Y R  $\frac{5}{2}$ にぶい褐色、シルト、砂粒が多量に混入し、やや粘性がある。酸化鉄の集積がある。遺跡全面を覆い、層厚は10cm位である。

第Ⅵ層……7.5Y R  $\frac{5}{2}$ 灰褐色、砂層、少量のシルトが混入している。締まり良く、酸化鉄の集積がある。東方には観察されないが、観察される部分では層厚10cm位である。無遺物層である。

第Ⅶ層……7.5Y R  $\frac{5}{2}$ 灰褐色、砂礫層、粒径0.5cm—10cmで砂が35%位混じている。締まりは悪い。本層は位置によって観察されない場合もある。層厚は10cm位である。無遺物層である。

第Ⅷ層……本層は粒度によってさらに細分される。無遺物層である。

a層……7.5Y R  $\frac{4}{4}$ 褐色、砂層、細粒砂堆積層では遺跡全面で観察される。層厚は位置によって若干異なるが、10cm～20cm位である。

b層……7.5Y R  $\frac{4}{4}$ 褐色、砂層、上位のa層より粒子が粗い。層厚は位置によって差があり、3cm～20cm位である。

c層……7.5Y R  $\frac{5}{2}$ 灰褐色、シルト質砂層、やや粘性をもつ。層厚は10cm～15cm位である。

d層……7.5Y R  $\frac{4}{4}$ 褐色、砂層、上位のb層とほぼ同じ粒子である。

e層……7.5Y R  $\frac{4}{4}$ 褐灰色、砂層、d層より粒子が粗い。

f層……7.5Y R  $\frac{5}{2}$ 灰褐色、砂層、b層とほぼ同じである。

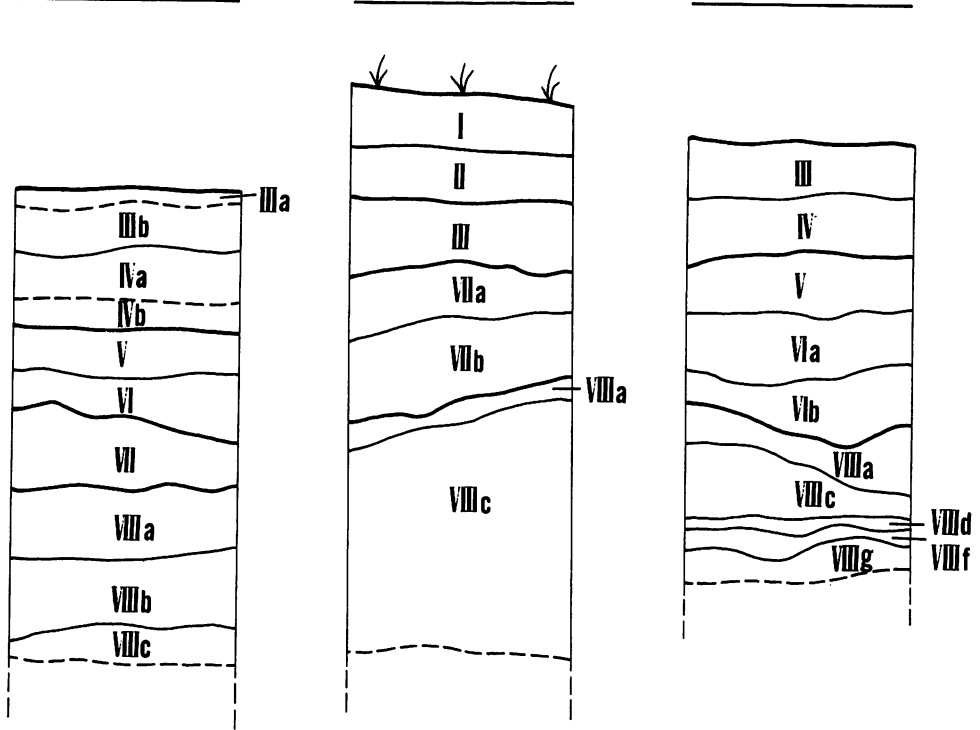
g層……7.5Y R  $\frac{3}{4}$ 暗褐色、シルト質砂層、c層とほぼ同じである。

本遺跡の基本的な層序を第Ⅰ層～第Ⅷ層に大別し、さらに色調や粒度の差によって16層に細分したが、これらの土層が遺跡地内の全ての地点で観察されるのではない。特に北の段丘崖沿いで観察される土層や、東方では全く観察されないといった様な差がみられた。これは第Ⅶ層・第Ⅷ層が地点によって高低差が著しく、相当大きな起伏を示していることに起因するものらしい。しかし、本遺跡ではこの様な深い土層では遺構・遺物とも確認されていないので、何んら支障はなかった。本遺跡で検出された遺構は奈良・平安時代に構築されたものであるが、これらの遺構は、全て、第Ⅱ層下位かⅢ層の上面で検出される場合が多かった。その状態には時代的な差異は認められていない。強いていえば、地点によって若干検出面が違うということがいえる。また、出土遺物の中に縄文式土器(晩期)や弥生式土器の破片が散見されるが、これらは全て遺構埋土内より出土しており、自然層の中からは出土していないので、これらの文化層は不明である。

また、本遺跡の第Ⅰ層～第Ⅲ層までは非常に粘性が強く、降雨に遇うとドロドロになり全く水がはけない。逆に晴天が続きすぎると、移植篋も突き刺さらない位に固結し、さらに、深さ

30cm位に達するサンクラックが入る。この様な状況の中で遺構検出から精査という一連の作業が行われた。  
 (高橋与右エ門)

L=53.50M



基本層序

- 1. 7.5 YR2/2 黒 褐色 粘土質シルト
- 2. 7.5 YR2/1 黒 色 粘性シルト
- 3 a. 7.5 YR2/3 極 暗 褐色 色 " "
- 3 b. 7.5 YR4/3 褐 色 " "
- 4 a. 7.5 YR2/2 黒 褐色 色 " "
- 4 b. 7.5 YR4/4 褐 色 " "
- 5. 7.5 YR5/3 におい 褐色 色 " "
- 6. 7.5 YR5/2 灰 褐色 色 砂 質シルト
- 7. 7.5 YR2/2 " " "
- 8 a. 7.5 YR4/4 褐 色 " "
- 8 b. 7.5 YR4/4 " " "
- 8 c. 7.5 YR5/2 灰 褐色 色 シルト質 土

第6図 基本層序

## VI 検出遺構と出土遺物

本遺跡の発掘調査によって①住居址89棟 ②土坑15基 ③掘立柱建物跡4棟 ④溝跡16条 ⑤柱穴状小土坑群4ヶ所等々の遺構が検出されている。それらの遺構に伴って①実測可能土師器・須恵器1326ヶ体 ②須恵器破片778ヶ ③土製品(土玉・勾玉・土製紡錘車等)94ヶ ④石製品(砥石・紡錘車)19ヶ ⑤鉄製品50ヶや縄文式土器・弥生式土器・縄文時代石器等が出土している。本項では遺構の種類ごとに大別し、各遺構の説明と出土遺物は合わせて記述している。遺構外の出土遺物や集落に直接伴わない遺物(縄文式土器・弥生式土器・石器・青磁破片)については別項として記述する。(付図1)

### 1. 住居址

本遺跡で検出された住居址はすべて土師器や須恵器を伴っており、縄文式土器を伴うものはない。従って、これらの住居址は古代に属することは明らかではあるが、伴出する土師器の中にロクロを使用して成形したものだけの場合と、そうでない場合があり、時代的に若干差があるものと考えられる。しかし、ここではその様な区別をせずに、調査範囲の西側に位置する住居址より順次記述する。(高橋与右エ門)

#### 1) A-1 住居址

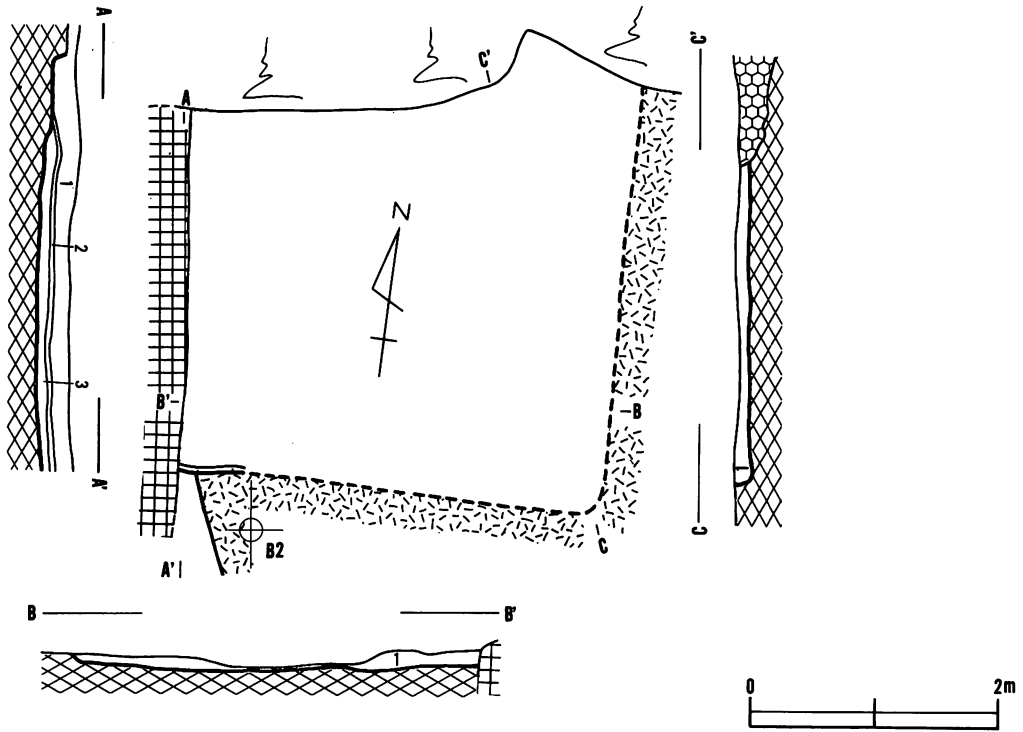
[遺構](第7図、P L 9 A)

本住居址はB-2住居址・B-2溝址と重複し、更に、西側は調査区域外そして北側は段丘崖に延びているために、それらの部分は不明である。重複の新旧関係はB-2住居址の埋土内に本住居址の床面が検出されていることから、本住居址が新しい。また、B-2溝址は本住居址を削剝している。

本住居址に関連する部分は、南壁の西寄り部分0.5mのみであり、他の部分はB-2住居址と重複しているので壁が明確でない。精査中にB-2住居址埋土内に本住居址に伴う貼床と推定される土層変化が観察され、その範囲で規模を推定したが、貼床部分も全面に及んでいないことから、大雑把な計測値が得られたにすぎない。検出された規模は東西3.4m・南北3.0mで全体規模は不明である。壁高は0.20m位を測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は方形もしくは隅丸方形を呈するものと推定され、主軸方向は不明である。

埋土は黒褐色を呈するシルト質粘土の単層で構成され、全体的に水酸化鉄の集積や炭化物の

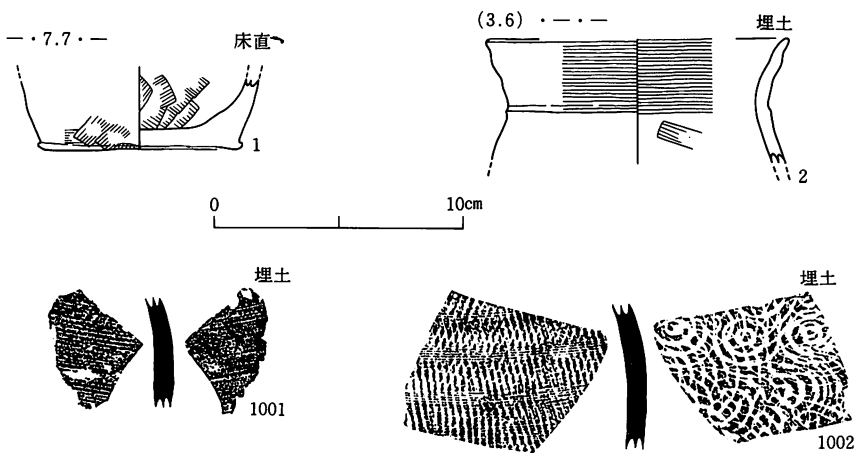




A-1 住居址埋土土層

1. 10 YR 2/2 黒褐色 シルト質粘土 堅く締まっている、粘性ほとんどなし、炭化物を少々含む、酸化鉄の斑点に富む。
2. 10 YR 3/3 暗褐色 シルト質 土 堅く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる) 貼床部分、褐色シルトに黒褐色土が少々混じる。
3. 10 YR 3/2 黒褐色 シルト質粘土 堅く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる) 褐色シルトブロック、酸化鉄少量、炭化物微量混入。

第7図 A-1 住居址(遺構)



第8図 A-1 住居址(遺物)

混入が観察される。床はB-2住居址埋土で構築し、褐色の砂質シルトを1cm位貼って床面としている。床面は若干起伏がみられるもののほぼ平坦で水平に近く、良く締まって固い。

壁溝・土坑・カマドともに検出されていない。

〔遺物〕(第8図、PL61A)

床面直上での出土はなく、埋土内でのみ出土している。種類としては土師器と須恵器があり、器種としてはいずれも甕形土器である。

#### 土師器

甕形土器(1・2) いずれもロクロ未使用成形のものである。1は底部より体部の一部が残存し、底径7.7cm・残存器高3.0cmである。調整技法は内外面ともにヘラナデであり、底面もヘラでナデられている。2は円周の約 $\frac{1}{3}$ が残存する口縁部破片で、推定口径12.2cm・残存器高3.6cmである。調整技法は口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面はナデかミガキと考えられるが、単位が明確でない。内面は一部にヘラナデが観察される。頸部外面には軽い段がみられる。どちらも一部を残しているものであり、全体的なことは不明である。

#### 須恵器

大甕や甕・壺と考えられる器種の破片が3点出土している。10Q1は内外面ともに平行する細条線のカキ目を持ち、外面には自然釉が観察される。胎土には砂粒が少量混入しているが、焼成は堅緻で、色調は燻色を呈している。10Q2は外面平行叩き目、内面は重複し合う同心円文が付され、外面はさらにカキ目状の細い条線が入っている。外面には黒味がかった自然釉が観察されるが、色調は暗灰色を呈している。器厚は若干差があるものの、ほぼ6～7mm位である。

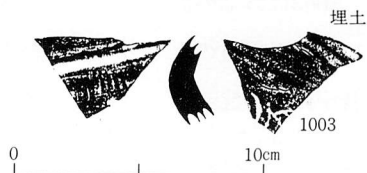
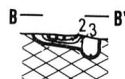
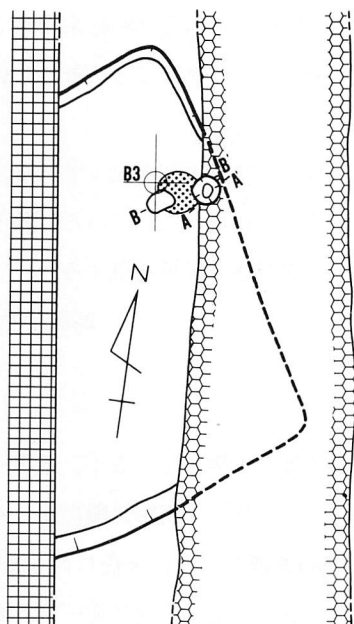
(高橋与右エ門)

## 2) A-2住居址

〔遺構〕(第9図、PL9B)

本住居址は東側部分がB-2溝跡と重複し、さらに西側部分が調査区域外に延びているのでこの部分については不明である。B-2溝跡との新旧関係はB-2溝跡の方が新しい。

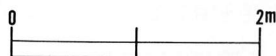
検出された部分から計測される規模は南北3.3mを測り、東西は不明である。壁は床面に対して110度～120度の角度を示し、壁高は北壁で0.03m・南壁は0.10mである。平面形は検出された北壁と南壁がほぼ平行し、さらに北壁と東壁がほぼ直交していることから、方形もしくは隅丸方形を呈するものと推定される。主軸は東-西方向にあり、磁北に対して55度東に偏している。埋土は黒褐色を呈する粘土質シルトの単層で構成されている。床は地山の褐色を呈するシルトで構築され貼床はみられない。床面には若干の起伏がみられるものの総じて平坦でほぼ水平に近い。



第10図 A-2住居址(遺物)

A-2住居址ピット計測値

長径×短径 深さ  
P<sub>1</sub>: 25cm×21cm 26.5cm



A-2住居址ピット埋土土層

1. 10YR2/2黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)、酸化鉄多い、焼土少々含む。
2. 10YR2/2黒褐色 粘土質シルト 1層とほぼ同じ、地山の地を少々含む。

A-2住居址カマド埋土土層

1. 5YR5/8明赤褐色 シルト質粘土 非常に強く締まっている、粘性なし、燃焼部の焼土で非常によく焼けている
2. 5YR4/4こぶい赤褐色 シルト質粘土 非常に強く締まっている、粘性ほとんどなし、1層より焼け方が弱く、下にいく程地山の土と色が同じくなる。
3. 7.5YR2/3~7.5YR4/4  
シルト質粘土 強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる) 焼成は微弱で、ほとんど地山に近いが、少々黒褐色土を含む。  
黒褐色~褐色

第9図 A-2住居址(遺構)

本住居址の範囲内で検出された土坑はP<sub>1</sub>のみであるが、この土坑はカマド燃焼部焼土を切っ  
て掘り込まれており、本住居址に直接的に伴う土坑ではない。

カマドは北東壁で検出され、壁中央より0.5mほど北に寄って位置する。検出された部分は  
燃焼部焼土のみであり、他の袖部や煙道部は検出されていない。燃焼部焼土は30cm×30cmの分  
布範囲をもち、厚さは4cmを測る。

〔遺物〕(第10図、P L 61 B)

床面直上から出土したものはなく、埋土内より土師器や須恵器の破片が少量出土したのみで  
ある。出土した遺物も復元や実測可能な土器は含まれていない。土師器の器種は坏形土器・甕  
形土器で須恵器の器種も土師器のそれと同様である。

土師器

図化できるものはなく、全てロクロ使用成形のものだけである。坏形土器は器厚も薄く、内

面が黒色処理されたものとそうでないものが相伴している。底部切り離しは回転糸切りで再調整の有無は不明である。甕形土器はロクロ使用成形で体部外面がヘラケズリされるらしい。

#### 須恵器

1003は体部外面にかすかに平行タタキ目を残し、タタキ目の上にカキメが入っている。頸部にはロクロ目のみである。内面は体部に同心円文、頸部にはロクロ目が入っている。胎土には若干砂粒が混入しているが、焼成良く堅緻である。色調は黒味の強い灰色を呈する。

(高橋与右エ門)

### 3) A-4 住居址

〔遺構〕(第11図、P L 10A)

本住居址は西側部分がB-4溝跡、南側部分がA-5住居址と重複しているが、重複する部分は不明である。新旧関係はA-5住居址→A-4住居址→B-4溝跡の順に新しくなる。

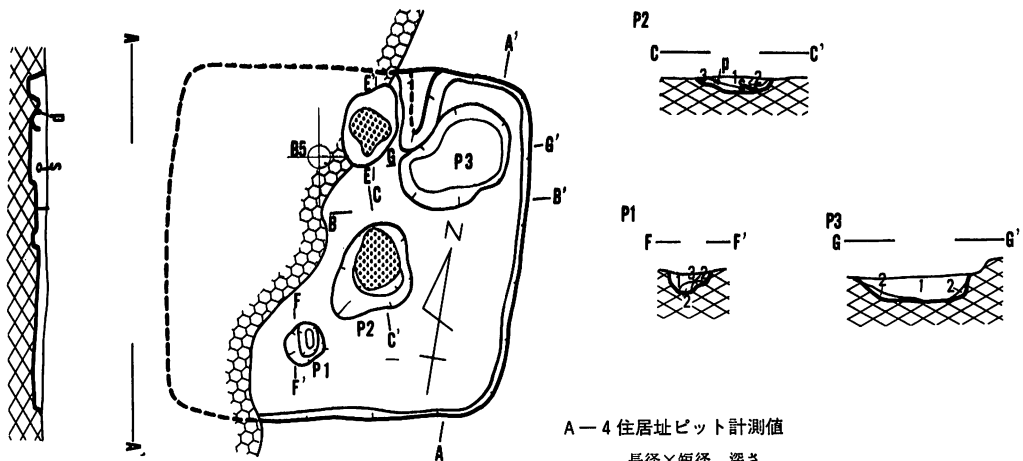
規模は南北2.6mを測り、東西は不明である。壁高は0.1mを測り、壁は床面に対して105度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈するものと推定され、主軸方向は北-南方向にあり、東壁でほぼ磁北を示している。埋土最下層や床面には炭化物や焼土粒の混入が多く観察された。炭化物の大きさは巾10cm～15cm・長さ30cm～40cmを測るものが多い。この様な状況から本住居址は焼失したものと推定されるが、検出状況は上家構造を想定させる様な配列ではなく、散乱していた。床は地山の褐色を呈するシルトで構築される部分と、A-5住居址の埋土で構築される部分があるが、貼床はない。床面は平坦でほぼ水平である。

土坑はP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>まで検出されたが、規模はそれぞれによって差がみられるものの、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。埋土の構成もそれぞれによって差があり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>ではシルトが主体を成し色調は黒色や褐色を呈する。P<sub>3</sub>は上位より焼土・シルト・炭化物の順で構成される。土坑の性格は位置や規模から柱穴と考えるには不十分である。しかし、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>の埋土内に炭化物や焼土が混入していることから、本住居址に伴う土坑と理解されるが、性格は不明である。

カマドは北壁で検出されたが、西側部分がB-4溝跡によって削剝され、残存していない。検出された部分は燃焼部焼土と右側袖部と考えられる褐色を呈するシルトの高まりのみで、右側袖部や煙道部は不明である。位置は北壁中央やや東寄りであろうと推定される。残存する右側の袖部はシルトの貼り付けによって構築され、基底部の掘り込みはない。燃焼部は床面より若干掘り窪められ浅皿状を呈する。燃焼部焼土は30cm×40cmの範囲を示し、厚さは約5cmである。

〔遺物〕(第12図、P L 61C)

床面直上や埋土内で出土しているが量的には少ない。種類は土師器と須恵器があり、器種としては坏形土器を含まず甕形土器のみである。土師器にはロクロ使用成形のものとロクロ不使用成形のものが相伴している。その他に土製丸玉が出土している。



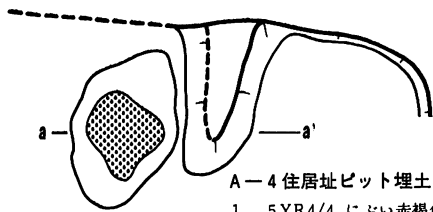
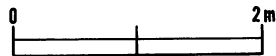
A-4 住居址ピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	33cm×28cm	19cm
P <sub>2</sub>	68cm×52cm	10cm
P <sub>3</sub>	92cm×54cm	22cm

B ————— B'

A-4 住居址埋土土層

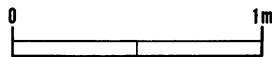
- 7.5 YR2/1 黒色シルト質 土 堅い、10mm位の褐色シルトが全体に混入



A-4 住居址ピット埋土土層

- 5 YR4/4 赤褐色シルト質 土 堅い、粘性あり、クラークが少量混入。
- 7.5 YR4/4 褐色シルト質 土 堅く締まっている、粘性あり、わずかに焼成を受けている。
- 7.5 YR3/4 褐色シルト質 土 堅い、粘性ややあり。

a ————— a'



A-4 住居址カマド埋土土層

P<sub>1</sub>

- 7.5 YR2/1 黒色粘土質シルト 軟らかい、粘性あり。
- 10 YR2/1 黒色粘土質 1層より軟らかい、粘性あり。
- 10 YR3/2 黒褐色粘土質シルト 軟らかい、粘性あり。

P<sub>2</sub>

- 5 YR4/4 ~ 5 YR4/6 赤褐色~赤褐色シルト質 土 やや堅く締まる、粘性あり、炭化材がわずかに混入、3mm~数mmの焼土粒が全体に混入。

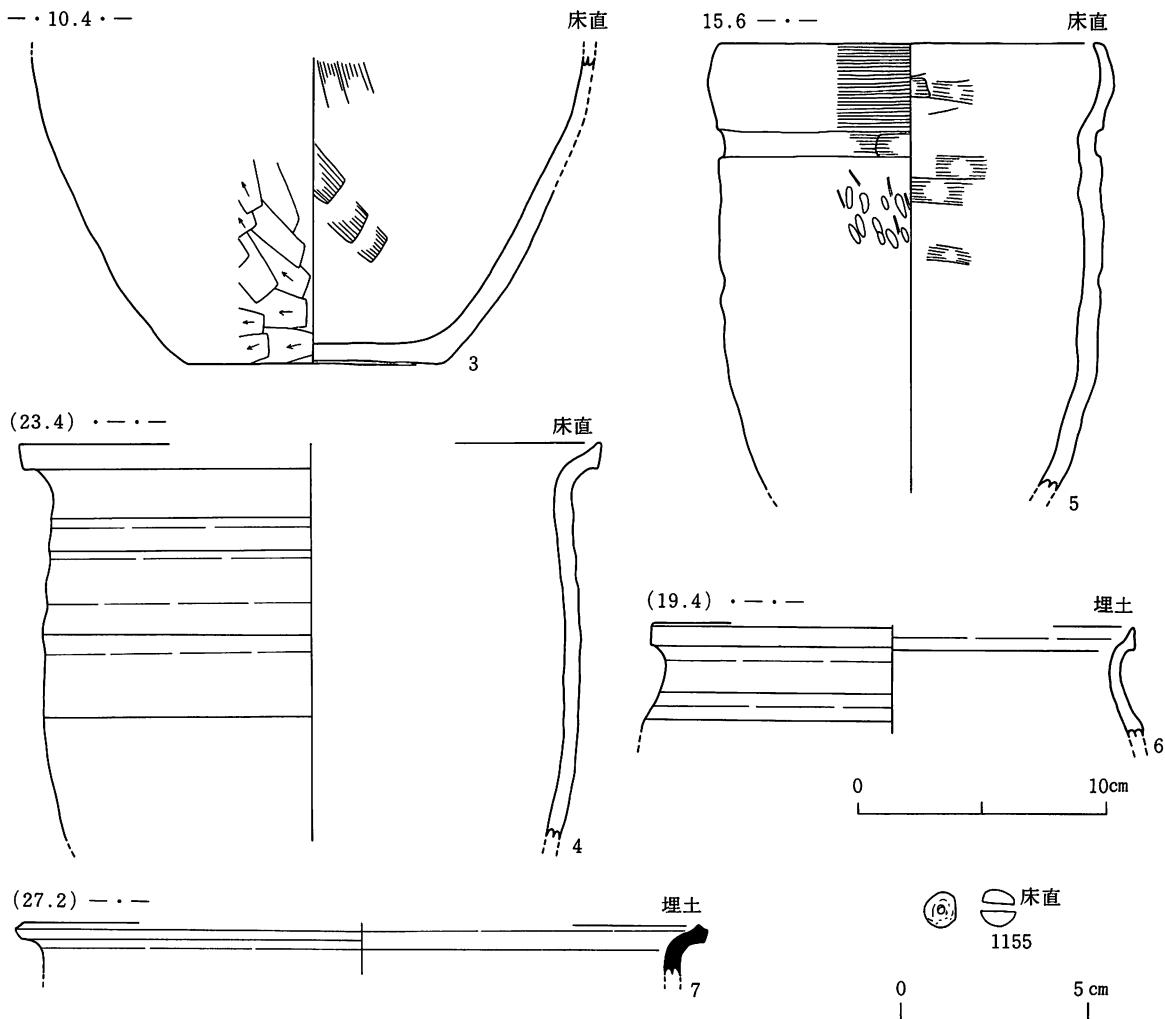
3.

- 7.5 YR2/2 黒褐色シルト質粘土 やや堅く締まる、粘性あり、焼土少量混入。

P<sub>3</sub>

- 7.5 YR2/1 黒色シルト質 土 堅く締まっている、粘性あり、20mm位の褐色シルト粒が全体に混入、炭化材わずかに混入。
- 10 YR2/3 黒褐色シルト質 土 堅く締まっている、粘性あり。

## 第II図 A-4 住居址(遺構)



第12図 A-4 住居址(遺物)

**土師器**

**甕形土器**(3~6) ロクロ使用成形のもの3ヶ体(3・4・6)とロクロ不使用成形のもの1ヶ体(5)が共伴している。いずれも破片であるので全体は不明であるが、ロクロ使用成形のものは体部上半ロクロナデ、体部下半ヘラケズリによって調整されている。口縁部は短くそして小さく外反し、口唇は上・下方に軽く挽き出されて縁带状を呈している。口径や器高からみると大型(3・4)とやや小型(6)の2型態があり、最大径が口縁部にある場合(4)と体部にある場合(6)がある。胎土は個体差があるもののやや砂粒が多い。焼成は良好で、色調は橙色や褐色を呈する。ロクロ不使用成形のもの(5)は器面が横縞状の小凹凸が観察されることから、

輪積みか巻き上げで成形されたものであろう。頸部にはヘラナデによる帯状の窪みが全周している。体部は頸部寄りに最大径をもち、下方に移行するに従って窄んでいる。口縁部は頸部より若干外反し、しだいに軽く内弯して口唇部に移行する。口縁部は外面ヨコナデ、内面ヘラナデ、体部外面は不明瞭であるがヘラミガキ・内面ヘラナデで調整されている。胎土に若干砂粒が混入するものの比較的良好である。

#### 須恵器(7)

甕の口縁部破片であるが全体は不明である。口縁部は頸部より丸味をもって外弯し、短い。口唇は三角形を呈しているが、ロクロ挽き出しはない。胎土は良く精選され、焼成も良好である。色調は青灰色を呈している。

#### その他

土製丸玉が1ヶ出土している。直径8mm位の扁円球状を呈する。中心部に貫通孔が1ヶある。表面は良く磨かれ光沢を放ち、黒色処理されている。(高橋与右エ門)

### 4) A-5 住居址

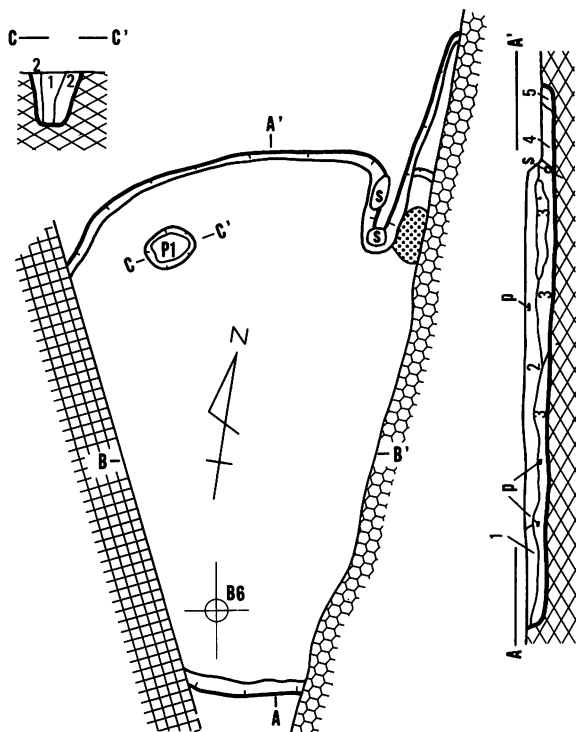
#### 〔遺構〕(第13図、P L 10B)

本住居址は東側がC-2溝跡と重複し、さらに、西側が調査区域外に延びているので、これらの部分は不明である。C-2溝跡との新旧関係は本住居址の方が古い。

規模は南北4.5mを測り、東西は不明である。壁高は0.15mで、壁は床面に対してほぼ直角を示している。平面形は胴張隅丸方形を呈するものと推定され、主軸は北-南方向を示し、磁北に対して5度東に偏している。埋土は黒色を呈するシルトが主体で構成され、混入物の種類や程度によって5層に細分された。混入物としては、全体的に褐色を呈するシルト粒が混入しさらに、埋土最下層には粒径10cm~15cmの円礫が多く混入していた。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構築され、一部は褐色を呈するシルトを貼って床面としている。床面は良く締り固く、平坦でほぼ水平である。本住居址のカマド付近は掘り方を有しており、黒褐色や褐色を呈するシルトの混合した土を埋めて床としている。壁溝は検出されていない。

床面で検出された土坑はP<sub>1</sub>のみである。規模は0.30m×0.40m・深さ0.40mを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は黒色を呈する粘土質シルトで構成され、褐色を呈するシルトの混入程度によって2層に細分された。また、本土坑には柱痕跡が観察され、それによれば柱は径10cm位の円柱と推定され、土坑底面に達している。性格は位置や規模・埋土より考えて本住居址に伴う柱穴を構成する一部と推定される。

カマドは北壁で検出され、ほぼ壁中央付近に位置するものと推定される。検出された部分は左側袖部・燃焼部の一部・煙道の一部であり、東側半分はC-2溝跡によって削剝を受けており、残存していない。天井部は検出されていない。残存する左側袖部は床を若干掘り窪めて基



A-5 住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト質土 堅い、粘性なし、土器片、炭化材が少量混入。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土 堅い、粘性なし、乾燥して白い。
3. 10YR4/4 褐色シルト質土 褐色シルトが大分。
4. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性なし、褐色シルトのにじみがわずかにある、土器片2片混入。
5. 7.5YR2/2 黒褐色シルト質土 堅い、粘性少しあり、褐色シルトの焼けたものが多く混入。
6. 7.5YR2/1 黒褐色 粘りが多く混入。
7. 10YR2/2 黒褐色 やわく締まる、粘性あり、5~20mmの焼土塊が混入した層。
8. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性なし、褐色シルト少量混入。
9. 7.5YR2/1 黒褐色 粘りややあり、5~10mmの焼土塊と焼土のにじみがある。
10. 7.5YR2/1 黒色シルト質土 粘性なし、焼土と褐色シルトが少量混入。
11. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘りややあり、焼土と褐色シルトのにじみあり。
12. 10YR2/1 黒色シルト質土 やや締まる、粘性ややあり、20mm位の焼土ブロックと褐色シルトブロック少量混入。
13. 7.5YR2/1 黒褐色 やや堅めに締まる、粘性あり。
14. 7.5YR2/1 黒褐色 堅く締まる、粘性あり。10cm位の褐色シルトブロックが入る。

A-5 住居址ピット計測値

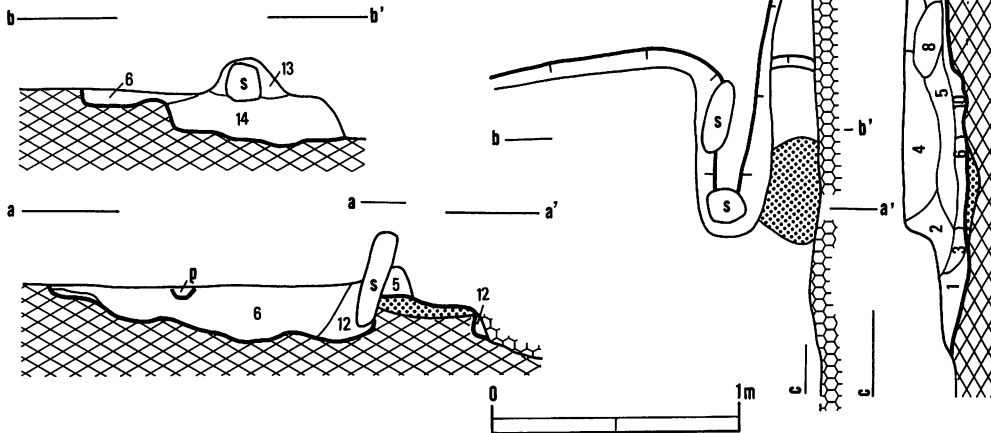
長径×短径 深さ  
P1 40cm×28cm 43cm

A-5 住居址埋土土層

1. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅い、粘性なし、褐色シルトブロック混入。
2. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性なし、褐色シルトブロック少量と炭化物少量混入。
3. 7.5YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる、粘性あり、炭化物少量混入、褐色シルトのにじみがある。
- 3' 褐色シルトがやや少ない。
4. 10YR1.7/1 黒色シルト質土 堅い、粘性あり、褐色シルト粒が多く混入。
5. 10YR1.7/1 黒色シルト質土 粘性あり、褐色シルトブロック（壁崩壊）が多く混入。

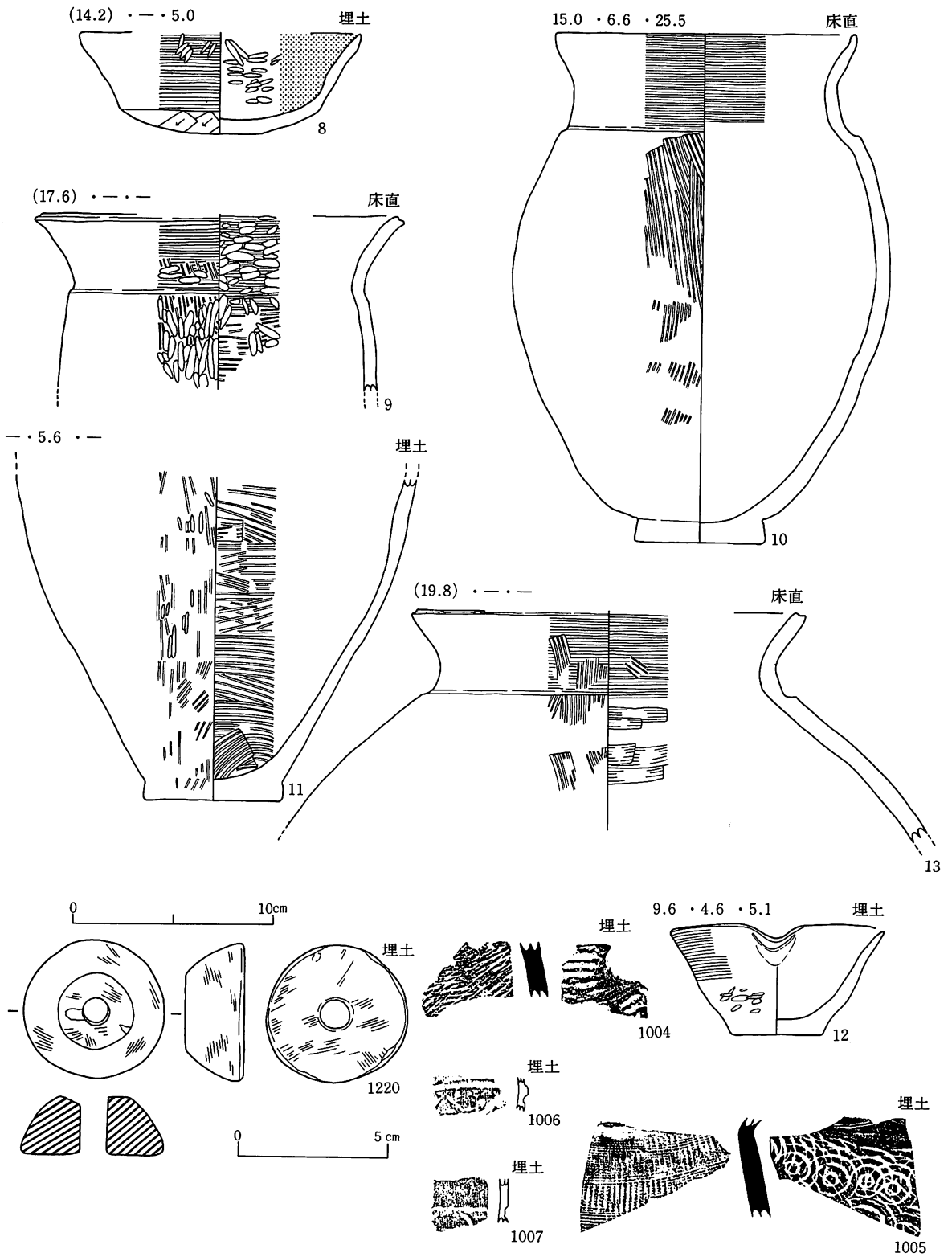
A-5 住居址ピット埋土土層

1. 10YR2/1 黒色シルト質土 やや軟らかめに締まる、粘性あり、炭化物少量混入。
2. 10YR2/1 黒色シルト質土 粘性あり、褐色シルト混入。



第13図 A-5 住居址(遺構)





第14图 A—5住居址(遺物)

底部を作り、その上に粒径35cm×15cmの細長い円礫を1個横転させておき袖部の芯としている。さらに、円礫の周囲に黒褐色のシルトを貼り付けて構築している。袖部の焚口付近には粒径40cm×10cmの円礫が1個縦位で15cm位埋め込まれている。燃烧部は床面より若干掘り窪められているが、中央付近より奥壁に向かって次第に高くなり、煙道部とは明瞭な段差で接続している。燃烧部焼土は焚口部より燃烧部中央付近まで観察され、さらに、煙道部の一部にも焼成を受けた痕跡がみられる。焼燃部には埋設土器や支脚は検出されていない。煙道部底面は平坦であるが、煙出部に向かって次第に高くなっている。煙出部は削剝によって残存していない。

〔遺物〕(第14図、P L 62)

埋土内での出土は少なく、床面直上での出土が多い。種類は土師器が主体を占め、若干の須恵器が共伴している。土師器の器種は坏形土器・甕形土器・小型鉢形土器があり、須恵器は大甕のみである。土師器はすべてロクロ未使用成形のものに限定される。その他に石製紡錘車が出土している。

### 土師器

**坏形土器**(8) 破片では他にも出土しているが、図化できたのは1点のみである。底部丸底で体部と底部の境目には内外ともに稜をもつロクロ未使用成形のものである。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ・底部ヘラケズリ、内面は横方向ヘラミガキ後黒色処理である。全体的な器形は稜でやや強く立ち上がった体部は丸味をもちながら外弯し、口縁部付近で直立気味になって口唇部に移行する。口縁は外削ぎによって先細りとなり、口唇は丸味をもつ。

**甕形土器**(9～11・13) 図化されたのは4ヶ体であるが、その中で10はほぼ完形である。全体的な形態でみると長胴型(9～11)と球胴型(13)に大別され、長胴型のもはさらに口縁部に最大径をもつもの(9)と体部に最大径をもつもの(10)に細分される。調整技法は、口縁部内外面ヨコナデ一部ハケメやミガキ、体部外面は縦方向ハケメが主体で一部ヘラミガキ、体部内面はハケメまたはヘラナデが主体であるが一部ヘラミガキ等が観察される。頸部にはいずれも(9・10・13)明瞭な段をもっており、口縁部は外反するもの(9・13)と外反後内弯のもの(10)がある。口唇は丸味をもつもの(10)と沈線状の窪みをもつもの(9・13)がある。底部には木葉痕をもつもの(11)とヘラナデで素文のもの(10)がある。大きさでは大型(11・13)と中型(9・10)がある。拓本図1006と1007は同一個体の破片であるが、頸部に鋸歯状の沈線を描くものである。

**鉢形土器**(12) 片口をもつ小型のものである。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ヘラナデが観察されるが、内面は摩滅によって不明である。

### 須恵器

破片が2ヶ出土しているが、器種は甕もしくは壺である。拓本1004は表裏ともに平行タタキ目をもつものである。拓本1005は表平行タタキ目後カキ目、裏同心円文が付されている。

### その他

**石製紡錘車**(1220) 截頭半球形を呈するもので、中心部に1ヶの貫通孔をもつ。全面に擦痕

をもつが、作りは丁寧である。

(高橋与右エ門)

## 5) B-2 住居址

〔遺構〕(第15図、P L 11A)

本住居址は北側部分が段丘崖へ延びており、さらに北西部分はA-1住居址、東側部分はC-2住居址やC-2溝跡と重複しているために、それらの部分については不明である。重複する遺構との新旧関係は、重複するいずれの遺構よりも古い。

検出された規模は東西7.5m・南北7.5m～8m位と推定される。壁高は0.2mを測り、壁は床面に対してほぼ直角を示している。平面形は隅丸方形を呈するものと推定され、主軸方向は不明であるが西壁は磁北に対して23度西に偏している。埋土は粒径10cm位の円礫が混入した黒褐色を呈するシルト質粘土の単層で構成され、全体的に水酸化鉄が集積し植生痕が観察される。床は地山の褐色を呈するシルトで構築され、北寄り部分には黒褐色を呈するシルトを埋め込み、その上面に褐色のシルトを0.5cm～1.0cm位貼って床面としている。床面は若干の起伏がみられるものの、ほぼ平坦で水平に近い。南東隅部の床面には炭化物が検出されたが、他の部分では検出されていないことから、焼失したとは考えられない。周溝は検出されていない。

本住居址の床面で検出された土坑はない。図上の土坑はすべて本住居址より新しい時期のものである。カマドは検出されていない。

〔遺物〕(第16図、P L 63A)

床面や埋土内で出土しているが量的には少ない。種類としては土師器と須恵器がある。土師器の器種は坏形土器と甕形土器があり、須恵器は甕に限定される。

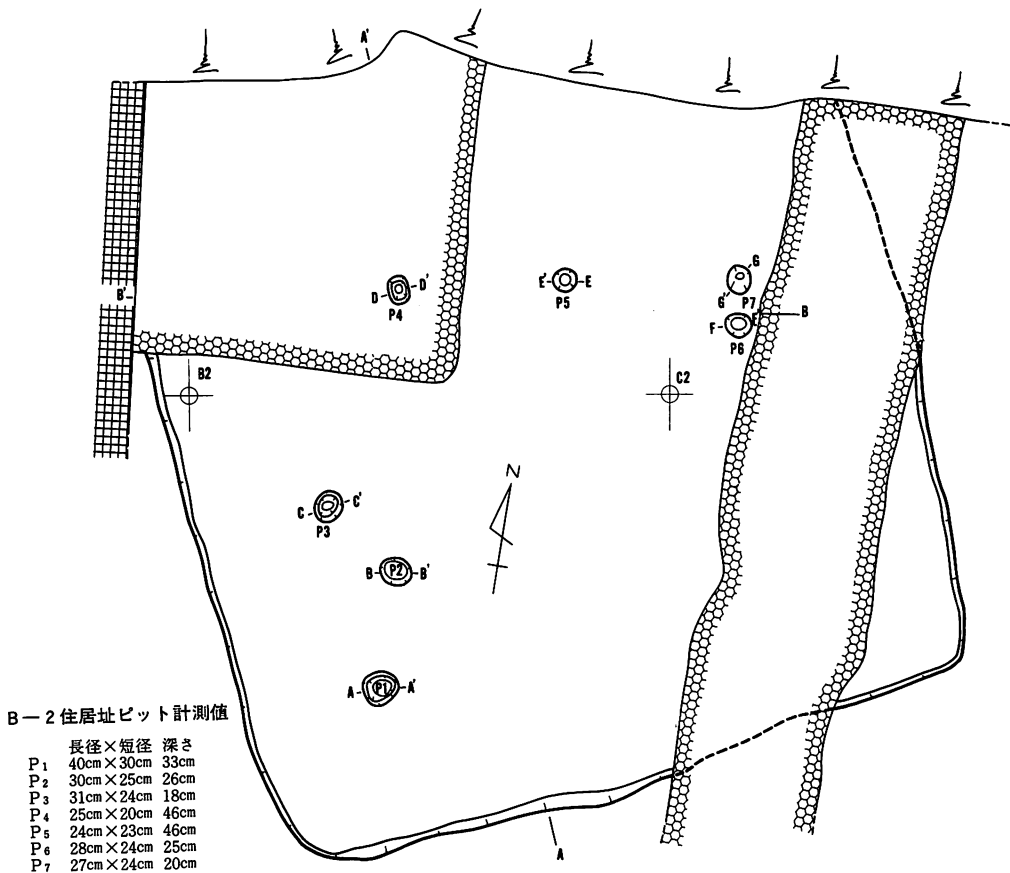
### 土師器

**坏形土器** 図化されたものはない。ロクロ不使用成形のものに限られ、体部外面と内面に段をもつものがみられる。どの破片も内面黒色処理されている。その他は不明である。

**甕形土器**(14～17) すべてロクロ不使用成形のものである。図化されたのは4ヶ体のみであるが、その中で14は完形である。全体的な形態でみると長胴型(16)と球胴型(14・15)があり、さらに大小関係では大型(15)・中型(14・16)・小型(17)がある。球胴型(14)は最大径を体部にもつ。調整技法は口縁部外面ヨコナデ、体部外面ともヘラナデまたはハケメである。なお、14は口縁部内面と体部外面に朱彩がみられる。これらの底面はヘラナデ調整され、素文である。

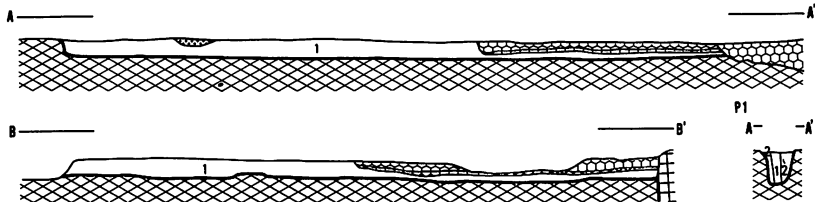
### 須恵器

破片で7ヶ出土しているが、それらの器種はすべて甕または壺である。その中の1点(18)は壺形の口縁部破片である。この口縁部破片は頸部より次第に軽く外反し、口唇は上・下方に挽き出され縁帯状を呈する。拓本1008は内外面ともにロクロナデのみのものである。1009は外面に僅かな平行タタキ目を残し、その上全面にロクロナデがみられる。1010は外面に平行タタキ



B-2 住居址ピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	40cm×30cm	33cm
P <sub>2</sub>	30cm×25cm	26cm
P <sub>3</sub>	31cm×24cm	18cm
P <sub>4</sub>	25cm×20cm	46cm
P <sub>5</sub>	24cm×23cm	46cm
P <sub>6</sub>	28cm×24cm	25cm
P <sub>7</sub>	27cm×24cm	20cm

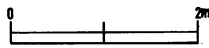


B-2 住居址ピット埋土土層

- P<sub>1</sub> ~ P<sub>3</sub>
- 10YR2/1 黒色 砂質土 堅く締まっている、粘性あり、酸化鉄を含む。
  - 10YR2/1 黒色 堅い、粘性少しあり、褐色シルト混じり。
- P<sub>4</sub> - P<sub>5</sub>
- 10YR1.7/1 黒色 砂質土 堅めに締まる、粘性あり、酸化鉄が横に入る。
- P<sub>6</sub>
- 10YR5/3 にふい褐色 堅い、粘性少しあり、酸化鉄を含む、褐色シルトが多い。
  - 10YR2/1 黒色 堅い、粘性あり、10mm位の褐色シルトブロックが少量混入。
- P<sub>7</sub>
- 10YR1.7/1 黒色 堅めに締まる、粘性あり、黒一色。
  - 10YR2/1 黒色 砂質土 堅い、粘性少しあり、褐色土混じり。

B-2 住居址埋土土層

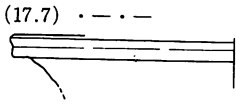
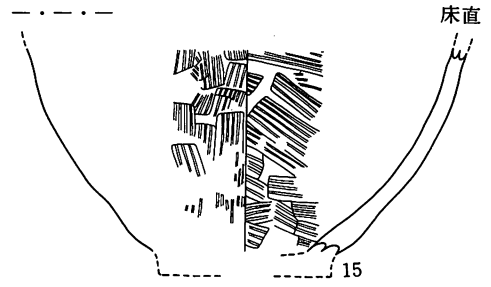
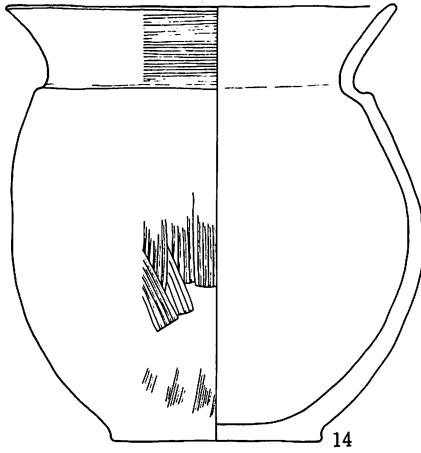
- 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 堅く締まっている、粘性なし、炭化物と土器片少量混入、酸化鉄の斑点に富む。



第15図 B-2 住居址(遺構)

15.8 · 8.4 · 17.5

床直

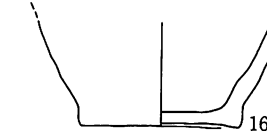


埋土



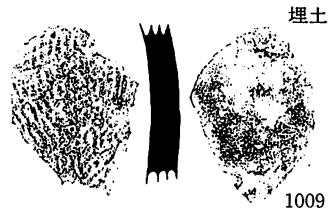
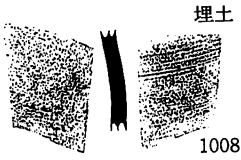
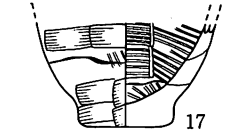
· · 6.6 · ·

埋土



· · 3.8 · ·

埋土



0 10cm

第16图 B-2 住居址(遗物)

目のあるものである。1009と1010は内面は凸面アテ工具による大きな凹凸が観察される。

(高橋与右エ門)

## 6) B-3住居址

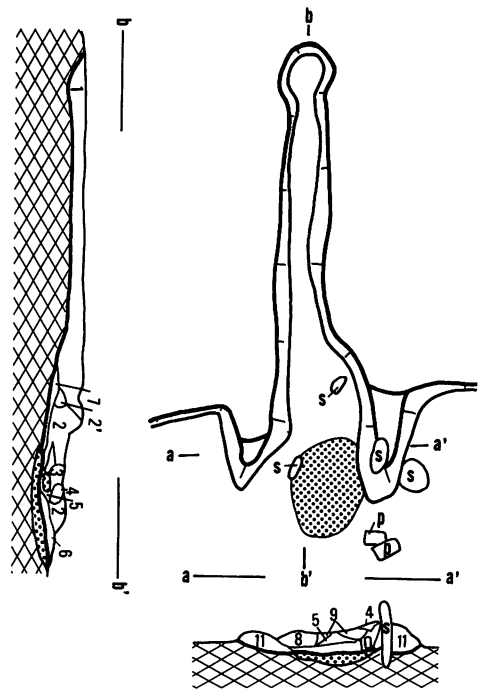
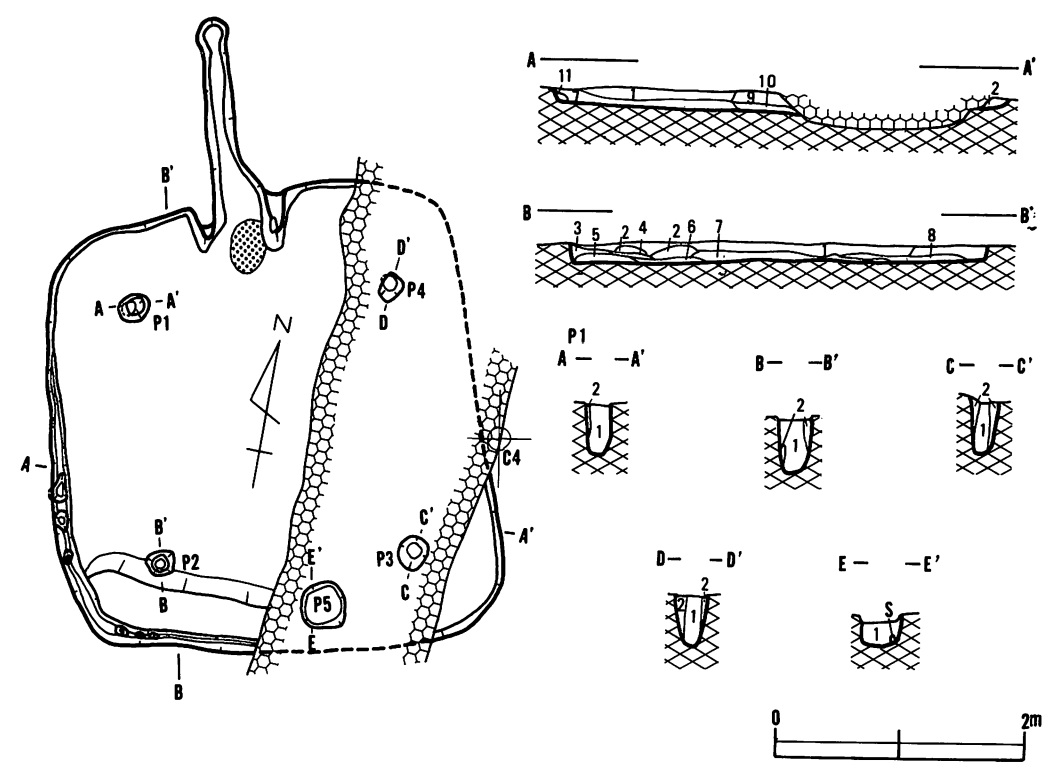
〔遺構〕(第17図、P L 11 B)

本住居址は東部分がC-2溝跡と重複し、重複する部分は不明である。新旧関係は本住居址の方が古い。

規模は南北3.5m・東西3.2mで、壁高は0.15mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は東壁が西壁より0.3m位長い歪んだ隅丸方形を呈している。主軸は北-南方向にあり磁北に対して17度西に偏している。埋土は黒色を呈する粘土質のシルトで構成され、混入物の種類や程度によって7層に細分された。混入物としては、全体的に微量の炭化物が観察され、さらに埋土最下層には粒径10cm前後の円礫が多く混入している。しかし、床面直上に位置する礫はない。なお全層に縦縞状に水酸化鉄の集積がみられ、植生痕と考えられる。床は地山の黒褐色を呈するシルトによって構築され、貼床は観察されない。床面は南壁際が0.25m位の中での他の床面より0.05m位高く盛り上がってベンチ状を呈しているが、他の部分は平坦でほぼ水平に近く、良く締まっていて固い。壁溝は西壁および南壁の一部で検出され、巾0.1m前後、深さ0.05m位を測る。壁溝の底面はほぼ平坦であるが、溝底で平面形が円形を呈する小坑が6ヶ検出された。それらの規模は径0.05m～0.10m、深さ0.05m位である。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までの土坑が検出された。その中でP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>はほぼ対角線上に位置し、P<sub>6</sub>は南壁寄りに位置する。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の規模は径0.25m前後・深さ0.40m前後を測り、平面形は円形や楕円形を呈している。埋土は黒色や黒褐色を呈する粘土質シルトで構成され、色調によって2層に細分された。P<sub>6</sub>は径0.3m・深さ0.2mを測り平面形は円形である。埋土は黒褐色を呈する粘土質シルトで構成されるが、草灰・炭化物・焼土の混入が多く、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の埋土と比較して異質である。また、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>には柱痕跡が観察され、それによれば径10cm前後の円形で土坑底面に達している。土坑の性格は、規模・埋土・位置から考えて、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本住居址の柱穴を構成しているであろう。P<sub>6</sub>と本住居址との関連は明確でないが、精査中に床面の検出時にその存在が判明したことから、本住居址に伴う土坑であろう。

カマドは北壁で検出され、壁のほぼ中央付近に位置しているものと推定される。天井部は検出されていないが、他の袖部や煙道部はほぼ検出された。袖部は床面を若干掘り窪めて基底部とし、黒色シルトの混入した褐色を呈する砂質シルトを貼り付けて構築している。右側袖部の焚口付近には粒径25cm×5cmの細長い礫が1ヶ縦位で0.1mほど埋め込まれている。左側袖部には礫が検出されていない。燃焼部は若干掘り窪められているが、中央部より奥壁に向かって次



B-3 住居址ピット計測値

長径×短径 深さ

P <sub>1</sub>	26cm×20cm	40cm
P <sub>2</sub>	22cm×19cm	44cm
P <sub>3</sub>	28cm×21cm	41cm
P <sub>4</sub>	20cm×15cm	45cm
P <sub>5</sub>	35cm×32cm	24cm

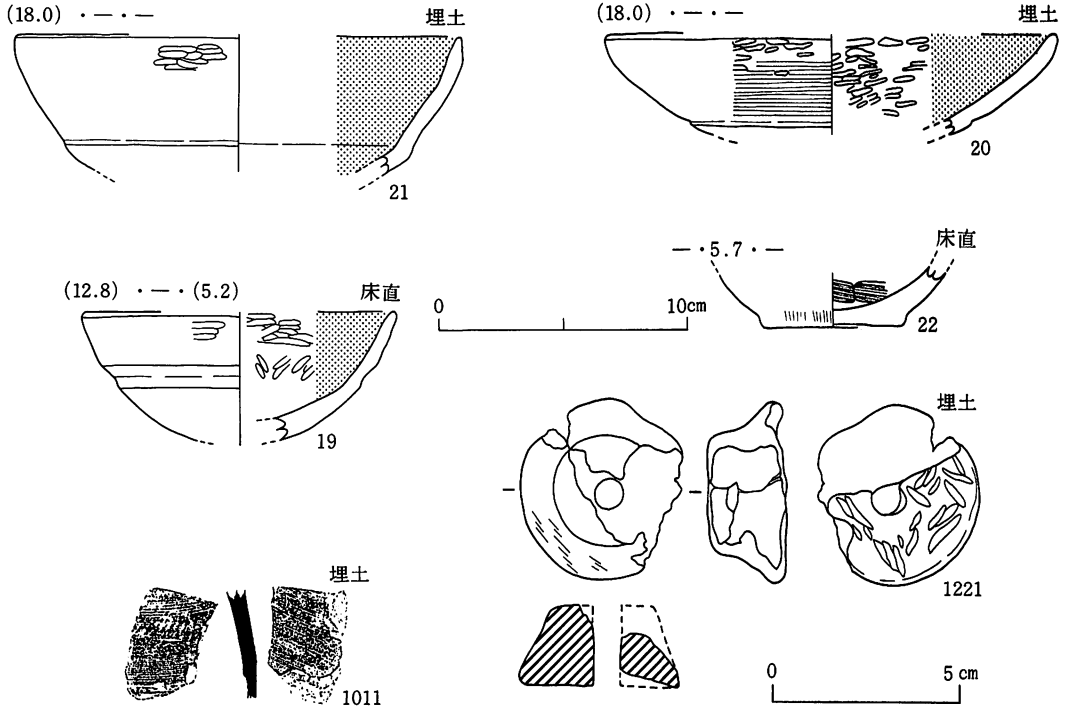
第17図 B-3 住居址(遺構)

B-3 住居址埋土土層

- |                |            |       |                                      |
|----------------|------------|-------|--------------------------------------|
| 1. 10YR2/1     | 黒色         | シルト質土 | 堅い、粘性少しあり、褐色シルト少量混入、酸化鉄を含む。          |
| 2. 10YR2/1     | 黒色         | シルト質土 | 堅い、粘性少しあり、2cm位の褐色シルトブロック少量混入、酸化鉄を含む。 |
| 3. 10YR1.7/1   | 黒色         | シルト質土 | 堅く締まる、粘性あり、褐色シルトのにじみあり、酸化鉄を含む。       |
| 4. 10YR1.7/1   | 黒色         | シルト質土 | 堅い、粘性あり、褐色シルト少量混入、酸化鉄を含む。            |
| 5. 10YR3/2~4/3 | 黒褐色~にぶい黄褐色 | シルト質土 | 堅く締まる、粘性あり、酸化鉄を含む。                   |
| 6. 10YR2/1     | 黒色         | シルト質土 | 堅く締まる、粘性あり、褐色シルトやや多い、酸化鉄を含む。         |
| 7. 10YR2/1     | 黒色         | シルト質土 | 堅い、粘性あり、2cm位の褐色シルトブロックが多く混入、酸化鉄を含む。  |
| 8. 10YR2/1     | 黒色         | シルト質土 | 堅い、粘性あり、褐色シルト少量混入、酸化鉄を含む。            |
| 9. 10YR2/1     | 黒色         | シルト質土 | 堅い、粘性なし、褐色シルト少量混入、酸化鉄を含む。            |
| 10. 10YR2/1    | 黒色         | シルト質土 | 粘性少しあり、褐色シルト少量混入。                    |
| 11. 10YR1.7/1  | 黒色         | シルト質土 | 粘性少しあり、褐色シルト少量混入。                    |

B-3 住居址カマド埋土土層

- |             |        |         |                                       |
|-------------|--------|---------|---------------------------------------|
| 1. 10YR2/1  | 黒色     | シルト質土   | 堅い、粘性なし、褐色シルト少量混入、酸化鉄を含む。             |
| 2. 10YR2/1  | 黒色     | 砂質シルト   | 堅い、粘性少しあり、酸化鉄・炭化物をわずかに混入、褐色シルトのにごりあり。 |
| 3. 10YR2/1  | 黒色     | シルト質土   | 粘性あり、褐色シルト多い、酸化鉄を少量混入。                |
| 4. 10YR4/4  | 褐色     | シルト質土   | 焼シルト・褐色シルトブロック混入。                     |
| 5. 5YR4/6   | 赤褐色    | シルト質土   | 焼けた褐色シルト多量に混入。                        |
| 6. 5YR4/3   | にぶい赤褐色 | 粘土質シルト  | やや堅い、粘性あり、黒色土のにごり少々あり。                |
| 7. 7.5YR2/3 | 極暗褐色   | シルト質土   | 堅い、土器片混入。                             |
| 8. 10YR2/1  | 黒色     | シルト質土   | 粘性少しある、7mm位の焼土ブロック少量混入。               |
| 9. 10YR2/1  | 黒色     | シルト質土   | 褐色シルトを多量に含む。                          |
| 10. 10YR2/1 | 黒色     | シルト質土   | 褐色シルトブロックのにじみあり、                      |
| 11.         |        | 砂質褐色シルト | 粘性あり。                                 |



第18図 B-3 住居址(遺物)



第に高くなって煙道部に続き、煙道部とは明瞭な段差がみられない。燃焼部焼土の分布範囲は焚口部より燃焼部中央付近に及んでいるが、右側袖部の方に若干偏している。煙道部底面は平坦でほぼ水平に近い。煙出部には若干の窪みが観察される。

〔遺物〕(第18図、P L 63B)

埋土内や床面直上で出土しているが、量的には多いものではない。種類としては土師器と須恵器そして土製紡錘車がある。土師器の器種は坏形土器と甕形土器があり、須恵器はカメのみである。

#### 土師器

**坏形土器**(19～21) 3個体が図化されたが完形となるものはない。すべてロクロ不使用成形のものである。体部外面に段または稜をもつ丸底であるが、内面に段や稜をもつもの(19・21)ともたないもの(20)がある。調整技法は口縁部ヨコナデ・一部ヘラミガキ、底部は摩滅で明確でないが、ヘラナデまたはヘラケズリである。内面はいずれもヘラミガキ後黒色処理されている。大きさでは大型のもの(20・21)と中型のもの(19)とがある。19・21は20に比較して深い型である。

**甕形土器**(22) 1個体が図化されている。全体的な器形では長胴型になるものと考えられるが、定かでない。底部周囲が若干突出している。調整技法は内外面ともにハケメを主体として、一部にヘラナデによる摩消がある。

#### 須恵器

破片が1ヶ出土している。拓本1011は甕の破片であるが、内外面ともにロクロナデをもつ。

#### その他

土製紡錘車(1221)が出土している。断面が截頭円錐形を呈し、中心部に貫通孔をもつものである。全面が良く研磨されて光沢をもつ。一部を欠損している。(高橋与右エ門)

### 7) B-5 住居址

〔遺構〕(第19図、P L 12)

本住居址は西側がC-2 溝跡・B-5 土坑と、東側でC-6 住居址-1 と重複し、重複する部分は不明である。重複遺構との新旧関係は重複するいずれの遺構よりも本住居址が古い。

規模は南北4.7mを測り、東西は不明である。壁高は0.25m～0.30mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。検出された部分より平面形は隅丸方形を呈するものと推定され、主軸は北-南方向にあり磁北よりやや西に偏している。埋土は暗褐色や黒褐色を呈するシルト質の粘土や粘土質のシルトで構成されており、混入物や色調の変化によって6層に細分された。混入物としては全体的に微量の炭化物粒が観察され、さらに埋土最下層には粒径10cm～15cm位の円礫が若干混入している。本住居址は掘方を有しており、黒色や褐色を呈するシルト

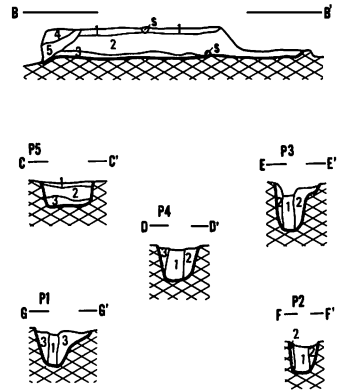
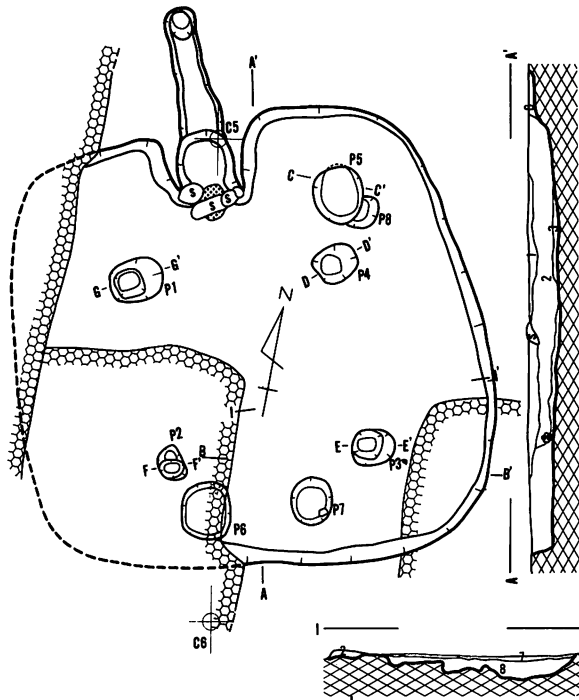
で掘方を0.10m～0.20m位埋め戻して床を構築し、さらに褐色のシルトを0.5cm～2cm位貼って床面としている。床面には若干の起伏がみられるが、ほぼ平坦であり水平に近い。掘方の深さは壁に寄るほど深く約0.20m、中央部が0.10m位である。掘方の埋土を全て除去した底面の状態は、起伏が大きく無数の掘り起こし工具痕を残している。壁溝は検出されていない。

本住居址の範囲内でP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>までの土坑が検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の規模は、径0.40m位で深さ0.40m位である。P<sub>5</sub>～P<sub>8</sub>までは径0.32m～0.60mまでとそれぞれによって若干差がある。平面形はいずれも円形または楕円形を呈する。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の埋土はシルト質の粘土や粘土質のシルト、P<sub>5</sub>～P<sub>8</sub>はシルトやシルト質の粘土で構成され、色調は黒色・黒褐色・暗褐色を呈している。色調や混入物の種類と程度等によって何層かに細分されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>には柱痕跡が観察され、それによれば柱は径10cm位の円柱と推定され、坑底に達している。P<sub>5</sub>～P<sub>8</sub>は柱痕跡もなく、土層もほぼ平面的に堆積している。P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>の埋土内には土師器の小破片が混入していた。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は規模・埋土・位置より考えて、本住居址に伴う柱穴を構成している。P<sub>5</sub>～P<sub>8</sub>は貼床下の掘方埋土上面で検出されていることから、本住居址に伴うピットと考えられるが性格は不明である。

カマドは北壁で検出され、ほぼ壁中央に位置しているものと推定される。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部に限られ、天井部は検出されていない。袖部は基底部分に若干の地山層を残し、その上に黒褐色を呈するシルト質の粘土を貼り付けて構築している。左右袖部の焚口付近には粒径30cm×20cm位の円礫が、縦位で各1ヶ全長のまほだ埋め込まれている。また焚口部床面にも粒径45cm×20cmの長い円礫が1ヶ左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの円礫によって構成され、「冂」状に組まれていたものと推定される。燃烧部は若干掘り窪められているが、焚口部構成礫の位置より奥壁に向かって次第に高くなって煙道部に続き、煙道部とは明瞭な段差はみられない。カマドには並列して2ヶの土師器甕形土器が埋設されており、焚口部に向かって横転していた。埋設土器の大きさは左側で口径18.7cm・器高31.5cmであり、右側は底部と口縁部を欠失しているが胴部径16.0cm・現存器高21.5cmである。左側埋設土器の下には粒径7cm×15cmの円礫が縦位でまほだ埋め込まれ、支脚とされていた。燃烧部焼土は焚口部付近に多くみられ、支脚の付近にはほとんどみられない。煙道部底面は平坦でほぼ水平である。煙出部には浅い窪みがある。

〔遺物〕(第20・21・22図、P L 64・65・66A)

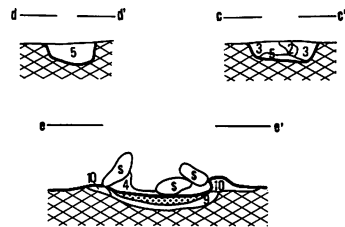
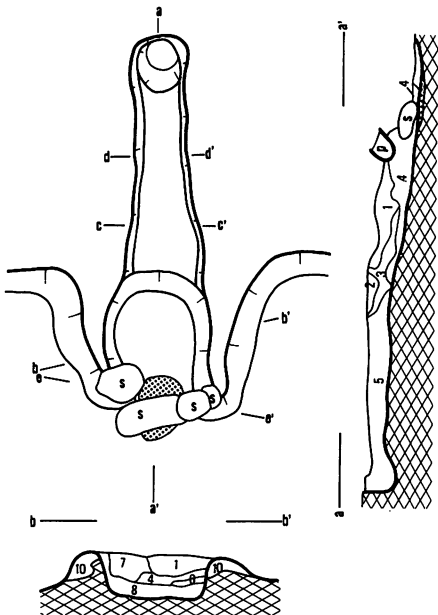
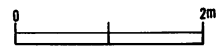
床面直上や埋土内で数多く出土しているが、その中でもカマドの右側床面での出土が多い。種類は土師器・須恵器・鉄製品・土製品が含まれているが、数量的には土師器が主体を占めている。器種としては坏形土器・高坏形土器・甕形土器・鉢形土器・甌形土器・紡錘車・勾玉・鏝がある。



B-5 住居址ピット計測値

長径×短径 深さ

- P<sub>1</sub> 55cm×42cm 40cm
- P<sub>2</sub> 35cm×24cm 35cm
- P<sub>3</sub> 45cm×36cm 49cm
- P<sub>4</sub> 44cm×36cm 38cm
- P<sub>5</sub> 60cm×50cm 26cm
- P<sub>6</sub> 58cm×51cm 20cm
- P<sub>7</sub> 48cm×40cm 25cm
- P<sub>8</sub> 32cm×? 7cm



B-5 住居址ピット埋土層

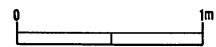
1. 10YR2/2 黒褐色 粘土 軟らかく締まりがない、粘性あり、褐色シルトを微量に含む。
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト質粘土 やや強く締まっている、粘性あり、褐色シルトに富む。
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 やや締まっている、粘性あり。

B-5 住居址埋土層

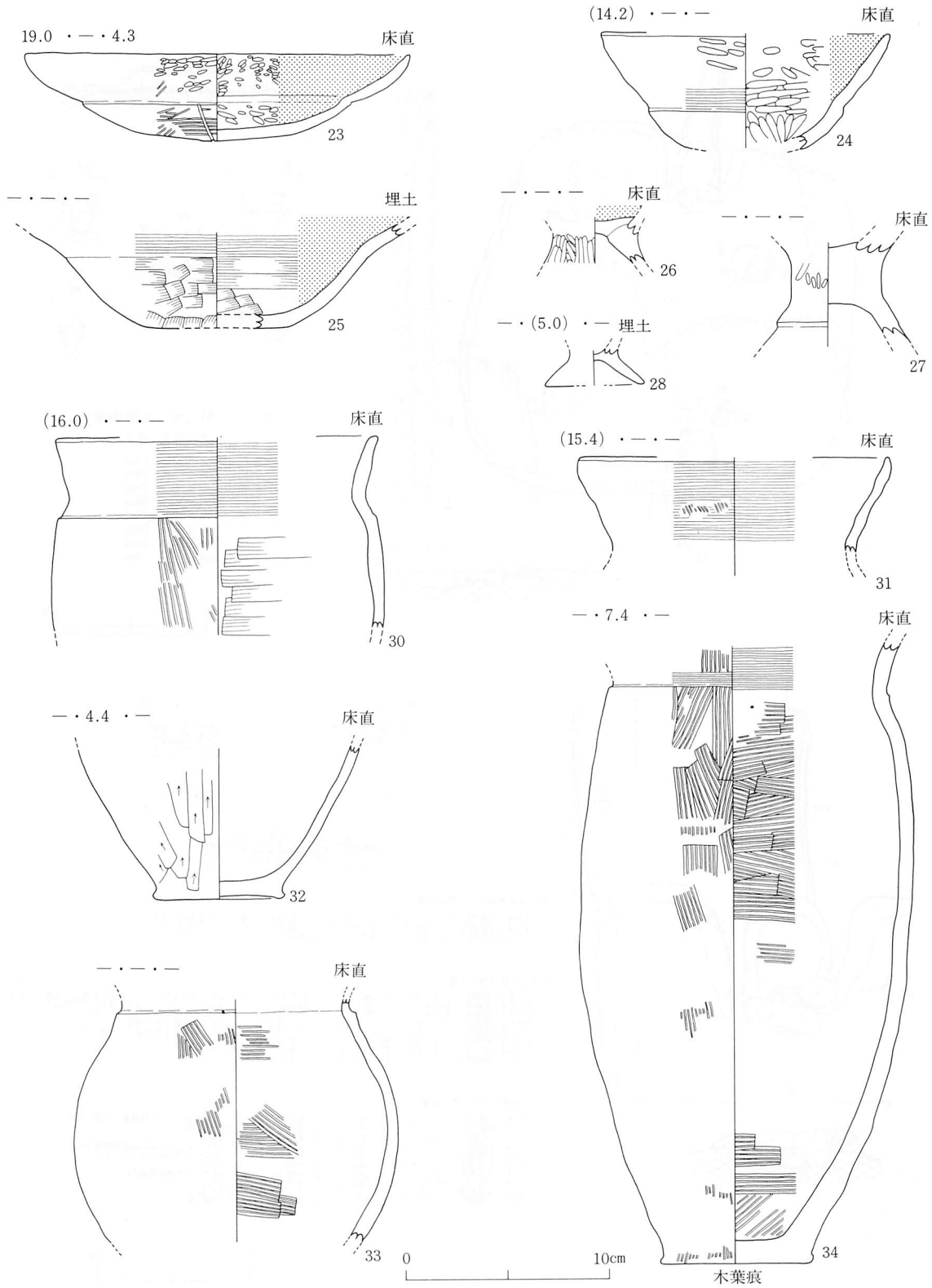
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性ほとんどなし、褐色シルト小ブロック・酸化鉄の斑点・水礫を少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性ほとんどなし、褐色シルトブロックを多く含む、炭化物混入。
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト質シルト やや強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となるが少しさらさらしている)。
4. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 非常に強く締まっている、粘性ほとんどなし、酸化鉄が多く混入。
5. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 非常に強く締まっている、粘性ほとんどなし、酸化鉄が多く混入、4層よりざらつく。
6. 10YR3/3 暗褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性なし。
7. 10YR7/1 黒色 シルト質土 強く締まり粘性あり、褐色と黒色の混合。
8. 5YR2/1 極暗褐色 シルト質土 軟らかめに締まり、土層片・焼土炭混入。

B-5 住居址カマド埋土層

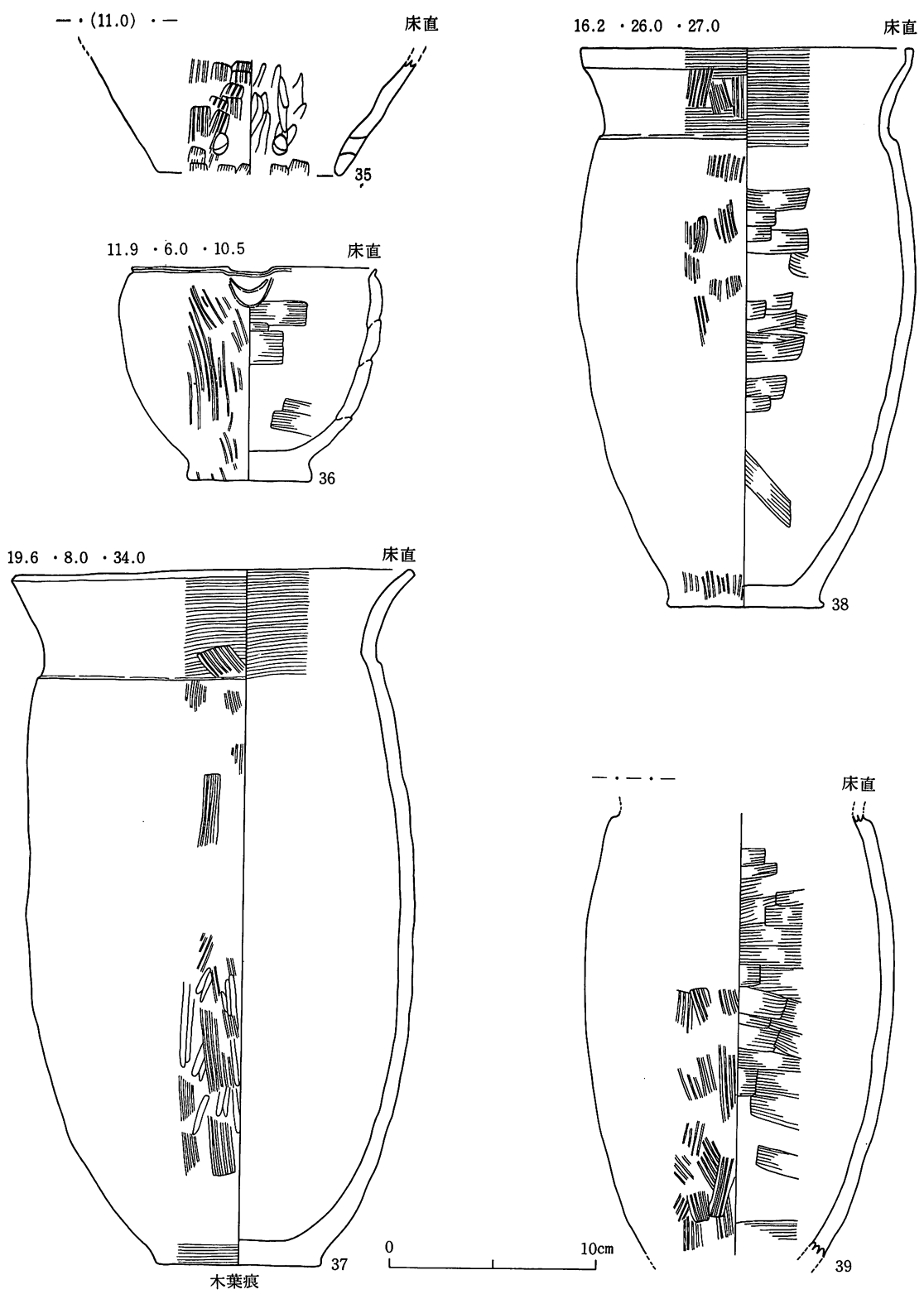
1. 10YR4/4 褐色 シルト質土 強く締まっている、粘性ほとんどなし、焼土粒少々、炭化物微量、小骨を含む。
2. 7.5YR4/3 褐色 シルト質土 強く締まっている、粘性なし、焼土の塊が多く混入。
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト質土 強く締まっている、粘性なし、焼土粒を混入。
4. 10YR2/3 黒褐色 シルト質土 強く締まっている、粘性なし、焼土の小ブロック少量と炭化物微量含む。
5. 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性なし、炭土質炭化物が全体に散らばっている。
6. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)。
7. 10YR2/2 黒褐色 シルト質土 強く締まっている、粘性なし、シルト・焼土・炭化物を微量含む。
8. 10YR2/1 黒色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)。
9. 5YR3/3 明赤褐色 粘土質シルト やや強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)。
10. 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性なし、炭化物を少量含む。



第19図 B-5 住居址(遺構)



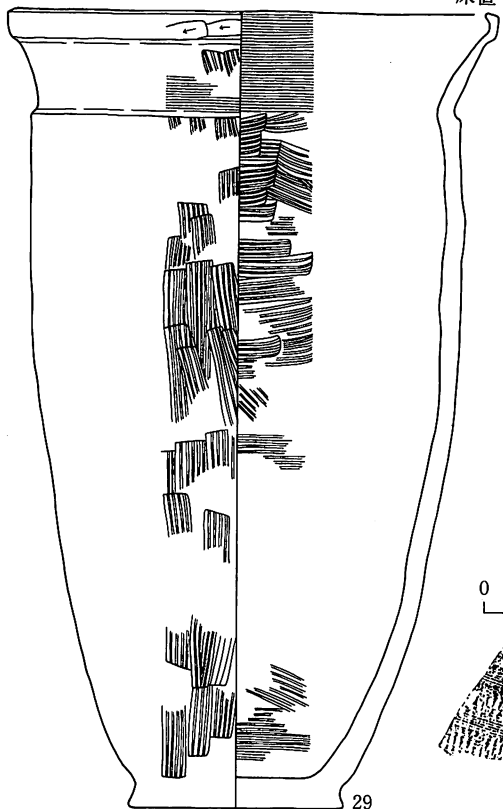
第20図 B-5 住居址(遺物-I)



第21図 B-5 住居址(遺物-2)

19.7 · 8.6 · 31.5

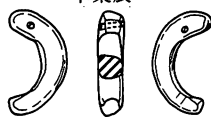
床直



29

木葉痕

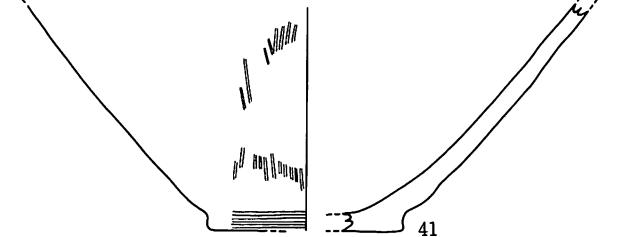
煙出部



1203

· (8.0) ·

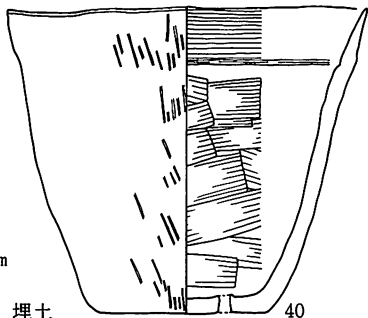
床直



41

14.4 · 6.6 · 12.3

床直



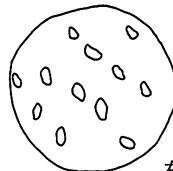
40

0 10cm

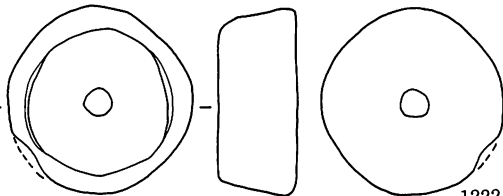
埋土



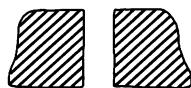
1012



右側袖部右脇貯藏穴

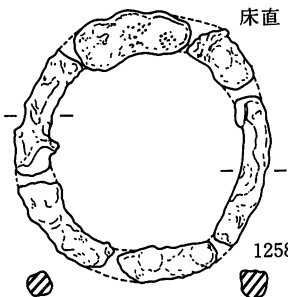


1222



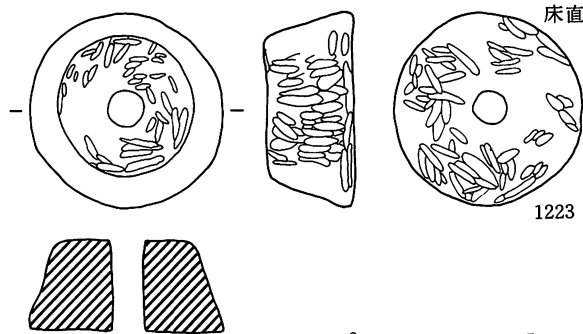
埋土

1257



床直

1258



床直

1223

0 5cm

第22図 B-5 住居址(遺物-3)

## 土師器

**坏形土器**(23~25) 破片では他にもみられるが図化できたのは3ヶのみで、すべてロクロ未使用成形のものである。23は完形である。23・24は体部の内外面に段や稜をもつ丸底のものである。25は内外面に軽い稜をもち、平底風のものである。口縁部は体部の段や稜でほぼ直線的に外反するもの(24・25)と外反した後内弯するもの(23)がある。調整技法は口縁部外面ヨコナデのみ(25)・ヨコナデ後一部ミガキ(24)・ミガキのみのもの(23)があり、底部はハケメのもの(23)・ヘラナデのもの(24)がある。内面はミガキのもの(23・24)と口縁部にヨコナデを残すもの(25)がある。これらの土器はすべて内面が黒色処理されている。大きさでは大型のもの(23・25)とやや小型のもの(24)があり、器高も浅いもの(23)と深いもの(24・25)がある。

**高坏形土器**(26・27・28) 3ヶ出土しているが、すべてロクロ未使用成形のものである。完形のものはなく、すべて破片で脚部のみが残存し、坏部はない。残存部からみると大型(27)と中型(26)・小型(28)があるらしい。調整技法は外面ヘラミガキで、内部は明確でないがヘラナデとおもわれる。26の脚部外面は黒色処理をされている。坏部内面は明確でないが黒色処理されていたらしい。

**甕形土器**(29~34・37~39・41) すべてロクロ未使用成形のもので、10ヶが図化されている。その中で29・34・37・38はほぼ完形または完形である。全体的な器形では長胴型(29・30・31・32・34・37・38・39)と球胴型(33・41)があり、長胴型は体部最大径を中央部~肩部にもち、口縁部径とほぼ同じか、それより径が小さい。球胴型のもの完形のものがないので不明である。大きさでは、完形のものすべて大型で(29・34・37・38)、その中で38は若干小さめである。完形ではないが39は38とほぼ同じ位の大きさであろう。球胴型では大型(41)と中型(33)のものがある。どの個体も頸部に段をもち、口縁部は外反するもの(30・31・37)と外反後内弯するもの(29・38)がある。口唇は丸味をもつもの(30・31)と平坦なもの(37・38・29)がある。底部周囲に突出をもつもの(29・32・34・38)ととまないもの(37・41)があり、底面はナデのもの(32・38・41)と木葉痕をもつもの(29・34・37)がある。調整技法はどの個体も大同小異であるが、口縁部外面ヨコナデ一部ハケメやケズリで内面ヨコナデ、体部外面はハケメが主体でその後ヘラナデ、内面はハケメやヘラナデである。その中で32は体部外面がヘラケズリである。

**鉢形土器**(36) ロクロ未使用成形のものが1ヶ出土し、口縁には片口がついている。体部上半に最大径をもち、体部径より器高が小さい。全体的な器形は球胴型で口唇が先細りとなり小さく外反している。底部周囲は若干突出し、底面には木葉痕がついている。調整技法は体部外面粗いハケメで内面はヘラナデで、積上げ痕を残している。

**甌形土器**(35・40) ロクロ未使用成形のもので、無底型1ヶ、多孔型1ヶが出土し、多孔型

の40は完形である。35は胴部下半の小破片であるが、下端寄りに貫通孔を1ヶもつ。全体的な器形は甕形土器の底部を除去した形であろう。調整技法は外面ハケメ一部ヘラナデ、内面ミガキである。40は鉢形土器の底面に12ヶの貫通孔をもつものである。頸部付近に軽い稜線をもち、口縁部は先細りとなって口唇に続き、口唇は尖っている。最大径を口縁部にもつ。調整技法は外面粗いハケメ、内面は口縁部ヨコナデで胴部ヘラナデである。

#### 須恵器

大甕の体部破片が1ヶ出土している。1012は外面平行タタキ目後カキメ、内面同心円文をもつものである。

#### その他

**土製品** (1203・1222・1223) 2ヶの紡錘車と1ヶの勾玉が出土している。紡錘車は断面形が截頭円錐形のもので1223は全面にミガキが入っている。勾玉は断面円形で平面形がC字形のもので、全面ミガキで黒色処理されている。

**鉄製品** (1257・1258) 1257は断面扁平であるが器種は不明である。1258は断面円形で、平面形も円形であり、いわゆる鑲である。 (高橋与右エ門)

### 8) B-6住居址

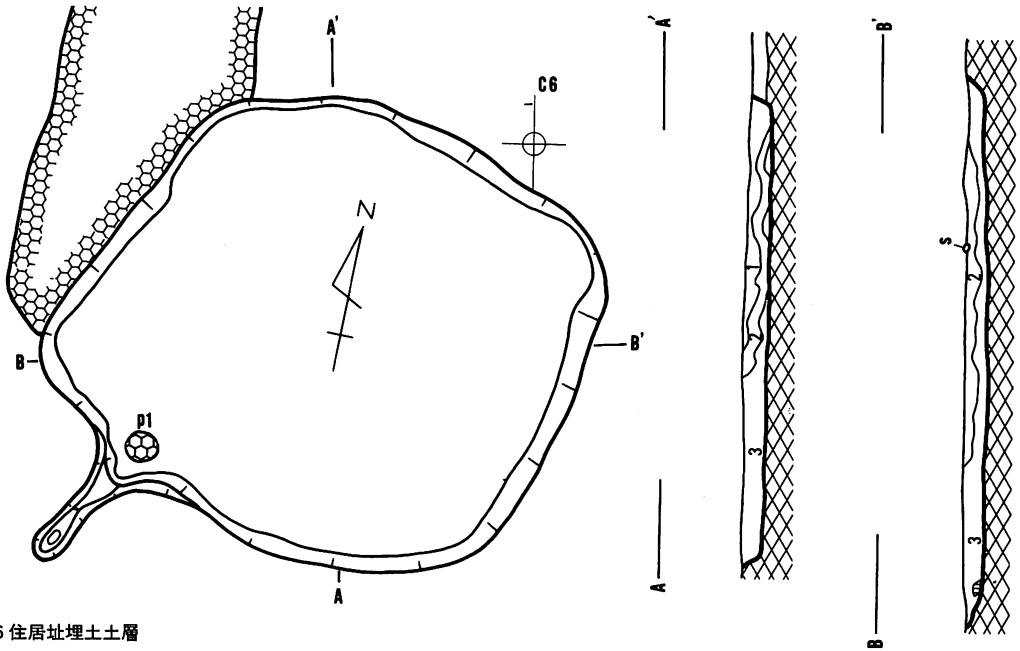
[遺構] (第23図、P L 13A)

本住居址は西側部分でB-6土坑・C-2溝跡、北側部分でB-5土坑と重複しているが、遺構検出時の土層変化で全体が把握された。重複遺構との新旧関係は重複するいずれの遺構よりも新しい。

規模は南北3.8m・東西3.6mで、壁高は0.15mである。壁は床面に対して120度の角度を示している。平面形は主軸に対して縦長の長方形に近い胴張隅丸の略方形を呈している。主軸は南-北方向にあり磁北に対して150度西に偏している。埋土は暗褐色や黒褐色を呈する粘土質シルトで構成され、混入物や色調によって3層に細分されているが、どの層も極端な差はない。全体的に水酸化鉄の集積や褐色を呈するシルト粒の混入がみられ、良く締まっていて固い。床はB-6土坑やB-5土坑の埋土である黒褐色のシルトで構築され、貼床はみられない。床面はほぼ平坦であるが、西壁に寄るほど床面レベルが低くなる傾向がみられ、7cmの高低差を測る。壁溝は検出されていない。

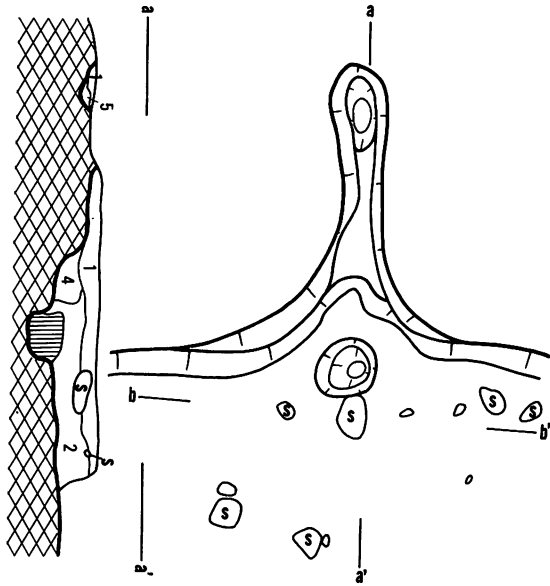
本住居址の床面で検出された土坑はP<sub>1</sub>のみである。検出された位置がカマド燃焼部内であることから、カマド支脚石抜き取り痕かとも考えられるが、本土坑の埋土は黒色のシルト質粘土で、当住居址の埋土内に盛り上がり検出されていることから、本住居址より新しい土坑と考えるのが妥当であろう。柱穴と考えられる土坑は検出されていない。





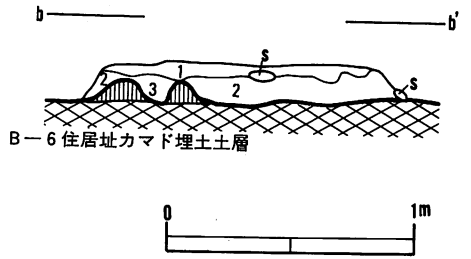
B-6 住居址埋土層

1. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)、酸化鉄の斑点を多く含む、褐色のシルトのブロック少ない。
2. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 非常に強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)、酸化鉄を少量含む、褐色シルトのブロックに富む。
3. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に強く締まっている、粘性あり(1・2層よりボンボンしている)、酸化鉄・褐色シルトブロックは1・2層より少ない。



B-6 住居址ピット計測値

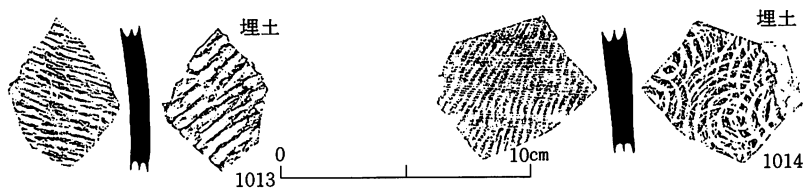
長径×短径 深さ  
P<sub>1</sub> 26cm×22cm 6cm



B-6 住居址カマド埋土土層

1. 10YR2/3 黒褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性ほとんどなし、酸化鉄の斑点を含む、炭化物小片をわずかに含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)、酸化鉄の斑点少量と炭化物小片をわずかに含む。
3. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)、酸化鉄の斑点少量と炭化物小片をわずかに含む。
4. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)、酸化鉄を少量含む。
5. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 地山

第23図 B-6 住居址(遺構)



第24図 B-6 住居址(遺物)

カマドは南壁で検出され、壁中央より0.75m西に寄って位置している。検出された部分は煙道部のみであり、袖部や燃焼部・天井部ともに検出されていない。煙道部と床面とは段差がなく、煙道部底面はほぼ平坦であるが煙出部に向かって若干上がり勾配を示し、煙出部には窪みがある。

〔遺物〕(第24図、P L 66 B)

埋土全層を通じて出土しているが、全て小破片のみであり、図化されたものはない。床面直上でも若干の破片が出土しているものの、器種を知る程度の小破片である。種類としては土師器と須恵器が混在している。器種では坏形土器と甕形土器のみである。

#### 土師器

すべてロクロ使用成形のもので坏形土器と甕形土器がある。坏形土器は内面ミガキ後黒色処理で底部切り離しは回転糸切り無調整の様である。甕形土器は口縁部が大きく外反し、口唇は挽き出しによって縁帯状を呈する。調整技法は体部にヘラケズリが入るらしい。

#### 須恵器

器種として坏形土器と甕形土器があるが、いずれも小破片である。坏形土器の底部切り離しは回転糸切り無調整のものである。甕形土器は、1013は内外面とも平行タタキ目をもつもので、1014は外面平行タタキ目内面同心円文のものである。(高橋与右エ門)

### 9) B-7 住居址

〔遺構〕(第25図、P L 13 B)

本住居址は西側部分が調査区域外に延びていたり、南の部分がB-7溝跡と重複しているので、全体が把握されていない。B-7溝跡との新旧関係は本住居址の方が古い。

規模は南北5.7mを測り、東西は不明である。壁高は0.25mを測り、壁は床面に対して115度の角度を示している。平面形は胴張隅丸方形を呈するものと推定される。主軸は北西-南東方向にあり磁北に対して25度西に偏している。埋土は黒褐色を呈するシルトの単層で構成されている。混入物としては埋土下位層に粒径10cm~20cm位の円礫が多く観察されたが、床面に接している場合は少なかった。また、全体的に炭化物の混入が多く、特に床面直上や埋土最下層に

は多くの炭化材が検出された。炭化材の大きさは巾5cm～10cm・長さ10cm～100cmまで種々計測されたが、巾10cm内外・長さ50cm内外を測るものがもっとも多い。炭化物の配列状態には規則性がみられず散乱していたことから、上家構造までは想定されなかった。以上の様なことから本住居址は焼失したものと考えられる。床は地山の黒褐色を呈するシルトによって構築されているが、0.5cm位の貼床をして床面としている。床面は締って固く、平坦でほぼ水平に近い。また、床面の一部に焼成を受けた痕跡が観察されたが、これは本住居址が焼失したことに起因するものであろう。壁溝は検出されていない。

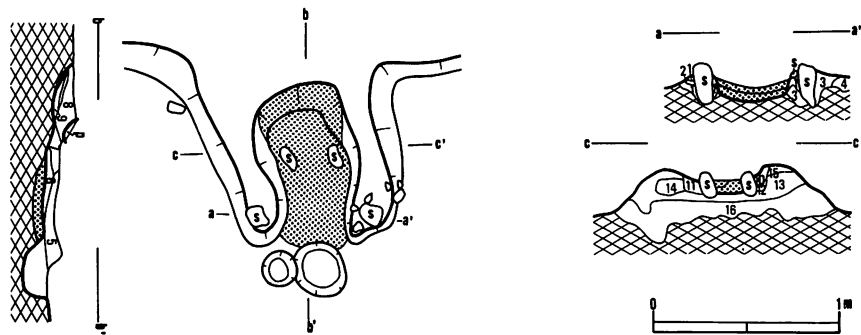
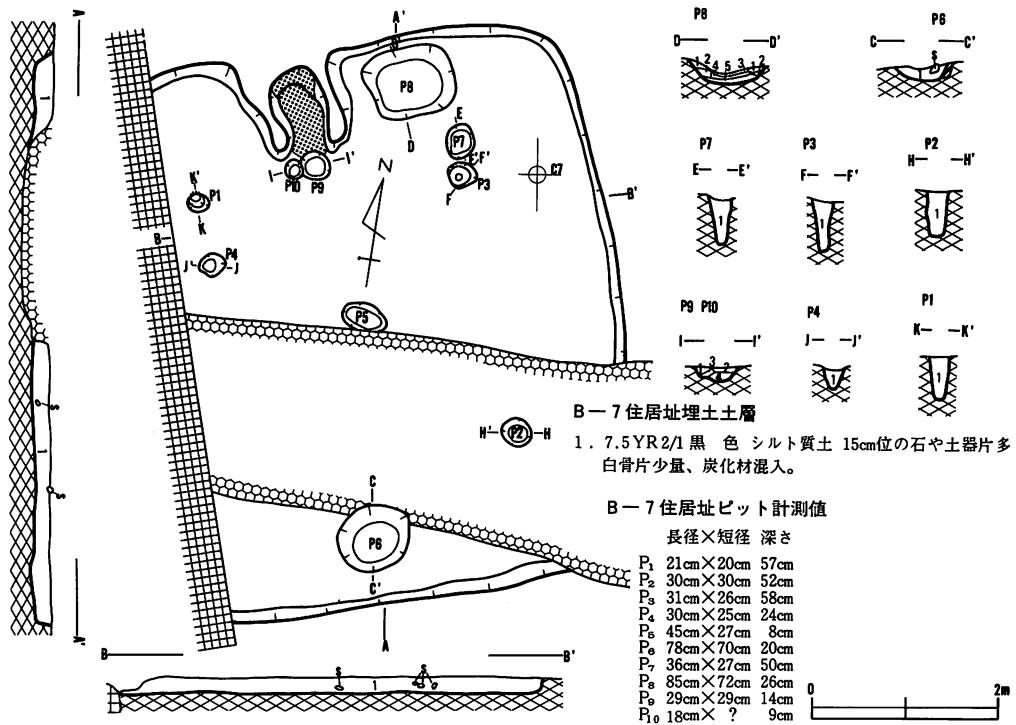
本住居址の床面でP<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>までの土坑が検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の規模は径0.30m・深さ0.50m位を測り、ほぼ対角線上に位置している。P<sub>4</sub>～P<sub>11</sub>までは規模に差があり、形状も隅丸方形(P<sub>8</sub>)や円形もしくは楕円形を呈する。埋土は粘土質シルトで構成され、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>7</sub>は単層、他は何層かに細分されている。色調は黒褐色や黒色を呈している。P<sub>8</sub>の埋土内には多くの炭化物や焼土が混入していたが他の土坑では観察されていない。どの土坑も柱痕跡は確認していない。性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は位置や規模から本住居址の柱穴を構成しているものと考えられ、南西部の柱穴は調査区域外に位置しているものと推定される。P<sub>8</sub>は規模・形態・埋土・位置から本住居址に伴う貯蔵穴であろうと考えられる。他の土坑はP<sub>8</sub>を除くと、規模・形態ともに柱穴状を呈しているが、対応関係は不明である。

カマドは北壁で検出され、ほぼ壁中央に位置するものと推定される。検出された部分は袖部と燃烧部のみであり、天井部と煙道部は検出されていない。袖部は床面上に黒褐色を呈するシルトを貼り付けて構築している。左右袖部の焚口部分には、上部を欠失した現存粒径20cm×10cmの細長い円礫が縦位で15cmほど埋め込まれていた。他の住居址で観察された焚口部横架礫は検出されていない。燃烧部は掘り窪めもみられず、奥壁に向かって緩やかな上がり勾配を示している。燃烧部焼土は燃烧部全面に亘って観察される。燃烧部中央やや奥には粒径15cm×15cmの円礫が2ヶ並列でまほど埋め込まれ、支脚としていた。カマド埋設土器は検出されていない。  
〔遺物〕(第26・27図、P L 66C・67)

床面直上での出土が多く、埋土内での出土は少ない。床面直上でもカマド付近での出土が多い。遺物の種類は土師器・須恵器・土製品が含まれている。器種では坏形土器・甕形土器・小型土器・紡錘車がある。

### 土師器

坏形土器(42・43) 破片では他にも出土しているが図化されたのは2ヶのみである。いずれもロクロ未使用成形で、体部内外面に段や稜をもつものであるが、43は外面の段も軽く内面には軽い稜をもつ。口縁部は体部段の位置より外反し後内弯気味に口唇へ移行している。大きさは大型(42)と小型(43)があり、器高も高いもの(42)と低いもの(43)がある。調整技法は、口



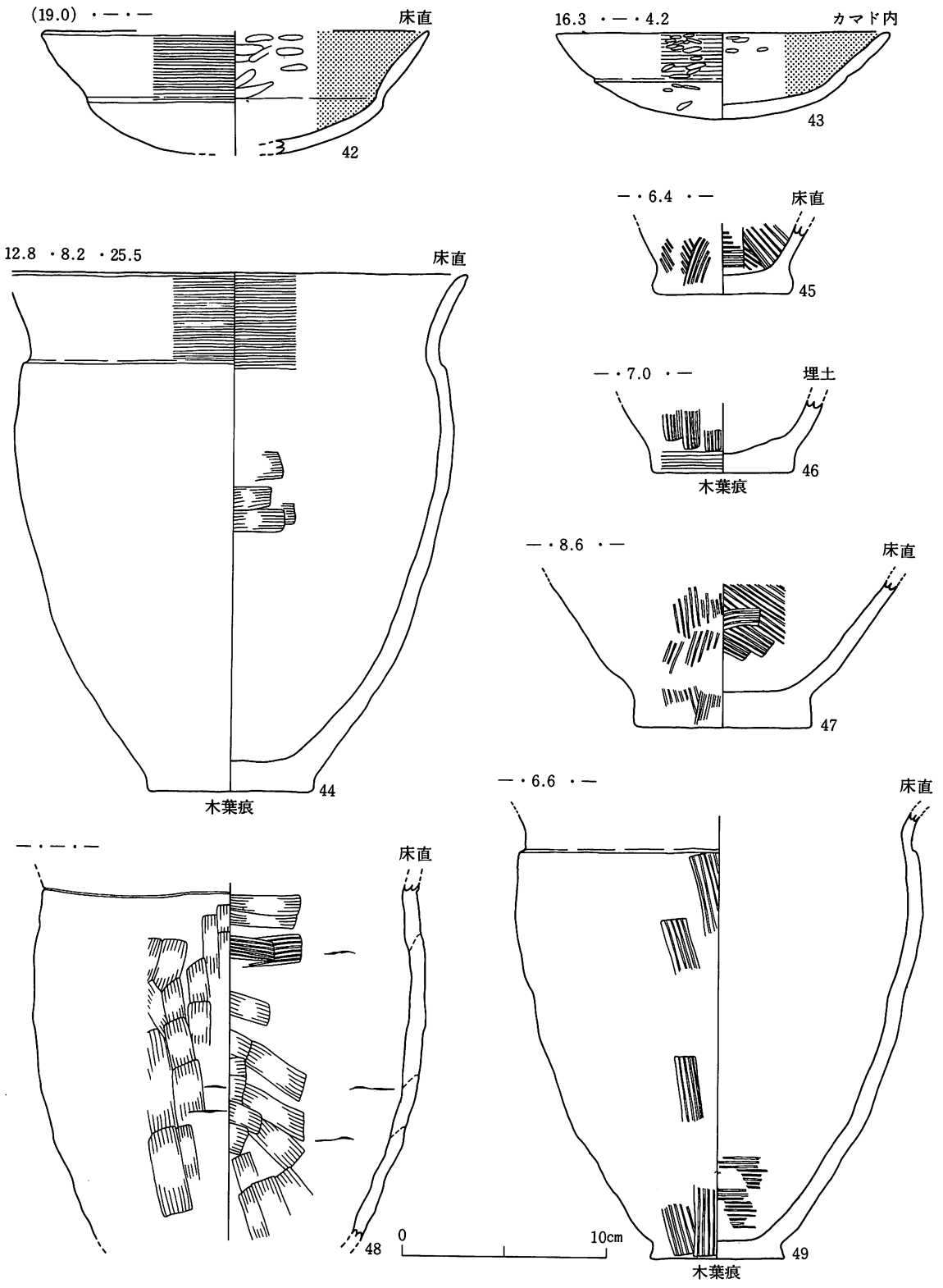
**B-7 住居址ピット埋土土層**

P <sub>1</sub> 、P <sub>3</sub> 、P <sub>4</sub>	—1. 10YR1.7/1 黒色粘土質	やや堅めに締まる、粘性あり、炭化物少量と褐色シルトが全体に混入、酸化鉄が多い。
P <sub>2</sub>	—1. 10YR2/1 黒色粘土質	粘性あり、褐色シルトのにじみあり、炭化材少量混入。
P <sub>6</sub>	—1. 10YR2/1 黒色粘土質	軟らかく締まる、炭化物全体に混入、褐色シルトブロックあり。
P <sub>7</sub>	—1. 10YR2/2 黒褐色粘土質	粘性あり、炭粒が多く入る。
P <sub>8</sub>	—1. 10YR2/2 黒褐色シルト質土	強い、粘性あり、褐色シルト混入。
	2. 10YR3/2 黒褐色粘土質	堅めに締まる、粘性あり、褐色シルトのにごりあり。
	3. 10YR2/1 黒色粘土質	堅めに締まる、粘性あり、炭化物多量に混入。
	4. 10YR2/1 黒色粘土質	締まる、粘性あり、5mm以下の暗褐色シルト粒が多量に混入。
	5. 10YR2/1 黒色粘土質	軟らかめに締まる、粘性あり。
P <sub>9</sub> 、P <sub>10</sub>	—1. 7.5YR2/1 黒色シルト質土	軟らかめに締まる、粘性あり、炭化物多量に混入、褐色シルト少々含む。
	2. 7.5YR2/1 黒色シルト質土	軟らかめに締まる、粘性あり、炭化物・焼土粒多量に混入、褐色シルトのにごりあり。
	3. 7.5YR2/1 黒色粘土質	軟らかめに締まる、粘性あり、褐色シルト多量に混入。
	4. 10YR2/1 黒色粘土質	軟らかく締まる、粘性あり、褐色シルト・焼土・炭化材の混合。

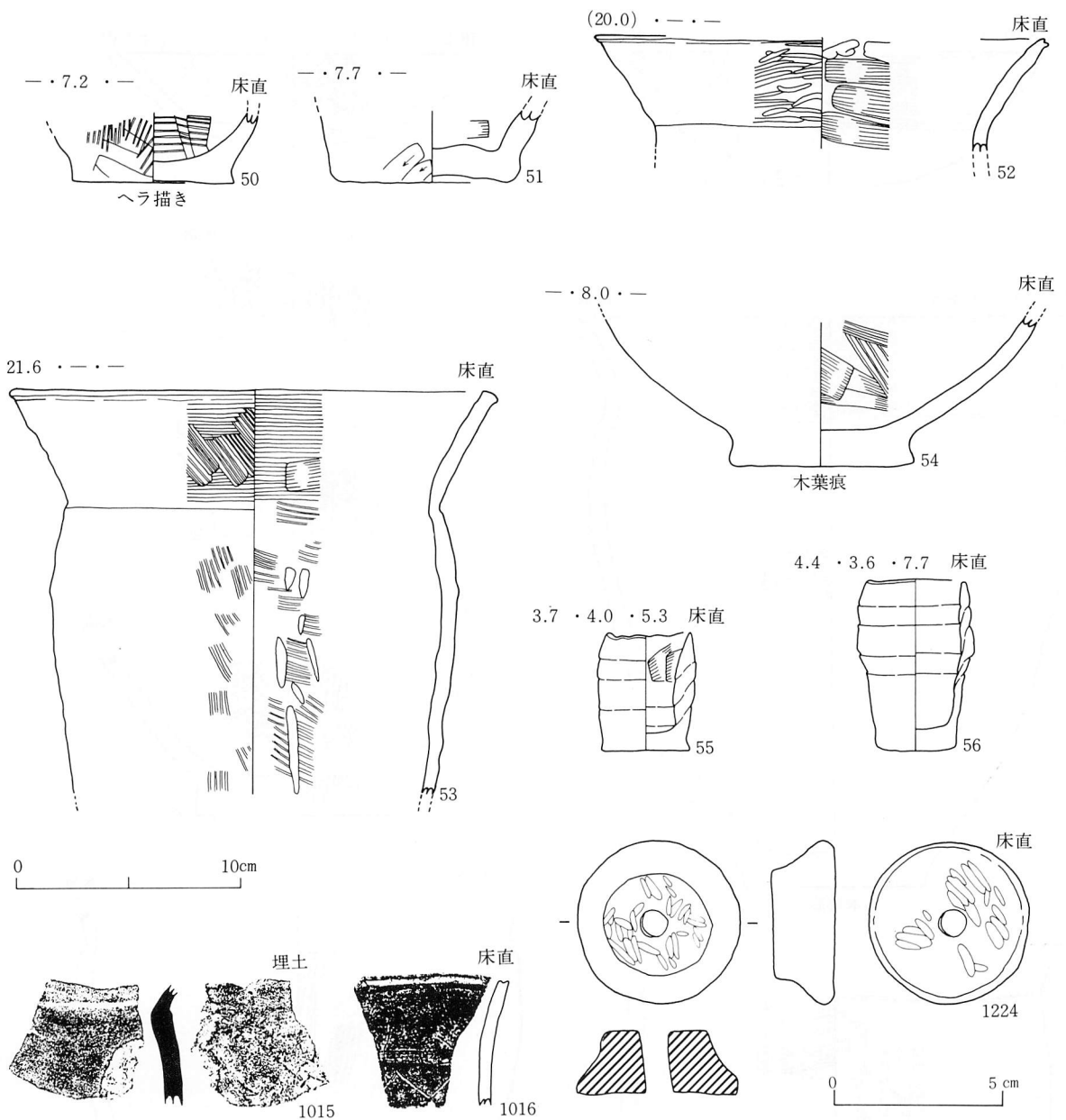
**B-7 住居址カマド埋土土層**

1.	7.5YR3/2 黒褐色	堅めに締まる、粘性あり、焼骨と15mm位の焼土粒が多く入る。
2.		炭の多く入った層。
3.	5YR2/1 黒褐色粘土質	軟らかめに締まる、粘性あり、焼土のにごり、炭化材、骨など少量混入。
4.	7.5YR4/3 黒褐色色	軟らかめに締まる、粘性あり。
5.	7.5YR2/1 黒褐色色	軟らかめに締まる、粘性あり、焼土粒、炭化材あり。
6.	10YR2/2 黒褐色粘土質	軟らかめに締まる、粘性あり、灰、炭化物、焼土を多く混入。
7.	5YR2/3 暗褐色シルト質土	軟らかく締まる、粘性大、焼土を多量に混入。
8.	5YR2/2 黒褐色色	強い、粘性あり、炭化物含む、全体に赤味を帯びる。
9.	5YR1.7/1 黒褐色色	軟らかく締まる、焼土のにじみをもつ黒色土、焼骨多く混入。
10.	5YR2/1 黒褐色シルト質土	強く締まる、粘性あり、炭化材混入。
11.	7.5YR2/2 黒褐色色	軟らかく締まる、炭化材と焼土が多く混入。
12.	5YR2/2 黒褐色色	強く締まる、粘性あり、焼土塊が多量に混入。
13.	7.5YR2/1 黒褐色色	強く締まる、粘性あり、焼土、炭化物少々混入。
14.	5YR2/1 黒褐色色	強く締まる、粘性あり、10mm位の焼土粒が多く混入。
15.	7.5YR2/2 黒褐色色	強い、粘性少しあり。
16.	7.5YR2/1 黒褐色色	強い、粘性あり、B層より緻密、焼土、炭化物少々混入。

第25図、B-7 住居址(遺構)



第26図 B-7住居址(遺物一I)



第27図 B-7住居址(遺物-2)

縁部外面ヨコナデー部ミガキで底部は明瞭でないが、ナデかミガキである。内面は全面ミガキ後黒色処理されている。

**甕形土器**(44~54) すべてロクロ未使用成形のもので、11ヶが図化された。その中で44は完形である。全体的な器形では長胴型のもの(53)、やや胴が膨らむもの(44・48・49)、球胴型の

もの(54)がある。大きさは大型のものと小型のものがあるらしい。いずれも頸部に段をもち、口縁部は段の位置で外反している。口唇部は丸味をもつもの(44)と平坦なもの(53)や平坦になでられ更に沈線をもつもの(52)がある。底部の周囲は突出するもの(45・48・50・54)と突出しないもの(44・47)があり、底面は木葉痕をもつもの(44・46・49・54)とヘラ描きによる沈線をもつもの(50)やヘラナデ無文のもの(45・47・51)等がある。調整技法は、口縁部は内外面ともヨコナデで一部に外面ハケメ(53)やミガキ(52)をもつものがある。体部外面はハケメが主体で後ナデやミガキでハケメを消している。48はヘラナデで他と差がある。内面ハケメまたはヘラナデである。1016は頸部に鋸歯状の沈線が付されたものである。

**小型土器**(55・56) ロクロ未使用成形のもので、体部に粘土紐の巻き上げ痕を明瞭に残している。55・56ともにほぼ同形であるが、55は56より器高が若干低い。

#### 須恵器

大甕の破片が1ヶ出土している。1015は表裏ともにロクロナデの痕跡を残している頸部より肩部にかけての破片である。

#### その他

**土製品**(1224) 断面形が截頭円錐形に近似する紡錘車で、中心部に貫通孔を1ヶもつ。上面と下面にはミガキが入り光沢をもつ。  
(高橋与右エ門)

### 10) C-1 住居址

〔遺構〕(第28図、P L 14A)

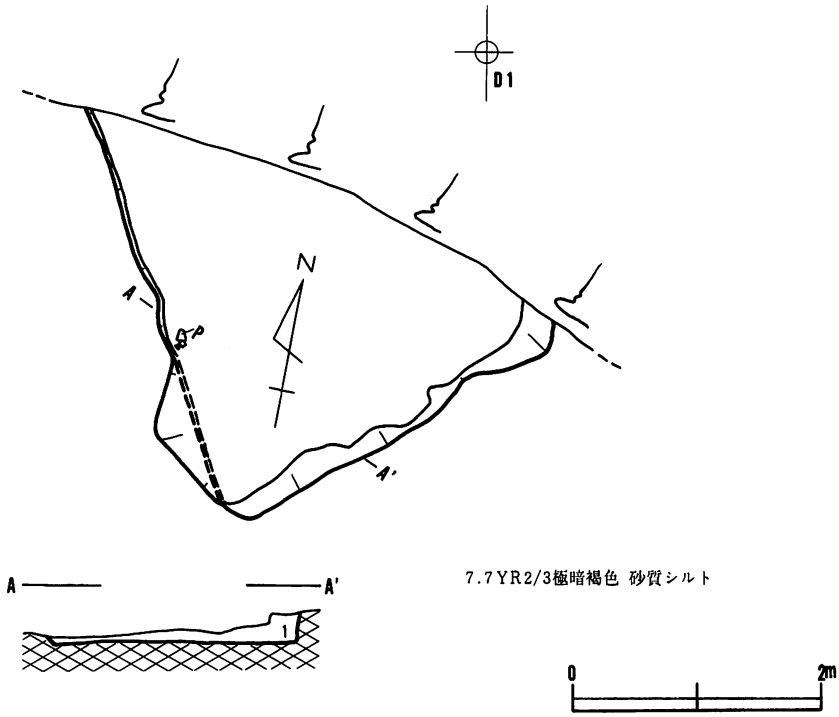
本住居址はC-1土坑やC-2溝跡と重複し、さらに北側部分が段丘崖に延びているのでこれらの部分は不明である。重複遺構との新旧関係は、重複するいずれの遺構よりも本住居址が古い。

全体規模は不明であるが、西壁部分3.4m・南壁部分3.0mが検出されている。壁高は高い位置で0.20mを測り、壁は床面に対して120度の角度を示している。平面形は方形を呈するものと推定される。主軸方向は不明であるが、西壁が磁北に対して30度西に偏している。埋土は黒褐色を呈するシルトの単層で構成されており、全体的に少量の炭化物が混入している。床は地山の褐色を呈するシルトで構築され、貼床は観察されない。床面は平坦でほぼ水平に近く、良く締まり固い。壁溝・土坑・カマドともに検出されていない。

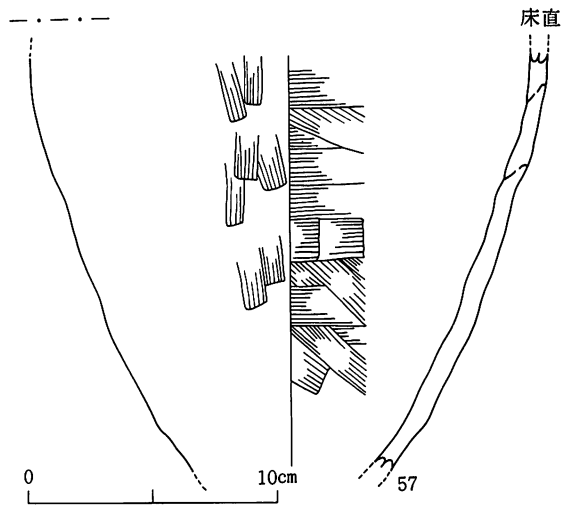
〔遺物〕(第29図、P L 68A)

出土数が少なく、それもほとんどが小破片であり、図化されたものは1ヶのみである。種類は土師器のみで、器種は甕形土器である。

**甕形土器**(57) ロクロ未使用成形のもので、底部や胴部上半を欠失している。胴部が若干膨



第28図 C-I 住居址(遺構)



第29図 C-I 住居址(遺物)



らむ型であろうと推定される。大きさは大型に入るであろう。調整技法は内外面ともにヘラナデである。

(高橋与右エ門)

## 11) C-2 住居址

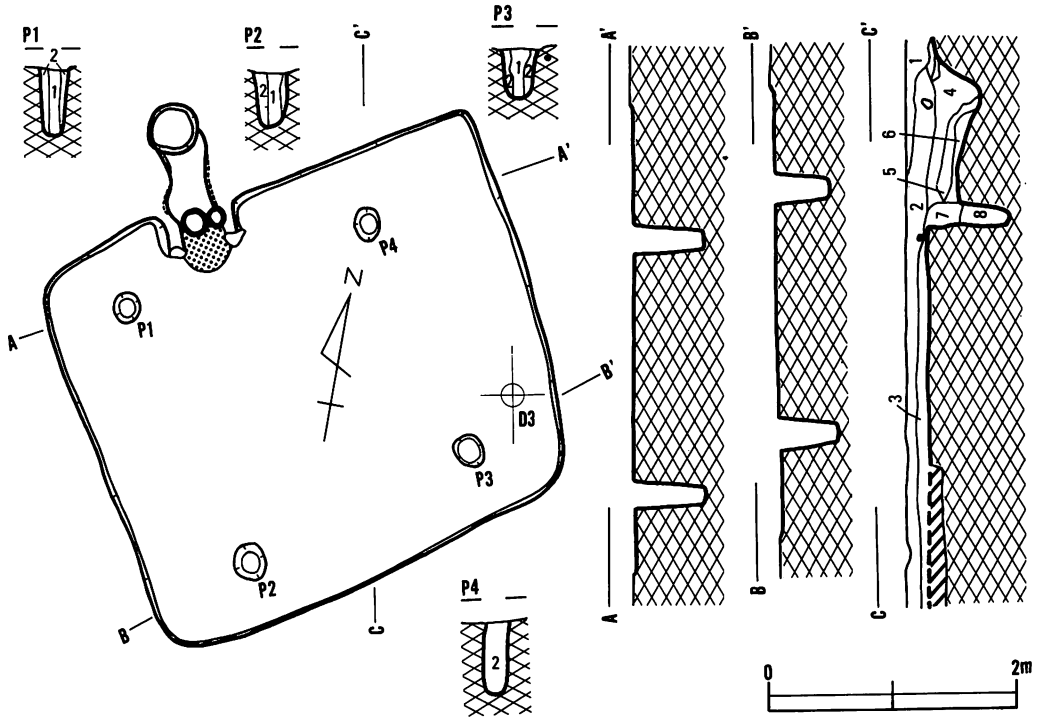
〔遺構〕(第30図、P L 14 B)

本住居址は風倒木跡によって一部攪乱を受けているためにその部分は不明である。

規模は南北3.2m・東西3.6mで壁高は0.05m位を測り、壁は床面に対して100度の角度を示している。平面形は主軸に対して横長の隅丸長方形を呈する。主軸は北西-南東方向にあり磁北に対して25度西に偏している。埋土は黒色を呈するシルトの単層で構成され、全層に水酸化鉄の集積が観察される。全体として良く締まり固く、粘性も少ない。床は地山の暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床は観察されない。床面は平坦であるが、西壁に寄るほどレベルが高くなり、高低差0.03mを測る。壁溝は検出されていない。

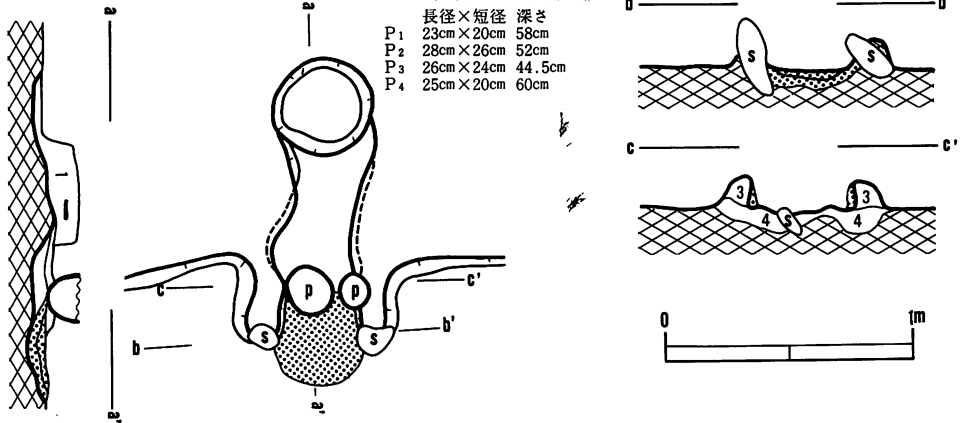
本住居址の床面よりP<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>までの土坑が検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の規模は0.25m×0.35m位で深さはP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>は0.55m前後、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は0.45m前後を測り、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。P<sub>5</sub>～P<sub>9</sub>の規模はそれぞれによって差がみられ、深さはP<sub>5</sub>が0.25mを測る以外は0.10m未満である。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の埋土は粘性の少ない黒褐色を呈するシルトで構成されている。P<sub>5</sub>～P<sub>9</sub>の埋土は黒褐色や暗褐色・黒色を呈するシルトで構成され、さらに細分された場合もある。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>には柱痕跡が観察され、それによれば柱は径10cm位の円柱と推定され、土坑の底面に達している。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は対角線上に位置していることや規模・埋土から本住居址に伴う柱穴を構成している。P<sub>5</sub>は床面直上出土と同一個体の破片が埋土内より出土していることから、本住居址に伴う貯蔵穴と考えられる。P<sub>6</sub>～P<sub>9</sub>と本住居址との関係は、調査中に新旧関係が確認されていないが、本住居址の床面を掘り込んでいることから考えると、本住居址より新しい土坑と考えられる。性格は定かでない。

カマドは北壁で検出され、壁中央より0.45mほど西に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・カマド埋設土器・煙道部であり、天井部は検出されていない。袖部は床面を0.10m位掘り窪め、黒褐色を呈するシルトを埋め込んで基底部とし、その上に暗褐色を呈するシルトを貼り付けて構築している。袖部の焚口付近には左右ともに粒径30cm×10cm前後の円礫を各1個縦位で埋め込んでいる。焚口部に横架される礫は検出されていない。燃烧部は床面とほぼ水平で奥壁に続き、煙道部とは明瞭な段差はみられない。カマド内には並列で2ヶの土師器甕形土器が埋設されている。左側の土器は頸部より口縁部までを欠失しているが現存器高21cm・体部最大径18cmの大きさで、右側の土器は口縁部上端を欠失しているが現存器高15cm・体部最大径21cmの大きさである。これらの埋設土器はカマド奥壁寄りに2ヶ体がほぼ直立で相接



C-2 住居址ピット計測値

ピット	長径	短径	深さ
P1	23cm	20cm	58cm
P2	28cm	26cm	52cm
P3	26cm	24cm	44.5cm
P4	25cm	20cm	60cm



C-2 住居址ピット埋土土層

- 7.5 YR2/2 黒褐色 軟らかに締まる、湿気あり。
- 7.5 YR2/2 黒褐色 強く締まる、粘性あり、砂混じり褐色シルトのにじみあり。

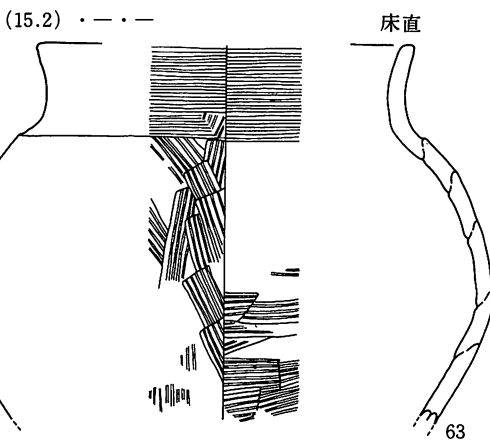
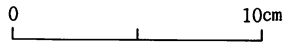
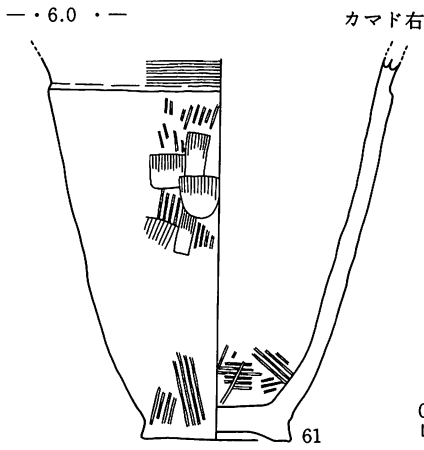
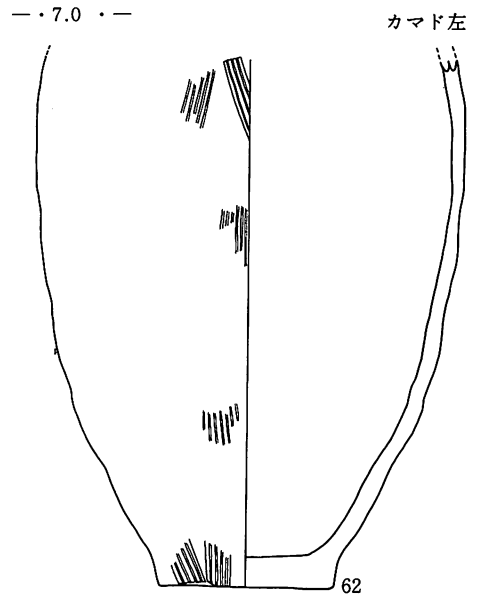
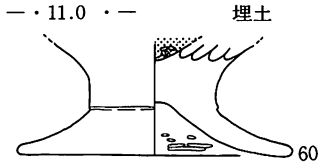
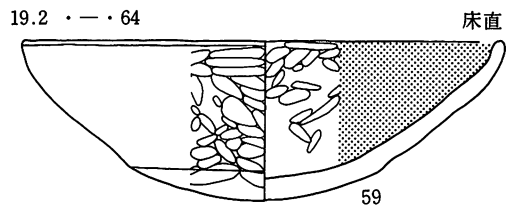
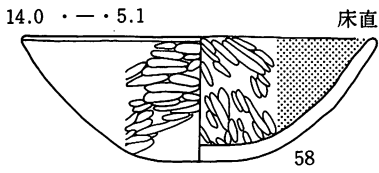
C-2 住居址埋土土層

- 10 YR2/1 黒色 シルト質 土 堅い、粘性なし、褐色シルトブロックのにじみが入る、酸化鉄多く混入。
- 10 YR2/2 黒褐色 砂質シルト 締まっている、にぶい黄褐色の砂質シルトブロックを含む。
- 10 YR2/2 黒褐色 砂質シルト 砂質シルトブロック少量混入。
- 10 YR2/1 黒色 シルト質 土 軟らかく締まっている、粘性少しあり。
- 10 YR2/4 暗褐色 粘土質シルト 軟らかく締まっている、粘性少しあり、酸化鉄を含む。
- 10 YR2/3 黒褐色 シルト質 土 湿っていて少し軟らかい、粘性が少しある、砂質土を含む。
- 10 YR2/3 黒褐色 シルト質 土 締まっている、湿っていて粘りが少しある、砂質土を含む。
- 10 YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 締まっている、粘性少しあり、明色のシルト粒を無数に含む。
- 10 YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 軟らかい、粘性少しあり。

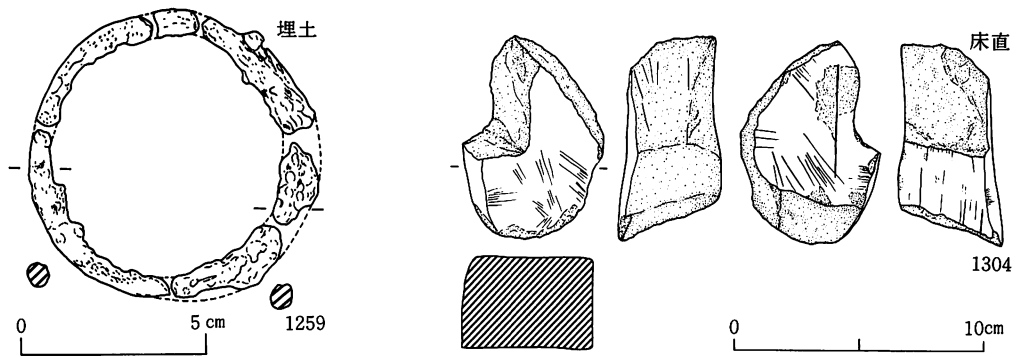
C-2 住居址カマド埋土土層

- 10 YR2/1 黒色 堅い、粘性あり、炭化物混入、褐色シルトのにごりあり、酸化鉄含む。
- 7.5 YR3/2 黒褐色 粘土質シルト やや強く締まっている、粘性あり（ヒモ状となる）。
- 10 YR3/4 暗褐色 シルト質 土 強く締まっている、粘性なし、酸化鉄の斑点を多く含む、炭化物を微量含む。
- 5 YR2/1 黒褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性あり、酸化鉄を含む。

第30図 C-2 住居址(遺構)



第31図 C-2 住居址(遺物-1)



第32図 C-2 住居址(遺物-2)

する様に埋設され、底部は燃烧部床面に接していた。また、左側埋設土器の下には粒径10cm×5cmの円礫が縦位でまほど埋め込まれて、支脚として利用されていた。燃烧部焼土は茨口部より埋設土器の付近まで広く分布し、さらに、左右袖部の内壁にも焼成を受けた痕跡が観察された。煙道部は他住居址の様に明確でないが、底面はほぼ平坦で水平に近い。煙出部には明瞭な窪みが検出されている。

〔遺物〕(第31・32図、P L 68 B・69 A)

床面での出土が多く、埋土内での出土は少ない。種類は土師器・石製品・鉄製品である。器種としては、坏形土器・高坏形土器・甕形土器・砥石・鏝がある。

#### 土師器

**坏形土器** (58・59) いずれもロクロ未使用成形のもので、床面直上に2ヶ重ねて伏せた状態で出土した。59には体部内外面とも軽い稜をもつが58には段・稜ともない。底部は2ヶともに丸底である。59は稜の位置で口縁部が若干外反し、後幾分内弯気味に口唇へ移行している。58はほぼ半球状である。口唇はともに丸い。大きさは大型(59)と小型(58)がある。調整技法は内外面ともミガキで内面と外面の一部は黒色処理されている。

**高坏形土器** (60) ロクロ未使用成形のもので脚部のみが出土している。脚が比較的長く、柱部より裾が大きく開くものである。坏部の内面は黒色処理されるらしい。

**甕形土器** (61~64) いずれもロクロ未使用成形のもので、61・62はカマド埋設土器である。64は完形である。全体的な器形では長胴型(61・62)と球胴型(63・64)のものがあ、それぞれに大型(62・63)と小型(61・64)がある。体部最大径は頸部(61)・体部上半(62)・体部中央(63・64)のものがあ。頸部にはいずれも段をもち、61・63の口縁部は外反している。64の口縁部は外反した後直立し受口状を呈している。61の底部は上げ底状であるが、他はすべて平底で木葉痕をもつものはない。調整技法は、口縁部内外面ともヨコナデが主体で、63・64にはハケメを若干残している。体部は内外面ともハケメが主体であるが、スリケシが入っている。

## その他

石製品(1303) 3面に使用面をもつ砥石である。断面形は方形を呈する。

鉄製品(1259) 鉄製の鏝である。断面が円形である。 (高橋与右エ門)

## 12) C-3住居址-1

〔遺構〕(第33・34図、P L 15A・B)

本住居址はD-4住居址と南東部分が重複している。重複遺構との新旧関係は本住居址の方が古い。

規模は北西南東5.6m・北東南西5.7mで壁高は0.40mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は胴張隅丸方形を呈し、主軸は北西-南東方向にあり磁北に対して47度西に偏している。埋土は基本的には黒色を呈するシルトで構成されるが、混入物の種類や程度・色調によって6層に細分された。混入物としては褐色のシルト粒が全層に観察される。埋土4層には焼土や炭化物・焼骨の混入が多かった。埋土最下層には粒径10cm~15cm位の円礫が若干混入している。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構築され、部分的に褐色を呈するシルトで0.5cm位貼って床面としている。床面は良く締まって固く、平坦でほぼ水平に近い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>までの土坑が検出されている。規模は径0.35m位から0.50m位までであるが、深さはいずれも0.55m位である。平面形は円形または楕円形を呈する。埋土はいずれも粘土質のシルトで構成され、色調によって2層に細分された。柱痕跡は観察されない。これらの土坑が対角線上に位置していることや規模等から考えて本住居址に伴う柱穴を構成しているであろう。

カマドは北西壁で検出され、壁中央より0.45m西に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部に限られ、天井部は検出されていない。袖部は床面を若干掘り窪めて基底部を作り、黒褐色を呈するシルト質の粘土を貼り付けて構築している。袖部の焚口付近には左右ともに上部を欠失した残存粒径20cm×10cm位の円礫が各1ヶ縦位で0.10mほど埋め込まれている。さらに、焚口部床面には粒径50cm×20cmの細長い円礫が1ヶ左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの礫によって構成され、「 $\square$ 」状に組み立てたものと推定される。燃烧部は掘り窪めもみられず、奥壁に向かって次第に高くなっているものの、煙道部とは明瞭な段差で接続している。燃烧部焼土は焚口部より中央部まで分布しており、さらに、左側袖部の内壁にも焼成を受けた痕跡を残している。カマド埋設土器や支脚は検出されていない。煙道部底面は中央付近を境にして燃烧部と煙出部に向かって若干下り勾配を示している。煙出部には明瞭な土坑が検出されている。また、カマド前庭部付近の床面2ヶ所

で焼土の分布が観察されたが、床の構築土に焼成が認められないことから、現地性の焼土ではなくカマド内より掻き出され床面に投棄されたものと推定される。

〔遺物〕(第35・36・37・38図、P L 69B・70・71A)

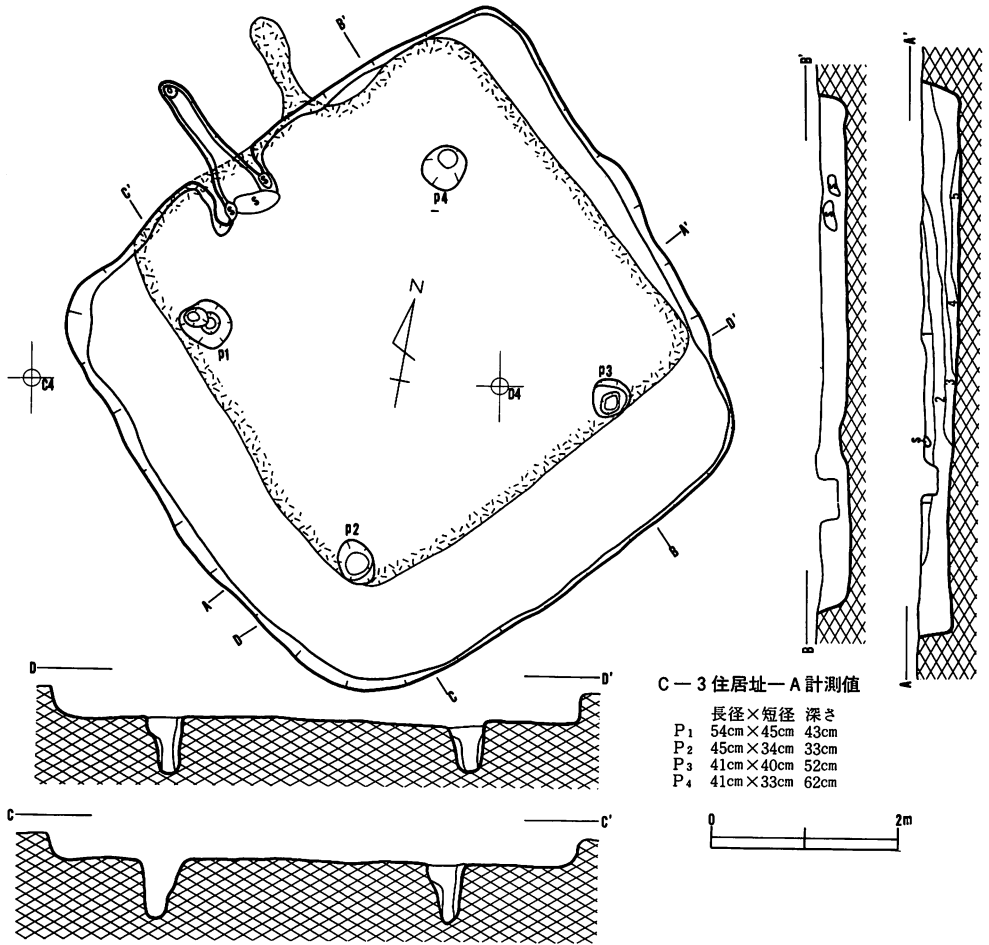
床面直上での出土は少なく、埋土内での出土が多い。種類は土師器・土製品・鉄製品である。器種としては坏形土器・高坏形土器・甕形土器・甑形土器・小型土器・勾玉・丸玉・手付土器・紡錘車・器種不明鉄器が含まれている。

### 土師器

**坏形土器**(65～81) すべてロクロ未使用成形のもので、73以外は体部内外面に段や稜をもつ丸底である。口縁部は段や稜の位置で外反するもの(67・68・70・72・77・78・79)と外反した後軽く内弯して口唇に移行するもの(65・66・69・71・76)や外反した後強く内弯して直立して口唇に移行するもの(74)がある。73は底部より強く内弯して口唇に移行している。大きさでは大型(65・72・75・76・77・78・79)・中型(66・67・68・71)・小型(69・70・74)がある。器高は比較的高いものが多いが、低いもの(73・77)もみられる。調整技法は、口縁部外面はヨコナデが主体であるが、一部にミガキが入るもの(67)・ハケメを残すもの(70・71・73)・ミガキが顕著なもの(66・68・78・79)等がある。底部はケズリのもの(66・68・72・73・75・79)・ハケメのもの(67)・ミガキの入るもの(78)等がある。他に、80・81はロクロ使用成形のもので、本住居址埋土内に掘り込まれた攪乱土坑より出土している。内面ミガキ後黒色処理されている。

**高坏形土器**(82～85) いずれもロクロ未使用成形のもので、完形土器はない。全体的な器形は不明であるが、脚部が高いもの(83・84・85)と低いものがある。その中でも83は脚部が高く裾部も大きく開くもので84・85もほぼ同じ形態を示すであろう。82は脚部が低く裾部の開きも小さい。坏部は不明であるが、残存部の内面は黒色処理されている。調整技法は外面はミガキ(83・85)やハケメ(84)で、83の裾部にはヨコナデが入っている。

**甕形土器**(86～92・97～101) すべてロクロ未使用成形のもので、87・89は全体が判るが、他は破片である。全体的な器形は、長胴型(88・92)・胴部が若干膨らむ型(86・100・101)・球胴型(87)があり、大きさでは大型(86・87・92・100・101)・中型(88・89・91・99)・小型(97・98)がある。100は頸部に鋸歯状の沈線が付されたものであり、体部最大径は89が肩部にあるが他は不明である。頸部にはすべて段や稜があり、口縁部は段や稜の位置で外反している。口唇は丸味をもつもの(87・88・90・91)と平坦なもの(89・97・98・100)がある。底部は周囲が突出するもの(86・87・99)と突出しないもの(89・101)があり、底面は86・99が木葉痕をもつ以外は素文である。調整技法は、口縁部は内外面ともヨコナデが主体で、若干ハケメを残すもの(88・89・90)がある。体部外面はミガキをもつもの(86・100)・ハケメのもの(89・92・98・99・101)・ヘラナデのもの(87)がある。内面はハケメ(86・88・89・92・99・101)が主体で、



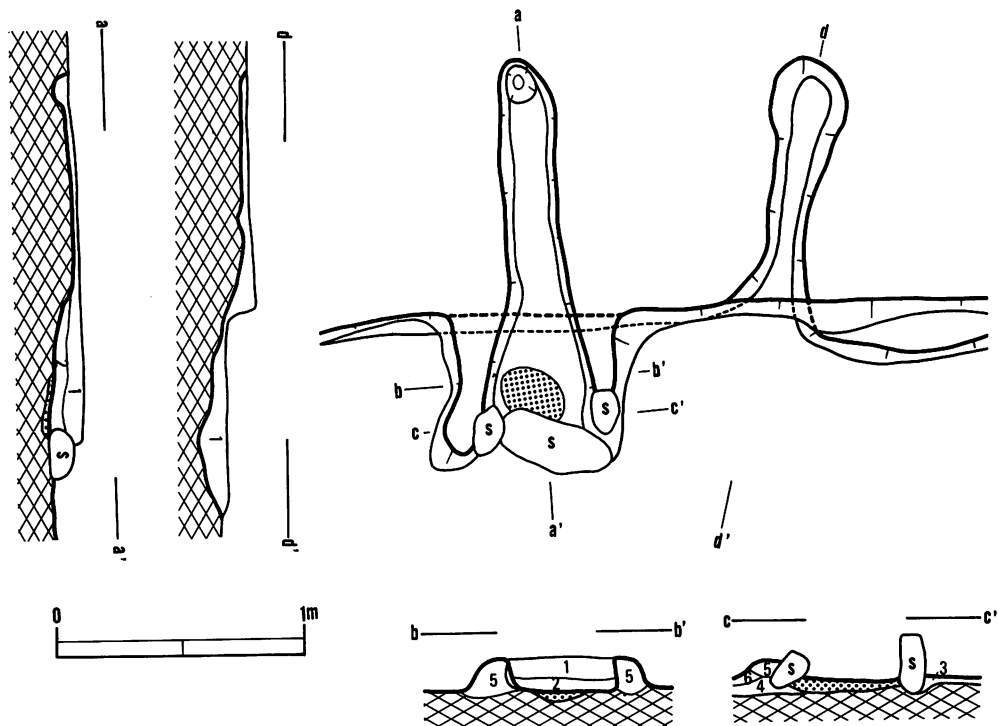
C-3 住居址—I 埋土土層

1. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅い、粘性少しあり、3cm位の褐色ブロックのにじみ全体にある。
2. 7.5YR2/1 黒色シルト質土 堅い、粘性あり、炭が少しと土器片がやや多く混入、1cm位の褐色シルト粒が全体に入る。
3. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅い、粘性あり、骨片あり、焼土粒、明褐色粘土、炭化物の帯。
4. 10YR1.7/1~2/1 黒色シルト質土 堅い、粘性少しあり、褐色シルトのにじみが薄くあり。
5. 10YR2/1 黒色シルト質土 堅く締まる、粘性あり、褐色シルトのにじみがあり。

C-3 住居址—I カマド埋土土層

1. 10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 堅く締まっている、粘性ほとんどなし、褐色シルト、炭化物がブロック状に混入。
2. 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト やや堅く締まっている、粘性ややあり、焼土ブロック、小骨を混入。
3. 10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 軟らかく締まりなし、粘性あり(ヒモ状となる)。
4. 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 軟らかく締まりなし、粘性あり(ヒモ状となる)、焼土が多い。
5. 10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 堅く締まっている、粘性ほとんどなし、焼土、炭化物を少量含む。
6. 10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 やや堅く締まっている、粘性ほとんどなし、黒色土を多く含む。

第33図 C-3 住居址—I (遺構—I)



第34図 C-3 住居址-1 (遺構-2)

他にヘラナデ(97・98)のものがある。

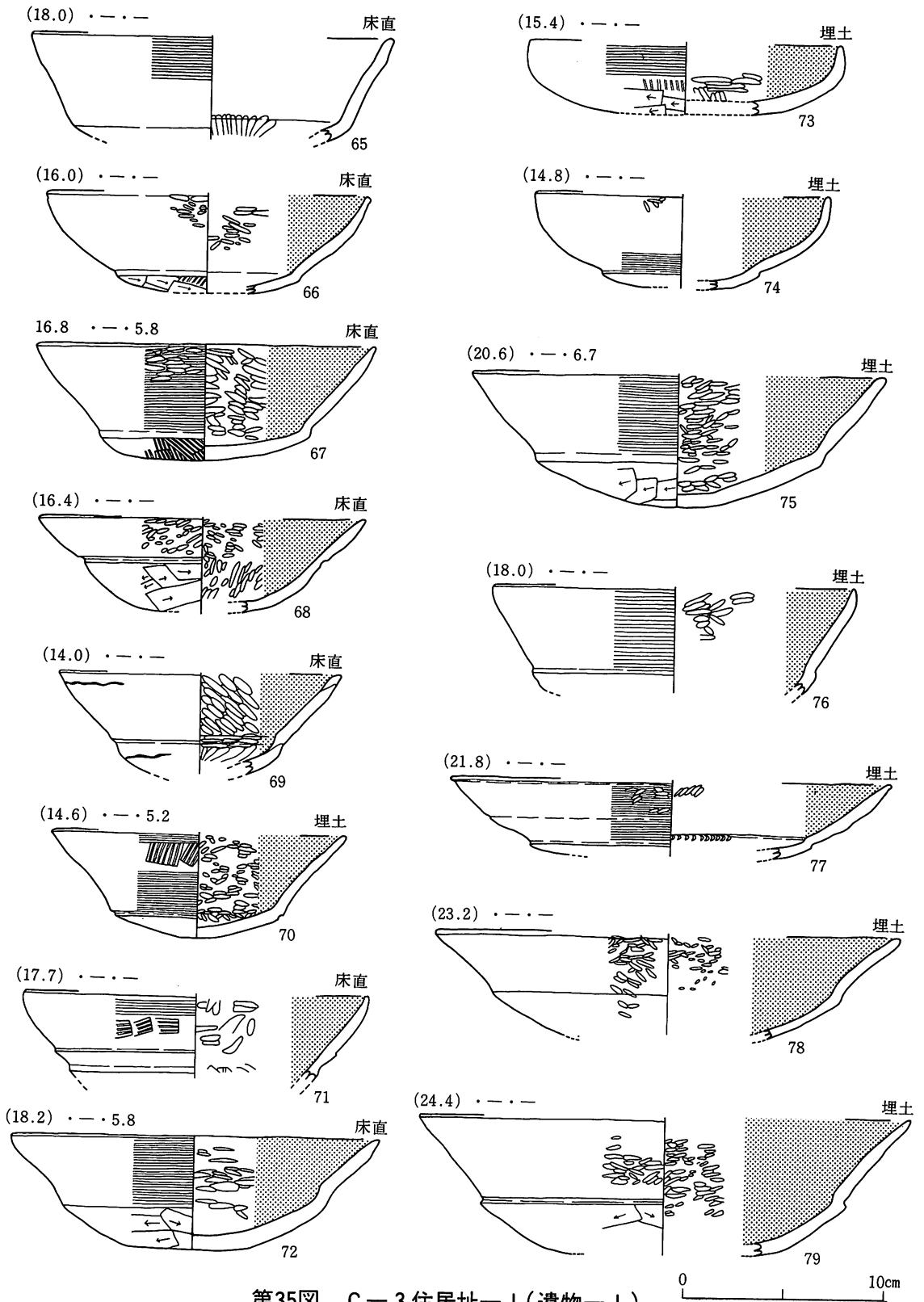
**甑形土器**(102) 無底のものが1ヶ出土している。ロクロ未使用成形のもので体部下半の破片である。

**小型土器**(93~96) すべてロクロ未使用成形のもので、94・95は小型の鉢形土器ともいえるものである。93は小型の壺に近い器形を呈し、底部は丸底で体部から口縁部にかけて内弯している。94は底部が平底で体部下位に軽い沈線をもち、口縁部は直立気味で片口が1ヶついている。95は底部が平底で体部は内弯気味に外傾し、口縁部で小さく外反している。96は形も悪く粗雑なつくりで、小型の甕形土器である可能性が強い。底部は平底で器形が不整である。調整技法はそれぞれによって差があり、93は口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケメ後スリケシ、内面ナデである。94は口縁部外面ヨコナデ・底部ナデで、内面はミガキ後黒色処理されている。94は外面ハケメ後スリケシ・内面ヘラナデである。95は外面ヘラケズリ・内面ミガキである。

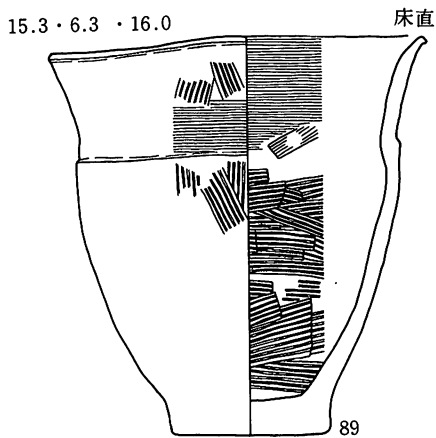
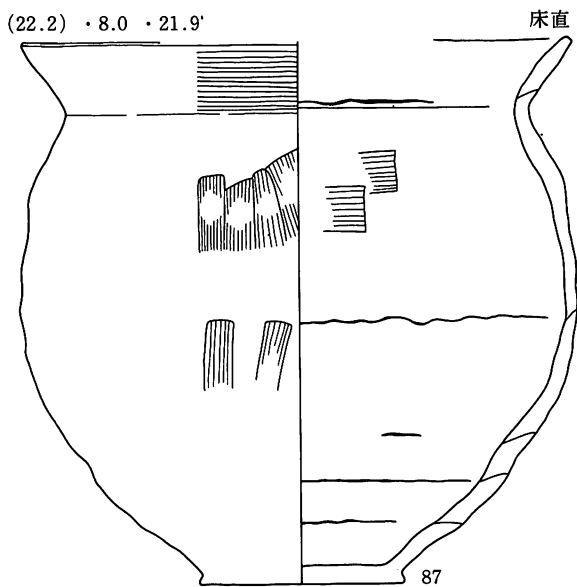
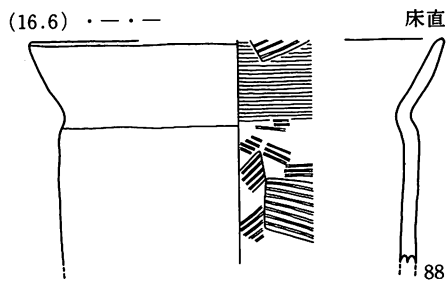
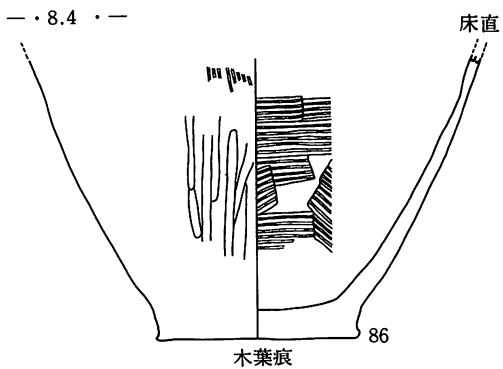
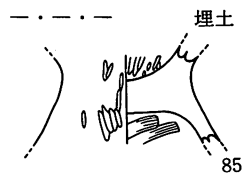
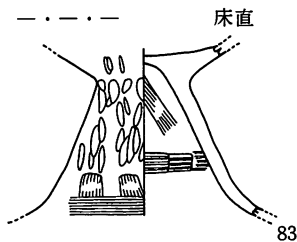
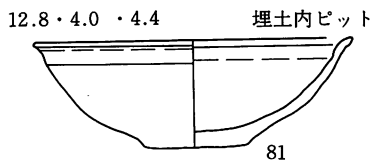
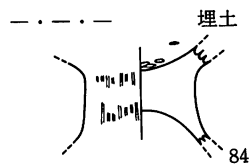
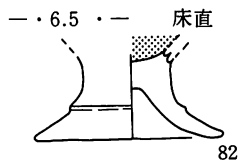
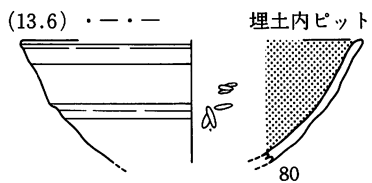
#### その他

**土製品** 1156・1157は土製の丸玉で中心部に1ヶの貫通孔をもつものである。いずれも黒色処理されている。1204は土製の勾玉で「C」字状を呈し、上端に貫通孔をもつ。断面は円形で

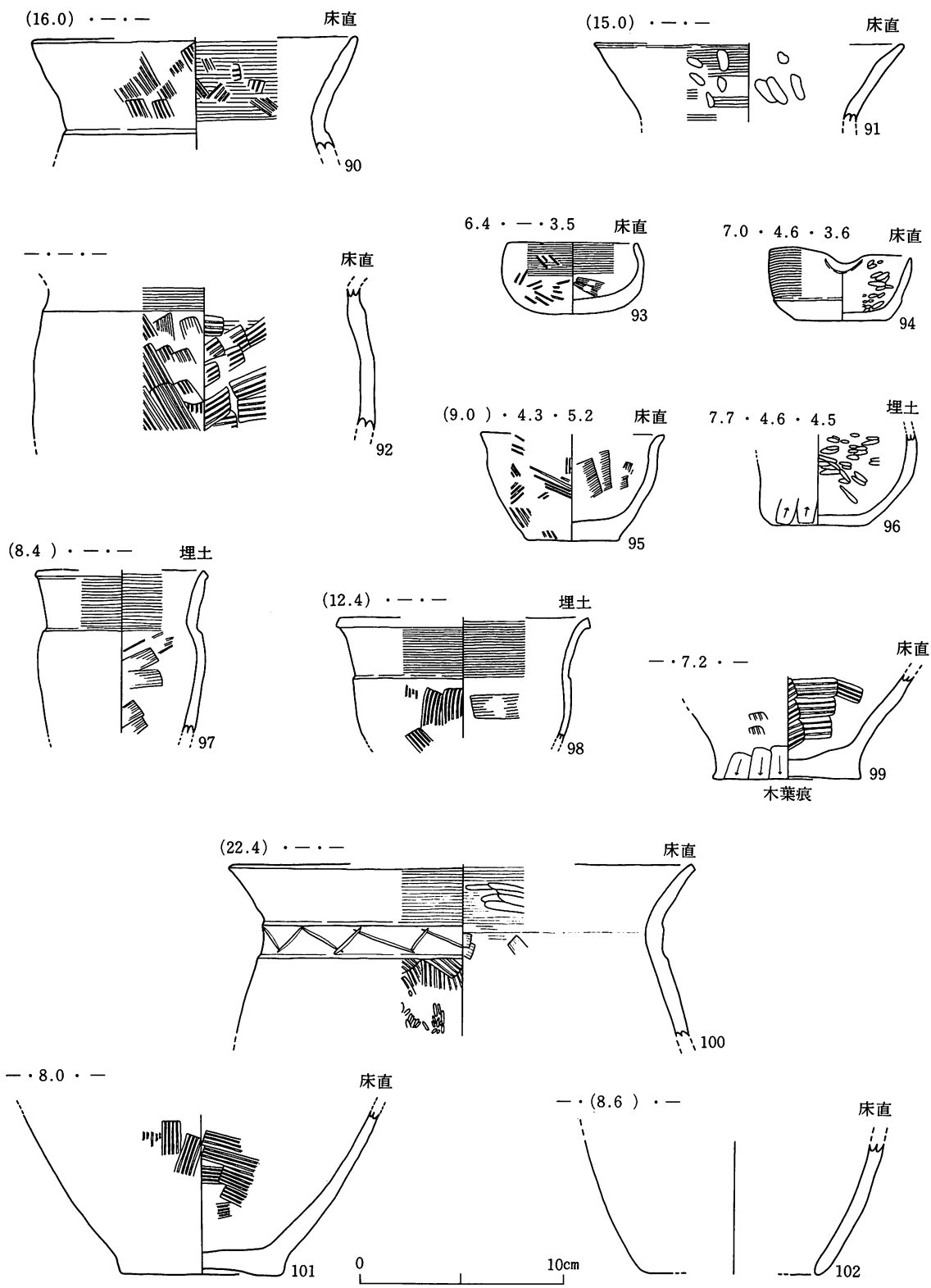




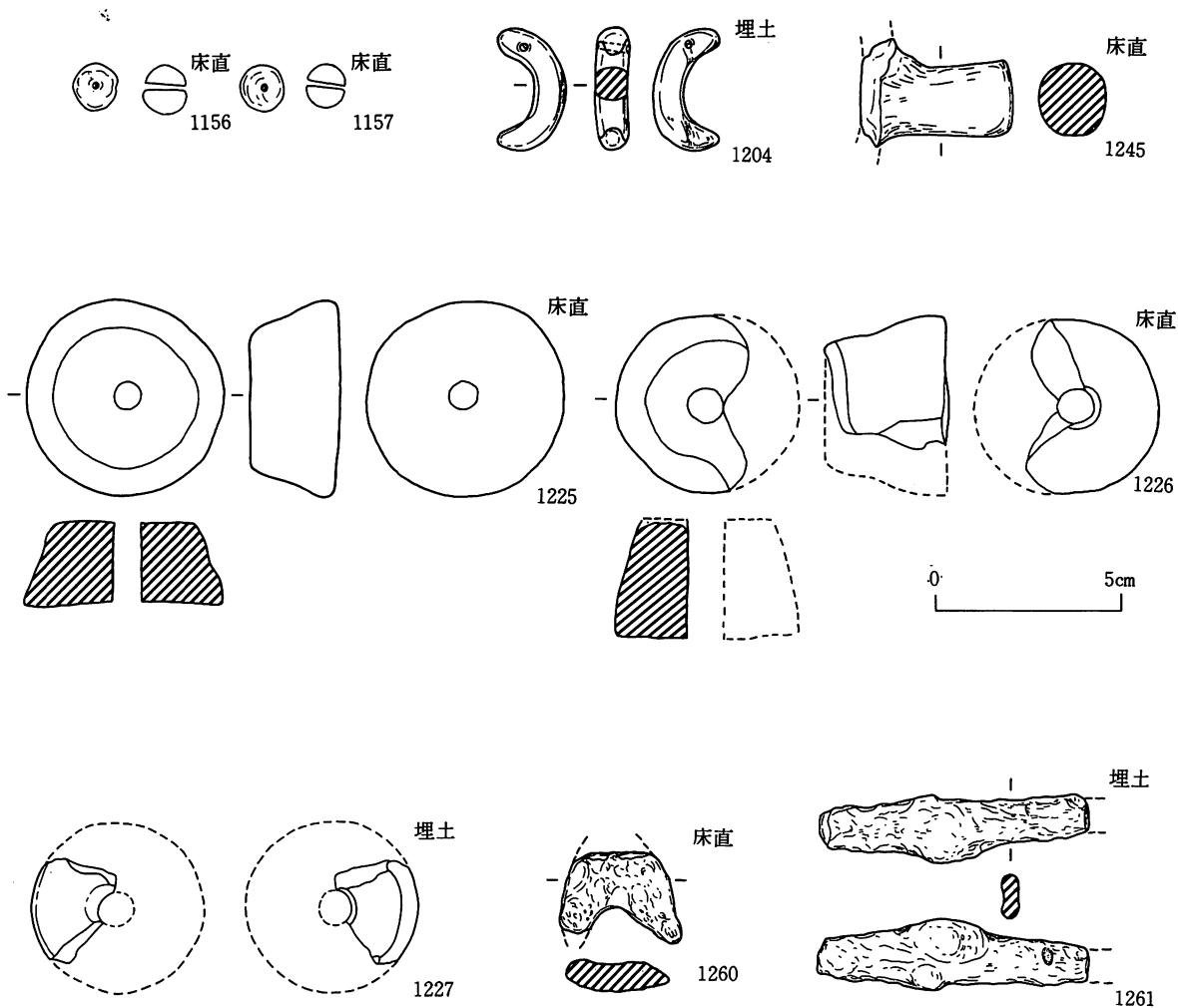
第35図 C-3住居址-I(遺物-I)



第36図 C-3 住居址-1 (遺物-2)



第37図 C-3住居址-I(遺物-3)



第38図 C-3 住居址-I (遺物-4)

ある。1225～1227は土製紡錘車で中心部に各1ヶの貫通孔をもつ。1225のみが完形で他は一部を欠損しているが、断面形は截頭円錐形を呈する。1245は把手付土器の把手部分であるが、詳細は不明である。

**鉄製品** (1260・1261) いずれも断面が扁平であるが正確な器種は不明である。1261は刀子の可能性もある。

(高橋与右エ門)

### 13) C-3住居址-2

〔遺構〕(第39図、P L 15 B)

本住居址は全体をC-3住居址-1に削剝されている。さらに、南東壁の一部はD-4住居址と重複している。重複遺構との新旧関係は重複するどの遺構よりも本住居址が古い。

規模は北西-南東・北東-南西ともに4.50m位であるが、各壁の長さでは南東壁より北西壁が0.50m位短い。壁高はC-3住居址-1の床面まで0.03mで、壁は床面に対してほぼ直角である。平面形は若干歪んだ隅丸方形を呈し、主軸方向は北西-南東方向にあり磁北に対して30度西に偏している。埋土はほんのわずかが残存しているにすぎないが、褐色のシルト粒が混入した黒褐色を呈する粘土質のシルトの単層で構成されている。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構築し、褐色を呈するシルトで0.5cm位貼って床面としている。床面は平坦でほぼ水平である。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>までの土坑が検出されている。規模は最小のもので径0.25m・最大で径0.45mを測り、深さはP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>で0.50m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>は0.60mである。南東壁寄りのP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は北西壁寄りのP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>よりも深い。埋土は水酸化鉄の集積した粘土質シルトで構成され、色調は黒褐色を呈する。柱痕跡は観察されない。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は対角線上に位置することや規模から考えて、本住居址に伴う柱穴を構成するであろう。P<sub>5</sub>は浅い窪みであり、土坑というほどではない。

カマドは北西壁で検出され、壁中央より0.20mほど東に寄って位置している。しかし、C-3住居址-1によって袖部・燃焼部・天井部ともに削剝され、検出されたのは煙道部のみである。燃焼部と推定される位置には焼成を受けた痕跡をかすかに残しているのみである。煙道部は床面と若干の段で接続し、底面は煙出部に向かって次第に緩やかな上がり勾配を示しているが起伏はみられない。煙出部には土坑が検出されている。

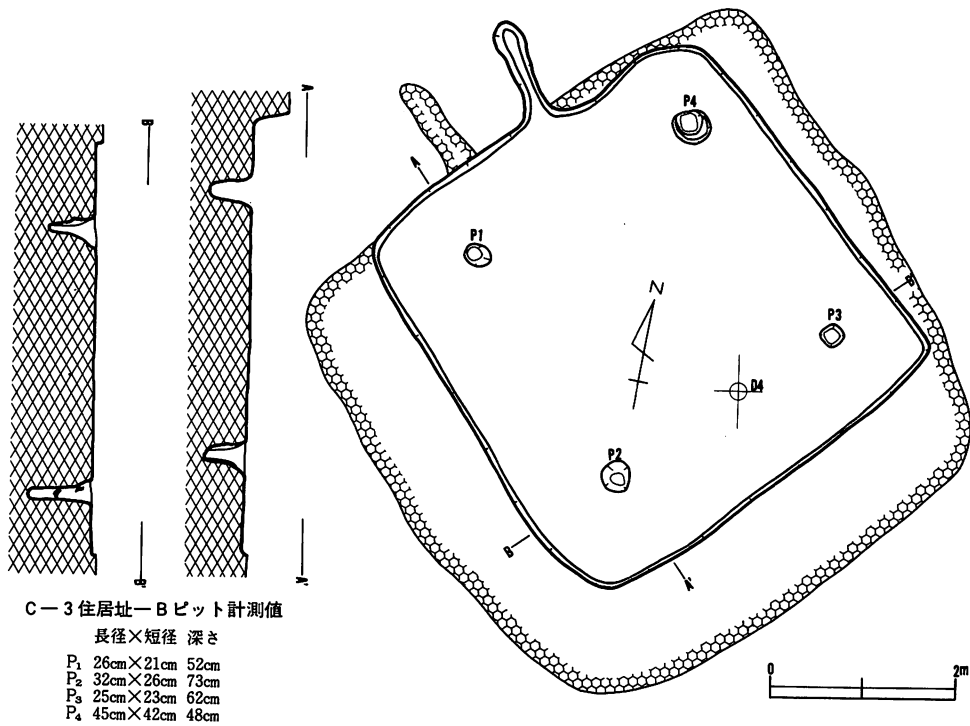
〔遺物〕(第40図、P L 71 B)

本住居址は埋土も浅く、床面上からは全く出土していない。しかし、柱穴埋土内から土師器が2ヶ出土している。

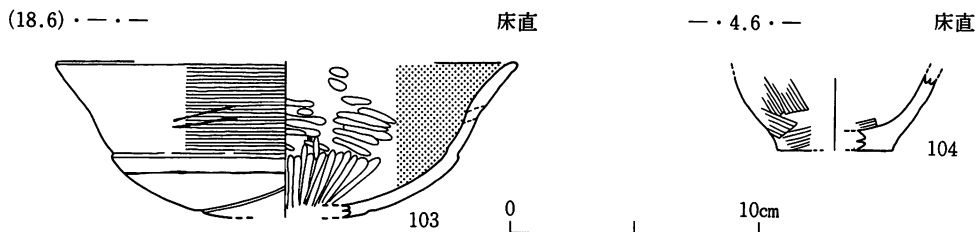
#### 土師器

**坏形土器**(103) ロクロ未使用成形のものである。内外面ともに段をもち、底部は丸底である。口縁部は段の位置で外反し、若干外弯しながら口唇部に移行している。底部にはヘラ描きによる1条の沈線をもつ。調整技法は口縁部外面ヨコナデ、底部は明確ではないがナデである。内面はミガキ後黒処理されている。

**甕形土器**(104) ロクロ未使用成形のもので、底部と胴部が若干残存する破片である。大きさは小型に入るであろう。調整技法は内外面ともにナデである。(高橋与右エ門)



第39図 C-3 住居址-2 (遺構)



第40図 C-3 住居址-2 (遺物)

#### 14) C-6 住居址-1 A

〔遺 構〕(第41・42図、P L 16A)

本住居址は北西隅部がB-5住居址と重複しているが、遺構検出の際の土層変化によって全体が把握された。他に、C-6住居址-2やC-6掘立柱建物跡と重複しているが、遺構確認には大きな影響を及ぼしていない。重複遺構との新旧関係はB-5住居址とC-6住居址-2は本住居址よりも古く、C-6掘立柱建物跡は本住居址より新しい。

規模は東西5.2m・南北5.9mで壁高は0.07mを測り、壁は床面に対して115度の角度を示し

ている。平面形は主軸に対して横長の隅丸方形を呈し、主軸は東—西方向にありほぼ真東を向いている。埋土は黒色や黒褐色を呈するシルトで構成され、混入物や色調によって2層に細分されている。埋土は全体的に粘性が強く、褐色のシルト粒の混入が観察され、さらに、埋土最下層には粒径5cm～10cmの円礫が混入し、一部は床面に接していた。床はC-6住居址-2の埋土や地山の黒褐色を呈するシルトで構築され、褐色のシルトを0.5cm位貼って床面としている。床面はほぼ平坦であるが、北西部と南東部の床面レベルが他の部分より高く、5cmほどの高低差がある。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までの土坑が検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の規模は径0.30m位であるが、深さは0.40m～0.64mまで差がみられ、西壁寄りのP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>がP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>より深い。P<sub>6</sub>の規模は径1.10m×0.80mで深さは0.35mである。平面形はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は円形もしくは楕円形を呈し、P<sub>6</sub>は歪んだ隅丸方形を呈している。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の埋土は暗褐色や黒褐色を呈する粘土質の軟らかいシルトが主体で構成し、3層に細分されている。P<sub>6</sub>は黒褐色を呈するシルトで構成され2層に細分されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は対角線上に位置することや規模から本住居址に伴う柱穴を構成しているであろう。P<sub>6</sub>はカマド脇に位置し、多くの遺物を出土していることから本住居址に伴う貯蔵穴であろう。

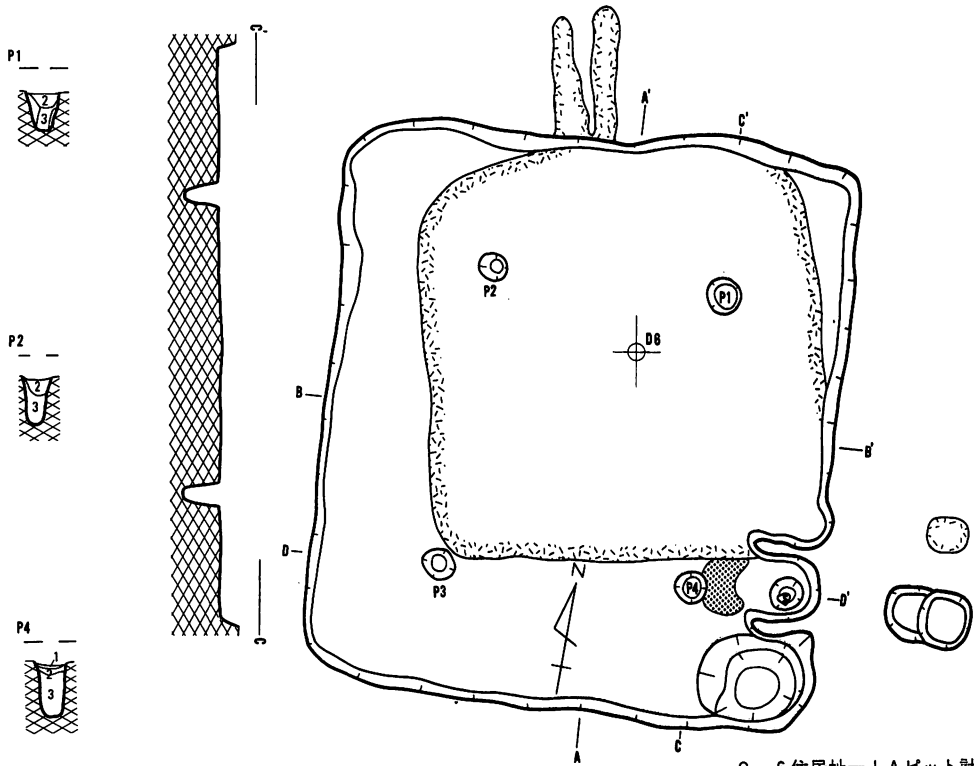
カマドは東壁で検出され、壁中央より1.4mほど南寄りに位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙出部であり、天井部と煙道部は検出されていない。袖部は褐色を呈するシルトを貼り付けて構築しているが、基底部の掘り込みはない。燃烧部は床面とほぼ同じ高さで奥壁に達し、煙道部とは明瞭な段差があるらしい。燃烧部焼土は焚口部より燃烧部全体に及んでおり、前底部には炭化物粒が多く散在していた。また、燃烧部中央やや奥壁寄りの右側袖部近くには、粒径15cm×30cmの円礫が、径30cm・深さ25cmの円形土坑に25cmほど埋め込まれて支脚としていた。煙道部は検出されていない。カマド奥壁より1.3mほど東方に煙出部の底部と考えられる土坑が検出された。土坑は一辺0.35m×0.40mの若干歪んだ隅丸方形を呈し、深さは0.20mである。

〔遺物〕(第44・45・46図、P L 72・73A)

床面直上や埋土内で出土しているが量的には少ない。その中でカマド右側の貯蔵穴(P<sub>6</sub>)埋土内や底面での出土が多かった。煙出部の土坑内でも出土している。種類は土師器・須恵器が混在し、他に土製品や鉄製品が出土している。器種では坏形土器・甕形土器・丸玉・器種不明鉄器がある。

#### 土師器

坏形土器(105～120) すべてロクロ使用成形のもので、内面が黒色処理されるもの(112～118)と無処理のもの(105～111・119・120)に大別される。底部切り離し技法は回転糸切り再



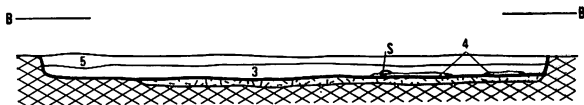
C-6住居址-I Aピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	35cm×32cm	42.8cm
P <sub>2</sub>	30cm×26cm	59.2cm
P <sub>3</sub>	31cm×29cm	51.2cm
P <sub>4</sub>	31cm×28cm	48.5cm



C-6住居址-I Aピット埋土土層

- 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性ほとんどなし、焼土・炭化物を多く含む。
- 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性ややあり、褐色粘土質シルトをブロック状に含む。
- 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性あり、褐色粘土質シルトをブロック状に2層より多く含む。

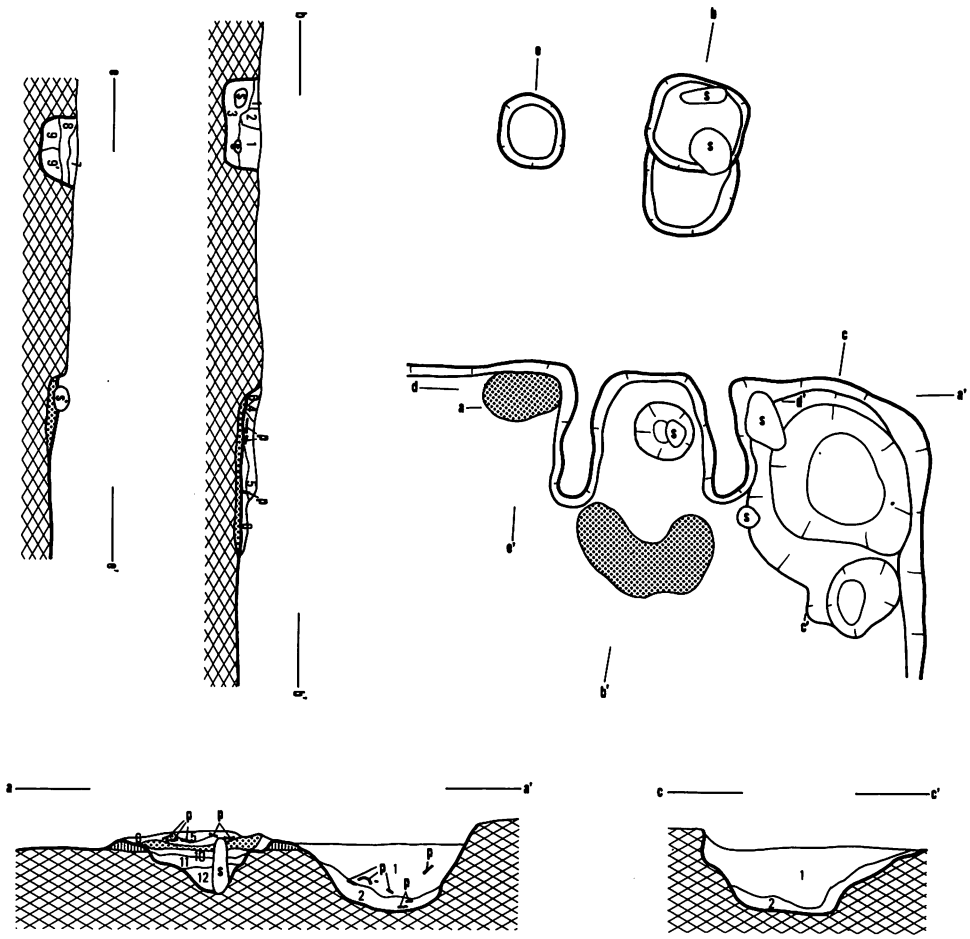


C-6住居址-I A埋土土層

- 10YR2/1 黒色 砂質 強い、粘性あり。
- 10YR3/2 黒褐色 非常に強く締まっている、粘性ほとんどなし、褐色シルトブロック・焼土粒・炭化物を少量混入
- 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 非常に強く締まっている、粘性ほとんどなし、黒褐色土のブロック少量混入。
- 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 強く締まっている、粘性ほとんどなし、黒褐色土のブロック少量混入。
- 10YR2/1 黒色 強い、粘性あり、20mm以下の褐色ブロックが少し入る、植生痕の赤銅色のサビが入る。

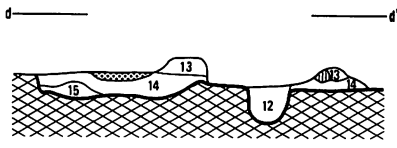
第41図 C-6住居址-I A(遺構-I)



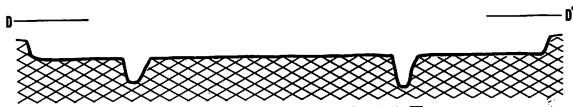
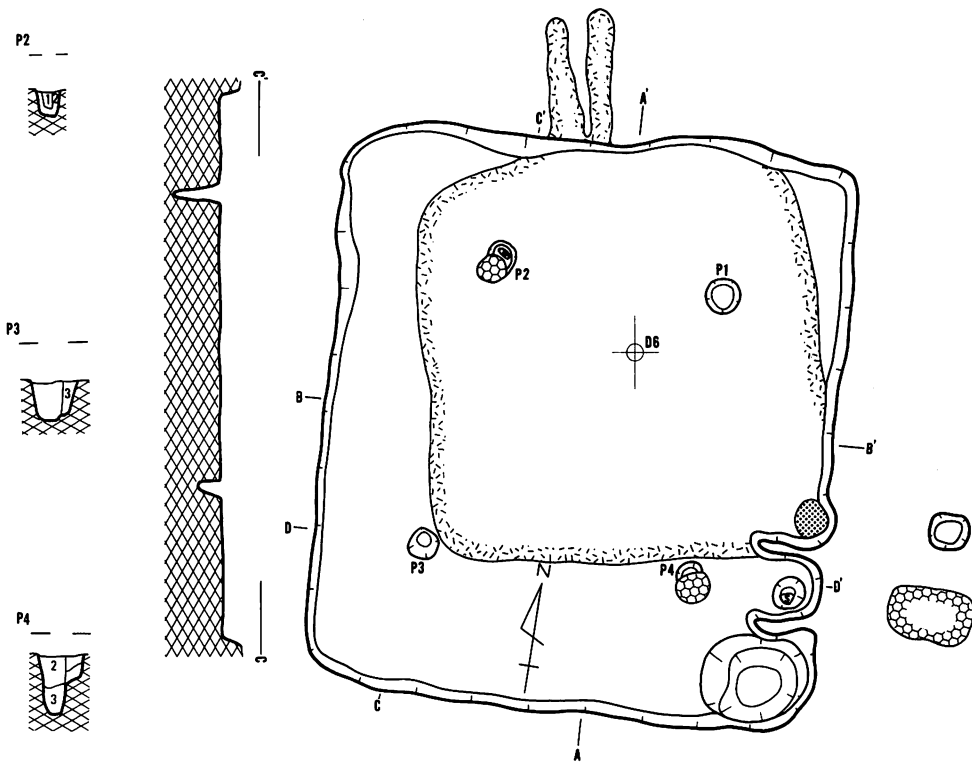


C-6 住居址-I A・I Bカマド埋土土層

- |              |     |         |   |
|--------------|-----|---------|---|
| 1. 10YR2/2   | 黒褐色 | シルト質粘土  | 堅く締まっている、粘性ややあり、焼土少量と酸化鉄・大礫を含む。           |
| 2. 10YR2/1   | 黒色  | 粘土質シルト  | 縮まかかまっている、粘性やあり、酸化鉄の斑点ややあり。               |
| 3. 10YR1.7/1 | 黒褐色 | 粘土質シルト  | 堅く締まっている、粘性ほとんどなし、焼土と少量炭化物・腐植性有機・灰・大礫を含む。 |
| 4. 10YR3/2   | 黒褐色 | 質質粘土    | 堅く締まっている、粘性ほとんどなし、焼土と少量炭化物・腐植性有機・灰・大礫を含む。 |
| 5. 10YR2/3   | 黒褐色 | シルト質質粘土 | 堅く締まっている、粘性ほとんどなし、酸化鉄・焼土を少量混入。            |
| 6. 10YR2/2   | 黒褐色 | 質質シルト   | 堅く締まっている、粘性ややあり(ヒモ状となる)、焼土粒・炭化物を含む。       |
| 7. 10YR2/2   | 黒褐色 | 粘土質シルト  | 堅く締まっている、粘性ややあり、黒色土少量混入。                  |
| 8. 10YR3/2   | 黒褐色 | 粘土質シルト  | 堅く締まっている、粘性ほとんどなし。                        |
| 9. 10YR2/3   | 黒褐色 | 粘土質シルト  | 堅く締まっている、粘性ほとんどなし。                        |
| 10. 10YR2/2  | 黒褐色 | 粘土質シルト  | 堅く締まっている、粘性ほとんどなし。                        |
| 11. 10YR4/6  | 赤褐色 | 粘土質シルト  | 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし(ヒモ状となる)、焼土・炭化物を含む。   |
| 12. 10YR3/2  | 黒褐色 | 粘土質シルト  | 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし。                     |
| 13. 10YR3/3  | 黒褐色 | シルト質土   | 非常に堅く締まっている、粘性あり(ヒモ状となる)。                 |
| 14. 10YR2/2  | 黒褐色 | シルト質土   | 非常に堅く締まっている、粘性なし、焼土・炭化物を混入。               |
| 15. 10YR3/3  | 暗褐色 | 粘土質シルト  | 非常に堅く締まっている、粘性あり、シルトブロック少量混入。             |

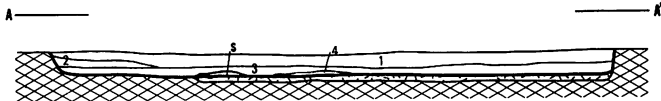


第42図 C-6 住居址-I A・I B(遺構-2)



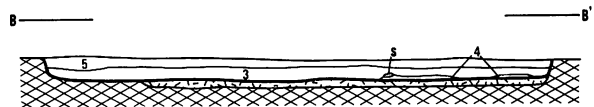
C-6住居址-I Bピット埋土土層

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 堅く締まっている、粘性なし、焼土・炭化物を多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 堅く締まっている、粘性ややあり、褐色シルトブロックを含む。
3. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 堅く締まっている、粘性あり、褐色シルトブロックを2層より多く含む。



C-6住居址-I B埋土土層

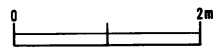
1. 10YR2/1 黒色 砂質 堅い、粘性あり。
2. 10YR3/2 黒褐色 堅い、粘性あり。
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし、褐色シルトブロック・焼土粒・炭化物を少量混入。
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 堅く締まっている、粘性ほとんどなし、黒褐色土のブロック少量混入。
5. 10YR2/1 黒色 堅い、粘性あり、20mm以下の褐色ブロックが少し入る、植生痕の赤銅色のサビが入る。



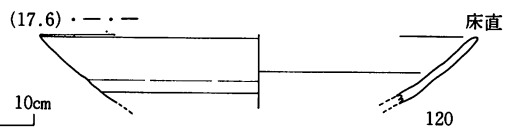
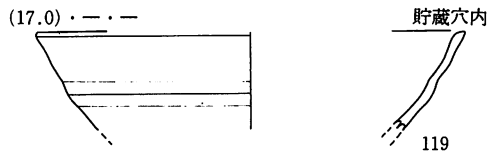
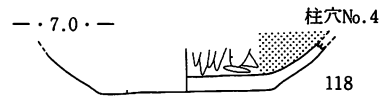
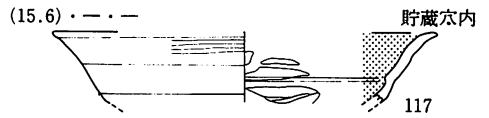
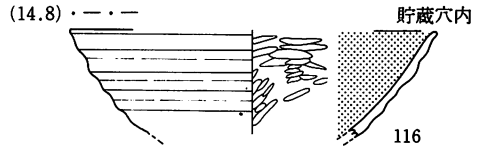
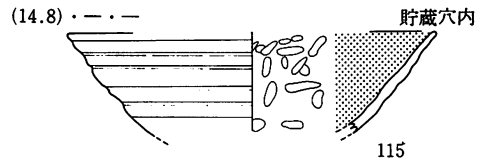
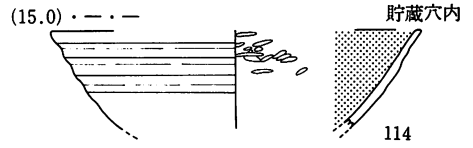
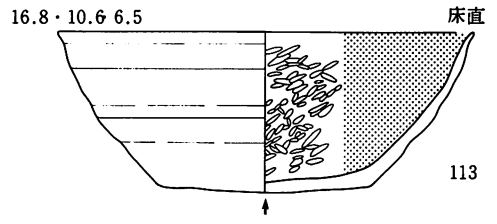
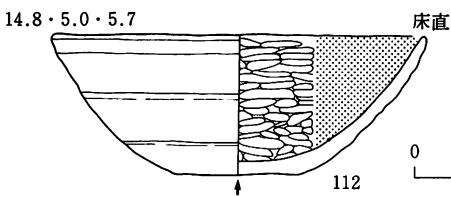
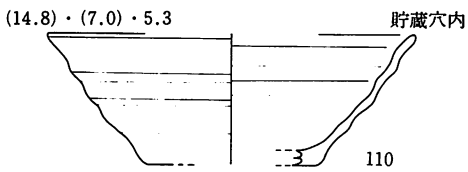
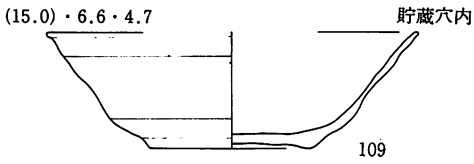
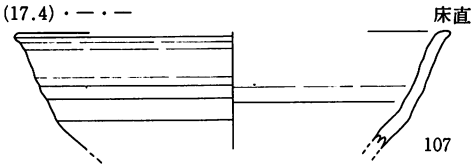
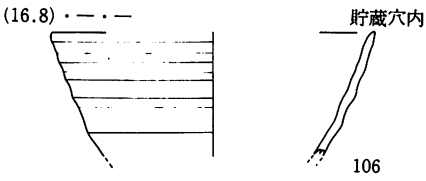
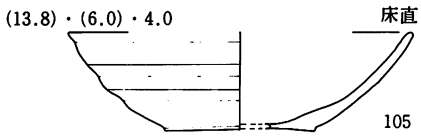
C-6住居址-I Bピット計測値

長径×短径 深さ

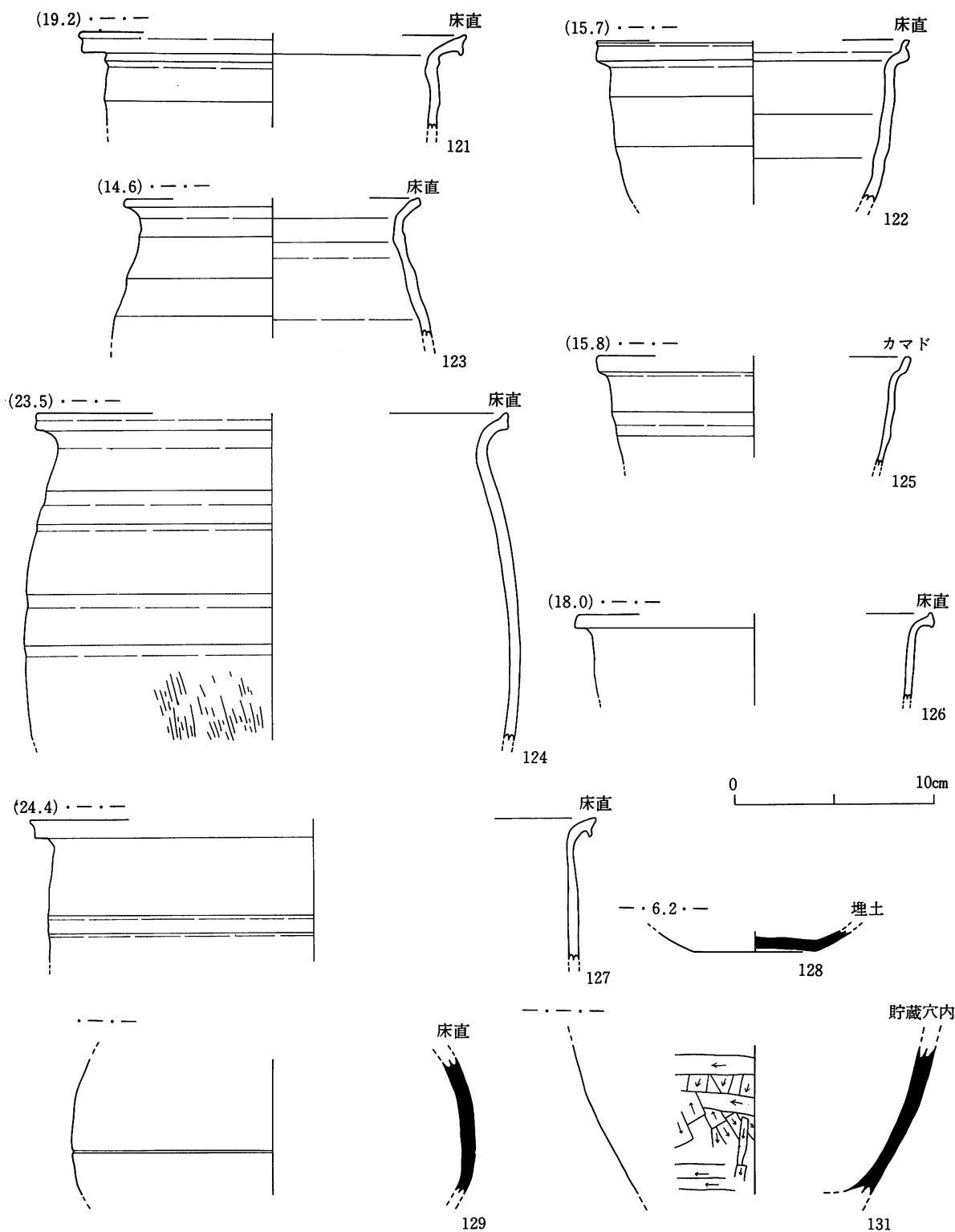
- |                |           |        |
|----------------|-----------|--------|
| P <sub>1</sub> | 35cm×32cm | 42.8cm |
| P <sub>2</sub> | 30cm× ?   | 51.5cm |
| P <sub>3</sub> | 32cm×26cm | 29.0cm |
| P <sub>4</sub> | 25cm× ?   | 37.0cm |



第43図 C-6住居址-I B(遺構-3)



第44図 C-6住居址-1(遺物-1)

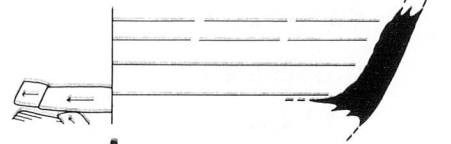
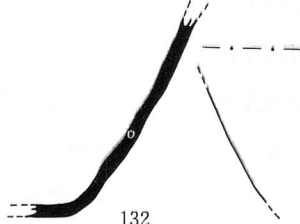
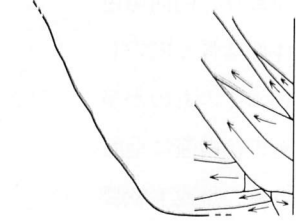


第45図 C-6住居址-I(遺物-2)

— (10.2) —

貯藏内

貯藏穴内



132

130

埋土

埋土

埋土



1017



1018



1019

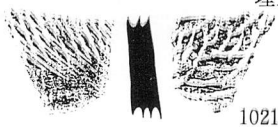
埋土

埋土

埋土



1020



1021



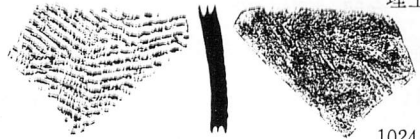
1022

埋土

埋土



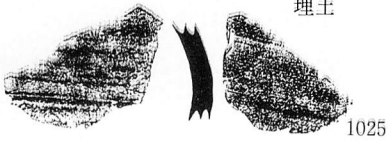
1023



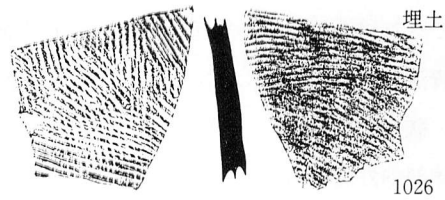
1024

埋土

埋土



1025



1026

0 10cm

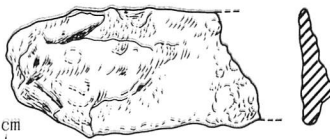
床直

床直



1158

0 5cm



1262

第46图 C-6住居址-1(遺物-3)

調整のもの（112・113）と回転糸切り無調整のもの（105・109～111・118）があり、内面黒色処理のものは再調整・非黒色処理のものは無調整のものに限定されている。体部は軽く内弯しながら外傾している。大きさは厳密には差があるが、平均すると口径が15～16cm位のものが多く、黒色処理のものと非黒色処理のものとの間に差はない。内面黒色処理のものは内面に全面ミガキが入っている。非黒色処理のものは色調が褐色や橙色を呈するものも多く、焼成も軟質である。

**甕形土器**（121～127） いずれもロクロ使用成形のものである。全体的な器形では体部が若干膨らむもの（123・124）とほぼ直立するもの（121・127）・下位ほど窄むもの（122・125・126）がありそうである。口縁部は頸部で強く外反し短かく、口唇は挽き出しによって縁帯状を呈するもの（121・124・126・127）・受口状のもの（122・125）・角張るもの（123）がある。大きさでは大型（124・127）と中型（121・123・126）・小型（122・125）がある。調整技法は体部外面上半はロクロナデ下半ヘラケズリまたはヘラナデが多く、内面はロクロナデのみが多い。色調が黄白色や淡い橙色で焼成は軟質である。

#### 須恵器

**坏形土器**（128） ロクロ使用成形のもので、底部切り離しが回転糸切り無調整である。底部と体部が若干残存する小破片であるため、詳細は不明である。

**甕形土器**（130～132） ロクロ使用成形のもので、底部～体部にかけての破片が出土し、3ヶが図化された。大きさは130は若干大きい131・132はほぼ同じである。調整技法は、体部外面はいずれもヘラケズリやヘラナデ調整されるが、内面はロクロナデのみである。底部切り離しはヘラナデによる再調整によって不明である。拓本図のものは体部破片を主体としているが、1018・1019・1022は口縁部破片である。体部破片の中で外面に平行タタキ目をもつものが主体でそれ以外はロクロナデのみである。内面は平行タタキ目（1026）・放射状タタキ目（1023）・青海波文（1021）等があり、それ以外に単にナデだけのもの（1017・1024）もある。

**瓶形土器**（129） 瓶もしくは壺と思われる体部破片が1ヶ出土している。ロクロ使用成形で、体部内外面ともロクロナデのみで調整されている。

#### その他

**土製品**（1158） 丸玉が1ヶ出土している。中心部に貫通孔をもち、全面黒色処理されている。

**鉄製品**（1262） 断面が偏平な鉄器が1ヶ出土している。器種は明確でないが、大きさや形状から考えて鎌の一部ではないかと推定される。（高橋与右エ門）

## 15) C-6住居址-1B

〔遺構〕(第43図、P L16A)

本住居址はC-6住居址-1Aの貼床を除去した面で、本住居址に伴うカマドの燃烧部と考えられる焼成面と、新たに柱穴状土坑が検出されたことにより、本住居址の存在を認定した。従って、規模・平面形・埋土・床面等で不明な部分が多い。柱穴配置から考えるとC-6住居址-1Aと規模がほぼ同じと推定されることや、北東隅部の柱穴がC-6住居址-1Aの柱穴と共用していると考えられることから、本住居址はC-6住居址-1Aの前身住居址と考えるのが妥当であろう。壁溝は検出されていない。

本住居址の範囲内でP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>までの土坑が検出された。それらの規模は径0.30m位で、深さは0.50m～0.65mを測り、平面形は円形または楕円形を呈する。埋土は暗褐色や黒褐色の粘土質シルトが主体で、全体的に締まって固い。これらの土坑は対角線上に位置していることや規模から考えて、本住居址に伴う柱穴を構成しているであろう。

カマドは東壁で検出され、柱穴と焼土の位置関係から壁中央より南に寄って位置しているものと推定される。袖部はそのほとんどを削剝されているが、C-6住居址-1Aの左側袖部の基底部に若干焼土の混入した褐色のシルトが観察されたことから、本住居址の右側袖部であろうと推定される。燃烧部の状態や規模は不明であるが、焼成面は東壁際のC-6住居址-1Aのカマド左側袖部の左脇に位置しており、柱穴の検出面と同位面で検出され、35cm×40cmの広がりがある。煙道部は検出されていないが、東壁より1.30m位東方で煙出部と考えられる土坑が検出されている。規模は一辺35cm×40cm位で深さは20cmを測り、平面形は若干歪んだ隅丸方形を呈する。

〔遺物〕

遺物は全く出土していない。

(高橋与右エ門)

## 16) C-6住居址-2A

〔遺構〕(第47・48図、P L16B)

本住居址はC-6住居址-1Aの貼床を除去した面でその存在が確認された。従って、壁やカマド袖部はC-6住居址-1Aの削剝によって不明である。C-6住居址-1Aとの新旧関係は本住居址の方が古い。

規模は南北4.3m・東西4.1mで壁高は0.1mを測り、壁は床面に対して105度の角度を示している。平面形はほぼ隅丸方形を呈し、主軸は北-南方向にあり、磁北に対して18度西に偏している。埋土は褐色や黒褐色を呈する粘土質のシルトで構成され、混入物や色調によって4層に細分されたが、それらの間には大差がなく近似している。埋土内には粒径5cm～10cmの円礫や

炭化物粒が少量混入していた。床は地山の暗褐色を呈するシルトで構築され、褐色のシルトで0.5cm～1cm位貼って床面としている。床面は良く締まって固く、起伏もなくほぼ水平に近い。壁溝は検出されていない。

床面でP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までの土坑が検出されている。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>の規模は径0.25m前後、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>は径0.45m位を測り、深さはP<sub>1</sub>が0.30m位、P<sub>2</sub>は0.60m位、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は0.40m位で、平面形は円形または楕円形を呈する。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は径0.65m位、深さは0.25m位を測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は、P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>は黒褐色を呈するシルトの単層、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は黒褐色と褐色を呈するシルトの混合した土で構成され単層である。P<sub>3</sub>には柱痕跡が残存しており、それによれば柱は径10cm位の円形で土坑底面に達している。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は黒褐色を呈するシルトで構成されている。土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は対角線上に位置していることや、規模・埋土等から判断して本住居址に伴う柱穴を構成するであろう。P<sub>5</sub>は位置や規模から本住居址に伴う貯蔵穴である可能性が高い。

カマドはC-6住居址-1によって袖部が削剝を受けているので詳細は不明であるが、カマド燃焼部に伴うと考えられる焼土が北壁際で検出され、さらに、北壁より北方向に延びている煙道部が検出されたことから、カマドの存在と位置を決定した。以上のことよりカマドは北壁に設置し壁中央より0.30m西に寄って位置している。燃焼部には掘り窪めもなく床面と同位面で奥壁に達し、煙道部とは明瞭な段差で接続している。燃焼部の焼土は0.40m×0.45m位の範囲で分布している。煙道部底面は煙出部に向かって緩やかな上がり勾配を示している。煙道部の巾は煙出部に向かって次第に狭くなり、底面は平坦である。煙出部には土坑が検出されている。

#### 〔遺物〕(第49図、P L 73B)

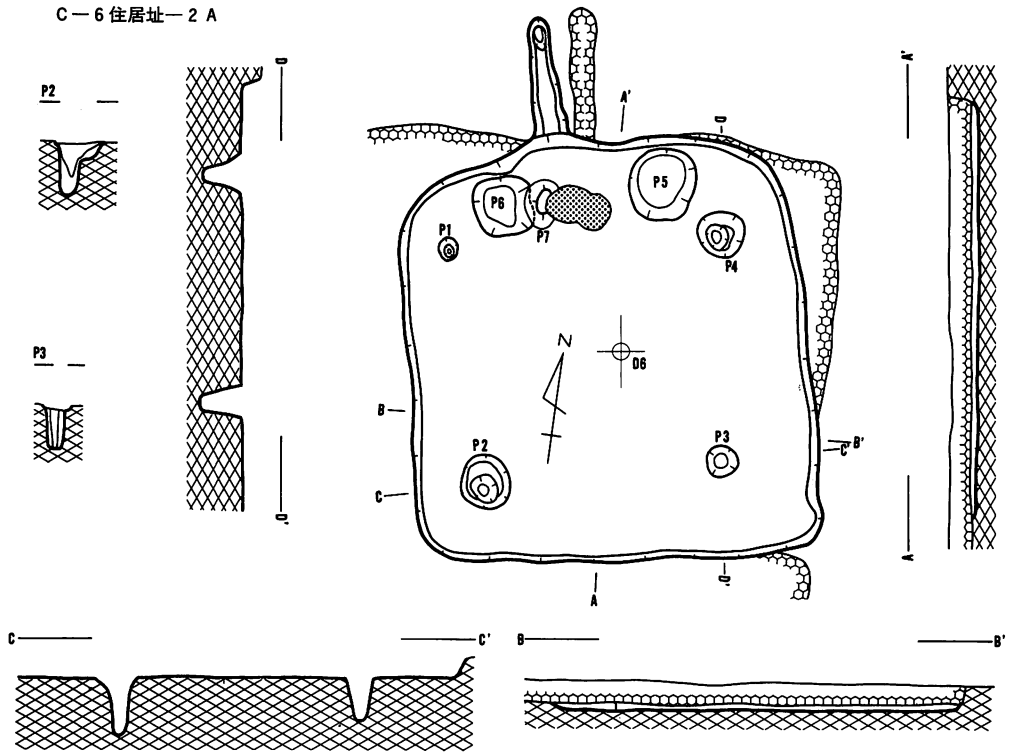
床面直上や埋土よりの出土遺物は非常に少ない。出土したものも小破片が多く、図化されたものは少ない。P<sub>4</sub>の埋土内より完形土器(136)と体部より口縁部にかけての $\frac{1}{2}$ 位残存するもの(137)が出土している。種類は土師器に限られ、器種では坏形土器・甕形土器・鉢形土器がある。

#### 土師器

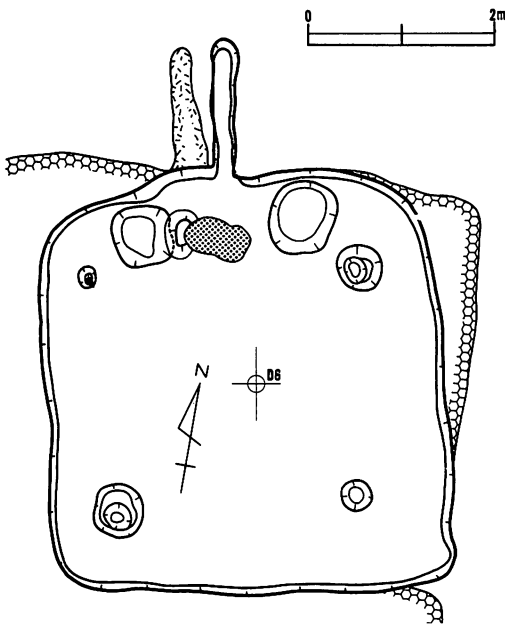
**坏形土器(133)** ロクロ未使用成形のもので、外面に段をもち内面に軽い稜をもつ丸底のものである。調整技法は口縁部外面ヨコナデー部ミガキで内面は全面ミガキ後黒色処理している。口縁部は段の位置で外反し、軽く内弯しながら口唇部に移行し、口唇部は丸味をもつ。

**甕形土器(134・136・137)** すべてロクロ未使用成形のものである。全体的な器形では長胴型のもの(134)・球胴型のもの(136・137)があり、134の頸部には鋸歯状の沈線が付されている。いずれも頸部に段をもち、口縁部は頸部より外反して口唇部に移行し、口唇部は平坦





C-6 住居址-2 B

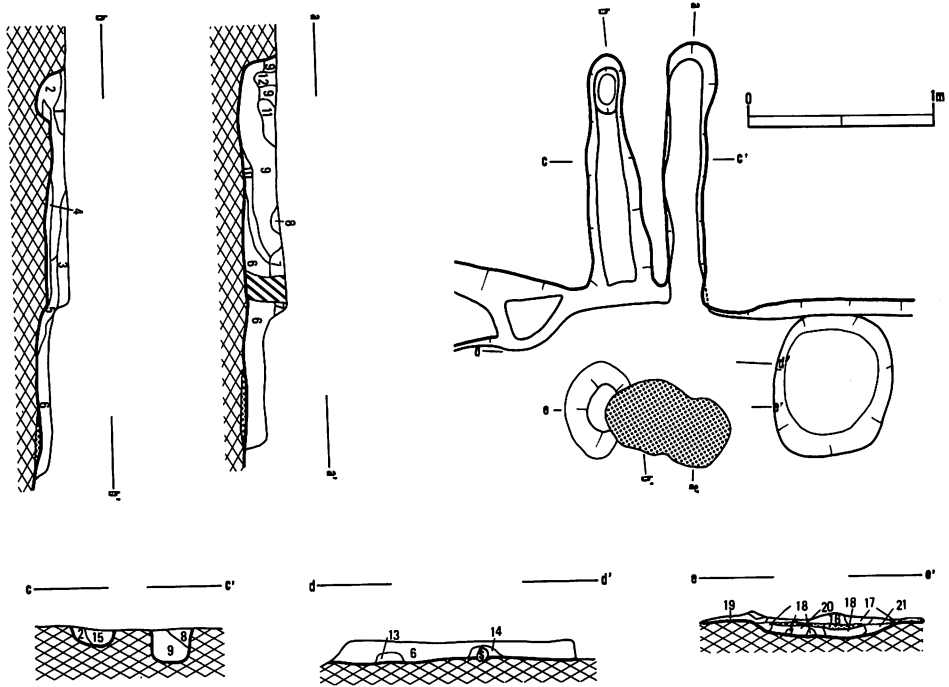


C-6 住居址-2 A ビット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	23cm×20cm	28cm
P <sub>2</sub>	30cm×22cm	48cm
P <sub>3</sub>	29cm×28cm	44cm
P <sub>4</sub>	24cm×20cm	46cm
P <sub>5</sub>	75cm×64cm	25cm
P <sub>6</sub>	70cm×64cm	20cm
P <sub>7</sub>	52cm× ?	?

C-6 住居址-2 A・2 B 埋土土層  
 1. 7.5YR2/2 黒褐色 粘性若干あり、シルトと地山の褐色シルトの混合が多くみられる。

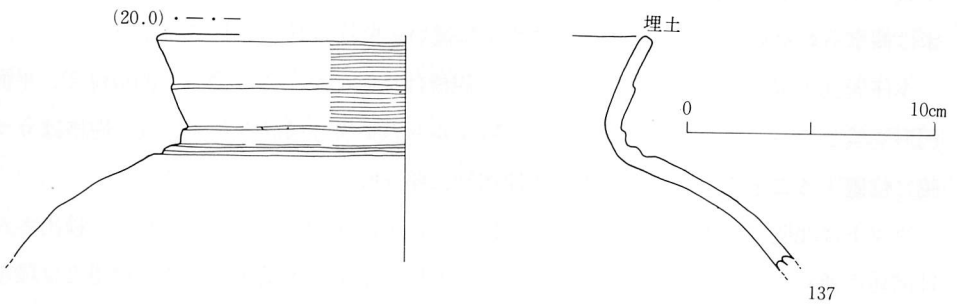
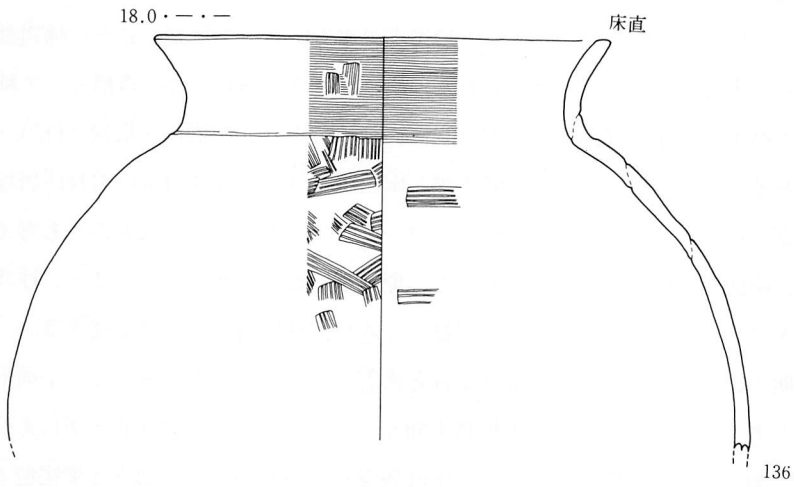
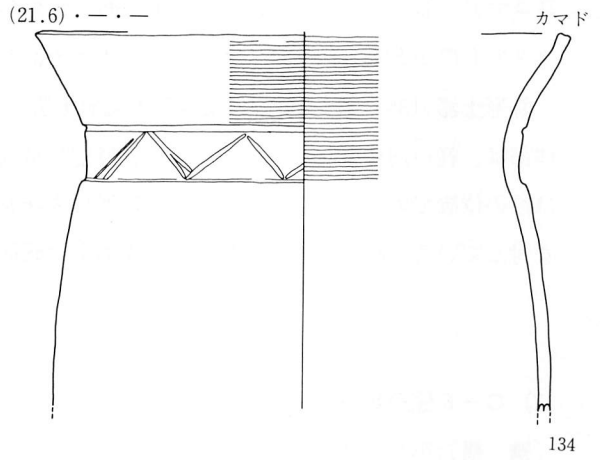
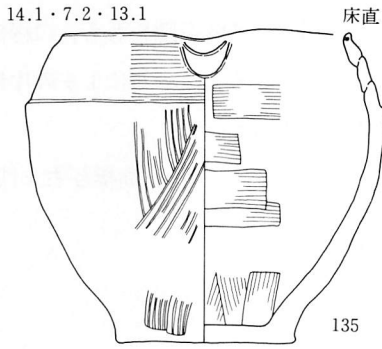
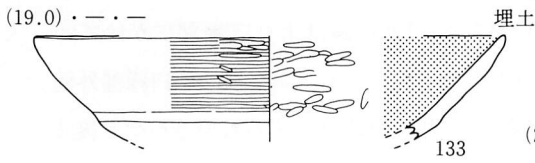
第47図 C-6 住居址-2 A・2 B(遺構-1)



C-6—住居址—2A・2Bカマド埋土土層

- |     |           |      |        |           |                                    |
|-----|-----------|------|--------|-----------|------------------------------------|
| 1.  | 10YR3/4   | 暗褐色  | シルト質土  | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、焼土少量と褐色シルト・黒褐色土がブロック状に混入。     |
| 2.  | 7.5YR3/2  | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、焼土・炭化物を少量混入。炭化物を少量含む。         |
| 3.  | 7.5YR3/2  | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、焼土・シルトブロック・炭化物を少量含む。炭化物を少量含む。 |
| 4.  | 10YR2/2   | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性あり(ヒモ状となる)、腐植性有機物少々と炭化物を含む。      |
| 5.  | 7.5YR3/3  | 暗褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、焼土・シルトブロックと炭化物を少量混入。          |
| 6.  | 10YR2/2   | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、焼土・褐色土ブロック・炭化物をそれぞれ微量含む。      |
| 7.  | 10YR2/3   | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、焼土を粒状と褐色シルトブロックを少量含む。         |
| 8.  | 5YR3/4    | 暗赤褐色 | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、焼土のブロック・黒褐色のにじみ少量あり。          |
| 9.  | 10YR2/2   | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性あり、焼土層・褐色シルトを少々混入。褐色シルトを少々含む。    |
| 10. | 5YR3/4    | 暗赤褐色 | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、褐色シルトのにじみあり。                  |
| 11. | 5YR3/2    | 暗赤褐色 | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、焼土粒を少量含む。                     |
| 12. | 10YR1.7/1 | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、焼土を多く含む。                      |
| 13. | 7.5YR2/2  | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性ややあり、黒色土のブロック                    |
| 14. | 10YR2/2   | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性ややあり、焼土を多く含む。                    |
| 15. | 10YR2/2   | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性ややあり、黒色土・褐色土をブロック状に含む。           |
| 16. | 10YR2/2   | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性ややあり、焼土ブロックを多量に混入。               |
| 17. | 10YR2/2   | 黒褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性ややあり。                            |
| 18. | 5YR4/6    | 赤褐色  | シルト質粘土 | 堅く縮まっている。 | 粘性ややあり、よく焼けている。                    |
| 19. | 5YR5/8    | 明赤褐色 | シルト質土  | 堅く縮まっている。 | 粘性なし、非常によく焼けている。                   |
| 20. | 5YR3/2    | 暗赤褐色 | シルト質土  | 堅く縮まっている。 | 粘性あり、半焼けのシルト                       |
| 21. | 7.5YR3/4  | 暗褐色  | シルト質土  | 堅く縮まっている。 | 粘性あり(ヒモ状となる)、褐色シルト・黒色土・焼土の混合層。     |

第48図 C-6住居址—2A・2B(遺構—2)



第49図 C-6住居址-2A(遺物)

なもの(134・136・137)と丸味をもつもの(138)がある。138の頸部より口縁部にかけては複数の段や沈線が付されている。底部は欠損しているので不明である。調整技法は口縁部外面ヨコナデ一部ハケメで内面はヨコナデ一部ミガキである。体部外面はハケメのものとハケメ後ミガキのものがあり、内面はハケメやヘラナデである。

**鉢形土器(135)** ロクロ未使用成形の完形土器である。全体的な器形は、底部より外反する体部は、軽い内弯気味で上位に移行し、肩部に最大径をもつ。頸部には軽い段をもち、口縁部は段の位置で内反して口唇に移行し、口唇は丸味をもって直立している。口縁部に1ヶの片口を付している。底部の周囲に軽い突出をもち、底面は平底の素文である。

(高橋与右エ門)

## 17) C-6住居址-2B

〔遺構〕(第47・48図、P L16B)

本住居址はC-6住居址-2Aによって削剝を受けているので不明な部分が多い。しかし、C-6住居址-2Aに伴うカマド燃焼部焼土よりも下位で、位置が若干異なる焼土が検出され、さらに、C-6住居址-2Aに伴うカマド煙道部の東方0.40mの位置で新たに煙道部が検出されたことから、本住居址の存在が確認された。従って、本住居址に伴う遺構として検出されたのは、カマド燃焼部焼土と煙道部・貯蔵穴・床面のみであり、平面形・規模・柱穴・カマド袖部は不明である。以上の様なことから考えて、本住居址はC-6住居址の前身住居址である可能性が強いが、C-6住居址-2Aに伴うカマドや床面を作りなおしたものとも考えられる。本報告では、床面が2面検出されていること、煙道部底面に高低差があること、柱穴が共用されている等といったことから、C-6住居址-2Aの前身住居址として記述する。

規模は不明であるが、C-6住居址-2Aと大差のない規模と推定される。平面形もほぼ同様であろうと考えられるが、煙道部の延長方向からみると、主軸方向は北-南にあり磁北に対して15度西に偏している。埋土は3cm～5cm位残存していたが、その部分は黒褐色を呈する粘土質シルトの単層で構成されている。床は地山の暗褐色を呈するシルトで構築されており、貼床は観察されない。床面は平坦でほぼ水平に近い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>の土坑が検出され、規模は径0.65m前後・深さ0.25m位で、平面形は楕円形を呈している。埋土は黒褐色を呈するシルトの単層で構成されている。性格はカマドの右脇に位置することや規模から考えて本住居址に伴う貯蔵穴と考えられる。

カマドは北壁で検出されたが、壁のほぼ中央に位置するものと推定される。検出された部分は前述の通りである。燃焼部は掘り窪めもなくほぼ水平で奥壁まで続き、煙道とは段差がない。燃焼部焼土は35cm×40cmの範囲に分布している。煙道部底面は平坦でほぼ水平であり、煙出部

に土坑はない。

〔遺物〕

全く出土していない。

(高橋与右エ門)

18) C-9住居址

〔遺構〕(第50図、PL17A)

本住居址は東側がD-8住居址-1と重複し、さらに、西側でB-9土坑と、北西部でB-8土坑-2と重複しているが、遺構検出面の土層変化によって全体が把握された。重複遺構との新旧関係は、重複するいずれの遺構より本住居址が新しい。

規模は東西5.4m・南北5.8mであるが、各壁で長さが若干差があり、特に北壁は4.8m位・南壁は5.6m位と0.8mもの差がある。壁高は0.06m位を測り、壁は床面に対して120度の角度を示している。平面形は台形気味で若干歪んだ方形を呈し、主軸方向は東北東-西南西にあり磁北に対して80度東に偏している。埋土は暗褐色粘土で構成されているが、混入物の違いによって2層に細分された。混入物としては炭化物粒や焼土粒が多く観察される。床は西側半分が地山の暗褐色粘土で、さらに、東側半分がD-8住居址-1の埋土で構築され、貼床せずそのまま床面としている。床面は平坦で固く締まっている。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面よりP<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>までの土坑が検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の規模は径0.30m位で、深さは0.15m~0.30mまで差がみられ、平面形は円形である。P<sub>5</sub>は径0.40m・深さ0.10mで、平面形は円形である。P<sub>6</sub>は1.0m×0.80mの規模で深さは0.10mである。P<sub>7</sub>は0.60m×0.50mの規模で深さは0.43mである。P<sub>8</sub>は1.1m×1.0mで深さは0.50mである。P<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>の埋土は黒色を呈するシルトであり、極めて多量の炭化物粒や土師器の破片を混入している。性格としては、P<sub>4</sub>はP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の位置関係からみれば若干ずれた位置にあるが、これはカマド前庭部を避けたためと考えればP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は本住居址に伴う柱穴を構成するであろう。P<sub>5</sub>は柱穴状を呈する土坑であるが、本住居址との対応関係は不明である。P<sub>6</sub>~P<sub>8</sub>は規模・形状・位置・出土遺物から本住居址に伴う貯蔵穴と考えられる。

カマドは東壁で検出され、壁中央より1.0mほど南に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部であり、天井部は検出されていない。左側袖部は暗オリーブ色を呈するシルトの貼り付けで構築し、右側袖部は焼成を受けた粘土塊や炭化物粒・土師器片が混入した黒色と礫によって構築している。この状況は、右側の袖部は造りかえによるものと考えられ、本来は暗オリーブ色を呈するシルトで構築されたものであろう。燃烧部は床面とほぼ同位面であり、煙道部とも同位面で接続している。燃烧部焼土は焚口部より燃烧部全体に及んでいるが、よく焼成を受けた焼土は中央よりやや北側に偏して存在する。また、天井部を構成したシルト

が燃焼部上面と左側袖部の外側に被っている状況が検出された。煙道部底面は平坦で、煙出部には土坑をもつ。煙出部の埋土は黒色のシルトで炭化物粒や礫が混入していた。

〔遺物〕(第51・52・53・54・55図、P L 74・75・76)

埋土内や床面直上等で出土しているが、その中でもP<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>から多くの土師器が出土している。種類は土師器・須恵器・鉄製品であり、器種は坏形土器・甕形土器・瓶形土器・刀子等がある。

### 土師器

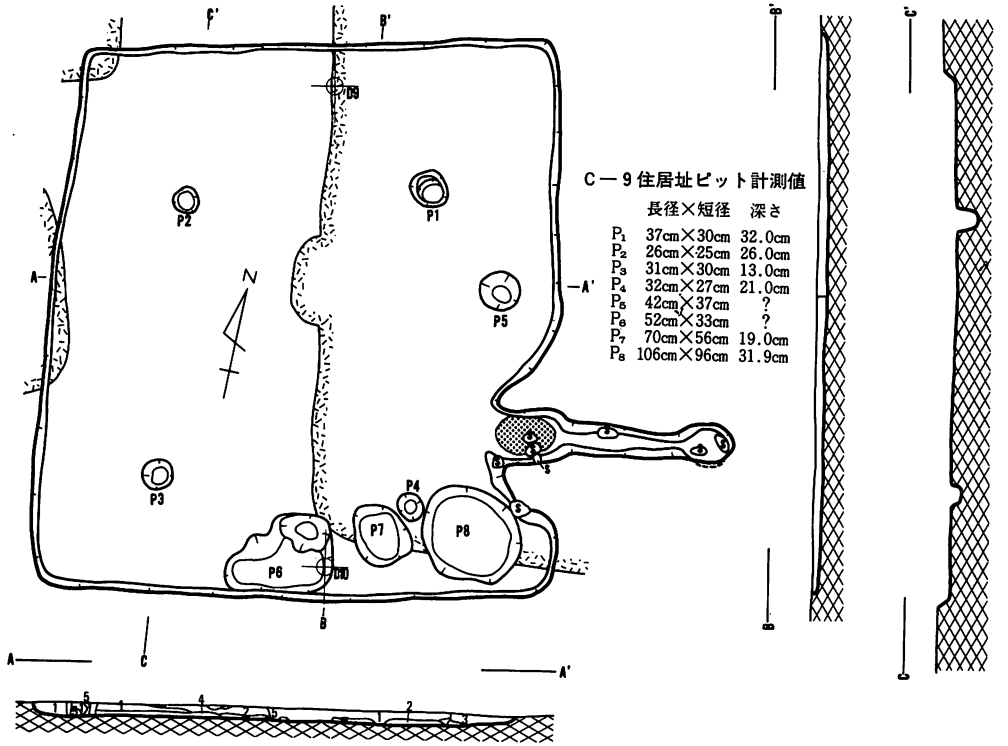
**坏形土器**(138～167) すべてロクロ使用成形のもので、149・153・168以外は内面が黒色処理されている。底部切り離し技法は回転糸切りで、さらに、底面のみ再調整するもの(150・155・156・161・163・164)と底部周囲も再調整するもの(139・152・162)と再調整しないものがある。体部は直線的に外傾するもの(155)・内弯気味に外傾するもの(139～143・145・150・154・156～160・162・163・165～167)・外弯気味に外傾するもの(164)等があり、その中で内弯気味に外傾するものが主体をなしている。大きさはあまり差がないが、幾分大き目のものと小さ目のものがある。

**甕形土器**(168～176) すべてロクロ使用成形のものである。全体的な器形では体部が若干膨らむもの(170・171・173・174・175)と上半がほぼ直立するもの(172・177)・頸部より次第に窄んで下位に移行するもの(176)がある。大きさでは大型(170・171・172・177)・中型(174・176)・小型(168・173・175)がある。口縁部は頸部より大きく外反して口唇に移行し、口唇部は挽き出しによって縁帯状を呈するもの(170・171・172・176・177)・角張るもの(174)・丸味をもつもの(175)がある。調整技法は体部下半がヘラケズリされるもの(171)やカキ目をもつもの(177)等があり、さらにタタキ目をもつもの(176)がある。底部を残存している168の底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。

### 須恵器

**甕形土器**(177～180・1027～1032) すべてロクロ使用成形のもので図化されたものは4ヶのみである。他は小破片や体部の破片であるため代表的なものを拓本図とした。図化された個体も完形のものはない。177～179は口縁部の破片であるが、177・178は口唇が挽き出され縁帯状を呈し、179は先細りとなりながら口縁部上端が小さく外反している。180は頸部から肩部にかけての破片である。これらはいわゆる壺形土器である可能性がある。拓本図の中で外面に平行タタキ目をもつもの(1027・1029・1031・1032)でも内面の調整は平行タタキ目(1027)・ロクロナデのみ(1029・1030)や凸面当て道具による凹凸(1031・1032)といった種類がある。1030は平行タタキ目の痕跡を残しているが、その上をさらにカキ目調整している。1028は内外面ともにロクロナデだけのものである。

**瓶形土器**(181) 長頸瓶と考えられることから甕形土器と分離させた。頸部と肩部の一部を



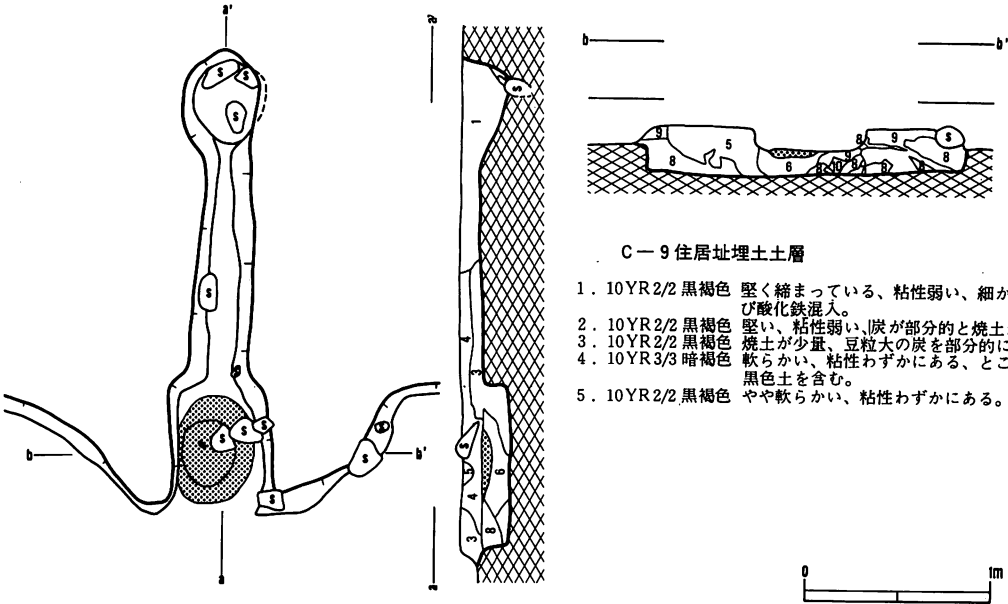
C-9 住居址ピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	37cm×30cm	32.0cm
P <sub>2</sub>	26cm×25cm	26.0cm
P <sub>3</sub>	31cm×30cm	13.0cm
P <sub>4</sub>	32cm×27cm	21.0cm
P <sub>5</sub>	42cm×37cm	?
P <sub>6</sub>	52cm×33cm	?
P <sub>7</sub>	70cm×56cm	19.0cm
P <sub>8</sub>	106cm×96cm	31.9cm

C-9 住居址カマド埋土土層

1. 10YR3/2 黒褐色
2. 10YR3/2 黒褐色
3. 10YR2/2 黒褐色
4. 10YR2/2 黒褐色
5. 2.5YR3/3 暗オリーブ色 シルト質土
6. 2.5YR4/6 赤褐色
7. 10YR4/6 褐 色
8. 10YR2/2 黒褐色
9. 10YR2/2 黒褐色
10. 10YR6/8 明黄褐色

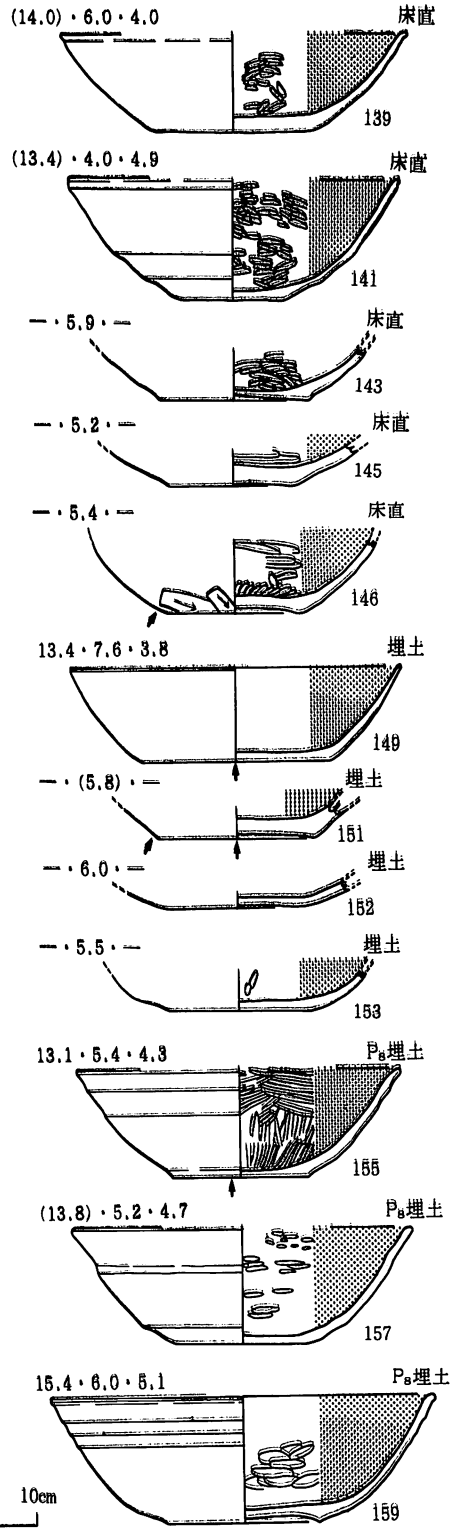
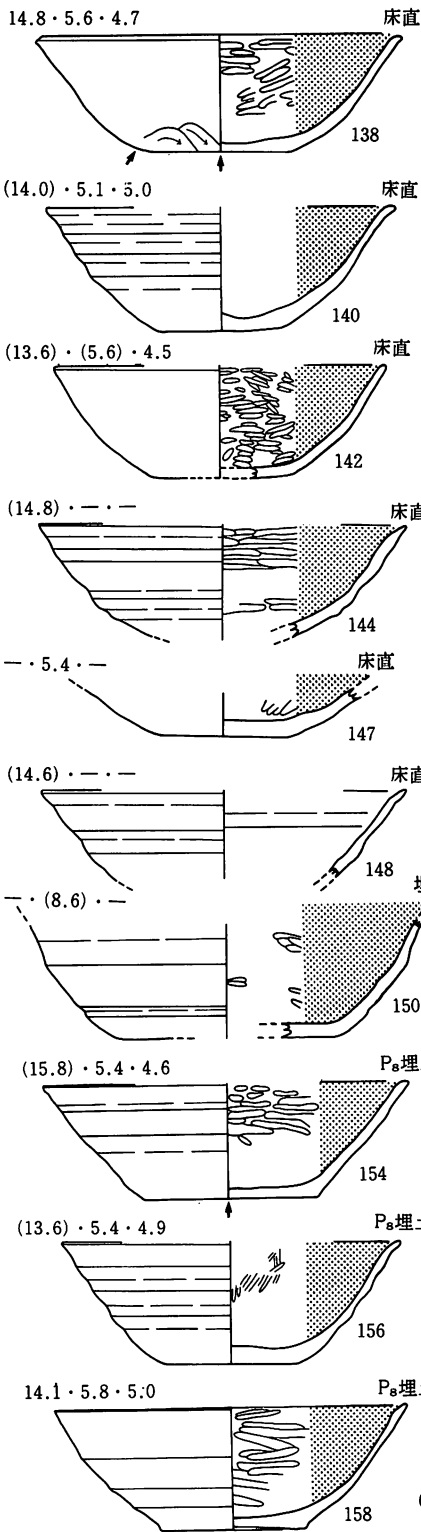
軟らかい、粘性弱い、焼土が混入。  
 軟らかい、粘性なし、暗褐色のシルト混入。  
 堅く締まっている、粘性弱い、少量の焼土混入。  
 堅く締まっている、粘性弱い、1cm~2cm位の焼土ブロック混入。  
 堅く締まっている、粘性なし、焼土が混入。  
 堅く締まっている、粘性なし、焼土が混入。  
 砂質シルト  
 堅く締まっている、粘性なし、  
 堅く締まっている、粘性なし、  
 堅く締まっている、粘性弱い、1cm位の炭化物ブロック混入。  
 堅く締まっている、粘性なし、焼土と炭が混入。  
 堅く締まっている、粘性少ない、焼成を受けたシルトブロック。



C-9 住居址埋土土層

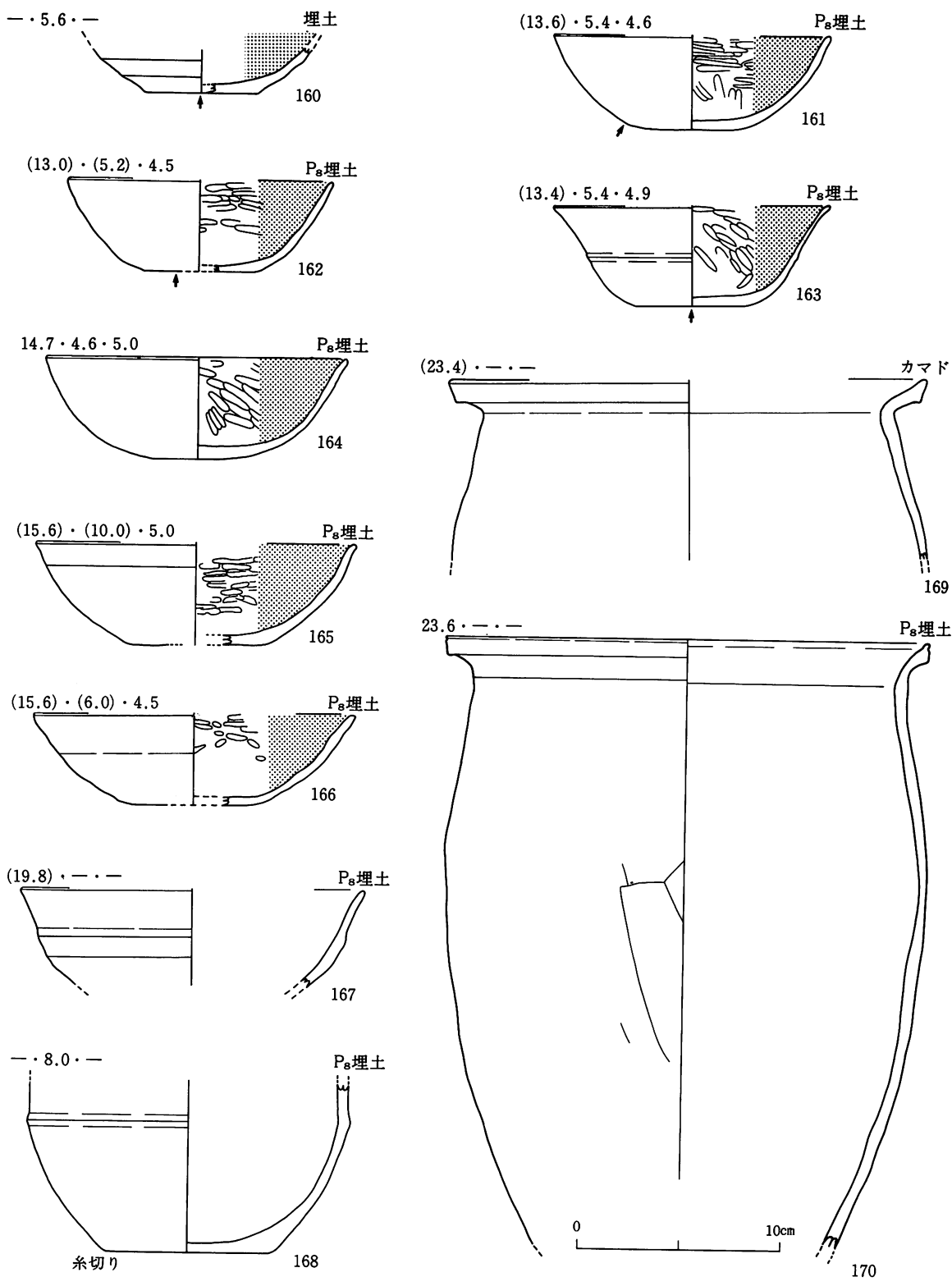
1. 10YR2/2 黒褐色 堅く締まっている、粘性弱い、細かい炭化物及び酸化鉄混入。
2. 10YR2/2 黒褐色 堅い、粘性弱い、炭が部分的と焼土が多く混入。
3. 10YR2/2 黒褐色 焼土が少量、豆粒大の炭を部分的に含む。
4. 10YR3/3 暗褐色 軟らかい、粘性わずかにある、ところどころに黒色土を含む。
5. 10YR2/2 黒褐色 やや軟らかい、粘性わずかにある。

第50図 C-9 住居址(遺構)

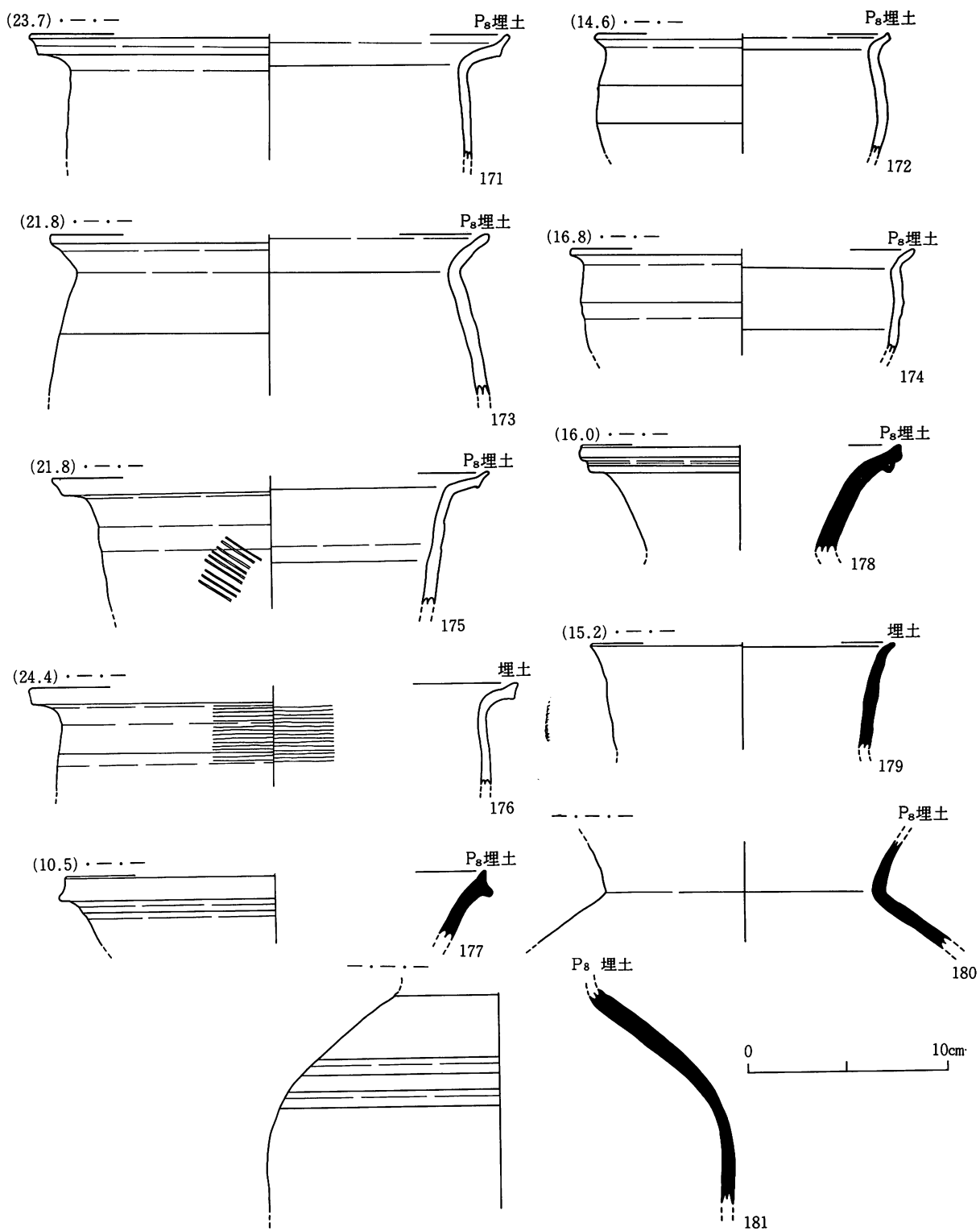


第51図 C-9住居址(遺物-1)

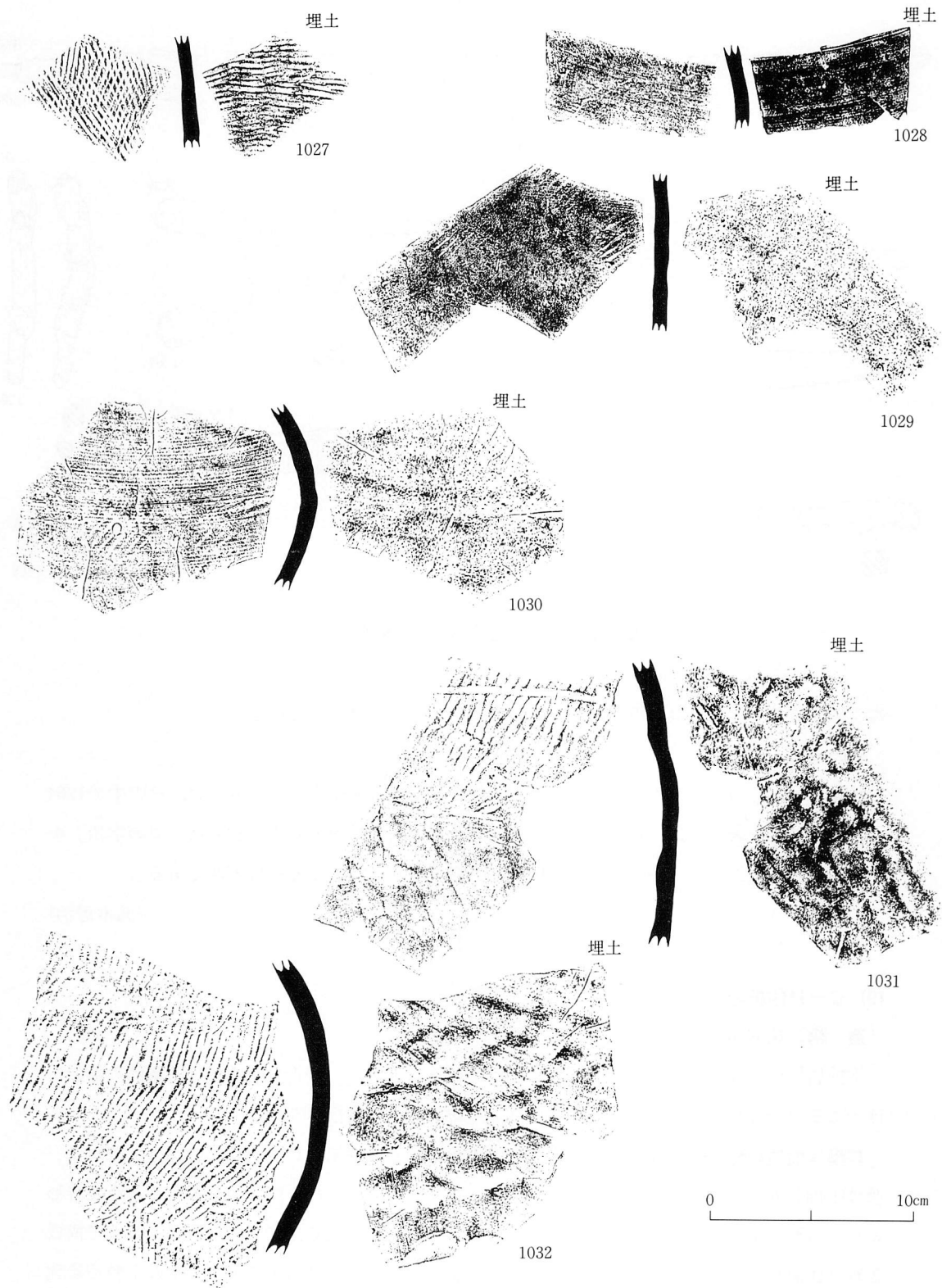




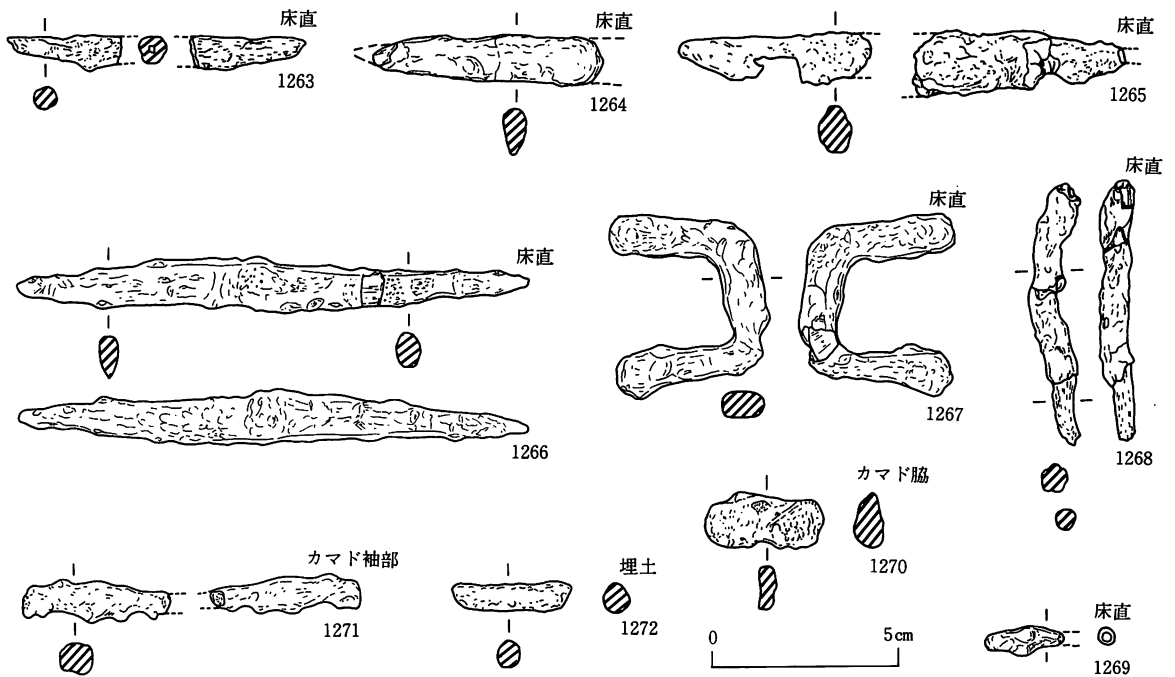
第52図 C-9住居址(遺物-2)



第53图 C—9 住居址(遺物—3)



第54図 C-9 住居址(遺物-4)



第55図 C-9住居址(遺物-5)

残す破片である。ロクロ使用成形のもので、ロクロナデ調整されている。

その他

鉄製品(1263~1272) 鉄器が10点出土しているが器種の明確なものは少ない。その中で1264~1266は刀子と考えられ、1266は完形と考えられるが他は破片である。1267は「コの字状」を呈している。他の1268~1271は断面が円形や方形を呈しているが器種は不明である。

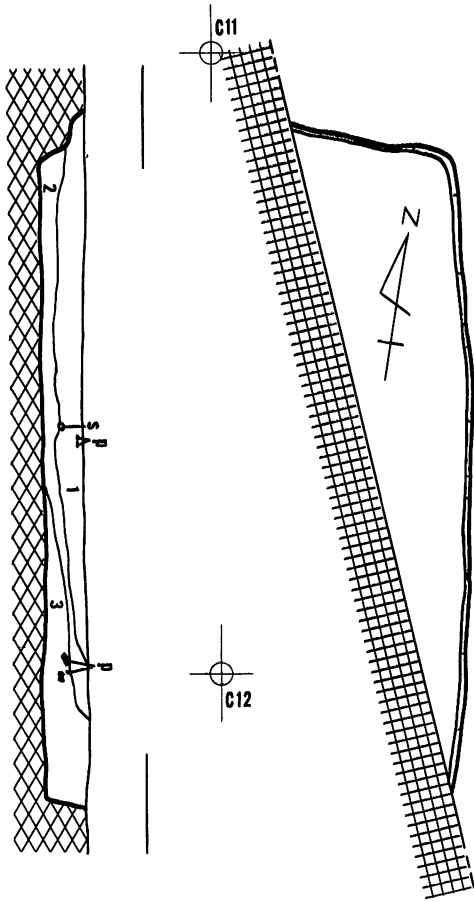
(鈴木恵治)

19) C-11住居址

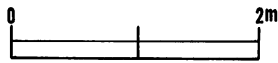
〔遺構〕(第56図、P L 17 B)

本住居址の大部分は西側調査区域外に延びていることから、精査した部分は北東隅の部分だけであるので詳細は不明である。本住居址と重複する他の遺構はない。

規模は前述の様な状況から不明であるが、東壁が約5m検出されている。壁高は0.62mで、壁は床面に対して100度の角度を示している。平面形は検出された部分から考えると隅丸方形または方形を呈するものと推定される。埋土は暗褐色や黒褐色を呈する粘土質のシルトで構成され、色調や混入物等から3層に大別された。混入物としては黄褐色を呈するシルト粒や炭化



- C-11住居址埋土土層
1. 黒褐色 シルト質土 黄褐色シルトと土器片混入。
  2. 黄褐色 シルト質土
  3. 暗黒褐色 シルト質土 炭化物が多量に混入。



第56図 C-11住居址(遺構)

物粒が観察される。床は地山の黄褐色を呈する粘土で構築され、そのまま床面としている。床面上で粒径14cm×11cmや32cm×16cmの円礫が出土しているが、性格は不明である。また、床面には焼土粒や炭化物粒の分布が観察された。壁溝は検出されていない。

床面で検出された土坑はない。

精査した範囲内ではカマドが検出されていない。

〔遺物〕

埋土内より少量の破片が出土しているが、床面直上からは全く出土していない。出土した破片も小破片が多く、図化できなかった。種類はロクロ未使用成形の土師器のみで、器形は甕形土器だけである。 (高橋与右エ門)

20) C-12住居址

〔遺構〕(第57図、P L 18A)

本住居址は西側が調査区域外に延びているので、全体のほぼ1/4に相当する東壁寄りの部分が検出された。検出された部分も床面近くまで削剝を受けていることから、不明な部分が多い。

規模は東壁部分の南北3.20mで、東西は不明である。壁高は僅か0.02mであり、壁の角度は不明である。平面形は、検出された北東と南東の各隅の形状から隅丸方形を呈するものと推定される。主軸は東-西方向にあり、磁北に対して85度東に偏している。埋土は黒色を呈するシルトに黄褐色の粘土粒が少量混入した土で構成され、水酸化鉄の集積も観察されている。床面は地山の黄褐色を呈する粘土で構築され、貼床はない。床面は良く締まっています。床面直

上には全面に亘って炭化材・焼土粒・炭化物粒の広がり観察され、その中で、炭化材は北東側で多く検出された。炭化材の大きさは長さ12cm・巾10cmのものから、長さ50cm・巾18cm位まであり、長軸は壁から中央に向かっている。南東側の床面で26cm×15cmの範囲の焼土が検出されたが、地床炉に伴うものではない。以上のことを総合して考えると、本住居址は焼失した住居址と推定される。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の土坑が検出されている。P<sub>1</sub>の規模が0.20m×0.18m・深さ0.33mで、P<sub>2</sub>は規模0.18m×0.16m・深さ0.41mであり、平面形はいずれも円形である。埋土は少量の焼土粒・炭化物粒を混入した暗褐色のシルトで構成され、柱痕跡は確認されていない。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は対角線上に位置するらしいことや、規模・形状から本住居址に伴う柱穴を構成すると考えられ、対応する他の柱穴は調査区域外に位置するであろう。貯蔵穴と考えられる土坑はない。

カマドは東壁で検出され、壁中央より0.20m南に寄って位置する。検出されたのは袖部・燃烧部のみであり、天井部や煙道部は削剝によって不明である。右側袖部は褐色のシルトを貼り付けて構築し、焚口付近には粒径24cm×17cmの細長い円礫が1ヶ縦位で全長の½ほど埋め込まれ、その囲周にも褐色を呈するシルトを貼り付けていた。左側袖部は褐色のシルトの貼り付けのみによって構築され、焚口付近への礫埋設はない。燃烧部は若干掘り窪められ、中央部より次第に上がり勾配で奥壁へ移行しているが、煙道部との段差は不明である。燃烧部中央には粒径12cm×10cmの円礫が若干傾斜して埋設され、支脚として利用されている。焼土は焚口部より支脚付近に及び、33cm×27cmの範囲がある。また、燃烧部には口径20.5cm・器高26cmの土師器甕形土器が1ヶ埋設され、焚口部に向かって横転していた。煙出部は燃烧部奥壁の東方0.80mで検出され、径0.20m・深さ0.23mの土坑状を呈している。

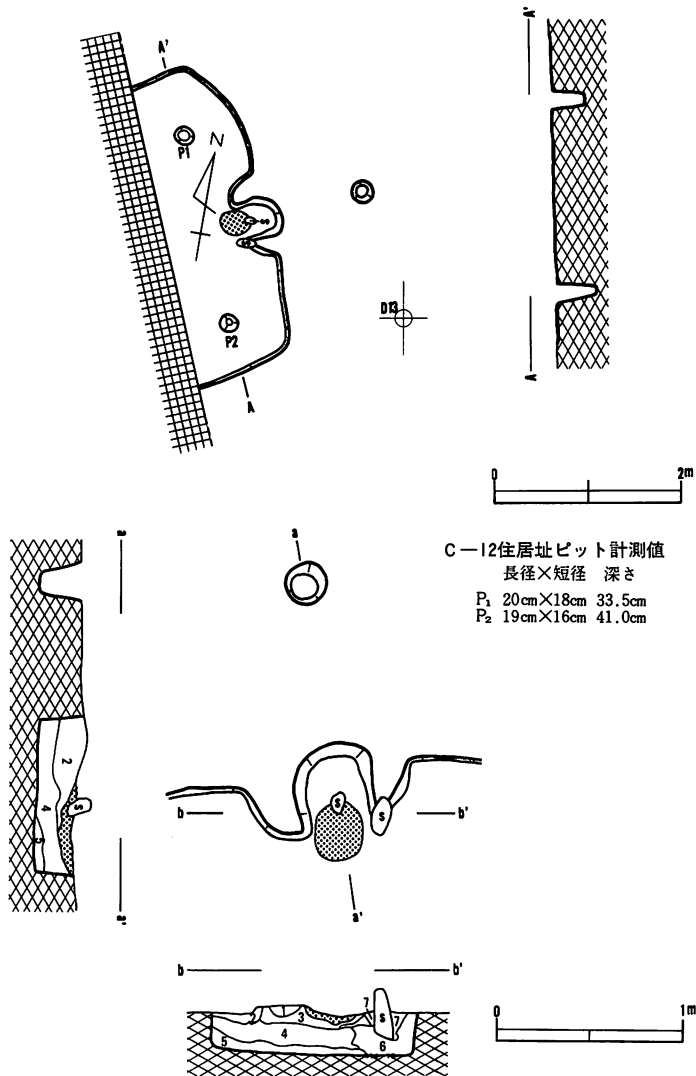
#### [遺物](第58図・P L 77A)

カマド燃烧部内から1ヶの土師器甕形土器が出土している。他に埋土内からも出土したが、小破片のみであり図化されたものはない。すべて土師器に限られ、器種では坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器** 図化されたものはないが、すべてロクロ未使用成形のものである。明瞭ではないが、体部に軽い段をもつらしい。

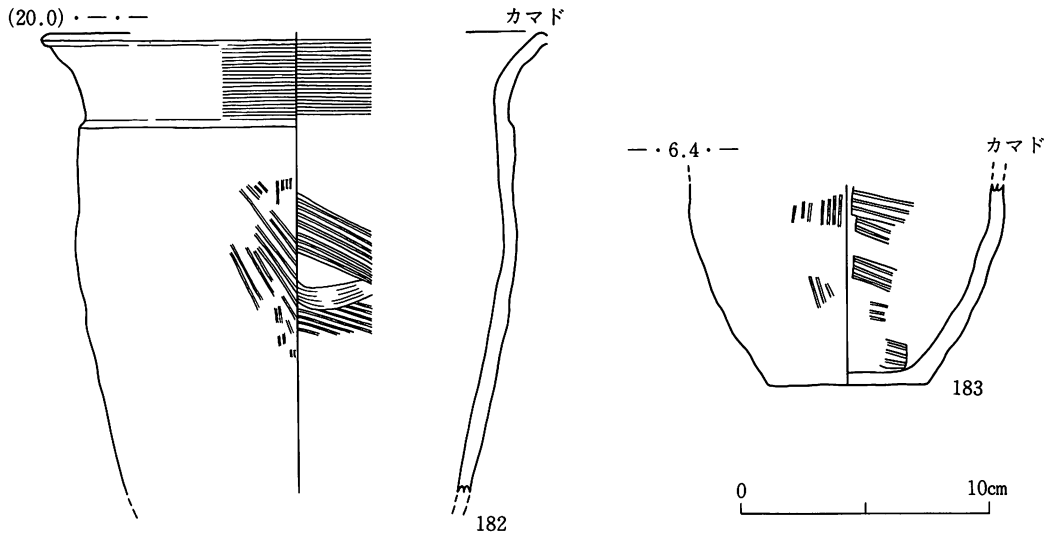
**甕形土器**(182・183) ロクロ未使用成形のものである。実測図では2ヶ体分としているが、2ヶともカマド燃烧部で出土したものであり、本来は同一個体である可能性が大きい。器形は体部最大径が体部上半にあり、頸部には軽い段をもっている。口縁部は頸部段の位置より外反して口唇に移行し、口唇はナデによって平坦で、下方に若干突出している。底部の周囲には突出もなく、底面はナデによって無文である。調整技法は、口縁部内外面ともヨコナデ・体部外



C-12住居址カマド埋土土層

- |                 |                              |
|-----------------|------------------------------|
| 1. 7.5YR4/3 褐色  | 堅く締まっている、粘性弱い、酸化鉄をわずかに混入。    |
| 2. 7.5YR4/4 褐色  | 堅く締まっている、粘性弱い、黒色土混入。         |
| 3. 7.5YR3/3 暗褐色 | シルト質土 粘性わずかに混入、酸化鉄の浸透がみられる。  |
| 4. 7.5YR3/3 暗褐色 | シルト質土 粘性少しあり。                |
| 5. 7.5YR3/3 暗褐色 | シルト質土 粘性少しあり。                |
| 6. 7.5YR3/4 暗褐色 | シルト質土 粘性ほとんどなし。              |
| 7. 5YR3/2 暗赤褐色  | 粘土質 やや堅い、粘性少しあり、酸化鉄の浸透がみられる。 |

第57図 C-12住居址(遺構)



第58図 C-12住居址(遺物)

面ハケメ後スリケシ・内面ハケメ一部ヘラナデである。

(山口了紀)

## 21) C-13住居址

〔遺構〕(第59図、P L 18B)

本住居址は重複遺構もなく単独で検出されたため、全容を把握し得た。

規模は西北西-東南東方向で約4.0m、北北東-南南西方向で約3.6mを測り、壁高は0.13m~0.2mの範囲であり、壁は床面に対してほぼ直立している。平面形は主軸方向が若干長い縦長の隅丸長方形を呈する。主軸は西北西-東南東方向にあり、磁北に対して60度西に偏している。埋土はオリブ黒色の砂質シルトや黒褐色を呈する粘土で構成され、色調や混入物で2層に細分された。混入物としては砂や小石をブロック状に含んでいる。埋土最下層では床面に接する状態で多くの礫が検出されたが性格は不明である。また、南東壁中央部で壁に食い込んで0.6m間隔に礫を検出したが、出入口との関連が考えられる。床は地山の褐色を呈する砂質シルトによって構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は固く締まり、平坦である。本住居址では壁直下の床面で壁溝が検出され、ほぼ全周している。南西壁中央部で若干広がる部分があるが、壁溝の上縁巾は約0.18mであり、深さは0.04m~0.10mの範囲である。

本住居址の床面からP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の土坑が検出されている。規模は径0.25m・深さ0.30m~0.60mで、平面形は円形や楕円形を呈する。また、P<sub>4</sub>は0.6m×0.50m・深さ0.16mの不整形な土坑状の掘方を伴う。埋土は黒褐色を呈する粘土で構成され、柱痕跡は確認されていない。

カマドは北西壁で検出され、ほぼ壁中央に位置する。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部であり、天井部は検出されていない。袖部は地山からの削り出しによって構築され、左右袖部



の焚口付近には粒径 30cm×15cm の円礫を各1ヶを、縦位でお互いに内傾し合う様に全長の $\frac{1}{2}$ 位埋め込んでいる。また、焚口部床面には粒径 40cm×16cm×7cm の円礫が左右袖部の間を塞ぐ様な状態で検出された。このことから焚口部は3ヶの礫を使用して「 $\square$ 」状に組み立てたものと推定される。燃烧部には掘り窪めもなく、床面と同じ面で奥壁へ移行し、煙道部とは明瞭な段差で接続している。カマド内部には2ヶの土師器甕形土器が埋設され、焚口部に向かって横転していた。燃烧部中央より僅か左袖部寄りに1ヶの円礫が埋設されて、支脚として使用されていた。燃烧部焼土は焚口部より支脚付近に分布している。煙道部底面は平坦で、煙出部は土坑状を呈している。

〔遺物〕(第60・61・62・63・64図、P L 77B・78・79・80・81A)

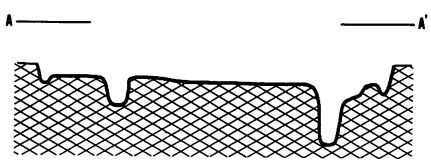
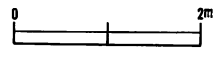
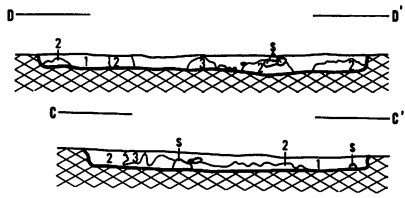
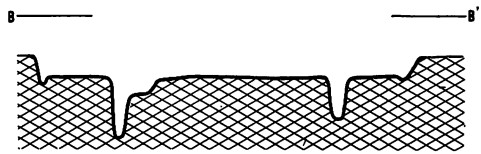
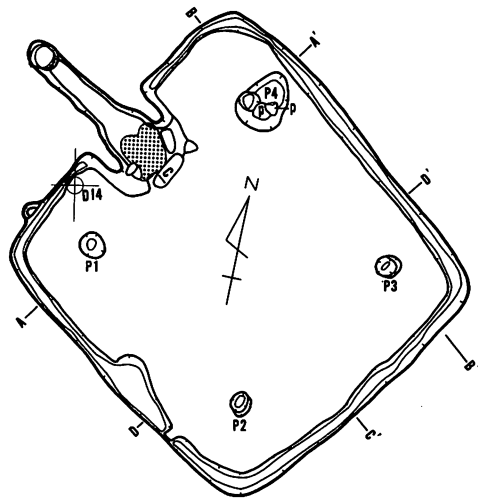
埋土内や床面直上で多く出土しているが、特に北隅部の床面直上での出土が多く、他にカマド埋設土器がある。種類は土師器・須恵器・土製品・鉄製品・石製品が含まれ、器種としては甕形土器・甑形土器・鉢形土器・土製丸玉・鉄斧・砥石がある。

#### 土師器

**坏形土器** 図化されたものはないが、破片で数片出土している。すべてロクロ未使用成形のもので、体部に段をもち、底部は丸底を呈するらしい。

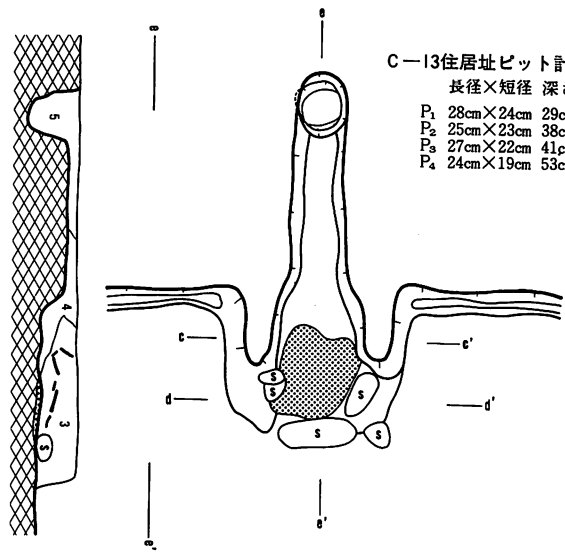
**甕形土器**(184~189・193~195) すべてロクロ未使用成形のものである。全体的な器形では長胴型(187・188)・短胴型(186・189)・球胴型(193~195)があり、大きさでは大型(187・188・193~195)・中型(186・189)がある。また、長胴型のものには体部最大径がほぼ中央にあるもの(187)と上半部にあるもの(188)がある。球胴型には円球状に近いもの(193・195)とソロバン玉状のもの(194)がある。頸部にはいずれも段または稜をもち、口縁部は直線的に外反するもの(186・187・189)・内弯気味に外反するもの(188)・外弯気味または強く外弯しながら外反するもの(186・194・196)があり、口唇部はほぼ平らなもの(186・188)・丸味をもつもの(195)・丸いもの(187・189・193)・削がれて先細りとなるもの(185)がある。底部は周囲に突出をもつもの(185・193・195)・台形を呈するもの(185・188・189・194・195)があり、底面は184は不明瞭であるが木葉痕が付されているらしいが、他はナデられており無文である。調整技法は、口縁部内外面ともヨコナデが主体で、外面に若干ハケメを残すもの(193)がある。体部は、外面がハケメ後スリケシが主体であるが一部にヘラナデ(188)やミガキをもつもの(193)がある。

**甑形土器**(190・191) いずれもロクロ未使用成形の無底型である。器形はいずれも体部上半部に最大径をもち、190の頸部には段が付され、191には段がない。口縁部は、190は頸部の段より直線的に外反し、191は口縁上端部が軽く外反している。口唇部は190は丸味をもち、191は先細りである。190の体部の底部寄りには向かい合う様に各1ヶの貫通孔があるが、191にはな



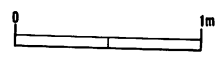
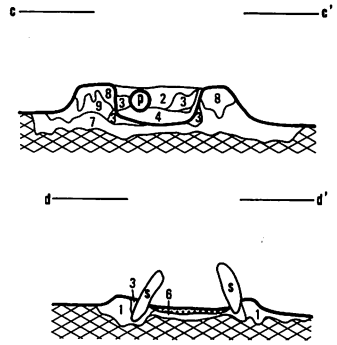
C-13住居址埋土土層

1. 5Y 2/2 オリーブ黒色 砂質シルト 強く縮まっている、粘性ややあり、砂ブロックや小石の混入あり、酸化鉄を含む。
2. 10YR 2/2 黒褐色 粘土質 軟らかい、粘性あり。
3. 10YR 2/2 黒褐色 砂質シルト 酸化鉄を多く含む。



C-13住居址ピット計測値

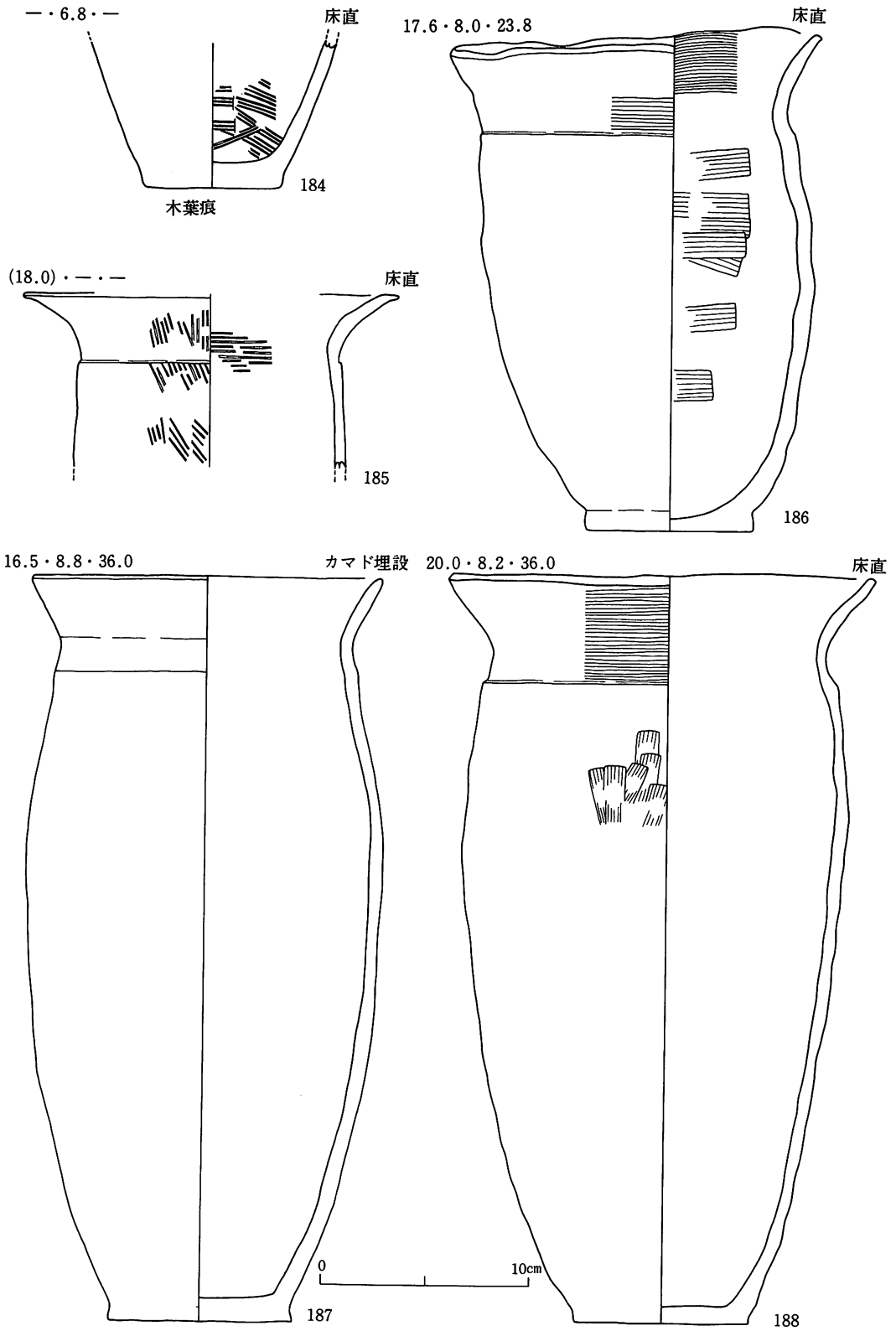
	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	28cm×24cm	29cm
P <sub>2</sub>	25cm×23cm	38cm
P <sub>3</sub>	27cm×22cm	41cm
P <sub>4</sub>	24cm×19cm	53cm



C-13住居址カマド埋土土層

1. 5Y 2/2 オリーブ黒色 砂質シルト 強く縮まっている、粘性ややあり、砂のブロックや小石の混入あり、酸化鉄
2. 10YR 2/2 黒褐色 粘土質 軟らかい、粘性あり。
3. 10YR 2/2 黒褐色 砂質シルト 酸化鉄を多く含む。
4. 10YR 2/3 黒褐色 粘土質 弾力があつて軟らかい、酸化鉄を含む。
5. 10YR 2/2 黒褐色 軟らかい、粘性なし、酸化鉄・炭化物粒・燈色焼土が多量に混入。
6. 5YR 4/4 褐色 粘土質シルト 軟らかい、粘性あり、焼土が浸透している。
7. 10YR 4/4 褐色 シルト質土 やや軟らかい、粘性弱い、小石、酸化鉄を混入。
8. 10YR 3/3 暗褐色 強く縮まっている、粘性なし、酸化鉄が多く混入。
9. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 軟らかい、粘性あり、酸化鉄が多く混入。

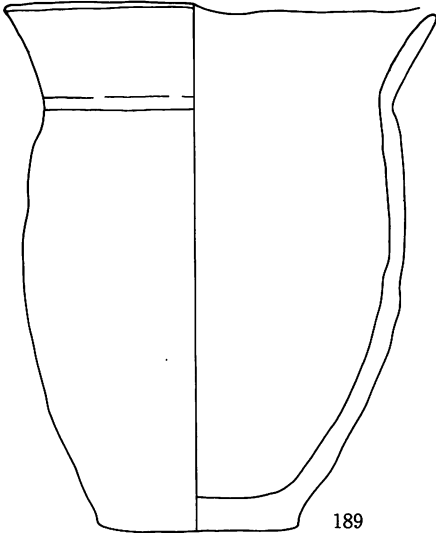
第59図 C-13住居址(遺構)



第60図 C-13住居址(遺物-I)

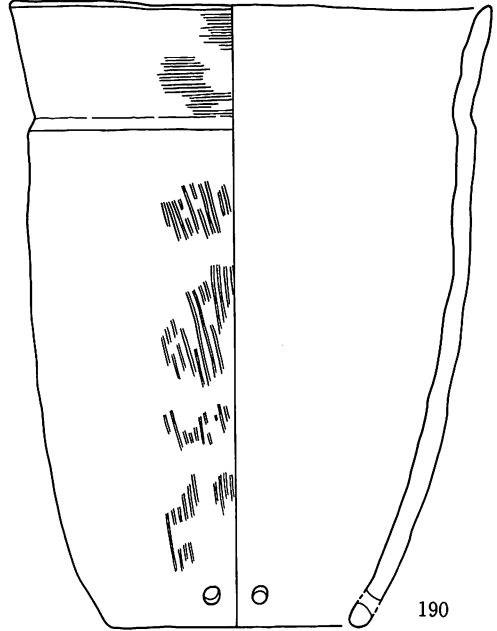
17.4 · 8.0 · 21.2

床直



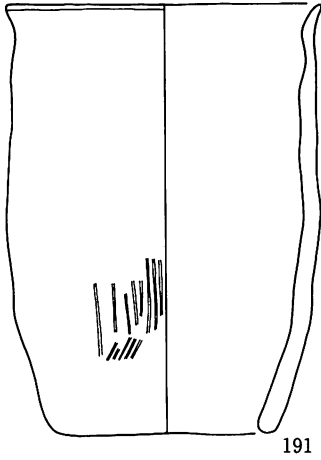
19.4 · 10.3 · 25.0

床直



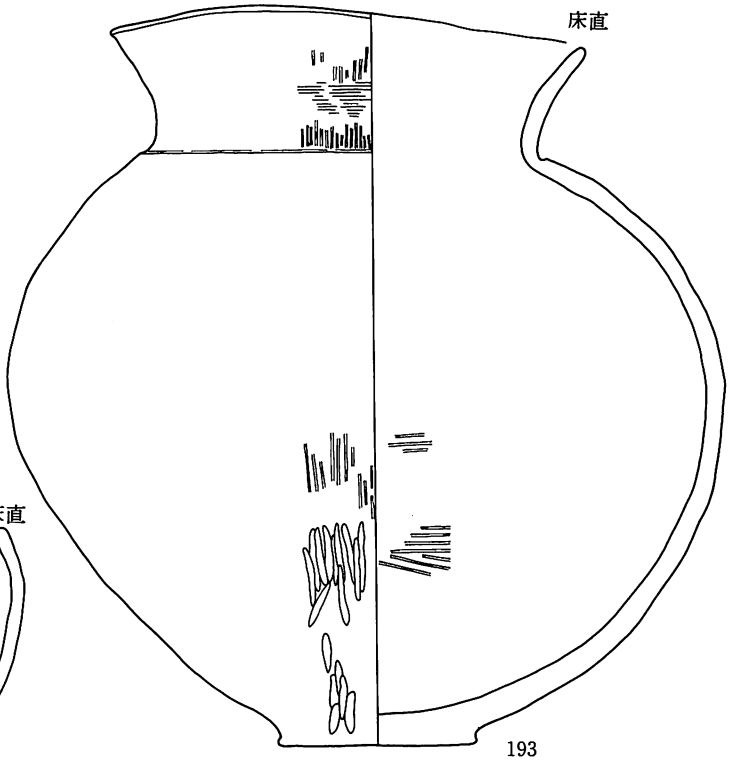
12.5 · 8.8 · 17.2

床直



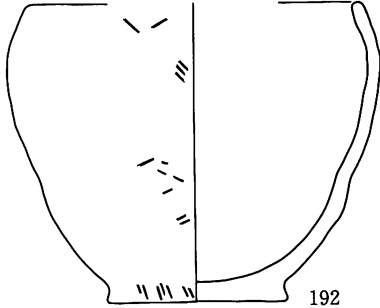
19.1 · 8.0 · 19.5

床直



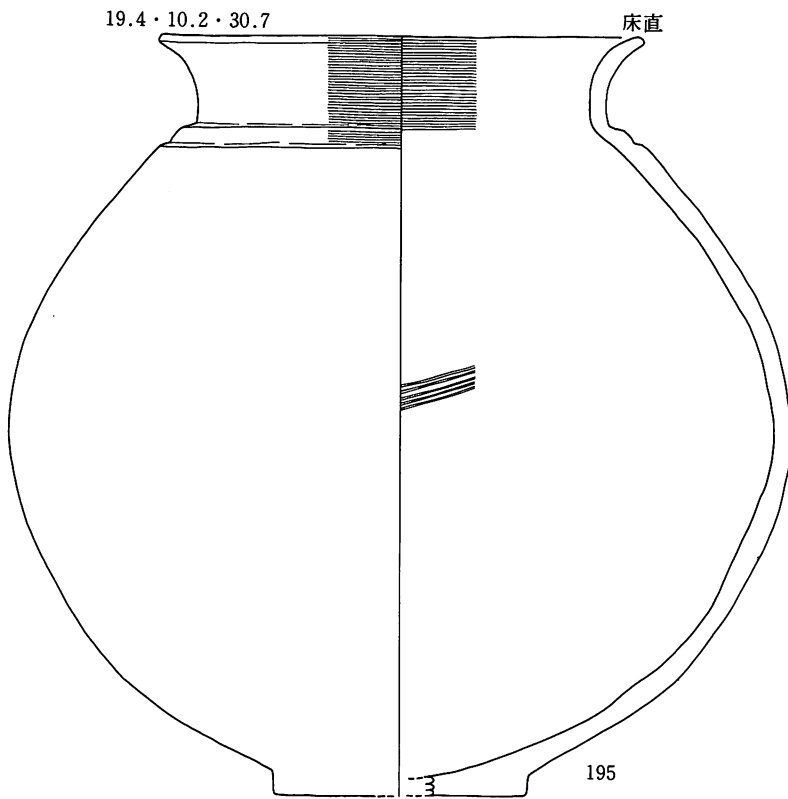
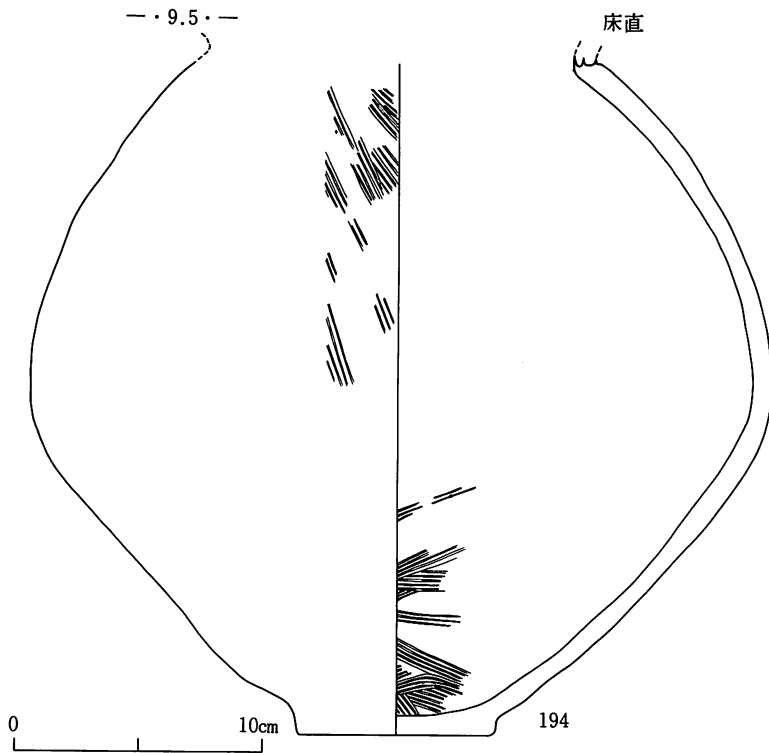
(13.2) · 7.2 · 12.1

床直

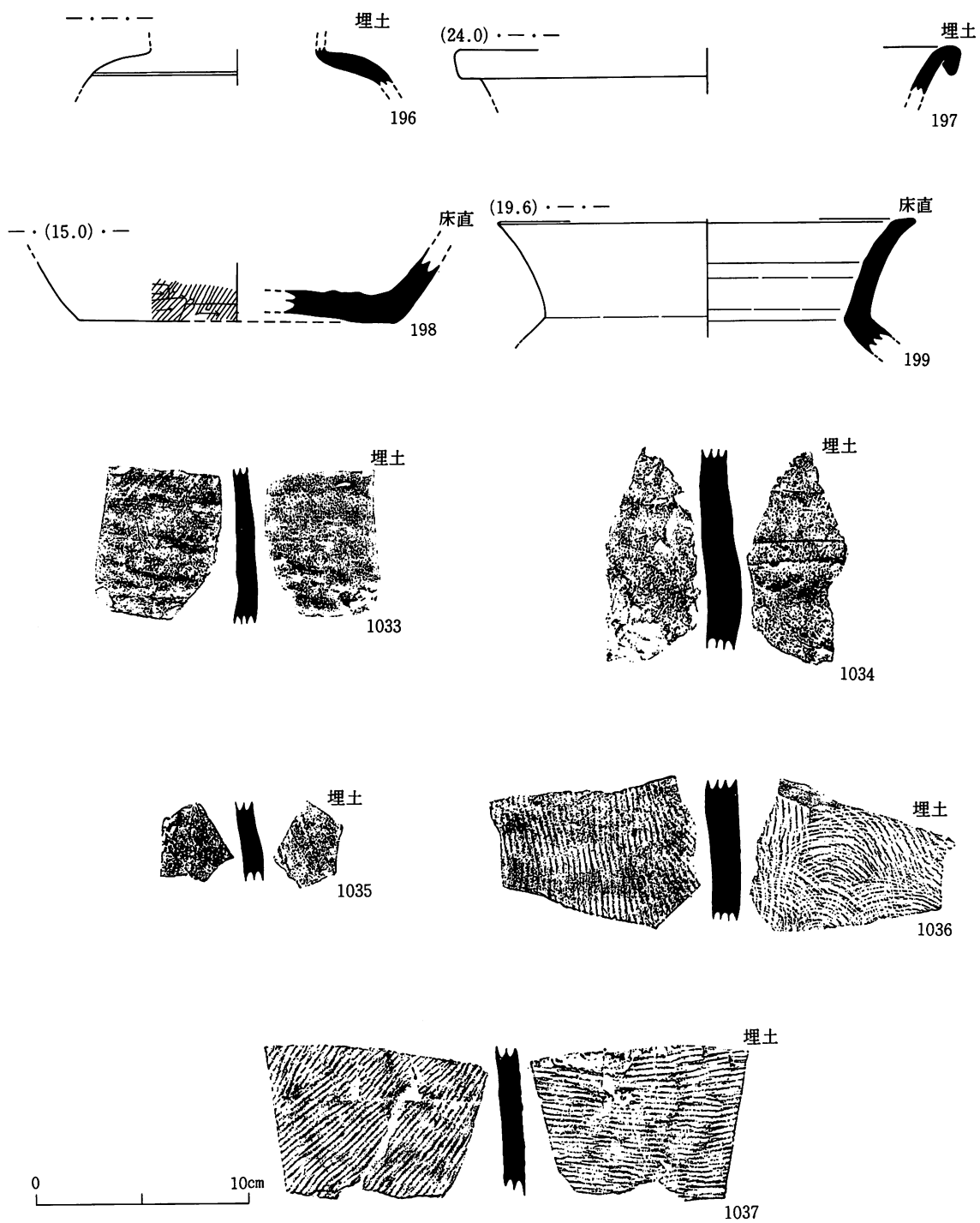


0 10cm

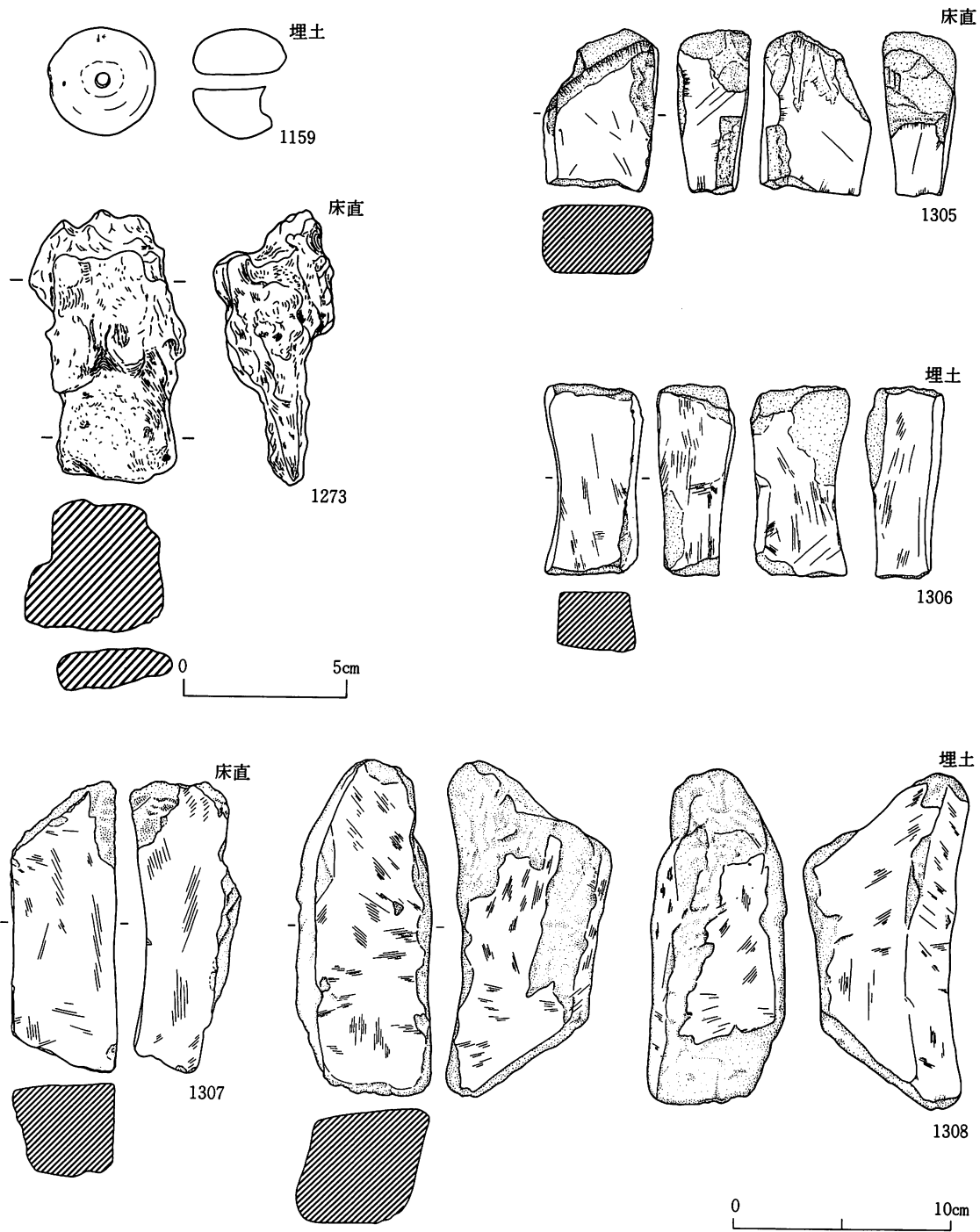
第61图 C-13住居址(遺物-2)



第62図 C-13住居址(遺物-3)



第63图 C-13住居址(遺物-4)



第64图 C-13住居址(遺物-5)

い。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ハケメ後スリケシであり、内面は丹念にミガいている。

**鉢形土器**(192) ロクロ未使用成形のもので1ヶ出土している。器形は底部より内弯気味に外反する体部は、体部上半部に最大径をもち、最大径の位置より内弯して口唇に移行する。頸部にも段はなく、口唇は丸味をもつ。底部の周囲には軽い突出があり、底面はナデによって無文である。調整技法は、体部外面はハケメ後スリケシ、内面はミガキである。なお、他住居址(C-6住居址-2他)で出土した同形の鉢形土器には片口が付されているが、本住居址出土のものには口縁部の $\frac{2}{3}$ を欠失しているので詳細は不明であるが、片口が付される可能性がある。

### 須恵器

器種はすべて甕形もしくは壺形のものであり、坏形のものはない。破片数で28ヶ出土しているが、図化できたのは4ヶのみである。他の体部破片は調整技法を主体として拓本図で掲載した。196は表面がガラス質で光沢があり、緑色がかった自然釉が付着した壺形もしくは甕形の肩部破片である。197・199は甕形か壺形の口縁部であるが、197は折り返し口縁で、199は口唇が平らにナデられ外方に軽く挽き出している。198は底部より体部の一部が残存しており、体部には平行タタキ目後ヘラケズリ調整を残し、底面は荒いヘラケズリが入り若干上げ底風である。拓本図の中で1033・1034・1035は外面ロクロナデであるが、1033は微かに平行タタキ目を残している。内面はロクロナデ(1033・1035)やヘラナデ(1034)である。1036は外面平行タタキ目・内面青海波文で、1037は内外面とも平行タタキ目をもつ。

### その他

**土製品**(1159) 本遺跡出土のものでもっとも大型の土製丸玉である。一部を欠損しているが、円球状を呈し、中心部に貫通孔を1ヶもっている。黒色処理はない。

**鉄製品**(1273) 鉄斧または手斧と考えられるものである。錆化が著しいので原形が不詳であるが、柄の装着部は円筒形の様である。

**石製品**(1305~1308) いずれも砥石である。1305・1306・1308は使用面を4面にもち、1307は2面にもっている。(高橋与右エ門)

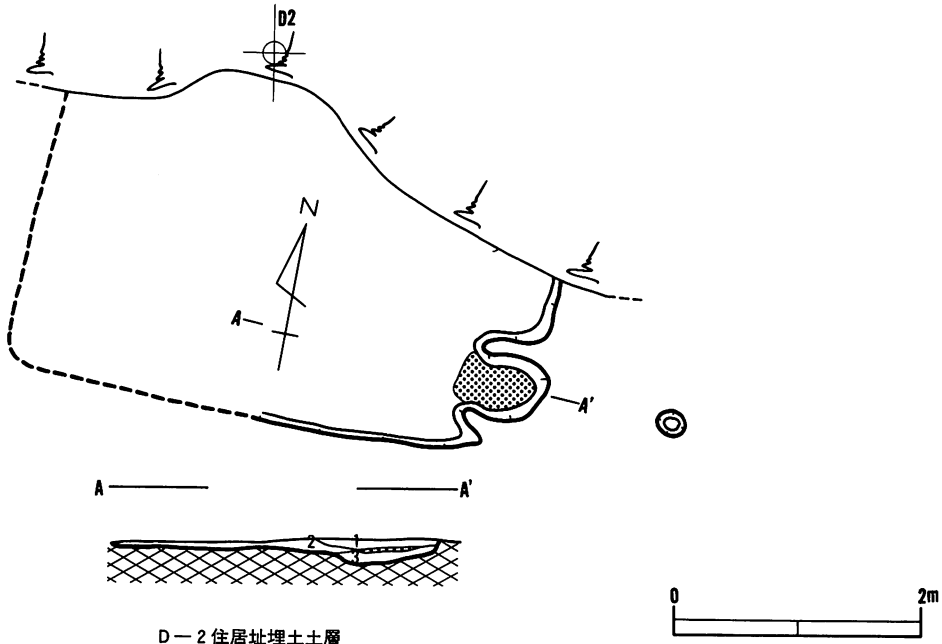
## 22) D-2住居址

[遺構](第65図、P L 19A)

本住居址は北側が段丘崖に延びていたり、西側が削剝によって一部検出されていないことから、不明な部分も多い。重複遺構はなく単独で検出された。

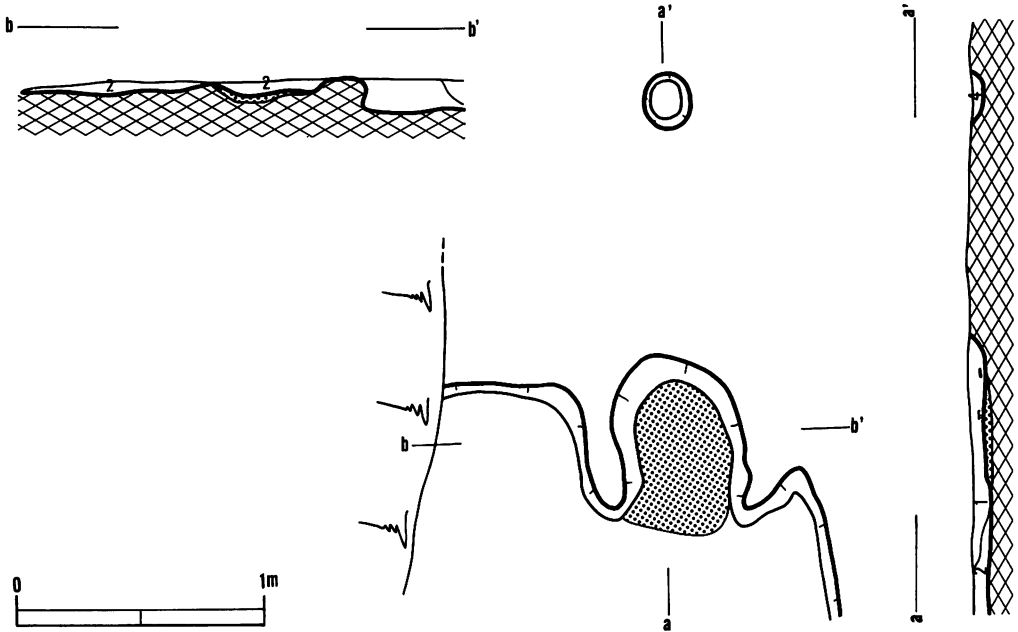
平面形が明確に検出されていないことから規模は不明であるが、壁高は0.05mを測り、壁は床面に対して100度の角度を示している。検出された部分より考えられる平面形は方形を呈す





D-2 住居址埋土土層

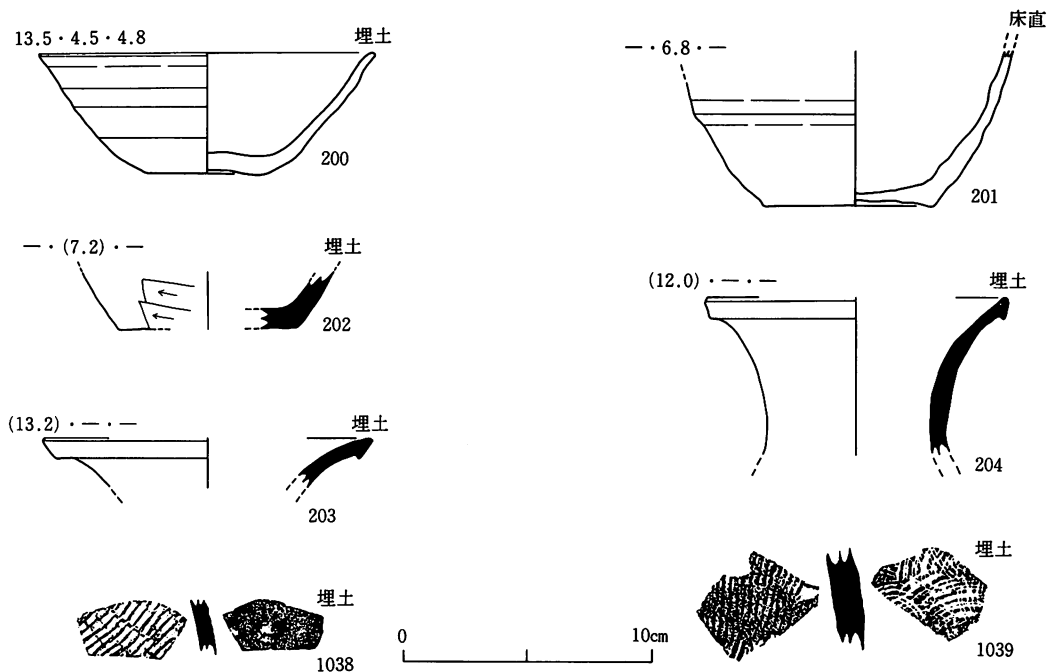
1. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質土 粘性あり、植生痕あり。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり、植生痕あり。
3. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり。



D-2 住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質土 粘性あり、植生痕あり。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり、植生痕あり。
3. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり。
4. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト質土 粘性あり、植生痕あり。

第65図 D-2 住居址(遺構)



第66図 D-2 住居址(遺物)

るものと推定される。主軸は東-西方向にあり、磁北に対して93度東に偏している。埋土は灰褐色・暗褐色・黒褐色を呈する粘土質のシルトで構成され、色調等によって3層に細分されている。混入物としては全層に炭化物粒や水酸化鉄等が観察され、一部に植生痕もみられる。床は地山の褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面はほぼ平坦であるが、カマド前庭部付近が若干他の部分より低くなっており、高低差は0.05mを測る。本住居址の床面では土坑や壁溝は検出されていない。

カマドは東壁で検出され、南東隅部より0.50mほど北に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙出部土坑であり、天井部・煙道部は検出されていない。袖部は地山の褐色を呈するシルトの削り出しで構築され、シルトの貼り付けはみられない。燃烧部は床を一度0.10m位掘り窪めた後、黒褐色を呈するシルトを埋め戻して造られている。燃烧部の床面は、焚口部付近より次第に高くなって奥壁に続き、煙道部とは軽い段をもって接続している。燃烧部焼土は燃烧部全体で観察されるが、それほど強い焼成を受けたものとは認められない。煙道部は検出されず、奥壁より1m離れて、平面形が円形を呈する土坑が検出され、土坑の内壁に多くの煤が付着していたことから、煙出部の土坑と認定した。

〔遺物〕(第66図、P L 81 B)

本住居址は埋土が薄いため出土が少なく、カマド付近で若干出土したのみである。種類は土師器や須恵器があり、器種では坏形土器・甕形土器・瓶形土器がある。

**土師器**

**坏形土器**(200) ロクロ使用成形のもので、内面黒色処理がない。器形は、底部で外傾する体部は軽く内弯しながら上位に移行し、口縁上端で小さく外反する。底部切り離し技法は回転糸切り無調整で、若干上げ底気味を呈している。調整技法はロクロナデのみである。

**甕形土器**(201) ロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。体部下半～底部を残存している。器形は底部で外傾し、軽く内弯して上位に移行している。調整技法はロクロナデのみである。

**須恵器**

器種は甕形や瓶形を呈すると考えられるもので、ロクロ使用成形されている。203・204は口縁部破片であるが、頸部より強く外反し、口唇は挽き出されて縁帯状を呈する。202は底部と体部を一部分残すものであり、体部外面はヘラケズリされる。底面はヘラケズリやヘラナデによる調整のため切り離し技法は不明である。拓本1038・1039は体部の破片であるが、いずれも外面に平行タタキ目をもち、1038は内面ロクロナデ、1039は内面青海波文である。

(高橋与右エ門)

23) D-4 住居址-1

〔遺構〕(第67図、P L 19 B)

本住居址は北西隅部をC-3住居址-1と、さらに北東部分をE-4住居址・南東部分をE-6住居址とそれぞれ重複しているが、検出時の土層変化や床面の高低差によって全体が把握された。重複遺構との新旧関係は、重複するいずれの住居址より本住居址が新しい。

規模は北壁7.2m・南壁6.6m・東壁6.0m・西壁6.5mで、壁高は0.25mを測り、壁は床面に対してほぼ直角を示している。平面形は主軸に対して横長の歪んだ隅丸長方形を呈し、主軸は北-南方向にあり、ほぼ磁北を指している。埋土は基本的には黒褐色を呈するシルトで構成され、混入物の有無や多少・色調の変化等によって7層に細分されている。混入物としては、褐色のシルト粒や炭化物粒、そして埋土最下層には粒径5cm～15cm位の円礫が混入していた。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構築され、黄褐色のシルトで1cm位貼って床面としている。床面には若干の起伏がみられ、さらに、床面レベルが南壁に寄るほど低くなり、高低差0.07m位である。壁溝はカマド部分と南東隅部では検出されていないが、他の部分はほぼ全周している。壁溝の規模は巾0.1m～0.15m・深さ0.05m位である。

本住居地の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までの土坑が検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の規模は径0.25m位で深さ0.55m～0.70mを測り、平面形は検出面では円形や楕円形を呈しているが、底面では方形や長方形を呈する。P<sub>5</sub>は径1.0m位で深さは0.40m位を測り、平面形は円形、断面形は鍋底形を呈する。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の埋土は、基本的には褐色を呈するシルトの混入した粘土質のシルトで構成され、色調は黒褐色を呈するが、混入物によって3層に細分される場合が多い。P<sub>5</sub>の埋土は黒褐色を呈するシルトの単層で構成されている。性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は対角線上に位置することや規模から考えて、本住居地の柱穴を構成するであろう。P<sub>6</sub>は床面まで掘り下げた時点で検出されていることから、本住居地に伴う貯蔵穴的性格の強い土坑であろう。

カマドは北壁で検出され、壁中央より0.55m西に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部だけであり、天井部は検出されていない。袖部は左右とも基底部と袖部内壁に地山を一部残し、さらに、外側に暗褐色のシルトを貼り付けて構築している。左側袖部の焚口寄りの基底部は地山を残し、上部には暗褐色を呈するシルトを貼り付けているが、さらに、粒径25cm×8cmの円礫が1ヶ縦位で¼ほど埋め込まれている。燃烧部は床面より若干掘り窪められているが、燃烧部中央付近より煙道部へほぼ水平で接続している。燃烧部焼土は前庭部付近より燃烧部中央付近まで観察され、さらに、左側袖部の内壁でも観察される。燃烧部埋土内には部分的に焼骨の混入がみられたが、原形を残しているものはなかった。カマドの埋設土器や支脚は検出されていない。煙道部底面は平坦でほぼ水平に近く、煙出部には土坑状の窪みがある。

#### [遺物](第70・71図、P L 82)

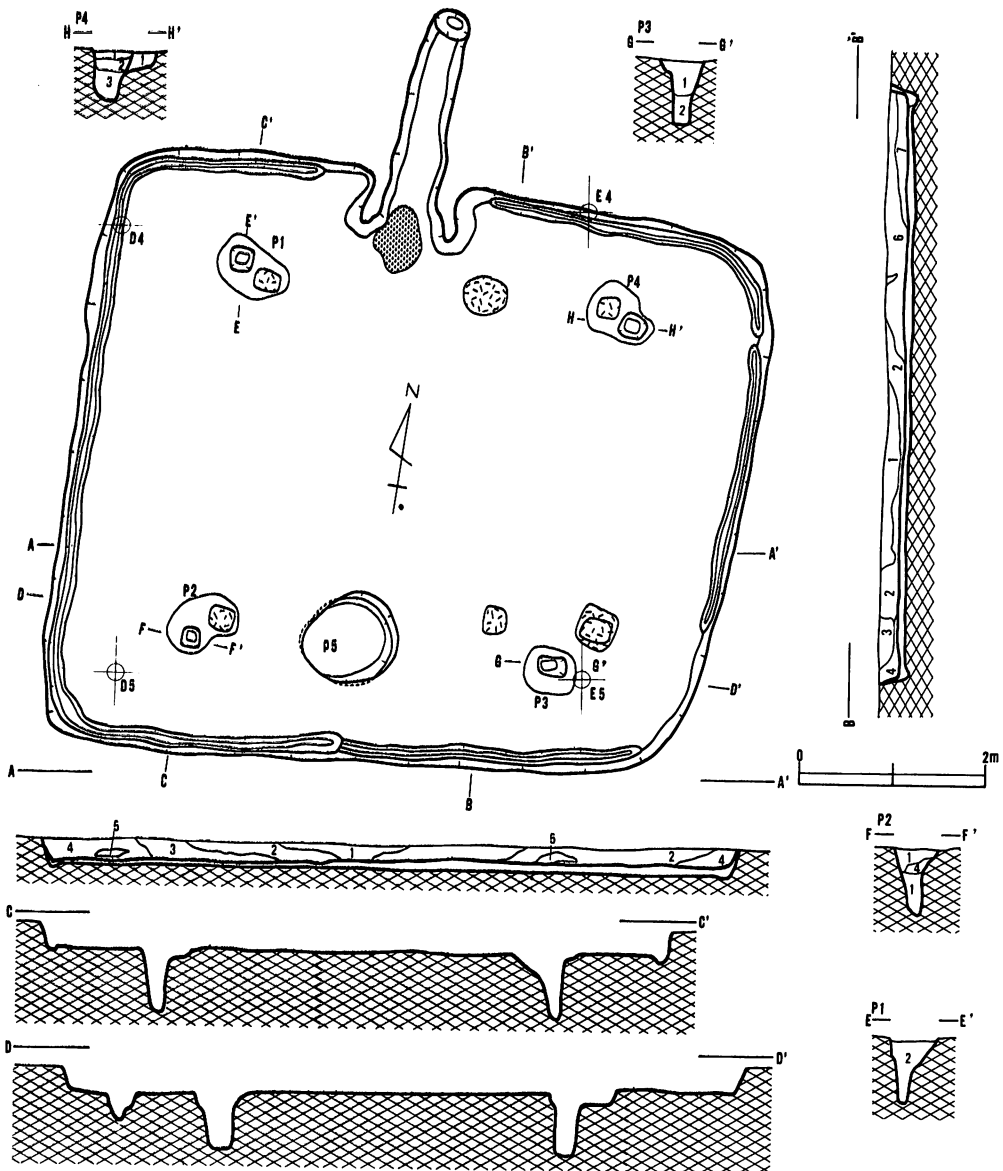
本住居地に伴う遺物は床面直上や埋土内で出土しているが、ほとんど小破片であり量も多くはない。種類としては土師器・須恵器・土製品・鉄製品・石製品があり、器種は坏形土器・高坏形土器・甕形土器・甑形土器・鉢形土器・小型土器・土製紡錘車・器種不明鉄器・鉛玉・砥石等がある。

#### 土師器

**坏形土器(205)** ロクロ未使用成形で、体部の内外面に段をもつ丸底のものである。口縁部と底部の一部を欠失しているので全体的な器形は不明であるが、口縁部は体部段の位置より直線的に外反するらしい。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ・底部ヘラケズリで、内面はミガキ後黒色処理されている。

**高坏形土器(206)** ロクロ未使用成形のもので、脚部が1ヶ出土している。裾部や坏部を欠失しているので全体の器形は不明である。脚部の調整技法は外面ミガキ、内面ヘラナデである。残存する坏部の底面はミガキ後黒色処理されている。

**甕形土器(208・209・1043)** ロクロ未使用成形である。いずれも破片であるので全体の器形



D-4 住居址-1 埋土土層

1. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし、酸化鉄の斑点を若干含む。
2. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし、褐色土ブロック多量と土器片を含む、酸化鉄の斑点わずかにあり。
3. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし、3~5cm位の褐色土ブロック少量混入、土器片を含む。
4. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし、褐色土ブロック少量混入。
5. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし、土器片を含む。
6. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし、炭化物と褐色土ブロック少量含む、酸化鉄の斑点わずかにあり。
7. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に堅く締まっている、粘性ほとんどなし、褐色土ブロックわずかに混入。

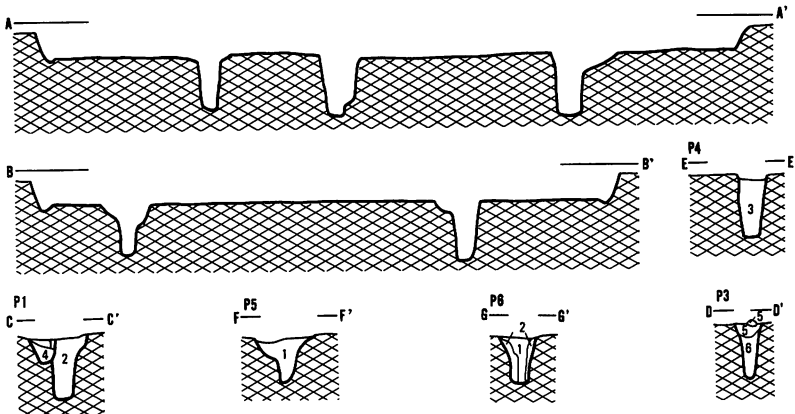
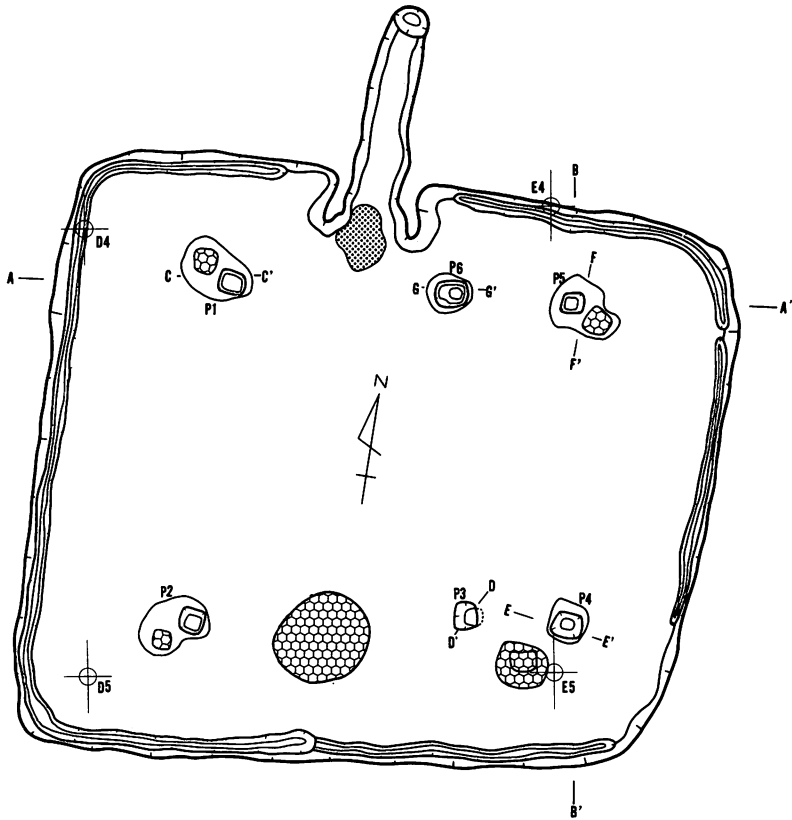
D-4 住居址-1 ビット埋土土層

1. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト やや締まっている、シルトブロックを少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 堅く締まっている、焼土とシルトをブロック状に混入。
3. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト やや締まっている、粘性あり、シルトを多量に混入。
4. 10YR2/3 黒褐色 シルト質粘土 堅く締まっている、粘性あり、褐色シルトを多量に混入。

D-4 住居址-1 ビット計測値

長径	短径	深さ	
P <sub>1</sub>	28cm	23cm	67cm
P <sub>2</sub>	25cm	23cm	69cm
P <sub>3</sub>	33cm	20cm	70cm
P <sub>4</sub>	33cm	23cm	59cm
P <sub>6</sub>	100cm	88cm	44cm

第67図 D-4 住居址-1 (遺構)



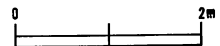
D-4 住居址-2 ピット埋土土層

1. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト やや縮まっている、シルトブロックを少量混入。
2. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 強く縮まっている、焼土とシルトをブロック状に混入、炭化物を多量に混入。
3. 7.5YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 軟らかい、湿っている粘性少しあり、砂質シルトを斑状に少量含む。
4. 10YR2/2 黒褐色 粘土質シルト やや強く縮まっている、粘性あり、焼土とシルトブロックを少量混入。
5. 7.5YR2/3 極暗褐色 粘土質シルト やや強く縮まっている、骨が混入、砂質シルトが混入。
6. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 湿気多い、土器片あり。

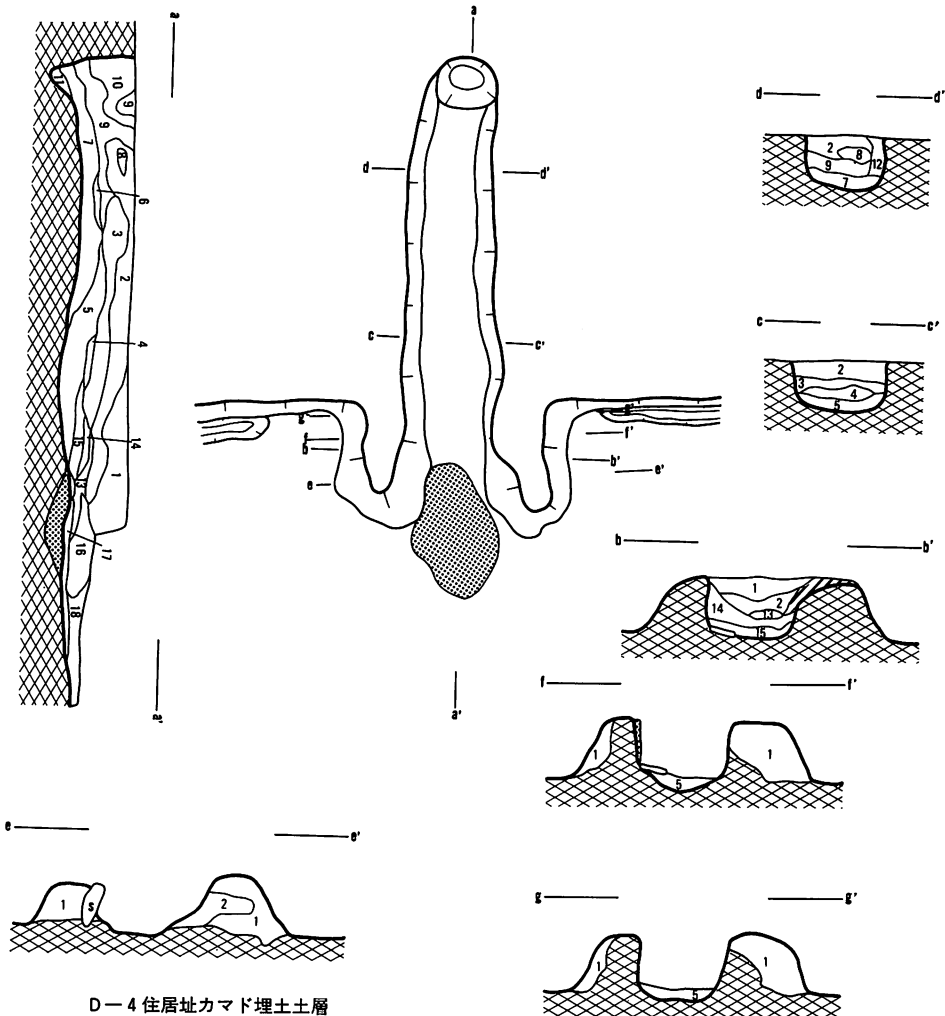
D-4 住居址-2 ピット計測値

長径×短径 深さ

P <sub>1</sub>	33cm×20cm	67.0cm
P <sub>2</sub>	32cm×25cm	69.0cm
P <sub>3</sub>	30cm×26cm	68.0cm
P <sub>4</sub>	38cm×30cm	65.5cm
P <sub>5</sub>	29cm×20cm	58.0cm
P <sub>6</sub>	36cm×27cm	63.0cm



第68図 D-4 住居址-2 (遺構)

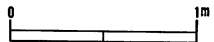


D-4 住居址カマド埋土土層

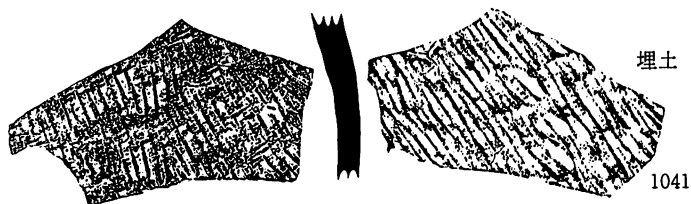
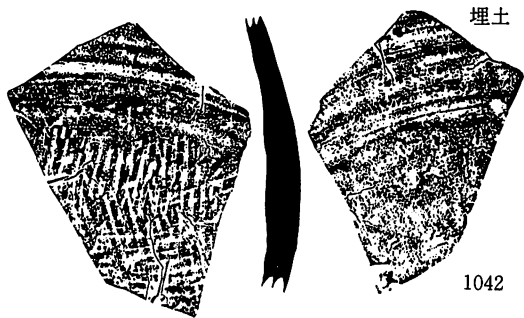
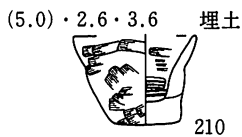
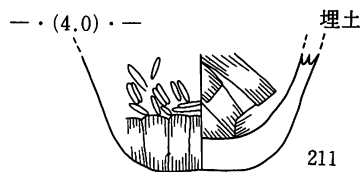
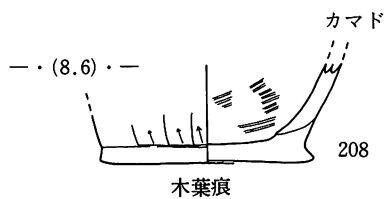
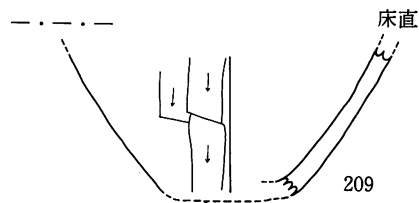
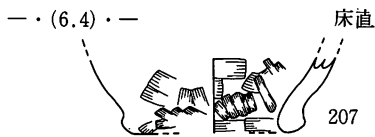
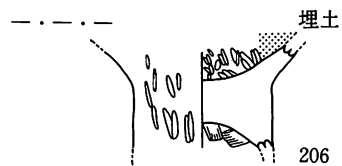
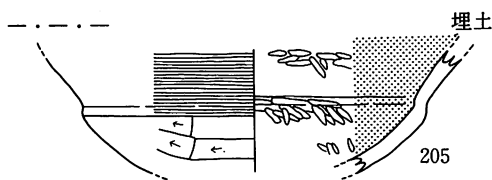
- |                 |        |  |
|-----------------|--------|--|
| 1. 10YR3/2 黒褐色  | 粘土質シルト | 強く締まっている、粘性ややあり、褐色シルトブロックを多量に混入。         |
| 2. 10YR4/4 褐色   | シルト質粘土 | やや締まっている、粘性なし、焼土を少量含む。                   |
| 3. 7.5YR3/2 黒褐色 | シルト質粘土 | やや締まっている、粘性あり、褐色シルト・焼土・黒褐色の混合層・炭化物を少量含む。 |
| 4. 7.5YR3/4 暗褐色 | 粘土質シルト | やや締まっている、粘性あり、焼土が多量と炭化物少量混入。             |
| 5. 10YR3/2 黒褐色  | 粘土質シルト | 締まりなしい、粘性あり、褐色シルト・焼土・黒褐色の混合層・炭化物を含む。     |
| 6. 10YR3/4 褐色   | シルト質粘土 | 締まりなしい、粘性あり、褐色シルトブロックと黒褐色土を少量含む。         |
| 7. 10YR2/2 黒褐色  | 粘土質シルト | 締まりなしい、粘性あり、炭化物混入。                       |
| 8. 10YR2/2 黒褐色  | 粘土質粘土  | ブロック状に締まっている、粘性あり、炭化物少量混入。               |
| 9. 10YR2/2 黒褐色  | シルト質粘土 | やや締まっている、粘性ややあり、酸化鉄の斑点少量あり。              |
| 10. 10YR2/2 黒褐色 | 粘土質粘土  | やや締まっている、粘性あり、炭化物・焼土・酸化鉄を少量に混入。          |
| 11. 10YR2/1 黒褐色 | 粘土質シルト | 軟らかく締まっている、粘性なし、酸化鉄を多量に混入、腐植性有機物を含む。     |
| 12. 10YR2/2 黒褐色 | 粘土質    | 軟らかく締まっている、粘性あり、褐色シルト少量と酸化鉄を多量に混入。       |
| 13. 10YR3/3 暗褐色 | シルト質土  | 軟らかく締まっている、粘性あり、炭化物片・焼土ブロックを多量に混入。       |
| 14. 5YR3/4 暗赤褐色 | シルト質土  | やや締まっている、粘性なし、焼土ブロックと炭化物を少量混入。           |
| 15. 10YR3/2 黒褐色 | シルト質粘土 | やや締まっている、粘性ほとんどなし、シルトブロックを含む、炭化物を少量混入。   |
| 16. 10YR2/2 黒褐色 | シルト質粘土 | 軟らかく締まっている、粘性ほとんどなし、シルト・炭化物・焼土を多量に混入。    |
| 17. 10YR3/3 黒褐色 | 粘土質シルト | 軟らかく締まっている、粘性あり、小骨を多く含む、炭化物を少量混入。        |
| 18. 10YR2/2 黒褐色 | シルト質土  | 強く締まっている、粘性なし、シルトを少々含む。                  |

D-4 住居址袖部埋土土層

- |                |            |                            |
|----------------|------------|----------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色 | シルト～シルト質粘土 | 強く締まっている、粘性ややあり、焼土粒を少量混入。  |
| 2. 10YR4/4 褐色  | シルト質土      | 強く締まっている、粘性ややあり、焼土を少量混入。   |
| 3. 10YR3/2 黒褐色 | シルト質土      | やや強く締まっている、粘性ややあり(ヒモ状となる)。 |

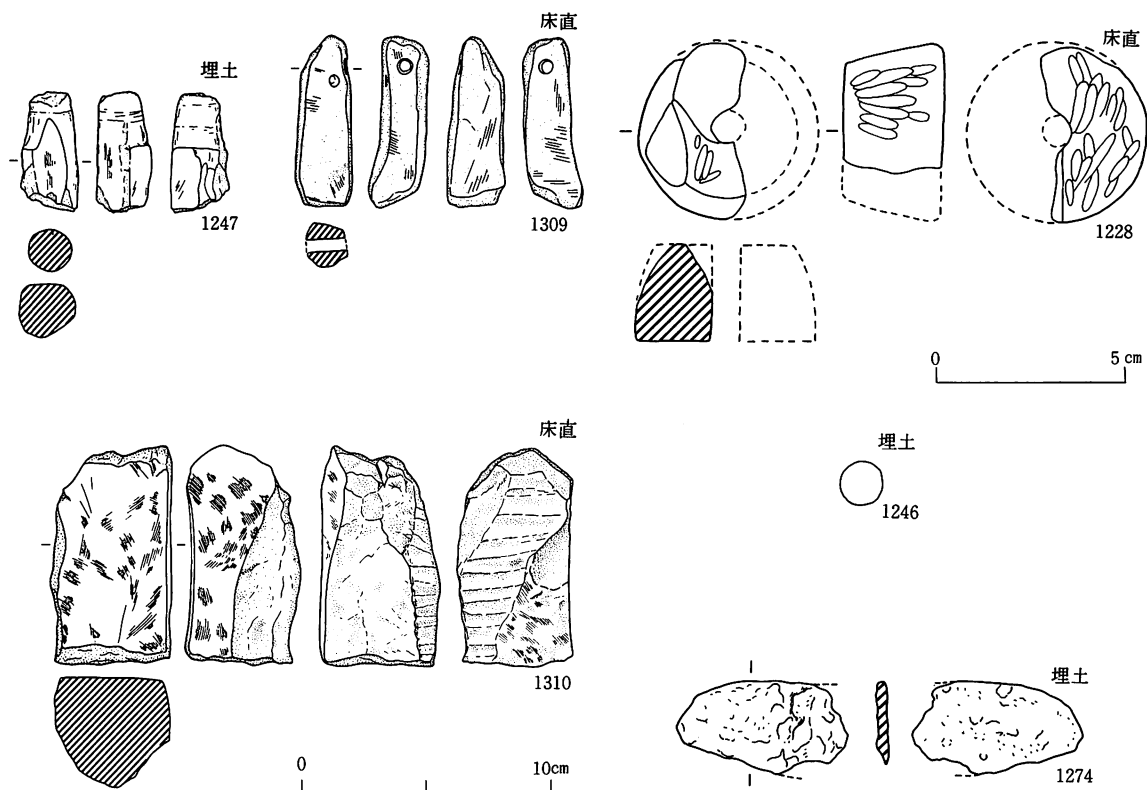


第69図 D-4 住居址-1・2(遺構-3)



第70図 D-4 住居址一 | (遺物一 |)





第71図 D-4 住居址-1 (遺物-2)

は不明である。調整技法は体部外面ヘラケズリ、内面ハケメ後スリケシのものである。拓本1043は頸部に鋸歯状の沈線をもつ。208の底部周囲には突出があり、底面には木葉痕が付されている。

**甑形土器** (207) ロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を抜いた単孔型のものである。底部寄りの体部小破片であるため、全体の器形は不明である。調整技法は、内外面ともヘラナデである。

**鉢形土器** (211) 体部上半～口縁部を欠失しているので全体的な器形は不明であるが、ロクロ未使用成形で、底部は丸底風である。坏形土器の範疇に入るかとも考えられたが、坏形土器とは調整技法に違いがあることから鉢形土器とした。調整技法は、体部外面ミガキ・底部ヘラナデ・内面ヘラナデであり、内面黒色処理はない。

**須恵器**

大甕や壺と考えられる体部破片が出土している。1040・1041・1042ともに外面に平行タタキ目を持ち、内面は1040青海波文・1041平行タタキ目・1042ロクロナデ痕等がそれぞれついている。

#### その他

**土製品**(1228) 土製紡錘車が1ヶ出土している。截頭円錐形を呈し、中心部に1ヶの貫通孔をもつ。上・下・側面ともにミガキが入っている。

**鉄製品**(1246・1274) 1246は遺構検出時の清掃中に本住居址の埋土最上部で出土した鉛玉である。火縄銃の弾丸と推定されることから、本住居址とは直接的に共伴しないであろう。1274は断面が扁平な鉄板状を呈しているが、器種は不明である。

**石製品**(1247・1309・1310) 3ヶともに砥石である。1247は使用面を3面にもつもので、後、先端部分を孔の内面研磨用に使っている。1309は使用面を4面にもち、先端部に貫通する1ヶの紐通し孔を穿っている。やや小型である。1310は使用面を2面にもち、やや大型である。

(高橋与右エ門)

## 24) D-4住居址-2

### 〔遺構〕(第68・69図)

本住居址はD-4住居址の貼床下で検出されたP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までの柱穴状土坑によって、その存在が確認された。従って、壁・床・カマドともに検出されていない。このことから考えると、本住居址はD-4住居址-1より古いことは明らかである。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の柱穴状土坑は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>が住居址の対角線上に位置するらしいことや、P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>がP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>1</sub>と直線的に並ぶことから、本住居址はP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の土坑で柱穴を構成するであろう。柱穴配置から考えられる住居址の規模は、D-4住居址-1とはほぼ大差がないものと推定され、カマド跡の痕跡が全く認められないことから、D-4住居址-1のカマドと共用しているらしいことも考え合わせると、本住居址はD-4住居址-1の前身住居址と考えられることができるであろう。

検出されたP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の規模は、長径0.20m～0.35m・短径0.20m～0.25mで、深さは0.50m～0.70m位である。検出面での平面形はほぼ円形や楕円形状を呈するが、深さの½ほどの位置より下位は方形や長方形を呈している。埋土は黒褐色を呈する粘土質のシルトに、褐色のシルト粒が混入した土で構成されている。P<sub>6</sub>には柱痕跡が残存しており、それによれば柱は径10cm前後の円柱と推定され、土坑底面に達している。

### 〔遺物〕

本住居址に伴う遺物は出土していない。

(高橋与右エ門)

## 25) D-8 住居址-1

〔遺構〕(第72・73図、P L 20A)

本住居址は西側でC-9住居址やC-9土坑と重複しているが、床面の高低差や土層変化によってほぼ全体が検出された。重複遺構との新旧関係は本住居址の方が古い。

規模は南北9.4m位・東西9.2m位で、壁高は東壁で0.27m位・南壁で0.32m位・西壁北部で0.40m・北壁で0.30mをそれぞれ測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は北-南方向にあり、磁北に対して6度東に偏している。埋土は黒褐色や黒色を呈するシルトで構成され、混入物や色調によって4層に大別される。混入物としては褐色のシルトブロック・炭化物・明褐色～黄褐色のシルトブロック・焼土等がある。床面直上には炭化材や炭化物粒及び焼土が広い範囲で検出され、本遺構が焼失住居址であることを示している。床面は本住居址によって掘り取られたD-8住居址-2の、褐色を呈する砂質シルトと黒色の粘土で構築された床面をそのまま利用し、東壁と北壁に沿う部分では地山の褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面はほぼ平坦である。壁溝は確認できなかったが、床面の炭化材除去の際に削剝してしまった可能性がある。

本住居址の床面からP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までの土坑が検出されている。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>の規模は径0.30m～0.40m、深さは0.60m位である。P<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>は径0.20m位、深さは0.10m位である。平面形はP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は円形、P<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>は楕円形を呈している。埋土は黒褐色のシルトで構成されるが、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>の下位は暗赤褐色の砂層である。また、P<sub>6</sub>の埋土中位には、2等分や4等分された扁平な円礫が48ヶ混入しており、底部からは火熱を受けた痕跡を残す礫が1ヶ検出されている。土坑の性格は、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>が本住居址の対角線上に位置することや、さらに、P<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>はP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>やP<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>の直線上に載ると同時に、規模等も合わせて考えるとP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は本住居址の柱穴を構成するであろう。

本住居址の床面では東壁とP<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>の間を結ぶ様な状態で2条の間仕切り溝が検出されている。長さはP<sub>4</sub>から1.70m位、P<sub>6</sub>から1.50m位で、上縁巾0.03m～0.06m、深さ0.05m位である。埋土は炭化物粒や炭化材片を多量に含んだ黒色のシルトである。

カマドは北壁で検出され、壁中央より0.45m西に寄って位置する。検出されたのは袖部・燃焼部であり、天井部と煙道部は検出されなかった。袖部は黒褐色のシルトを貼り付けて構築し、焚口付近には長さ0.53mの花崗岩を2分し、その割れ口を下方にして立てている。燃焼部中央付近には1ヶの小型円礫を埋め込んで支脚としていた。燃焼部焼土は焚口部より支脚の位置まで観察された。カマド周囲には部分的に掘り方を有し、褐色の砂質シルトや黒色を呈する粘土を埋め込み、貼床している。

〔遺物〕(第74・75・76・77・78図、P L 83・84・85A)

埋土下位や床面直土で出土しているが、出土位置に大きな偏りがない。種類は土師器・須恵器・土製品・鉄製品・青銅製品・石製品等がある。器種は坏形土器・高坏形土器・埴形土器・甕形土器・鉢形土器・小型土器・土製紡錘車・土製丸玉・鉄製鏢・青銅製圭頭太刀柄頭・琥珀玉などである。

### 土師器

**坏形土器**(213・215～217) すべてロクロ未使用成形で、体部内外面に段や稜をもつ丸底のものである。口縁部は体部の段や稜の位置より直線的に外反するもの(215・216)と内弯気味に外反するもの(217)があり、口唇はいずれも丸味をもつ。大きさは213・217が他よりも幾分小さ目であるが、他は大型である。調整技法は、口縁部外面がハケメ後ミガキのもの(216)・ヨコナデのもの(213)・ヘラナデやミガキのもの(217)があり、底部はハケメ後ミガキ(213)・ヘラケズリ(217)・ヘラケズリ後ナデ(216)がある。内面はすべてミガキであるが、黒色処理されるもの(213・217)と無処理のもの(215・216)があるが、216は黒斑部分がみられることから、元は黒色処理されていた可能性がある。

**埴形土器**(212・214) いずれもロクロ未使用成形で、体部に弱い稜をもち丸底のものである。口縁部はいずれも稜の位置より内弯気味に弱く外反して口唇に移行し、口唇は丸味をもつ。大きさでは大型(214)と小型(212)がある。調整技法は外面は口縁部・底部ともにヘラナデやミガキで、214は全面に朱彩されている。内面はミガキ後黒色処理である。

**高坏形土器**(218～221) いずれもロクロ未使用成形のもので、完形品の出土はなく破片のみである。218は裾部のみで、他は脚部のみが残存している。全体的な器形は不明であるが、裾部が大きく開くものであろう。調整技法は外面がハケメ後ナデやミガキ(220)・ミガキ(219)があり、坏部内面はミガキ後黒色処理される。

**甕形土器**(222～229・232・233・238) いずれもロクロ未使用成形で、器形が長胴型のもの(223・225)・胴が若干膨らむもの(224・228・229)・球胴型に近いもの(227・232・233・238)がある。長胴型や胴が若干膨らむものの体部最大径は中央部か上部にあり、体部径は口縁部径とほぼ同じか若干小さい。球胴型に近いものは最大径が体部にあり、体部最大径はほぼ中央にある場合が多い。また、球胴型に近いものは、体部が底部より直線的に外反するもの(232・238)と、内弯気味に外反するもの(233)がある。頸部には明瞭な段をもつもの(223・225・229・233)と不明瞭なもの(227・228)があり、口縁部は外弯気味に外反するもの(224・228)・強く外反するもの(227・229)・直線的に外反するもの(225)・外弯気味に外反し後直立気味になるもの(233)がある。口唇は丸味をもつもの(225・227・228)と平坦なもの(223・233)があり、223は口唇に沈線状の凹みをもつ。底部は周囲に突出をもつもの(226・233・238)と、

もたないもの(232)があり、底面は木葉痕をもつもの(226・232)とナデによって平らなもの(233・238)がある。大きさも大型(225・228・229・233)とやや小さ目のもの(223・224・226・227・232・238)がある。調整技法は、口縁部外面はハケメ後ヨコナデのもの(225・228・229・233)・ヨコナデだけのもの(223・227)があり、内面はすべてヨコナデだけである。体部は外面がハケメ(226・233・238)・ハケメ後スリケシ(222・225・227・228・229・232)・ケズリのもの(224)・ハケメ後ヘラミガキ(223)がある。内面はハケメ(226・228・229・233)・ハケメ後スリケシ(225)・ハケメ後一部ミガキ(223)・ヘラナデ(224)がある。

**甑形土器**(235～237) いずれもロクロ未使用成形で、無底型のものである。完形品が含まれていないので全体的な器形は不明であるが、甕形土器の底部を取り去った様な器形である。調整技法は外面がハケメ後スリケシで内面にも若干ハケメを残す場合もあるが(236)、他はミガキが入っている。

**鉢形土器**(230・231・234) いずれもロクロ未使用成形である。器高が比較的小さく、器高に比較して口縁部径が大きいものである。体部上半が若干膨らみ、頸部には段をもつ場合(231・234)ともたない場合(230)があり、口縁部は軽く外弯(230)、または外反(231・234)するものがある。調整技法は外面がハケメ後スリケシ(230・234)・ナデまたはミガキ(231)である。内面はハケメ(230)とナデ、またはミガキ(231・234)である。

**小型土器**(239・240) いずれもロクロ未使用成形であり、器形が甕形のもの(239)と丸底の坏形のもの(240)である。239は頸部に段をもち、口縁部は外弯気味に外反する。底部は上げ底である。240は手捏ねで成形している。

#### 須恵器

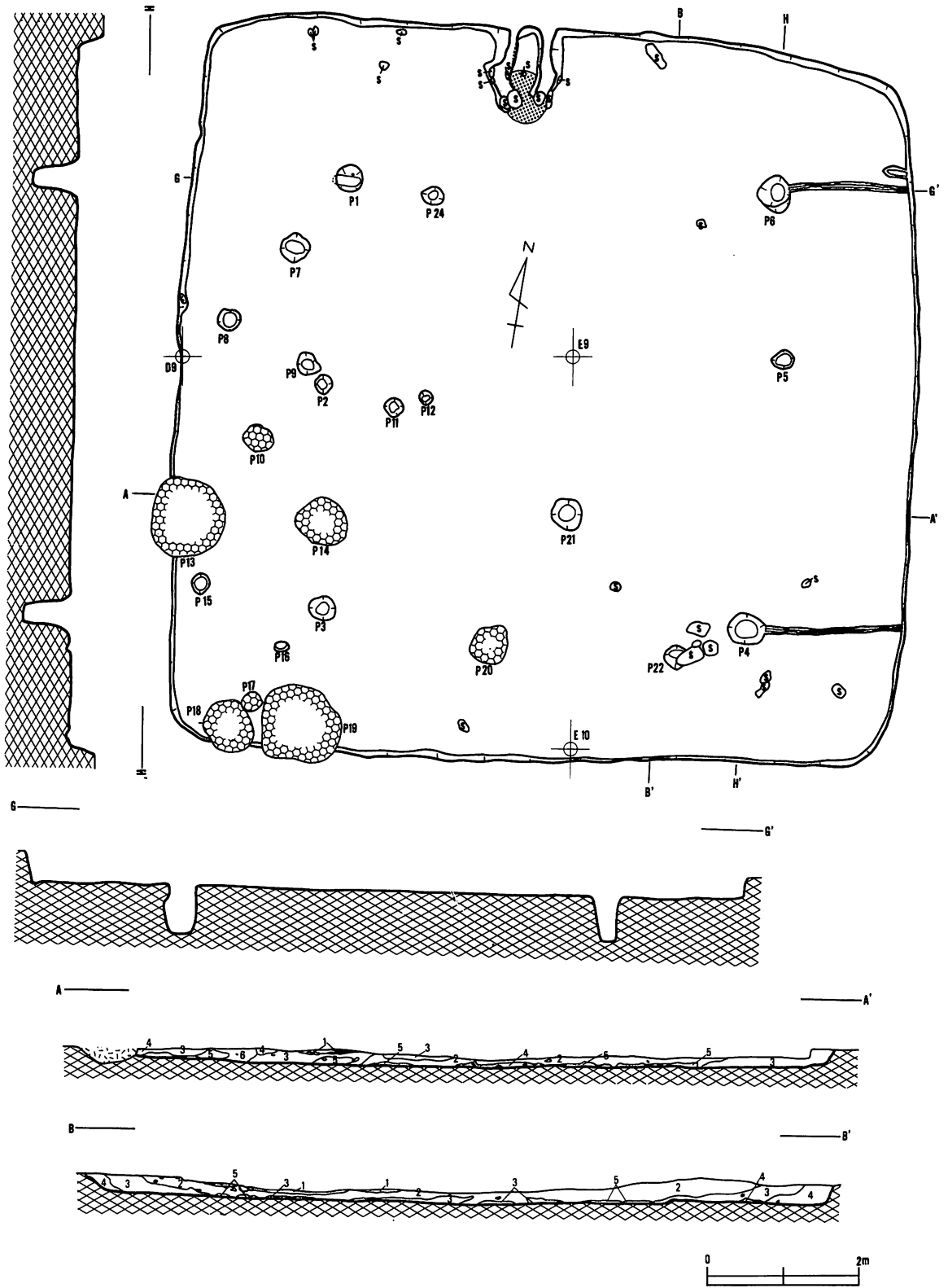
**坏形土器**(241) ロクロ使用成形のもので、1ヶ体分2ヶの破片が出土している。底部形態や底部切り離し技法は不明であるが、口縁部は軽く外反している。調整はロクロナデのみである。

**高坏形土器**(242) ロクロ使用成形のもので、坏部を欠失しているが裾部と柱部が出土している。裾部と柱部の破片は直接接合しないので脚部の全体形は不明であるが、長脚一段透し型か長脚二段透し型のものであろう。柱部の透し穴は2ヶの縦長の長方形を呈するらしい。透し穴下端の若干下位には2条の沈線が平行して全周している。裾部は透し穴下端の位置付近より大きく開き、接地部は上方に軽く挽き出され、縁帯状を呈している。なお、前記の坏形土器とは胎土や焼成に差があり、同一個体とは考えられない。調整技法はロクロナデのみである。

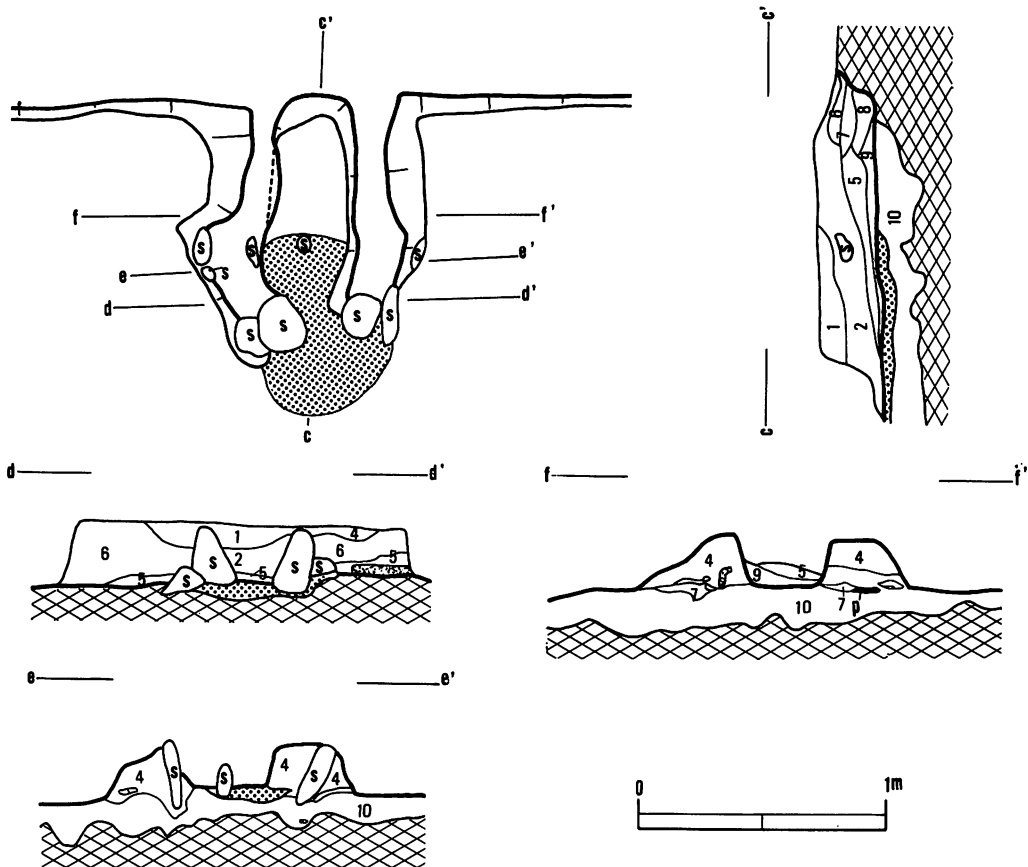
**甕形土器**(243) ロクロ使用成形のもので、頸部より強く外反し、縁帯状の口唇をもつ。調整技法はロクロナデのみである。

#### その他

**土製品** 1160～1173は土製の丸玉である。円球状を呈し中心部に1ヶの貫通孔をもち、すべ



第72図 D-8住居址-I(遺構-I)



D-8 住居址-1 埋土土層

1. 10R17/1 赤黒色
2. 7.5 YR2/2 黒褐色
3. 7.5 YR2/2 黒褐色
4. 7.5 YR2/2 黒褐色
5. 7.5 YR2/1 黒色
6. 7.5 YR2/2 黒褐色

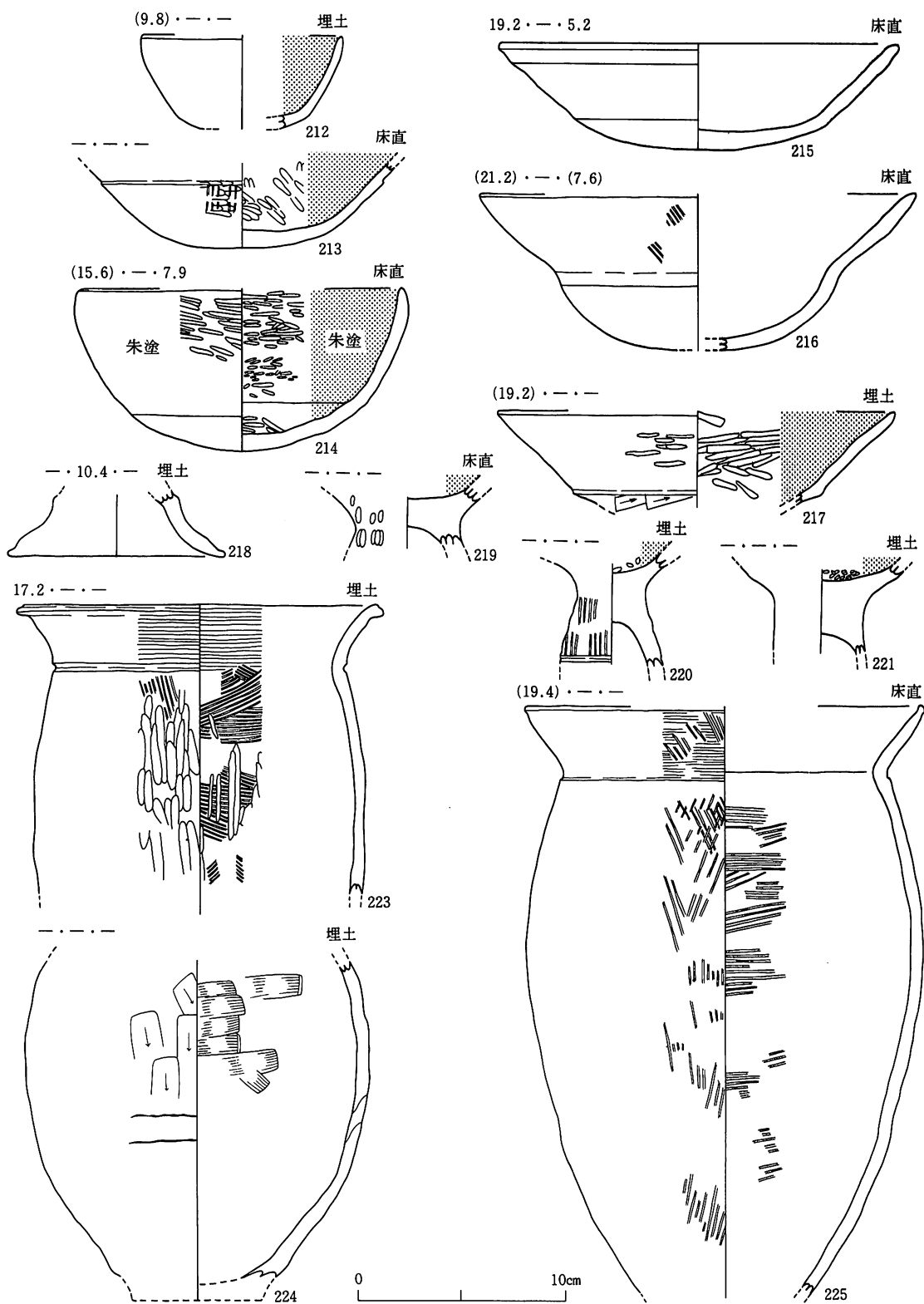
軟らかく割れやすい、粘性なし、炭化物を混入  
 強く締まっている、粘性ややあり、炭化物粒子・土器片・明褐色シルトブロック混入  
 強く締まっている、粘性ややあり、黄褐色砂質シルトが斑点状に含む  
 強く締まっている、粘性ややあり、2cm大の炭化材と炭化物粒子混入  
 軟らかい、粘性あり、炭化物粒子を多量、黄褐色シルトをわずかに混入  
 軟らかい、粘性あり、炭化物粒子を多量と焼土ブロック混入

D-8 住居址-1 カマド埋土土層

1. 7.5 YR2/2 黒褐色
2. 7.5 YR2/2 黒褐色
3. 7.5 YR2/1 黒色
4. 7.5 YR2/2 黒褐色
5. 10 YR2/3 黒褐色
6. 10 YR2/2 黒褐色
7. 7.5 YR3/3 暗褐色
8. 7.5 YR3/3 暗褐色
9. 10 YR2/2 黒褐色 粘土質
10. 10 YR2/3 黒褐色

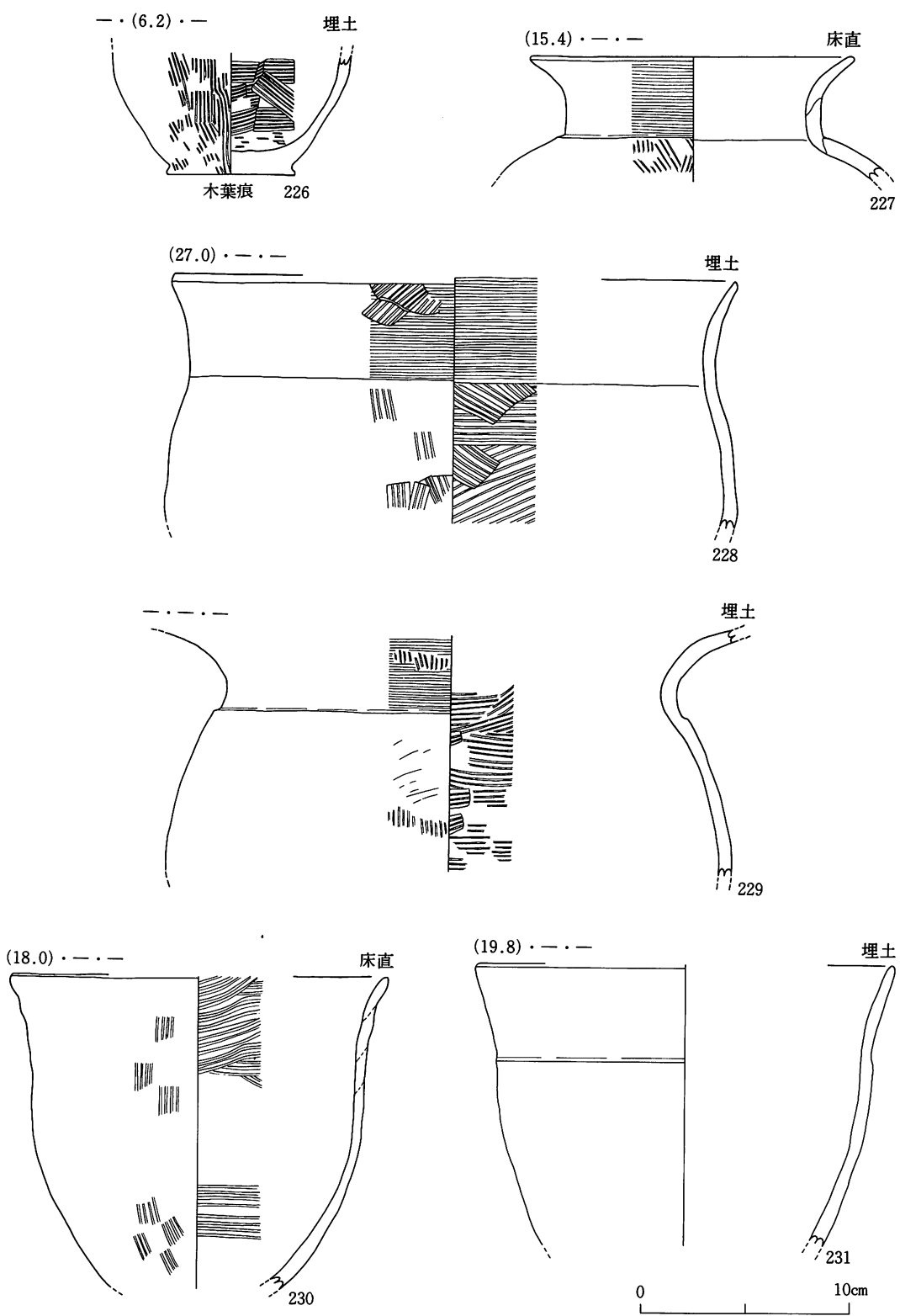
強く締まる、粘性ややあり、黄褐色砂質シルトが斑点状に混入  
 強く締まる、粘性ややあり、2cm大の炭化材と炭化物粒子を混入  
 軟らかい、粘性あり、炭化物粒子を多量と黄褐色シルトをわずかに混入  
 強く締まる、粘性ややあり、炭化物・焼土ブロックを混入  
 軟らかく粘性がある、焼土をわずかに混入  
 粘性あり、シルトや炭化物粒子をわずかに混入  
 軟らかい、粘性がある、焼土粒や炭化物をわずかに混入  
 軟らかい、粘性あり、明赤褐色焼土を混入  
 軟らかい、粘性あり、明赤褐色焼土を混入  
 やや軟らかい、粘性ややあり

第73図 D-8 住居址-1 (遺構-2)

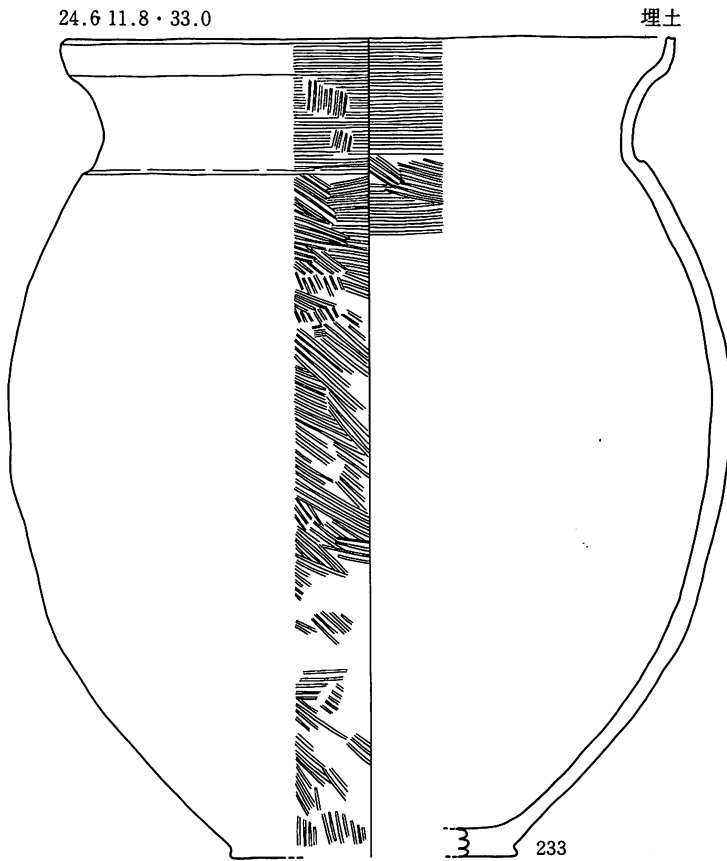
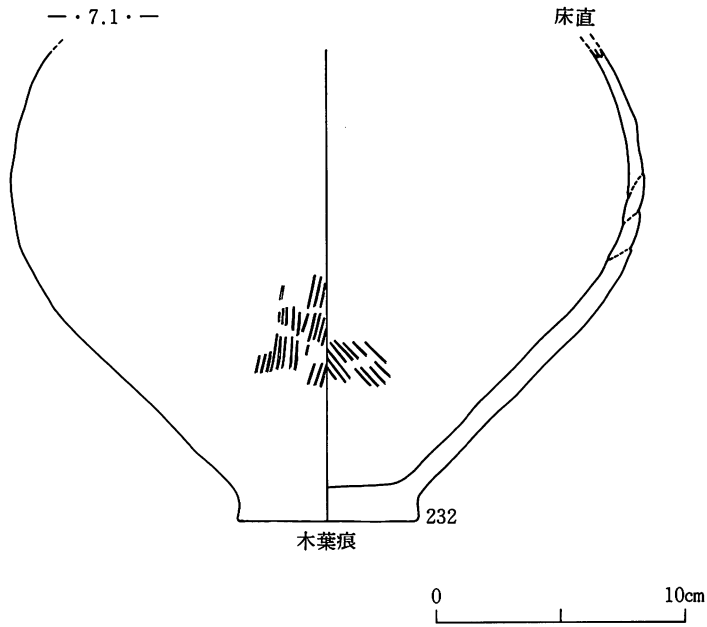


第74図 D-8住居址一I(遺物一I)

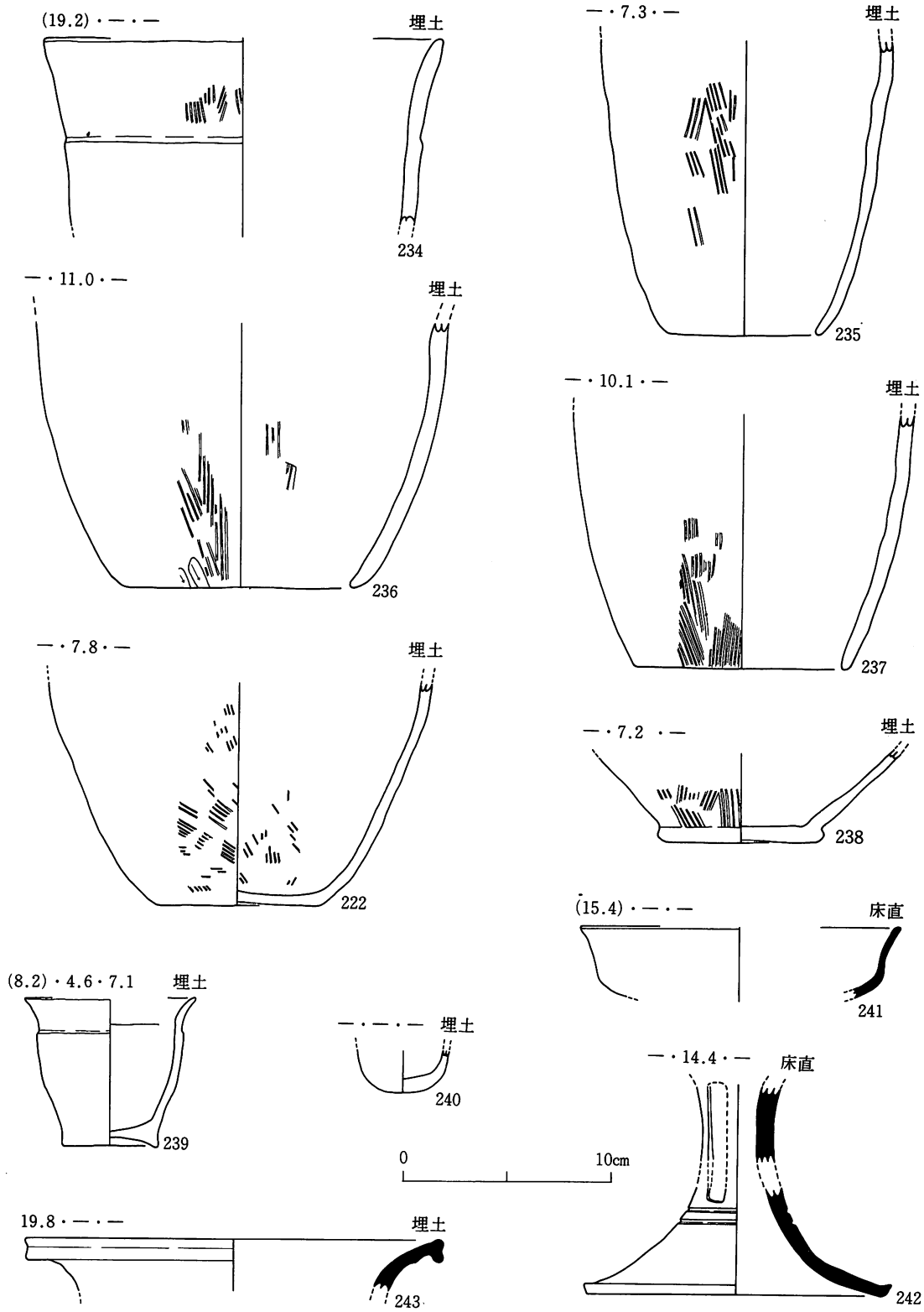




第75図 D-8住居址一I(遺物-2)



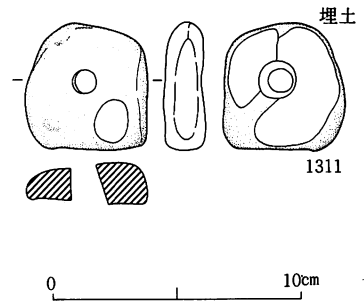
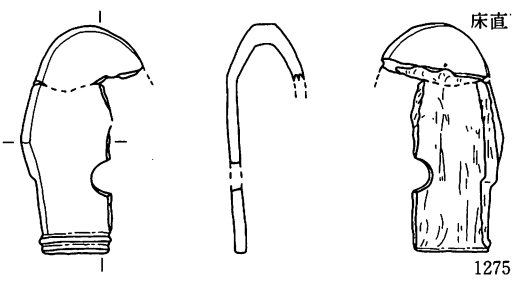
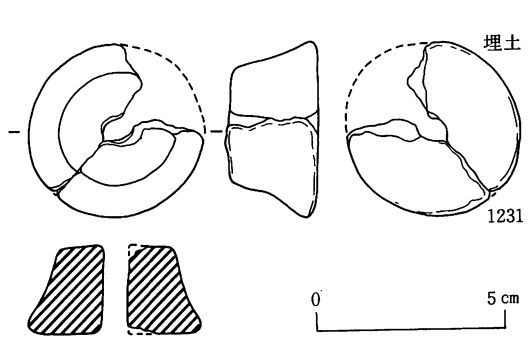
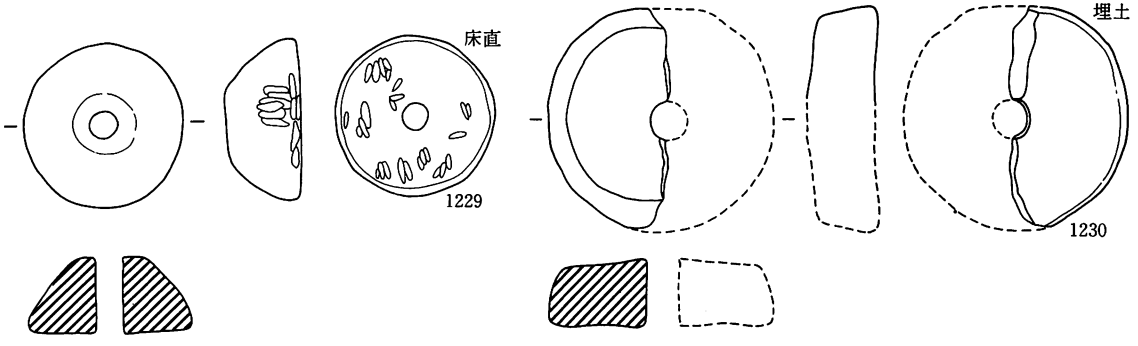
第76図 D-8 住居址-1 (遺物-3)



第77图 D-8 住居址-1 (遺物-4)

① 床直 1160    ② 床直 1161    ③ 床直 1162    ④ 床直 1163    ⑤ 床直 1164    ⑥ 床直 1165    ⑦ 床直 1166

⑧ 床直 1167    ⑨ 床直 1168    ⑩ 床直 1169    ⑪ 埋土 1170    ⑫ 埋土 1171    1172 欠番    ⑬ 埋土 1173    ⑭ 埋土 1174



第78图 D-8 住居址一I (遺物-5)

て黒色処理されている。大きさでは大小の2種類がある。1229～1231は土製紡錘車である。1229・1231は断面が截頭円錐形に近似しており、中央部に1ヶの貫通孔をもつ。1230は円板状を呈し中心部に1ヶの貫通孔をもつ。

**鉄製品** 1276・1277ともに鉄製の小型鑢である。断面は扁平(1277)や円形(1276)を呈するらしい。

**青銅製品** 1275は圭頭太刀の柄頭であり、1ヶの目釘穴をもつ。

**石製品** 平面形が歪んだ方形で、断面が扁平な自然礫の中心部に1ヶの貫通孔をもつものである。  
(鈴木恵治)

## 26) D-8 住居址-2

[遺構](第79・80図、P L 20B)

本住居址はD-8住居址-1の精査によってその存在が確認され、D-8住居址-1の西壁と南壁を共用していることから、D-8住居址-1の前身住居址であろうと考えられる。従って、D-8住居址-1を構築する際に北壁と東壁や北壁のカマド等を削削している。また、西壁はC-9住居址やC-9土坑と重複しているが、本住居址は重複するいずれの遺構より古い。

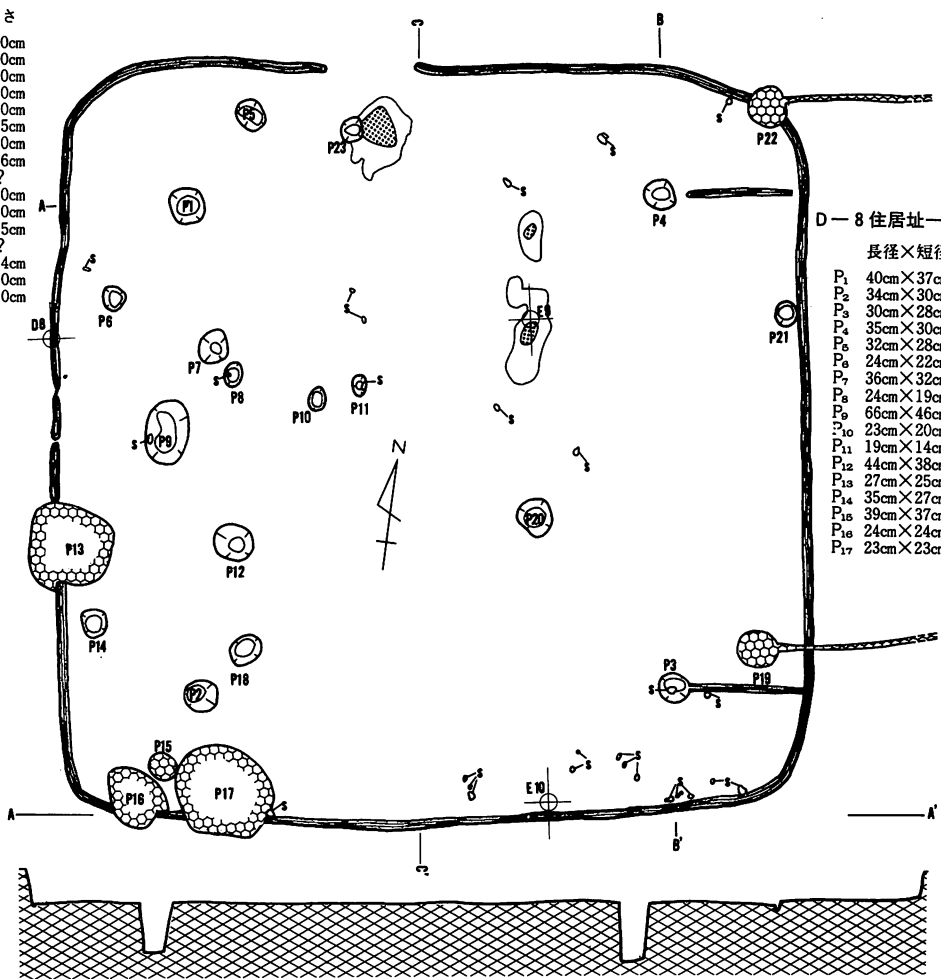
検出された壁溝で計測された規模は、南北7.70m位・東西7.70m位、壁高は南壁0.32m位・西壁北部で0.40m位である。壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北-南方向にあり、磁北に対して7度西に偏している。本住居址に直接的に伴う埋土は残存していない。本住居址は0.10m位の掘方を有し、褐色の砂質シルトや黒色を呈する粘土を埋め込んで床面を構築し、さらに、褐色のシルトで0.01m位貼って床面としている。床面はほぼ平坦である。また、本住居址ではカマド部分と他遺構と重複する部分を除いて壁溝がほぼ全周している。壁溝の埋土は暗褐色を呈する粘土で、少量の炭化物を含む。規模は位置によって若干差があるが、最大上縁巾0.06m位で、深さは0.04m位を測る。

本住居址の床面よりP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>とも径0.35m位で、深さは0.60m前後を測り、平面形は円形や楕円形を呈する。埋土は黒褐色のシルトであるが、P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>の下位には暗赤褐色の砂を混入し、また、P<sub>2</sub>の埋土には炭化物粒や焼土粒が含まれていた。これらP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の性格は、本住居址の対角線上に位置することや規模等から本住居址に伴う柱穴を構成しているものと考えられる。また、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の位置より東壁に向かって壁溝状の溝が2条検出されている。長さは1.2m位で、上縁巾・深さともに壁溝のそれと差がない。おそらく、間仕切りの壁があったものであろう。

直接的なカマドは検出されていないが、北壁ほぼ中央の壁溝が切れる部分の南側で、焼成をよく受けた焼土面を検出した。焼土面はD-8住居址-1の床面より下位であることや位置等

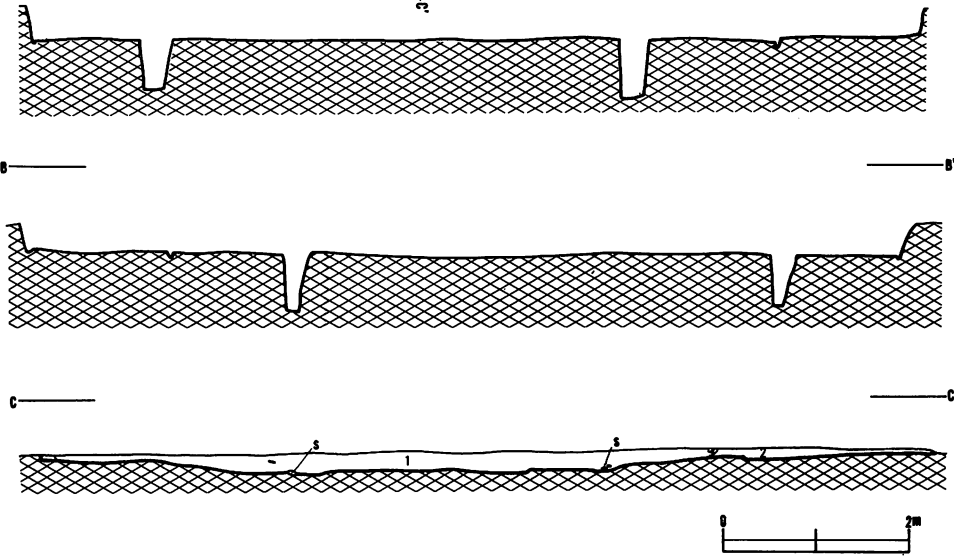
D-8 住居址-2 ビット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	35cm×33cm	68.0cm
P <sub>2</sub>	25cm×22cm	13.0cm
P <sub>3</sub>	34cm×30cm	17.0cm
P <sub>4</sub>	49cm×38cm	59.0cm
P <sub>5</sub>	30cm×25cm	13.0cm
P <sub>6</sub>	47cm×40cm	59.5cm
P <sub>7</sub>	37cm×34cm	64.0cm
P <sub>8</sub>	30cm×27cm	16.6cm
P <sub>9</sub>	32cm×27cm	?
P <sub>10</sub>	25cm×22cm	20.0cm
P <sub>11</sub>	18cm×17cm	15.0cm
P <sub>12</sub>	24cm×20cm	9.5cm
P <sub>13</sub>	17cm×12cm	?
P <sub>14</sub>	40cm×35cm	13.4cm
P <sub>15</sub>	30cm×?	48.0cm
P <sub>16</sub>	26cm×24cm	44.0cm

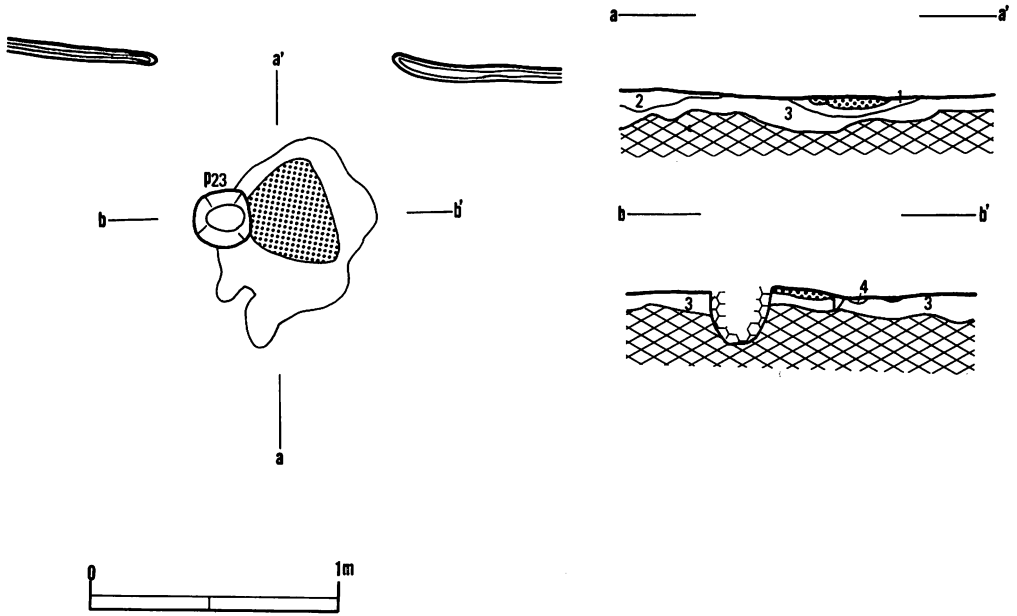


D-8 住居址-1 ビット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	40cm×37cm	62.5cm
P <sub>2</sub>	34cm×30cm	64.0cm
P <sub>3</sub>	30cm×28cm	50.8cm
P <sub>4</sub>	35cm×30cm	61.5cm
P <sub>5</sub>	32cm×28cm	58.8cm
P <sub>6</sub>	24cm×22cm	12.8cm
P <sub>7</sub>	36cm×32cm	23.1cm
P <sub>8</sub>	24cm×19cm	11.8cm
P <sub>9</sub>	66cm×46cm	10.7cm
P <sub>10</sub>	23cm×20cm	18.4cm
P <sub>11</sub>	19cm×14cm	14.4cm
P <sub>12</sub>	44cm×38cm	9.7cm
P <sub>13</sub>	27cm×25cm	8.5cm
P <sub>14</sub>	35cm×27cm	58.0cm
P <sub>15</sub>	39cm×37cm	14.4cm
P <sub>16</sub>	24cm×24cm	11.3cm
P <sub>17</sub>	23cm×23cm	21.5cm



第79図 D-8 住居址-2 (遺構-1)



第80図 D-8住居址-2(遺構-2)

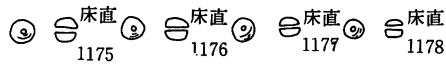
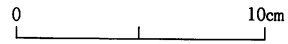
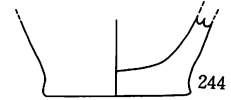
D-8住居址-2カマド埋土土層

- |                    |       |                         |
|--------------------|-------|-------------------------|
| 1. 5 Y R 4/6赤褐色    | シルト質土 | 軟らかい、粘性なし、焼土の浸透を受けている   |
| 2. 10 Y R 2/3黒褐色   |       | 軟らかく締まる、粘性ややあり、焼土ブロック混入 |
| 3. 10 Y R 2/3黒褐色   |       | 軟らかい、粘性ややあり             |
| 4. 2.5 Y R 3/6暗赤褐色 | 砂質シルト | 堅い、粘性なし、焼土が混入           |

3.8・一・5.7 埋土



一・5.8・一 埋土



第81図 D-8住居址-2(遺物)

から考えて、この焼土面がカマド燃焼部に伴うものと断定した。位置は北壁中央より0.55mほど西によっている。焼土の範囲は0.42m×0.36m位で層厚は0.04m位である。

〔遺物〕(第81図、P L 85 B)

本住居址は埋土もほとんど残存していない状態であったことから、遺物の出土も少なかった。種類は土師器と土製品があり、器種は甕形土器と小型土器・土製丸玉である。

#### 土師器

**甕形土器**(244) 底部より体部を若干残存し、ロクロ未使用成形のものである。底部周囲は若干突出し、底面はナデられている。調整技法は体部外面はかすかにハケメが残存しているが、よく磨り消されている。内面はナデやミガキである。

**小型土器**(245) ロクロ未使用成形で、底部が丸底を呈し、器形は壺形である。肩部付近に最大径をもつ。頸部には段をもち、口縁部は軽く外弯して口唇に移行し、口唇は尖り気味である。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ナデやミガキで、内面もナデやミガキである。

#### その他

**土製品**(1175～1178) 土製丸玉である。小型のもので、円球状を呈し、中心部に1ヶの貫通孔をもつ。すべて黒色処理されている。(鈴木恵治)

## 27) D-12住居址

〔遺構〕(第82・83図、P L 20 C)

本住居址は重複する遺構もなく単独で検出されている。

規模は南北4.60m・東西5.0m位で、壁高は約0.20mを測り、壁は床面に対して100度の角度を示している。平面形は東西に若干長い横長の長方形を呈し、主軸は北西-南東方向にあり、磁北に対して30度西に偏している。埋土は暗褐色や黒褐色を呈するシルトで構成され、色調や混入物によって6層に細分されている。混入物としては褐色を呈するシルト粒や、炭化物粒が観察され、全体的に酸化鉄の集積が多い。床は黒褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は平坦で良く締まり固い。本住居址の壁沿いの床面で壁溝が検出されている。壁溝はカマド部分と東壁中央やや南寄りや南壁中央やや東寄りでは切れているが、他は連続している。埋土は黒褐色のシルトで構成され、炭化物の混入や酸化鉄の集積が観察される。規模は最大上縁巾0.15m位で、深さは0.05m～0.10mである。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の土坑が検出されている。規模は径0.24m～0.30mで深さは0.38m～0.45mを測り、平面形はいずれも方形や長方形を呈している。埋土はいずれも黒色土や黒褐色土で構成され、柱痕跡を残すものはない。対角線上に位置することや規模から、本住居址の柱穴を構成するだろう。



カマドは北西壁で検出され、壁中央より0.20mほど東に寄って位置している。検出されたのは袖部・燃焼部・カマド埋設土器・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は黒褐色のシルトを貼り付けて構築され、焚口部分には左側袖部で1ヶ、右側袖部で2ヶの礫が縦位で埋設されている。礫の粒径は左側で20cm×15cm、右側は45cm×20cmで、床面より0.20m位埋め込んでいる。燃焼部は床面とほぼ同じ面であり、煙道部とは段差がない。燃焼部の焼土は焚口部より燃焼部中央付近まで及んでいる。焚口部の床面には粒径50cm×20cmの細長い礫が1ヶ、左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの礫を利用して「冂」状に組み立てていたものと考えられる。また、カマドには2ヶの埋設土器が検出され、焚口部に向かって横転していた。左側の埋設土器は、体部上半～口縁部を欠失しているが、底部径7.9cm・残存部器高17.5cmである。右側のそれは口縁部径16.6cm・器高24cmである。支脚は検出されていない。

〔遺物〕(第84・85・86・87図、P L 86・87・88・89)

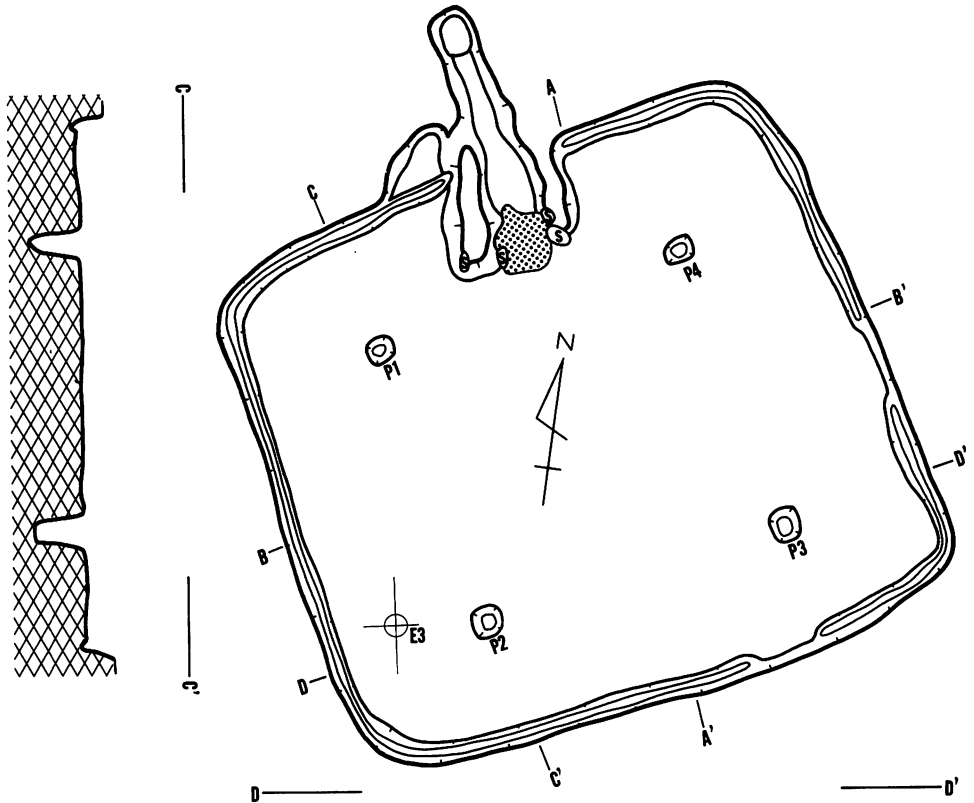
埋土内や床面直上より多くの遺物が出土し、特に、カマド右側の床面直上からの出土が多い。その他の部分での出土は少ない。遺物の種類は土師器・須恵器・土製品があり、器種では坏形土器・高坏形土器・甕形土器・甑形土器・鉢形土器・土製紡錘車がある。

#### 土師器

**坏形土器**(246～248) いずれもロクロ未使用成形で、体部無段または軽い段をもつ平底風丸底のものである。全体的な器形はそれぞれによって差があり、246は他より浅く、体部は内弯気味に外傾し口縁部で直立気味に強く内弯する。247は体部に軽い段をもち、口縁部は段の位置で内弯気味に外反している。248は平底風の底部をもち、体部無段で口縁部は外傾している。調整技法は口縁部に一部ヨコナデがみられるが(248)、他はミガキが主体である。内面はミガキ後黒色処理されている。

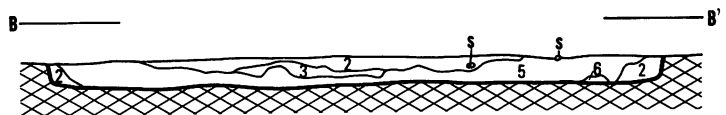
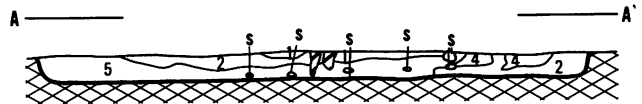
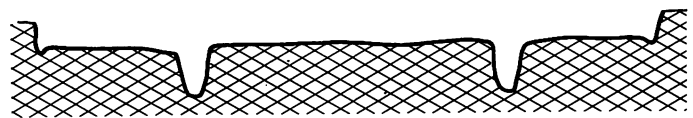
**高坏形土器**(249) ロクロ未使用成形のもので、脚部のみが出土している。脚部は比較的高く裾は大きく開くらしい。調整技法は、外面がミガキやナデがみられ、内面はミガキ後黒色処理されている。

**甕形土器**(250・252・253・255～266・269) いずれもロクロ未使用成形のものである。全体的な器形は長胴型(253・258～261・264・266)と胴が若干膨らむ型(252・259)、球胴に近い型(255・269)がある。大きさではそれぞれの中で大小があり、体部最大径は、体部中位～上位にあるものが多い。頸部には段をもつもの(250・252・253・257～259・261～264・266)ともたないもの(255・265)がある。口縁部は段の位置より直線的に外反するもの(250・253・255・265・258)や外弯気味に外反するもの(252・257・259・262・263・266)・外弯した後内弯するもの(261・264)がある。口唇は丸味をもつもの(250・255・257・259・264)・角ばる



D-12住居址ピット計測値

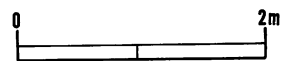
	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	25cm×23cm	42.0cm
P <sub>2</sub>	28cm×26cm	40.0cm
P <sub>3</sub>	30cm×25cm	38.5cm
P <sub>4</sub>	27cm×18cm	48.8cm



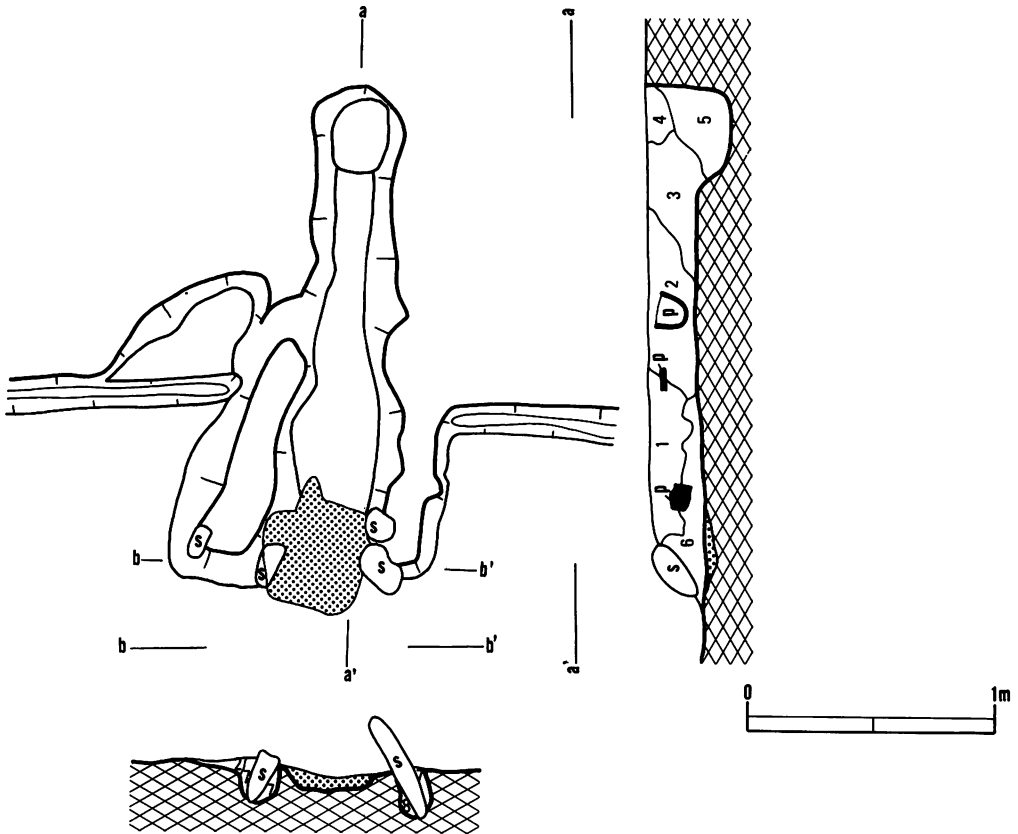
D-12住居址埋土土層

- |    |                 |                                       |
|----|-----------------|---------------------------------------|
| 1. | 5 Y R 2/1 黒褐色   | 堅く締まっている、粘性なし、シルトと酸化鉄を混入              |
| 2. | 5 Y R 2/2 黒褐色   | 堅く締まっている、粘性なし、シルト粒と少量の炭化物混入           |
| 3. | 7.5 Y R 3/1 黒褐色 | 締まっている、粘性なし、多量の酸化鉄と斑状のシルト混入           |
| 4. | 7.5 Y R 3/3 暗褐色 | 軟らかい、粘性あり                             |
| 5. | 5 Y R 2/1 黒褐色   | 締まっている、粘性あり、多量の酸化鉄と少量の炭化物混入、土器片の出土が多い |
| 6. | 7.5 Y R 2/2 黒褐色 | 締まっている、粘性なし、シルト粒と少量の炭化物を混入            |

シルト質土



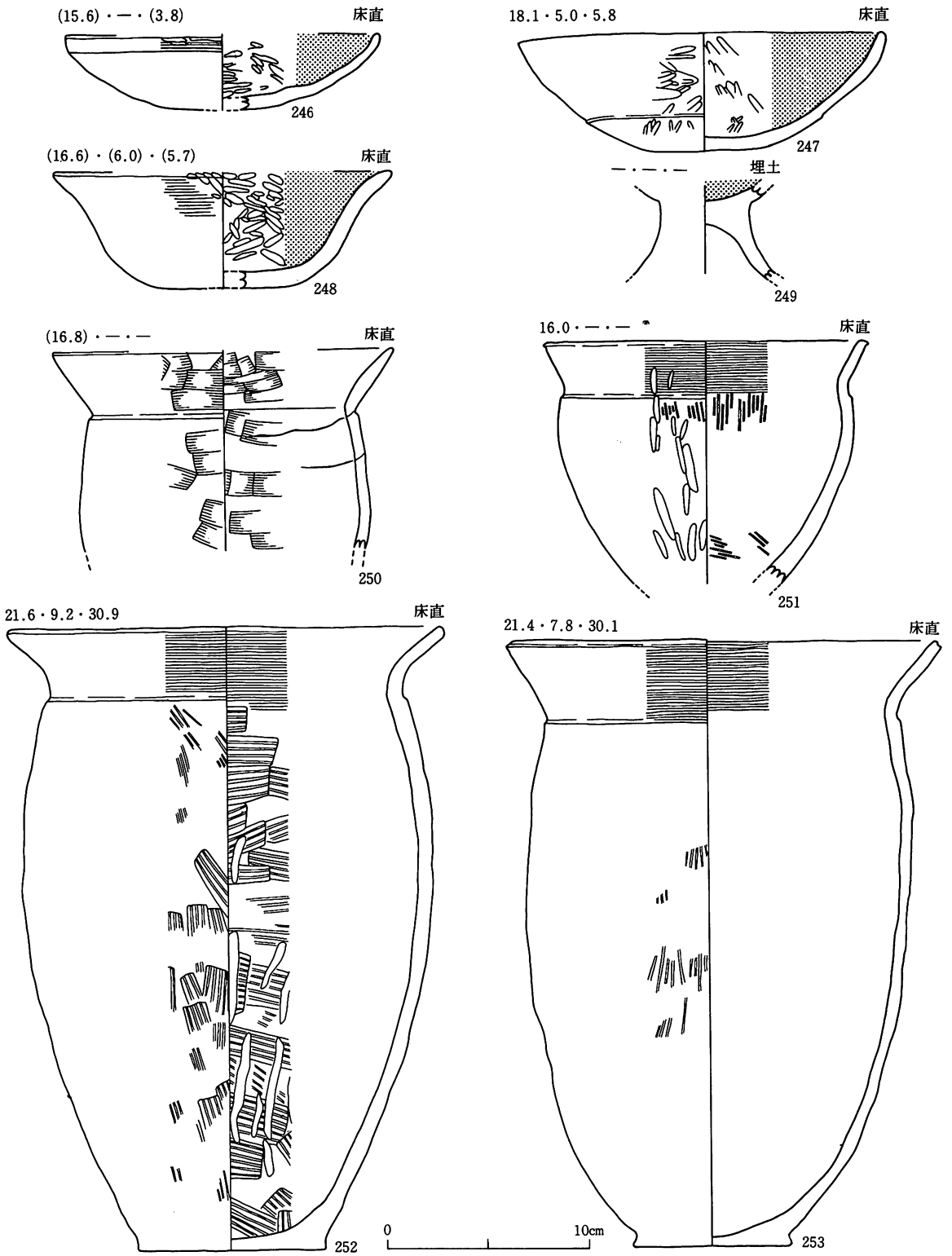
第82図 D-12住居址(遺構-1)



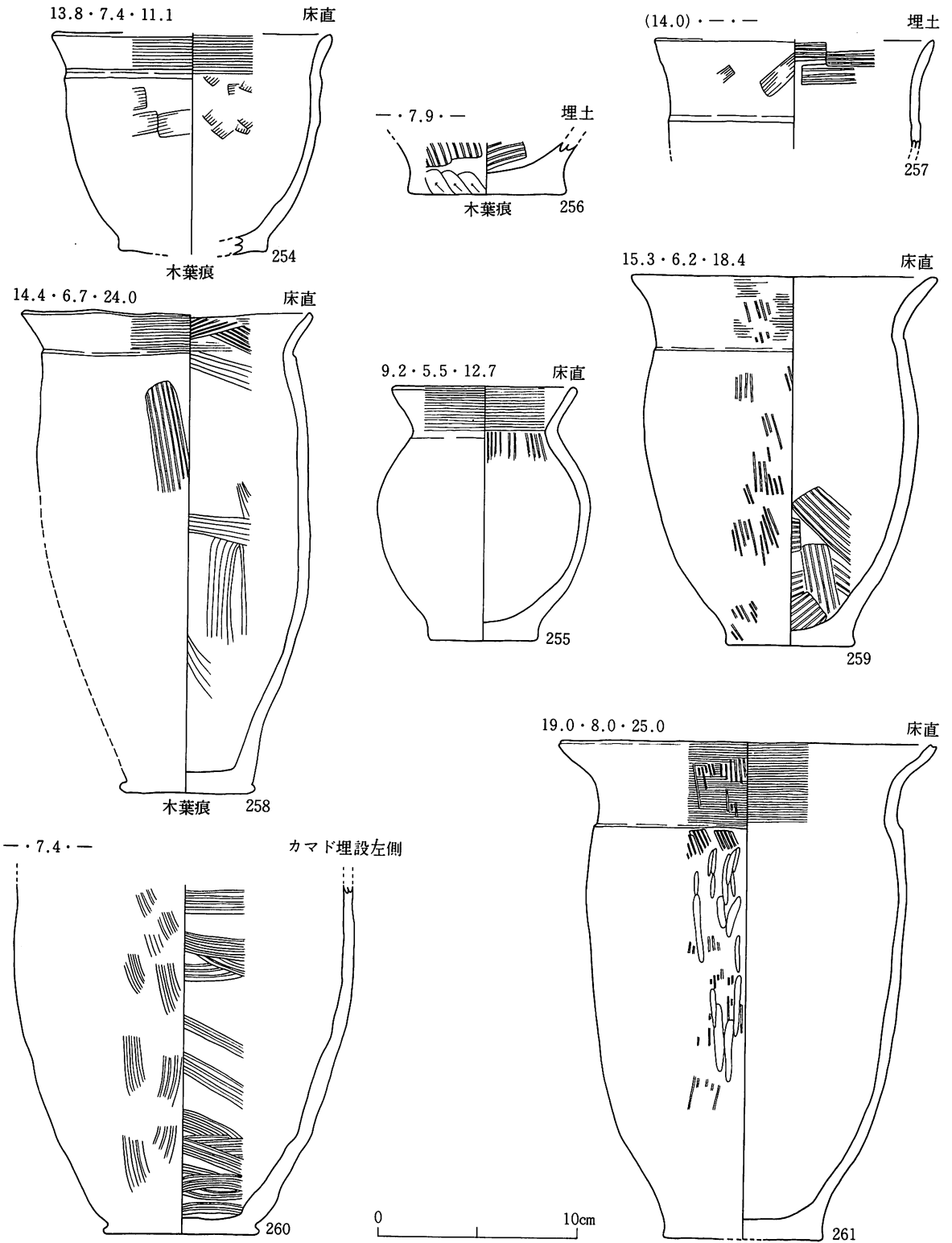
D-12住居址カマド埋土土層

- |                           |                                 |
|---------------------------|---------------------------------|
| 1. 5 Y R 2/1 黒褐色          | 堅く縮まっている、粘性なし、酸化鉄を多量に混入         |
| 2. 7.5 Y R 3/2 黒褐色 粘土質シルト | 軟らかい、粘性少しあり、完形に近い土器出土           |
| 3. 7.5 Y R 2/3 極暗褐色       | 軟らかい、粘性少しあり、炭化物微量に混入            |
| 4. 7.5 Y R 2/2 黒褐色        | 軟らかい、粘性少しあり、シルト・酸化鉄・炭化物が微量混入    |
| 5. 7.5 Y R 2/3 極暗褐色 砂質シルト | 縮まりなし、粘性なし、少量の炭化物混入             |
| 6. 7.5 Y R 3/3 暗褐色 粘土質シルト | 軟らかい、粘性あり、酸化鉄混入                 |
| 7. 7.5 Y R 2/2 黒褐色        | 軟らかい、粘性あり、多量の炭、焼土と細かいシルト・酸化鉄が混入 |
| 8. 7.5 Y R 4/3 褐色         | 軟らかい、粘性あり                       |

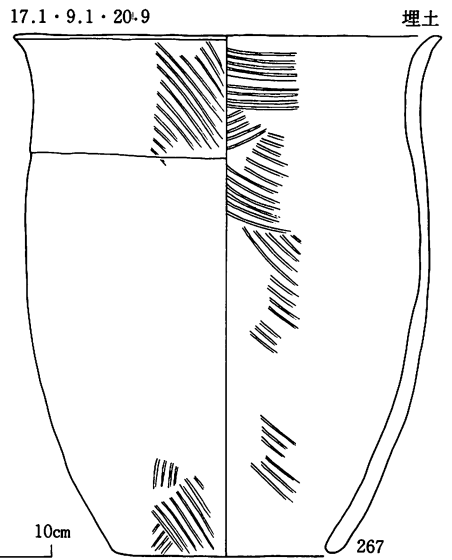
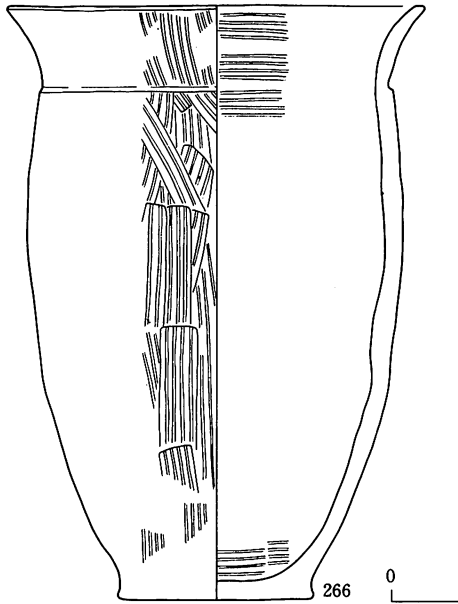
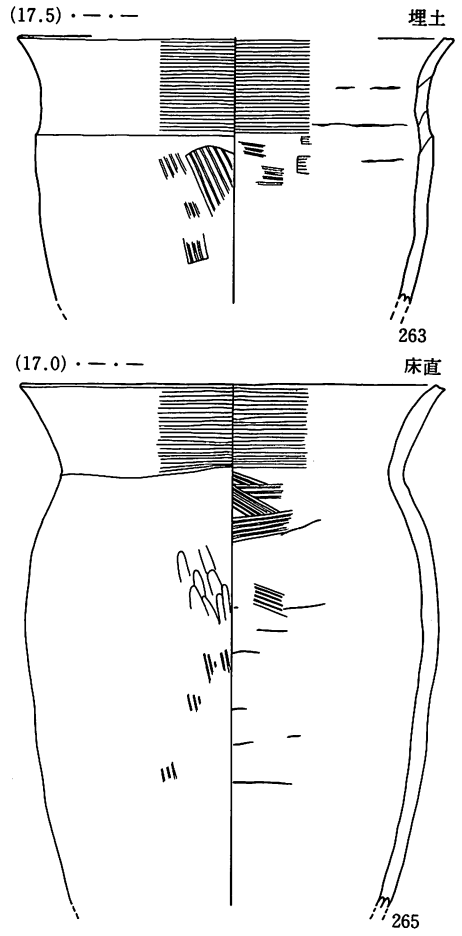
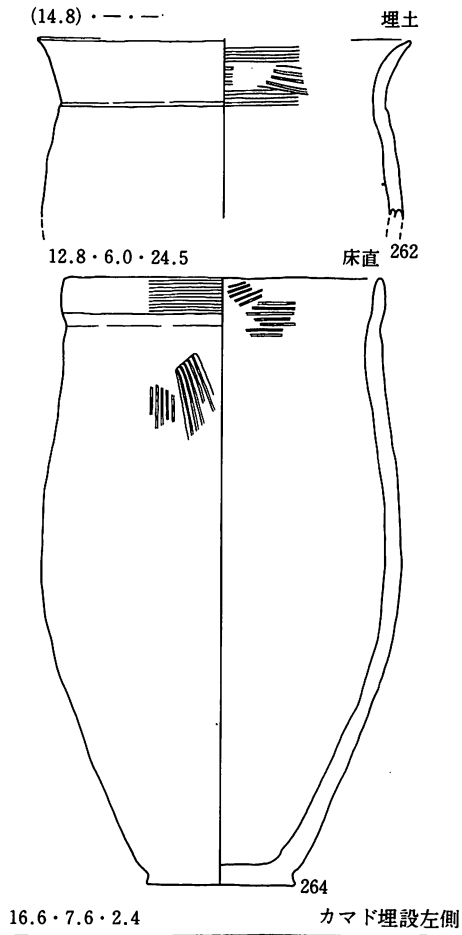
第83図 D-12住居址(遺構-2)



第84図 D-12住居址(遺物-1)



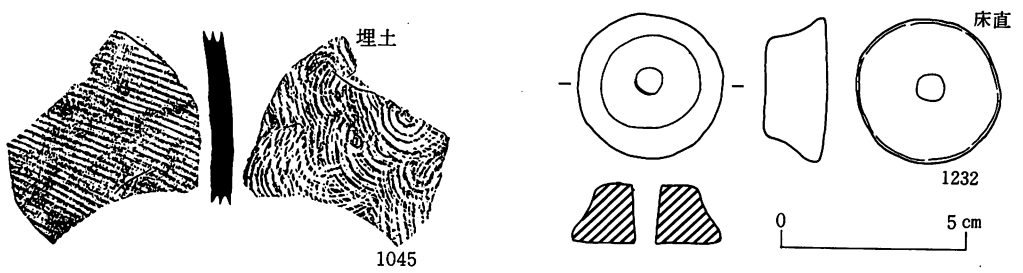
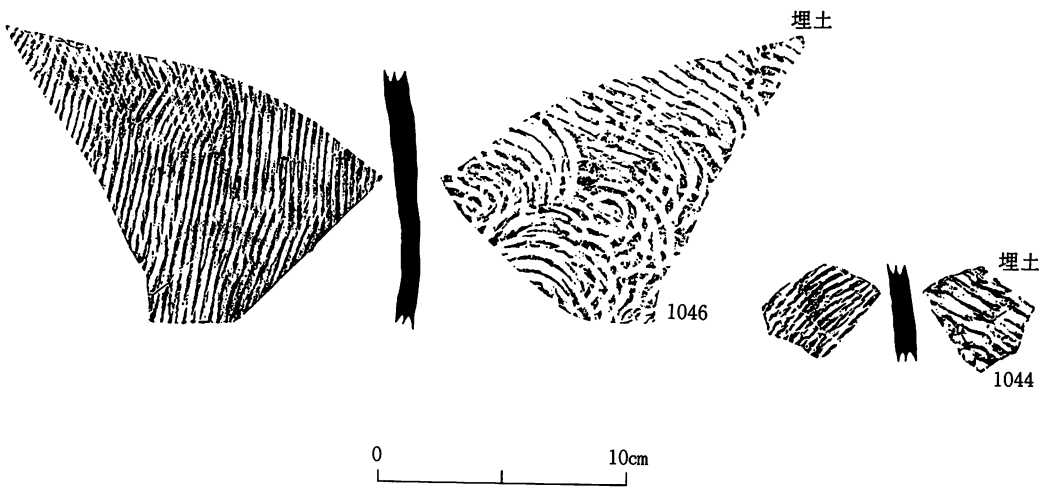
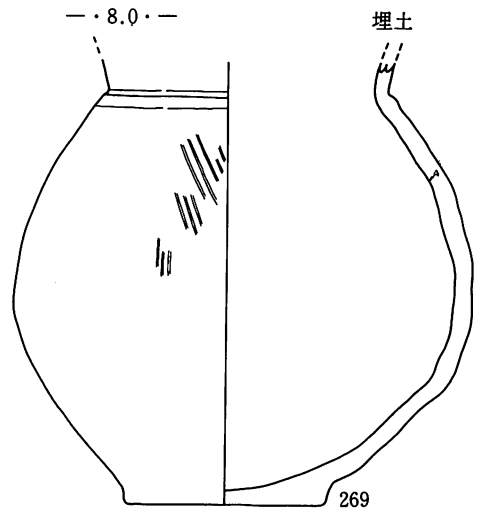
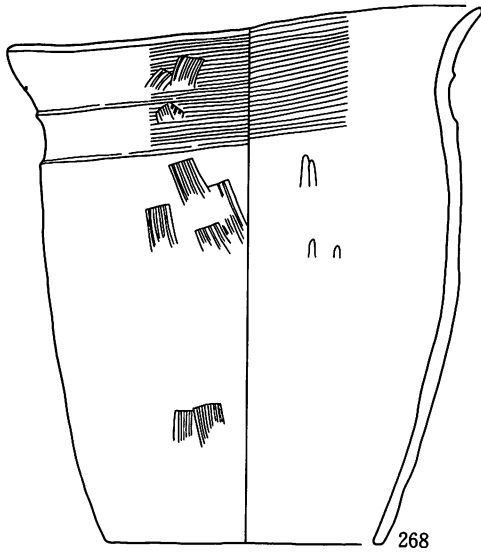
第85図 D-12住居址(遺物-2)



0 10cm

第86図 D-12住居址(遺物-3)

埋土



第87图 D-12住居址(遺物-4)

もの(252・258・263・266)・沈線状の凹みをもつもの(253・261・265)・先細りとなるもの(262)がある。底部周囲は突出するもの(252・253・258・259・260・261・264・266)としないもの(255・269)がある。底面は木葉痕をもつ(256・258)以外は、ナデられて平坦である。調整技法は、口縁部外面ヘラナデ(250・257)・ヨコナデ(252・253・255・258・259・261・263～265)・ハケメ(266)等があるが、一部(259・261)はハケメ後ヨコナデである。内面は258・264・266がハケメ以外はヨコナデが主体である。体部外面はハケメ後スリケシ(252・253・258・259・260・263・264・269)がもっとも多く、ハケメ後ミガキ(261・265)は少ない。内面はハケメ後ナデやミガキで磨り消すものが主体である。

**甑形土器**(267・268) いずれもロクロ使用成形で、無底型である。全体的な器形は、甕形土器の底部を取り去った様な形態で、体部が若干膨らんでいる。頸部には段をもつもの(268)ともないものがあり、口縁部は外弯気味に外反している。口唇はいずれも先細りとなり、丸味をもっている。調整技法は、口縁部が内外面ともヨコナデのもの(268)とハケメ(267)のものがあり、体部では外面がいずれもハケメ、内面はハケメ(267)とミガキ(268)がある。

**鉢形土器**(251・254) ロクロ未使用成形のもので、完形品は出土していないが、器高より口縁部径が大きいものである。底部より内弯気味に外傾する体部は、最大径を上位にもち、頸部にかけて窄む。頸部には段をもち、口縁部は段の位置より直線的に外反する。口唇はナデられて下方に突出をもつもの(251)と、口縁上端が若干肥厚して丸味をもつもの(254)がある。254の底部周囲には軽い突出があり、底面には木葉痕があり中央部が盛り上がっている。

#### 須恵器

大甕の体部破片が出土している。1044は内外面とも平行タタキ目をもつが、1045・1046は外面平行タタキ目・内面青海波文のものである。

#### その他

**土製品**(1232) 断面が截頭円錐形に近い形のもので、中心部に1ヶの貫通孔をもつ。

(吉田 洋)

### 28) E-2 住居址-1

〔遺構〕(第88図B、P L21A)

本住居址は西側をE-2住居址-2と、さらに南側でE-3住居址-1やE-3住居址-2、また東側でF-4溝跡と重複しているが、遺構検出時には新旧関係を明確にできなかった。しかし、精査中の埋土土層の観察によって、本住居址の埋土がE-3住居址-1の埋土によって削剥されているのが観察された。E-2住居址-2とF-4溝跡は本住居址によって削剥されていることも確認されている。以上の様なことから考えられる新旧関係は、E-3住居址-1



とE-3住居址-2は本住居址より新しく、E-2住居址-2とF-4溝跡は本住居址より古いということになる。

規模は東西3.40m位を測るが、南北はE-3住居址-1の削剝によって不明である。壁高は0.20m位を測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈するものと推定され、主軸は北-南方向にあり西壁でほぼ磁北を示している。埋土は黒褐色を呈する固く締まったシルトで構成され、全層に縦縞状を呈する酸化鉄の集積が認められる。礫等の混入もほとんどない。床は地山の褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずに直接床面としている。床面は比較的軟弱で排水が悪いがほぼ平坦である。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の土坑が検出されている。規模はそれぞれによって差があるが、P<sub>1</sub>・P<sub>6</sub>は近似している。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は規模が径0.25m位で深さ0.35m位を測り、平面形はいずれも円形や楕円形を呈している。埋土はいずれの土坑も大差がなく、黒褐色を呈する粘土質のシルトで構成され、混入物としては砂粒・褐色を呈するシルト粒や酸化鉄の集積等が観察される。これら土坑の性格は、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は位置や規模から考えて本住居址に伴う柱穴を構成しているであろう。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>は形態や規模では本住居址に伴う貯蔵穴である可能性もあるが、直接的な関係は不明である。

カマドは北壁で検出され、壁中央より0.95mほど東によって位置している。検出された部分は煙道部のみで、他の袖部・燃烧部は検出されていない。検出された部分を煙道部とした理由は、本住居址の範囲内でカマド袖部・燃烧部焼土が全く検出されていないことから、E-3住居址-1やE-3住居址-2によって削剝を受けた可能性も考えられるが、前者2棟の床面と本住居址のそれは同位面であり、さらに、西壁・東壁ともに煙道部と考えられる痕跡が全く認められない。ただ、北壁の東隅部寄りに煙道部の痕跡らしき土層変化が検出され、この位置をカマド位置として認定した。煙道部は基部は広く、煙出部に向かって次第に狭くなり、床面は平坦である。煙出部に土坑は検出されていない。

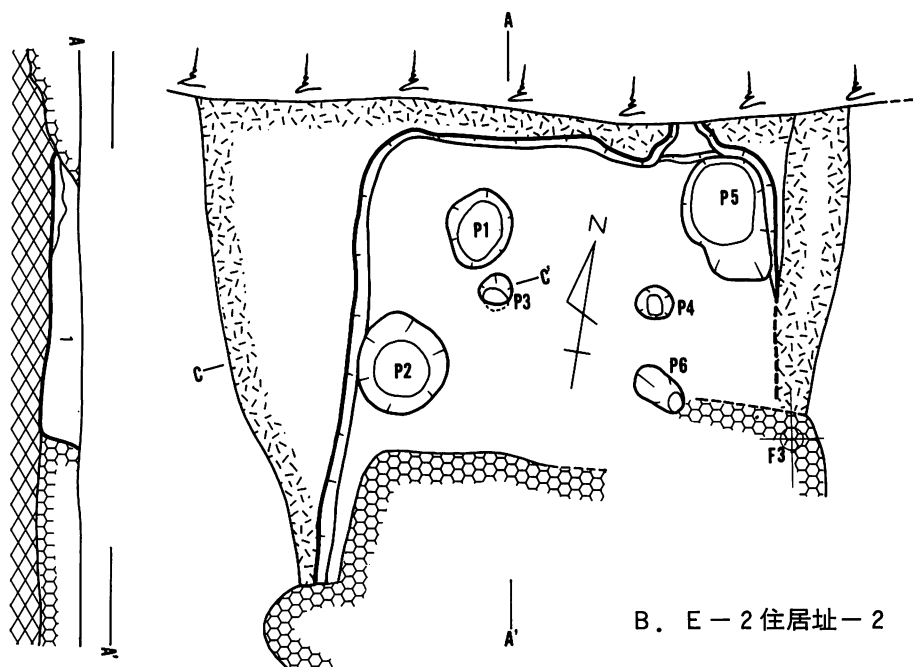
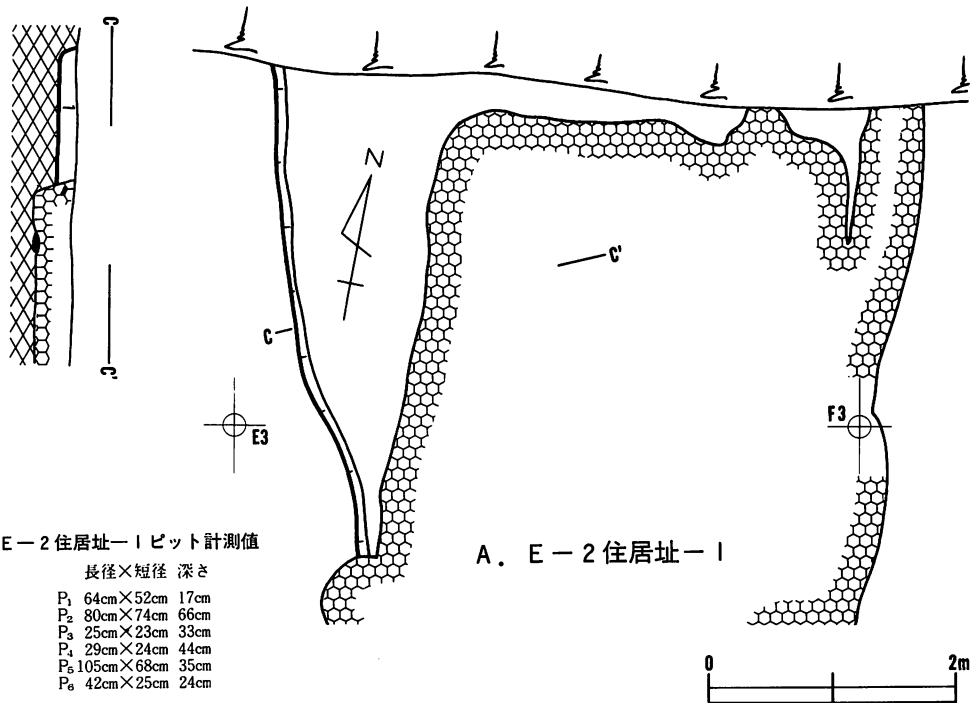
〔遺物〕(第89図、P L 90A)

床面直上出土のものは少なく、埋土内での出土が多い。種類としては土師器・須恵器があり、器種では坏形土器・甕形土器が含まれている。

#### 土師器

**坏形土器** 小破片のみの出土であり、図化されたものはない。すべてロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切り無調整らしい。調整技法は、外面ロクロナデ、内面はミガキ後黒色処理のものとロクロナデのみのものが共伴している。

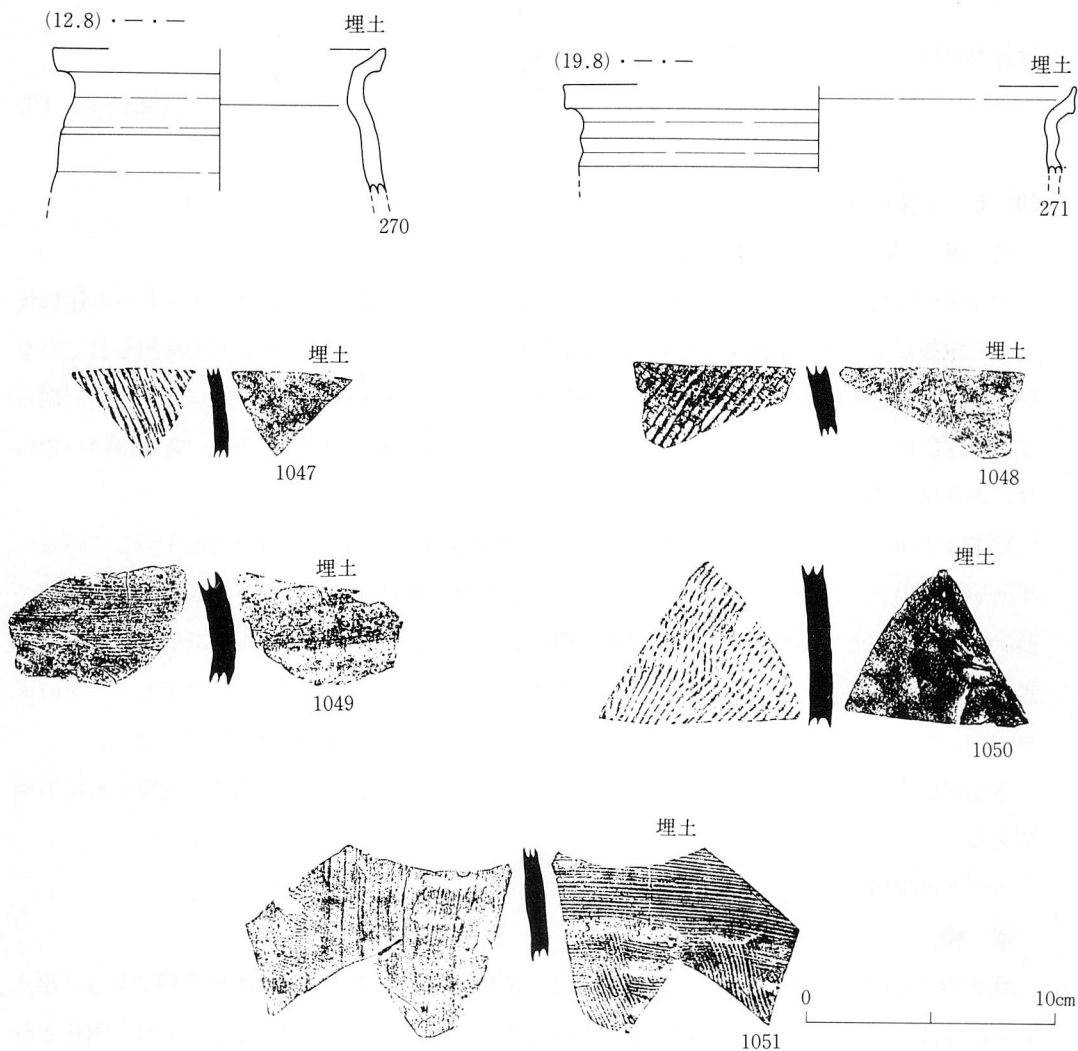
**甕形土器** (270・271) 他にも出土しているが、小破片が多く2ヶが図化された。いずれもロクロ使用成形で、体部上位にロクロナデを明瞭に残している。口縁部は頸部より強く外反し短



E-2 住居址-1・E-2 住居址-2埋土土層

1. 7.5YR3/2黒褐色 シルト質土 堅く締まっている、酸化鉄が多量に混入

第88図 E-2 住居址-1・E-2 住居址-2 (遺構)



第89図 E-2 住居址-1 (遺物)

かく、口唇は上下方に挽き出され縁帯状を呈している。頸部より体部が膨らむものもある。破片の中に体部下半にヘラケズリをもつものがあるが、図化されたものでは不明である。大きさでは大型のものはなく中型 (271) と小型 (270) のものがあり、小型のもの底部切り離し技法は回転糸切りされるらしい。

#### 須恵器

甕形や壺形の体部破片と考えられるものである。1047・1048・1050は外面に平行タタキ目をもつが、内面は凸面の当て工具痕をもっている。1049は外面カキ目・内面ヘラナデである。1051

は外面が粗いヘラケズリであるが、内面はカキ目である。

(高橋与右エ門)

## 29) E-2 住居址-2

〔遺構〕(第88図A、P L 21 B)

本住居址は東側でE-2住居址-1と、さらに、南東部でE-3住居址-1・E-3住居址-2と重複しており、重複するそれらの住居址埋土内に床面と考えられる面が検出されていないことから、重複遺構との新旧関係は、重複するいずれの住居址よりも本住居址が古い。従って、本住居址に関連する部分として検出されたのは、西壁寄りの床面と西壁の各一部のみであり、さらに、北側が段丘崖に延びていることから不明な点が多い。

規模は不明であるが、壁高は0.1m位を測り、壁は床面に対して105度の角度を示している。平面形は検出された部分より考えて方形を呈するものと推定され、主軸方向は不明であるが、西壁は磁北に対して15度西に偏している。埋土は黒褐色を呈する固いシルトで構築され、酸化鉄の集積が多く観察される。床は地山の暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は良く締まって固く、平坦である。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面では土坑は検出されていないので、柱穴の存在有無・位置・規模ともに不明である。

カマドは検出されていない。

〔遺物〕

埋土内で小破片が数ヶ出土したのみである。種類は土師器で、器種は甕形土器である。出土した破片はいずれもロクロ未使用成形のものであったが、体部の小破片であるため、図化されていない。その他の詳細は不明である。

(高橋与右エ門)

## 30) E-3 住居址-1

〔遺構〕(第90・91図、P L 22 A)

本住居址は北側でE-2住居址-1、そして同じ位置でE-3住居址-2と重複しているが、遺構検出時には新旧関係を確認できなかったが、精査中に埋土土層の観察によって、本住居址がE-2住居址-1やE-3住居址-2を削削していることが確認されたことから、本住居址はE-2住居址群とE-3住居址群の中でもっとも新しい住居址といえる。本住居址に関連する部分として確認されたのは、西壁・南壁・東壁・カマドの各部分であり、北壁は埋土土層図に記録されたのみで、平面的に検出することはできなかった。

規模は東西3.90m位・南北は推定で4.0m位で、壁高は0.30m位であり、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈するものと推定され、主軸は東－西方向にあり、磁北に対して109度東に偏している。埋土は黒褐色や極暗褐色を呈する粘性のあるシルトで構成され、色調や混入物によって2層に細分されている。混入物としては、1層には粒径0.05m～0.10mの円礫が若干混入し、2層には褐色を呈するシルト粒や炭化物粒の混入が観察される。床は地山の褐色を呈する砂質のシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は全体的に軟弱で若干起伏もあり、排水が非常に悪い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>までの土坑が検出されている。規模や深さはそれぞれによって差がみられ一様ではないが、平面形は円形や楕円形を呈し、断面形は鍋底型やピーカー型を示している。埋土は黒褐色や暗褐色を呈する粘土質のシルトが主体で構成されるが、混入物によって2層に細分される場合が多い。混入物としては褐色のシルト粒・炭化物粒・焼土粒・礫等があるが、それぞれの土坑によって差がある。これら土坑の性格は、P<sub>9</sub>はカマド右側隅部に位置することや規模より考えて、本住居址に伴う貯蔵穴である可能性が強い。他の土坑は本住居址との直接的な関係は不明である。

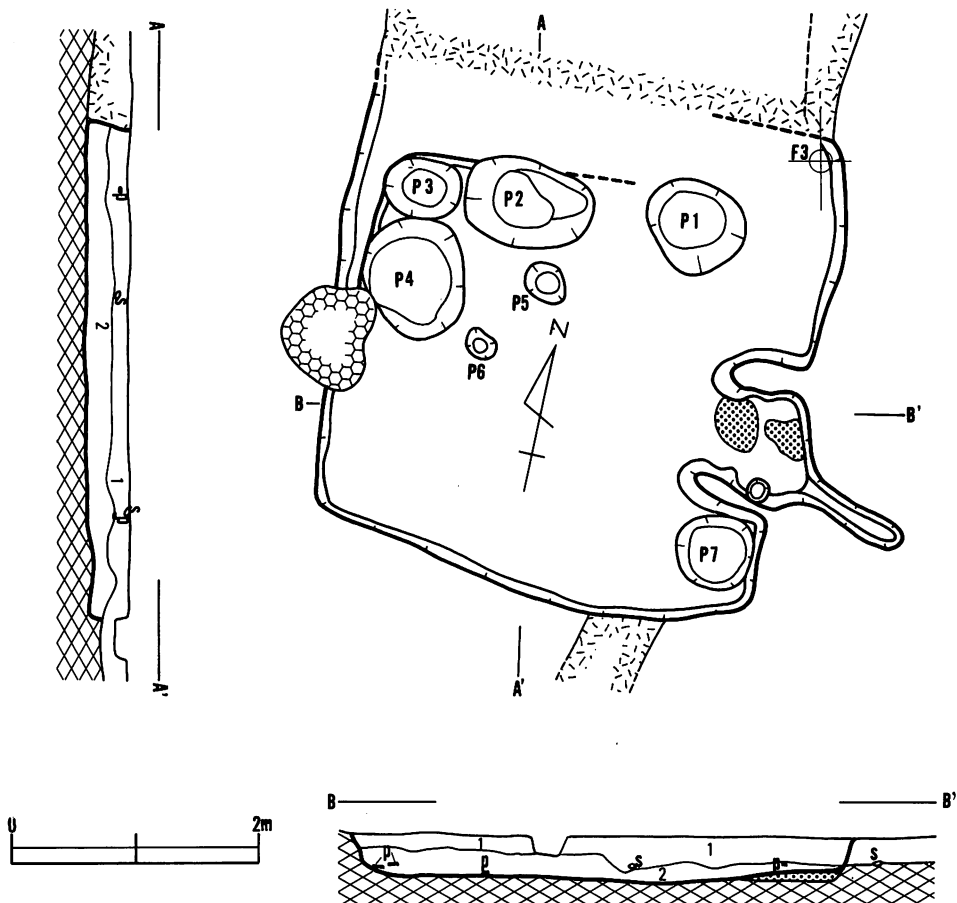
カマドは東壁で検出され、壁中央より0.6m南に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部に限られ、天井部は検出されていない。袖部は黄褐色を呈するシルトを貼り付けて構築している。燃烧部は床面とほぼ同位面で奥壁に続き、煙道部とは0.1m位の段差で接続している。燃烧部焼土は焚口部より奥壁付近まで分布し、左側袖部寄りに多くみられる。煙道部は基部が若干巾広く、次第に狭くなって煙出部へ続き、床面はほぼ平坦である。煙出部に土坑状の窪みはない。

〔遺物〕(第92・93図、P L 90 B・91 A)

床面や埋土内で出土している。出土状況は偏在することなく、全体に散在している。また、P<sub>4</sub>・P<sub>9</sub>では底面に接する様な状態で完形に近い土器が出土している。種類は土師器・須恵器・土製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・土製紡錘車がある。

### 土師器

**坏形土器**(272～288) いずれもロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。内面はミガキ後黒色処理のもの(272～275)と無処理のもの(276～288)がある。全体的な器形は、内面黒色処理のものは体部が内弯気味に外傾するもの(273・275)とやや直線的に外傾するもの(272・274)がある。内面無処理のものは軽く内弯しながら外傾するもの(276・277・280・284)と直線的に外傾するもの(278・279・283)や外弯気味に外傾するもの(281・282・285)がある。大きさには若干差があるが大差はみられず、内面黒色処理のものと無処理のものとの間に差がない。また、287・288には高台が付されている。底部は回転糸切りで切



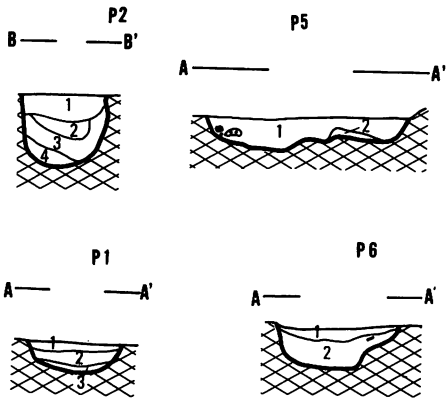
E-3-1 住居址埋土土層

1. 7.5Y R2/2 黒褐色 シルト質土 粘土あり、少量の礫・土器片を混入
2. 7.5Y R3/2 黒褐色 シルト質土 粘土あり、褐色シルトブロックと炭化物粒混入

E-3 住居址-1 ピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	80cm×69cm	25cm
P <sub>2</sub>	104cm×67cm	30cm
P <sub>3</sub>	63cm×50cm	27cm
P <sub>4</sub>	96cm×70cm	22cm
P <sub>5</sub>	38cm×29cm	14cm
P <sub>6</sub>	30cm×19cm	20cm
P <sub>7</sub>	65cm×58cm	39cm

第90図 E-3 住居址-1 (遺構-1)



E-3 住居址ピット埋土土層

P<sub>1</sub>

1. 7.5 YR2/2~3/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色土シルトブロックが混入
2. 7.5 YR2/2~3/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色シルト・炭・焼土・水酸化鉄がブロック状に混入、土器片出土
3. 7.5 YR4/3 褐色 砂質シルト 粘性なし

P<sub>2</sub>

1. 7.5 YR3/1~3/2 黒褐色 粘土質シルト 水酸化鉄が多量に混入
2. 7.5 YR3/1~3/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性あり
3. 7.5 YR3/1~3/2 黒褐色 粘土質シルト ブロック状に褐色シルトと水酸化鉄が混入
4. 7.5 YR3/2 黒褐色 砂質シルト 粘性なし、褐色シルトが混入

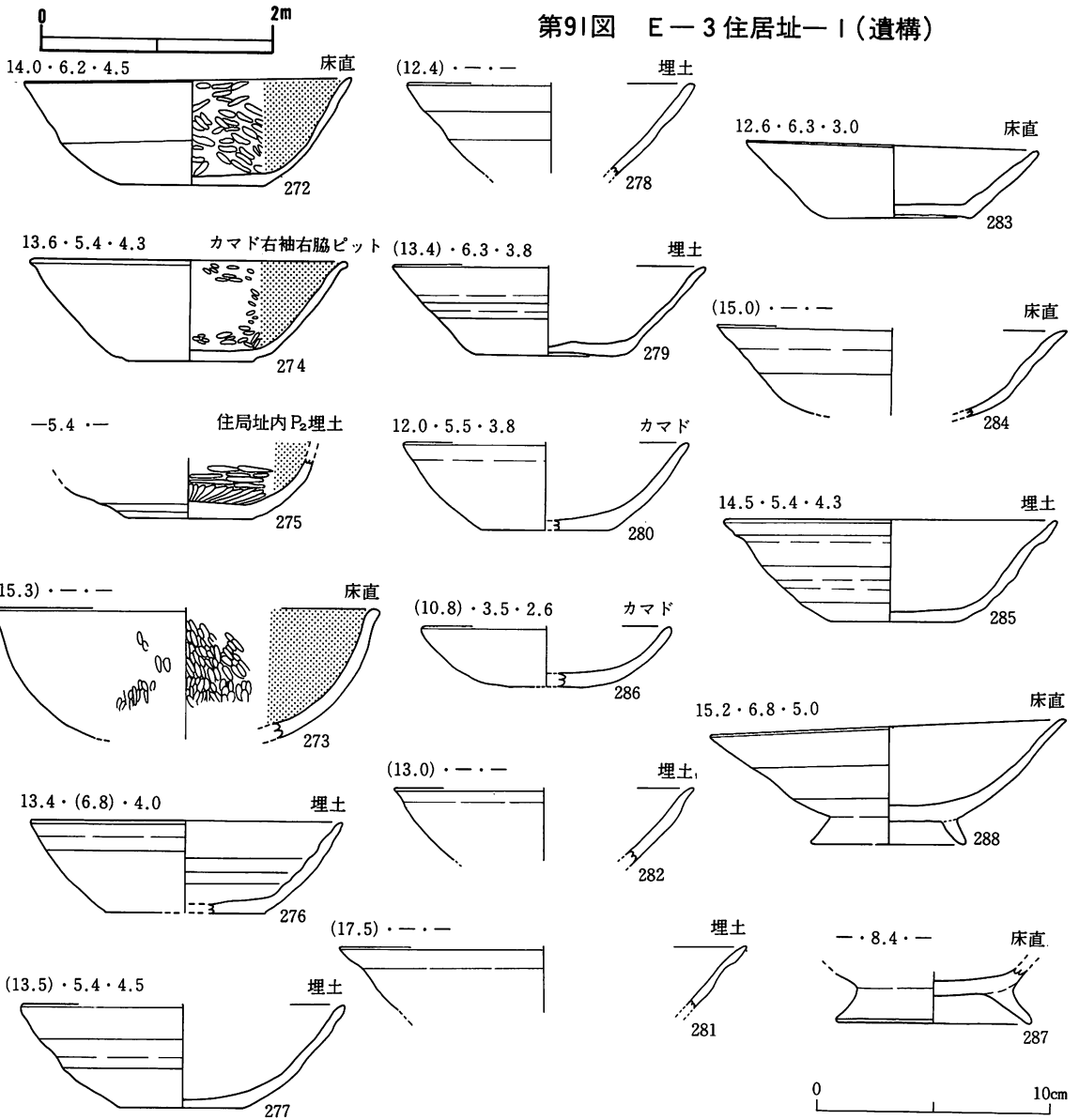
P<sub>6</sub>

1. 7.5 YR2/1~2/2 黒~黒褐色 粘土質シルト 褐色シルト、焼土塊が混入
2. 7.5 YR3/3~3/4 褐色 砂質シルト 軟らかい、粘性あり

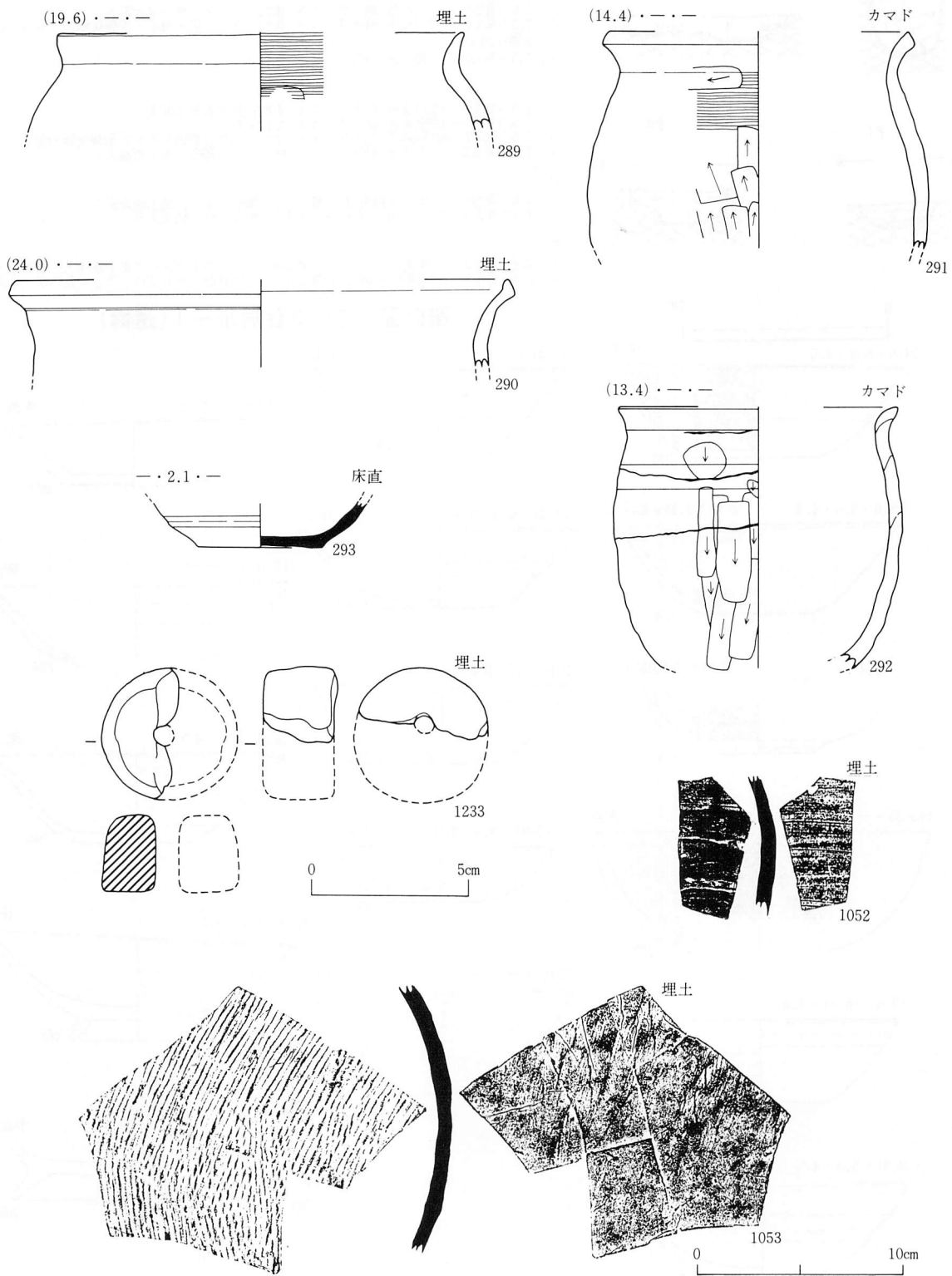
P<sub>8</sub>

1. 7.5 YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色の小ブロックを少量混入、炭と焼土少量混入
2. 7.5 YR3/3~4/3 暗褐色~褐色 砂質シルト 黒褐色シルトブロックと少量の焼土を混入

第91図 E-3 住居址-1 (遺構)



第92図 E-3 住居址-1 (遺物-I)



第93図 E-3 住居址一I (遺物-2)



り離され、底部と体部の境部分に「ハ」字形に高台部を貼り付けており、内面は黒色処理されていない。体部外面に対する調整は、273にはミガキが入っているが、他はロクロナデのみである。

**甕形土器**(289～292) 290・291はロクロ使用成形であるが、292は体部に粘土紐の巻き上げ痕を明瞭に残しており、仕上げ段階でロクロを使用しており、289も292と同様らしい。全体的な器形は289・292は基本的に良く近似し、膨らんだ体部が頸部で窄み、口縁部は289がほぼ直線的に、292は若干外反して口唇部に移行し、口唇部はいずれも内削ぎによって先細りとなる。290の口縁部は頸部より軽く外弯して口唇に移行し、口唇部は上方に挽き出されて受口状を呈する。291は膨らんだ体部が頸部で窄み、口縁部は軽く外反して口唇部に移行し、口唇は平らである。大きさでは大型(289・290)と小型(291・292)がある。体部外面の調整は中位以下にヘラケズリが入る。底部は残存していないので切り離し技法は不明である。

#### 須恵器

**坏形土器**(293) 体部上半～口縁部を欠失しているが1ヶ出土している。底部切り離し技法は回転糸切り無調整のものである。

**甕形土器**(1052・1053) いずれも体部の破片である。1052は内外面ともロクロナデ調整のものである。1053は外面に平行タタキ目をもち、内面はナデのものである。

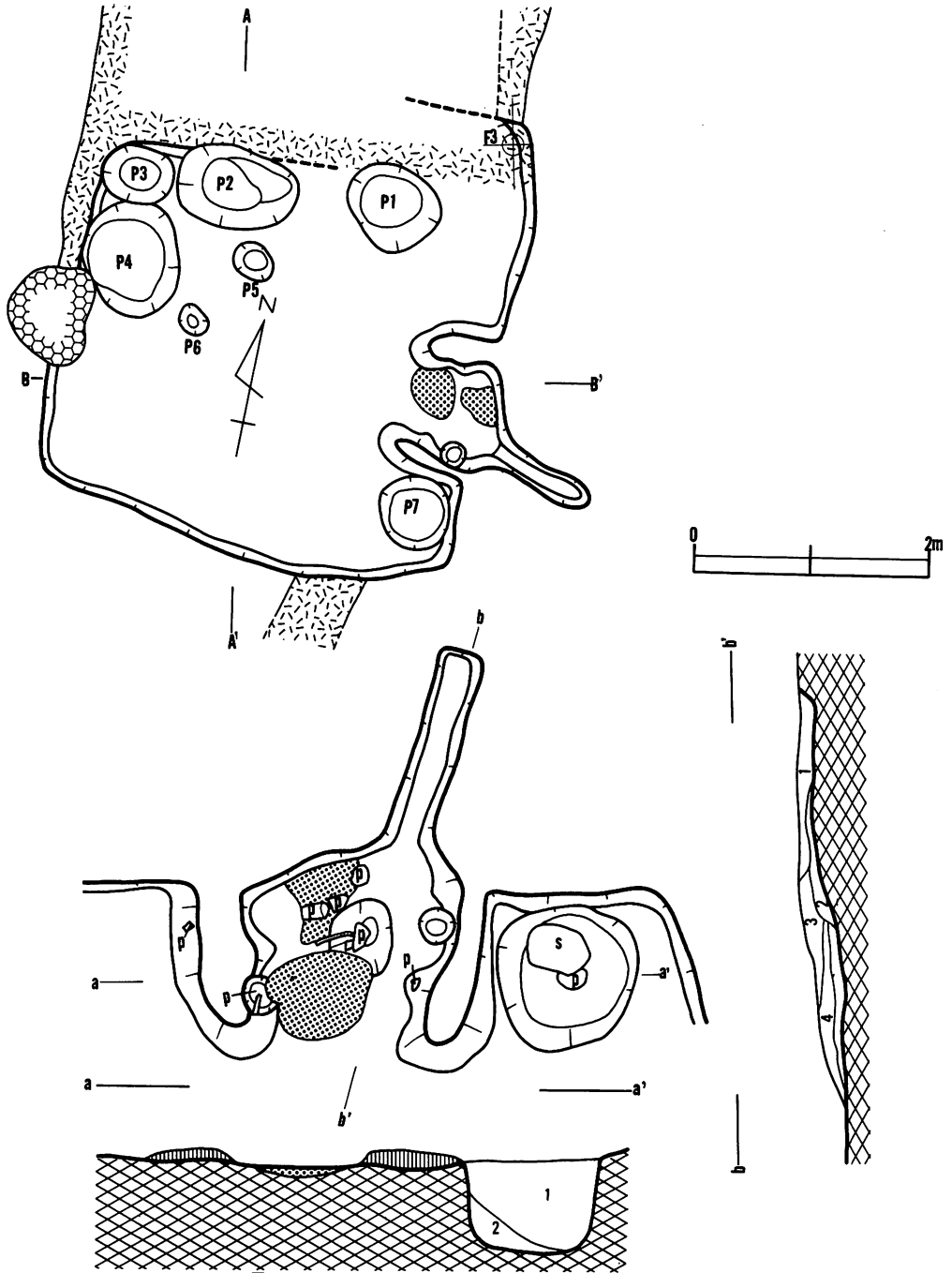
#### その他

**土製品**(1233) ほぼ $\frac{1}{2}$ を欠損している紡錘車である。断面が截頭円錐形を呈し、中心部に1ヶの貫通孔をもつ。(高橋与右エ門)

### 31) E-3 住居址-2

[遺構](第94図、P L 21C)

本住居址は同じ位置でE-2住居址-1と、北側でE-3住居址-1・東側でF-4溝跡とそれぞれ重複しているが、遺構検出時に新旧関係が明確にされず、精査中の土層観察や検出された床面の状態によって、E-3住居址-1は本住居址とE-2住居址-1を削剝し、本住居址やE-3住居址-1・E-2住居址-1は、ともにF-4溝跡を削剝していることが判明した。以上の様なことから、本住居址は他の遺構によって削剝を受けた部分が多く、検出された部分も南壁・西壁及び北壁の一部分のみである。本住居址とE-3住居址-1の関係を考えると、E-3住居址-1の床面と本住居址のそれは同位面であるが、カマドが検出されないことや、E-3住居址-1のカマドが本住居址東壁推定距離のほぼ中間に位置している等のことから、本住居址はE-3住居址-1の東壁とカマドを共用しているものと考え、本住居址はE-3住居址-1の前身住居址として理解したい。



E-3-2 住居址カマド埋土土層

- |                  |        |                            |
|------------------|--------|----------------------------|
| 1. 7.5 YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 若干締まっている、多量の木炭・炭・焼土が混入している |
| 2. 7.5 YR4/3 褐色  | 粘土質シルト | 粘性あり、少量の炭を混入               |
| 3. 7.5 YR2/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 1~2mmのブロックで焼土と少量の炭を混入する    |
| 4. 7.5 YR2/2 黒褐色 | 混土     | 多量の焼土と炭・灰を少量混入             |
| 5. 7.5 YR3/3 暗褐色 | 粘土質シルト | 焼土ブロックが混入                  |

E-3-2 住居址貯蔵穴埋土土層

- |                  |        |                                    |
|------------------|--------|------------------------------------|
| 1. 7.5 YR2/2 黒褐色 | シルト質土  | 強く締まっている、粘性あり、5mm大の褐色シルトブロック少量混入   |
| 2. 7.5 YR3/4~4/4 | 粘土質シルト | 1層よりも強く締まっている、粘性あり、植生痕等による水酸化鉄分を混入 |

第94図 E-3 住居址-2 (遺構)

規模は東西3.5m・南北3.0m位と推定され、壁高0.15mを測る。壁は床面に対して100度の角度を示している。平面形は主軸に対して縦長の隅丸方形を呈するものと推定され、主軸は東一西方向にあり、磁北に対して109度東に偏している。埋土はE-3住居址-1の削剝によって残存していないので不明である。床は地山の明褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずに直接床面としているが、全体的に軟弱で排水が悪い。床面には若干起伏がみられるものの総じて平坦である。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面でも土坑が検出されているが、E-3住居址-1に伴う可能性も考えて、E-3住居址-1で記述した。従って、本住居址に直接伴う土坑は不明である。また、柱穴状の土坑も検出されていない。

カマドは東壁のほぼ中央に位置しているが、E-3住居址-1のそれと共用しているものと推定されることから、ここでは改めて記述しない。

#### 〔遺物〕

E-3住居址-1の出土遺物と一括しているため、どの遺物が本住居址に伴うかは不明であることから、E-3住居址-1で記述した。(高橋与右エ門)

### 32) E-4住居址

#### 〔遺構〕(第95・96図、P L 22B)

本住居址はD-4住居址・E-3住居址群・F-4住居址群・F-4溝跡とそれぞれ重複しているので不明な部分が多い。重複遺構との新旧関係は重複するいずれの遺構より本住居址が古い。

重複する部分はすべて削剝を受けているので規模は明確でないが、残存する壁から推定すると、南北・東西ともに5.5m位の規模と考えられ、壁高は0.1m位を測り、壁に対して100度の角度を示している。平面形は胴張隅丸方形を呈するものと推定され、主軸は南北方向にあり、磁北に対して3度西に偏している。埋土は褐色を呈するシルト粒の混入した黒褐色のシルトの単層で構成される。北東部寄りの埋土最下層や床面には焼土・炭化物や粒径0.1m~0.2m位の円礫が混入している。炭化物の大きさは長さ0.2m位・巾0.1m前後と小さいものであるが、ほとんどのものは床面に密着している。焼土は炭化物と床面に挟まれる状態の場合もあるが、炭化物の上に載っている場合が多い。以上の様な状況から、本住居址は焼失住居址と推定されるが、炭化物の残存状況より上家構造を推定し得る様な配列ではなく、床面に散乱している。床は暗褐色を呈する地山のシルトで構築され、貼床せずに直接床面としている。床面は良く締まって固く、若干起伏がみられるものの、ほぼ平坦である。壁溝は検出されていない。

本住居址の残存する床面でP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>までの土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>ともに径0.3

m～0.35m前後で、深さはP<sub>1</sub>が0.2mでP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は0.5m位である。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>以外に重複遺構内でP<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>が検出されている。P<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>の規模は径0.3m前後・深さはP<sub>4</sub>で0.14m・P<sub>5</sub>は0.33m・P<sub>6</sub>は0.41mを測る。平面形はP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>ともほとんど差がなく、円形か楕円形である。埋土もP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までほぼ同じであり、褐色を呈するシルトのブロックが混入し、斑状を呈する強粘性の極暗褐色のシルトのみによって構成されている。柱痕跡の確認された土坑はない。これら土坑の性格は、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は本住居址の推定される平面形の対角線上に位置することや規模もほぼ共通していることから、本住居址に伴う柱穴を構成しているであろう。P<sub>1</sub>は本住居址に伴う支柱穴の可能性があり、P<sub>4</sub>はD-4住居址に伴う支柱穴であろうと推定される。

カマドは北壁で検出され、壁のほぼ中央に位置しているものと推定されるが、右側部分がE-3住居址群によって削剝されているので不明な点が多い。検出された部分は左側袖部・燃烧部・煙道部の一部であり、右側袖部・煙道部の一部・煙出部・天井部は残存していない。残存する左側袖部の構築方法は、外壁は地山の削り出しによって造られ、内壁には焼土ブロックの混入した黒褐色を呈するシルトが貼り付けられている。袖部の焚口付近には上部を欠失した残存粒径0.2m×0.10mの円礫が縦位で1ヶ0.12mほど埋め込まれていた。さらに、焚口部床面には粒径0.5m×0.15mの細長い礫が1ヶ左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから右側袖部の焚口付近にも円礫が縦位で埋め込まれ、焚口部は3ヶの礫で「□」状に組まれていたものと推定される。燃烧部は床面とほぼ同位面で奥壁まで続き、煙道部とは段差をもたない。燃烧部焼土は焚口部より燃烧部中央付近まで観察される。焚口部付近の焼土の周囲には焼骨の小破片が点在したが、原形を保っているものはない。燃烧部には二次的な焼成を受けた土師器の甕形土器の破片が残存していたが、この土器はカマドに埋設された土器であろうと推定される。支脚は検出されていない。煙道部は平坦であるが、煙出部は他遺構による削剝によって不明である。

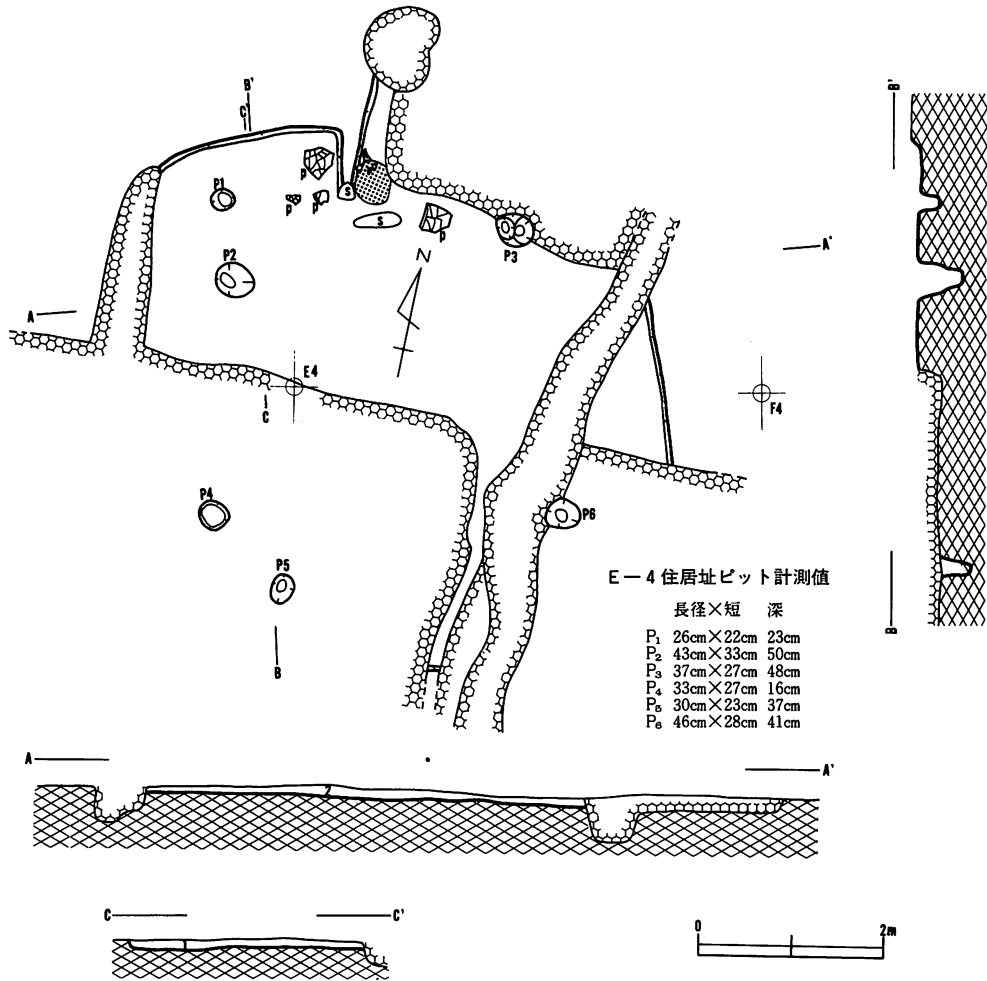
#### 〔遺物〕(第97図、P L 91 B)

埋土内での出土は少なく、床面直上での出土が多いが、量的には少ない。出土状況ではカマド周囲での出土が多い。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器・甕形土器・提瓶がある。

#### 土師器

**坏形土器** 図化されたものはないが、破片で数ヶ体出土している。いずれもロクロ未使用成形のもので、その中の口縁部破片でみると、体部に段をもち、底部丸底のもので、内面は黒色処理される。それ以外は不明である。

**甕形土器** (294～296) いずれもロクロ未使用成形である。器形は体部の中位～上位に最大径をもち、若干膨らんでいる。頸部には明瞭な段をもち、口縁部は頸部段の位置より外弯気味



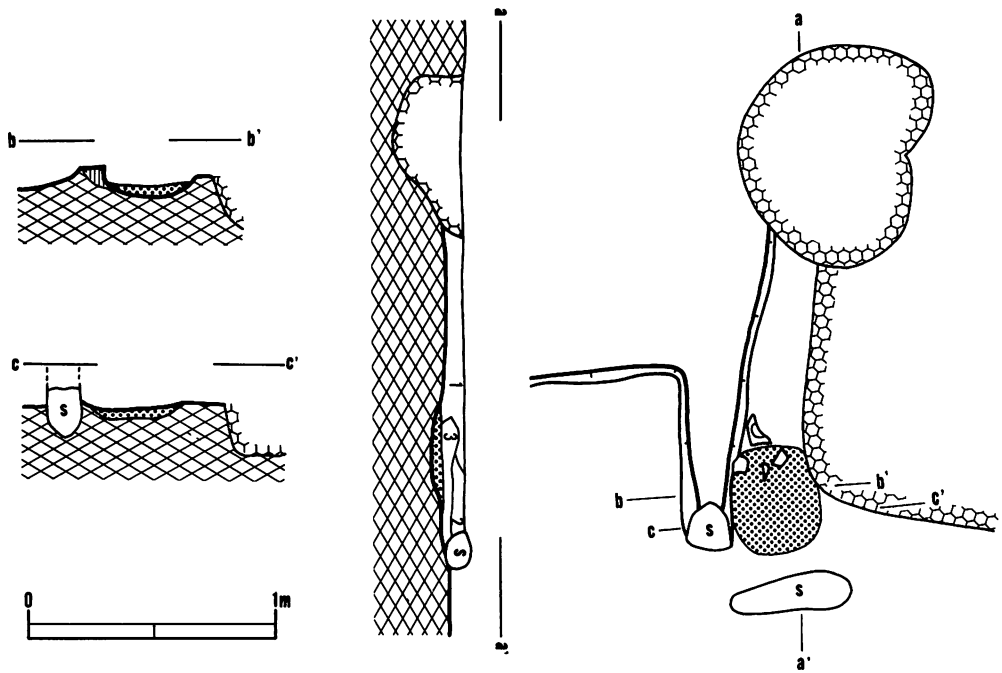
**E-4 住居址埋土土層**

1. 7.5 YR2/2黒褐色 シルト質土 粘性あり、褐色シルト小粒子・焼土・炭化物が混入
2. 7.5 YR2/1黒色 シルト質土 粘性あり

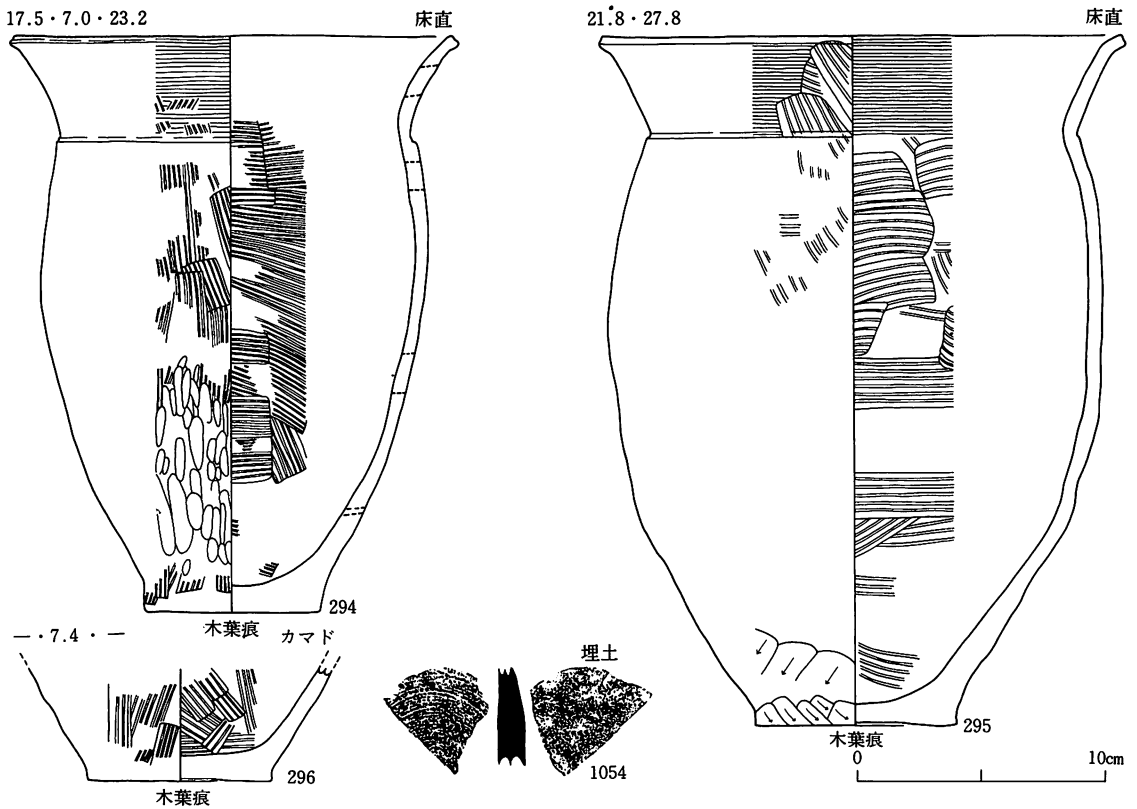
**E-4 住居址カマド埋土土層**

1. 7.5 YR2/2黒褐色 粘土質シルト 沼鉄の赤味少量混入
2. 7.5 YR2/2黒褐色 粘土質シルト 明色の粘土質シルトブロックが混入
3. 7.5 YR2/2黒褐色 粘土質シルト 多量の焼土ブロックと小骨片が混入

第95図 E-4 住居址(遺構一)



第96図 E-4 住居址(遺構-2)



第97図 E-4 住居址(遺物)

(294) や直線的 (295) に外反している。口唇は平坦で沈線状の浅い窪みがある。底部周囲には突出もなく、底面はいずれも木葉痕をもつ。大きさでは大型 (295) と小型 (294) がある。調整技法は、口縁部が外面ハケメ後ヨコナデ・内面ヨコナデで、体部の外面はハケメ後ミガキヤスリケシで一部にケズリ・内面はハケメが主体で一部ナデが入る。

#### 須恵器

破片が1ヶ出土している。外面に同心円状のカキ目を持ち、内面には指頭押圧状の浅い凹凸がある。提瓶の体部破片と推定される。(高橋与右エ門)

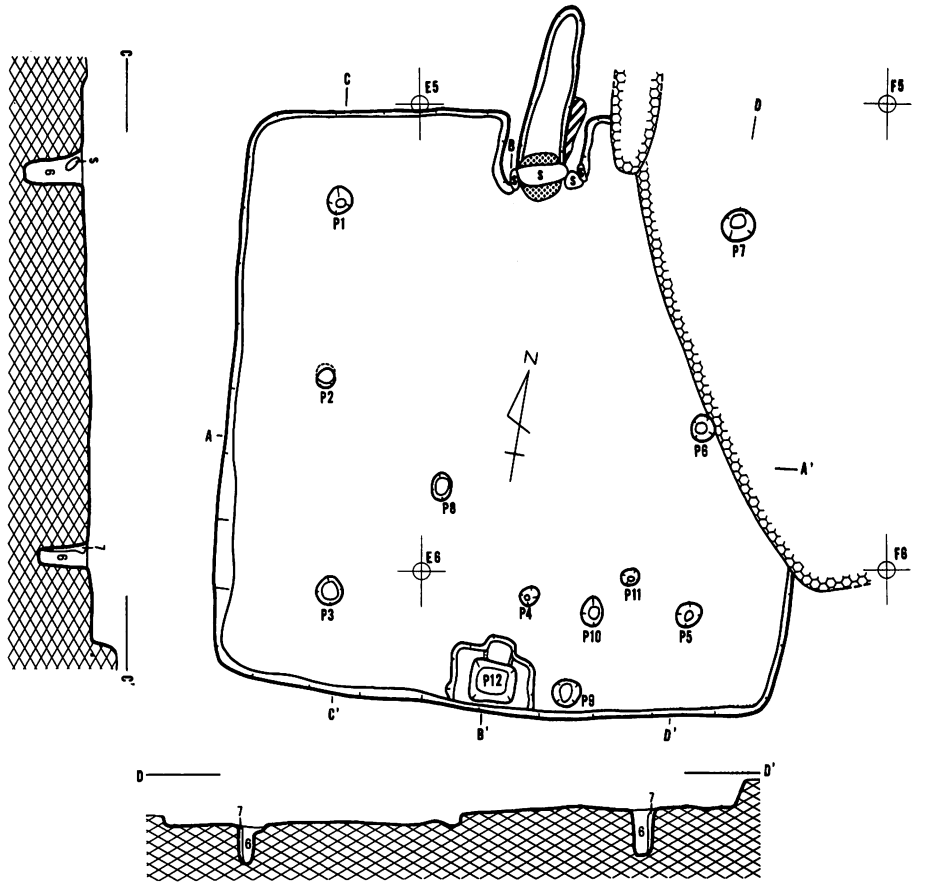
### 33) E-6 住居址

〔遺構〕(第98・99図、P L 23A)

本住居址は北西部をD-4住居址、北東部をF-5住居址と重複し、他にD-6溝跡・E-6溝跡・F-4溝跡とも重複している。重複による新旧関係は、本住居址は重複するいずれの遺構よりも古い。F-5住居址と重複する部分は、床面まで削剝されているため不明な点が多い。D-4住居址との重複部分は、本住居址の壁が若干残存していることから、ほぼ把握された。

規模は南北6.2m・東西6.1mで壁高は0.3mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は北-南方向にあり磁北に対して3度東に偏している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色等を呈するシルトで構成され、色調や混入物の種類によって5層に細分された。混入物としては全層に褐色のシルト粒が観察され、他に埋土3層下半部には粒径0.1m前後から0.2m前後の円礫が混入していたが、床面直上に接しているものはない。西壁寄りの埋土3層下位面には草類の炭化物と灰の混合層が観察された。この層は西壁に寄るほど高くなり、中央部では床面に接する部分もみられる。これらの炭化物には木質部の炭化したものは全く含まれていない。層厚は厚い部分で0.05m位・薄い部分で0.005m位を測る。また、P<sub>12</sub>の左側床面直上には陶土と考えられる白色粘土の「塊」が放置されていた。床は地山の褐色を呈する砂質のシルトで構築されているが、北西隅部～カマド左側袖部の間には若干の貼床が観察された。それ以外の部分は地山面をそのまま床面としている。床面には小起伏がみられるもののほぼ平坦であるが、北壁方向に向かって次第に低くなる傾向があり、高低差は約0.1mを測る。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>12</sub>の土坑が検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>の規模は径0.2m～0.3mとほぼ同規模であるが、深さはそれぞれによって違い様ではない。その中でP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>は他の土坑より深く0.4m～0.6m位で、他は0.2m前後を測る。P<sub>12</sub>は径0.85m×0.65mの規模で深さは0.3m位である。P<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>の平面形は円形や楕円形を呈しているが、P<sub>12</sub>は若干歪んだ隅



E-6 住居址ピット計測値

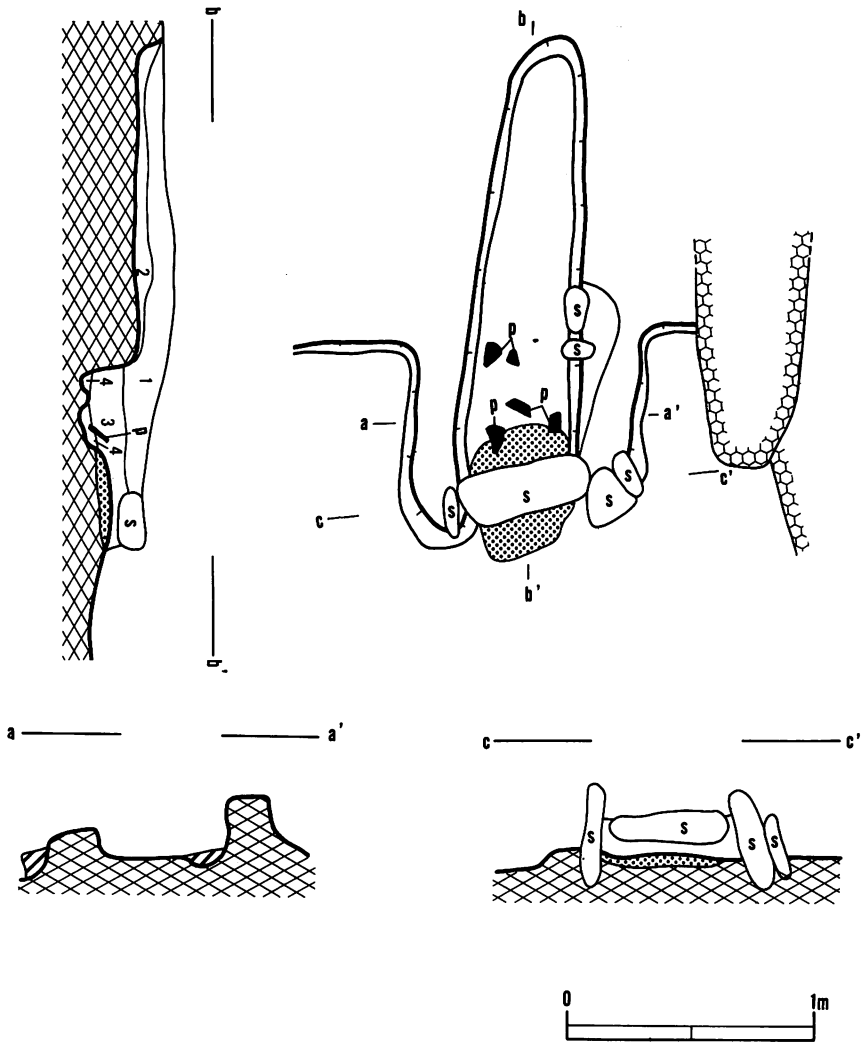
	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	30cm×28cm	68.0cm
P <sub>2</sub>	22cm×21cm	20.0cm
P <sub>3</sub>	26cm×25cm	55.5cm
P <sub>4</sub>	23cm×17cm	38.0cm
P <sub>5</sub>	29cm×27cm	58.0cm
P <sub>6</sub>	26cm×23cm	20.5cm
P <sub>7</sub>	36cm×26cm	41.0cm
P <sub>8</sub>	30cm×22cm	20.0cm
P <sub>9</sub>	30cm×27cm	18.0cm
P <sub>10</sub>	31cm×22cm	32.0cm
P <sub>11</sub>	20cm×16cm	18.0cm
P <sub>12</sub>	90cm×60cm	29.0cm

E-6 住居址埋土土層

1. 7.5 YR1.7/1	黒色土	シルト質土	粘性あり、褐色シルト粒の混入あり。
2. 7.5 YR2/1	黒色土	シルト質土	若干砂っぽい。
3. 7.5 YR2/2	黒褐色	シルト質土	粘性あり、少量の炭化物・褐色シルト粒が混入。
4. 7.5 YR3/4	暗褐色	シルト質土	暗褐色シルトの大ブロックが混入。
5. 7.5 YR2/1	黒色	シルト質土	粘性あり、褐色ブロックの混入あり。
6. 7.5 YR2/1	黒色	粘土質シルト	堅く締まっている、粘性あり。
7. 7.5 YR4/3~4/4	褐色	砂質シルト	若干黒で汚れている、少量の褐色シルトブロックと微量の炭を混入。

第98図 E-6 住居址(遺構-I)

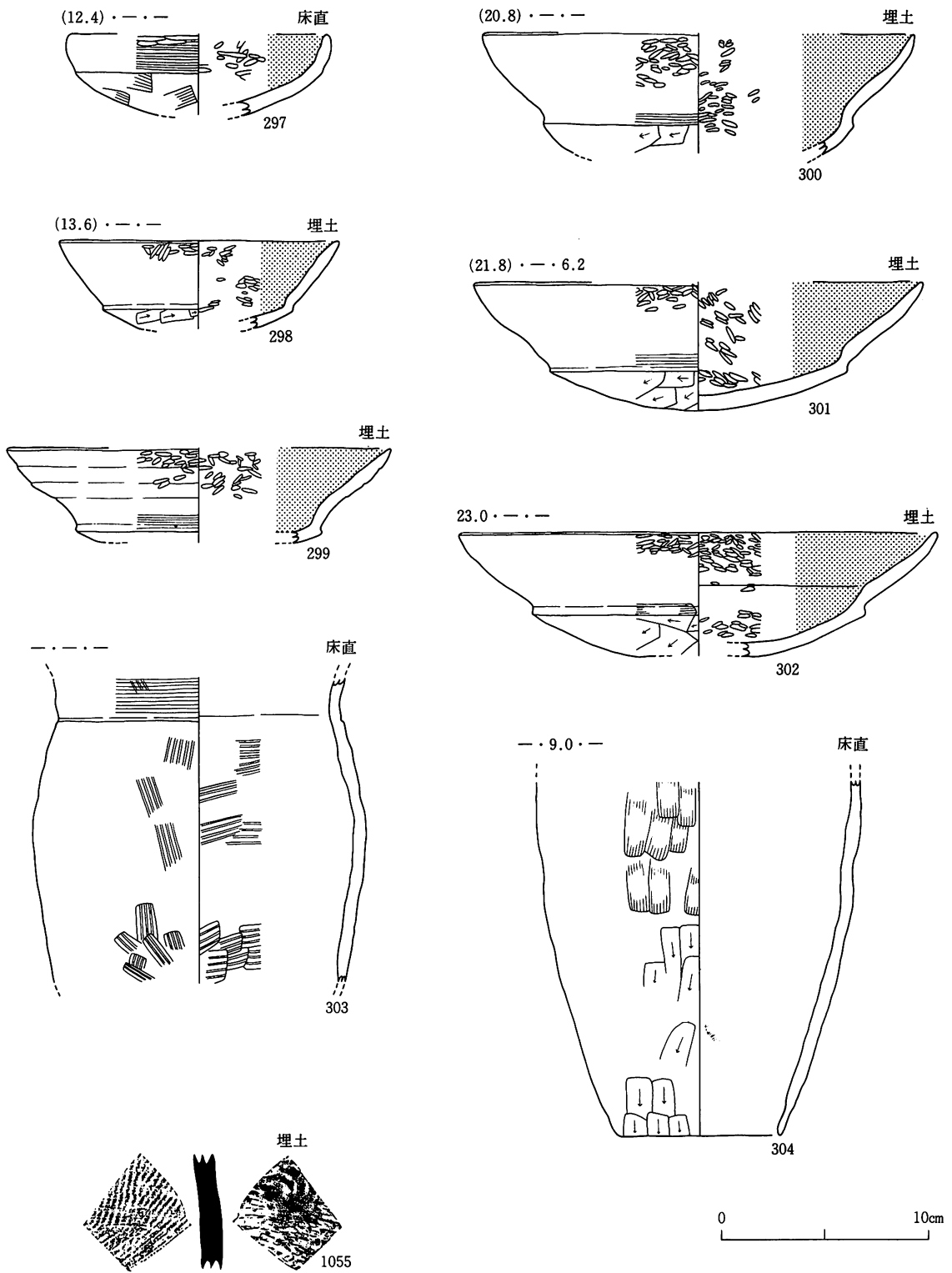




E-6 住居址カマド埋土土層

1. 7.5 YR2/2~3/2黒褐色 粘土質シルト 多くの褐色シルトブロックと微量の炭を混入。
2. 7.5 YR2/2~3/2黒褐色 粘土質シルト 炭を少量混入
3. 7.5 YR2/2~3/2黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性あり、褐色シルトと黒褐色シルトの混土
4. 7.5 YR3/3 暗褐色 シルト質土 粘性あり。

第99図 E-6 住居址(遺構-2)



第100図 E-6 住居址(遺物)

丸方形を呈し、底面は2段構造になっている。埋土は黒色や褐色を呈する粘土質のシルトで構成され、褐色のシルト粒や微量の炭化物が混入しており、P<sub>1</sub>には粒径0.15m×0.10mの礫が落ち込んでいた。いずれの土坑にも明確な柱痕跡は残存していない。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は本住居址の対角線上に位置することや規模から、本住居址の支柱穴を構成しているであろう。また、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>はP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>6</sub>のほぼ中間で直線上に位置する等から支柱穴を構成し、本住居址の柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>によって構成されるであろう。P<sub>8</sub>～P<sub>11</sub>は規模や形状は柱穴状を呈しているが性格は明確ではない。P<sub>12</sub>は本住居址に伴う貯蔵穴と推定されるが、本土坑左側床面直上に放置されていた白色粘土に関連する土坑の可能性もある。

カマドは北壁で検出され、ほぼ壁中央に位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道底面のみであり、天井部や煙道部側壁は検出されていない。袖部は褐色のシルト粒の混入した黒色を呈するシルトの貼り付けによって構築され、左右袖部とも焚口付近には粒径0.4m×0.15m位の細長い礫が0.1mほど埋め込まれており、その周囲には焼土混じりの暗褐色のシルトが貼り付けられていた。焚口部の床面直上には粒径0.55m×0.2mの細長い礫が左右両袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの礫で「□」状に組み立てたものと推定される。焚口部は床面より若干高く、次第に下り勾配で奥壁に続き、煙道部とは段差をもって接続している。燃烧部焼土は焚口部付近より燃烧部中央付近まで分布している。埋設土器や支脚は検出されていない。煙道部底面は平坦であり、煙出部に土坑はない。

〔遺物〕(第100図、PL92A)

床面直上での出土は少なく、ほとんどは埋土内での出土である。また、完形や復元可能土器もなく、すべて破片のみである。種類は土師器・須恵器があり、器種では坏形土器・甕形土器・甔形土器がある。

### 土師器

**坏形土器**(297～302) ロクロ未使用成形で、体部に段や稜をもち、底部丸底のものである。器形では、297は体部に軽い稜をもち口縁部はそのまま内弯気味に立ち上がる。その他は体部に強い段をもち、口縁部はほぼ直線的に外反するもの(298)と内弯気味に外反するもの(299・301・302)・内弯しながら外反するもの(300)がある。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ後ミガキ、底部ヘラケズリまたはヘラナデ(297)である。内面はミガキ後黒色処理されている。

**甕形土器**(303) 他にも破片が出土しているが図化されたのは1ヶのみであり、いずれもロクロ未使用成形のものである。器形は、若干膨らむ体部をもち、体部最大径は上位にある。頸部には沈線状の段があり、口縁部は外弯しているらしい。底部は残存していないので不明である。調整技法は、口縁部外面がハケメ後ヨコナデ、体部外面はハケメ後スリケシである。口縁部の内面は不明であるが、体部はハケメ後スリケシである。

甑形土器(304) 破片であるが1ヶ出土している。甕形土器の底部を取り去った形で、無底型のものである。調整技法は外面ヘラナデとヘラケズリで、内面はミガキである。

#### 須恵器

大甕の破片が1ヶ出土している。外面平行タタキ目、内面青海波文をもつ。

(高橋義介)

### 34) E-7 住居址-1

〔遺構〕(第101図、P L 23B)

本住居址は西側をE-7溝跡・東側でE-7土坑・北東隅部がF-6住居址とそれぞれ重複し、さらに、ほぼ同位置でE-7住居址-2とも重複している。重複遺構との新旧関係は、E-7溝跡・E-7土坑は本住居址より新しく、E-7住居址-2は本住居址より古い。F-6住居址との新旧関係は当初本住居址の方が新しい遺構と考えたが、両住居址を精査の結果、F-6住居址出土の遺物が本住居址出土のそれより新しいものであった。このことから、F-6住居址は本住居址より新しい遺構であろう。

規模は南北4.5m位・東西4.7m位で壁高は0.1m位を測り、壁は床面に対して120度の角度を示している。平面形は主軸に対して若干横長の胴張隅丸長方形を呈し、主軸は北-南方向にあり磁北に対して15度西に偏している。埋土は褐色を呈する粘土質のシルト粒が若干混入した黒褐色を呈する粘土質のシルト単層で構成されている。全体的に微量の炭化物の混入がみられ、他に酸化鉄の集積がみられる。また、埋土最下層には粒径0.1m~0.2m位の円礫が混入しているが、床面に接している状態のものはない。床は地山の黒褐色を呈する粘土質のシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は若干起伏がみられるもののほぼ平坦であるが、北東隅部付近に向かって次第に低くなる傾向がみられ、高低差0.05mを測る。良く締まって固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>の土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>ともに径0.3m前後と大差がないが、深さはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は0.5m~0.6m・P<sub>6</sub>は0.1mを測り、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。埋土は褐色のシルト粒が混入し、斑状を呈する褐色または暗褐色の粘土質シルトで構成されており、全体的に炭化物の小粒や酸化鉄の混入が観察される。P<sub>1</sub>では柱痕跡が観察され、それによれば、柱は径0.1m位の円柱で土坑底面に接している。性格としては、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は本住居址の対角線上に位置することや、規模がほぼ同一であることや、柱痕跡が確認されたことより、本住居址の柱穴を構成しているであろう。P<sub>6</sub>は柱穴状を呈していることから本住居址に伴う支柱穴の可能性も考えられるが、明確でない。

カマドは北壁で検出され、中央より0.15mほど西に寄って位置している。検出されたのは袖

部・燃烧部・煙道部のみであり、天井部は検出されていない。袖部は地山よりの削り出しによって構築され、シルトの貼り付けはみられない。左右袖部の焚口付近には粒径0.4m×0.15m位の細長い礫が縦位で0.1mほど埋め込まれており、焚口部に向かって倒れかかっていた。それと同時に、焚口部床面にも粒径0.5m×0.15m位の礫が左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転しているのが検出され、このことから、焚口部は3ヶの礫で「□」状に組まれていたものと推定される。燃烧部床面は焚口部付近より奥壁に向かって次第に低くなり、煙道部とは0.1mの段差で接続している。カマド内には2ヶ体の土師器の甕形土器が並列で埋設されており、焚口部に向かって横転していた。埋設土器の大きさは、左側で口径18.1cm・器高31.4cm・底径9.1cm・右側は体部上位より口縁部を欠失しているが残存部口径16.0cm・残存部器高21.5cm・底径6cmである。燃烧部焼土は焚口部前付近より支脚位置付近まで観察された。燃烧部床面中央付近の左側袖部内壁寄りと右袖部内壁寄りにそれぞれ各1ヶの小坑が検出された。規模は左側で0.1m×0.1m・深さ0.07m、右側は0.15m×0.1m・深さ0.1mをそれぞれ測る。これら2ヶの小坑は位置や規模から考えて、本カマドに伴う支脚抜き取り痕跡と推定される。煙道部は平坦で、煙出部に土坑はない。

〔遺物〕(第102・103図、P L 92B・93・94A)

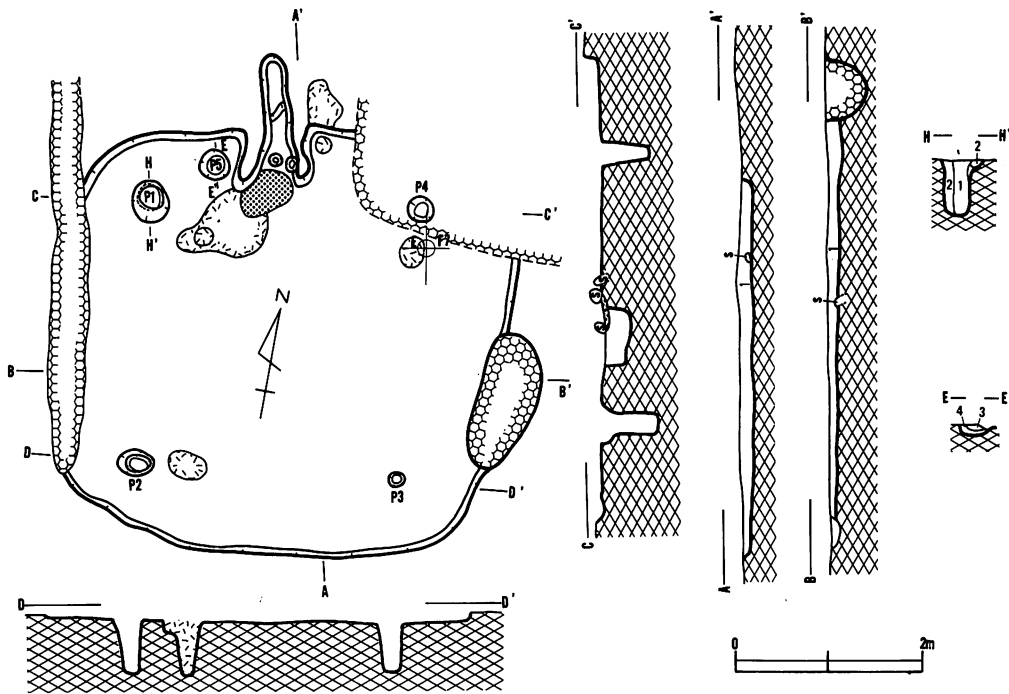
埋土内での出土は少なく、ほとんどのものが床面直上で出土している。特にカマド周辺での出土が多い。種類は土師器・須恵器があり、器種では坏形土器・高坏形土器・甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器**(305・306) いずれもロクロ未使用成形で、体部に段や稜をもち、底部が丸底のものである。口縁部が内弯して立ち上がるもの(305)と、直線的に強く外反するもの(306)があり、口唇部は丸味をもっている。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ一部ミガキ、底部はケズリまたはナデである。内面は口唇部付近にヨコナデを残し後ミガキ黒色処理される。

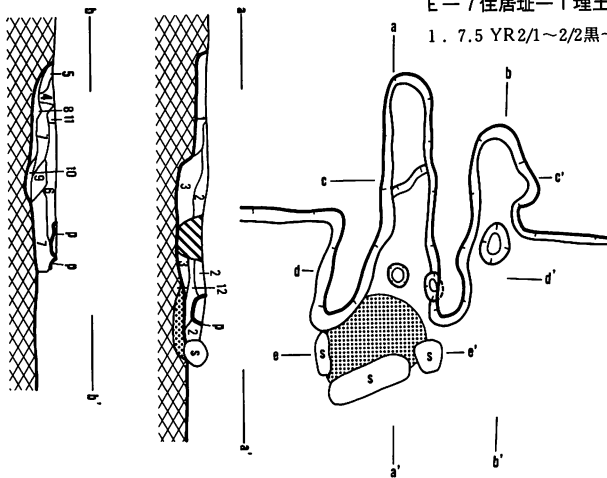
**高坏形土器**(307) ロクロ未使用成形で、体部に段をもち底部が丸底の坏形土器に脚部を貼り付けた形態である。口縁部は体部段の位置より軽く内弯して立ち上がっており、比較的深い。裾部は大きく開く。調整技法は、坏部の口縁部外面ヨコナデ、体部や脚部はハケメやヘラナデである。坏部内面はミガキ後黒色処理である。

**甕形土器**(308～310) いずれもロクロ未使用成形で、体部が若干膨らむものだけである。器形は、体部最大径が体部中位にあり、肩部～頸部にかけて若干窄み、頸部に段はない。口縁部は頸部より直線的に外反し、口唇は丸味をもつ。底部の周囲は突出をもつもの(309)と、もないもの(310)があり、底面に木葉痕のつくものはなく、ナデられている。調整技法は、口縁部外面ハケメ後ヨコナデ(309)・ハケメ後ミガキ(308)、内面はヨコナデ(309)とハケメ後ミガキ(308)がある。体部の外面はハケメ後スリケシ(309)・ヘラナデやケズリ(310)・ミガ



E-7 住居址-I 埋土土層

1. 7.5 YR2/1~2/2 黒~黒褐色 粘土質シルト 微量の木炭粒と鉄分の小斑点が混入。



E-7 住居址-I ピット計測値

長径×短径 深さ

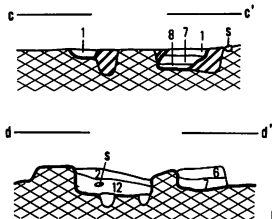
P<sub>1</sub> 45cm×38cm 61cm

P<sub>2</sub> 33cm×25cm 58cm

P<sub>3</sub> 29cm×27cm 53cm

P<sub>4</sub> 27cm×24cm 52cm

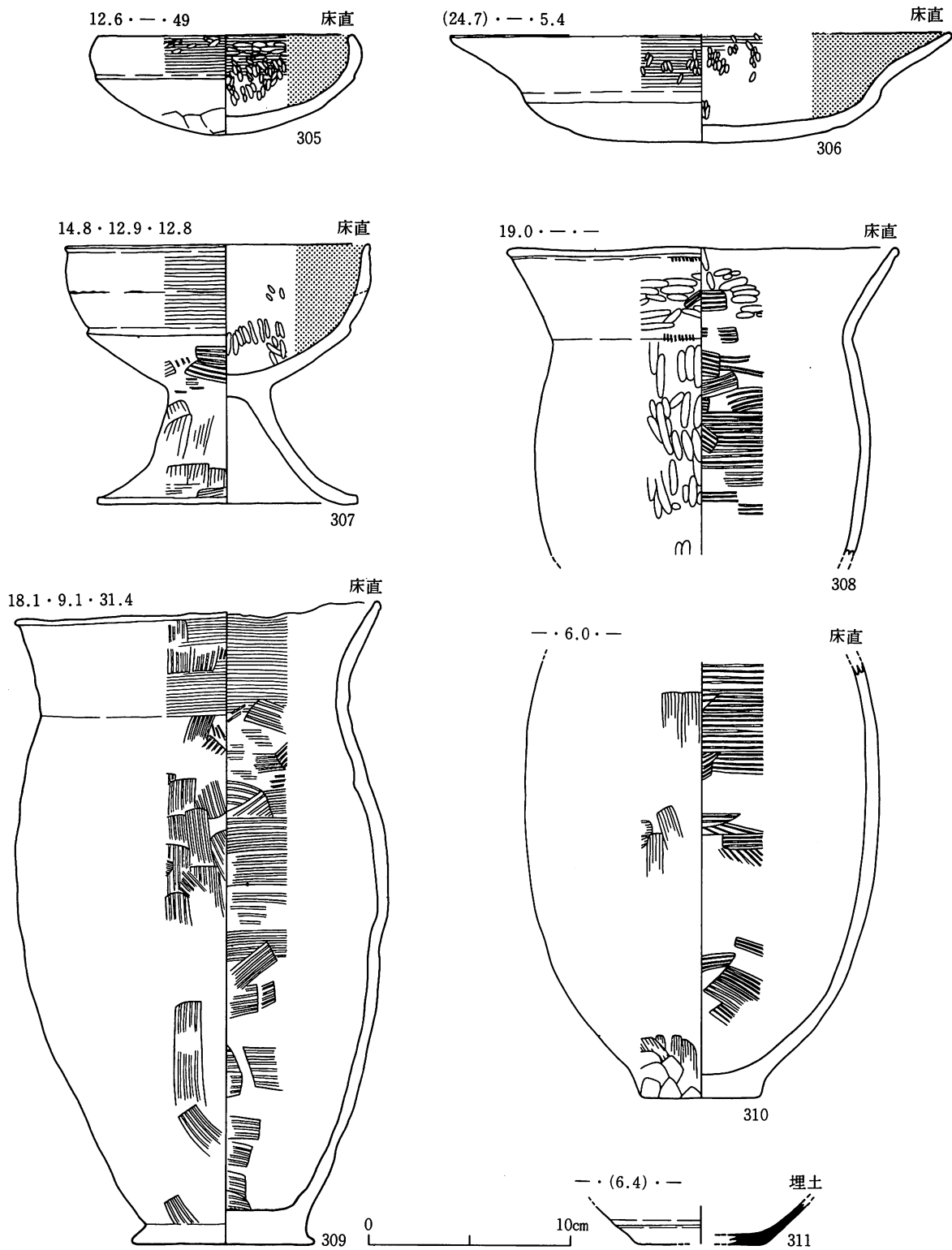
P<sub>5</sub> 31cm×31cm 12cm



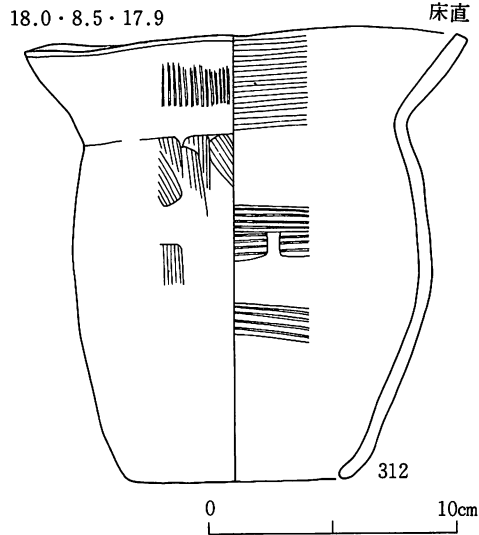
E-7 住居址-I ピット埋土土層

1. 7.5 YR2/2~3/2 黒褐色 粘土質土 堅く締まっている、微量の炭・シルトがブロックで混入
2. 7.5 YR4/4 褐色 若干黒色土で汚れている。
3. 7.5 YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色土のブロックを若干混入。
4. 7.5 YR2/2~3/2 黒褐色 粘土質シルト 細かいシルトと粒子混入。

第101図 E-7 住居址-I (遺構)



第102図 E-7住居址-1(遺物)



第103図 E-7住居址-1(遺物)

キ(308)があり、内面はハケメ(308~310)のみである。

**甕形土器(312)** ロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を取り去った形で、無底型のものである。体部が若干膨らみ、体部最大径を中位にもつ。肩部~頸部にかけて若干窄み、頸部には段がない。口縁部は頸部より直線的に外反している。口唇部は平らである。調整技法は、口縁部外面がハケメ・内面ヨコナデ、体部は外面ヘラナデ・内面ハケメである。

#### 須恵器

ロクロ使用成形の坏形土器で、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。埋土最上位で出土したものであり、本住居址に直接的に伴うか否かは不明である。

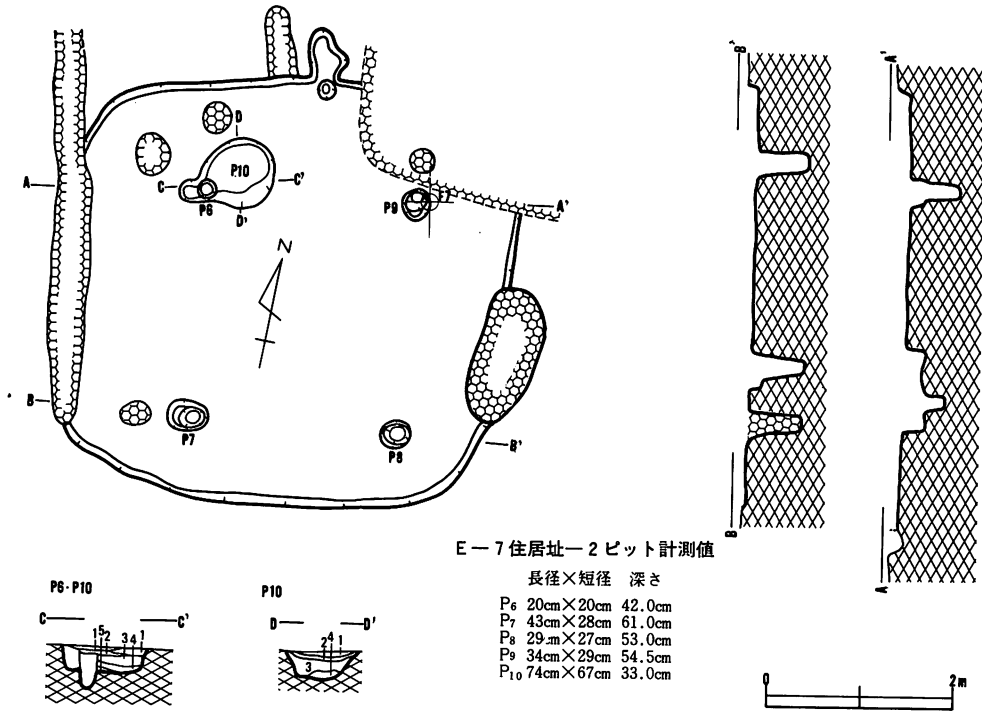
(高橋義介)

### 35) E-7住居址-2

〔遺構〕(第104図・P L 23B)

本住居址はE-7住居址-1の精査によってその存在が確認されたものであり、E-7住居址-1との新旧関係は本住居址の方が古い。本住居址はE-7住居址-1の床面より検出されたE-7住居址-1に伴わないP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の柱穴状土坑と、E-7住居址-1のカマド煙道部の右側に検出された別の煙道部とによって、E-7住居址-1とは別の住居址として認定した。しかし、P<sub>3</sub>が共用されていることや、柱配置がE-7住居址-1の柱配置より一回り狭く配置されていることから、本住居址はE-7住居址-1の前身住居址と考え、E-7住居址-1は本住居址の改築拡張として理解したい。





- E-7 住居址-2 貯蔵穴埋土土層
- |                            |        |                            |
|----------------------------|--------|----------------------------|
| 1. 7.5 YR 2/2~3/2 黒褐色      | 粘土質土   | 強く締まっている、微量の炭・シルトがブロックで混入。 |
| 2. 7.5 YR 4/4 褐色           | シルト質土  | 若干黒色土で汚れている。               |
| 3. 7.5 YR 2/1~2/2 黒~黒褐色    | 粘土質シルト | 強く締まっている、褐色シルトがブロック状に混入    |
| 4. 7.5 YR 2/2~2/3 黒褐色~極暗褐色 | 粘土質土   | やや強く締まっている、粘性あり。           |
| 5. 7.5 YR 2/1~2/2 黒~黒褐色    | 粘土質シルト | 3層とほぼ同じであるが、色調が若干明るい。      |

第104図 E-7 住居址-2 (遺構)

以上の様なことから、本住居址はE-7住居址-1の削剝によって、規模や壁高は不明である。平面形もまた不明であるが、E-7住居址-1の平面形に近似した形状を呈するものと推定される。主軸は北-南方向にあり、煙道は磁北に対して15度西に偏している。埋土の状態・床面の状態・周溝存在の有無ともに不明である。

本住居址に関連する土坑としてP<sub>6</sub>~P<sub>10</sub>が検出され、その中でP<sub>6</sub>~P<sub>9</sub>の規模は径0.30m前後で深さは0.4m~0.6mを測り、平面形は円形または楕円形を呈する。P<sub>5</sub>の規模は径0.75m・深さ0.3m位を測り、平面形は楕円形・断面形は鍋底形を示す。P<sub>6</sub>~P<sub>9</sub>の埋土は褐色を呈するシルトの混入した黒褐色の粘土質シルトで構成されている。P<sub>10</sub>の埋土は黒褐色や褐色を呈する粘土質シルトで構成されており、混入物や色調の変化で5層に細分されている。P<sub>7</sub>・P<sub>9</sub>には柱痕跡が観察され、それによれば柱は径0.1m~0.15m位の円柱と推定され、土坑の底面に接している。性格としては、P<sub>6</sub>~P<sub>9</sub>は本住居址の対角線上に位置しているらしいことや規模・埋土等から、本住居址の柱穴を構成するであろう。P<sub>10</sub>はカマド左側袖部左脇に位置することから、貯蔵穴であろうと推定される。

カマドはそのほとんどをE-7住居址-1によって削剝されており、煙道部の一部が残存していたのみで、他の部分は全く検出されていない。煙道部は北壁で検出され、壁中央やや東寄りに位置するものと推定される。煙道部底面は平坦でほぼ水平である。煙出部の土坑は検出されていない。

〔遺物〕

全く伴出していない。

(高橋義介)

36) F-3住居址-1

〔遺構〕(第105図、P L 24A)

本住居址は東側でB-7溝跡の北端部分と重複し、さらに、同位置でF-3住居址-2とも重複している。重複遺構との新旧関係はB-7溝跡は本住居址より新しく、F-3住居址-2は古い。遺構検出の段階には本住居址の存在は確認されていなかった。F-3住居址-2の精査中に、ロクロ使用土師器を出土する一画があることが判明し、入念に再検出に努めた所、本住居址の存在が確認された。従って、本住居址の存在が判明した時点で、F-3住居址-2は相当掘り下げが進んでいたことから、本住居址の壁も一緒に掘り取ってしまったことになる。

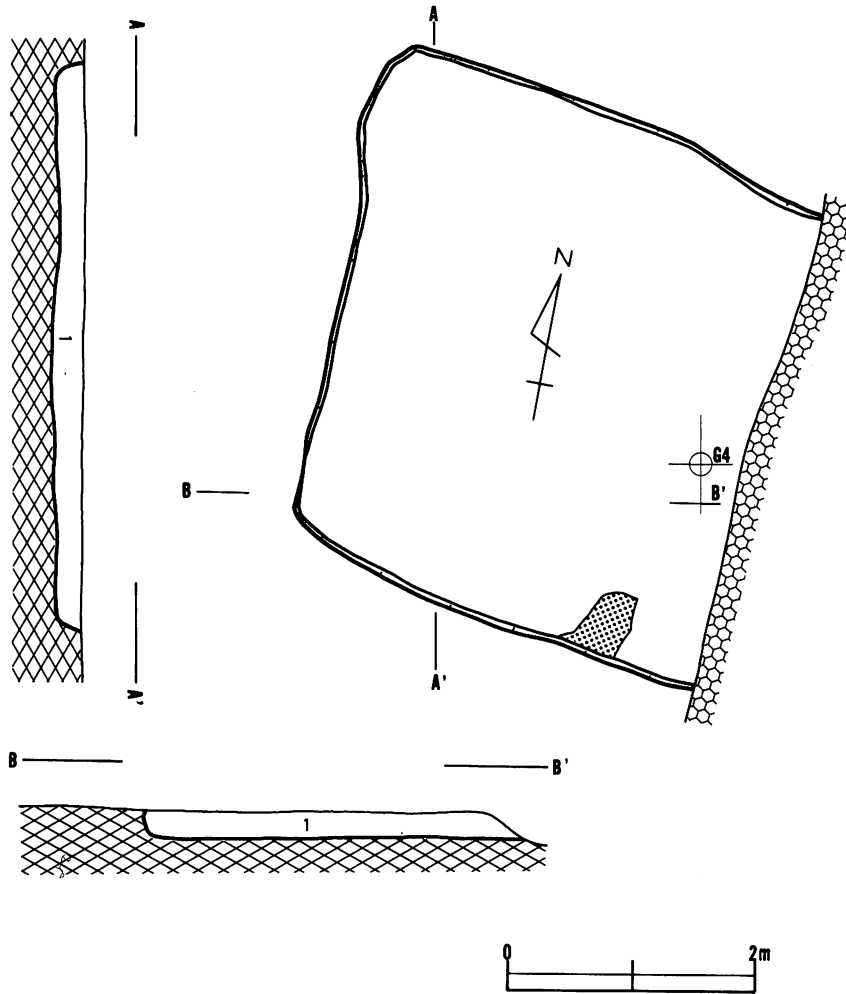
規模は南北4.20m位で東西は不明である。確認された面からの壁高は0.05m位であるが、F-3住居址-2の確認面からだ、約0.20mの壁高であろうと推定される。平面形は歪んだ隅丸の平行四辺形状を呈し、主軸方向は不明であるが、南壁が磁北に対して75度西に偏している。埋土は極暗褐色のシルト単層で構成され、全層に微量の炭化物が混入している。粘性は少なく、締まり良く固い。床はF-3住居址-1の埋土(黒色のシルト)で構築され、貼床せずそのまま床面としている。床面には若干起伏があるものの総じて平坦である。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面では土坑が全く検出されていない。従って、柱穴をもたない住居址であろう。

明らかにカマドといえる遺構は検出されていない。しかし、南壁の南西隅部より2.60m東寄りの壁際に現地性焼土の分布が確認された。これにはカマドとしての袖部・煙道部が検出されていないが、燃焼部焼土の残痕と考えると大過ないであろう。焼土の範囲は0.55m×0.4mである。

〔遺物〕(第106図、P L 94B)

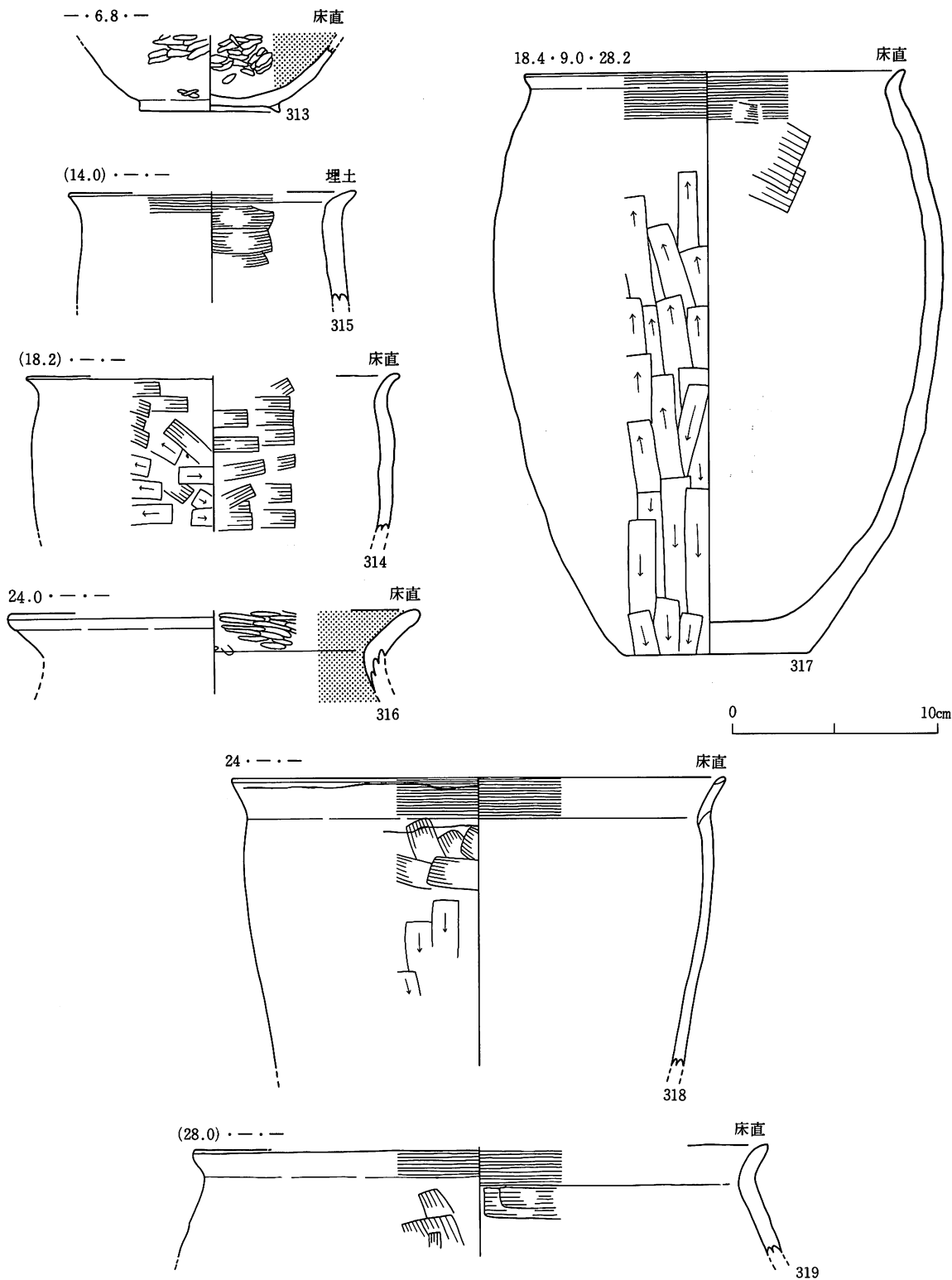
埋土内での出土は比較的少なく、床面直上での出土が多かった。特に南壁際焼土付近での出土が多かった。種類としては土師器のみであり、器種は坏形土器と甕形土器がある。



F-3 住居址-1 埋土土層

1. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質土 堅くよく締まっている、粘性少しあり、微量の炭化物混入、土器片は少ない。

第105図 F-3 住居址-1 (遺構)



第106図 F-3住居址-I(遺物)

## 土師器

**坏形土器**(313) ロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切りで、再調整の有無は高台部の貼り付けによって不明である。高台部は低く、軽く外方を向き「ハ」字状に付されている。調整技法は、内外面ともミガキ後黒色処理している。

**甕形土器**(314～319) 粘土紐巻き上げロクロ仕上げ成形のものである。器形は、体部が若干膨らむもの(316・317・319)・比較的ほっそりしているもの(314・318)があり、体部最大径は体部上位にあるもの(316・317・319)と肩部にもつもの(314・318)がある。肩部より窄み頸部には段がなく、口縁は直線的に強く外反するもの(315～317)と、直線的に弱く外反するもの(318・319)・さらに外弯するもの(314)があり、口唇は削がれて先細りとなるもの(314・315・317)と、丸味をもつもの(316・318・319)がある。いずれの口縁部も短い。体部に粘土紐を巻き上げた痕跡を明瞭に残しているもの(318)があり、その後、体部外面はヘラケズリやヘラナデによって調整される。口縁部は内外面ともヨコナデ(315・317～319)やヘラナデ(314)があり、316は内面がミガキ後黒色処理されている。(高橋与右エ門)

### 37) F-3住居址-2

〔遺構〕(第107・108図、PL24B)

本住居址は南西隅部でF-4住居址群・F-5住居址群と重複し、さらに、東部でB-7溝跡北端部やG-4住居址とそれぞれ重複している。また、ほぼ同位置でF-3住居址-1とも重複し、西壁ではE-3住居址-1とも重複している。これら重複遺構との新旧関係は、重複するいずれの遺構よりも本住居址が古い。以上の様に、重複関係が多いために、重複する部分の壁が残存していない場合が多く、一部不明な点もある。

規模は南北7.2m、東西7.1mで壁高は南壁で0.3m前後を測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸のほぼ正方形を呈し、主軸は北-南にあり磁北に対して9度西に偏している。埋土は黒褐色を呈するシルトで構成され、混入物によって2層に細分されている。混入物としては、1層には砂粒や暗褐色のシルト粒が観察され、2層は暗褐色のシルト粒が1層より多く、他に少量の炭化物粒が混入している。また、2層下位面には粒径10cm～15cm位の礫が多くみられ、ほとんどが床面に接している。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は起伏もなく、平坦で良く締まり固い。床面中央やや南東部寄りの床面で現地性焼土が検出され、本住居址に伴う地床炉であろう。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>～P<sub>10</sub>の土坑が検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の規模は0.35m×0.25mで、深さ0.6m位を測り、平面形は横長の隅丸長方形気味を呈する。P<sub>5</sub>は南壁ほぼ中央に位置し、壁

に接している。規模は0.9m×0.6mで、深さは最深部で0.6mを測り、平面形は長方形で断面形は2段構造を呈している。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は径0.3mで、深さはP<sub>6</sub>が0.5m・P<sub>7</sub>が0.1mであり、平面形は円形である。P<sub>8</sub>～P<sub>10</sub>は西壁寄りで検出されているが、規模・深さ・平面形ともに差がある。埋土は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>では黒色や褐色を呈するシルトで構成され、3層に細分されている。P<sub>5</sub>は黒褐色のシルトである。P<sub>8</sub>～P<sub>10</sub>は黒色や黒褐色のシルトである。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本住居址の対角線上に位置することや、規模や形状から本住居址の柱穴を構成しているであろう。P<sub>5</sub>は位置的に若干問題もあるが本住居址の貯蔵穴であろう。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は柱穴状を呈しているが本住居址との対応関係は不明である。P<sub>8</sub>～P<sub>10</sub>は出土遺物が全てロクロ使用土師器のみであることから、本住居址とは直接関連しない土坑であろう。

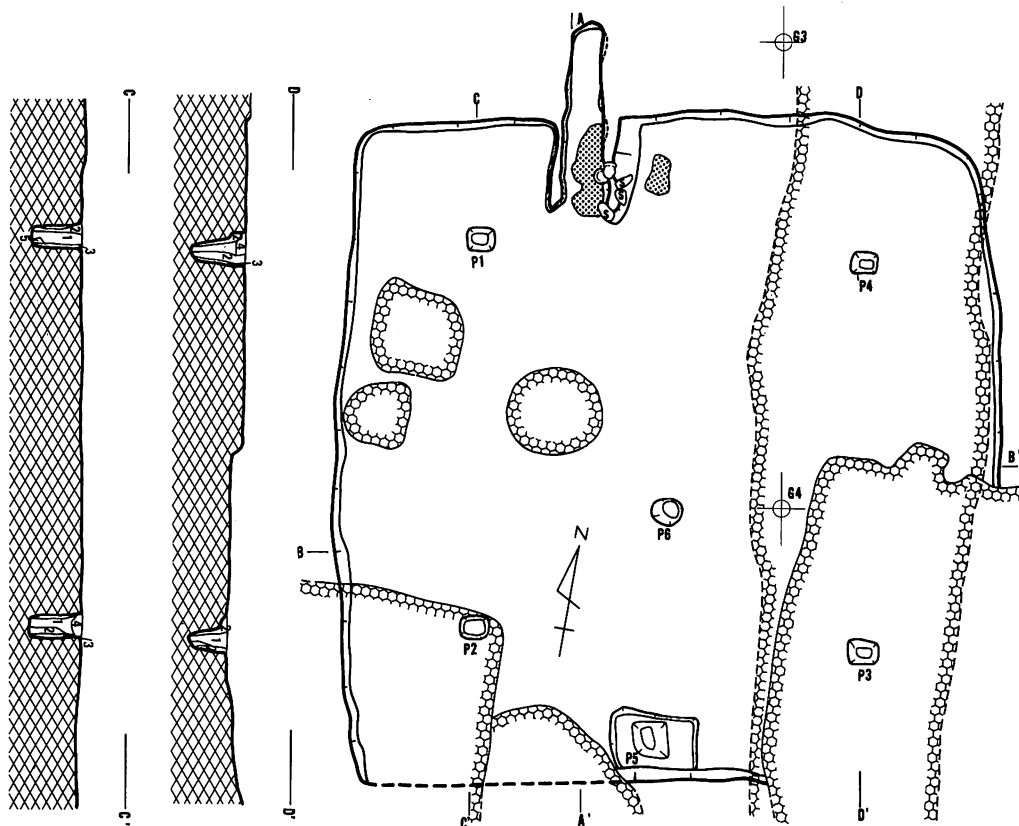
カマドは北壁で検出され、壁中央より0.8m西に偏している。検出された部分は袖部・燃烧部・埋設土器・煙道部のみである。袖部は黒褐色を呈するシルトの貼り付けによって構築され、褐色のシルト粒を混入している。右側袖部の焚口付近には粒径0.35m×0.12m位の礫が3ヶ縦位で、縦列に全長の1/2ほど埋め込んでいる。左側袖部は精査の不手際からあまり正確な状態で検出されていないが、礫の埋設はなかった。燃烧部は床面より若干高く、奥壁までほぼ同位面で続き、煙道部とは軽い段で接続している。燃烧部の焼土は焚口部より奥壁の手前まで分布し、右側袖部に若干偏している。また、燃烧部にはカマドに埋設された土師器甕形土器が1ヶ右側袖部に寄り掛かる状態で検出された。土器の大きさは、口縁部を欠失しているが、頸部径14.5cm・残存器高23cm・底径8cmである。燃烧部床面の埋設土器左側で粒径20cm×10cmの礫がほぼ1/2縦位で埋め込まれ、支脚として利用していた。なお、燃烧部付近には焼骨の破片が多く散乱していたが、原形を知る様なものはなかった。煙道部は中心部分が若干高く、煙出部と奥壁に向かって幾分下り勾配を呈しているものの、凹凸もなくほぼ平らである。煙出部に土坑はない。

#### 〔遺物〕(第109・110図、P L 95)

本住居址はF-3住居址-1の削剝によって埋土内での遺物出土が少なく、それも破片のみである。床面直上での出土も少ない。種類は土師器・須恵器・土製品・鉄製品・石製品があり、器種としては、坏形土器・盃形土器・高坏形土器・甕形土器・甑形土器・鉢形土器・小型土器土製勾玉・土製紡錘車・槍砲・その他名称不明鉄器がある。

#### 土師器

**坏形土器(322)** 破片では他にも出土しているが、図化できなかつた。ロクロ未使用成形で、体部に段や稜をもつ底部丸底のものである。口縁部は体部段の位置で内弯気味に軽く外反している。調整技法は口縁部外面ミガキ・底部ヘラナデである。内面はミガキ後黒色処理されている。



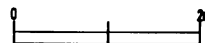
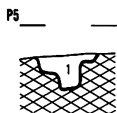
F-3 住居址-2 ピット埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 褐色シルトが斑状に混入、少量の炭化物が混じる。



F-3 住居址-2 埋土土層

1. 7.5YR1.7/1 黒色 シルト質土 よく締まっている、少量の砂粒、暗褐色のシルト粒が混入。
2. 7.5YR3/4 暗褐色 シルト質土 炭化物粒が少量混入。



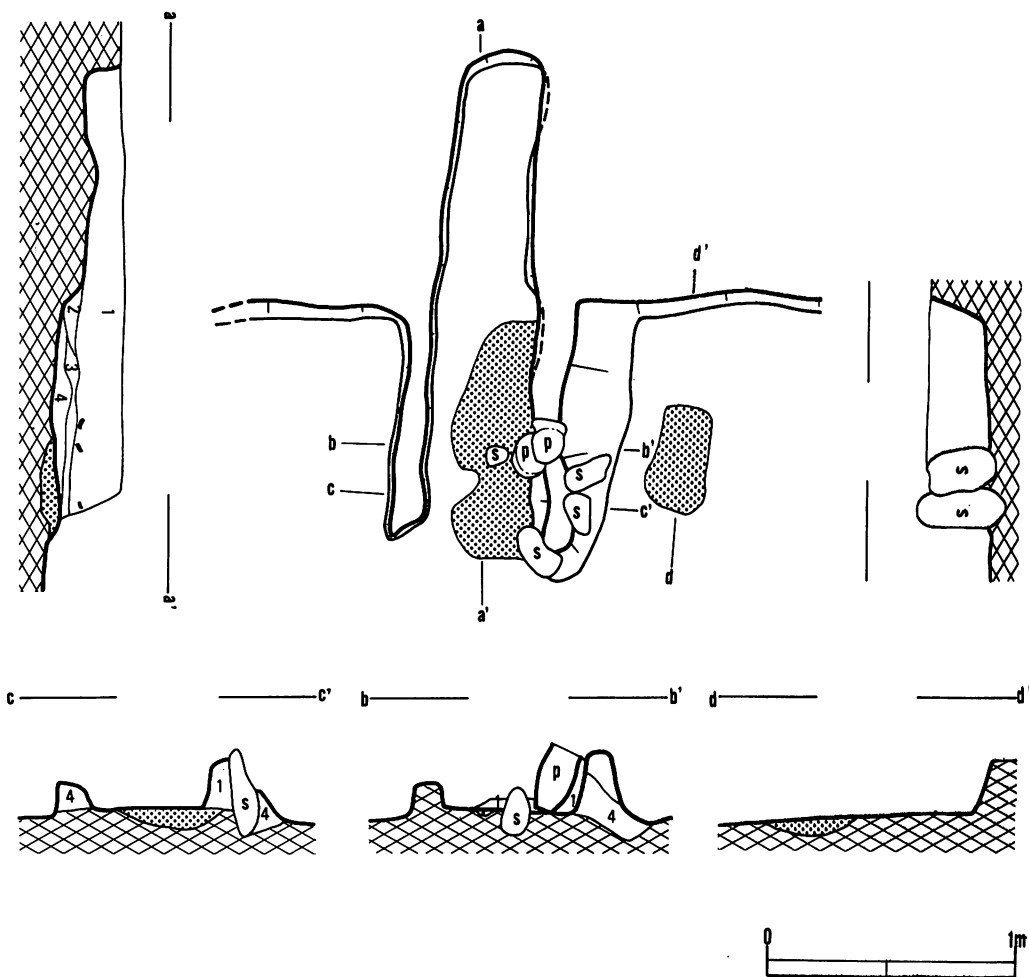
F-3 住居址-2 ピット埋土土層

1. 7.5YR2/1 黒色 シルト質土
2. 褐色シルトと褐色シルトの混合層。
3. 7.5YR 褐色シルトに少量の黒色シルトが混入
4. 黒色シルトに褐色砂質シルトが混入。
5. 褐色シルトブロック

F-3 住居址-2 ピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	32cm×23cm	59.5cm
P <sub>2</sub>	33cm×23cm	62cm
P <sub>3</sub>	36cm×25cm	51cm
P <sub>4</sub>	30cm×22cm	62cm
P <sub>5</sub>	93cm×56cm	58cm
P <sub>6</sub>	30cm×27cm	54cm

第107図 F-3 住居址-2 (遺構-1)

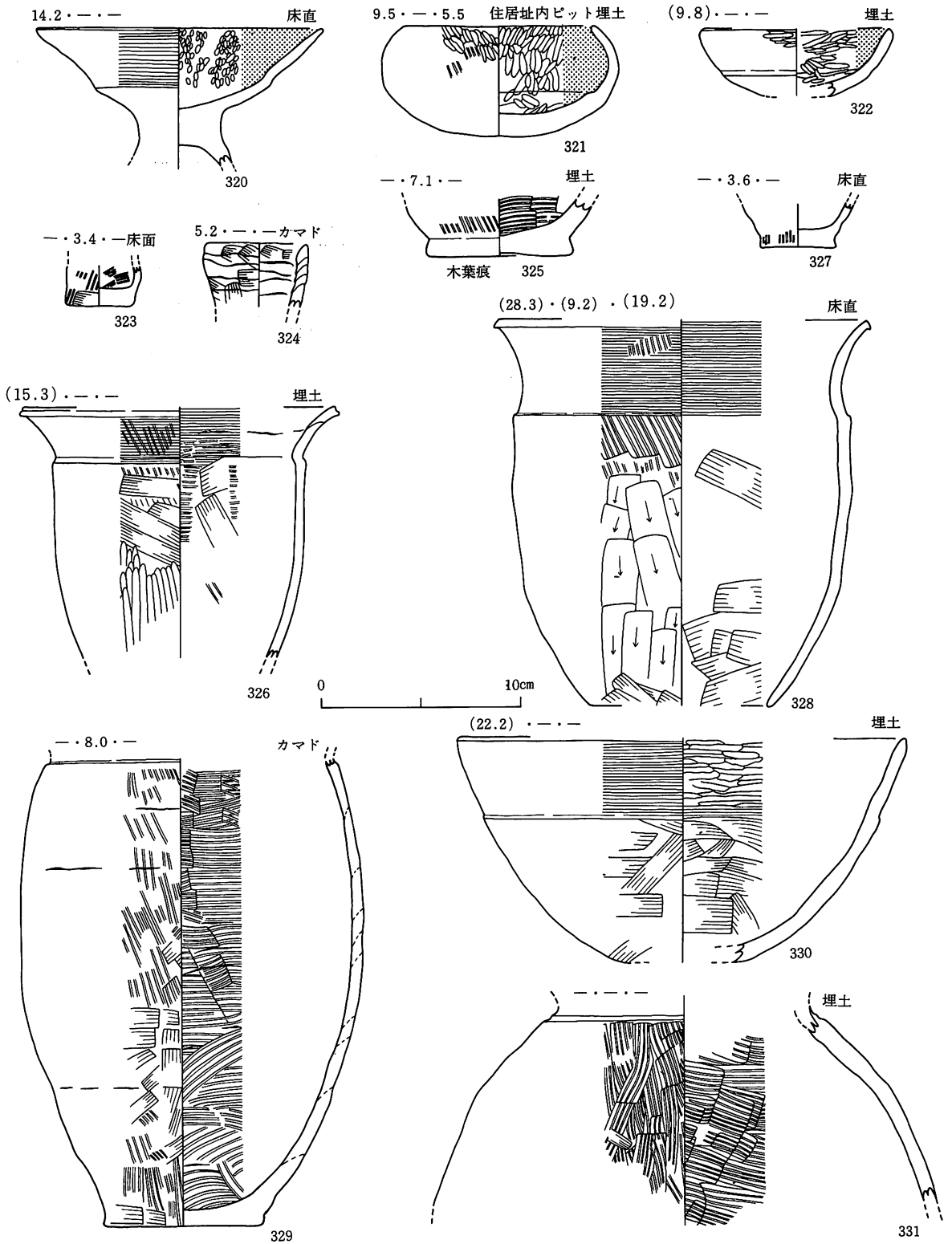


F-3 住居址-2 カマド埋土土層

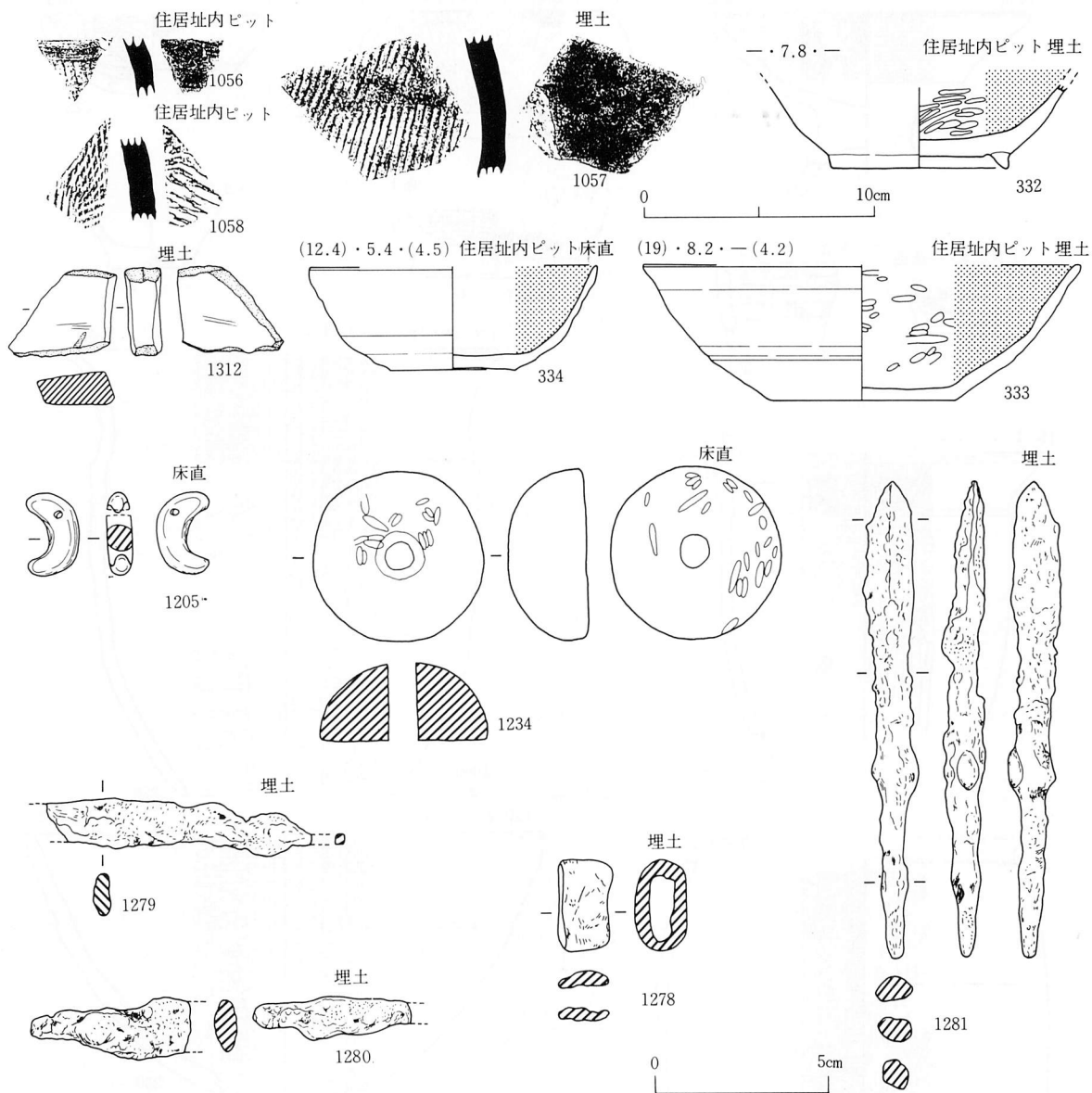
1. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色シルト粒・土器片が混入、下部に多量の焼土塊、酸化鉄が混入。
2. 7.5YR3/4 褐色 粘土質シルト 粘性あり、焼土粒が混入。
3. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 焼土ブロック粒が多量に混入。
4. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 褐色シルト粒が混入。

第108図 F-3 住居址-2 (遺構-2)





第109図 F-3住居址-2(遺物-1)



第110図 F-3 住居址-2 (遺物-2)

**盃形土器 (321)** ロクロ未使用成形で、体部に段や稜をもたず底部丸底のものである。口縁部は大きく内湾している。調整技法は、外面に一部ハケメを残し、口縁部ミガキ・底部ヘラナデである。内面はミガキ後黒色処理されている。

**高坏形土器 (320)** ロクロ未使用成形で、体部に段をもつ底部丸底の坏に脚部を貼り付けた形態を呈している。口縁部は体部段の位置より直線的に外反している。脚部は柱状部分のみを残し裾部分を欠失しているが、裾は大きく開くらしい。調整技法は、口縁部外面はヨコナデで脚

部はナデのみである。内面はミガキ後黒色処理である。

**甕形土器** (325～327・329・331) すべてロクロ未使用成形で、胴部が若干膨らむもの(329)・球胴型のもの(331)・体部が膨らまないもの(326)がある。頸部に段をもち、口縁部は段の位置より外弯気味に外反している。口唇は平らにナデられ、沈線状に凹みをもつ。底部周囲には軽い突出をもち、底面は木葉痕のもの(325)と平らにナデられるものがある。調整技法は、口縁部外面がハケメ後ヨコナデ、体部外面はハケメ後スリケシ(329)やハケメ後ヘラナデやヘラミガキ(326)である。

**甕形土器** (328) ロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を取り去った無底型のものである。頸部に段をもち、口縁部は外弯気味に外反して口唇に移行し、口唇は平らにナデられている。調整技法は、口縁部外面はハケメ後ヨコナデ・内面ヨコナデ、体部外面はハケメ後ヘラケズリやヘラナデ・内面ヘラナデである。

**鉢形土器** (330) ロクロ未使用成形で、頸部に軽い段をもち、口縁部は直線的に外反する。口縁部径に対して器高がほぼ $\frac{1}{2}$ と低く、底部は丸底風の平底である。調整技法は、外面は口縁部ヨコナデ・体部ヘラナデで、内面は口縁部ミガキ・体部ヘラナデである。

**小型土器** (323・324) いずれもロクロ未使用成形のもので、324は体部に粘土紐の積み上げ痕を明瞭に残している。323は小型の甕形土器に近似している。調整技法は、体部内外面ともハケメ(323)とヘラナデ(324)がある。

#### 須恵器

大甕の体部破片とおもわれるものが出土している。1057は本住居址の埋土内で出土したもので、外面に平行タタキ目・内面に凸面の当て道具痕をもつ。1056と1058は住居址床面で検出された新しい時期の土坑より出土したものである。1056は外面平行タタキ目・内面凸面当て道具痕をもち、1058は内外面ともに平行タタキ目をもつ。

#### その他

**土製品** (1205・1234) 1205は断面丸形で平面が「C」字形を呈する土製の勾玉である。上部に1ヶの貫通孔をもち、表面ミガキで黒色処理されている。1234は半円球状を呈し、中心部に1ヶの貫通孔をもつ土製の紡錘車である。表面ミガキで黒色処理されている。

**鉄製品** (1279・1281) 1279・1280は断面が扁平であるが器種不明である。1281は先端部の断面形が「△」形を呈し、基部は方形である。おそらく槍鉋であろうと考えられる。

**石製品** (1311) 3面に使用面をもつ砥石である。 (高橋与右エ門)

### 38) F-4 住居址-1

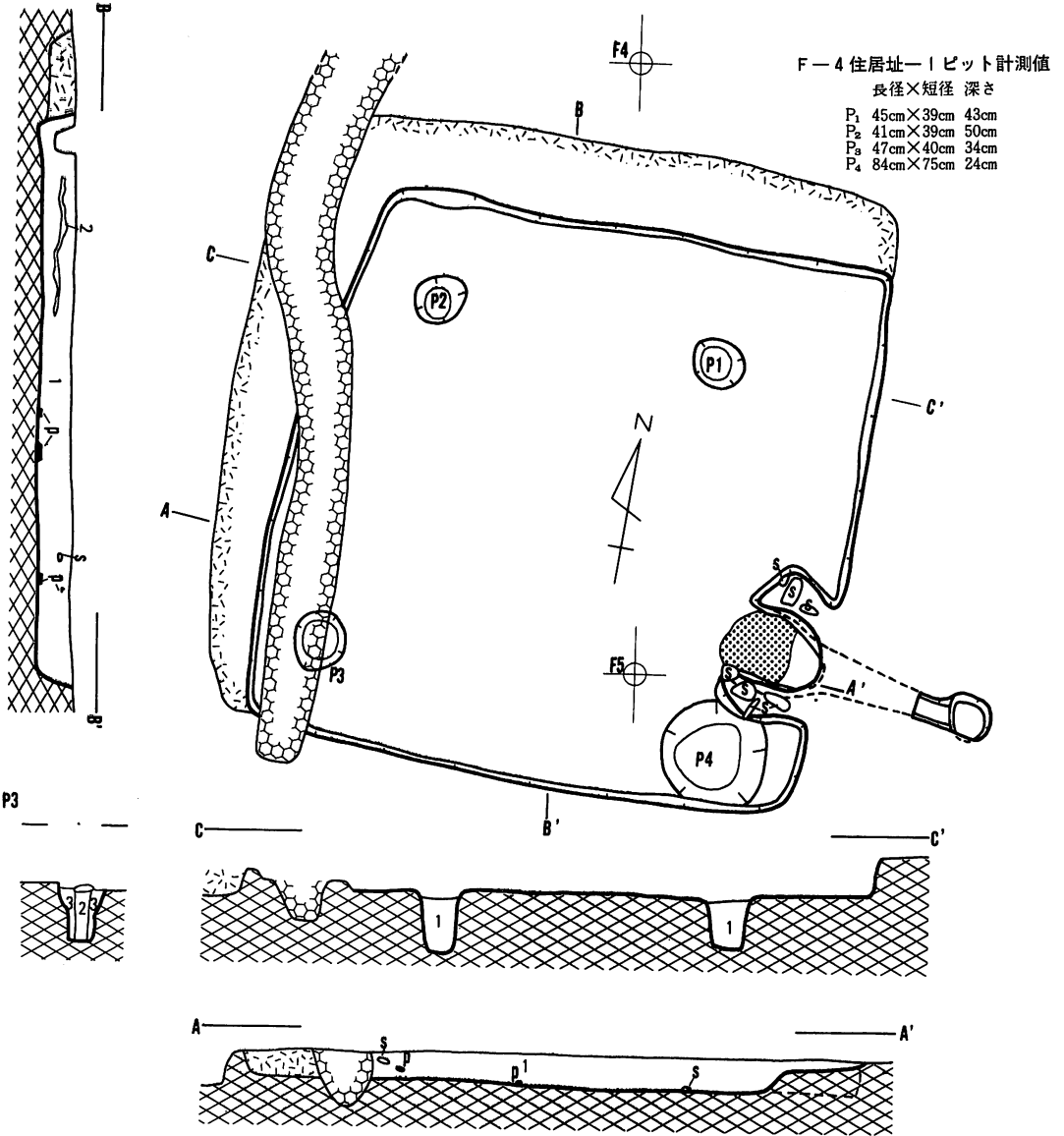
[遺構](第111・112図、P L 25 A)

本住居址は西でE-4住居址と、北東部がF-3住居址-2・南東部をF-5住居址群、さらに、西壁寄りではF-4住居址-2とそれぞれ重複しているが、遺構検出時の土層によってほぼ全体が検出されている。重複遺構との新旧関係は、E-4住居址・F-3住居址-2・F-5住居址群は本住居址より古い遺構であり、F-4溝跡は本住居址より新しい。なお、本住居址の精査によって、別の住居址(F-4住居址-2)が存在するらしいことが判明した。本住居址の床面は、F-4住居址-2の床面が高いにもかかわらず、F-4住居址-2の埋土内に本住居址の床面が確認できなかったことは、本住居址の方が古いという可能性を含んではいるものの、本住居址の床面直上より出土した遺物とF-3住居址-2の床面より出土した遺物が良く接合している。F-4住居址-2との床面の比高は0.05mほどである。これらのことから、F-4住居址-2は本住居址の前身住居址で、本住居址はF-4住居址-2の改築縮小されたものと考えられ、カマド・柱穴・貯蔵穴は共用しているものと推定される。

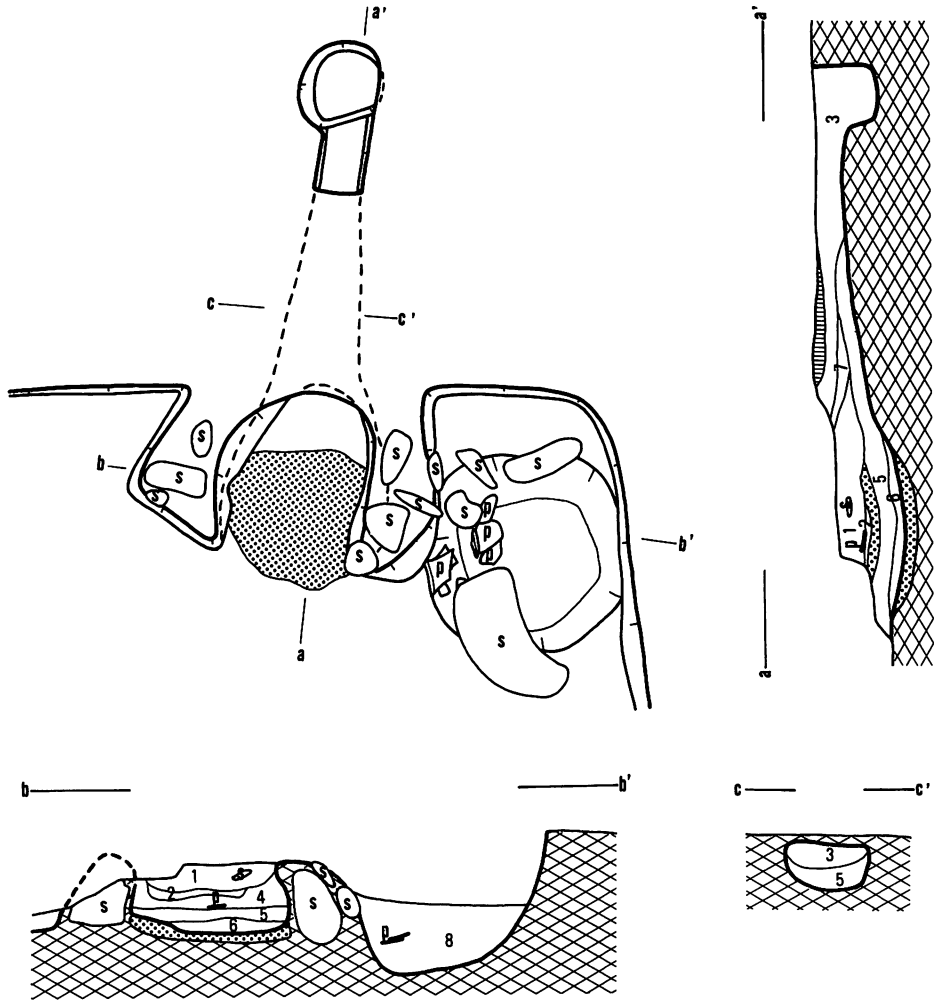
規模は東西4.3m・南北4.4mで壁高0.2m~0.3mを測り、壁は床面に対して105度の角度を示している。平面形は主軸に対して若干横長の隅丸長方形を呈し、主軸は東-西方向にあり磁北に対して100度東に偏している。埋土は黒褐色や明褐色を呈するシルトで構成され、混入物や色調によって2層に細分される。混入物としては褐色のシルト粒が混入し、埋土下位ほどその傾向が強い。さらに、下位層には炭化物粒も観察される。床は地山の暗褐色を呈するシルトや、F-4住居址-2の埋土によって構築されており、F-4住居址-2との重複部分にも貼り床が検出されていない。地山で構築された床面は良く締まって固いが、F-4住居址-2との重複部分はやや軟弱である。精査段階で本住居址の床面を掘り取ってしまった可能性が考えられるものの、検出された床面は平坦であり、北壁に寄るほど高くなる傾向がみられる。壁溝は検出されていない。また、床面ほぼ中央で現地性焼土が検出され、本住居址の地床炉であろう。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>までの土坑が検出されている。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の規模は径0.4m位で深さ0.3m~0.5m、P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は径0.25m位で深さ0.3m位、P<sub>8</sub>は径0.8m位で深さ0.24mをそれぞれ測る。平面形は円形や楕円形を呈し、断面形は、P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>がビーカー型・P<sub>8</sub>は鍋底形を示している。埋土は黒褐色を呈する粘性の強いシルトで構成され、全体的に褐色を呈するシルト粒の混入がみられる。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は本住居址の対角線上に位置することや規模から本住居址に伴う柱穴を構成し、P<sub>8</sub>は本住居址の貯蔵穴と考えられる。P<sub>4</sub>~P<sub>7</sub>は柱穴状を呈しているが、本住居址との対応関係は不明である。

カマドは東壁で検出され、壁中央より1.15m南に寄って位置している。検出された部分は袖

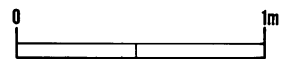


第III 図 F-4 住居址-1 (遺構-1)

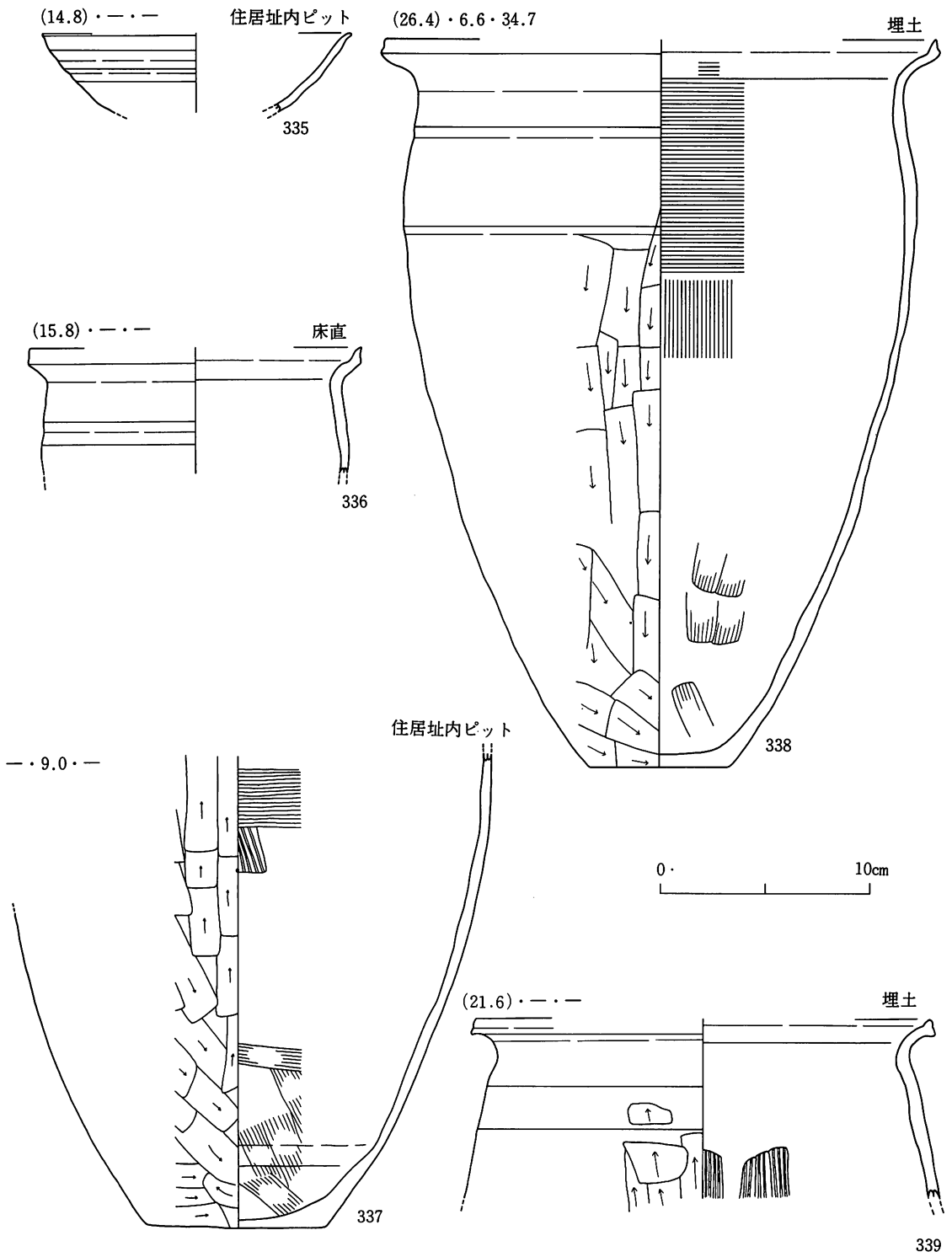


F-4 住居址-1 | カマド埋土土層

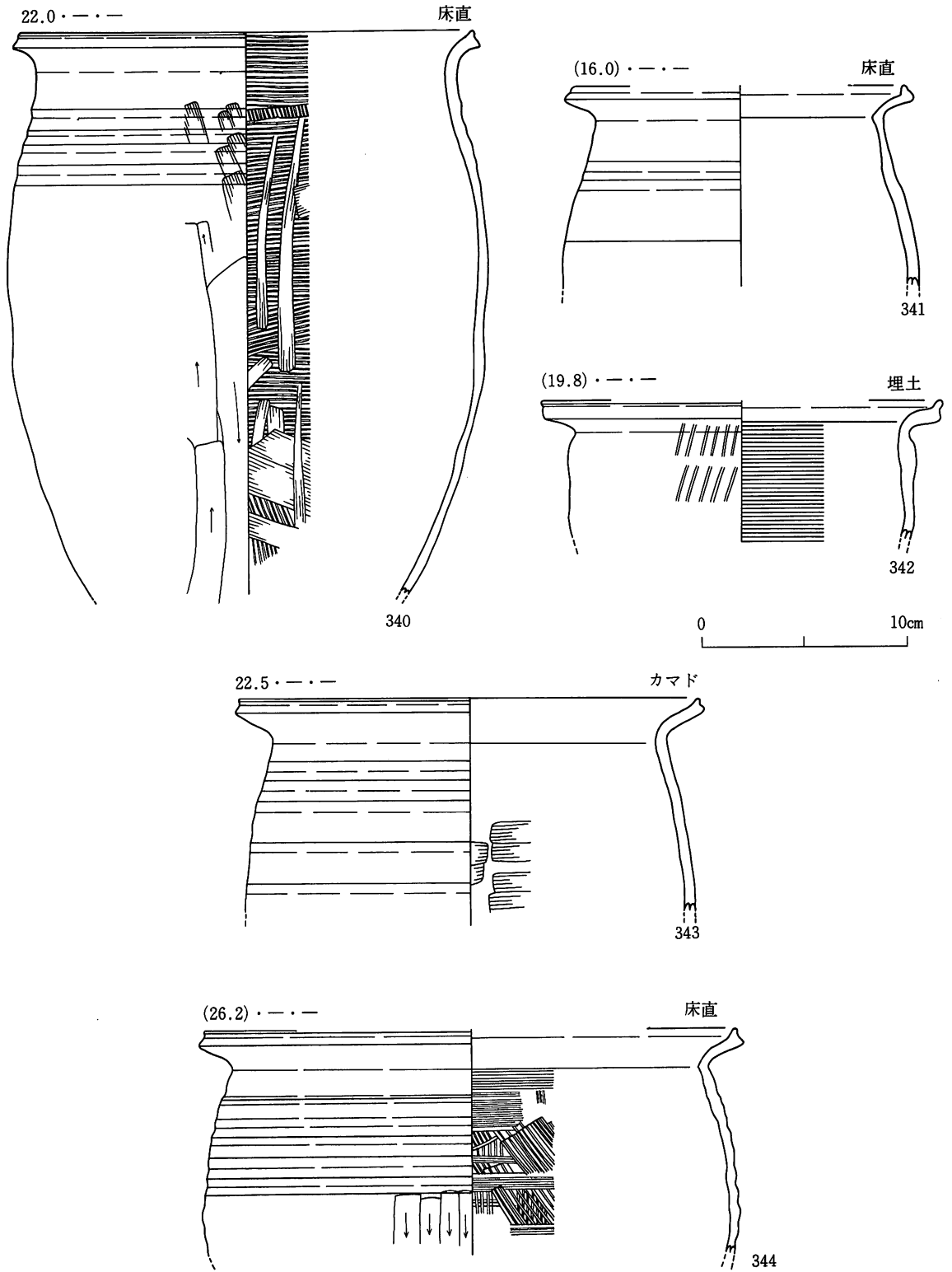
1. 7.5YR2/1 黒色シルト質土 粘性あり、焼土粒・炭化物少量混入。
2. 7.5YR2/1 黒色シルト質土 粘性あり、焼土が多量に混入。
3. 7.5YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり、少量の焼土粒が混入。
4. 7.5YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり、多量の焼土粒が混入。
5. 7.5YR3/2 黒褐色シルト質土 粘性あり、灰・焼土が混入。
6. 7.5YR3/2 黒褐色 粘性あり、灰・草木灰・焼土が混入。
7. 7.5YR2/2 黒褐色シルト質土 焼土が多量に混入。
8. 7.5YR2/2 黒褐色シルト質土 粘性あり、少量の褐色砂質シルトが混入。



第112図 F-4 住居址-1・2(遺構-2)

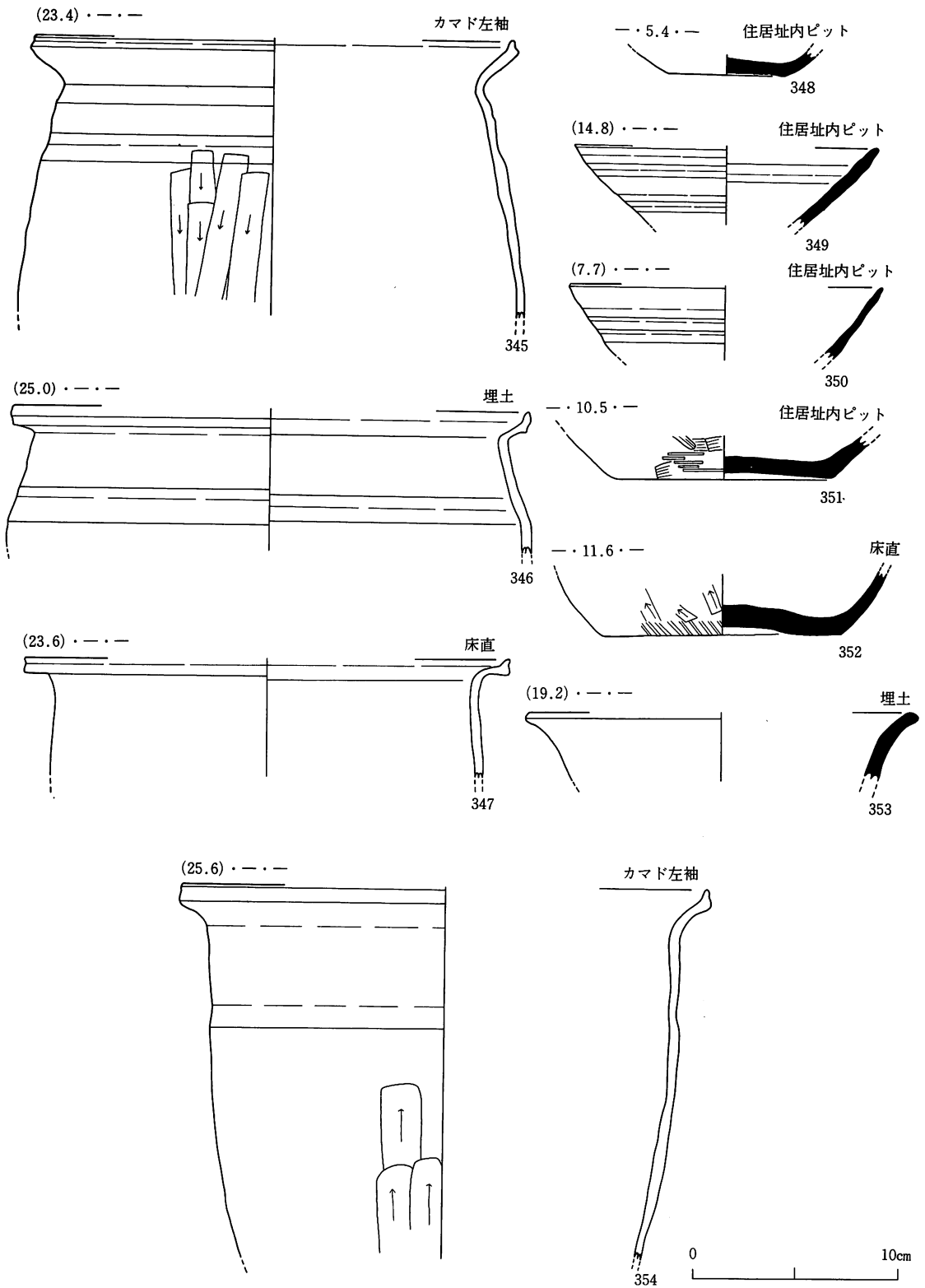


第113図 F-4 住居址一I (遺物一I)

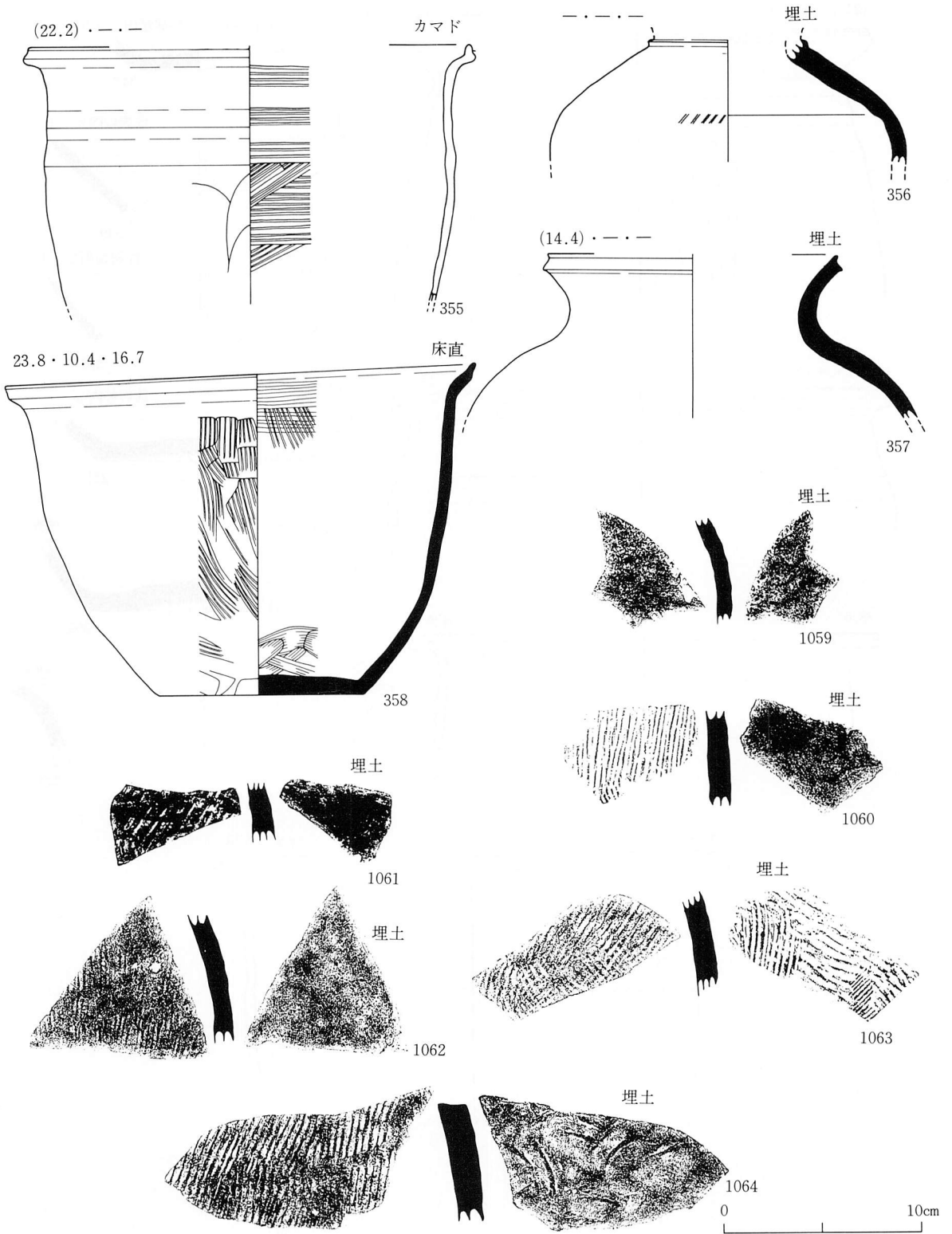


第114図 F-4 住居址-1 (遺物-2)

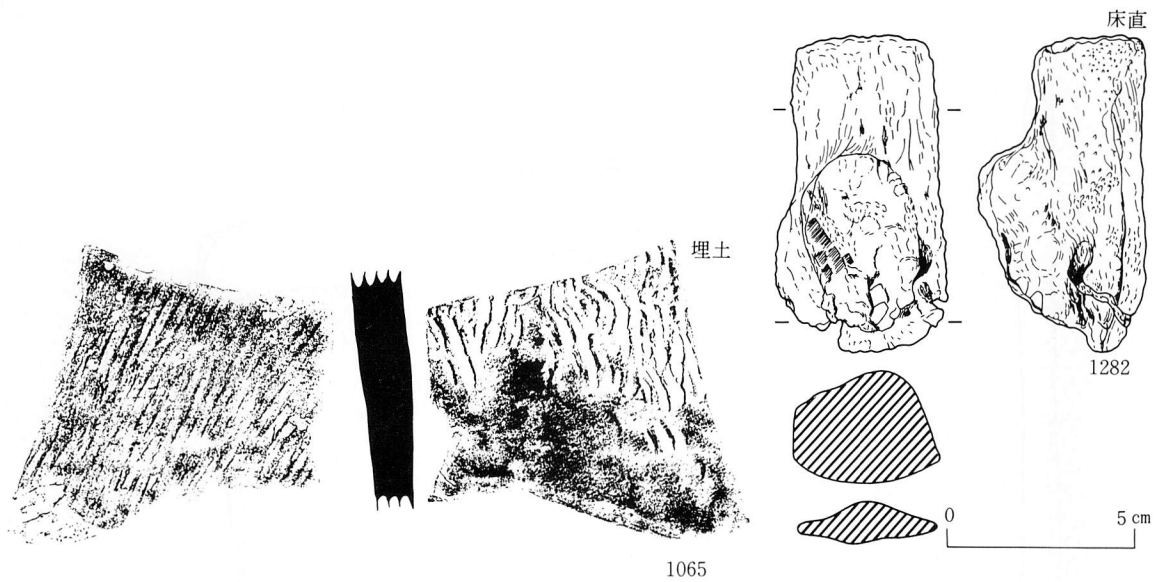




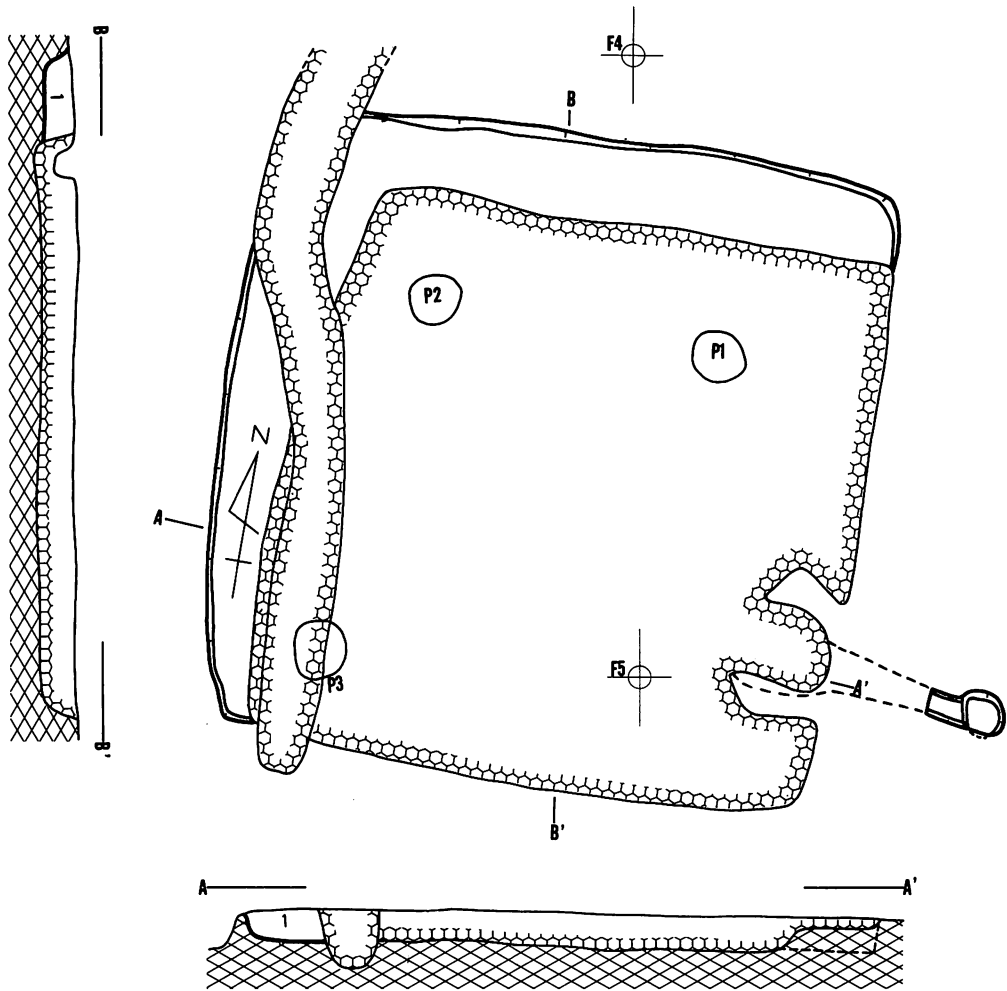
第115図 F-4 住居址一I (遺物-3)



第116図 F-4 住居址-1 (遺物-4)

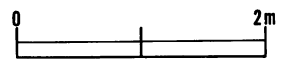


第117図 F-4 住居址-1 (遺物-5)



F-4 住居址-2 埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 褐色シルト小粒子と炭化物が混入。



第118図 F-4 住居址-2 (遺構)

部・燃烧部・煙道部であり、天井部はわずかにその痕跡を残しているにすぎない。袖部は左側に3ヶ・右側に4ヶの細長い礫を縦位で埋め込んで芯とし、その上に暗褐色を呈するシルトを貼り付けて構築している。燃烧部は床面より0.1mほど掘り窪められ、中央付近より奥壁に向かって次第に上がり勾配で煙道部と接続し、煙道部との段差はない。燃烧部の焼土は焚口部より奥壁付近まで観察される。煙道部は削り貫きによって構築され、検出時の形状はトンネル状を呈していた。燃烧部奥壁部分より次第に高くなって煙出部に続き、底面は平坦である。煙出部には明瞭な土坑が掘られ、平面形は円形を呈している。

〔遺物〕(第113・114・115・116・117図、P L 96・97)

床面直上や埋土内で多く出土しているが、完形のもの少なく、破片が多い。床面直上のは床面に散在する状態で出土しており、他にP<sub>6</sub>(貯蔵穴)内での出土もみられた。種類は土師器・須恵器・鉄製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・鉄斧がある。

#### 土師器

**坏形土器**(335) ロクロ使用成形で、内面黒色処理のないものである。図化できなかった小破片の中には内面黒色処理のものも含まれている。底部切り離し技法は明確でないが、坏の底部らしい破片では回転糸切り無調整である。

**甕形土器**(336~347・354・355) いずれもロクロ使用成形のものである。器形は体部が若干膨らむもの(337~341・343~346)とそうでないもの(336・342・347・354・355)があり、体部の膨らむものは頸部で窄み、口縁部は直線的に強く外反して口唇に移行し、口唇は上方に軽く挽き出されるものが多い。調整技法は、体部外面は上位に平行タタキ目の痕跡を残すもの(342)があるが、他のものはロクロナデのみで中位~下位にかけてはヘラケズリされる。内面はロクロナデのみもの(336・341・345~347・354)とカキ目をもつもの(337~340・342・344・355)やヘラナデのもの(343)等がある。

#### 須恵器

**坏形土器**(348~350) 破片では他にも出土しているが、3ヶ図化された。いずれもロクロ使用成形のものである。

**甕形土器**(351~353・356~358・1059~1066) 完形は358のみで他は破片である。351・352は底部と体部が若干残存する破片であるが、358型の底部と考えられる。357は壺形に近い器形である。調整技法は、体部外面に平行タタキ目をもつもの(352)やヘラケズリのもの(358)がある。353・357はロクロナデのみである。1059~1065は体部破片であるが、外面に平行タタキ目をもつもの(1061~1065)とヘラケズリのもの(1059)やカキ目のもの(1060)があり、内面はロクロナデ(1059~1062)・青海波文(1065)・凸面当て道具痕(1064)・平行タタキ目後カキ目(1063)がある。

## その他

鉄製品(1282) 床面直上より出土した鉄斧で、柄の装着部が空洞である。

(高橋与右エ門)

### 39) F-4住居址-2

〔遺構〕(第118・112図、P L 25 A)

本住居址はF-4住居址-1の床面より0.05mほど高い面で床面が検出され、F-4住居址-1の規模に比較して西壁・北壁部分が一回り広い住居址である。東壁・南壁はF-4住居址-1のそれと共用し、カマドや柱穴が検出されないことから、それらも共用されているものと推定されることから、F-4住居址-1の前身住居址と考えることができよう。以上のことから、本報告では、本住居址の東壁・南壁・カマド・柱穴をF-4住居址-1が共用しているものとして記述する。

規模は東西4.8m・南北5.1mで、壁高は南壁で0.3mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は東-西方向にあり、磁北に対して100度東に偏している。埋土はF-4住居址-1のそれと識別分離ができなかった。よって、F-4住居址-1の埋土最下層と近似した土質であろうと推定される。床は地山の暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床もみられず直接床面としている。床面として検出された面は左程固くない。壁溝は検出されていない。

〔遺物〕

本住居址に直接伴う遺物は不明である。残存していた0.05mの埋土内ではロクロ使用成形の甕形土器の小破片が2ヶ出土したのみである。

(高橋与右エ門)

### 40) F-5住居址-1

〔遺構〕(第119図、P L 25 B)

本住居址は北部～北西部にかけてF-3住居址-1やF-4住居址と重複し、さらに、西部はE-6住居址・南東部はG-6住居址とそれぞれ重複している。これら重複関係での新旧関係はF-4住居址は本住居址より新しく、F-3住居址-1とG-6住居址は古い。特に、北西壁のF-4住居址と重複する部分は壁・床ともに削剝されているので、不明な点が多い。

規模は北西-南東が6.5m・北東-南西が7.0mで、壁高は0.25mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。埋土は極暗褐色や黒褐色を呈するシルトで構成され、色調や混入物によって5層に細分されている。その中で4層は炭化物層である。いずれの土層にもシルト粒の混入があり、他に1層には炭化物粒の混入も観察される。また、埋土最下層には、粒径10

cm～20cm位の礫が混入しており、床面直上に接しているものもみられた。なお、床面直上で少量ではあるが炭化物の分布が観察された。特に北東壁寄りでの分布が多かったが、焼失住居というほどではない。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面には小凹凸があるもののほぼ平坦である。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>までの土坑が検出されている。これらの規模は径0.25m～0.35mの範囲で深さは0.55m～0.67mまでとそれぞれによって異なる。形状は円形や楕円形で、いずれも柱穴状を呈している。埋土はいずれも黒色や黒褐色を呈し、色調や混入物等によって何層かに細分されている。これらの土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が本住居址の対角線上に位置していることや、規模から本住居址の柱穴を構成するであろう。他の土坑もまた本住居址の対角線上に位置しており、規模もP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>とほぼ同じであることから、本住居址は何回かに亘る改築拡張が行われたものであろう。ここではP<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>をF-5住居址-2、P<sub>8</sub>～P<sub>11</sub>をF-5住居址-3と命名し、別遺構として別項で記述する。なお、本住居址では貯蔵穴状の土坑は検出されていない。

本住居址では明らかにカマドとして認定される遺構は検出されていない。しかし、北西壁ほぼ中央と考えられる位置で現地性焼土が検出されている。この位置は前述の様にF-4住居址との重複部分であることから、袖部や煙道部はF-4住居址によって削剝されてしまったものと考えられ、検出された焼土は燃焼部の残痕であろうと推定される。焼土の範囲は0.6m×0.3m位で、楕円形状に分布している。

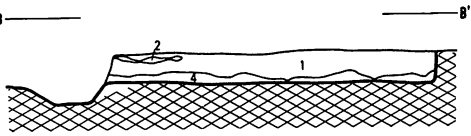
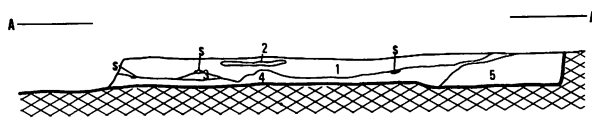
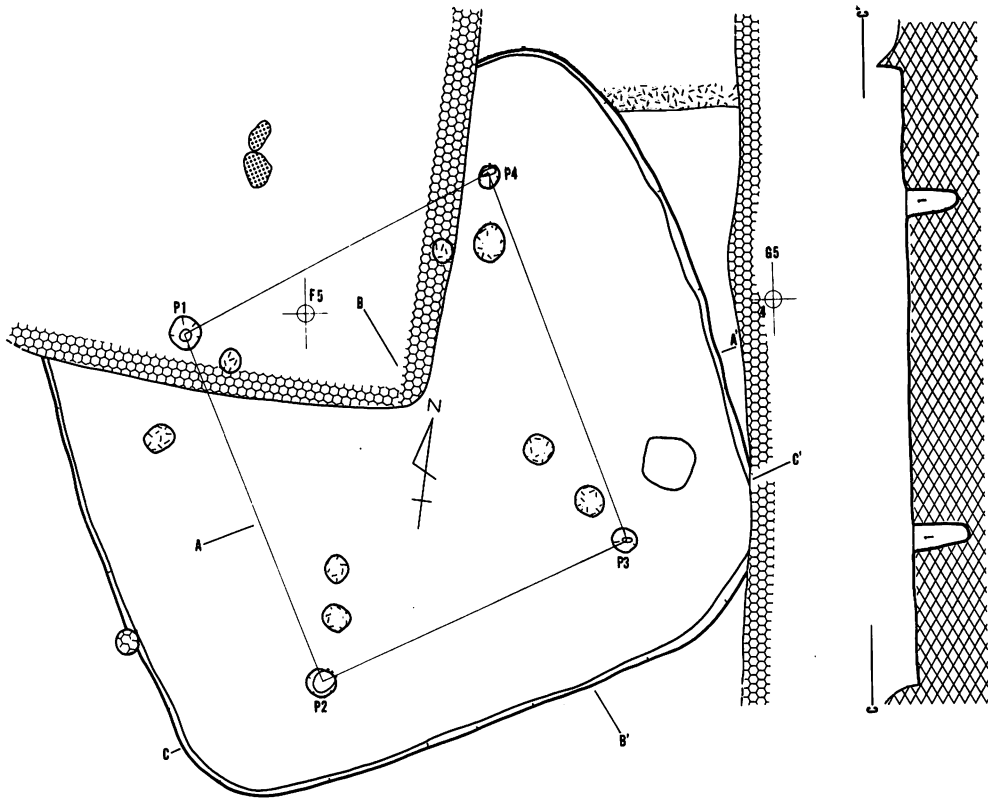
〔遺物〕(第122・123図、P L 98・99)

埋土内や床面直上で出土しているが量的には少ない。特に床面直上での出土が少なく、多くのは破片で散在していた。種類は土師器・須恵器・土製品があり、器種では、坏形土器・埴形土器・高坏形土器・高台付坏形土器・甕形土器・土製丸玉がある。

#### 土師器

**坏形土器**(359～361・364) いずれもロクロ未使用成形のものである。359・361・364の体部外面には軽い段や稜・沈線があるが、内面の対応する位置に段や稜・沈線をもたない。360は段や稜・沈線ともにもたないものである。底部は、359は小平底風の丸底であるが、360・364は丸底である。口縁部は体部段の位置で内弯気味に外反するもの(364)と直線的に外反するもの(361)があり、口唇部は丸味をもつ。大きさでは大型(361・364)・中型(359)・小型(360)がある。調整技法は、359・360は内外面ともミガキで内面は黒色処理される。361は口縁部ヘラナデで内面ミガキ後黒色処理、364は口縁部外面一部ミガキで内面ミガキ後黒色処理である。

**高坏形土器**(362・365) いずれもロクロ未使用成形であるが、362は脚部のみが残存し、365は坏部のみが残存している。362は小型高坏の脚部で裾の部分だけが残存しており、内外面ともミガキが入っている。また、接地面の上に段が入っている。365は大型の高坏で体部には2ヶ所



F-5 住居址-1 ピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	38cm×35cm	52.5cm
P <sub>2</sub>	32cm×31cm	62.0cm
P <sub>3</sub>	29cm×26cm	60.5cm
P <sub>4</sub>	27cm×21cm	52.5cm

F-5 住居址-1 埋土土層

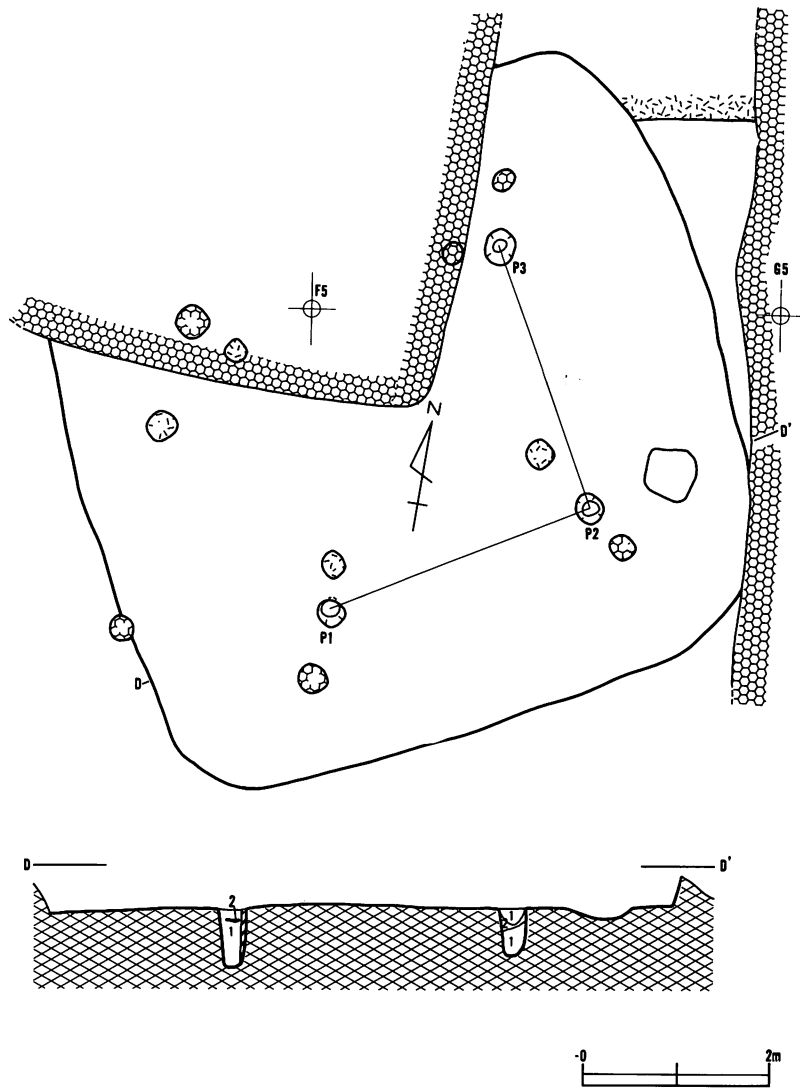
1. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質土 堅くよく締まっている、粘性あり、多量の褐色シルト粒と炭化物粒が混入。
2. 5P1.7/1 紫黒色 粉状の炭化物が混入。
3. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 やや堅くよく締まっている、粘性あり、褐色シルト粒少量混入。
4. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 よく締まっている、粘性あり、褐色シルト微少混入。
5. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質土 堅くよく締まっている、粘性あり、褐色シルトブロック多量に混入。

F-5 住居址-1 ピット埋土土層

1. 7.5YR2/1 黒 色 粘性あり、褐色砂質シルトが多量に混入。

第119図 F-5 住居址-1 (遺構)





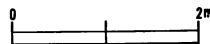
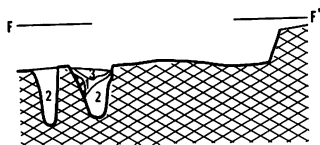
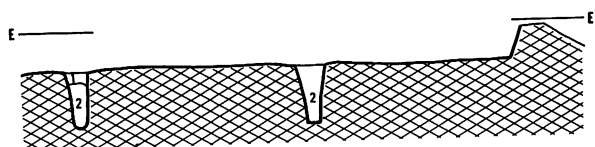
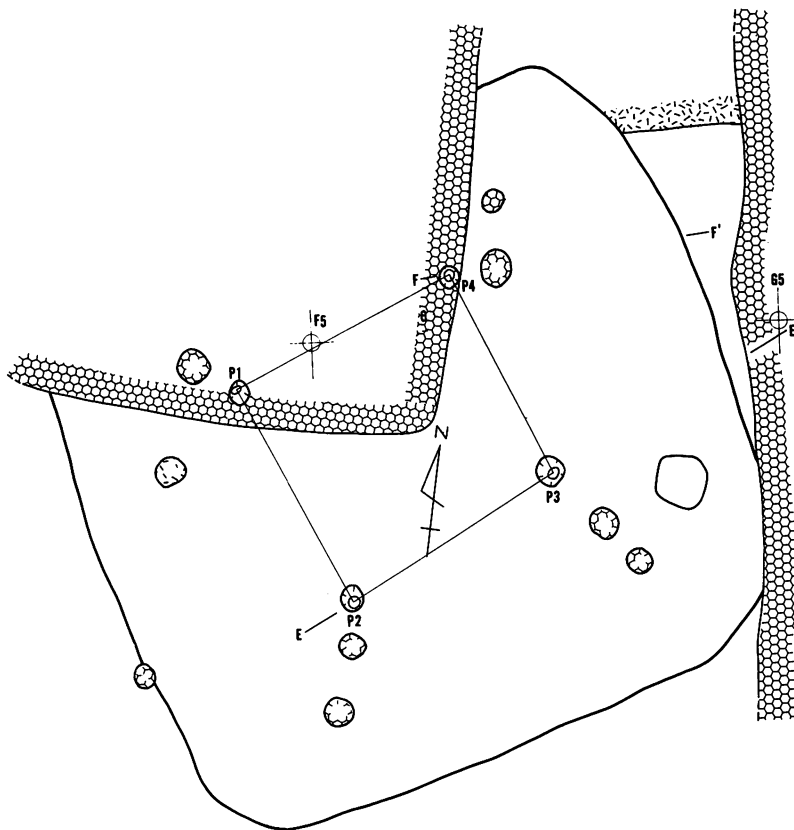
F-5 住居址-2 ピット埋土土層

1. 7.5YR2/2 にぶ黒褐色 シルト質土 粘性あり、微粒砂の混入あり。
2. 7.5YR5/4 にぶい褐色 砂質シルト 粘性あり。

F-5 住居址-2 ピット計測値

長径×短径 深さ		
P <sub>1</sub>	31cm×30cm	64cm
P <sub>2</sub>	32cm×29cm	55cm
P <sub>3</sub>	42cm×34cm	48.2cm

第120図 F-5 住居址-2 (遺構)



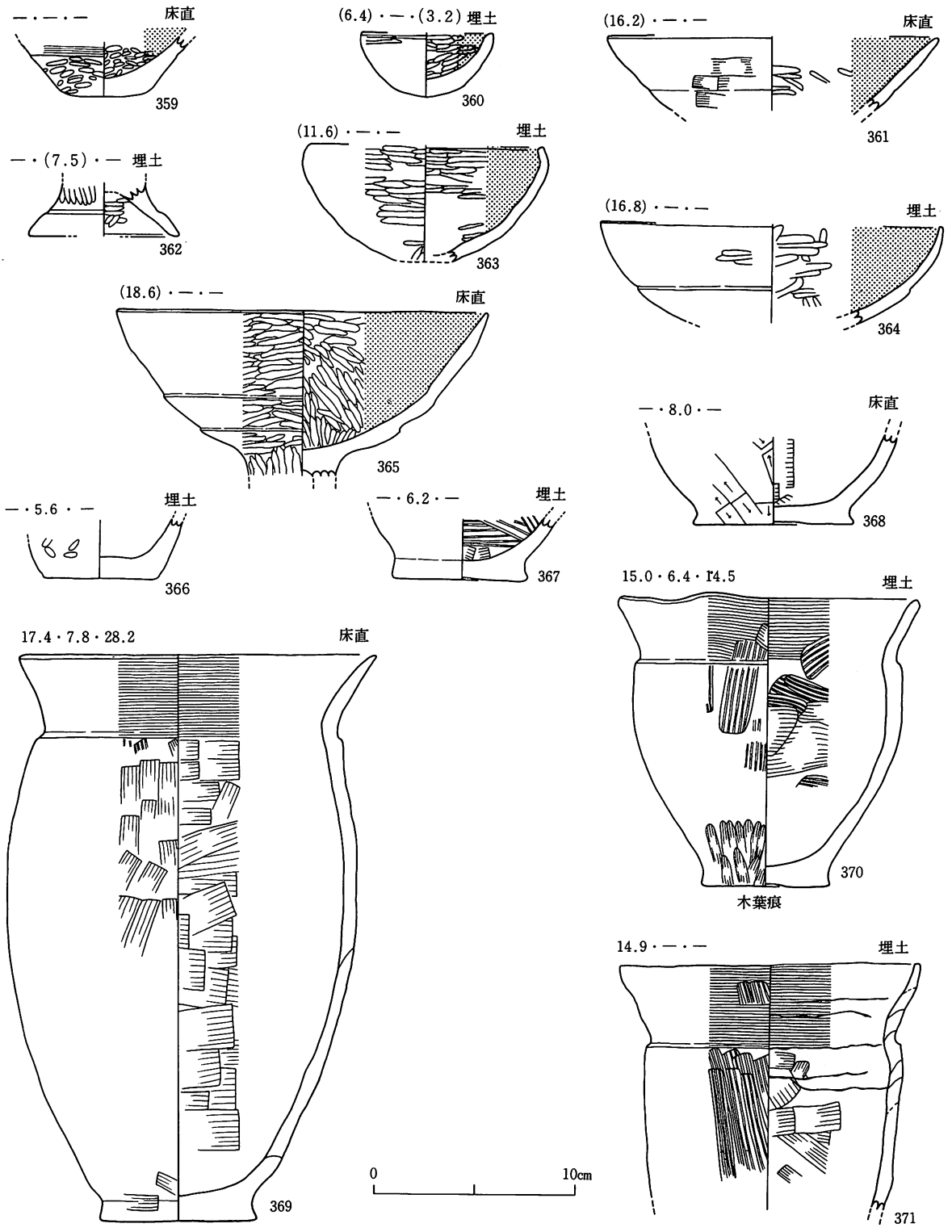
F-5 住居址-3 ピット埋土土層

1. 7.5 YR 5/4 に近い褐色 砂質シルト 粘性あり。
2. 7.5 YR 2/1 黒色 粘性あり。
3. 7.5 YR 2/2 黒褐色 砂質シルト 褐色シルトが多量に混入。

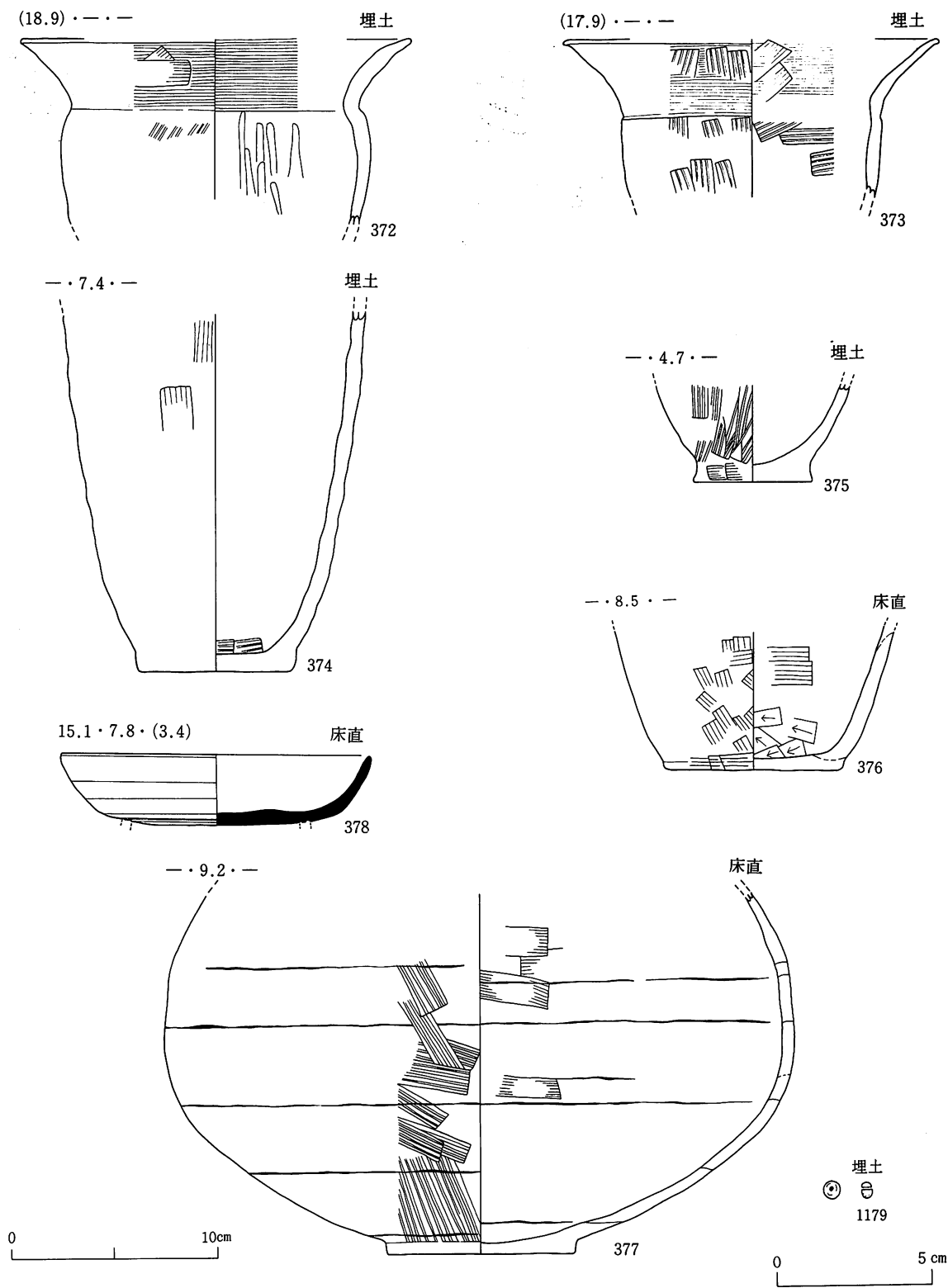
F-5 住居址-3 ピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	26cm×24cm	57.5cm
P <sub>2</sub>	30cm×24cm	62.5cm
P <sub>3</sub>	32cm×32cm	66cm
P <sub>4</sub>	25cm×23cm	63cm

第121図 F-5 住居址-3 (遺構)



第122図 F-5住居址-1(遺物-1)



第123図 F-5 住居址-I (遺物-2)

に軽い段が全周し、口縁部は上位段の位置より直線気味に外反している。柱状部分は円柱である。調整技法は内外面ともミガキが入り、後内面は黒色処理されている。

**塊形土器**(363) ロクロ未使用成形で、全体が半円球状を呈し口縁部上端が軽く内弯している。調整技法は内外面ともミガキで後内面は黒色処理されている。

**甕形土器**(366～377) いずれもロクロ未使用成形である。器形は長胴型のもの(374)・胴が若干膨らむもの(369)・球胴型のもの(377)があり、胴が膨らむものの体部最大径は中位～上位にある。いずれも頸部に段があり、口縁部は頸部段の位置より直線的に外反するもの(369・370)・内弯気味に外反するもの(371)・外弯気味に外反するもの(372・373)があり、口唇部は丸味をもつもの(370・371)・削がれて先細りとなるもの(369・372・373)がある。底部周囲は突出するもの(367～370・375・377)と突出しないもの(366・374・376)があり、底面は370が木葉痕をもつ以外は良くナデられているが、368・370は中央部が若干凹んでいる。調整技法は、口縁部は外面ハケメ後ヨコナデまたはヨコナデのみで内面はヨコナデのみや、ヨコナデ後ナデ・ハケメ後ヨコナデ等である。体部は、外面にはヘラナデのみやハケメ・ハケメ後スリケシ等があり、内面はヘラナデ・ハケメ後ヘラナデ・ミガキ等がある。

#### 須恵器

**高台付坏形土器**(378) ロクロ使用成形のもので、底部切り離し技法は手持ちヘラケズリによる再調整のため不明である。口径の割合に器高が浅く、体部は底部より内弯気味に軽く外反している。底部には高台部の剝落痕が円状に残っており、貼り付け高台であったものと推定される。底部の再調整以外にはロクロナデのみである。

#### その他

**土製品**(1179) 土製の丸玉で、円球状を呈し中心部に1ヶの貫通孔をもつ。全体が良くミガカレ黒色処理されている。  
(高橋与右エ門)

### 41) F-5 住居址-2

〔遺構〕(第120図、P L 25 B)

本住居址は前述のF-5住居址-1の床面で検出された、P<sub>6</sub>～P<sub>7</sub>の柱穴状土坑によって存在を認定した住居址である。従って、この柱穴状土坑以外に本住居址に関連する遺構は検出されていない。F-5住居址-1との新旧関係は、本住居址の柱穴配置ではF-5住居址-1のそれより一回り狭く配置され、さらにF-5住居址-1の床によって一部貼られていたことから、本住居址はF-5住居址-1よりも古いことは確かであり、おそらくF-5住居址-1の前身住居址であろう。

壁や床面が不明確であることから、規模は全く不明である。前述の様に柱穴配置がF-5住

居址一1より狭いことを考えれば、F-5住居址一1よりも小型であろうと推定される。埋土は残存していない。

本住居址に関連する土坑として $P_1(P_5) \cdot P_2(P_6) \cdot P_3(P_7)$ の柱穴状土坑がある。規模は径0.30m~0.35mで深さは0.55m~0.64m位である。埋土は黒褐色や褐色の粘土質シルトで構成されており、2層に細分されている。これらの土坑はF-5住居址一1のほぼ対角線上に位置していることや、規模がほぼ同一であることから本住居址の柱穴を構成するものと考えられるが、北西隅部では検出されていないことから、一概に断定できない。もし、仮想柱穴 $P_x$ が $P_8$ だとすれば、次項で記述するF-5住居址一3の柱穴と共用していることになる。

カマドは検出されていない。

〔遺物〕

出土していないので不明である。

(高橋与右エ門)

#### 42) F-5住居址一3

〔遺構〕(第121図、P L 25B)

本住居址はF-5住居址一1の床面で検出された $P_8 \sim P_{11}$ の柱穴状土坑によってその存在を認定した。従って、本住居址に関連する遺構は $P_8 \sim P_{11}$ 以外は全く不明である。おそらく、F-5住居址一1・2によって削剝されたものと推定される。この様なことから、本住居址はF-5住居址一1・2の前身住居址であろうと考えられ、F-5住居址群の中ではもっとも古い。壁・床面・埋土ともに全く残存していないので規模は不明である。

本住居址に関連する柱穴状土坑は $P_1(P_8) \cdot P_2(P_9) \cdot P_3(P_{10}) \cdot P_4(P_{11})$ があり、それらの規模は径0.25m~0.30m位で深さは0.55m~0.67mである。埋土は黒色を呈する粘土質のシルトで構成されている。これら $P_1 \sim P_4$ の土坑はF-3住居址一1の対角線上に位置することや規模がほぼ同一であることから、本住居址の柱穴を構成するであろう。

カマドは残存していない。

〔遺物〕

不明である。

(高橋与右エ門)

#### 43) F-6住居址

〔遺構〕(第124・125図、P L 26A)

本住居址は南西部がE-7住居址と重複し、さらに、北東部がG-6住居址と重複している。重複遺構との新旧関係は、重複するいずれの住居址より本住居址が新しい。また、本住居址の西側部分が工事によって攪乱を受けていたことから、不明な点も多い。

規模は東西が推定3.6m・南北4.3mで壁高は0.12m位を測り、壁は床面に対してほぼ直角を示している。平面形は横に若干長い横長の隅丸長方形を呈し、主軸は西―東にあり主軸は磁北に対して93度西に偏している。埋土は黒褐色を呈するシルトの単層で構成され、褐色の砂質シルト粒や炭化物粒が混入し、粘性が強い。また、埋土最下層には粒径10cm～20cm位の礫が混入し、多くは床面直上に接していた。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構成され、カマド周囲には薄い貼床が観察されたが、その他の部分は地山面をそのまま床面としている。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の土坑が検出されている。規模はそれぞれによって差があり、P<sub>1</sub>は長径0.8m・短径0.7mで深さ0.28m、P<sub>2</sub>は径0.40mで深さ0.25m、P<sub>3</sub>は径0.20mで深さ0.14mを測る。埋土は黒色や黒褐色を呈する粘性の強いシルトで構成され、褐色のシルト粒が混入している。P<sub>2</sub>では埋土内より土師器が出土している。平面形はP<sub>1</sub>が不整形、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は円形である。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>は位置や規模から本住居址に伴う貯蔵穴であろう。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は形状は柱穴状であるが、他に対応する土坑が検出されていないことから、柱穴とは考え難い。しかし、本住居址に伴う土坑である。

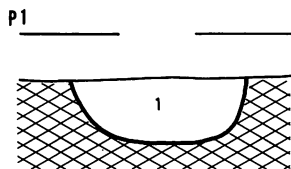
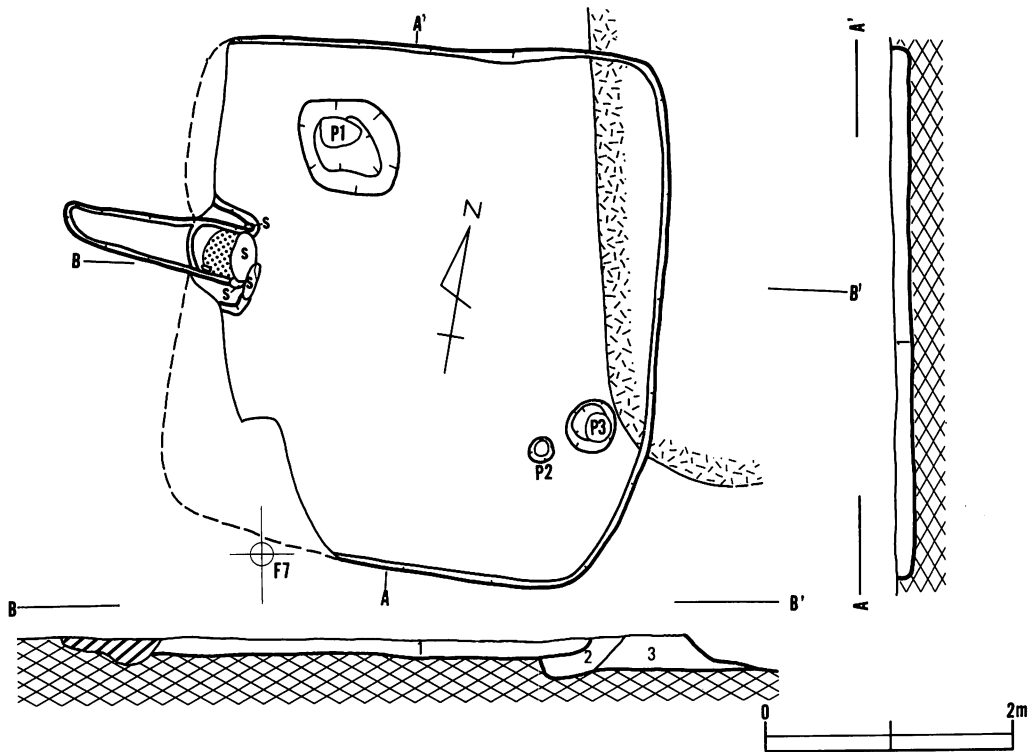
カマドは西壁で検出され、壁中央より0.3mほど北に寄って位置している。工事の際に煙道部と燃焼部奥壁部分が攪乱・削剝によって残存不良であるが、袖部・燃焼部は良好な状態で検出された。袖部は地山の削り出しによって構築され、左右各袖部の焚口付近には、粒径30cm×15cm位の礫が縦位で10cmほど埋め込まれている。また、焚口部の床面には左右袖部の間を塞ぐ様な状態で、粒径40cm×20cmの礫が横転していた。このことから焚口部は3ヶの礫で「冂」状に組まれているものと考えられる。燃焼部床面は床面より若干掘り窪められており、中央付近より奥壁に向かって上がり勾配を示し、煙道部とは明瞭な段差で接続している。また、燃焼部内より土師器甕形土器の破片が2ヶ体分（完形とはならない）検出されており、おそらくカマドに埋設された土器であろうと考えられる。なお、燃焼部床面奥壁寄りの左袖内壁際で粒径15cm×10cmの礫が1ヶ縦位で埋設され、支脚として利用していた。煙道部底面はほぼ平坦で、煙出部に向かって緩やかな上がり勾配を示している。煙出部に土坑はない。

〔遺物〕(第126・127・128図、P L 100・101A)

埋土内での出土は少なく、床面直上とP<sub>2</sub>からの出土が多かった。床面直上出土のものはカマド右側やカマド前庭部での出土が多い。また、P<sub>2</sub>よりは坏形土器・甕形土器が出土している。種類は土師器・須恵器・土製品・鉄製品があり、器種は坏形土器・甕形土器・甗形土器・土製勾玉・名称不明土製品・名称不明鉄器等がある。

#### 土師器

坏形土器(379～381) ロクロ未使用成形で、体部外面に軽い段をもち、底部丸底のものであ



F-6 住居址ピット計測値

長径×短径 深さ

P <sub>1</sub>	97cm×71cm	30cm
P <sub>2</sub>	20cm×20cm	14.5cm
P <sub>3</sub>	42cm×39cm	31cm

F-6 住居址埋土土層

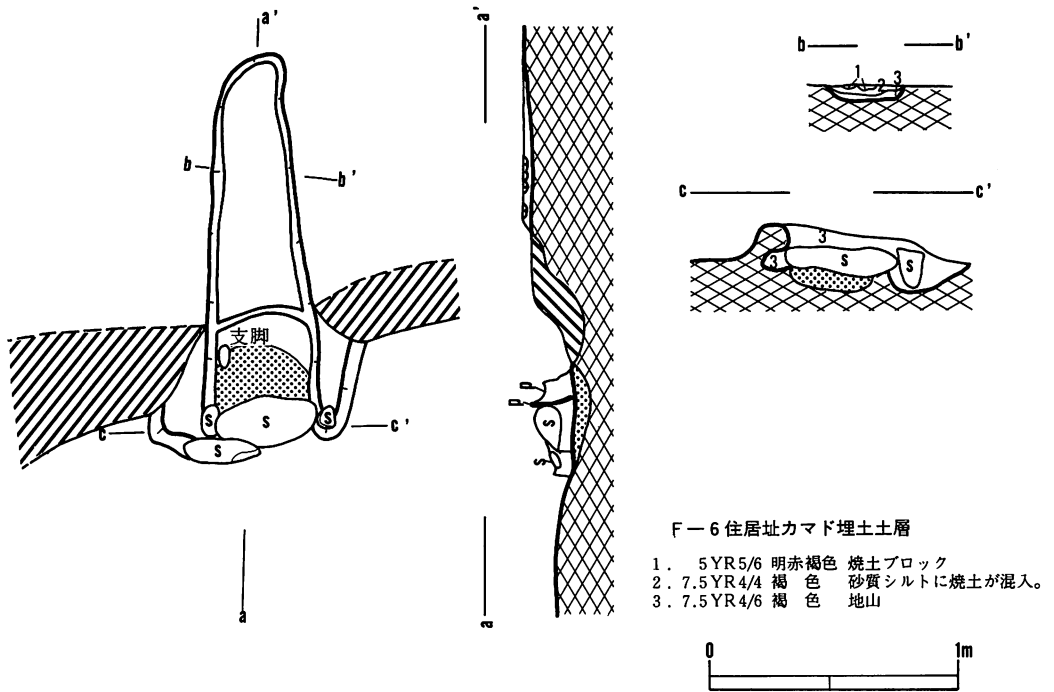
1. 7.5YR2/1~2/2 黒色~黒褐色 シルト質土 粘性あり、微細な褐色砂質シルト粒と炭化物粒が混入。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり、多量の褐色シルトブロックと少量の炭化物が混入。
3. 7.5YR2/1 黒色 粘性あり、炭化物少量混入。

F-6 住居址ピット埋土土層

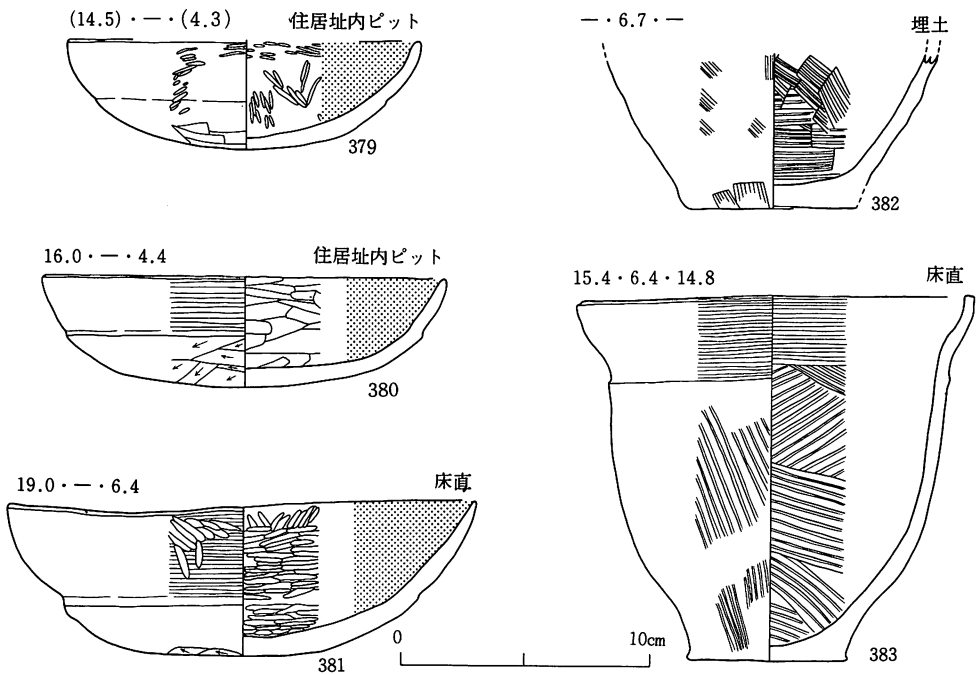
1. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり、褐色シルトブロックがみられる。

第124図 F-6 住居址(遺構一I)

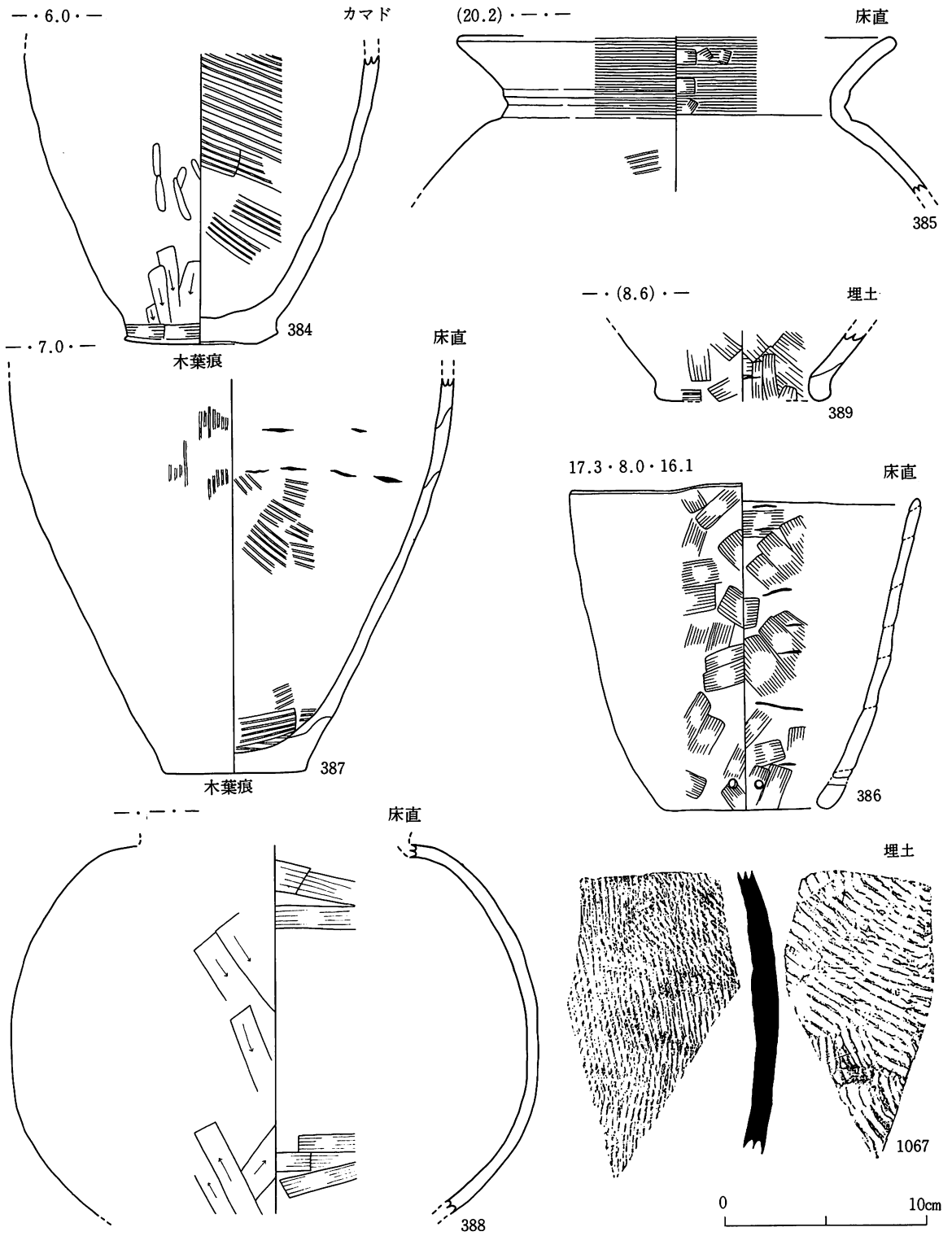




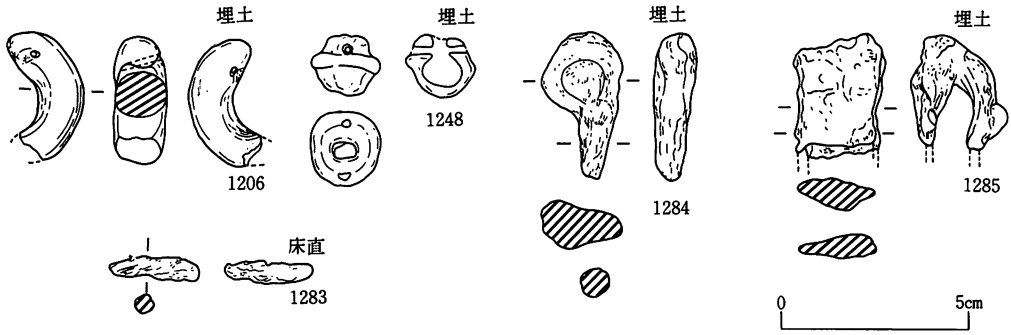
第125 図 F-6 住居址(遺構-2)



第126 図 F-6 住居址(遺物-1)



第127図 F-6住居址(遺物-2)



第128図 F-6住居址(遺物-3)

る。内面には軽い稜をもつもの(380)と段や稜をもたないもの(379・381)がある。口縁部は体部段の位置で内弯気味に外反している。大きさでは大型(381)と若干小さ目のもの(379・380)があり、いずれも口径に比較して器高が低い。調整技法は、外面は口縁部ヨコナデ(380)・ヨコナデ後ミガキ(381)・ミガキ(379)があり、底部はいずれもヘラケズリされている。内面はミガキ後黒色処理されている。

**甕形土器**(382~385・387・388) いずれもロクロ未使用成形で、胴部が若干膨らむらしいもの(382・384・387)と球胴のもの(385・388)がある。大きさでは小型(383)・中型(384)・大型(385・387・388)がある。全体的な器形は完形のものがないので不明であるが、頸部には段があり、口縁部は頸部段の位置より直線的に外反するもの(385)と外反した後直立気味に立ち上がるもの(383)がある。底部の周囲は軽く突出するもの(383・384)と突出しないもの(382・387)があり、底面には木葉痕をもつもの(384・387)とナデられて平らなものがある。調整技法は、口縁部は外面ヨコナデ・内面ヨコナデ一部ナデで、体部は外面がハケメ後スリケシ(282・283・385・387)やヘラケズリ(388)・中位ミガキ下位ヘラケズリ(384)等がある。

**甌形土器**(386・389) いずれもロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を取り去った無底型と底部を抜いた単孔型のものがある。386は底部より口縁部上端までほぼ直線的に外傾し、頸部に段や沈線・稜がなく、口唇は丸味をもつ。また、底部近くの体部には向かい合って各1ヶの貫通孔をもつ。389は底部の破片であるが、直立気味で立ち上がった体部が大きく外傾して体部中位に移行するらしい。調整技法は内外面ともにヘラナデであり、386の体部には粘土紐積み上げ痕を明瞭に残している。

#### 須恵器

大甕の体部破片が出土している。1067は内外面ともに平行タタキ目をもつ。

#### その他

**土製品**(1206・1248) 1206は土製勾玉であるが、断面円形で「C」字形を呈し、先端部に1

ヶの貫通孔をもつ。1248は名称が不明であるが、円球状で中空のものである。上端には1ヶの貫通孔をもつ。

**鉄製品**(1283～1285) 1283は名称が不明であるが、断面円形で細い棒状を呈する。1284は先端が鑿状を呈している。1285は扁平な鉄板を丸めたもので「 $\cap$ 」形を呈しているが、本来は「 $\bigcirc$ 」字形を呈するであろう。(高橋与右エ門)

#### 44) F-11住居址

[遺構](第129・130図、P L 26 B)

本住居址はいずれの遺構とも重複せず単独で検出された。

規模は北西-南東4.7m・北東-南西4.7mで壁高は0.2mを測り、壁は床に対してほぼ直角を示している。平面形は隅丸方形を呈しており、主軸は北西-南東方向にあり、磁北に対して35度西に偏している。埋土は黒色または黒褐色を呈するシルトで構成され、混入物の種類や程度・色調によって4層に細分された。混入物としては、全体的に砂粒が観察され、酸化鉄の集積もみられる。また、埋土最下層には粒径0.15m～0.3m位を測る礫の混入がみられる。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構築され、カマド付近より東壁寄りの部分には褐色のシルトによる貼床が観察される。床面は若干起伏がみられるものの、総じて平坦で良く締まって固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面では $P_1$ ～ $P_4$ までの土坑が検出されている。規模は $P_1$ ～ $P_4$ とも径0.3m～0.4mで、深さは $P_1$ ・ $P_2$ は0.3m位、 $P_3$ ・ $P_4$ は0.4m位である。検出面での平面形は楕円形を呈しているが、底面では方形または住居址の主軸に対して横長の長方形に近い形状を呈している。埋土は強粘性の黒色シルトで構成され、壁際には褐色を呈するシルト粒の混入が多い。これら土坑の性格は、本住居址の対角線上に位置することや、規模もほぼ同一であることから本住居址に伴う柱穴を構成するであろう。貯蔵穴と考えられる土坑は検出されていない。

カマドは北西壁で検出され、壁中央より0.15mほど東寄りに位置する。検出された部分は、袖部・燃烧部・煙道部であり、天井部は定かでないが、カマド燃烧部埋土内で若干焼成を受けた褐色のシルト層が観察されたことから、これが天井部が崩落した残痕であろう。袖部は地山の削り出しによって構築され、シルトの貼り付け部分は観察されない。左右袖部の焚口付近には粒径30cm×10cm位の細長い礫が縦位で0.1mほど埋め込まれていた。また、焚口部床面にも粒径45cm×15cm位の細長い礫が、左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの礫によって構成され、「 $\square$ 」状に組まれていたものと推定される。燃烧部は床面より若干掘り窪められているが、燃烧部中央付近より奥壁に向かっては床面とほぼ同位面であり、煙道部とは明瞭な段差で接続し、高低差は10cmである。カマド内には2ヶの土師器甕形土

器が並列で埋設されており、焚口部に向かって横転していた。埋設土器の大きさは、左側で口径16.1cm・底径7.3cm・器高30.0cm、右側は口径17.5cm・底径7.8cm・器高19.4cmである。左側埋設土器の底面下には、粒径15cm×10cmの礫が縦位で10cmほど埋め込まれ、支脚として利用されていた。燃焼部の焼土は焚口部付近より燃焼部中央付近まで観察される。また、焼土の上や焚口部には、焼骨の破片が少量観察されたが、原形を保っているものはなかった。煙道部は煙出部に向かってほぼ直線的に伸びているが、煙出部より0.15m位手前で右側に曲折して煙出部に続いている。底面は平坦でほぼ水平に近い。煙出部には平面形が主軸方向に対して横長の長方形を呈する土坑が掘られている。

〔遺物〕(第131・132図、P L 101B・102・103A)

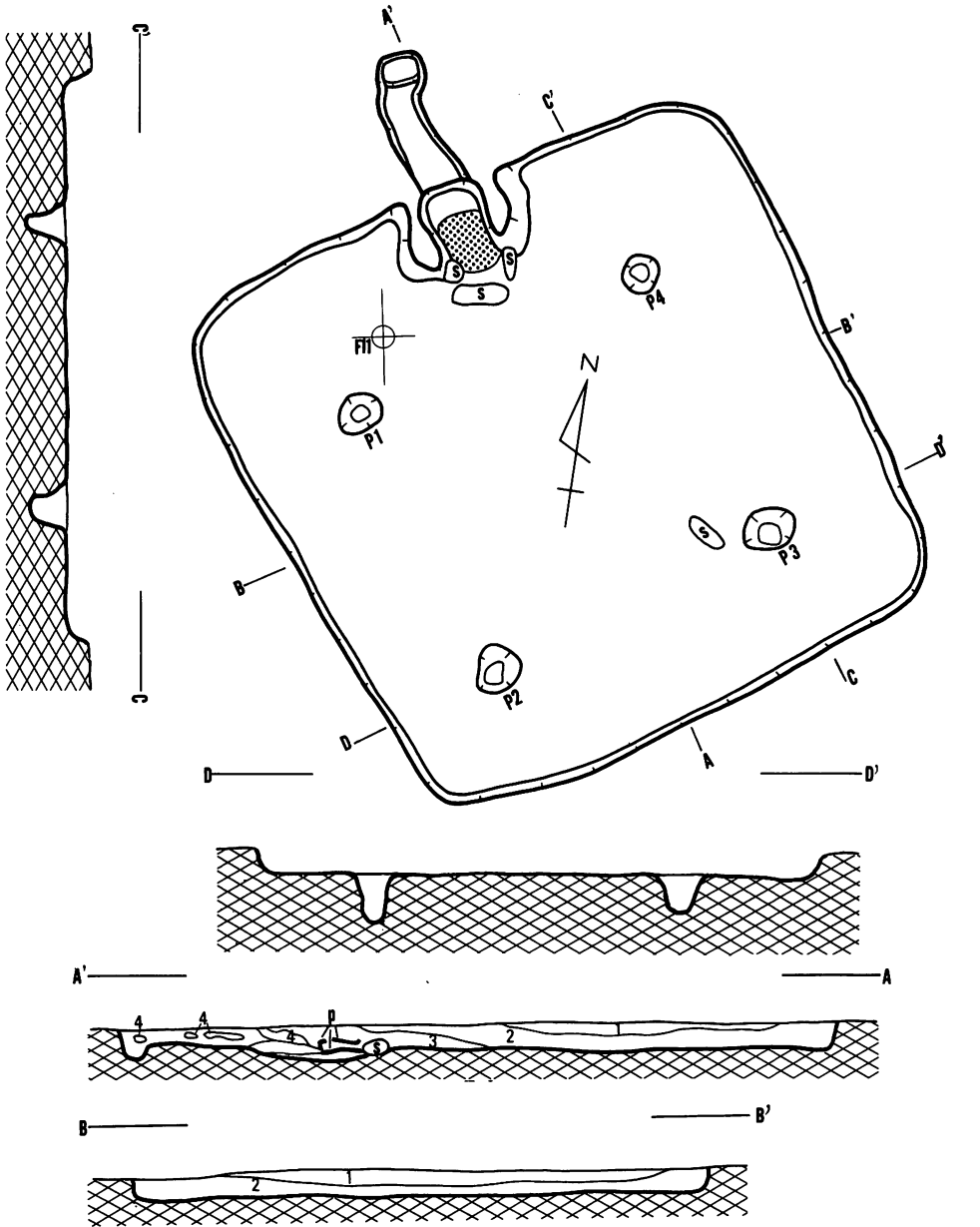
埋土内での出土は少ないが、床面直上では比較的多く出土している。その中でもカマド周囲での出土が多く、とりわけカマド右側での出土が多い。種類は土師器・須恵器・鉄製品があり、器種では環形土器・甕形土器・甑形土器、名称不明鉄器がある。

### 土師器

**環形土器**(390～395) いずれもロクロ未使用成形で、体部外面に段や稜をもち、底部丸底のものである。393には外面に段・稜ともにもたない。内面は外面の段に対応する位置に段をもつもの(392・394・395)・軽い稜をもつもの(390・391)・いずれももたないもの(393)がある。体部～口縁部は段の位置より内弯気味に外反するもの(390・392・394・395)と直線的に外反するもの(393)がある。大きさでは391・394・395が若干大き目であるが、他はほぼ同じ大きさである。調整技法は内外面ともミガキを多用するものが多く、他の調整の入るものは391の口縁部外面ヨコナデのみである。内面はいずれも黒色処理されている。

**甕形土器**(396～401) いずれもロクロ未使用成形のものである。器形は胴が若干膨らむもの(397・400)とそうでないもの(398)があり、胴が若干膨らむものの体部最大径の位置が中位～上位にある。頸部にはいずれも段・沈線・稜ともにもたない。口縁部は外弯するもの(397・400)・直線的に軽く外反するもの(398・401)があり、口唇は丸味をもつもの(397・398・400)と削がれて先細りとなるもの(401)がある。底部周囲には突出をもつもの(398・400)ともたないもの(396・399)があり、底面は平らにナデられ、木葉痕をもつものはない。調整技法は、口縁部は外面がヨコナデ(398)・ハケメ後ヨコナデ(397・400・401)で、内面はヨコナデである。体部は外面がハケメ(396・398・400)・ハケメ後スリケシ(397・399)・ナデやミガキ(401)で内面はいずれもハケメ後ヘラナデやスリケシである。

**甑形土器**(402) ロクロ未使用成形のもので、甕形土器の底部を取り去った形の無底型のものである。器形は体部が若干膨らみ、頸部で軽く窄み、頸部には段や稜もなく、口縁部は頸部の位置より直線的に軽く外反している。底部寄りの体部下位には向かい合う様に各1ヶの貫通



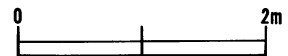
F-11住居址ピット計測値

長径×短径 深さ

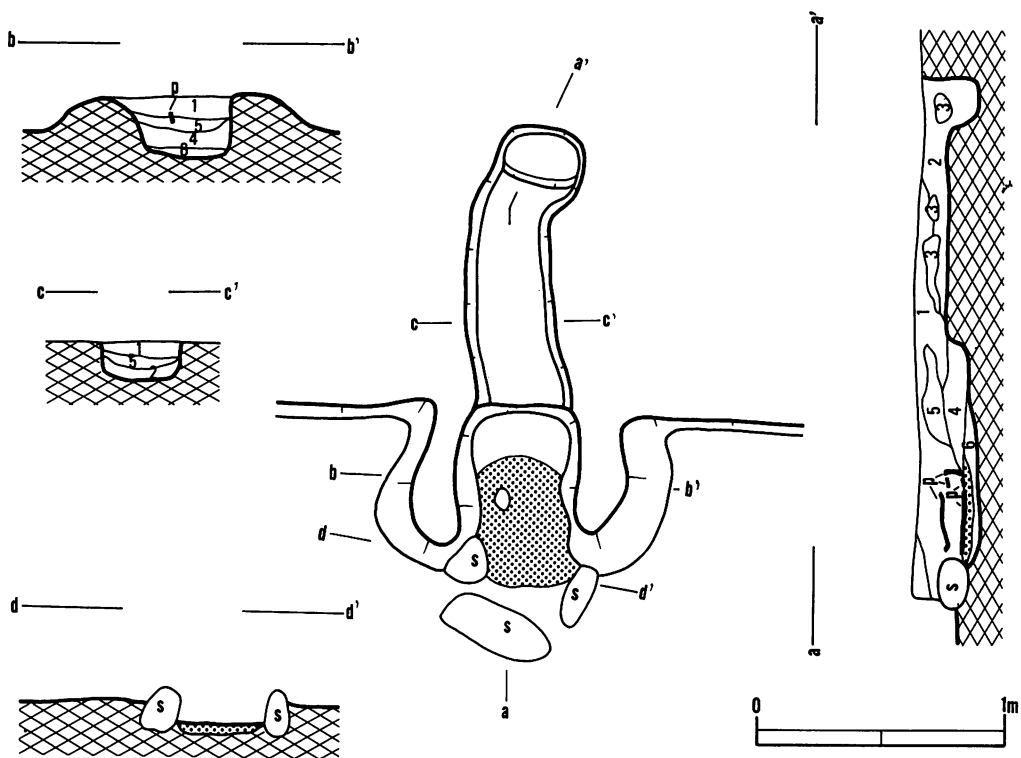
P <sub>1</sub>	37cm×31cm	28cm
P <sub>2</sub>	40cm×33cm	25.5cm
P <sub>3</sub>	44cm×32cm	38cm
P <sub>4</sub>	32cm×29cm	38cm

F-11住居址埋土土層

1. 7.5 YR 2/1 黒色土 シルト質土 少量の細砂混入、酸化鉄の集積や褐色シルト混入。
2. 7.5 YR 1.7/1 黒色 シルト質土 粘性あり、褐色シルトブロックと凝灰質の砂粒が混入。
3. 7.5 YR 1.7/1 黒色 シルト質土 粘性あり。
4. 7.5 YR 2/2 黒褐色 シルト質土 褐色砂質シルトの混入あり。



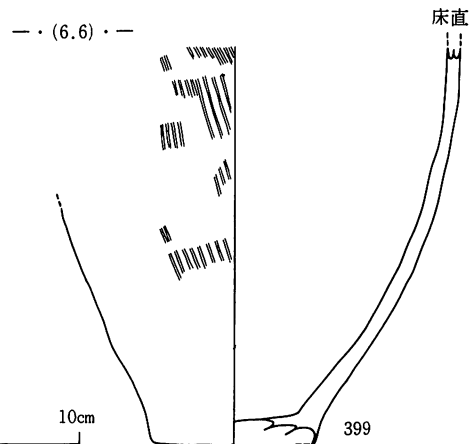
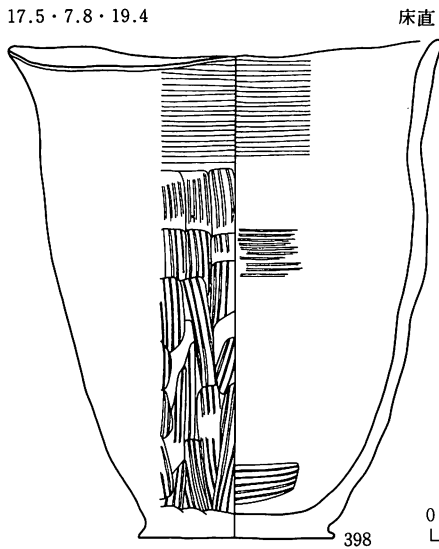
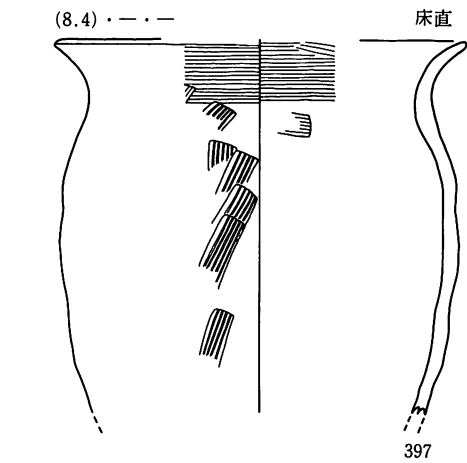
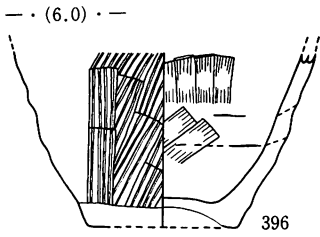
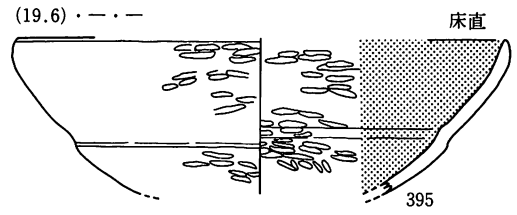
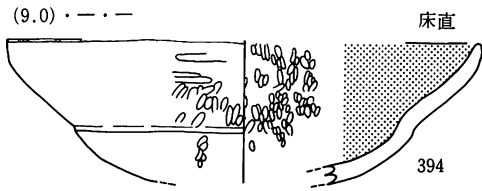
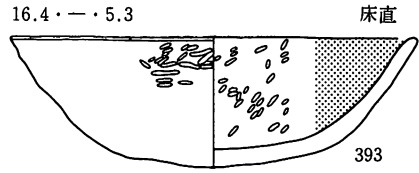
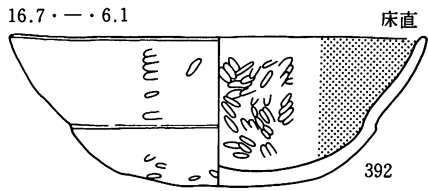
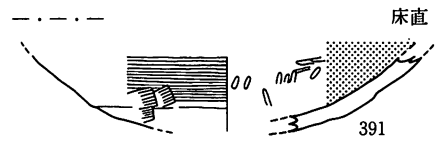
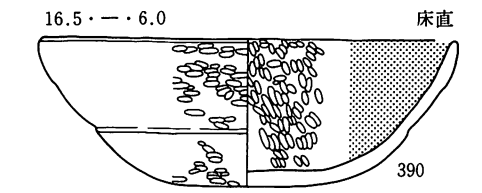
第129図 F-11住居址(遺構一I)



F-11住居址カマド埋土土層

1. 7.5Y R2/1 黒色 シルト質土 粘性あり、焼土の混入あり。
2. 7.5Y R2/1 黒色 粘性あり、多量の焼土ブロック混入。
3. 5Y R5/8 明赤褐色 焼土塊
4. 5Y R4/6~5/8 赤褐色~明赤褐色 シルト質土 焼土を混入
5. 7.5Y R4/4 褐色 シルト質土 非常に堅い、やや砂質。
6. 7.5Y R2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり、褐色シルト混入。

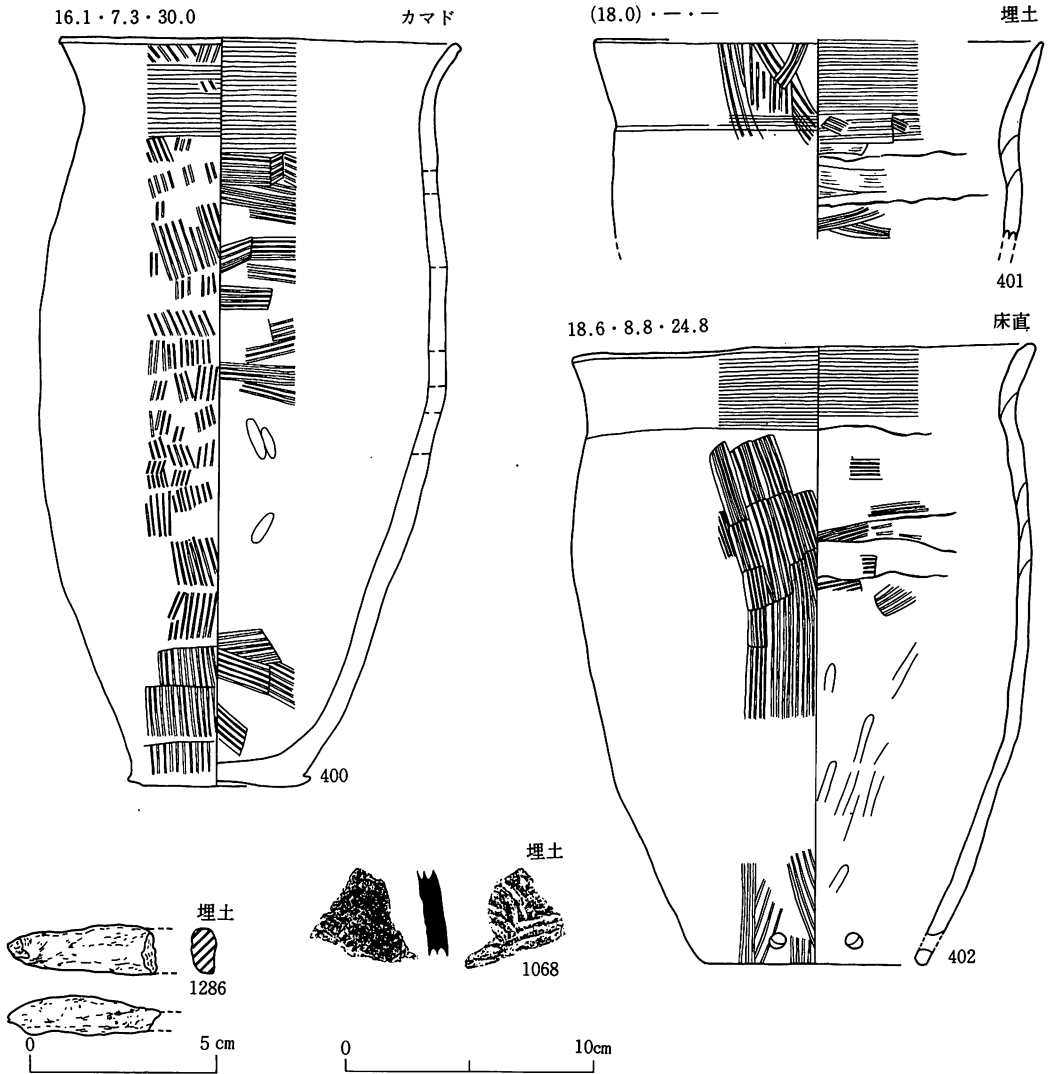
第130図 F-11住居址(遺構-2)



0 10cm

第131图 F—II住居址(遺物—I)





第132図 F-II住居址(遺物-2)

孔をもつ。調整技法は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がハケメ後一部スリケシ・内面はハケメ後ミガキである。

**須恵器**

1068は大甕の体部破片である。外面平行タタキ目・内面青海波文である。

**その他**

名称不明の鉄製品である。1286は断面が扁平で細長い形状をもつ。

(高橋与右エ門)

#### 45) F-12住居址

〔遺構〕(第133図、P L 27A)

本住居址は重複遺構もなく単独で検出された。

規模は東西2.3m・南北3.5mで壁高は0.5mを測り、壁は床面に対して115度の角度を示している。平面形は南北に長い若干歪んだ隅丸の長方形を呈し、主軸方向は不明であるが西壁が磁北に対して10度東に偏している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色等を呈するシルトで構成され、色調や混入物・粘性等で4層に細分されている。混入物としては、1層に炭化物粒、2層に細礫、3層に細礫と黒褐色のシルト粒、4層に黒褐色のシルト粒等があり、他に全層に酸化鉄の集積がみられる。粘性は各層によって差がある。床は地山の暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は凹凸もなくほぼ平坦で良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面では土坑は検出されていない。従って、柱穴をもたない住居址であろうと考えられる。

本住居址では明らかにカマドといえる遺構は検出されていない。しかし、床面中央で現地性の焼土が検出されたことから、カマドは付設せず地床炉をもつ住居址と考えられる。焼土範囲は0.59m×0.67mで、平面形は不整形を呈する。

〔遺物〕(第134図、P L 103B)

埋土内や床面直上で若干出土しているが、図化されたものはない。種類は土師器・須恵器があり、器種は甕形土器だけである。

##### 土師器

破片で10数片出土しているが、いずれもロクロ未使用成形のものである。器種は甕形土器だけであり、坏形土器を含まない。小破片であるため詳細は不明である。

##### 須恵器

大甕の破片が2ヶ出土している。1069は内外面とも平行タタキ目をもつが、外面は細く、内面は太いタタキ目である。1070は外面が平行タタキ目後カキ目で内面は青海波文である。

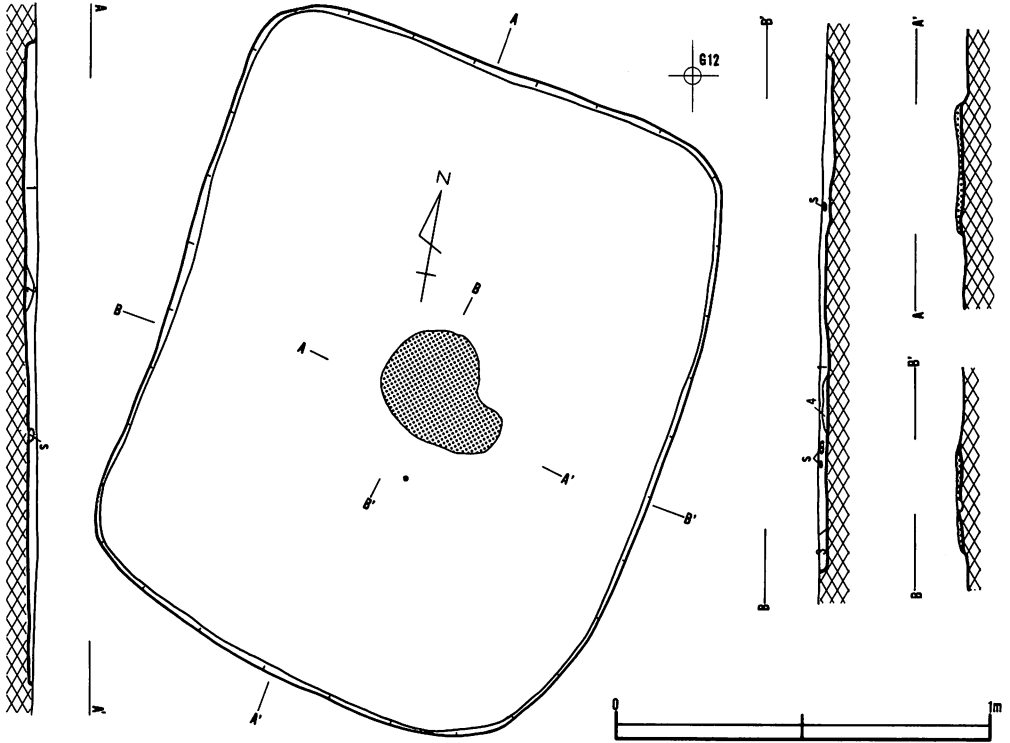
(吉田 洋)

#### 46) F-13住居址

〔遺構〕(第135・136図、P L 27B)

本住居址は重複遺構もなく単独で検出された。

規模は北西-南東4.4m・北東-南西4.3mで壁高は0.13mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は北西-南東にあり磁北に対して49度西



F-12住居址埋土土層

1. 7.5YR2/1 黒色 粘性あり、少量の水酸化鉄と炭化材が混入。
2. 7.5YR3/1 黒褐色 粘性あり、少量の水酸化鉄と微細礫が混入。
3. 10YR3/4 暗褐色 粘性少しあり、微量の細礫と少量の黒褐色土が混入、少量の水酸化鉄が混入。
4. 10YR3/4 暗褐色 粘性少しあり、少量の黒褐色土と水酸化鉄が混入。

第133図 F-12住居址(遺構)



第134図 F-12住居址(遺物)

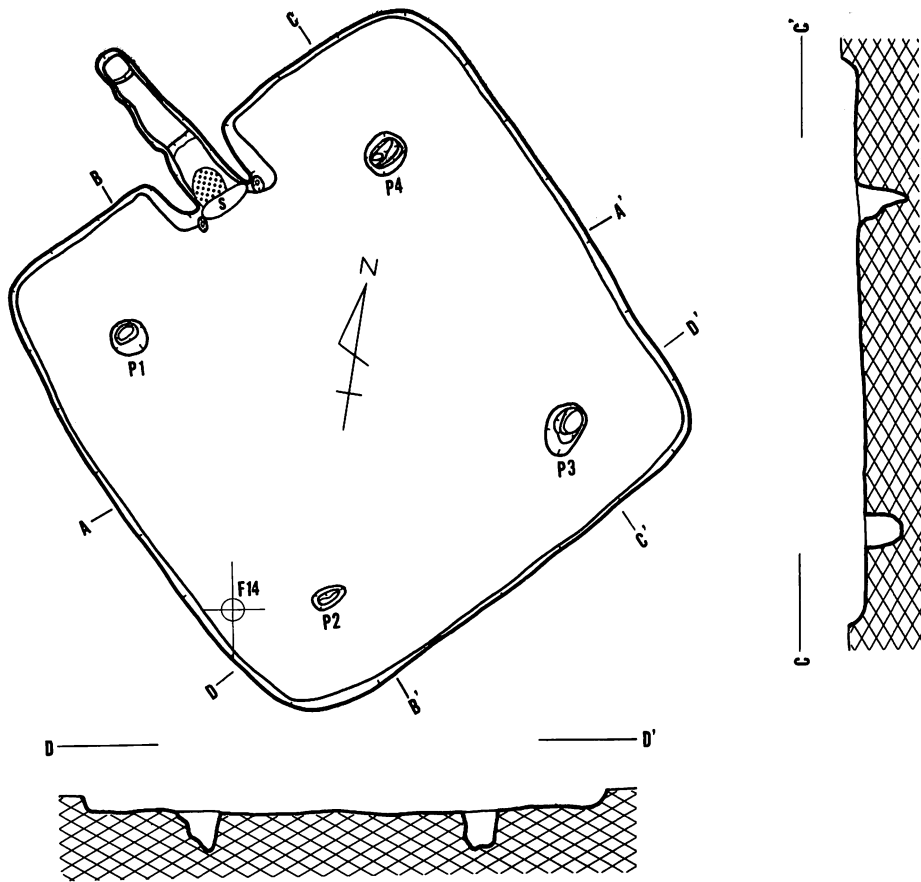
に偏している。埋土は黒色・黒褐色・褐色等を呈する粘土質のシルトで構成され、混入物や色調の変化によって8層に細分されている。混入物としては砂粒や褐色を呈するシルト粒や炭化物粒が観察され、他に1層～4層には酸化鉄の集積が観察されている。南隅部の埋土最下層には粒径10cm～30cm位の礫が混入し、ほとんどのものが床面に接している。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面はほぼ平坦で固く締まっているが、北東部に寄るほど若干高くなる傾向がみられ、高低差5cm位を測る。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>までの土坑が検出されている。これらの規模は径0.3m前後で深さ0.4m位を測り、いずれもほぼ同規模である。検出面での平面形はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>は長方形気味でP<sub>3</sub>は楕円形をそれぞれ呈し、底面では主軸方向に対して横長の長方形を呈している。柱痕跡はいずれの土坑にも観察され、それによれば柱は径10cm～15cm位の円柱と推定される。これらP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の性格は、本住居址の対角線上に位置することや規模がほぼ同じであることから、本住居址の柱穴を構成しているであろう。

カマドは北西壁で検出され、壁中央より0.1mほど西に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部のみであり、天井部は検出されていない。袖部は地山の削り出しによって構築されている。左右袖部の焚口付近には、焚口部を構成したと考えられる礫の抜き取痕が小土坑として検出された。小土坑の規模は、左側で0.13m×0.07m・深さ0.06m、右側は0.11m×0.09m・深さ0.05mを測る。焚口部床面には粒径47cm×17cmの細長い礫が左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、本住居址の焚口部は3ヶの礫で構成され、「冂」状に組み立てられたものと推定される。燃烧部内にはカマドに埋設された2ヶの土師器甕形土器が検出され、焚口部に向かって並んで横転していた。土器の大きさは、左側は体部中位～口縁部を欠失しているが残存部口径17.5cm・底径7cm・残存部器高20cmで右側は口縁部径17.8cm・底径6.6cm・器高20.3cmである。また、左側埋設土器底部付近の燃烧部床面には粒径6cm×4cmの礫が縦位で0.03mほど埋め込まれ、支脚として利用していた。燃烧部床面は焚口部付近より支脚付近までは床面より若干掘り窪められているが、焚口部構成礫の位置より奥壁に向かって緩やかな上がり勾配で奥壁に続き、煙道部とは0.04mの高低差で接続している。燃烧部の焼土は焚口部より支脚付近まで分布し、左側袖部の内壁にも焼成を受けた痕跡を残している。煙道部底面は平坦でほぼ水平である。煙出部には平面形が方形を呈する土坑が掘られている。

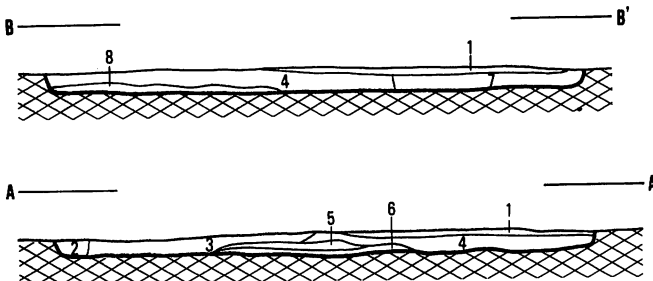
〔遺物〕(第137・138図、P L 103 C・104・105 A)

埋土内での出土は少なく、ほとんどのものは床面直上で出土している。特にカマド周囲での出土が多く、その中でもカマド右側袖部右脇での出土が多い。種類は土師器・須恵器・土製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・甗形土器・土製紡錘車がある。



F-13住居址埋土土層

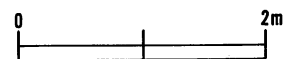
1. 7.5 YR 2/1 黒色 粘土質シルト よく締まっている、白色砂粒・鉄分が混入。
2. 7.5 YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト よく締まっている、径1~2mmの砂粒が少量と酸化鉄分の赤い微粒が混入。
3. 7.5 YR 2/1 黒色 粘土質シルト よく締まっている、白色砂粒と鉄分粒混入、褐色粘土小ブロック少量混入。
4. 7.5 YR 2/1~2/2 黒色~黒褐色 粘土質シルト よく締まっている、1~2mmの砂粒含む、鉄分あり。
5. 7.5 YR 1.7/1~2/1 黒色 粘土質シルト 粘性あり。
6. 7.5 YR 2/2~3/2 黒褐色 粘土質シルト
7. 7.5 YR 4/3~4/4 褐色 粘土質シルト よく締まっている、鉄分・白色砂・小石・礫が混入。
8. 7.5 YR 4/3~4/4 褐色 粘土質シルト よく締まっている、白色砂粒わずかに混入。



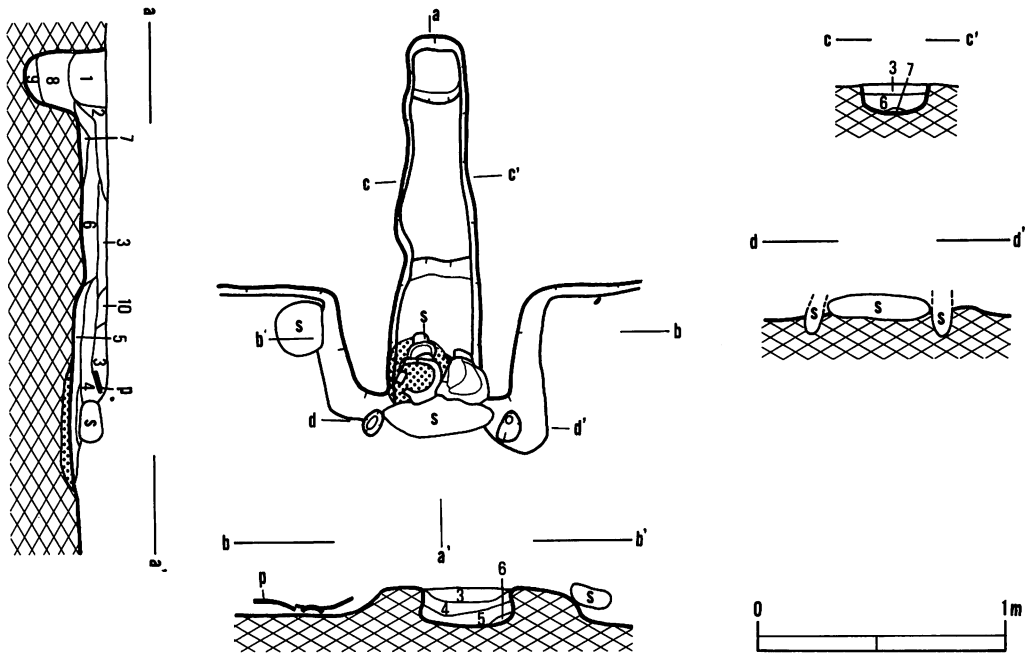
F-13住居址ピット計測値

長径×短径 深さ

P <sub>1</sub>	29cm×28cm	35cm
P <sub>2</sub>	27cm×15cm	34cm
P <sub>3</sub>	42cm×30cm	48cm
P <sub>4</sub>	35cm×29cm	32.5cm



第135図 F-13住居址(遺構一)



F-13住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂質シルト 堅くよく締まっている、多量の明色ブロックが斑状に混入。  
7.5YR 3/4 暗褐色
2. 7.5YR 2/2~2/3 黒褐色~極暗褐色 砂質シルト よく締まっている、少量の明色シルトブロックが斑状に混入。
3. 7.5YR 2/1 黒色 粘土質シルト 堅い、鉄分が混入。
4. 7.5YR 3/3~3/4 暗褐色 砂質シルト 堅い、粘土質シルトが少量混入。
5. 7.5YR 2/1~2/2 黒~黒褐色 粘土質シルト 焼土片を含む。
6. 7.5YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性あり。
7. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂質シルト 木炭粒をわずかに混入。  
7.5YR 4/6 褐
8. 7.5 YR 2/3 極暗褐色 砂質シルト よく締まっている、粘性あり。
9. 7.5YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト 少し軟らかい、粘性あり。  
5YR 5/8 明赤褐色
10. 7.5YR 3/3~3/4 暗褐色 砂質シルト 堅い、4層より砂っぽい。

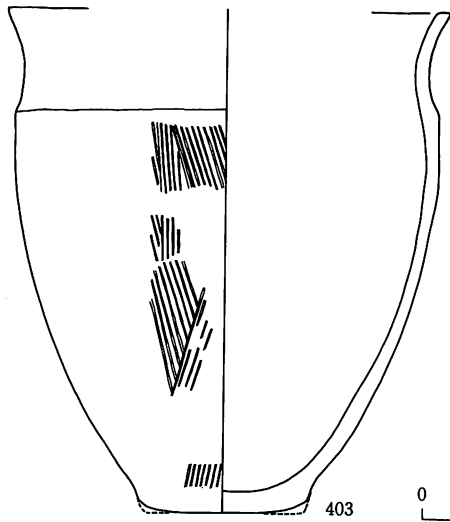
第136図 F-13住居址(遺構-2)

(17.8) · (6.6) · (20.3)

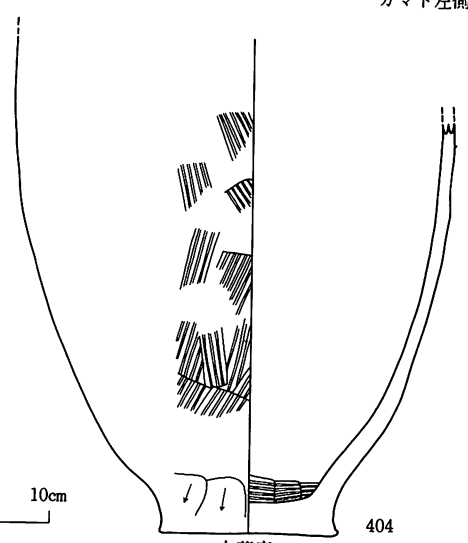
カマド右側

— · 7.0 · —

カマド左側



0 10cm



木葉痕

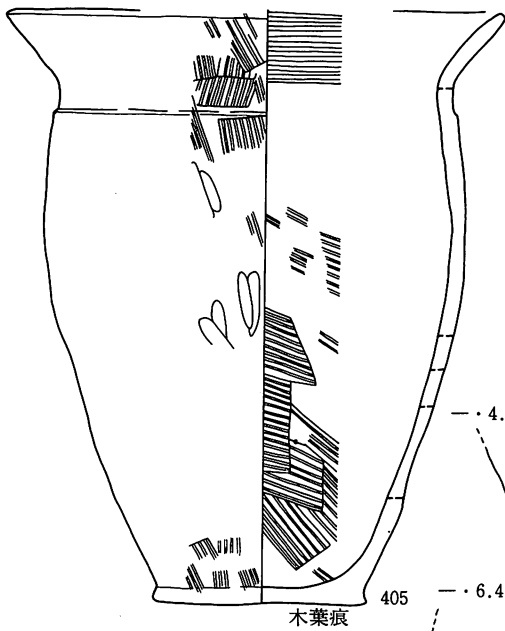
404

(20.0) · 8.6 · (23.9)

埋土

17.6 · (9.2) · (9.0)

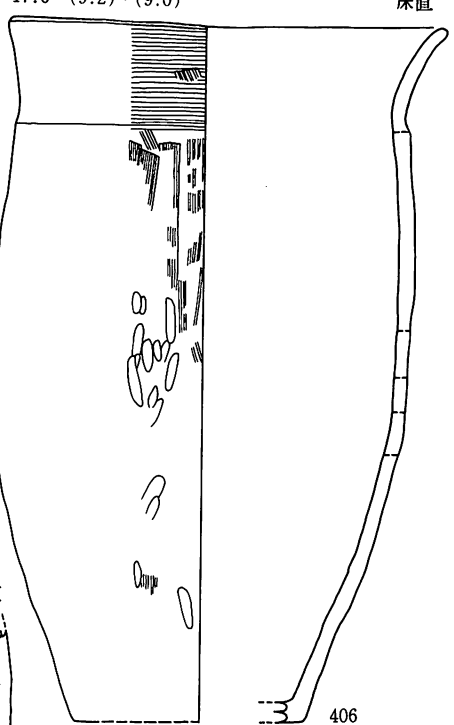
床直



— · 4.4 · —

埋土

408



— · 6.4 · —

床直

406

木葉痕

埋土



1071

埋土



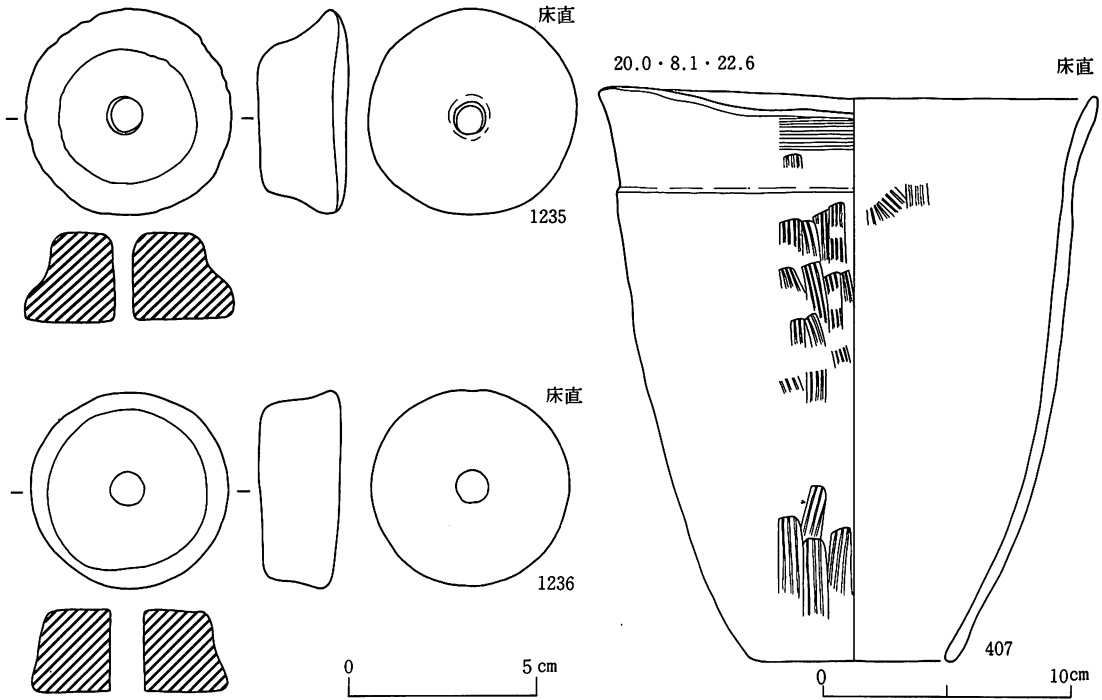
1072

埋土



1073

第137図 F-13住居址(遺物-1)



第138図 F-13住居址(遺物-2)

**土師器**

**坏形土器** 図化されていないが、体部の小破片が出土している。ロクロ未使用成形で、体部内外面に段をもち、底部は丸底である。調整技法は定かでないが、内面は黒色処理されている。

**甕形土器**(403~406・408・409) いずれもロクロ未使用成形で、器形は体部が若干膨らむものである。体部最大径は中位~上位にあり、頸部には段をもつもの(405)と、稜をもつもの(403・406)がある。口縁部は頸部段の位置より軽く外弯するもの(403)・軽く外弯気味に外反するもの(406)・段の位置より一旦直立し直線的に外反するもの(405)がある。口唇は平らなもの(403)・若干角張るもの(405)・丸味をもつもの(406)がある。底部周囲には突出をもつもの(404・405・409)ともたないもの(403・406・408)があり、底面は404・405は木葉痕をもつが他は平らにナデられている。

**甑形土器**(407) ロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を取り去った様な形を呈する無底型のものである。体部は外傾し軽く内弯しながら立ち上がり、頸部には軽い段があり、口縁部は外弯気味で口唇に移行し、口唇は丸味をもつ。調整技法は、口縁部外面ハケメ後ヨコナデで、体部外面ハケメ後スリケシであり、内面はハケメ後スリケシである。

**須恵器**



大甕の体部破片が出土している。1071・1073は外面に平行タタキ目・内面に青海波文をもつもので、1072は内外面とも平行タタキ目である。

#### その他

**土製品**(1235・1236) 2ヶとも土製の紡錘車である。いずれも形状が截頭円錐形に近似し、中心部に貫通孔をもつ。(遠藤勝博)

### 47) G-3 住居址

〔遺構〕(第139・140図、P L 28A)

本住居址は北東壁がH-2住居址-1と重複し、さらに、南東部がH-3溝跡と重複している。重複遺構との新旧関係は、重複する遺構はいずれも本住居址よりも新しい。

規模は南北3.9m・東西3.8mで壁高は0.20m～0.25mを測り、壁は床面に対して115度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北-南にあり磁北に対して12度西に偏している。埋土は黒褐色や極暗褐色を呈するシルトで構成され、良く締まり固い。混入物としては、褐色のシルト粒や炭化物粒がみられ、埋土最下層には粒径10cm～15cm位を測る礫の混入があり床面に接している。床は地山の極暗褐色のシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は平坦で良く締まり固い。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までの土坑が検出されている。規模は径0.20m～0.35mの範囲で、深さはP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は0.45m位と深く他は0.20m～0.33m位である。埋土はいずれも黒褐色を呈する粘土質のシルトで構成されている。柱痕跡は確認されていない。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本住居址の対角線上に位置することや、規模がほぼ同一であることから、本住居址の柱穴を構成するであろう。P<sub>5</sub>は柱穴状の土坑であることから、支柱穴であるかも知れない。なお、貯蔵穴状の土坑は検出されていない。

カマドは北壁で検出され、壁中央より0.4m西に偏して位置している。検出された部分は、袖部・燃烧部のみで、煙道部と煙出部はH-2住居址-1の削剝によって残存しないし、天井部は検出されていない。袖部は地山の削り出しによって構築されている。左右袖部とも焚口部付近には礫が縦位で各1ヶ埋め込まれている。礫の大きさは、左側で粒径40cm×15cmを測り、右側は頭部を欠失しているが残存粒径15cm×10cmである。焚口部床面には左右袖部を塞ぐ様な状態で、一部を欠失しているが残存粒径25cm×15cmの礫が1ヶ横転していた。このことから焚口部は3ヶの礫で、「冂」状に組まれていたものと推定される。また、燃烧部内で土師器甕形土器の破片が多く出土したが、この土器はカマドに埋設されたもので、その破片であろうと推定された。復元された土器の大きさは、左側が口径16.6cm・底径6.8cm・器高20.5cmで、右側が口径17.0cm・底径6.7cm・器高25.2cmを測り、その他に体部中位～口縁部を欠失しているが、残

存部口径14cm・底径7.4cm・残存器高7.5cmの底部が出土している。燃烧部は床面より若干掘り窪められ、焚口部の奥より緩やかな上がり勾配で奥壁に続き、煙道部とは段差がないらしい。また、燃烧部中央左側袖部内壁寄りに、頭部を欠失した残存粒径14cm×10cm位の礫が1ヶ5cmほど埋め込まれて支脚として利用されており、燃烧部焼土は焚口部より支脚石付近まで分布し、さらに、袖部の内壁にも若干観察される。煙道部や煙出部は残存していない。

〔遺物〕(第141・142図、P L 105 B・106 A)

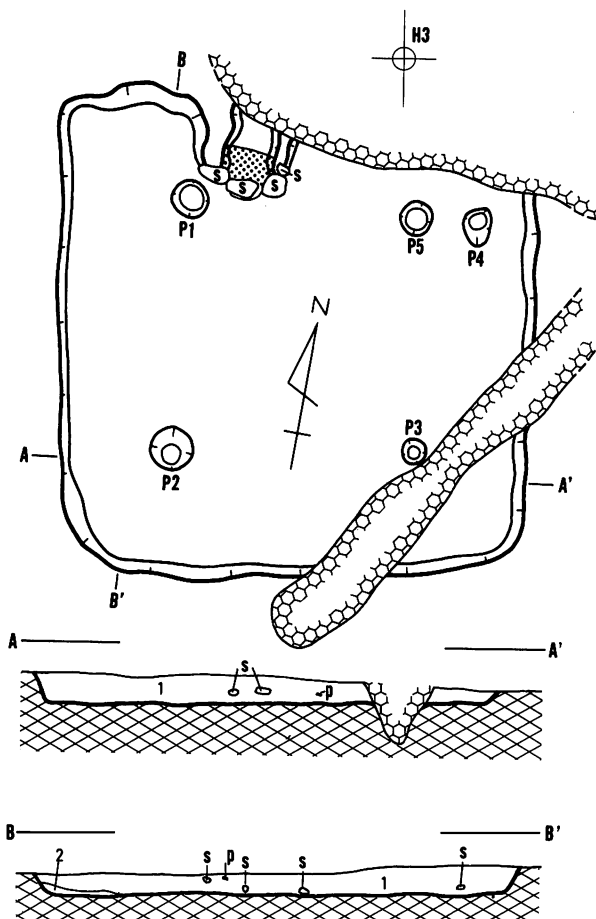
埋土内での出土は少なく、ほとんどは床面直上より出土している。その中でも北西隅部付近(3ヶ体)と南壁寄り(1ヶ体)それとカマド内(3ヶ体)で出土した。種類は土師器と石製品のみで、器種は坏形土器・甕形土器・甑形土器・鉢形土器・砥石がある。

### 土師器

**坏形土器**(410) この坏は重複するH-2住居址-1(ロクロ使用成形の土器を伴出)との切り合い部分で出土したロクロ使用成形のものであり、おそらくH-2住居址-1に伴うものであろう。底部切り離し技法は回転糸切り無調整で、内面に黒色処理はない。410以外にも破片では出土しているが、図化出来るものはない。それらのものはすべてロクロ未使用成形で、体部に段をもち底部が丸底のものらしい。

**甕形土器**(411~415) いずれもロクロ未使用成形のものである。器形は、底部より外傾する体部は内弯気味に立ち上がり、体部最大径の位置を中位~肩部にもちながら頸部で若干窄む。頸部には段をもつもの(411・413・415)ともたないもの(412)があり、口縁部は外反した後直立気味に曲折するもの(411)・直線的に軽く外反するもの(413)・外弯するもの(412・415)がある。口唇は平らなもの(411)・角張るもの(413)・丸味をもつもの(415)がある。底部周囲には突出をもつものだけであり、底面には木葉痕をもつもの(413・414)ともたないもの(411・415)がある。大きさでは大型(412・413)・中型(415)・小型(411)がある。調整技法は、口縁部の外面はヨコナデ(411・412・413)・ハケメ後ヨコナデ(415)・内面がヨコナデ(413・415)・ミガキ(411)・一部ヘラナデ(412)である。体部は外面がミガキ(411)・ハケメ後ミガキ(415)・ハケメ後スリケシ(412・413・414)、内面はヘラナデ後ミガキ(411)・ヘラナデ(412・414・415)・ナデやミガキ(413)である。

**甑形土器**(416・417) ロクロ未使用成形のもので、甕形土器の底部を取り去った様な形の無底型である。416は底部~体部中位まで残存する破片で、内外面ともミガキが入り、底部寄りに向かい合う様に貫通孔をもつ。417は、甕形土器の底部を取り甑として転用した痕跡をもつもので、体部上位が若干膨らみ、頸部で段をもって窄んでいる。口縁部は頸部段の位置より直線的に外反している。調整技法は、口縁部は外面ハケメ後ヨコナデ・内面ヨコナデ、体部は外面ハケメ・内面ヘラナデである。大きさでは416が大型で417は小型である。



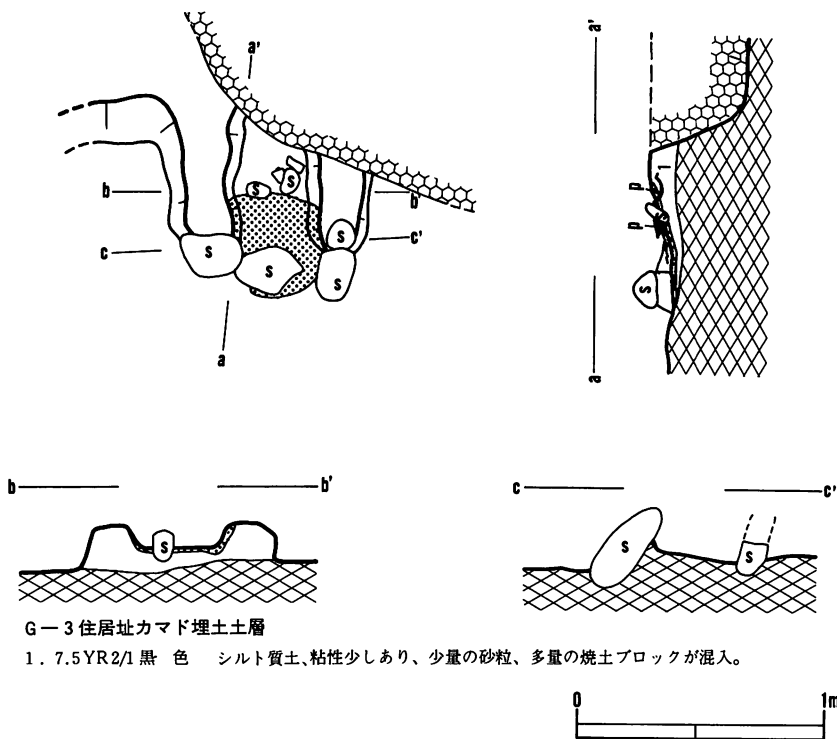
G-3 住居址ピット計測値

	長径	短径	深さ
P <sub>1</sub>	32cm	29cm	21cm
P <sub>2</sub>	35cm	33cm	50cm
P <sub>3</sub>	21cm	20cm	48cm
P <sub>4</sub>	30cm	27cm	34cm
P <sub>5</sub>	32cm	20cm	35.3cm

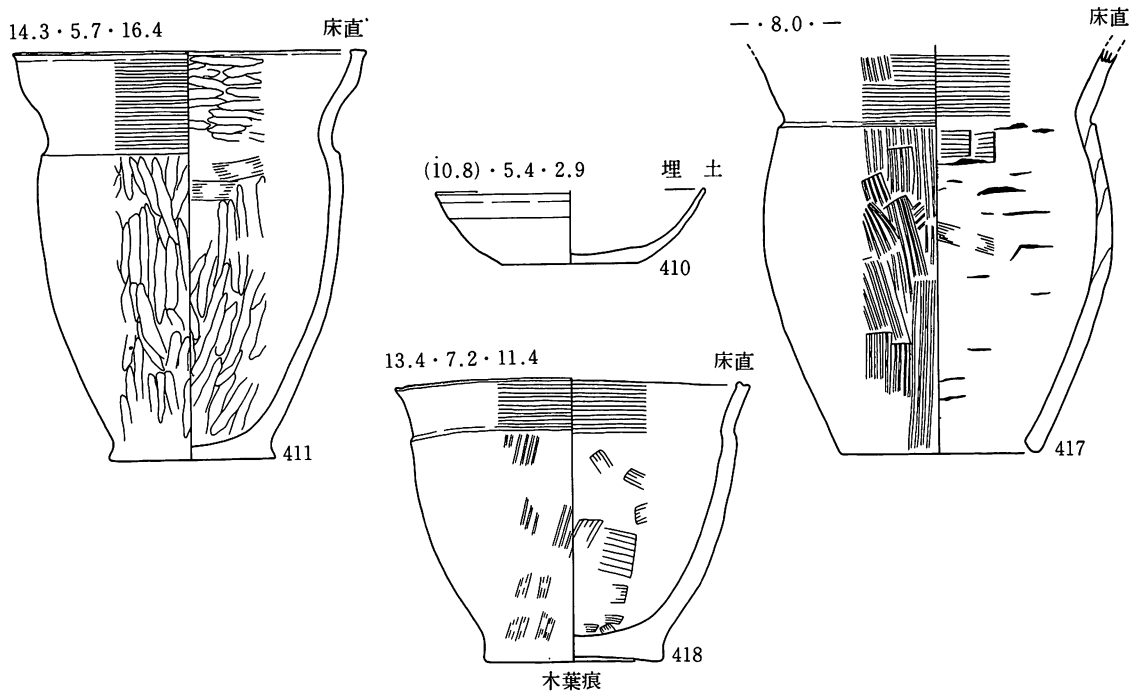
G-3 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土、堅くよく締まっている、褐色シルト粒・炭化物少々、河原石少々混入。
2. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質土、堅くよく締まっている、褐色シルト粒が多く混入。

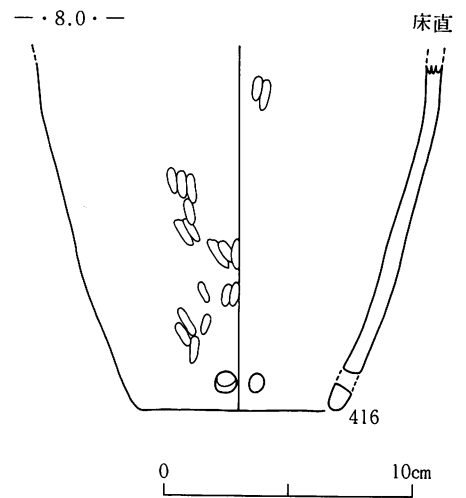
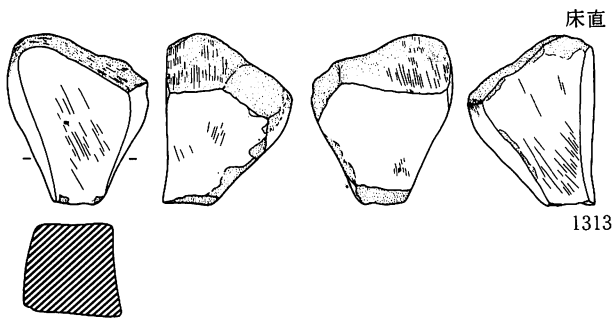
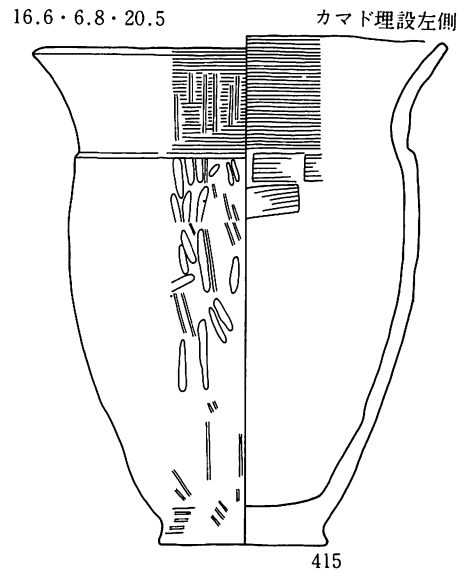
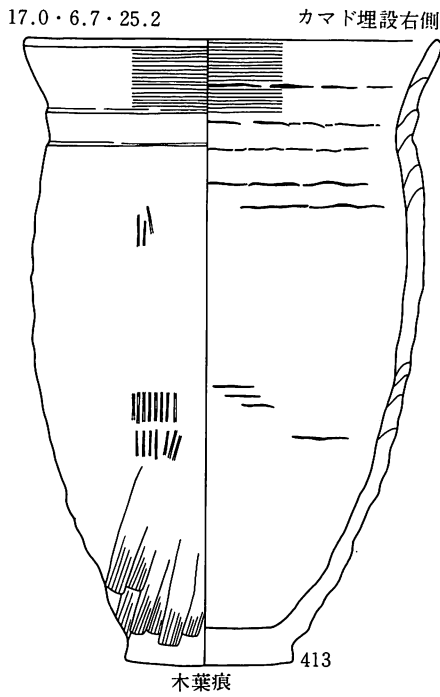
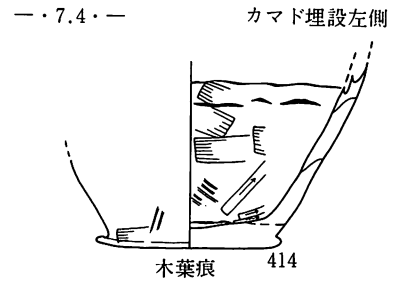
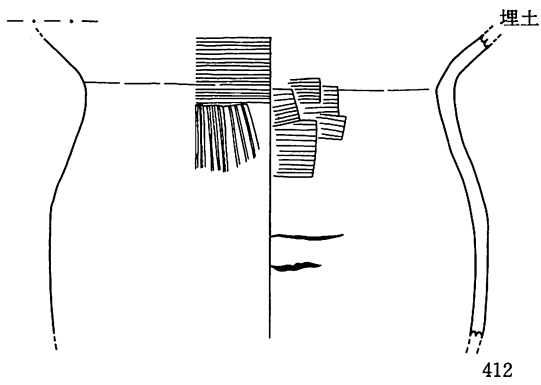
第139図 G-3 住居址(遺構一)



第140図 G-3 住居址(遺構-2)



第141図 G-3 住居址(遺物-1)



第142図 G-3住居址(遺物-2)

**鉢形土器**(418) ロクロ未使用成形で、器高より口縁部径が大きいものである。体部最大径を体部上端にもち、頸部には軽い段をもつ。口縁部は短かく頸部段の位置から直線的に軽く外反している。口唇は平らにナデられ凹み状の沈線をもつ。底部周囲に突出がなく、底面には木葉痕をもつ。調整技法は、口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ハケメ後スリケシ、内面ヘラナデである。

#### その他

**石製品**(1313) 4面に使用面をもつ小形の砥石である。本来は出土したものの約2倍の大きさであろうと推定され、使い減りによって中央より折損したものらしい。

(高橋与右エ門)

### 48) G-4住居址

〔遺構〕(第143・144図、P L 28 B)

本住居址は西側でF-3住居址-1・F-3住居址-2・B-7溝跡と、さらに、東側でH-4住居址と重複している。重複遺構との新旧関係は、F-3住居址-2は本住居址より古く、B-7溝跡とH-4住居址は本住居址より新しい遺構であることが判明しているが、F-3住居址-1については土層変化では明確にされていない。しかし、出土遺物の比較では本住居址の方が古い要素を具備していることから、本住居址の方が古い遺構であろうと推定される。

規模は東西4.0m・南北3.9mで壁高は0.45mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は東-西方向にあり磁北に対して95度東に偏している。埋土は黒色や黒褐色を呈するシルトで構成され、色調や混入物の違いによって6層に細分される。混入物としては、炭化物や褐色のシルト粒が観察され、さらに、2層と5層の間に砂粒状の白色浮石の堆積がある。また、埋土最下層には粒径10cm~30cmの礫が多く混入し、そのほとんどは床面に接している。床は地山の橙褐色を呈する粘性の強いシルトの混入した砂層で構築され、暗褐色のシルトを薄く貼って床面としている。床面は平坦で良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の土坑が検出されている。規模はそれぞれによって差があり、P<sub>1</sub>は長径0.9m・短径0.7m・深さ0.3m、P<sub>2</sub>は長径0.85m・短径0.8m・深さ0.30m、P<sub>3</sub>は長径1.15m・短径0.7m・深さ0.35m、P<sub>4</sub>は長径0.8m・短径0.6m・深さ0.15mである。P<sub>1</sub>の埋土は、暗褐色と黒褐色のシルトで構成され、色調によって2層に細分され、2層中に粒径10cm~15cmの礫が多く混入していた。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>はP<sub>1</sub>の埋土1層とほとんど差がなく、焼土や炭化物の多く混入した極暗褐色~黒褐色のシルトである。なお、P<sub>3</sub>は底面が2段になっており、低い面には焼土や炭化物の多く混入した暗褐色のシルトが堆積していた。P<sub>4</sub>は極暗褐色を呈するシ

ルトの単層で構成される。これら土坑の性格は、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>はカマド袖部の左側(P<sub>4</sub>)と右側(P<sub>3</sub>)にそれぞれ位置することから貯蔵穴の性格をもつであろう。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>はP<sub>3</sub>の規模とほぼ同じで埋土もまたほとんど差がない。このことから、本住居址に直接伴う土坑と考えられ、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>と同じく貯蔵穴としての性格が強であろう。

カマドは東壁で検出され、東壁中央より0.5mほど南に寄って位置している。検出された部分は、袖部・燃烧部・煙道部であり、煙出部は一部がH-4住居址によって削剥されている。袖部は基底を若干掘り窪め、極暗褐色や黒色のシルトを貼り付けて構築し、礫等の配置は全くない。燃烧部は床面より若干掘り窪められ、そのまま奥壁に続き、煙道部とは約0.2mの高差で接続している。燃烧部の焼土は前庭部～燃烧部ほぼ中央まで分布し、炭化物と混合している。煙道部は中央付近が若干高く、燃烧部と煙出部に向かって緩やかな下り勾配を示している。底面は凹凸もなく平坦である。煙出部は若干削剥されていることは前述の通りであるが、礫が1ヶ検出されているものの、土坑は検出されていない。

〔遺物〕(第145・146図、P L 106 B・107 A)

床面直上での出土は少なく、埋土内出土のものが多い。数量的にはいずれも少ない。種類は土師器・須恵器があり、器種は坏形土器・甕形土器が含まれている。

#### 土師器

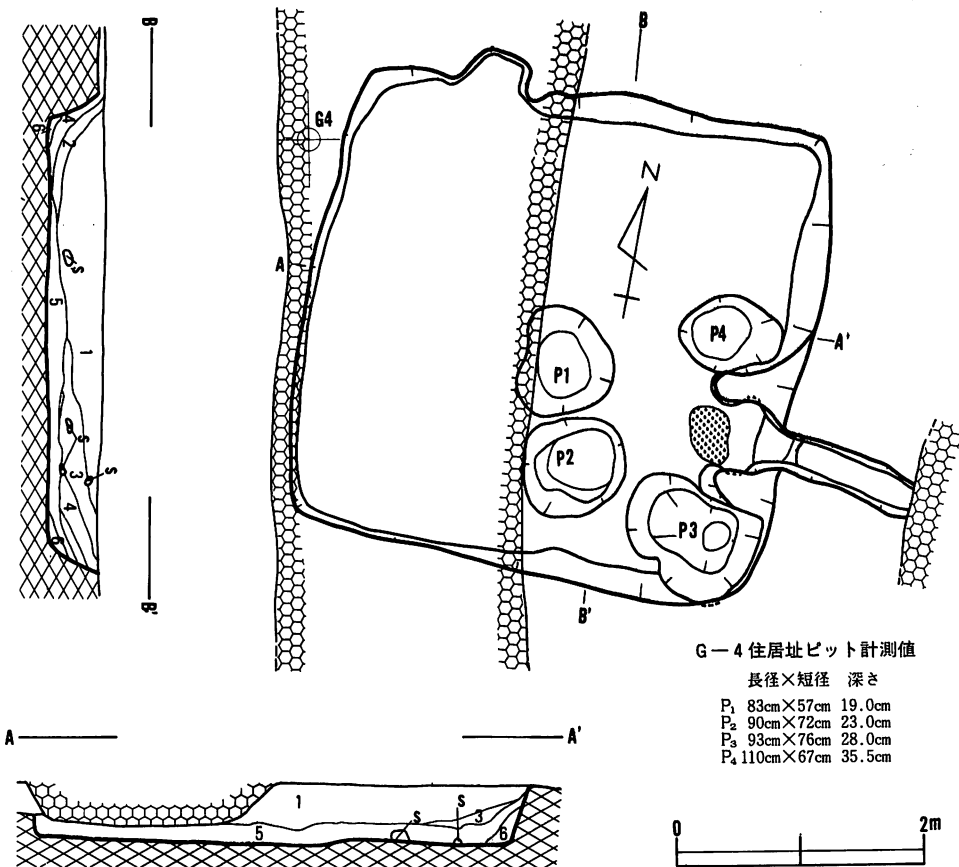
**坏形土器**(419～427) いずれもロクロ使用成形のもので、内面が黒色処理されるもの(419～422)とされないもの(423～427)が含まれている。底部切り離し技法はいずれも回転糸切りで、再調整されるもの(420～422)と無調整のもの(423～427)が含まれるが、内面黒色処理のものは1ヶ(419)を残して他は再調整されるが、内面無処理のものには再調整されるものはない。器形は、425を除くと内弯気味に外傾する体部をもち、口縁部が小さく外反する。大きさは、口径15cm～16cm位と比較的大きく、器高も深いものが多い。425は口径が8cm位と他より若干小さ目で浅いものである。

**甕形土器**(433) ロクロ使用成形のもので、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。器形は内弯気味に外傾する体部をもち、体部最大径は肩部にある。頸部で若干窄み、大きく外反する短い口縁部をもつ。口唇部は上方への挽き出しによって受口状を呈する。

#### 須恵器

**坏形土器**(428～432) ロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切り無調整のものである。器形は土師器のそれと同じである。

**甕形土器**(1074～1077) 大甕(1074・1077)や甕(1076)・瓶(1075)かと思われる破片である。1074は外面平行タタキ目・内面に放射状のタタキ目をもつ。1075は外面に平行タタキ目後カキ目をもち、内面はロクロナデである。1076は内外面ともにロクロナデである。1077は外面

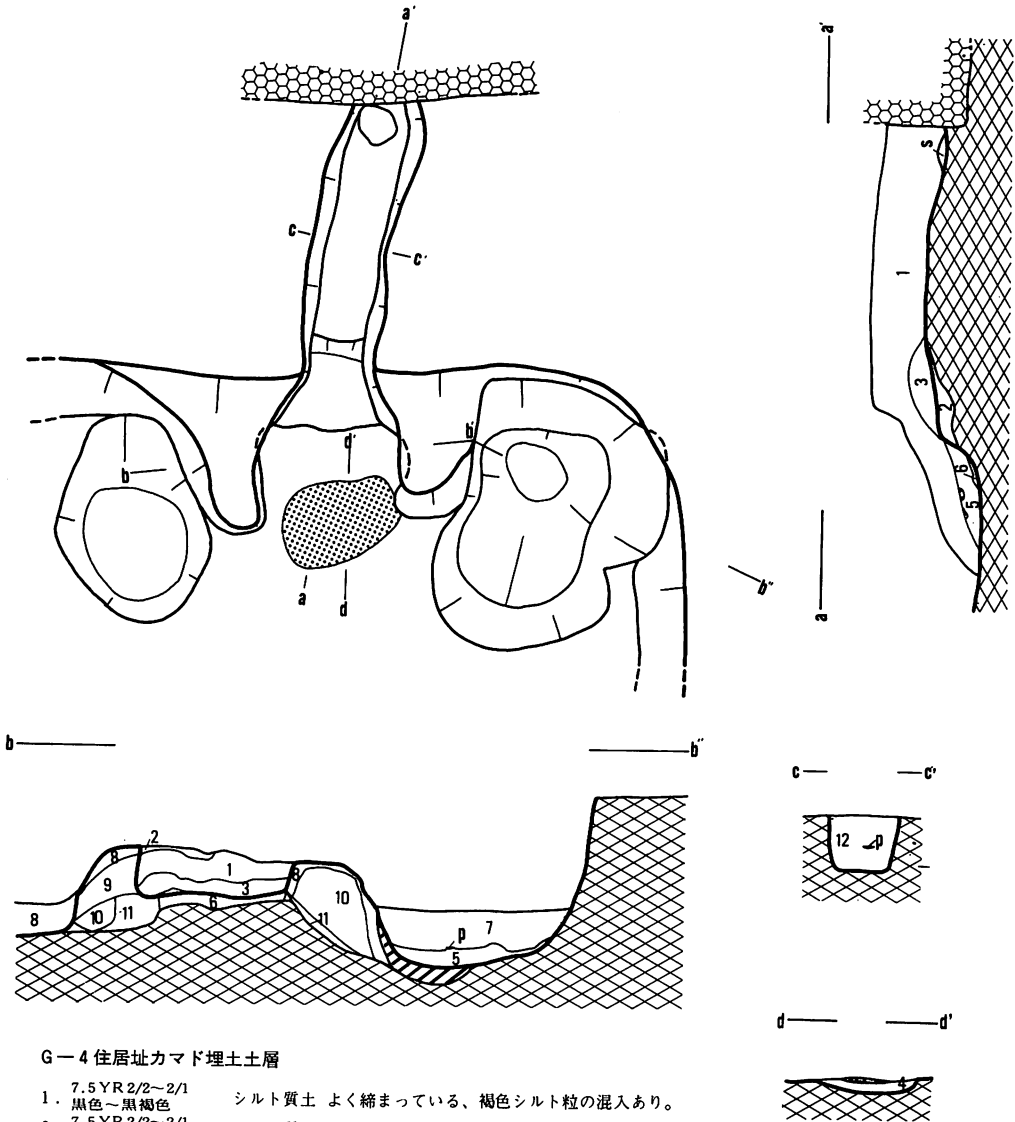


G-4 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 堅くよく締まっている、粘性あり、炭化物少量混入。
2. 7.5YR2/1 黒 色 シルト質土 よく締まっている、粘性あり、多量の褐色シルトと少量の炭化物混入。
3. 7.5YR2/1 黒 色 シルト質土 よく締まっている、粘性あり、褐色シルト粒と炭化物が少量混入。
4. 7.5YR2/1 黒 色 シルト質土 よく締まっている、粘性あり。
5. 7.5YR1.7/1 黒 色 シルト質土 よく締まっている、粘性あり、多量の炭化物と褐色シルト粒が混入。
6. 7.5YR1.7/1 黒 色 シルト質土 よく締まっている、粘性あり、褐色シルトが多量に混入。

第143図 G-4 住居址(遺構一I)

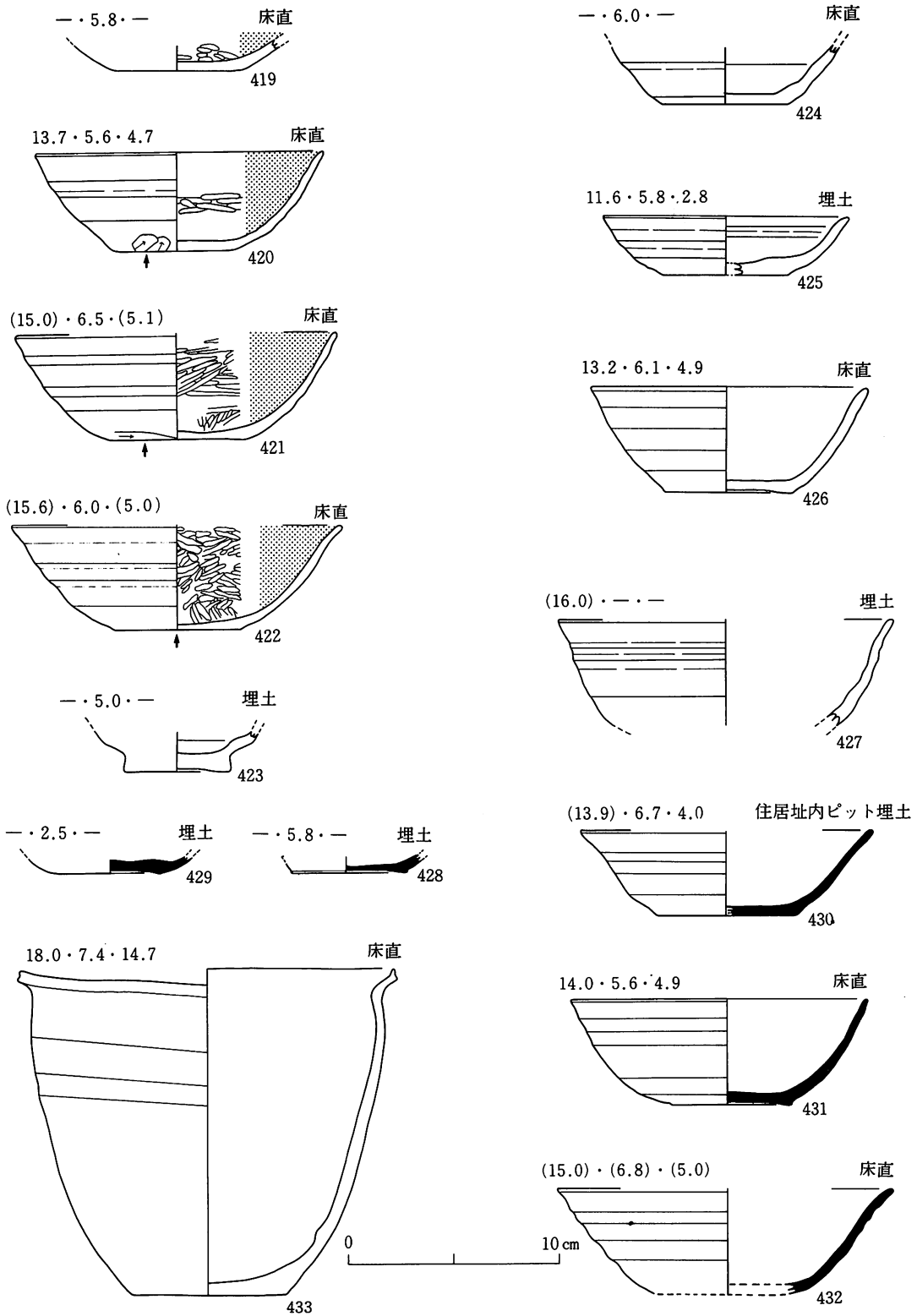




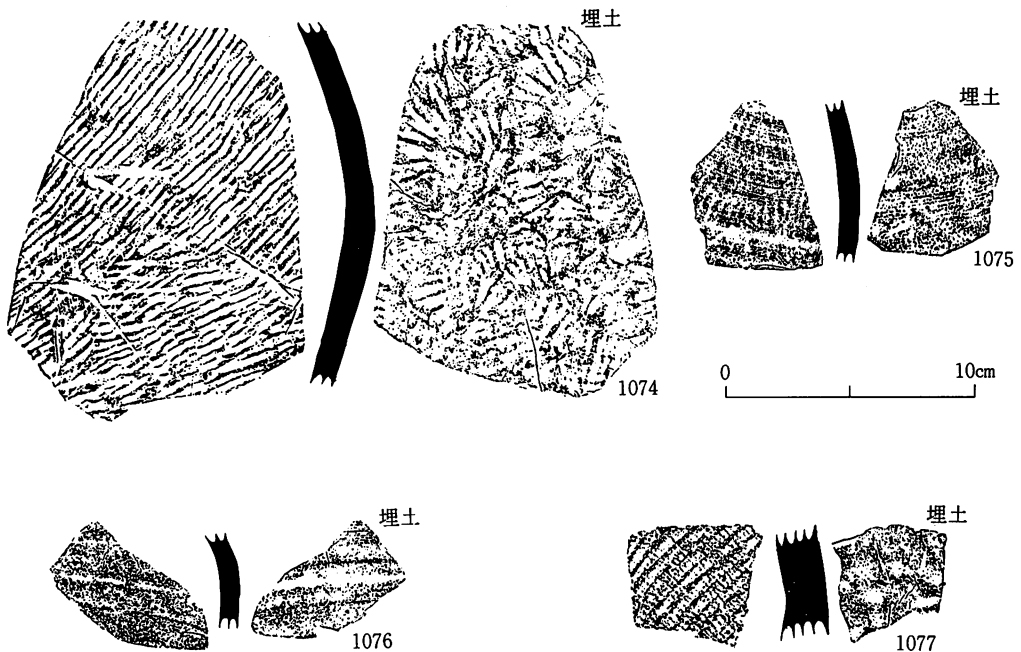
G-4 住居址カマド埋土土層

- |                             |   |
|-----------------------------|---|
| 1. 7.5 YR 2/2~2/1<br>黒色~黒褐色 | シルト質土 よく締まっている、褐色シルト粒の混入あり。                   |
| 2. 7.5 YR 2/2~2/1<br>黒色~黒褐色 | シルト質土 よく締まっている。                               |
| 3. 7.5 YR 3/3 暗褐色           | シルト質土 締まりなし、焼土や褐色シルト粒が混入する。                   |
| 4. 7.5 YR 3/4 暗褐色           | 地山。   |
| 5. 7.5 YR 2/3 極暗褐色          | シルト質土 締まっている、炭化物・焼土が多量に混入。                    |
| 6. 7.5 YR 5/6 明褐色           | 砂質シルト 貼床のシルト                                  |
| 7. 7.5 YR 2/3 極暗褐色          | 褐色シルトと黒色シルトが斑状に混入。                            |
| 8. 7.5 YR 2/3 極暗褐色          | シルト質土 粘性ややあり、褐色シルト粒が多量に混入。                    |
| 9. 7.5 YR 3/3 暗褐色           | 粘性なし。   |
| 10. 7.5 YR 2/1 黒色           | シルト質土 粘性あり、焼土ブロックが混入。                         |
| 11. 7.5 YR 2/3 極暗褐色         | シルト質土 締まっている、粘性少しあり、黒色シルト・褐色シルト・暗褐色シルトが斑状に混入。 |
| 12. 7.5 YR 3/4 褐色           | シルト質土 褐色シルト粒の混入あり。                            |

第144図 G-4 住居址(遺構-2)



第145図 G-4 住居址(遺物-I)



第146図 G-4 住居址(遺物-2)

に平行タタキ目・内面凸面の当て道具痕をもつものである。

(高橋与右ヱ門)

#### 49) G-6 住居址

〔遺構〕(第147図、P L 29A)

本住居址は北西隅部がF-5住居址群と重複し、さらに、南西部がF-6住居址・中央部がB-7溝跡とB-7掘立柱建物跡とそれぞれ重複している。重複遺構との新旧関係は、本住居址は重複するいずれの住居址よりも古い。

規模は南北6.1m・東西5.6mで壁高は約0.3mを測り、壁は床面に対して113度の角度を示している。平面形は主軸方向に若干長い縦長の隅丸長方形を呈し、主軸方向は北-南にあり、磁北に対して16度西に偏している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色を呈するシルトで構成され、色調や混入物によって4層に細分されている。混入物としては褐色のシルト粒や炭化物粒が観察される。また、埋土最下層には粒径10cm~40cm位の礫の混入があり、ほとんどのものは床面に接している。なお、南壁寄りの床面に炭化物の分布する範囲が確認されているが、量も少なく、分布範囲も限定されることから、焼失住居址というほどではない。床は地山の黒褐色を呈する

シルトによって構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は平坦で良く締まり固い。なお、本住居址の床は、E-7溝跡によって北壁寄りの一部が削剝されている。壁溝は検出されていないが、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の位置より東壁に向かって溝が掘られている。溝は長さが約1m・巾約0.15m・深さ0.05m～0.10mの規模である。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>の土坑が検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の規模はほぼ径0.3m位で、深さはP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>が約0.5mでP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は約0.3mである。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は前者より径0.27m・0.2mで深さはいずれも0.1m位である。P<sub>7</sub>は0.5m×0.4mで深さ0.07mであり、P<sub>8</sub>は0.8m×0.8mで深さ0.11mである。P<sub>9</sub>は径0.6mで深さ0.25mである。P<sub>10</sub>は0.65m×0.4mで深さ0.10mである。P<sub>11</sub>は1.0m×0.8mで深さ0.3mである。平面形はP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>11</sub>は円形や楕円形、P<sub>8</sub>・P<sub>10</sub>は隅丸方形や隅丸長方形気味を呈している。P<sub>1</sub>～P<sub>10</sub>の埋土はいずれの土坑も大差がなく、黒褐色のシルトで構成されており、褐色のシルト粒が混入し、粘性が強い。P<sub>11</sub>は、本住居址の床面より0.07m上位で周囲に炭化物粒が散布する現地性焼土が検出され、その下位に位置している。従って、この土坑の埋土最上位に現地性焼土をもち、焼土下の埋土は黒褐色の粘土質シルトで構成され、炭化物を多く混入している。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本住居址の対角線上に位置していることから、本住居址の柱穴を構成するであろう。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>に比較して浅いものの規模や平面形はほぼ同様であり柱穴状を呈しているが、本住居址との対応関係は不明である。もしかすると支柱穴であるかも知れない。P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>10</sub>はロクロ使用成形土師器や須恵器の破片を出土しており、本住居址と直接的に関連する土坑ではなく、精査の結果G-6掘立柱建物跡の柱穴掘り方であった。P<sub>9</sub>は埋土内よりロクロ未使用土師器の破片が出土し、床面出土のものと同接合していることから、本住居址に伴う土坑であり、貯蔵穴の役割をもつであろう。P<sub>11</sub>は前述の様に、埋土の確認面が本住居址の床面より上位であり、本住居址より時間的に新しい時期に属するであろう。しかし、出土遺物はすべてロクロ未使用成形のものであることから、所属時期は本住居址と大差のない時期に求められるであろう。

本住居址では明らかにカマドといえる施設は検出されていない。しかし、B-7溝跡と重複する北壁寄りの床面で現地性焼土が検出され、他には壁際での焼土の検出はないことから、この焼土を本住居址に伴うカマド燃焼部の残痕であろうと推定した。従って、他の袖部や煙道部・煙出部はB-7溝跡によって削剝されたものであろう。焼土は北壁中央より0.35m東に寄って位置し、範囲は0.4m×0.45mである。

〔遺物〕(第148・149・150図、P L 107 B・108・109 A)

床面直上や埋土内で比較的多く出土している。しかし、B-7溝跡との重複部分にはほとんど残存せず、西壁寄りでの出土が多かった。北壁寄りでの出土は少ない。種類は土師器・須恵器・土製品・石製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・甑形土器・短頸壺・土製丸玉・名

称不明土製品・砥石である。

### 土師器

**坏形土器**(434～438) いずれもロクロ未使用成形で、体部に段や稜をもち底部が丸底や平底風丸底のものである。口縁部は体部段や稜の位置より大きく外反し、上端部で小さく内弯する。口唇部は丸味をもつ。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ(436)やヨコナデ一部ミガキ(434)で、底部はヘラケズリ(434)やヘラナデ(435・436・438)である。内面にはいずれもミガキが入り、さらに、黒色処理されるもの(434～438)と無処理のものがある。

**甕形土器**(439～454) いずれもロクロ未使用成形である。全体的な器形は体部が若干膨らむもの(439・445・446・452)と球胴型のもの(454)があり、さらに、頸部に段をもつもの(440・452)とともたないもの(444・453)がある。体部最大径の位置はいずれも中位や下位にある。大きさではあまり大きなものはなく、他の住居址のものと比較すると中型・小型のものが多い。口縁部は頸部より直線的に外反するもの(440・444・453)と軽く外弯気味に外反するもの(452)があり、口唇は角張るもの(444・452)と丸味をもつもの(439・440・453)がある。底部周囲には突出をもつもの(440・441・444～447・449～451・454)とともたないもの(442・443・448・452)があり、底面には450が木葉痕をもち、他は良くナデられている。調整技法は、口縁部外面はヨコナデ(439)やハケメ後ヨコナデ(440・444・452・453)があり、体部の外面はハケメ(444・451・452)やハケメ後スリケシ(440・441・443・446・453)・ケズリ(445)・ハケメ一部ミガキ(454)である。内面は、口縁部ヨコナデ(439・444・452)・ハケメ後ナデ(453)で、体部はハケメ(441・445・452・453)・ヘラナデ(439・440)・ハケメ後ヘラナデ(443・446・451)がある。

**甑形土器**(455) ロクロ未使用成形のもので、鉢形土器の底部に複数の穴を明けた様な形の多孔型のものである。体部は内弯気味に外傾し、上位ではほぼ直立気味となり、上端部で若干内弯する。底部は丸底風で10ヶの丸い貫通孔をもつ。調製技法は、外面が口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリで、内面はハケメ後スリケシである。

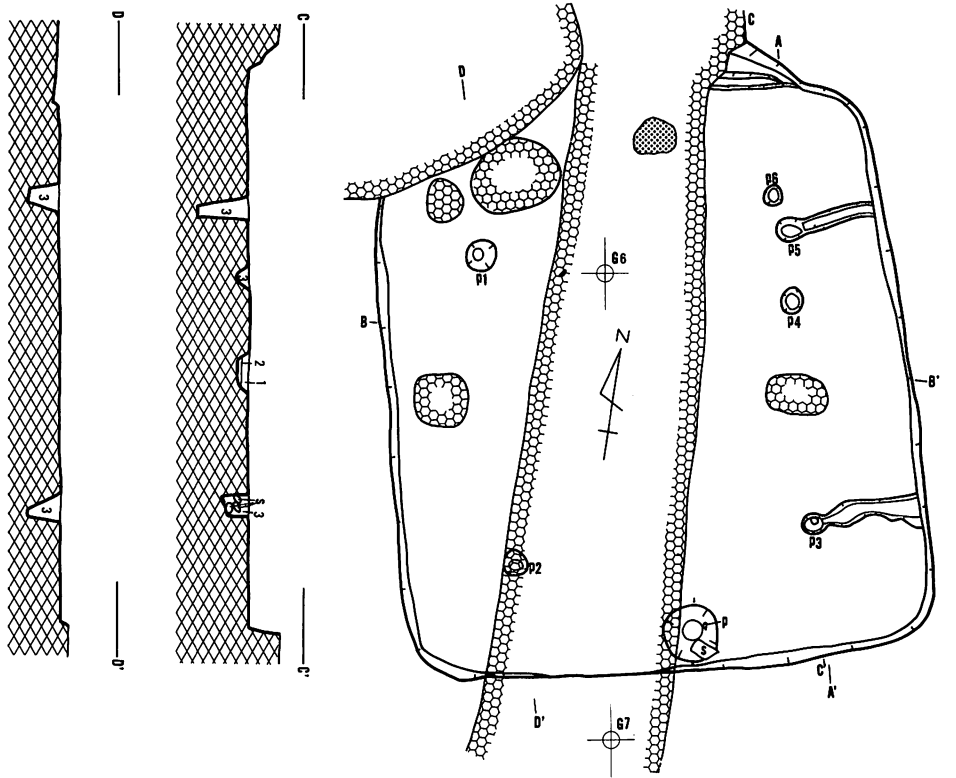
### 須恵器

**短頸壺**(456) ロクロ使用成形されたもので、底部が丸底で球形状の体部をもっている。肩部には一条の沈線が全周している。頸部～口縁部を欠失しているが、全体的な器形からみて短頸壺であろうと考えられる。調整技法は、底部に丹念なヘラケズリやヘラナデがみられる以外はロクロナデのみである。

**大甕**(1078) 大甕の体部破片である。外面に平行タタキ目・内面に青海波文をもつ。

### その他

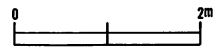
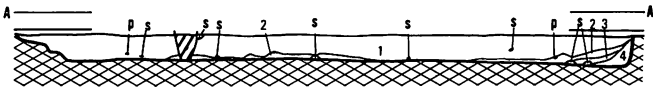
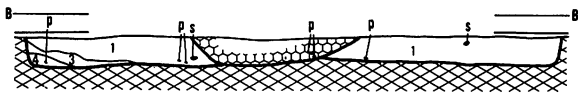
**土製品**(1249) 一部分が残存しているので名称が定かでないが、把手付土器の把手部分か



G-6 住居址ピット計測値

長径×短径 深さ

P <sub>1</sub>	35cm×32cm	53cm
P <sub>2</sub>	30cm×25cm	36cm
P <sub>3</sub>	25cm×25cm	29cm
P <sub>4</sub>	30cm×25cm	58cm
P <sub>5</sub>	28cm×24cm	12cm
P <sub>6</sub>	21cm×21cm	12cm



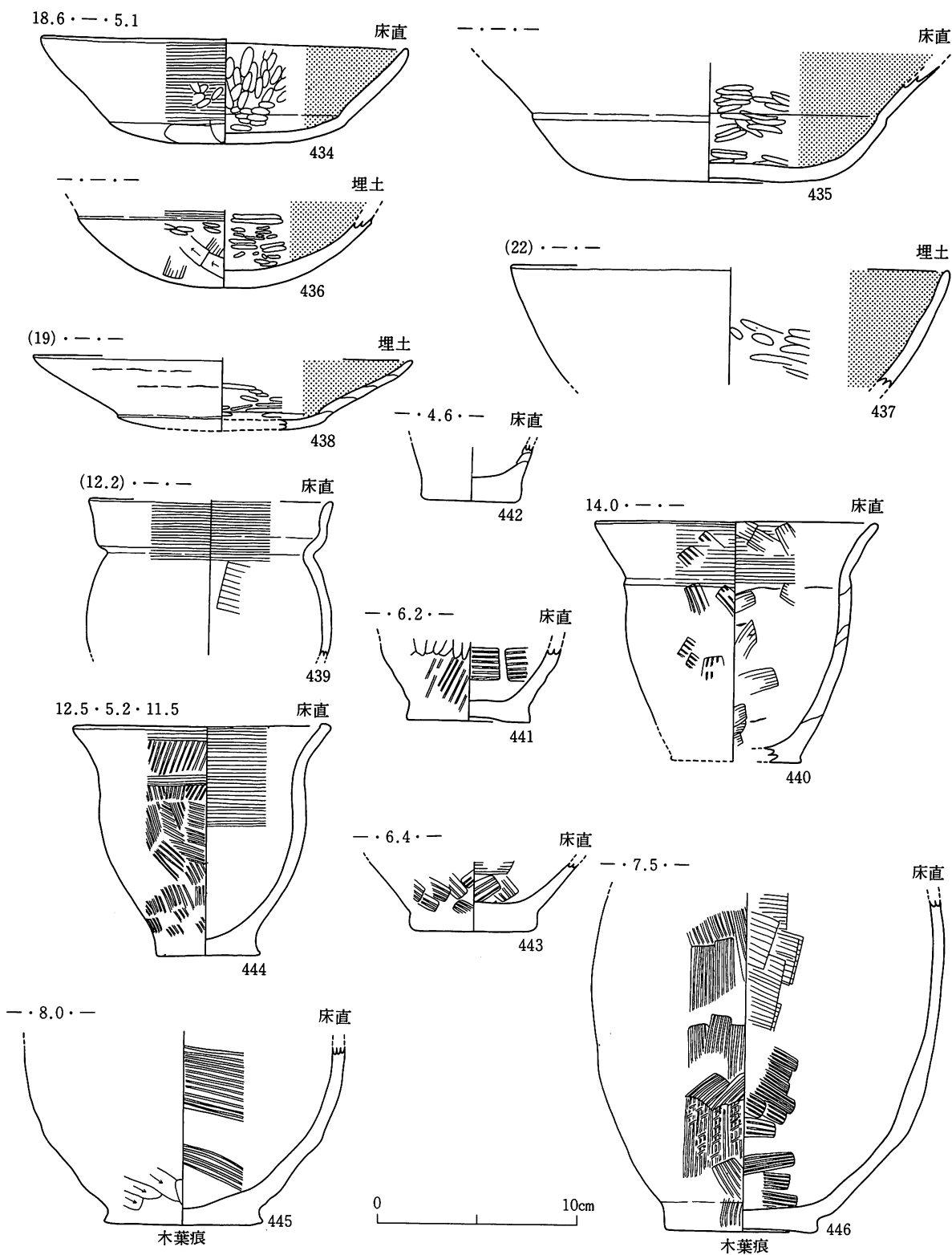
G-6 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 微量の炭化物と褐色シルト粒が混入。
2. 7.5YR2/1 黒色 粘土質シルト 褐色シルト粒が混入。
3. 7.5YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 多量の褐色シルト混入。
4. 7.5YR2/1 黒色 粘土質シルト 褐色シルト微量混入。

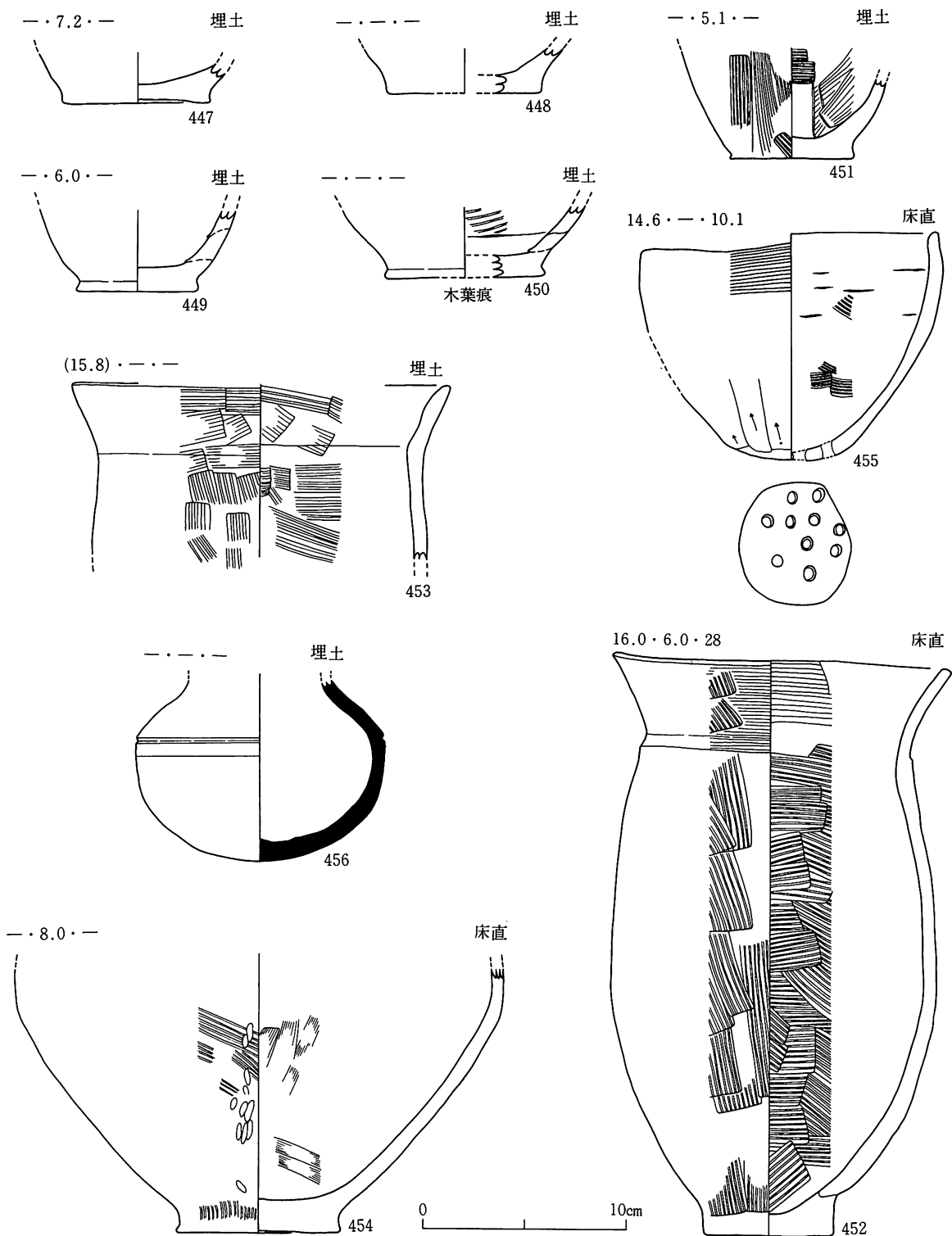
G-6 住居址ピット埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土
2. 7.5YR2/2 黒褐色 褐色シルトが斑状に混入。
3. 7.5YR2/2 黒褐色 粘性あり、褐色シルトブロックが多量に混入。

第147図 G-6 住居址(遺構)

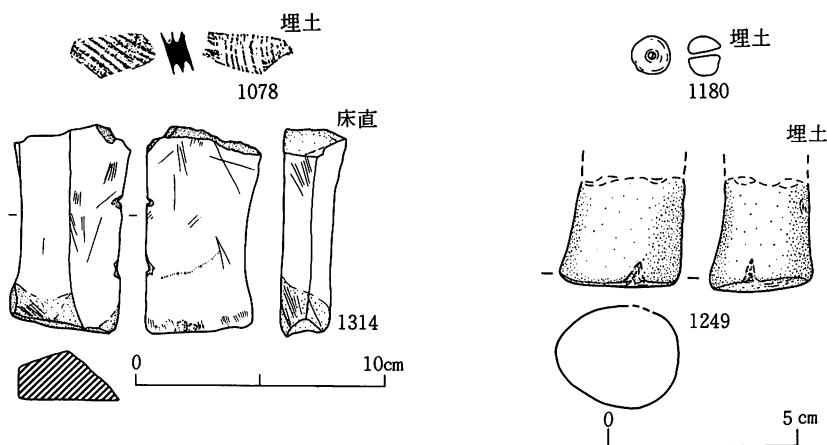


第148図 G-6住居址(遺物-1)



第149図 G-6住居址(遺物-2)





第150図 G-6住居址(遺物-3)

とも推定される。断面が不整円形である。

石製品(1314) 4面に使用面をもつ砥石である。

(高橋与右エ門)

#### 50) G-8住居址-1

〔遺構〕(第151・152図、P L 29 B)

本住居址は遺構検出作業中にはその存在が確認されなかったが、G-8住居址-2の精査中にロクロ使用成形の土師器を出土する一画が検出され、さらに、カマドが検出されるに及んで本住居址の存在が確認された。従って、本住居址全体がG-8住居址-2の範囲内にある。なお、G-8住居址-2以外にG-9住居址とも重複しており、これら重複遺構との新旧関係はG-8住居址-2より新しく、G-9住居址より古い。

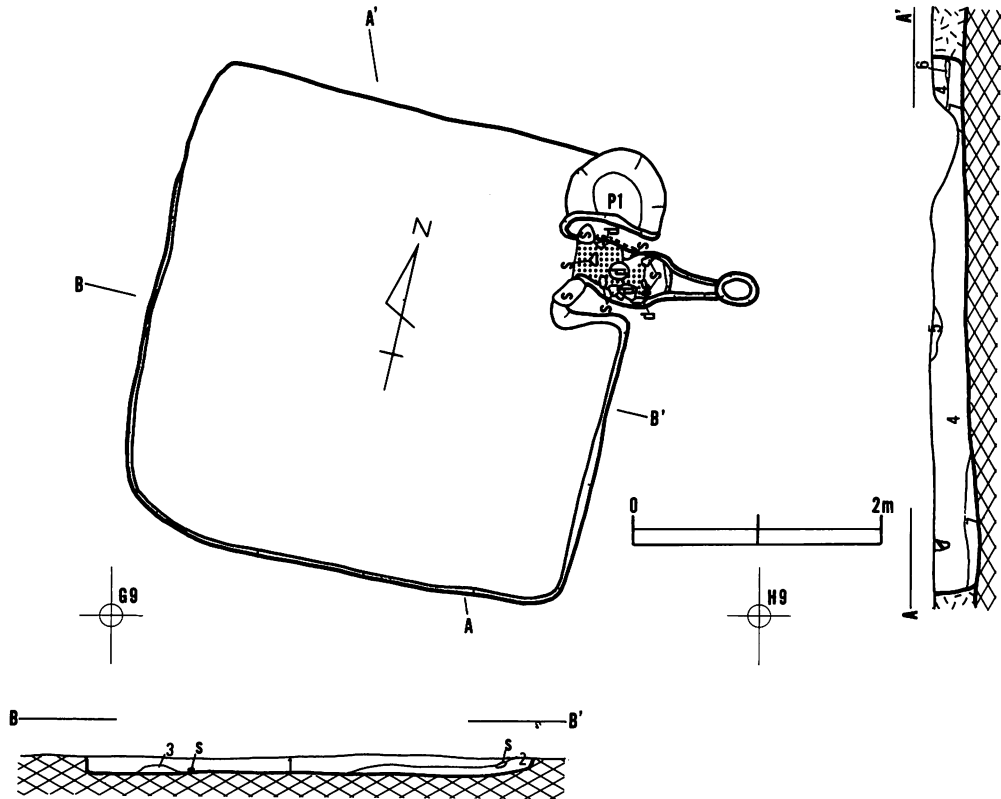
規模は東西3.8m・南北3.6mで壁高は0.25m位を測り、壁は床面に対してほぼ100度の角度を示している。平面形は隅丸のほぼ方形を呈し、主軸は東-西方向にあり磁北に対して90度東に偏している。埋土は褐色・暗褐色・黒色等を呈する粘性のあるシルトで構成され、色調や混入物によって5層に細分されている。混入物としては、炭化物粒・褐色のシルト粒・焼土粒がある。床は、北側と東側は地山の褐色を呈する細礫混じりの砂質シルトで構築されるが、他の部分はG-8住居址-2の埋土によって構築され、いずれも貼床せずそのまま床面としている。床面には若干小起伏があり、特に北東部分は地山の細礫が露出していることから、それが著しい。しかし、全体的な床面の高低差はほとんどなく、良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>の土坑が検出されている。規模は0.75m×0.5mで、深さは0.12mを測る。埋土は黒色を呈するシルトの単層で構成されている。この土坑の性格は、カマド左側の北東隅部に位置していることから、本住居址の貯蔵穴であろう。

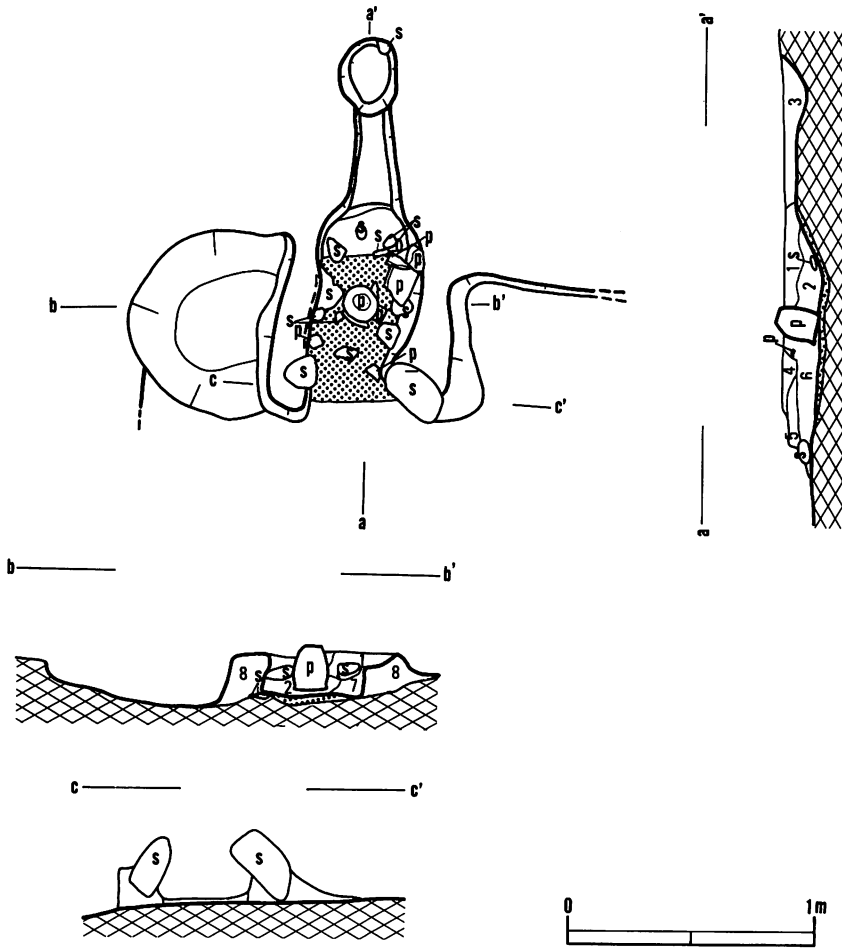
カマドは東壁で検出され、壁中央より1.0mほど北に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は褐色のシルト粒を含む黒褐色のシルトを貼り付けて構築しているが、基底部の掘り込みはない。焚口付近には、左右袖部とも細長い礫が縦位で埋め込まれている。礫の大きさは左側袖部で25cm×10cm、右側袖部は30cm×15cmで、お互いに向かい合う様に内傾している。燃烧部底面は床面とほぼ同位面で続くが、奥壁寄り若干低くなり、煙道部とは緩やかな傾斜面で接続している。燃烧部の焼土は焚口部付近より奥壁まで観察される。燃烧部中央やや奥の底面には口径14.4cm・底径7.4cm・器高16.2cmの小型土師器甕形土器が1ヶ倒立で置かれ、支脚として利用していた。煙道部底面はほぼ平坦で、煙出部には浅い窪みがある。

〔遺物〕(第153・154図、P L 109 B・110 A)

床面直上や埋土で出土しているが、破片が主体であり完形となるものは少なかった。種類は土師器・須恵器・石製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・壺形土器・砥石がある。



第151図 G-8住居址一I(遺構一I)



第152図 G-8住居址-1(遺構-2)

G-8住居址-1カマド埋土土層

1. 10YR2/1 黒色 粘性あり、少量の炭化物・焼土粒が混入。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 粘性あり、多量の焼土と炭化物がブロック状に混入、
3. 7.5YR2/1 黒色 軟らかい、粘性あり、粘土質シルトと炭化物を多量に混入。
4. 5YR2/2 黒褐色 軟らかい、少量の炭化物と焼土を混入。
5. 7.5YR2/1 黒色 粘性あり、多量の炭化材・草木灰を混入。
6. 5YR2/2 黒褐色 軟らかい、粘性あり、少量の炭化物・焼土・草木灰を混入。
7. 7.5YR2/1 黒色 粘性あり、多量の粘土質シルトと少量の炭化物が混入。
8. 5YR2/1 黒褐色 粘性あり、少量の粘土質シルトと炭化物を混入。

G-8住居址-1ピット計測値

長径×短径 深さ  
P<sub>1</sub> 75cm×57cm 23cm

G-8住居址-1埋土土層

1. 7.5YR2/1 黒色 シルト質土 粘性あり、微量の炭化物が混入。
2. 5YR2/1 黒褐色 粘性あり、少量の炭化物、微量の焼土を混入。
3. 7.5YR4/4 褐色 軟らかい、粘性あり、炭化物が微量に混入。
4. 7.5YR2/1 黒色 よく締まっている、粘性あり、炭化物が微量に混入。
5. 10YR3/3 暗褐色 粘性なし、砂が多量に混入。
6. 7.5YR4/4 褐色 粘性あり、炭化物が微量に混入。
7. 7.5YR2/1 黒色 堅くよく締まっている、粘性あり、炭化物と粘土質シルトが微量に混入。

## 土師器

**坏形土器**(457～461・1079) いずれもロクロ使用成形で、内面黒色処理のもの(459～461)と無処理のもの(457・458)がある。底部切り離し技法はいずれも回転糸切り無調整である。体部は内弯気味に外傾し、口縁部は小さく外反するもの(457・459・460・461)と直立気味のもの(458)があり、口唇は丸味をもつ。1079は口縁部～体部の破片であるが、内面黒色処理され、外面に「キ」印が付されている。なお、印は焼成後に付されたものである。調整技法はロクロナデだけである。

**甕形土器**(462～469) いずれもロクロ使用成形のものである。器形では体部が若干膨らむもの(463・464・468)とそうでないもの(462・466・467・469)があり、体部最大径の位置は、前者が中位・後者は頸部付近にもつ。大きさでは大型(465～469)と小型(463・464)がある。口縁部は短かく外反しているが、口唇部は削がれて先細りとなるもの(467・469)・角張るもの(466・468)・挽き出されて縁帯状を呈するもの(462～464)がある。いずれの底部も周囲に突出はなく、463・464の切り離し技法は回転糸切り無調整であるが、465はナデによる再調整によって切り離し技法は不明である。調整技法は、大型のものは体部中位以下にヘラケズリやヘラナデが入るが、小型のものには再調整のものを含まない。

## 須恵器

**坏形土器**(470～472) いずれもロクロ使用成形で、直線的に外反する体部をもつ。底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。

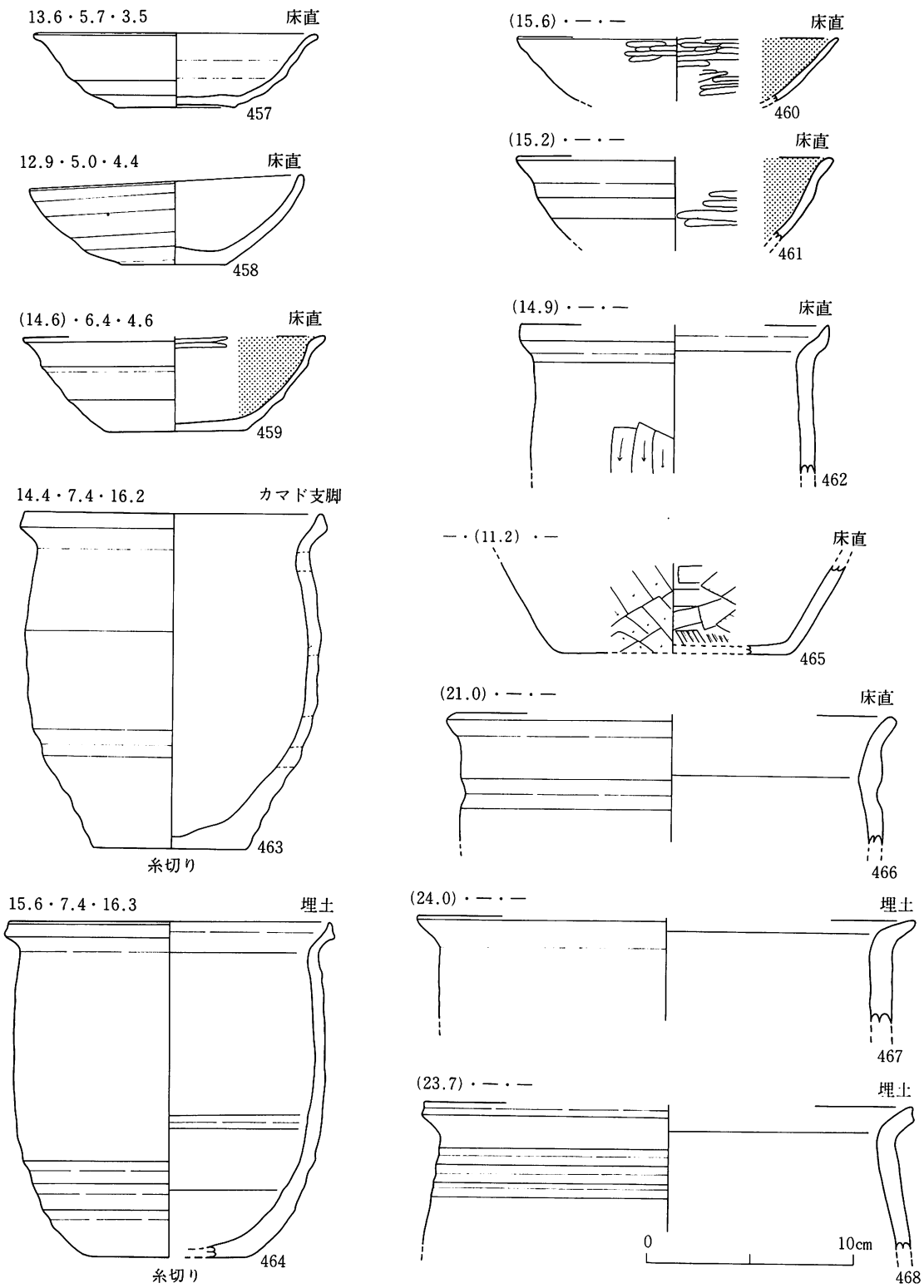
**甕形土器**(473・474) ロクロ使用成形のもので、いずれも破片である。473は肩部～底部を欠失しているが体部が若干膨らみ、頸部で大きく窄む器形をもつ。口縁は短かく頸部より外反して口唇部に移行し、口唇は上方に挽き出されて受口状を呈している。ロクロナデだけで調整される。474もロクロ使用成形のもので体部下位～底部を残存している。底部切り離し技法はヘラナデによって不明である。調整技法は内外面ともにヘラナデやヘラミガキが入る。

**壺・瓶形土器**(475・476・1080～1083) ロクロ使用成形のものである。475は口縁部破片であるが、器種は壺であろう。口唇は内削ぎによって外側に向かって傾斜している。476は底部～体部下位を残存しているが、高台が付されていることから長頸瓶であろう。高台は底面外縁に貼り付けで付され、「ハ」字状を呈している。底部切り離し技法は、高台貼り付けの際の指ナデによって消されているため不明である。内外面ともにカキ目による調整がみられる。1080～1083はいずれも体部の破片であるが、1080は外面ヘラケズリ・内面カキ目、1081～1083は外面平行タタキ目で内面が凸面当て道具のものである。

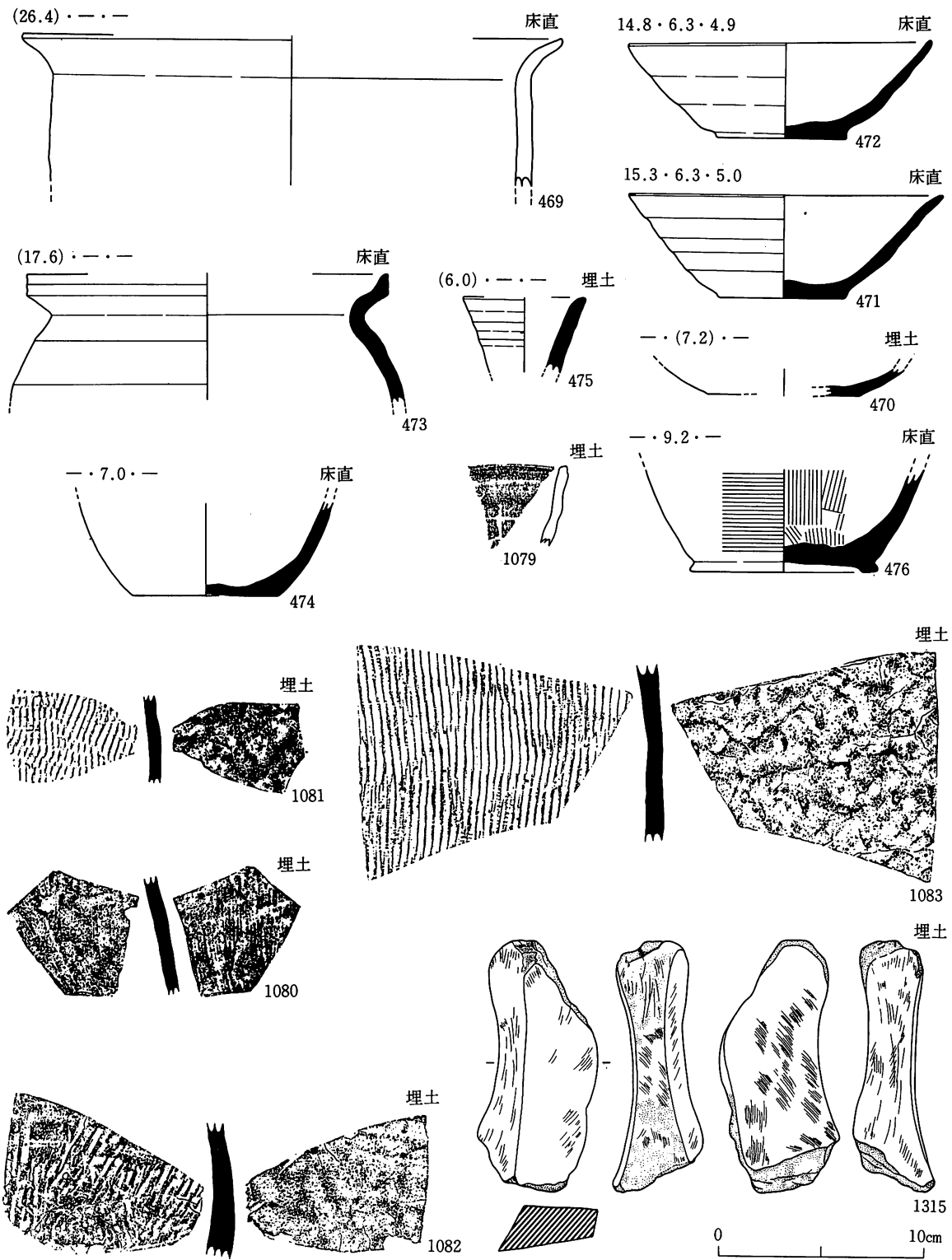
## その他

**石製品**(1315) 4面に使用面をもつ砥石である。使い減りによって中央部が凹んでいる。

(吉田 洋)



第153図 G-8住居址-I(遺物-I)



第154图 G-8住居址-1(遺物-2)

## 51) G-8 住居址-2

〔遺構〕(第155・156図、P L 30)

本住居址はほぼ同位置でG-8住居址-1と重複し、さらに、南壁部分がG-9住居址と、また、北西隅部がB-7溝跡とそれぞれ重複して検出された。重複遺構との新旧関係は、重複するいずれの住居址よりも本住居址が古い。G-9住居址と重複する南壁部分は、本住居址の床面も若干削剝されている。

規模は北南6.9m・東西7.1mで壁高は約0.3mを測り、壁は床面に対して約110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北北西-南南東方向にあり、磁北に対して17度西に偏している。埋土は褐色・黒褐色・黒色等を呈するシルトで構成され、色調や混入物によって7層に細分されている。混入物としては褐色のシルト粒や炭化物粒が多く観察され、全体的に粘性の強い土質である。埋土最下層～床面直上には粒径15cm～20cm位の礫が混入している。また、北東隅部と西側の壁寄りの床面では現地性焼土や炭化物の堆積が観察されているが、量的にも少なく焼失住居址とは考えにくい。北側部分の床は地山の細礫が混入した褐色の砂質シルトで構成され、南半部分はやはり地山の黒褐色のシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は北半部分には小凹凸がみられるものの、全体的にみるとほぼ平坦で良く締まり固いが、北西隅部に向かって緩やかな下り勾配を示し、約0.1mの高低差がある。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の土坑が検出されている。規模は、P<sub>1</sub>が径0.35m×0.35mで深さ0.47m、P<sub>2</sub>は径0.3m×0.3mで深さ0.57m、P<sub>3</sub>は径0.29m×0.29mで深さ0.51m、P<sub>4</sub>は径0.25m×0.25mで深さ0.38mをそれぞれ測り、平面形は円形や楕円形を呈する。埋土はいずれの土坑も黒褐色で粘性の強いシルトで構成され、混入物の種類や量の多少によって、P<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>は2層に細分されている。混入物としては、炭化物・焼土・骨片・礫・褐色の粘土質シルト粒等があり、他に酸化鉄の集積も観察される。柱痕跡は確認されていない。これらP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の性格は、本住居址の対角線上に位置していることや、規模もほぼ近似していることから、本住居址の柱穴を構成するであろう。

カマドは北北西壁で検出され、壁中央より0.2m西に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃焼部・カマド埋設土器・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されなかった。袖部は基底部を若干掘り窪め、左右ともに粒径25cm×10cm～40cm×20cmの扁平で細長い礫を各4ヶづつ、縦位で密着する様に約0.05m位埋め込み、その周囲に黒褐色を呈する粘土質のシルトを貼り付けて構築している。礫はいずれも向かい合う様に内傾している。燃焼部は焚口部より次第に緩やかな上がり勾配で奥壁に続き、煙道部とは段差で接続している。燃焼部内にはカマドに埋設された2ヶの土師器甕形土器が正立状態で検出されている。土器の大きさは、左側で

は口縁部径20.0cm・底径8cm・器高27.8cm、右側は口縁部を欠失しているが残存部口径17.2cm・底径7.2cm・残存器高3.3cmである。燃烧部の焼土は焚口部より奥壁の0.2m手前まで観察され、層厚も0.1mと厚い。煙道部底面は平坦で、煙出部も同位面である。煙出部は煙道の巾より広い円形を呈している。

〔遺物〕(第157・158・159・160・161図、P L 110B・111・112・113)

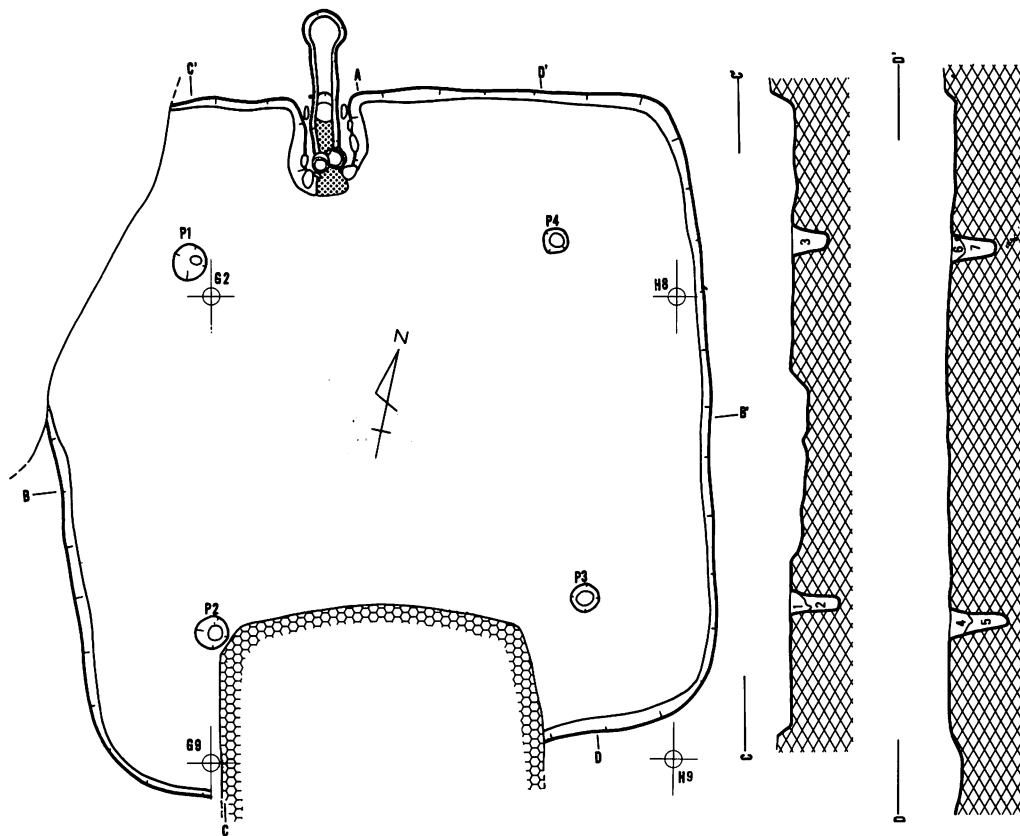
本住居址は掘り込みも深いことから、埋土内や床面直上より多量の遺物が出土している。特に、カマド付近の床面より多く出土している。出土状態では、カマド左側より环形土器・右側より甕形土器・甌形土器が集中している。また、東壁中央よりやや北寄りの位置より土製勾玉11ヶ・土製丸玉14ヶが床面直上より集中して出土している。なお、G-8住居址-1やG-9住居址との重複部分からは、本住居址に関連する遺物は全く出土していない。種類は土師器と土製品のみで、器種では环形土器・甕形土器・甌形土器・小型土器・土製勾玉・土製丸玉・土製紡錘車がある。

### 土師器

**环形土器**(477～483) いずれもロクロ未使用成形で、体部に段や稜をもち、底部丸底のものである。体部は段の位置より直線的に外反し、口縁部上端で軽く外反するもの(482・483)と僅かに内弯するもの(480・481)がある。口唇はいずれも丸味をもつ。底部は段の直下がヘラで削られ段が顕著でないもの(481)もあるが、いずれも明瞭に残し、483以外には内面の対応する位置にも稜や段をもつ。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ後一部ミガキ(480～482)のものと同様のみのもの(478・483)がある。底部はいずれもヘラケズリされる。内面はいずれもミガキ後黒色処理されている。なお、483は口縁部外面に積み上げ痕を明瞭に残している。

**甕形土器**(486～501) いずれもロクロ未使用成形のものである。全体的な器形は、長胴型のもの(494・496)・体部が膨らむもの(486・487・493・495・499・501)があり、体部最大径の位置ではいずれも中位～下位にもつ。いわゆる球胴型のもの出土していない。頸部は体部最大径の位置より窄み明瞭な段や軽い稜をもっている。口縁部は頸部より直線的に外反するもの(486・487・493・494・499・500)と外弯気味に外反するもの(497・498)がある。口唇は平らなもの(497・498)・角張るもの(486・487・493・494・500)・丸味をもつもの(499)がある。大きさでは、大型(486・487・493～496・499・501)と小型(497・498・500)がある。底部は周囲に突出をもつもの(486・487・489～491・495・498・501)とたたないもの(488・496・500)があり、底面は489に木葉痕をもつ以外は丹念にナデられ平らである。なお、498の頸部にはヘラ描きによる鋸歯状の沈線が、全周のほぼ半分に付されている。調整技法は、外面が口縁部ハケメ後ヨコナデが中心で、他にヨコナデのみのもの(498)やハケメだけのもの(494)

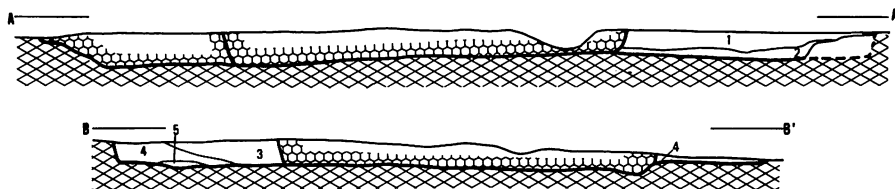




G-8 住居址-2 ピット計測値

長径×短径 深さ

P <sub>1</sub>	40cm×33cm	47.0cm
P <sub>2</sub>	33cm×33cm	63.5cm
P <sub>3</sub>	29cm×27cm	52.5cm
P <sub>4</sub>	29cm×23cm	38.5cm

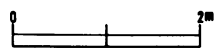


G-8 住居址-2 埋土土層

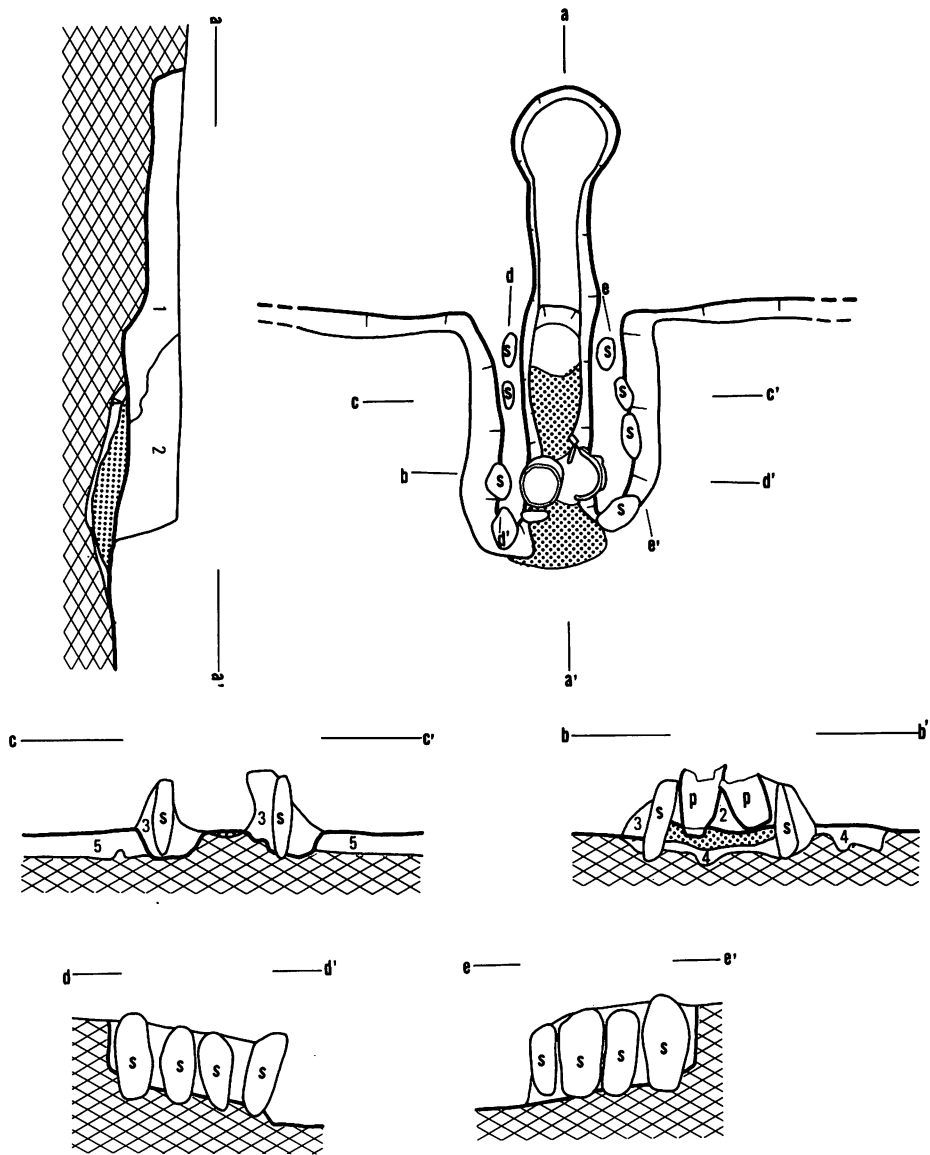
1. 7.5YR2/1 黒色 よく締まっている、粘性あり、微量の炭化物が混入。
2. 7.5YR2/1 黒色 緻密でよく締まっている、粘性あり、炭化物・粘土質シルトが微量混入。
3. 7.5YR2/1 黒色 緻密でよく締まっている、粘性あり、炭化物・粘土質シルトが微量混入。
4. 7.5YR3/1 黒褐色 軟らかい、粘性あり、少量の炭化材、粘土質シルトが塊状に混入。
5. 7.5YR2/1 黒色 粘性あり、多量の炭化物と焼土塊がブロック状に入る。

G-8 住居址-2 ピット埋土土層

1. 5YR2/1 黒褐色 粘性あり、微量の炭化物、少量の骨片と水酸化鉄が混入。
2. 5YR2/1 黒褐色 非常に軟らかい、粘性あり、多量の粘土質シルトと少量の炭化材が混入、土師器細片混入。
3. 7.5YR3/1 黒褐色 非常に軟らかい、粘性あり、多量の粘土質シルトと炭化材が混入。

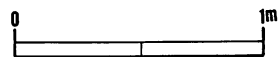


第155図 G-8 住居址-2 (遺構-1)

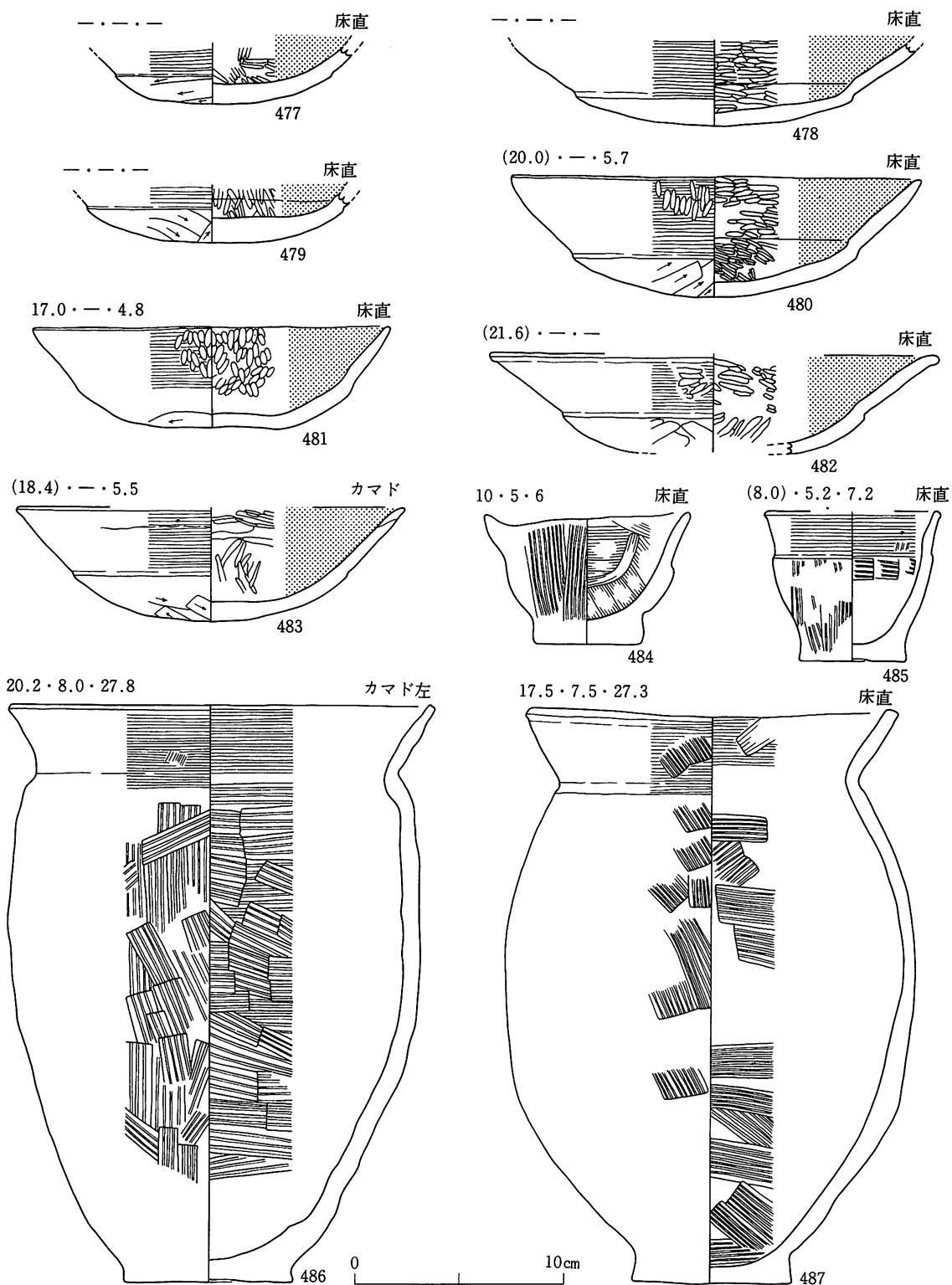


G-8 住居址-2 カマド埋土土層

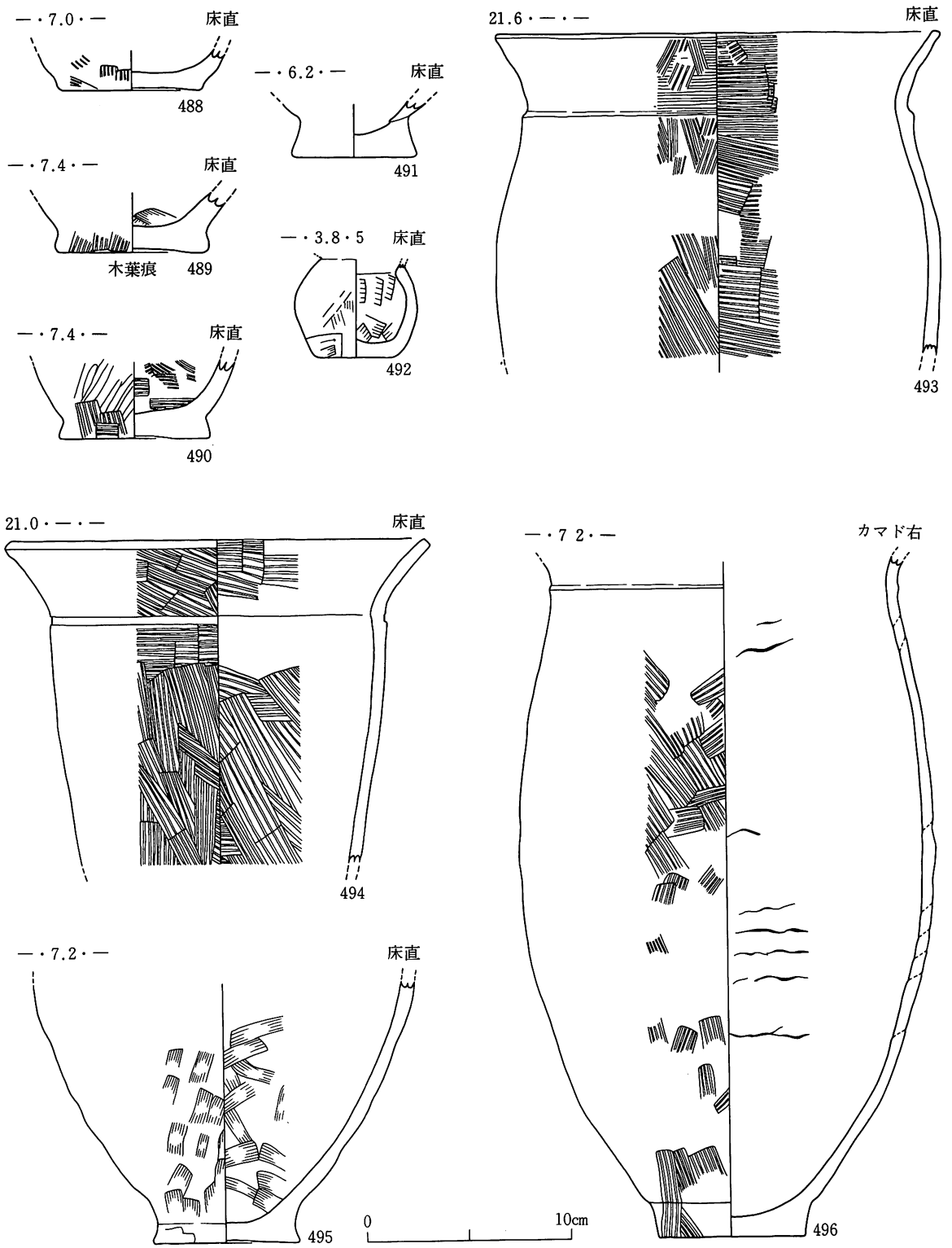
1. 5YR2/1 黒褐色 粘性あり、多量の粘土質シルトと少量の炭化物が混入。
2. 5YR2/1 黒褐色 粘性あり、粘土質シルトと焼土ブロックが多量に混入。
3. 7.5YR2/1 黒色 締まっている、粘性あり、微量の焼土の粘土質シルト、少量の炭化材と骨片を混入。
4. 5YR3/1 黒褐色 粘性あり、微量の炭化物、多量の粘土質シルトが混入。
5. 5YR2/1 黒褐色 粘性あり、微量の焼土、少量の炭化物、粘土質シルトが混入。



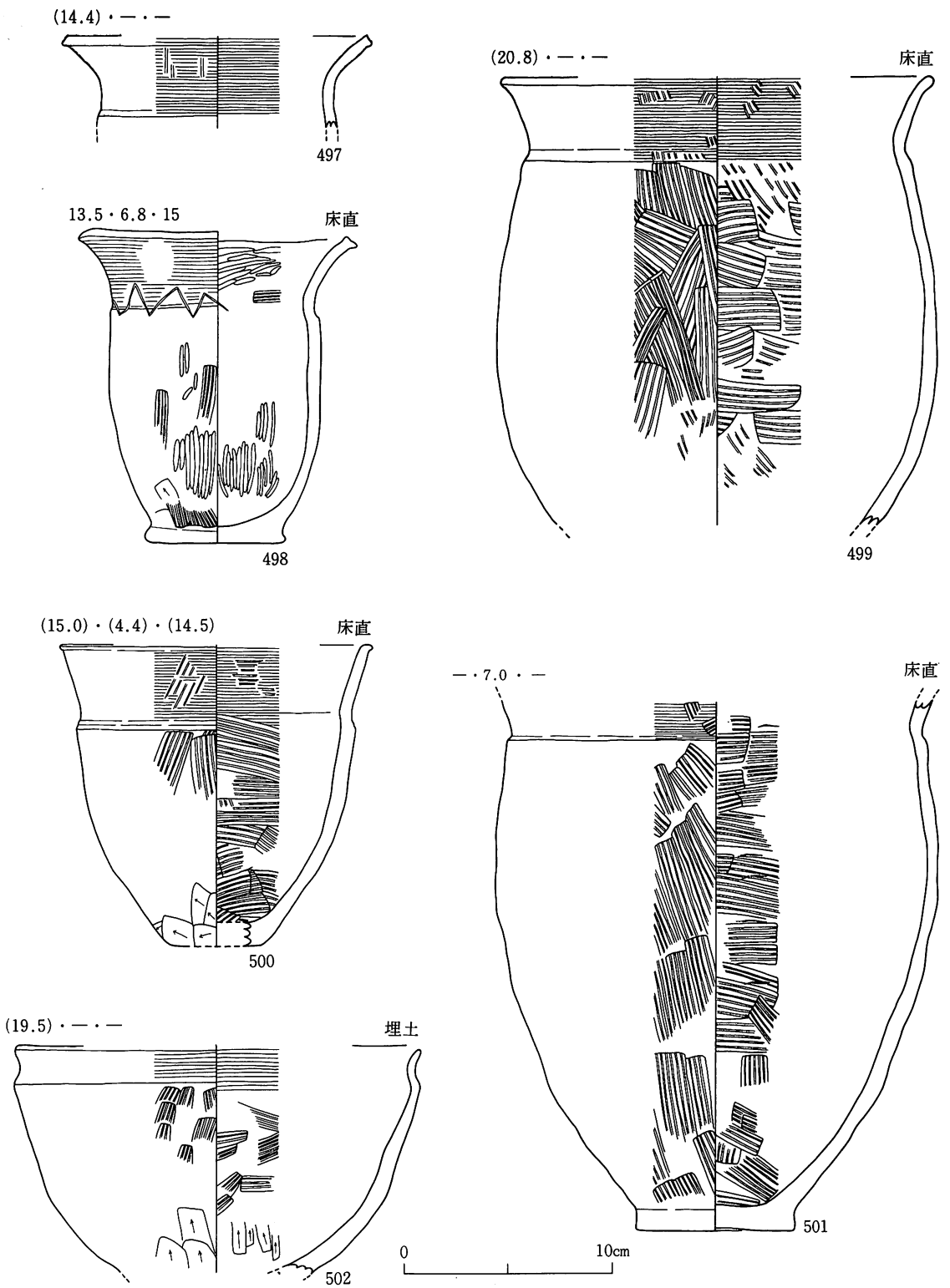
第156図 G-8 住居址-2 (遺構-2)



第157図 G-8住居址-2(遺物-1)



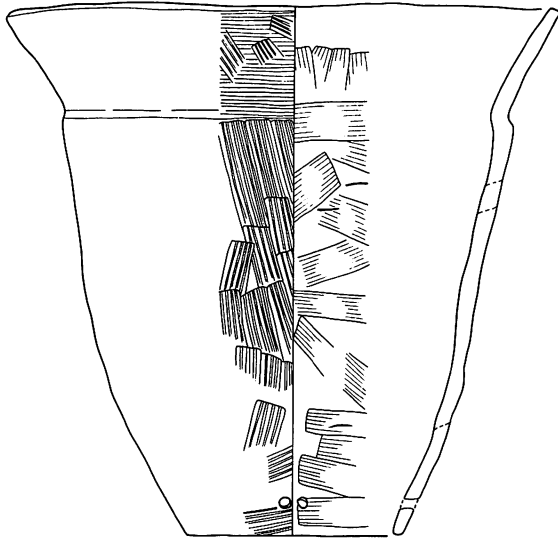
第158図 G-8住居址-2(遺物-2)



第159図 G-8住居址-2(遺物-3)

22.3 · 8.5 · 21.2

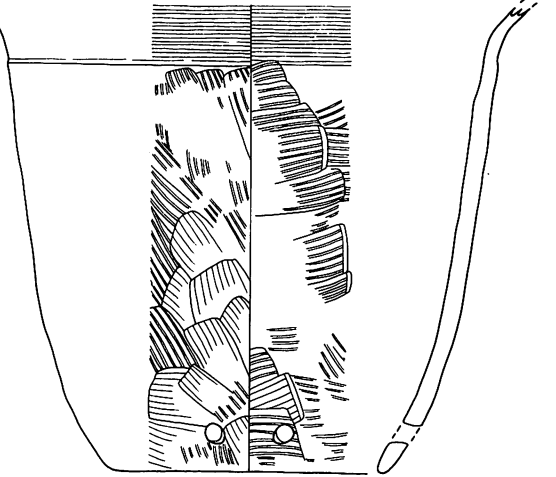
床直



503

— · 11.2 · —

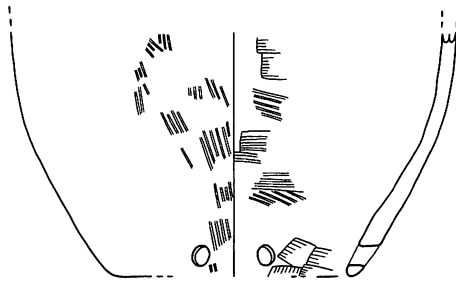
埋土



504

— · (9.5) · —

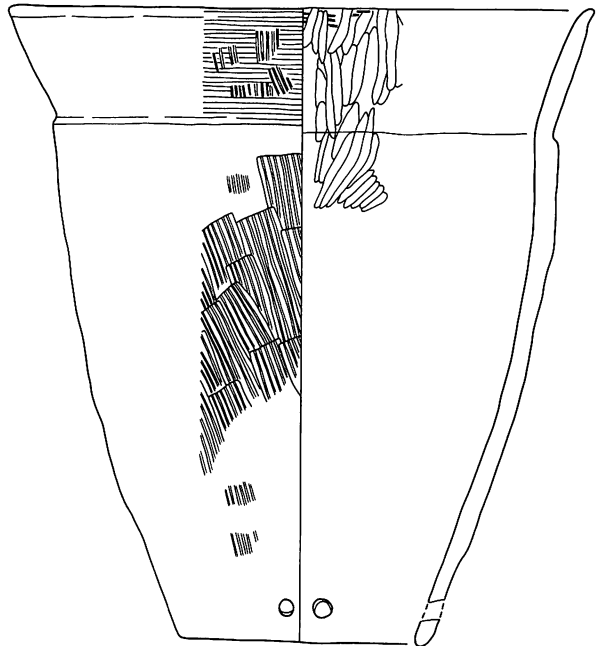
埋土



505

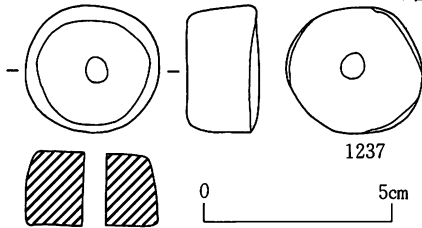
23.5 · 9.7 · 25.6

床直



506

床直

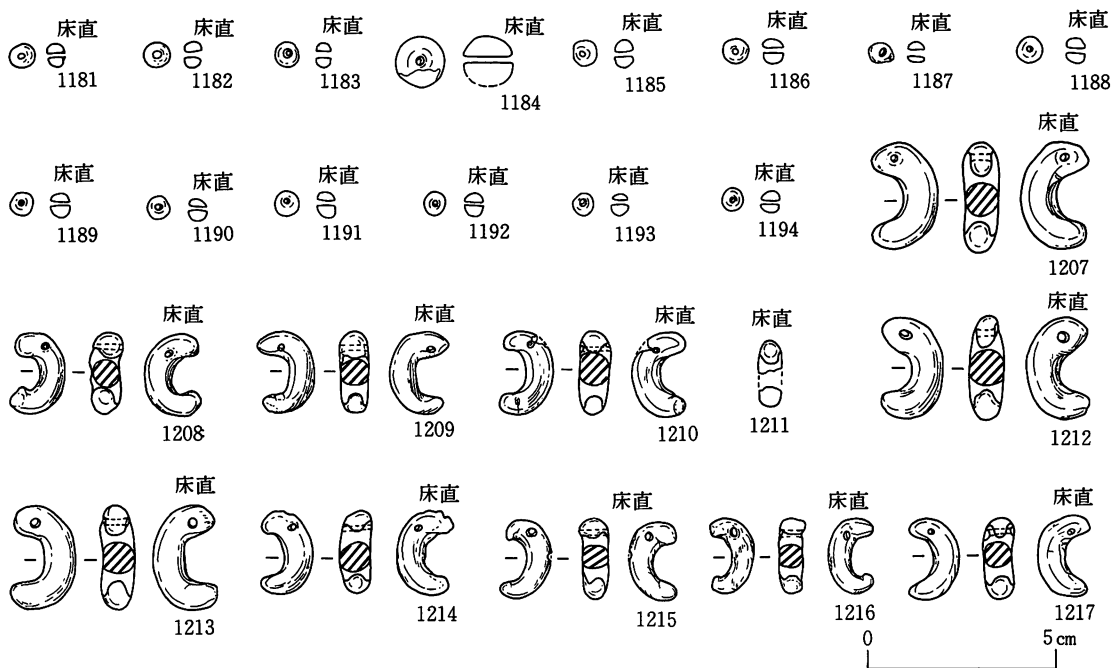


1237

0 5cm

0 10cm

第160図 G-8住居址-2(遺物-4)



第161図 G-8住居址-2(遺物-5)

があり、体部はハケメだけのもの(494)・ナデのもの(495)・ハケメ後スリケシのもの(486~489・493・496・499~501)・ハケメ後ミガキのもの(490・498)等がある。内面は、口縁部がヨコナデのもの(486・487・497・499・500)・ハケメのもの(493・494・501)・ミガキのもの(498)があり、体部はハケメのもの(486・487・493・494・499~501)・ナデのもの(495・496)・ミガキのもの(498)がある。

**甑形土器**(503~506) ロクロ未使用成形のもので、甕形土器の底部を取り去った無底型である。体部は直線的や内弯気味に外傾し、頸部に段や括れをもち、口縁部は直線的に外反するもの(503・506)・外弯するもの(504)がある。口唇部は角張るもの(503)と丸味をもつもの(506)がある。体部の底部寄りに向かい合う様な位置に各1ヶの貫通孔をもっている。調整技法は、口縁部外面ハケメ後ヨコナデ、体部がハケメ後スリケシまたはハケメ後ナデで、内面は口縁ヨコナデ(504)・ナデ(503)・ハケメ後ミガキ(506)で、体部はハケメ後スリケシ(504・505)・ナデ(503)・ミガキ(506)がある。

**鉢形土器**(502) ロクロ未使用成形で、器高に比較して口径が大きいものである。体部は底部より大きく外傾し、次第に内弯しながら肩部に移行し、頸部は稜をもって括れる。口縁部は頸部稜の位置で内傾し、次第に外弯して口唇に移行しており口唇は丸味をもっている。底部

形態は欠失しているので不明である。調整技法は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともハケメ後スリケシで下位には若干ケズリが入る。

**小型土器**(484・485・492) いずれもロクロ未使用成形であり、484・485は極く小型の鉢形土器や甕形土器で、492は壺形土器に近い。調整技法は甕形土器のそれと同様である。

#### その他

**土製品**(1181～1217・1237) 1181～1194は土製の丸玉である。正円球に近いもの、扁平球に近いもの等があり、中心部に1ヶの貫通孔をもっている。大きさでは大小があるが、小型のものが大半を占める。すべて黒色処理されている。1207～1217は土製勾玉である。「C」字形を呈し、上端に各1ヶの貫通孔をもつ。大きさには大小があり、断面が丸ですべて黒色処理されている。1237は土製紡錘車である。土製円板状を呈し中心部に1ヶの貫通孔をもつ。

(吉田 洋)

## 52) G-9 住居址

[遺構](第162・163図、P L 31A)

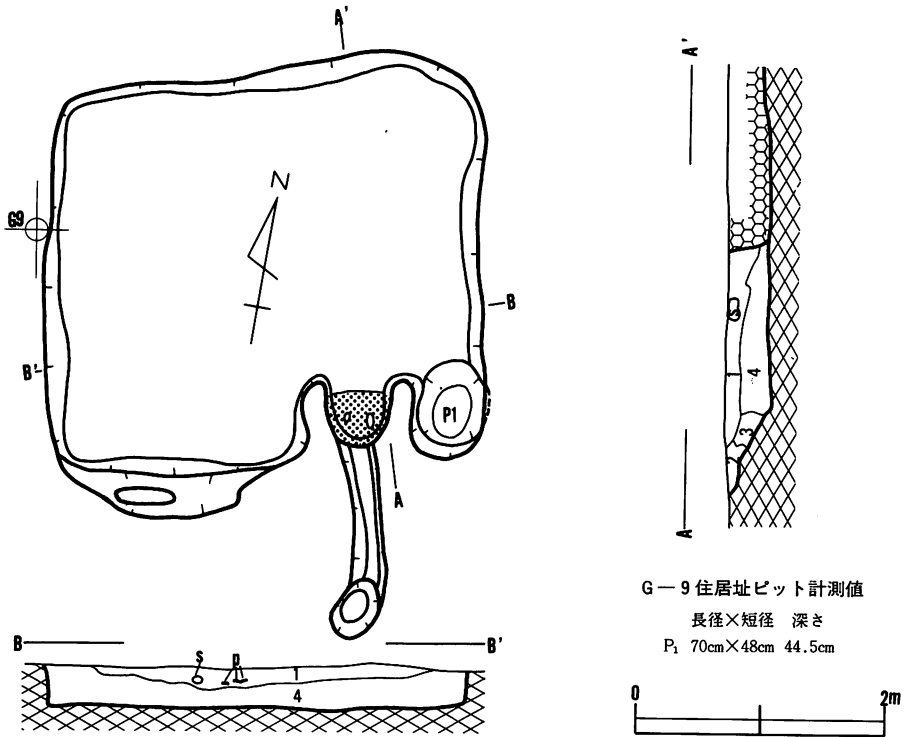
本住居址は、北側部分でG-8住居址-1・G-8住居址-2と重複しているが、重複遺構との新旧関係は、G-8住居址-1、G-8住居址-2ともに本住居址より古い。

規模は南北約3.2m・東西約3.5mで壁高は0.33m位を測り、壁は床面に対して95度の角度を示している。平面形は若干歪んだ隅丸方形を呈し、主軸は南-北方向にあり磁北に対して170度位東に偏している。埋土は暗褐色・黒褐色・黒色等を呈する粘土質のシルトで構成され、色調や混入物によって4層に細分されている。混入物としては炭化物や褐色を呈する粘土質のシルト粒が観察される。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は平坦で良く締まり固い。カマド右側の南壁が外方に張り出し、張り出した部分の床面が東西に細長く窪んでおり、高低差0.06mを測る。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>の土坑が検出されている。規模は長径0.7m×短径0.55m位で深さは0.1m位を測る。埋土は暗褐色の粘土質シルトで構成され、強粘性で軟らかい。少量の炭化物や灰白色粘土と多量の褐色を呈する粘土質のシルト粒が混入している。この土坑はカマド左側の南東隅部に位置していることから、本住居址の貯蔵穴であろう。

カマドは南壁で検出され、壁中央より0.75m位東に偏している。検出された部分は、袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は、基底部を若干掘り込み、黒褐色や褐色を呈するシルトを貼り付けて構築している。燃烧部は最初に若干掘り込み、支脚に利用する礫を据えた後埋め戻している。底面は床面より僅かに低く、奥壁に向かって緩やかな上がり勾配で煙道部と接続している。支脚は燃烧部中央左側袖部寄りに粒径13cm×10cm

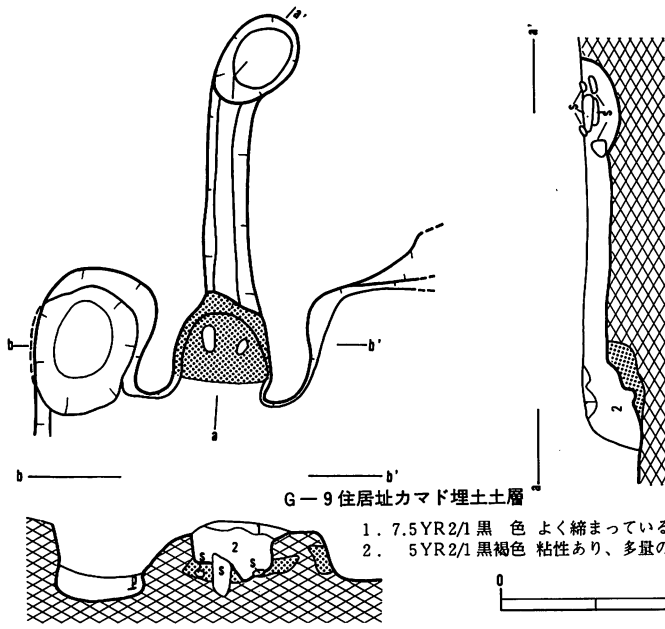




G-9 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/1 黒色土 よく締まっている、粘性あり、微量の炭化物混入。
2. 7.5YR3/1 黒褐色 軟らかい、粘性あり、少量の炭化材、粘土質シルトが斑状に混入。
3. 7.5YR3/1 黒褐色 粘性あり、微量の炭化物、少量の粘土質シルトが混入。
4. 7.5YR3/3 暗褐色 軟らかい、粘性あり、多量の粘土質シルト、少量の炭化物、灰白色粘土混入。

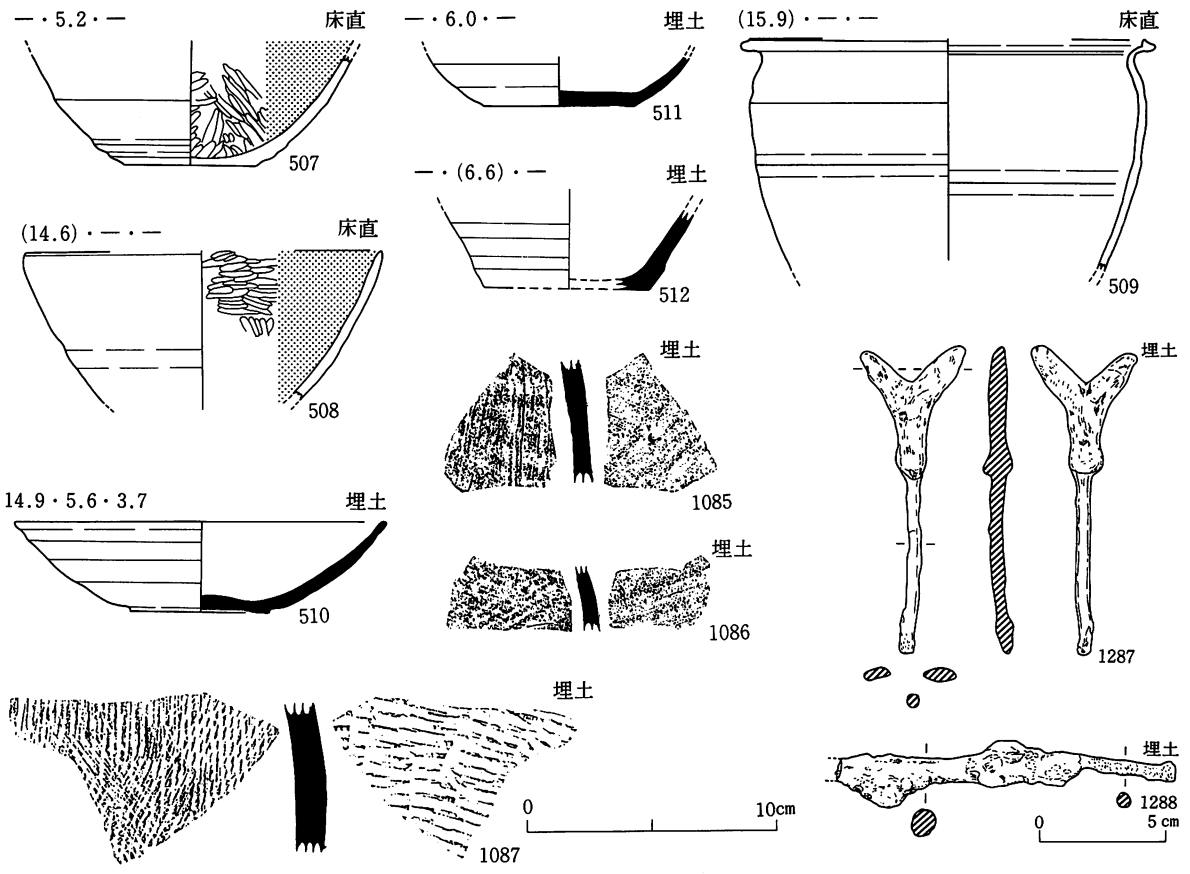
第162図 G-9 住居址(遺構-1)



G-9 住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR2/1 黒色 よく締まっている、粘性あり、微量の炭化物混入。
2. 5YR2/1 黒褐色 粘性あり、多量の炭化物、粘土質シルトブロック、焼土ブロックが混入。

第163図 G-9 住居址(遺構-2)



第164図 G-9 住居址(遺物)

の上部を欠失した1ヶの礫を縦位で0.05m位埋め込んで利用していた。燃焼部の焼土は焚口部より若干奥から奥壁までの範囲で観察され、さらに、袖部の内壁にも焼成痕を残している。煙道部は西方に軽く弯曲し、煙出部とは曲折して接続している。底面は煙出部に向かって緩やかな下り勾配を示しているが、ほぼ平坦である。煙出部は煙道部底面より若干掘り窪められ、多くの礫が転落している。

〔遺物〕(第164図、P L 114A)

埋土・床面ともに出土が少ない。種類は土師器・須恵器・鉄製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・鉄鏃・名称不明鉄器がある。

#### 土師器

**坏形土器**(507・508) いずれもロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切り無調整のものである。内面はミガキ後黒色処理されている。体部は外傾し軽く内湾している。

**甕形土器**(509) ロクロ使用成形で、体部上位が若干膨らみ、頸部で窄み大きく外反する口縁部をもつ。口唇部は上方に軽く挽き出され受口状を呈する。体部への再調整はない。

#### 須恵器

**坏形土器**(510・511) ロクロ使用成形で、底部切り離しが回転糸切り無調整のものである。口縁部径に比較して底径が小さく、比較的浅目である。

**甕形土器**(512・1085～1087) 512はロクロ使用成形で、体部と底部を若干残存する破片である。底面は良くナデられているために切り離し技法は不明である。1085～1087は体部の破片である。1085は外面ヘラケズリ・内面ヘラナデで、1086は外面に平行タタキ目の痕跡を残し、その上をロクロナデ・内面はヘラナデである。1087は内外面ともに平行タタキ目をもつ。

#### その他

**鉄製品**(1287・1289) 1287は埋土上部より出土した雁又の鉄鏃であるが、茎部が折損し、さらに一部を欠失している。1289は断面が円形の細長い棒状であるが、名称不明である。

(吉田 洋)

### 53) G-15住居址

〔遺構〕(第165・166図、P L 31B)

本住居址は重複遺構もなく、単独で検出された。

規模は南東-北西3.5m・南西-北東3.5mで壁高は0.2mを測り、壁は床面に対して105度の角度を示している。平面形は各隅が直交する正方形を呈し、主軸は南東-北西方向にあり、磁北に対して122度東に偏している。埋土は黒色・黒褐色・褐色等を呈する粘土質のシルトが主体で構成され、混入物や色調によって4層に細分されている。混入物としては、1・2層には

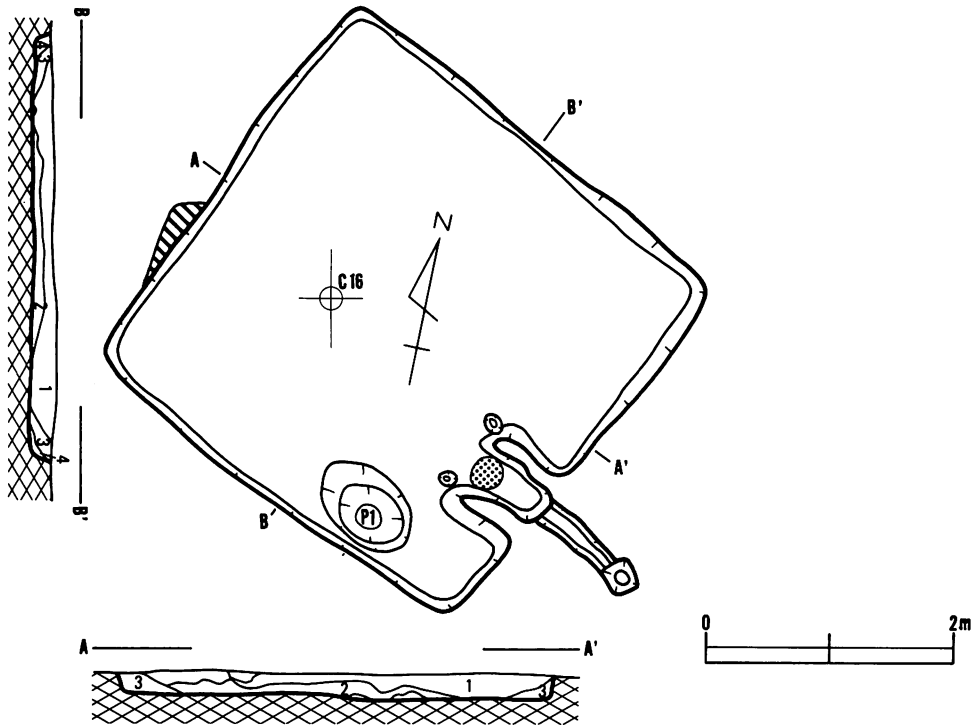
砂粒、1・3層には酸化鉄、2・3層には褐色を呈する砂質シルト粒がそれぞれ観察される。また、2層には多くの炭化物粒が混入しており、それと同時に床面直上でも部分的に焼土や炭化材の分布が観察された。炭化材の大きさは長さ1m～2m・巾0.1m～0.2m位で、全体的な量は少ないが、北西壁寄りに多く分布している。上家構造を推定し得る様な残存状態ではないが、この様な状況から判断して焼失住居址であろうと推定される。床は地山の褐色を呈する粘土質のシルトが主体で構築され、北西壁寄りには部分的に貼床して床面としている。南西壁寄りの床面には粒径3cm～5cm位の礫が露出し、この部分は若干起伏がみられるものの、他の部分はほぼ平坦である。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面でP<sub>1</sub>の土坑が検出されている。規模は長径0.8m・短径0.5m・深さ0.3mで、カマド右側手前の南西壁際に位置している。平面形は南東―北西に長軸をもつ楕円形で、断面形は鍋底形を呈している。埋土は、黒色を呈する粘土質シルトの単層で構成され、埋土上部の0.08m位には酸化鉄の集積が観察される。この土坑の性格は、埋土内より床面出土の土師器と接合する破片が出土していることや、位置から考えて本住居址の貯蔵穴であろうと考えられる。

カマドは南東壁で検出され、壁中央より0.45m位南に位置している。検出された部分は、袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は地山よりの削り出しによって構築され、シルト等の貼り付けは観察されない。左右両袖部の焚口付近には、前者で0.11m×0.08mで深さ0.07m、後者で0.1m×0.12mで深さ0.1mの小坑がそれぞれ検出されている。また、右側袖部の焚口付近には粒径0.26m×0.12mの礫が1ヶ横転していた。この礫の先端部の大きさは右側袖部の焚口付近で検出された小坑の規模と合致していたことから、横転していた礫は焚口部を構成した礫であろうと推定される。この様なことから、左側袖部の焚口部付近で検出された小坑も焚口部構成礫の痕跡と考えられ、礫は抜き取られたものであろう。燃烧部は焚口部より奥壁に向かって緩やかな下り勾配を示し、煙道部とは0.15mの段差で接続している。燃烧部内より二次的に焼成を受けた土師器甕形土器の体部破片が多く出土したことから、カマド埋設土器が破損した破片であろうと考えられる。また、燃烧部底面ほぼ中央には粒径17cm×11cmの礫が縦位で0.07mほど埋め込まれて、支脚として利用されていた。燃烧部の焼土は焚口部付近より支脚の前付近まで分布しているが、範囲は狭くない。煙道部底面は煙出部に向かって緩やかな上がり勾配を示しているが、ほぼ平坦で煙出部と接続している。煙出部には煙道部に対して菱形の平面形をもつ土坑が掘られている。煙道部底面との高低差は約0.3mであり、底面は平らで平面形は円形である。

〔遺物〕(第167図、P L 114B・115A)

埋土内での出土に比較して床面直上での出土は少ない。しかし、埋土内出土のものは小破片が多く図化できるものは含まれていない。床面直上のもは土師器に限定され、少数ではある



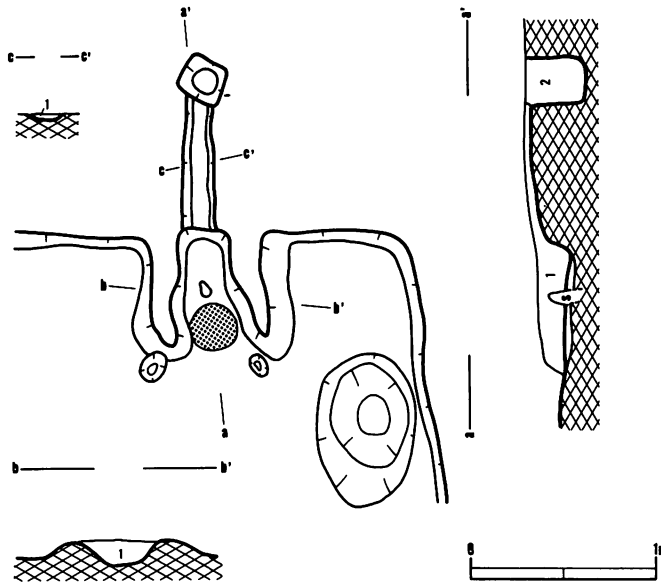
G-15住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 微細な砂粒が混入、鉄分混入。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 砂質シルト 木炭片が混入。  
7.5YR4/6 褐色
3. 7.5YR2/1 黒色 粘土質シルト 砂質シルト・鉄分が混入。
4. 7.5YR2/1 黒色 砂質シルト 褐色砂質シルトが少量混入。  
7.5YR4/6 褐色

G-15住居址ピット計測値

長径×短径 深さ  
 P<sub>1</sub> 84cm×55cm 32cm

第165図 G-15住居址(遺構-1)



G-15住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR 3/4~2/3 暗褐色~極暗褐色 粘土質シルト 砂粒が混入、下部に焼土混入。
2. 7.5YR 2/1 黒色 粘土質シルト 砂粒が少量混入、土器片・酸化鉄が混入。

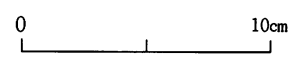
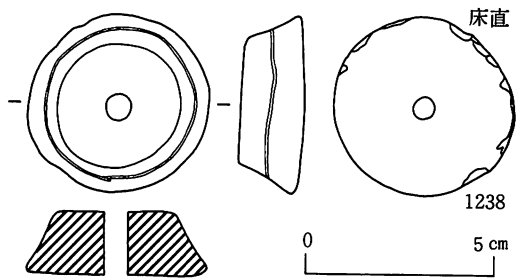
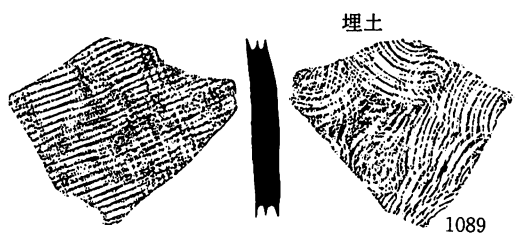
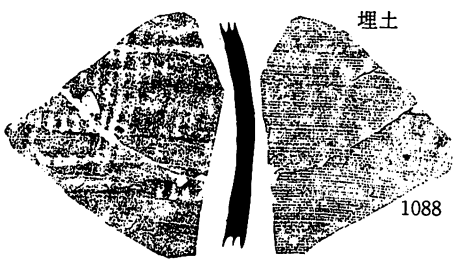
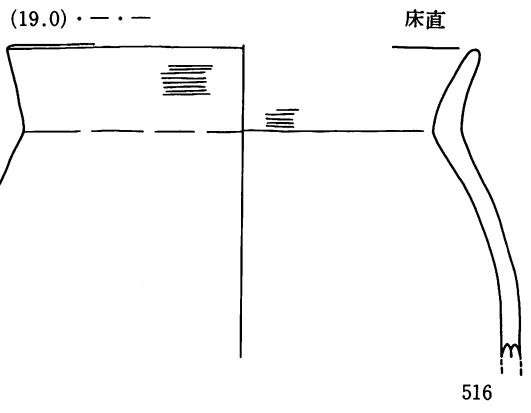
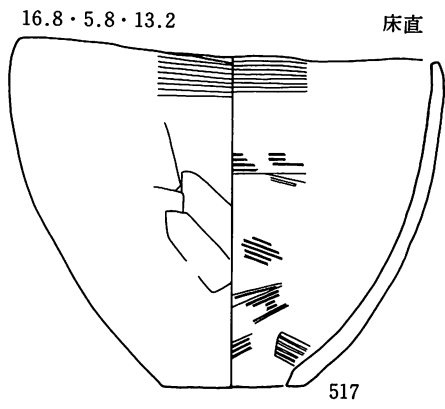
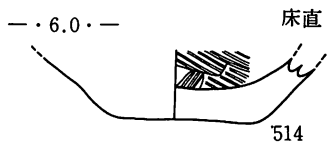
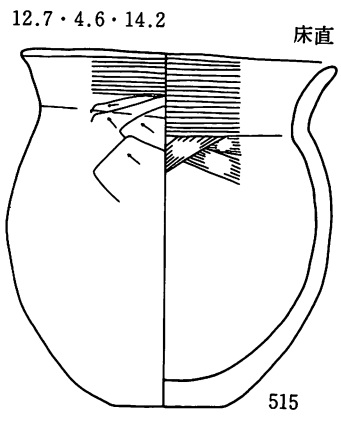
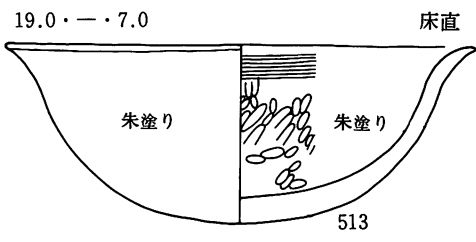
## 第166図 G-15住居址(遺構-2)

が完形に復元されたものが含まれる。埋土下位より出土したものには須恵器破片や石製紡錘車がある。種類は土師器・須恵器・石製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・甑形土器・紡錘車がある。

### 土師器

**坏形土器**(513) ロクロ未使用成形で、体部に段や稜をもたない底部丸底のものである。体部は底部より内弯気味に立ち上がり、口縁部は外弯している。内面も外面の形態とほぼ同心形態を有しているが、口縁部との境い目に軽い稜をもち、稜の位置より削がれて先細りとなって口唇に移行し、口唇は尖っている。なお、この土器は内外面ともに朱彩されており、特に内面が顕著である。調整技法は摩滅によって定かでないが、外面はナデ後ミガキ、内面は全面ミガキである。

**甕形土器**(514~516) ロクロ未使用成形で、体部が膨らみ頸部で窄む器形である。大きさは大型のもの(514・516)と小型(515)のものがあるが、器形は同じである。体部は底部より外傾し、次第に内弯しながら立ち上がり頸部には段や稜をもたずに窄み、口縁部は直線的に外反(516)したり、外弯気味に外反(515)して口唇に移行し、口唇は丸味をもつ。底部は径の



第167図 G—15住居址(遺物)

小さい平底で周囲に突出をもたない。底面は平らである。調整技法は口縁部内外面ヨコナデ、体部は外面ケズリやナデで内面はハケメやナデである。

**甑形土器**(517) ロクロ未使用成形で、鉢形土器の底を抜いた様な形態をもつ無底型のものである。体部は外傾し、次第に若干内弯しながら立ち上がりそのまま口唇に移行し、口唇は丸味をもつ。調整技法は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面ケズリやナデで内面はハケメ後スリケシである。

#### 須恵器

**甕形土器**(1088・1089) とともに大甕の破片と考えられるもので、1088は埋土の検出面より、1089は埋土下位より出土した。1088は外面平行タタキ目後カキ目で内面カキ目、1089は外面平行タタキ目で内面青海波文をもつ。

#### その他

**石製品**(1238) 滑石製の紡錘車である。断面が截頭円錐形に近い形態のもので、全面が良く研磨され斜面に全周する沈線が1条付されている。中心部に1ヶの貫通孔をもつ。

(遠藤勝博)

### 54) H-2 住居址-1

〔遺 構〕(第168・169図、P L 32 A)

本住居址は南側でG-3住居址と重複し、さらに、東側でH-2住居址-2と重複している。重複遺構との新旧関係は重複するいずれの遺構よりも本住居址が新しい。

規模は東西3.0m・南北3.2m前後で壁高は約0.4mを測り、壁を床面に対して105度の角度を示している。平面形は隅丸のほぼ正方形を呈し、主軸は東-南方向にあり磁北に対して110度東に偏している。埋土は極暗褐色～暗褐色を呈する砂質のシルトの単層で構成されている。粘性や締まりもほとんどなく、ややボンボンしている。部分的に粘土質のシルト粒が混入し、他に炭化物が混入している。床は地山の暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面にはほとんど起伏もなく平坦で、良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の土坑が検出されている。規模は、P<sub>1</sub>で長径0.6m位・短径0.45m位・深さ0.05m位、P<sub>2</sub>は長径0.5m位・短径0.45m位・深さ0.28m位をそれぞれ測り、平面形はP<sub>1</sub>は楕円形、P<sub>2</sub>は円形である。その中でP<sub>1</sub>は浅い窪地状を呈していることから、土坑とするには疑問があるが、ここでは一応土坑としておく。埋土はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>ともほとんど差がなく、褐色のシルト粒が混入する黒色を呈するシルトの単層で構成される。粘性は少なく、炭化物粒が混入している。これらの土坑の性格は、P<sub>1</sub>については前述の様に浅い窪地であるが、P<sub>2</sub>はカ



マド右側の南東隅部に位置していることや、床面出土の土器片と接合する遺物が出土していることから、本住居址に伴う貯蔵穴であろうと考える。

カマドは東壁で検出され、壁中央より0.45m位南に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は左右両袖部ともに縦位で礫を床面に配置し、その両側に黒褐色のシルトを貼り付けて構築している。左側袖部の礫は、焚口部と奥壁の間に粒径20cm×15cm位を測るものを3ヶ使用し、右側袖部では焚口部分に粒径35cm×15cmのやや大き目のものを1ヶ、他は粒径20cm×15cm位のものを3ヶ使用している。これらの礫はお互いに向かい合う様に内傾している。また、焚口部の床面に粒径45cm×20cmの長い礫が左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの礫を使用して「**□**」状に組まれていたものと推定される。燃烧部は床面より若干掘り窪められ、支脚の位置で盛り上がり煙道部とは同位面で接続している。燃烧部奥壁寄りの焼土面には口径14.3cm・底径5cm・器高3.9cmの土師器坏形土器が1ヶ伏せて置かれ、支脚として利用していた。焼土は前庭部より奥壁部分まで分布し、他に右側袖部の内壁にも焼成を受けた痕跡を残している。また、カマド内部の埋土内や袖部の上面で多くの土師器甕形土器の二次的な焼成を受けた破片が出土しており、カマドの埋設土器が破損し、散乱したものであろうと考える。煙道部は地中にあり、割り貫きによって構築されている。燃烧部との接続部分の煙道部上には粒径40cm×15cmの礫が横位で置かれている。この礫の性格は明確でないが、煙道部の崩落防止の役割をもった礫であろう。煙道部底面は煙出部の0.2m位手前まではほぼ平坦であるが、その部分で0.1m位高くなり、煙出部とは急な下り勾配で続き、煙出部は斜め前方に向かって立ち上がっている。煙道部の断面は歪んだ楕円形を呈し、煙出部の平面形は楕円形である。

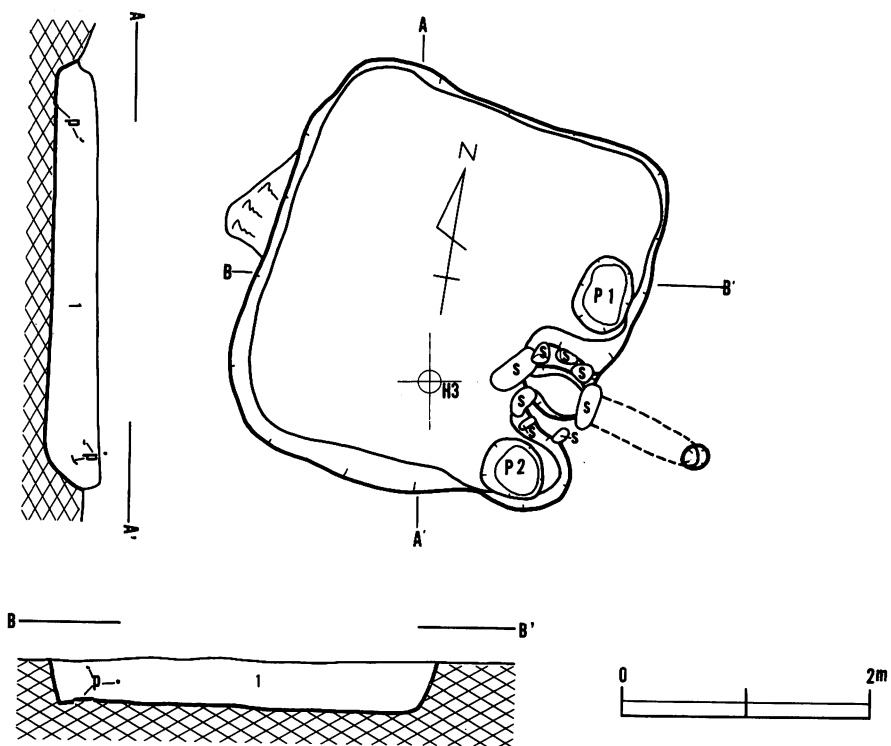
〔遺物〕(第170・171・172・173図、P L115 B・116・117 A)

埋土内や床面直上より出土しているが、床面直上での出土が多い。出土の状態は床面に散在しているが、カマド内やカマド周辺での出土が多い。種類は土師器・須恵器・鉄製品・石製品があり、器種では坏形土器・渦形土器・刀子・砥石が含まれている。

#### 土師器

**坏形土器**(518～526) いずれもロクロ使用成形で、内面黒色処理のもの(518)と無処理のもの(519～526)がある。底部切り離し技法は回転糸切りであるが、再調整されるもの(522・526)と無調整のものがある。体部は大きく外傾するが、内弯気味のもの(518・523・524・526)と直線的なもの(520・521・525)があり、口唇に向かって器厚が薄くなるものが多い。体部外面はロクロナデのみで再調整はない。

**甕形土器**(529～537) いずれもロクロ使用成形のものである。全体的な器形では、体部が若干膨らむもの(530～532・534・535)と膨らまないもの(529・533・536・537)があり、大き



H-2 住居址-1 埋土土層

1. 7.5YR 2/3~3/3 極暗褐色~暗褐色 シルト質土 締まりなし、粘性なし、微量の炭化物粒が混入。

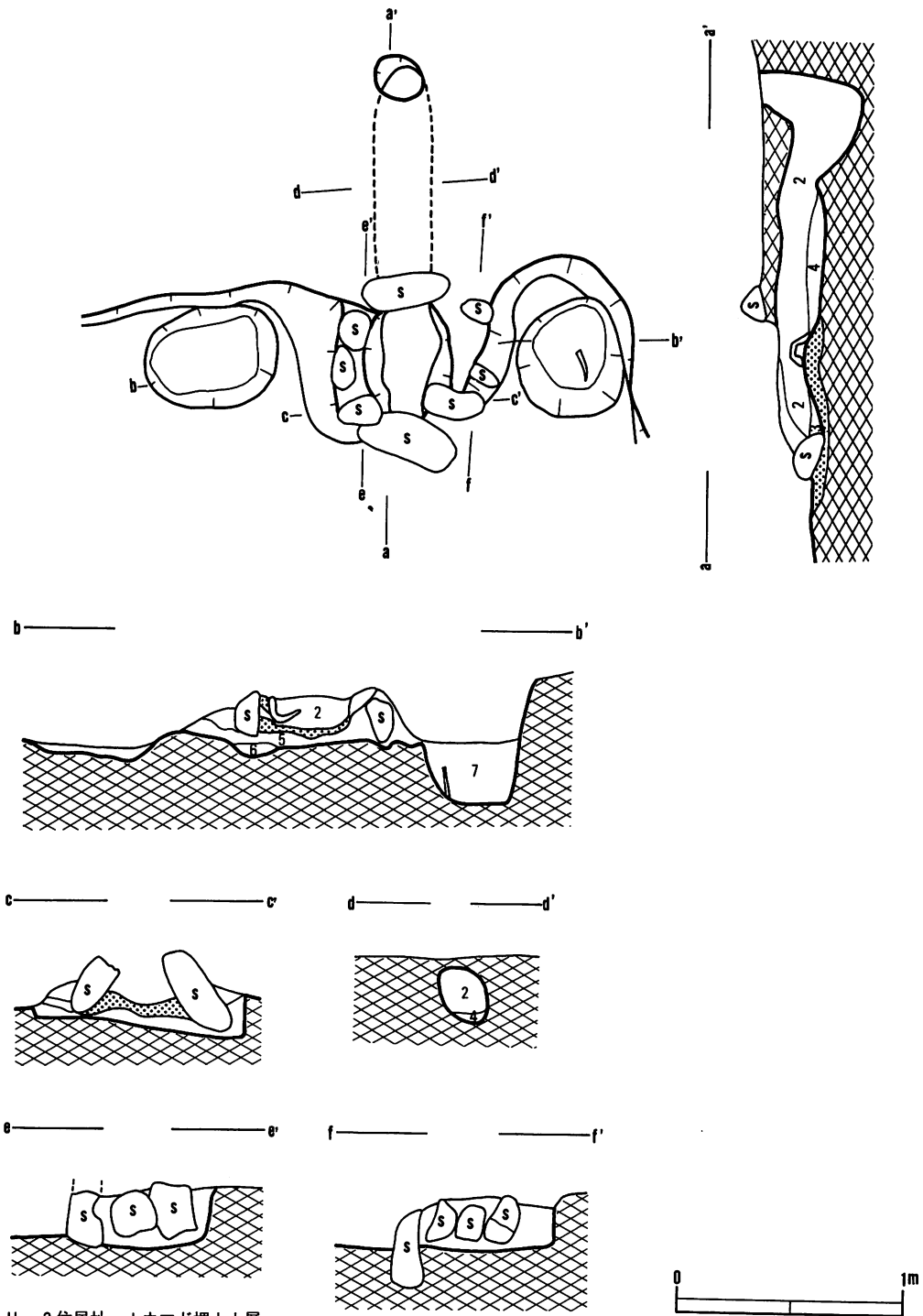
H-2 住居址-1 ピット計測値

長径×短径 深さ

P<sub>1</sub> 60cm×45cm 13.5cm

P<sub>2</sub> 54cm×46cm 30.5cm

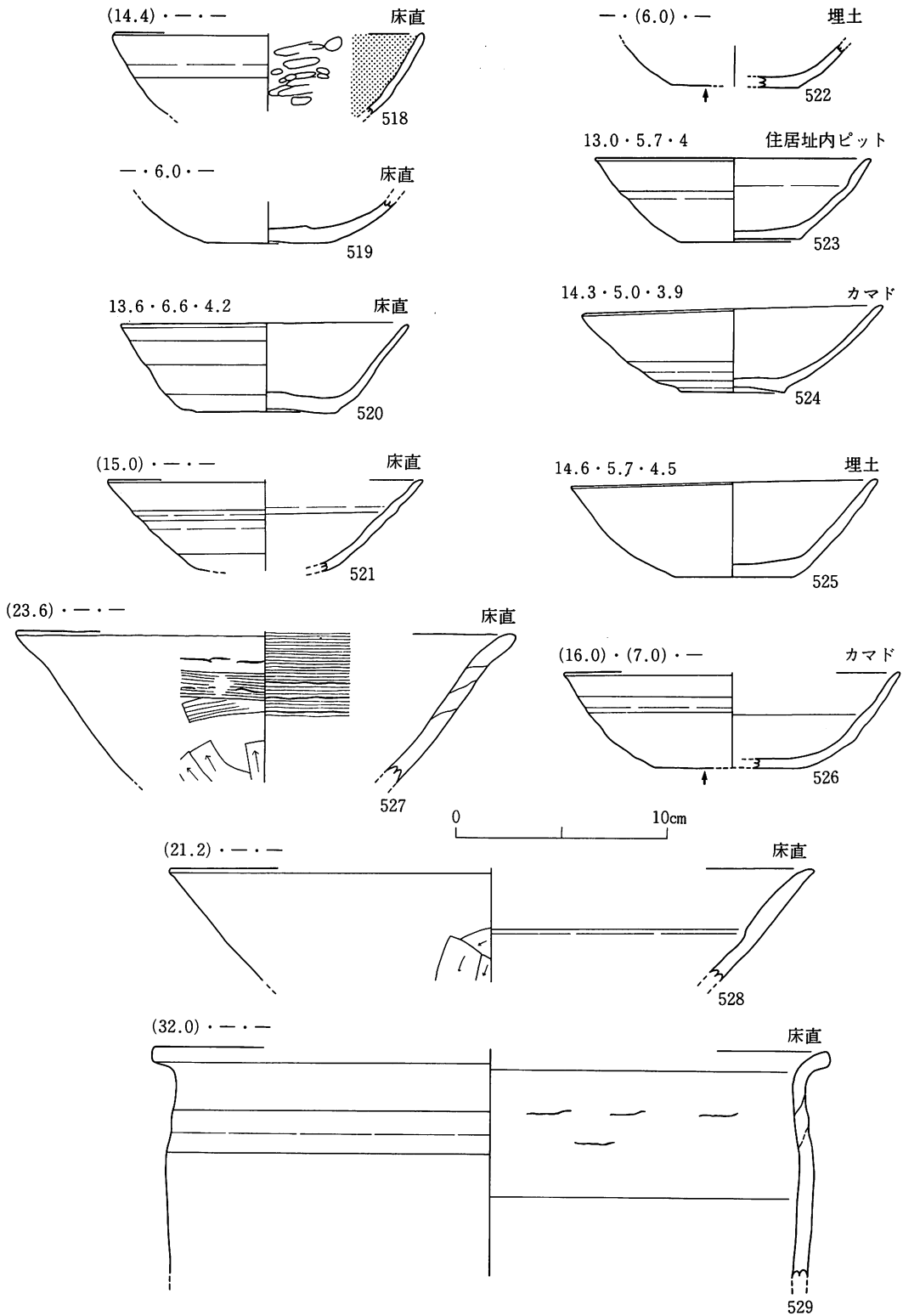
第168図 H-2 住居址-1 (遺構-1)



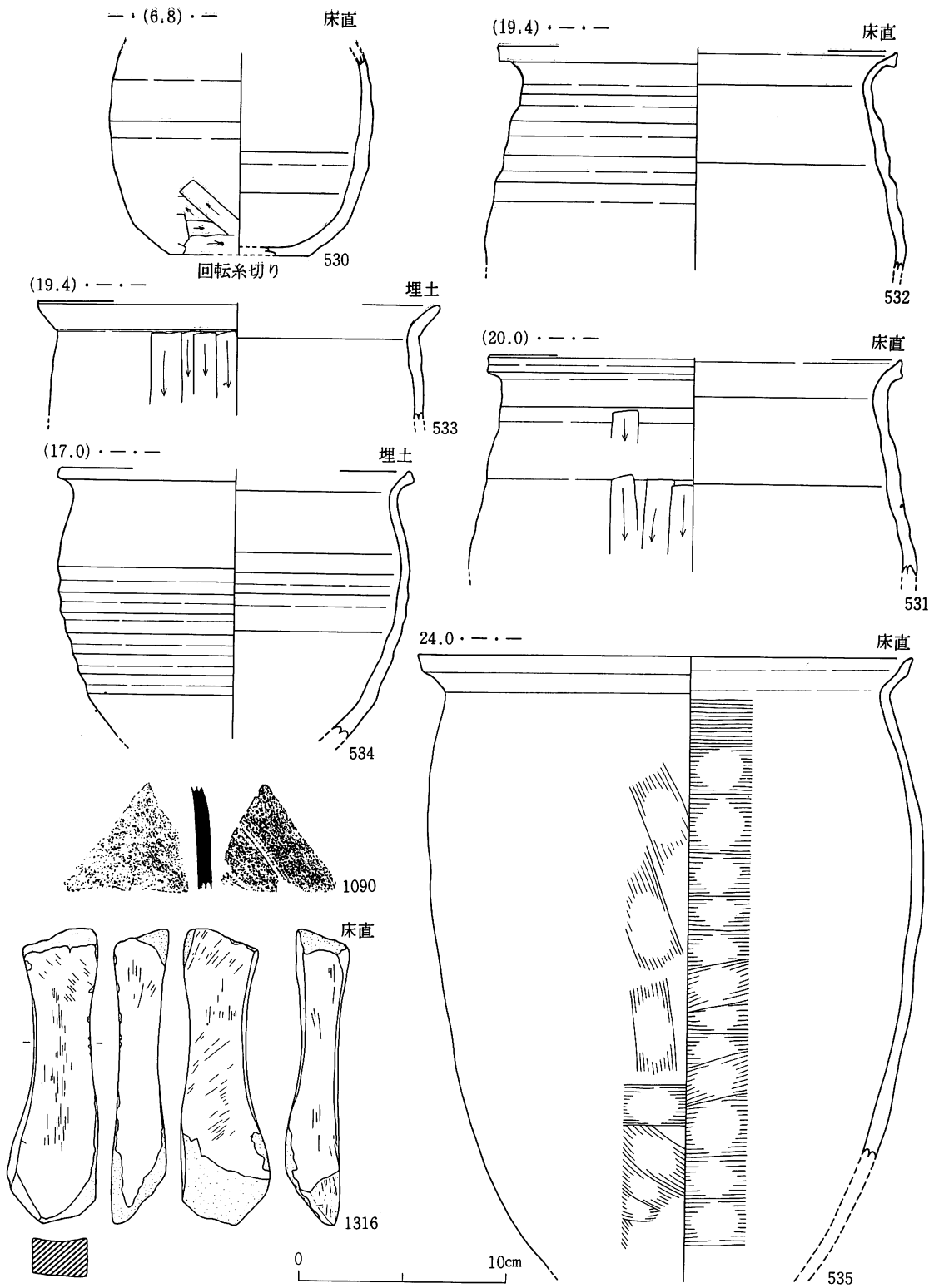
H-2 住居址-1 カマド埋土土層

- 1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 縮まりなし、少量の焼土が混入。
- 2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 縮まりなし、多量の焼土ブロック混入。
- 3. 焼土層 ブロック状を呈している。
- 4. 7.5YR2/1 黒色 シルト質土 少量の炭化物と焼土が混入。
- 5. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 褐色シルト混入。
- 6. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土
- 7. 7.5YR2/1 黒色 シルト質土 粘性なし、褐色シルトブロック・炭化物粒・土器片が混入。

第169図 H-2 住居址-1 (遺構-2)



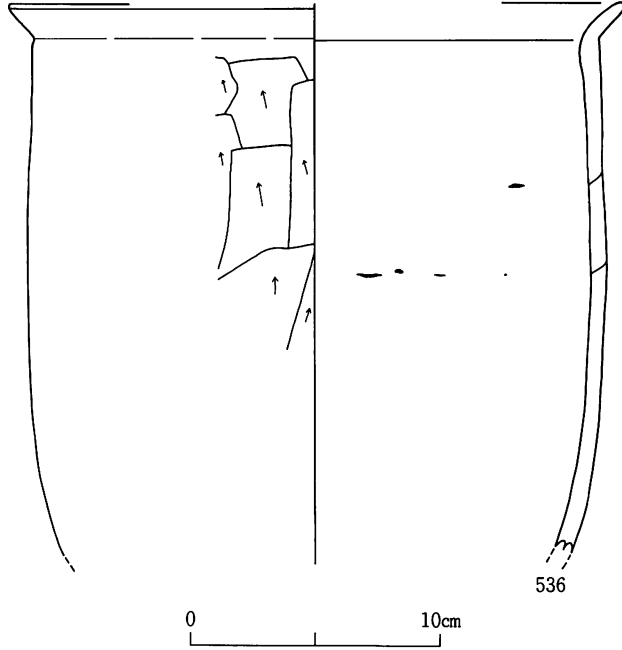
第170図 H-2 住居址-I (遺物-I)



第171図 H-2 住居址-1 (遺物-2)

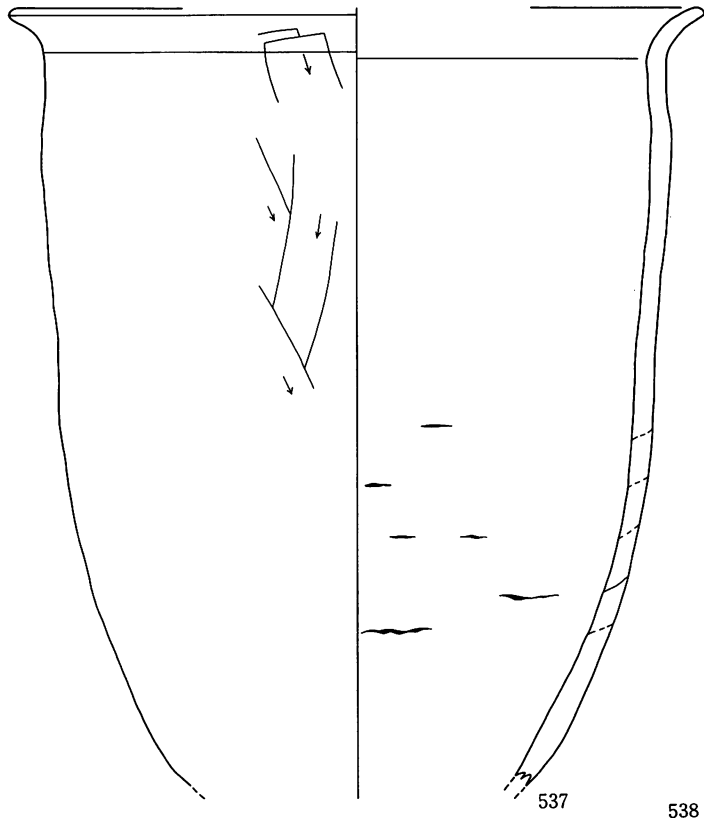
(24.8) · - · -

床直

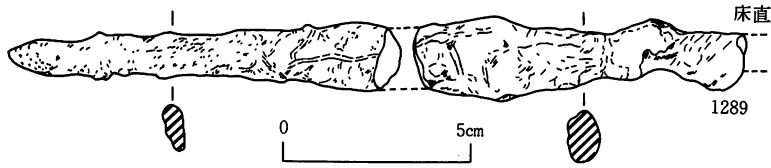


(28.0) · - · -

カマド右袖



第172図 H-2 住居址-1 (遺物-3)



第173図 H-2住居址-1(遺物-4)

さでは大型(529・535~537)と中型(531~533)・小型(530・534)がある。口縁部は短かく頸部より外反して口唇に移行しているが、直線的なもの(531・533・535・536)と外弯するもの(532・534・537)があり、口唇は挽き出されるもの(531・532・535)・挽き出しがなく角張るもの(529・534)・挽き出しがなく丸味をもつもの(533・536・537)がある。底部を残存するのは530だけであるが、この土器は回転糸切りで切り離され無調整である。533・536・538は外面が頸部までヘラケズリされているのでロクロナデ痕が不明瞭で内面も明確でないことから、ロクロを使用していない可能性も考えられる。また、529・536・537の体部には粘土紐の巻き上げ痕を明瞭に残し、特に、529はその後にロクロを使用している。体部への調整技法は頸部よりヘラケズリの入るもの(533・536・537)・上位より入るもの(531)・下位に入るもの(530)があり、内面は535にヘラナデが入る以外は調整痕をもたない。

**埴形土器**(527・528) 明確でないがロクロ不使用成形らしい。底部を残存していないので底部形態は不明であるが、体部は大きく外傾し、口縁部は527は外弯し、528は直線的である。いずれも二次的な焼成を受けた痕跡を残し、底部寄りにはヘラケズリされるらしい。

#### 須恵器

**甕形土器**(1090) 体部破片であるが、外面ヘラケズリ・内面ヘラナデの調整痕をもっている。

#### その他

**鉄製品**(1289) 断面が扁平で巾狭く、細長い形態のもので、刀子と考えられる。図の左側が切っ先であろう。

**石製品**(1316) 4面に使用面をもち、使い減りのした細長い砥石である。

(高橋与右エ門)

### 55) H-2住居址-2

〔遺構〕(第174図、P L 32B)

本住居址は西側でH-2住居址-1と重複し、H-2住居址-1との新旧関係は本住居址の方が古い。

規模は、東西はH-2住居址-1の削剝によって明確でないが約3.2m位と推定され、南北は

2.9m位を測る。壁高は0.25m前後で壁は床面に対して95度位の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は東—西方向にあり、磁北に対してほぼ107度東に偏している。埋土は暗褐色を呈する粘土質のシルト粒が混入した黒色のシルトのみで構成されている。全体的に少量の炭化物が混入し、若干粘性があり良く締まっている。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構成され、貼床せずそのまま床面としている。床面は平坦で良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面では直接伴う土坑は検出されていない。北東隅部で検出された土坑は後世の攪乱土坑であり、「ゴミ穴」の類いのものである。この土坑は径1.4mの規模で、平面形が楕円形で断面形が播鉢型を呈している。埋土もボソボソした黒色のシルトが堆積し、染付磁器等の破片が10数片出土している。

カマドは東壁で検出され、壁中央より0.15m位南に寄って位置している。検出された部分は、袖部・燃烧部・煙道部であり天井部は検出されていない。袖部は地山からの削り出しで構築されている。袖部の焚口付近には、左右両袖部ともに粒径25cm×10cm位の礫が縦位で各1ヶ0.1mほど埋め込まれているが、左側のそれは内側に向かって倒れかかっていた。なお、礫は床面を掘り込んで埋められ、さらに、根元の周囲に土を寄せて固定している。焚口部の床面には粒径50cm×15cmの長い礫が左右両袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの礫を利用して「冂」状に組まれていたものと推定される。燃烧部の床面では口径17cm・底径7.7cm・器高13.7cmの甑形土器が1ヶ焚口部に向かって横転して出土した。焼土は焚口部より中央付近まで分布している。煙道部は煙出部に向かって上がり勾配を呈しているが、ほぼ平坦である。煙出部底面は煙道部底面と同位面である。

〔遺物〕(第175・176図、P L 117 B・118)

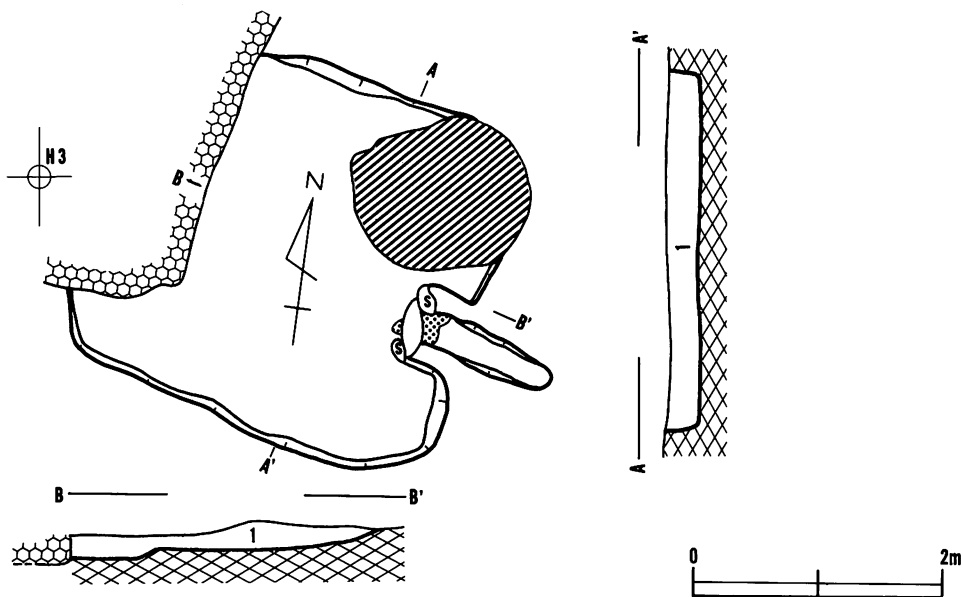
埋土内での出土はほとんどなく、床面直上より出土している。種類は土師器・須恵器があり、器種では坏形土器・甕形土器・甑形土器・小型土器がある。

### 土師器

**坏形土器** (539・540) いずれもロクロ未使用成形で、体部に段をもち底部が丸底のものである。体部は段の位置より外反するが、直線的なもの(539)と内弯気味のもの(540)がある。調整技法は、外面が口縁部ヨコナデ(539)かミガキ(540)、底部は単位不明であるがナデである。内面はミガキ後黒色処理されている。

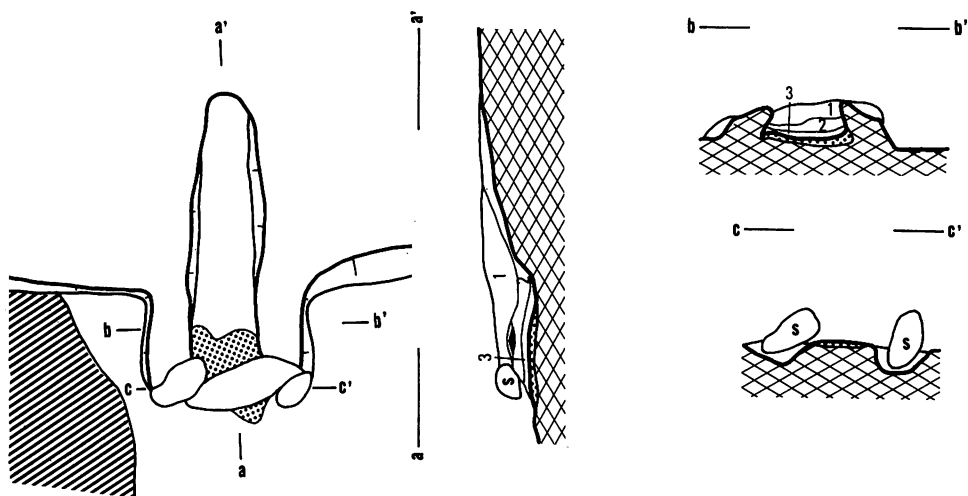
**甕形土器** (541~544) ロクロ未使用成形のものだけである。外傾する体部が、上位に最大径をもって次第に窄んで頸部に移行し、頸部には明瞭な段をもっている。口縁部は頸部の段より外弯するもの(542)・直線的に外反した後上端が外側に小さく曲折するもの(541)・外反した後上端が内弯するもの(543・544)があり、口唇はすべて角張っている。底部はすべて平らに





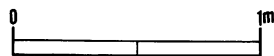
H-2 住居址-2 埋土土層

1. 10YR2/1 黒色 強く締まっている、粘性あり、少量の炭化材・土師器細片・暗褐色粘土質シルトが混入。

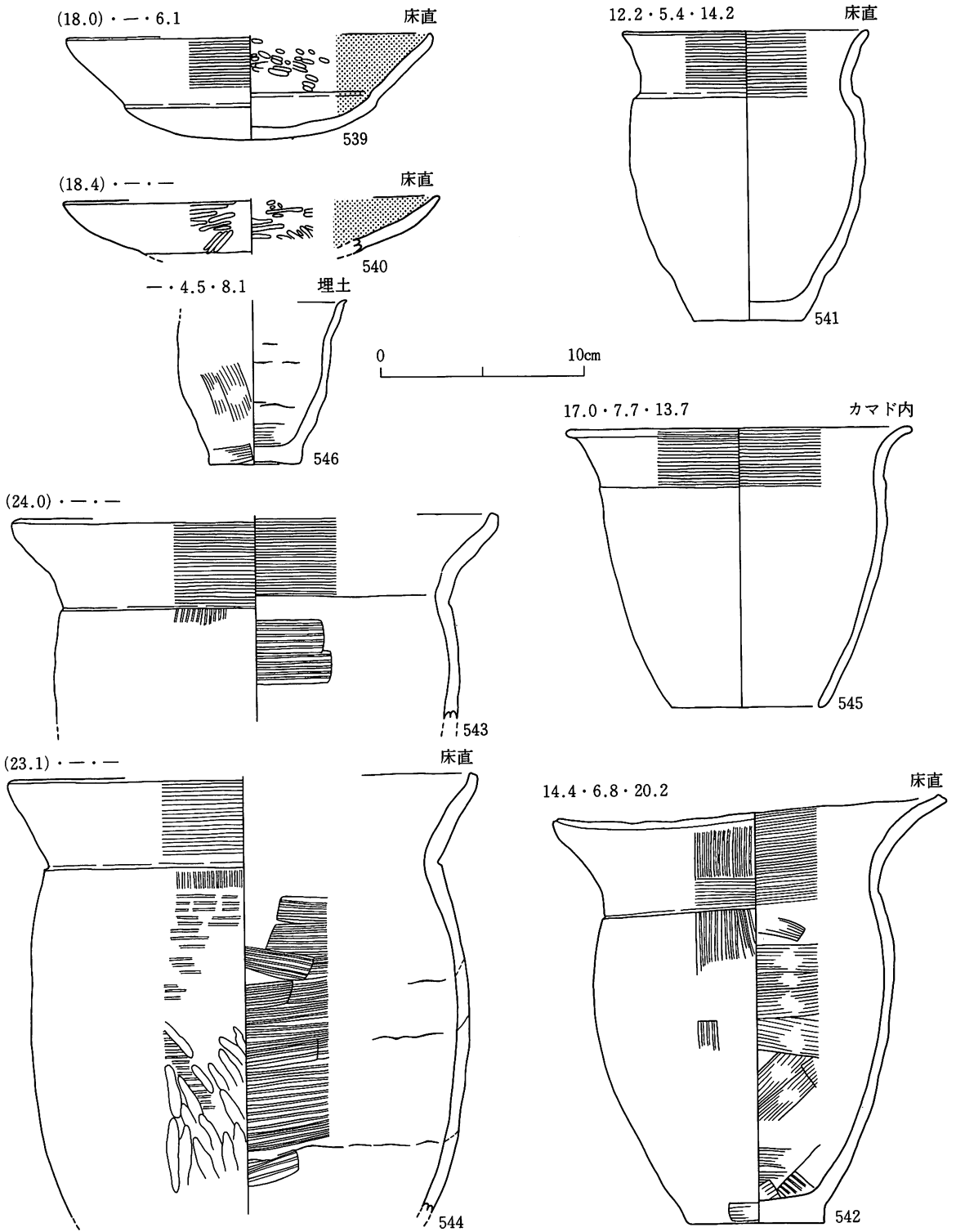


H-2 住居址-2 カマド埋土土層

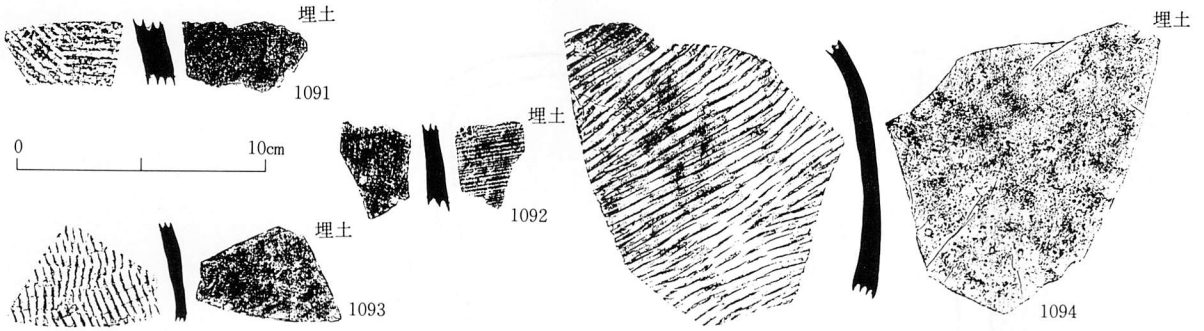
1. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質土 粘性なし。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり。
3. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり、焼土・炭化物が少量混入。



第174図 H-2 住居址-2 (遺構)



第175図 H-2住居址-2(遺物-1)



第176図 H-2住居址-2(遺物-2)

ナデられ、木葉痕をもつものはない。大きさでは大型(543・544)・中型(542)・小型(541)がある。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ(541・543)・ハケメ後ヨコナデ(542)で、内面はいずれもヨコナデである。体部外面はハケメ後スリケシ(542・543)、内面ハケメ後スリケシ(543)・ナデ(542)・ミガキ(541)である。

**甑形土器**(545) ロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を取り去った様な無底型のものである。体部は上位で軽く膨らみ、若干窄んで頸部に移行し、頸部には段が付されている。口縁部は頸部段より大きく外弯して口唇に移行し、口唇は丸味をもっている。調整技法は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は明確でないがナデやミガキが入るらしい。

**小型土器**(546) ロクロ未使用成形で、小型の甕形を示す。底部より内弯気味に外傾する体部は、頸部で若干括れ、小さく外反する口縁部をもつ。口唇部は内削ぎされ端部で外折する。

#### 須恵器

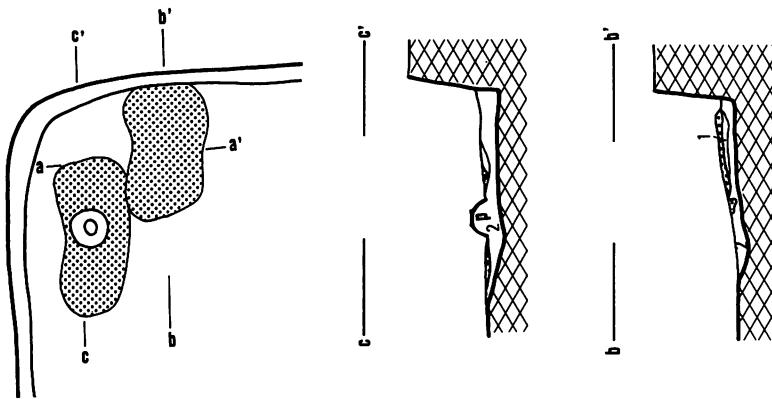
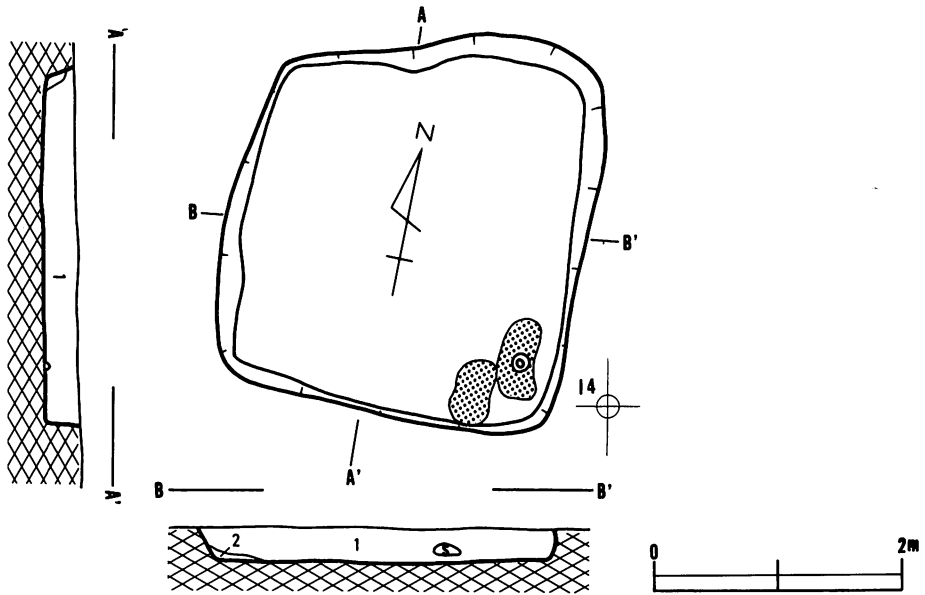
**甕形土器**(1091~1094) 小破片のため器種が不明のものもあるが、大甕の体部破片が主体で他の器種は少ない。1091・1093・1094は外面平行タタキ目で内面凸面当て道具痕をもつもので、1092は外面ヘラケズリで内面カキ目のものである。(高橋与右エ門)

### 56) H-3住居址

[遺構](第177図、PL33A)

本住居址は南側がH-4住居址と重複し、さらに、東側はI-4住居址と重複している。重複遺構との新旧関係は、遺構検出時には本住居址がもっとも新しい遺構と判断されたが、重複遺構の出土遺物等も含めて検討した結果、本住居址はI-4住居址より新しく、H-4住居址よりも古いことが判明した。検出時の誤認であったことを明示し、訂正しておく。

規模は南北約3.2m・東西約2.9mで壁高は約0.35mを測り、壁は床面に対して100度の角度を示している。平面形は北壁の東半が若干張り出しているがほぼ方形を呈し、主軸方向は明確

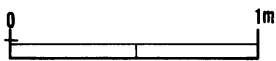


H-3 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色シルト粒・炭化物が混入。
2. 7.5YR4/3 褐色 シルト質土 若干の黒色シルトが混入。

H-3 住居址カマド埋土土層

1. 黒褐色 シルト質土 焼土混じり。
2. 極暗褐色 シルト質土



第177図 H-3 住居址(遺構)

でないが東壁がほぼ磁北を示している。埋土は黒褐色や褐色の粘土質シルトが主体で構成し、色調によって2層に細分されている。1層は褐色のシルト粒や炭化物粒が混入し、2層には黒色を呈するシルト粒が混入している。床は地山の黒褐色を呈するシルトで構築し、貼床せずにそのまま床面としている。床面は平坦で良く締まり固い。壁溝は検出されていない。本住居址の床面では土坑がまったく検出されていない。従って、柱穴をもたない住居址と推定される。

明らかにカマドといえる施設は検出されていない。精査時には、南東隅部の床面で現地性焼土の分布と、焼土範囲内に伏せて置かれた土師器環形土器が検出された。袖部や煙道部は検出されていないが、この焼土を燃焼部の焼土、そして、土師器環形土器を支脚として考えカマドと認定していたが、その後の検討によって、この位置はH-4住居址との重複部分であり、この部分出土の羽釜の破片がH-4住居址出土のものと同接合していることから、いささか疑問が生じてきた。しかし、本住居址の壁高(0.35m)とH-4住居址の壁高(0.3m)とは差があり、この焼土は本住居址に伴うものと断定して大過ないであろう。従って、ここではこの焼土範囲をカマドまたはそれに類するものの残痕と理解しておく。焼土は南壁中央より0.7mほど東に寄って位置している。焼土の範囲は長軸約0.5m・短軸0.3mで、平面分布は南北に長い。焼土と東壁の間には焼土と炭化物の混合した層が分布している。

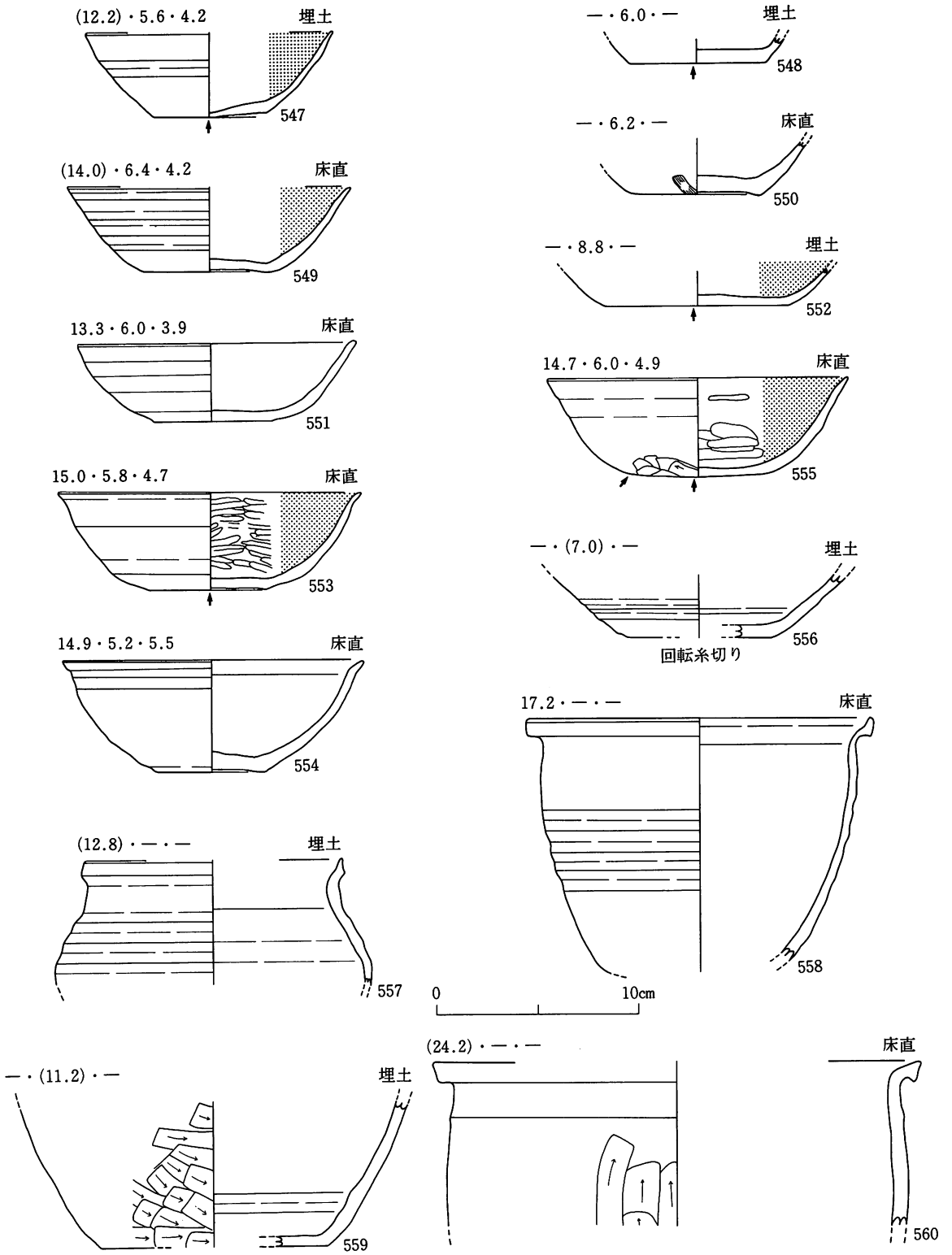
#### 〔遺物〕(第178・179図、P L 119)

埋土内や床面直上で出土している。全体的による数は少ない。出土の状態では、北西隅部の床面より土師器環形土器が3ヶ重って出土したが、他はある部分に偏在することもなく、散在している。種類は土師器・須恵器で、器種では環形土器・甕形土器である。H-4住居址との重複部から出土した羽釜は、明らかにH-4住居址より出土した破片と同接合していることから、H-4住居址に伴う遺物と断定した。

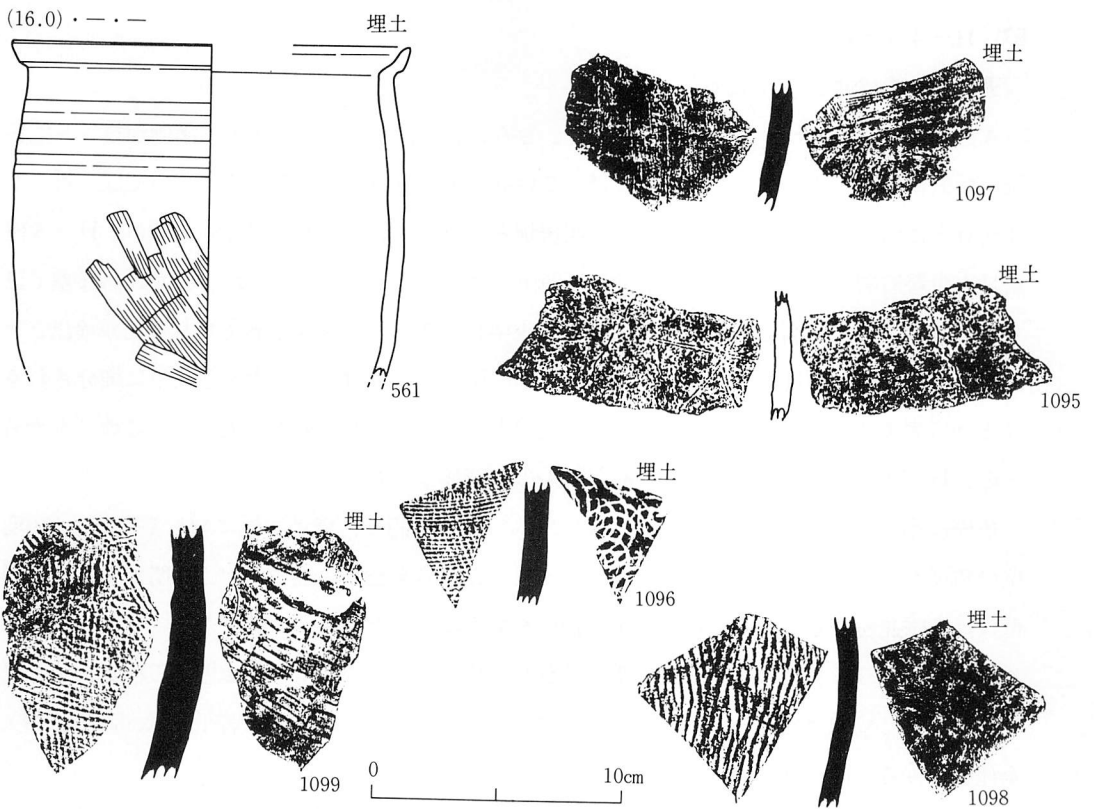
#### 土師器

**環形土器**(547~555) いずれもロクロ使用成形で、内面が黒色処理されるもの(547・549・552・553・555)と無処理のもの(548・550・551・554)がある。体部は外傾し、次第に内弯気味に立ち上がり、口縁部は軽く外反するものが多い。底部は回転糸切りであるが、再調整されるもの(547・548・552・553・555)と無調整のもの(549・550・551・554)がある。内面黒色処理のものは、549を除いた他のものは底部が再調整される。無処理のものは548だけが底部再調整であるが他にはない。全体的な器形では内面黒色処理のものも無処理のものもほとんど差がなく、大きさもほぼ同じである。

**甕形土器**(556~561) いずれもロクロ使用成形である。557の様に体部が膨らみ頸部で窄むものと体部に膨らみのないものがある。口縁部は短かく、外方に屈曲するもの(558・560)と外弯のもの(557)・外反するもの(561)があるが、口唇はいずれも挽き出されて縁帯状を呈して



第178図 H-3住居址(遺物-I)



第179図 H-3 住居址(遺物-2)

いる。大きさでは大型のもの(556・559・560)と中型のもの(557・558・561)がある。底部切り離し技法は、556は回転糸切り無調整であるが、559はナデによって不明である。調整技法は、中型のものは、561の体部下半にナデが入る以外はロクロナデのみであり、大型のものは体部の上位よりヘラケズリ調整が入る。1095は体部の破片であるが、成形後焼成前に篋の先端を利用して「大」字を沈刻している。

**須恵器**

**甕形土器**(1095～1099) いずれも体部の破片である。1096は外面平行タタキ目で内面青海波文であり、1097は外面ヘラケズリ内面ケズリやカキ目である。1098は外面平行タタキ目で内面凸面当て道具痕、1099は内外面ともに平行タタキ目をもっている。(高橋与右エ門)

## 57) H-4 住居址

〔遺構〕(第180図、P L 33B)

本住居址は北側がH-3住居址と重複し、さらに、東側がI-4住居址、南側がH-5住居址、西側がG-4住居址とそれぞれ重複している。重複遺構との新旧関係については、H-3住居址とは前述の通りであるが、G-4住居址とI-4住居址は本住居址より古い。H-5住居址との新旧関係については、遺構検出の段階では明らかにできなかった。床面の高低差では本住居址の方が若干高く、H-5住居址の精査中に本住居址の床面と考えられる面が検出されていない。しかし、H-5住居址の埋土が、本住居址との重複部分で南半と北半に細分されることから考えると、本住居址がH-5住居址の埋土を削剝した可能性が大きい。このことから、一応、H-5住居址より本住居址が新しいものと理解しておく。

規模は南北約4.6m・東西約5.1mで壁高は約0.25mを測り、壁は床面に対して90度～110度位の角度を示している。平面形は東西に若干長い長方形を呈し、主軸方向は不明であるが、西壁はほぼ磁北を示している。埋土は極暗褐色を呈するシルトの単層で構成され、粘性が強く良く締まっており、少量の炭化物粒や褐色のシルト粒が混入している。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構成され、貼床せずにそのまま床面としている。床面には若干起伏があるものの、全体的にみるとほぼ平坦で良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>までの土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が径約0.25mとほぼ同じであるが、深さではP<sub>1</sub>が約0.5m・P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>が0.35m～0.40mと若干差がある。P<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>はそれぞれによって差があり、P<sub>4</sub>は径0.8mで深さ0.1m前後、P<sub>5</sub>は長径1.2m×短径1.1mで深さ0.1m前後、P<sub>6</sub>は長径0.85m×短径0.6mで深さ0.1m前後、P<sub>7</sub>は径0.35m位で深さ0.2mを測る。平面形はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>・P<sub>7</sub>はほぼ円形であるが、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は楕円形や不整形円形を呈している。埋土は、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は粘性の強い黒色を呈するシルトの単層で構成される。P<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>は極暗褐色のシルトで構成されているが、P<sub>5</sub>には焼土や炭化物の混入があり、P<sub>4</sub>は底面東壁際に焼土の分布が観察された。P<sub>7</sub>は黒色のシルトのみで構成される。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は規模がほぼ同一であることや、位置から考えて、本住居址に伴う柱穴を構成するであろう。P<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>は底面の状態が不規則であることや、浅いことから、本住居址に伴う貯蔵穴と考えるよりも、住居址構築の際の部分的な掘方と考えるのが妥当であろう。P<sub>7</sub>は柱穴状の土坑であるが性格は不明である。

本住居址では明らかにカマドと判断できる施設は検出されていない。東壁北東隅部寄りの床面で現地性焼土が検出されているが、袖部や煙道部が明確でない。また、焼土の範囲も0.25m×0.15mと狭く層も薄いことから、カマド燃焼部の残痕かどうかは定かでない。床面中央部や南寄りに、最大径5.6cmで長さ21.7cmを測り、次第に先細りとなる土製支脚と考えられる土製



品が、頭部約0.05mを出して斜位で土中に埋め込まれていた。この周囲にはほんの少々ではあるが焼土の分布が確認され、袖部は検出されていないが、この位置が本住居址の炉跡かもしくはカマド跡であろうと推定された。それ以外のことは不明である。

〔遺物〕(第181・182図、P L 120・121A)

埋土や床面直上より出土しているが、その中でもP<sub>6</sub>内より出土した遺物が多い。床面直上で出土したものの出土状況は散在していた。種類は土師器・須恵器・土製品・鉄製品があり、器種では坏形土器・埴形土器・甕形土器・羽釜土器・土製支脚・名称不明鉄器がある。

#### 土師器

**坏形土器**(562～574) いずれもロクロ使用成形で、内面が黒色処理されるもの(567～569)と無処理のもの(562～566・570～574)がある。底部切り離し技法は回転糸切りで再調整されるものはない。体部は直線的に外反するもの(562・565・570)と、内弯気味に外反するもの(564・567・571・572)があり、口縁部は外弯気味や軽く外反するものが多い。口唇は丸味をもつもの(564・570)と先細りとなるもの(565・567・571・572)がある。大きさは、他に比較して573が若干大き目ではあるが、ほぼ同じであるものの、562・564・565が他に比して若干浅い。573・574は高台のつくものであるが、破片であるため詳細は不明である。なお、内面に黒色処理をされないものには、内面がミガキ調整されるものはない。

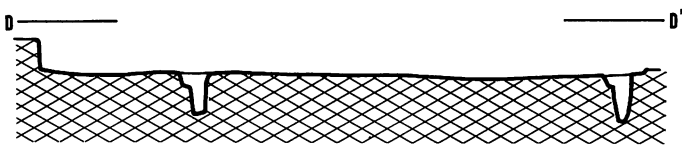
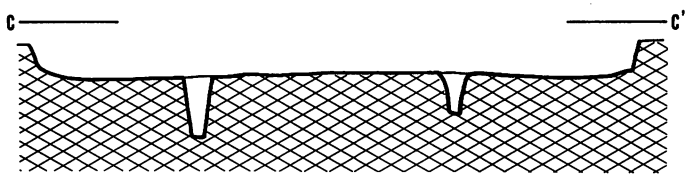
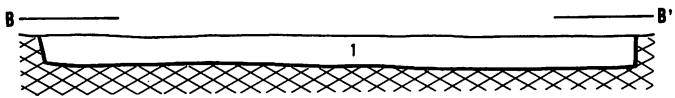
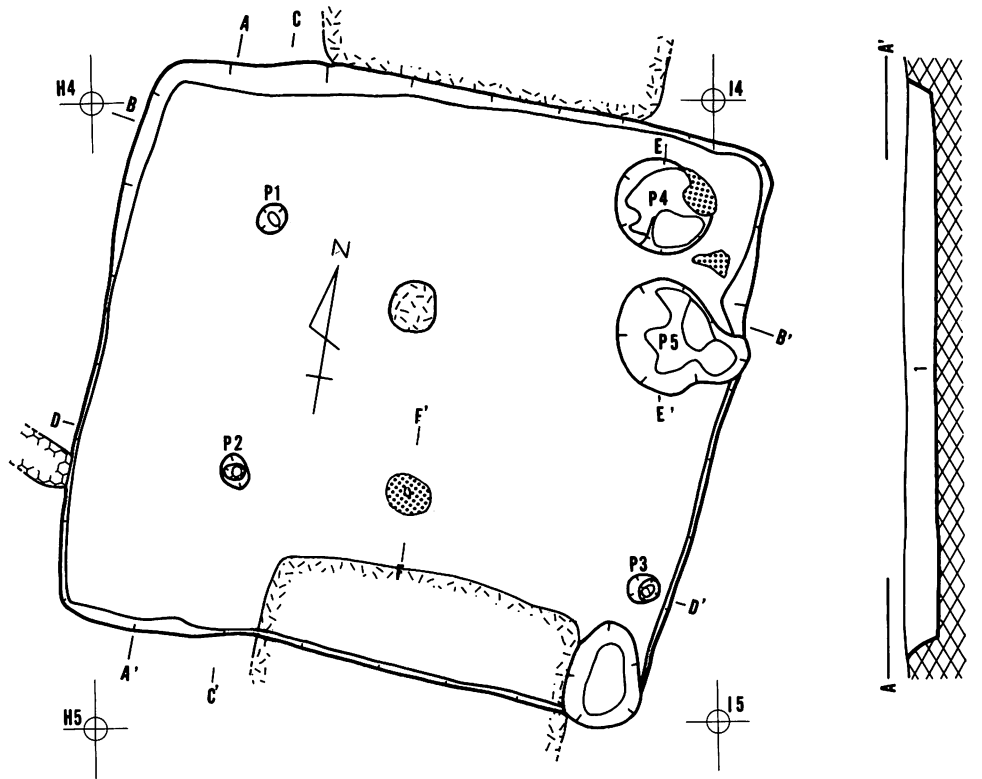
**埴形土器**(575・576) ロクロ使用成形されている。底部を欠失しているので詳細は不明であるが、575は体部が大きく外傾し、576は外傾した体部が軽く内弯しながら立ち上がるものである。残存部分の底部寄りには、いずれも二次的焼成を受けた痕跡をもっており、底部が直接火熱を受ける様な使用目的があったものと判断し、埴としたものである。口縁部は外反するもの(576)と肥厚して縁帯状を呈するもの(575)がある。調整技法は体部上位はロクロナデのみであるが、中位以下はヘラケズリされている。

**甕形土器**(577～580) いずれもロクロ使用成形である。体部～口縁部の破片のため、全体的なことは不明である。体部は若干膨らむものと膨らまないものがあるらしい。口縁部は頸部より外反するもの(577・578・580)と外弯するもの(579)がある。口唇は挽き出されるもの(577・578・580)と先細りとなるもの(579)がある。調整技法は、体部上位はロクロナデのみであるが、中位以下にヘラケズリが入るもの(579)がある。

**羽釜土器**(581) ロクロ使用成形されているが、破片であるため詳細は不明である。体部は若干膨らんだ後次第に口縁部に向かって軽く窄み、口縁部には断面三角の突帯が全周しているらしい。調整技法は、体部上位がロクロナデで、中位以下はヘラケズリされるらしい。

#### 須恵器

**坏形土器**(582～587) いずれもロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切り無調整で



H-4 住居址ビット計測値

長径×短径 深さ

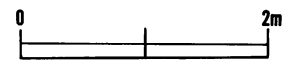
- P<sub>1</sub> 26cm×23cm 50cm
- P<sub>2</sub> 26cm×23cm 34cm
- P<sub>3</sub> 26cm×21cm 39cm
- P<sub>4</sub> 80cm×72cm 12cm
- P<sub>5</sub> 108cm×79cm 13cm

H-4 住居址埋土土層

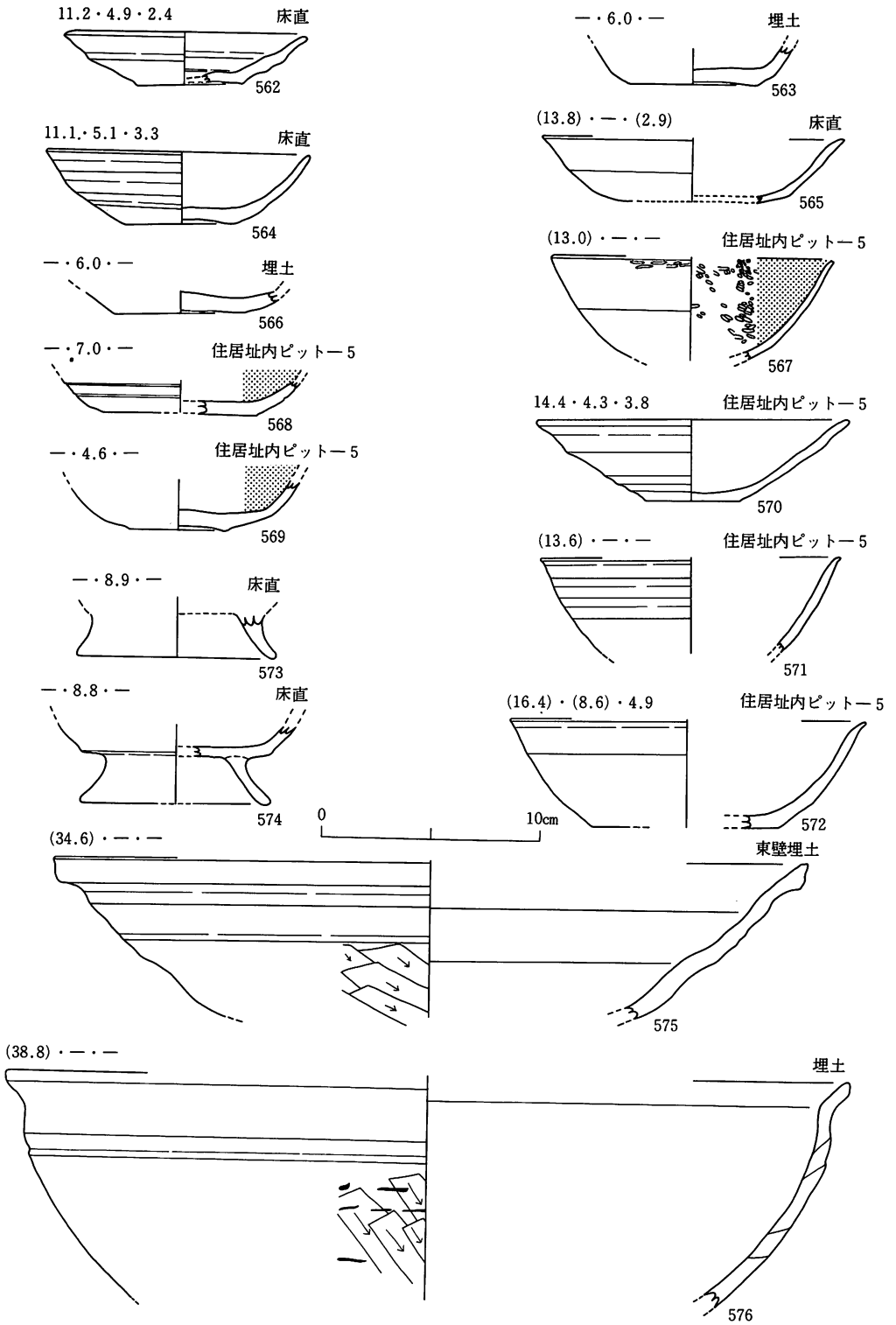
1. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質土 よく締まっている、粘性あり、褐色シルト粒・炭化物の混入あり。

H-4 住居址炉跡埋土土層

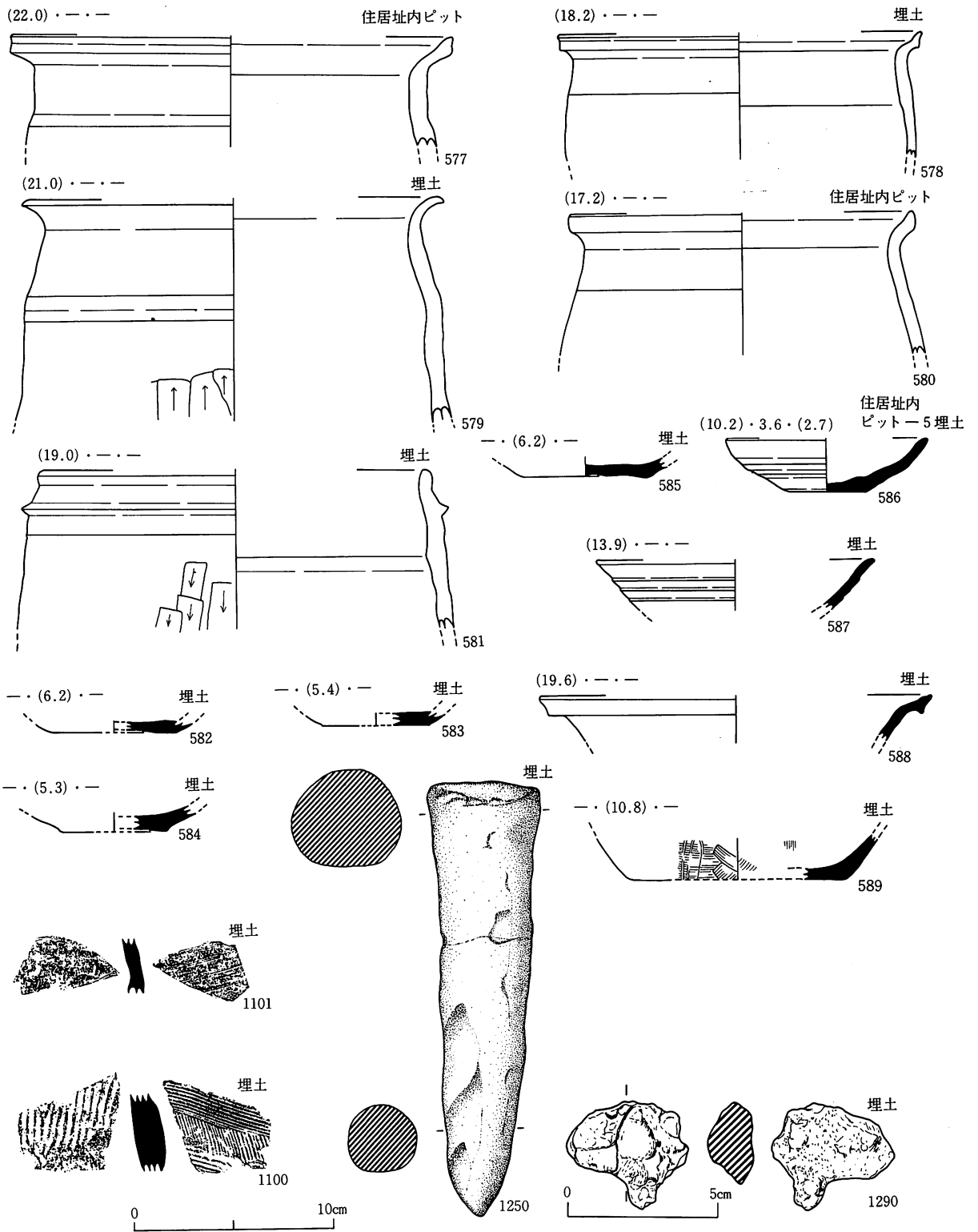
1. 7.5YR2/3 極暗褐色 粘土質シルト
2. 7.5YR2/3 極暗褐色 粘土質シルト 土器片・焼土・炭化物が混入。



第180図 H-4 住居址(遺構)



第181図 H-4住居址(遺物-1)



第182図 H-4 住居址(遺物-2)

ある。586は比較的小形で浅い。他は小破片であるため詳細は不明である。

**甕形土器** (588・589・1100・1101) 588はロクロ使用成形であるが他のものは不明である。589は体部～底部を残存しているが、内外面ともヘラナデやヘラケズリされ、底面もヘラナデによる再調整されている。588は口唇部が挽き出されて縁帯状を呈する口縁部破片である。1100・1101はともに体部破片であるが、1100は外面平行タタキ目で内面カキ目、1101は内外面ともにヘラケズリのものである。

### その他

**土製品** (1250) 先に記述した土製支脚である。形態は長円錐形を呈し、床面より露出した部分に焼成痕をもっている。粘土を丸めて伸ばして作ったものである。

**鉄製品** (1290) 名称不明の鉄器である。 (高橋与右エ門)

## 58) H-5 住居址

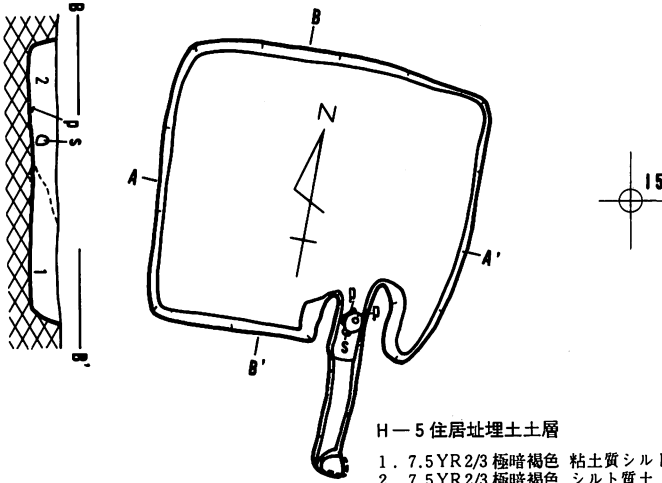
〔遺構〕(第183図、P L 34A)

本住居址は北側でH-4住居址と重複しているが、重複による新旧関係はH-4住居址で記述した理由により、一応本住居址が古い遺構としておく。

規模は南北2.3m位・東西2.5m位で壁高は約0.25mを測り、壁は床面に対して100度前後の角度を示している。平面形は隅丸がかった方形を呈し、主軸方向は南-北方向にありほぼ真南を示している。埋土は極暗褐色を呈する粘性を帯びたシルトの単層で構成されている。南半部分には褐色のシルト粒が多量に混入しているが、北半部分にはほとんど含まれていない。このことは、本住居址の埋土をH-4住居址が削剝した結果によるものであろう。全体的に炭化物粒が混入し、さらに、北半部分には粒径10cm～15cm位の礫が混入している。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面はあまり締まりもなく、やや軟弱であるが、起伏はほとんどなくほぼ平坦である。壁溝は検出されていない。

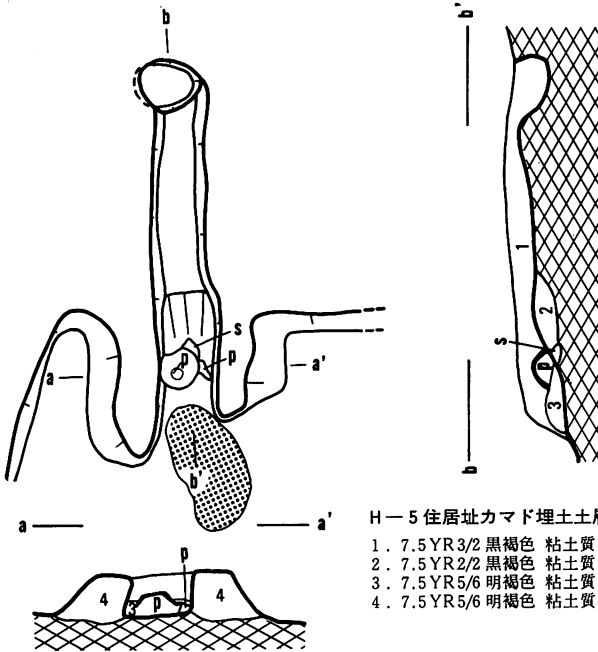
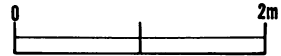
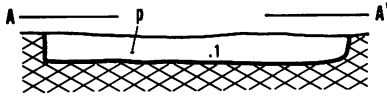
本住居址の床面では土坑が検出されておらず、貯蔵穴や柱穴ともにもたないものと理解される。

カマドは南壁で検出され、壁中央より0.55m東に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部・煙出部で、天井部は検出されていない。袖部は床面に明褐色や黒褐色・暗褐色の粘土質シルトが混合した土を貼り付けて構築しており、礫や土器片の混合はない。燃烧部の底面は床面より若干高く、奥壁に向かって次第に上がり勾配を示しているが、煙道部とは段差をもって接続している。また、燃烧部底面ほぼ中央には口径16.2cm・底径5.4cm・器高5.8cmの坏形土器が1ヶ伏せて置かれ、支脚として使用されていた。燃烧部にはほとんど焼土が残存しておらず、焚口部～前庭部の床面上に炭化物粒の分布が観察されたのみである。煙道部



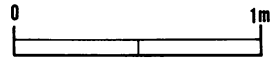
H-5 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/3 極暗褐色 粘土質シルト よく締まっている、粘性あり、褐色シルト粒が多量混入。
2. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質土 粘性あり。

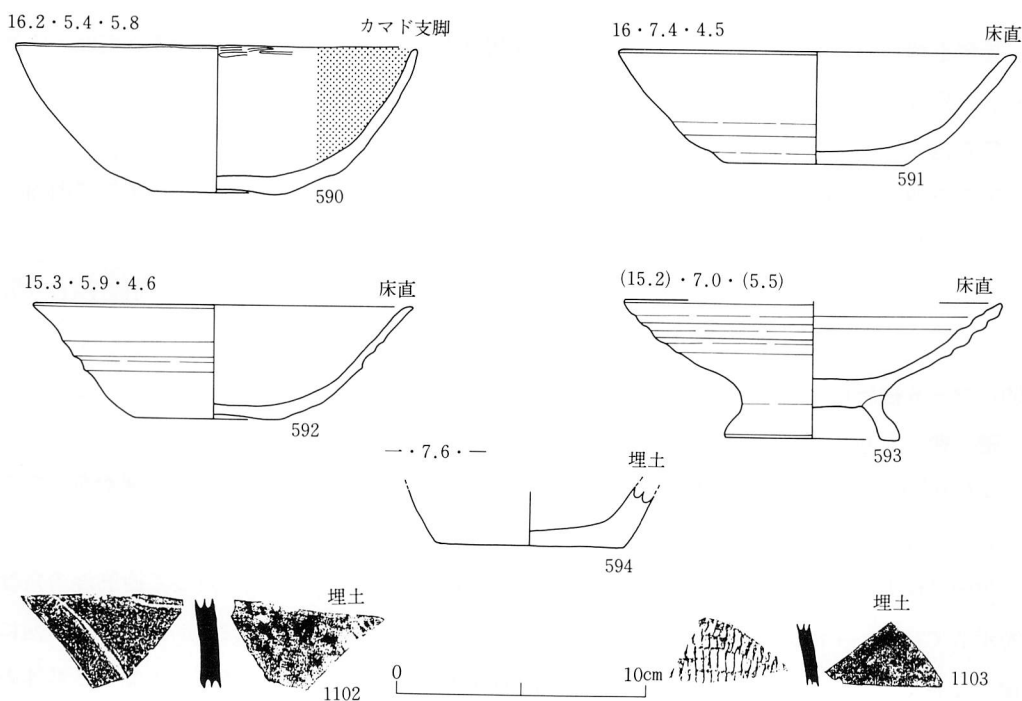


H-5 住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色シルト小ブロック、炭化物が混入。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 砂質褐色シルト小ブロックが混入。
3. 7.5YR5/6 明褐色 粘土質シルト 暗褐色シルトの混入あり。
4. 7.5YR5/6 明褐色 粘土質シルト 黒褐色・暗褐色の粘土質シルトが混入。



第183図 H-5 住居址(遺構)



第184図 H-5 住居址(遺物)

底面は中央部分が若干凹んでいる。煙出部には土坑状の窪みをもつ。

〔遺物〕(第184図、P L 121 B)

埋土内での出土は非常に少なく、ほとんどのものは床面直上より出土している。しかし、床面出土のものはカマド内出土のものを除くと、他のものはすべてH-4住居址との重複部分より出土したものである。前述の様に、H-4住居址が本住居址よりも新しい遺構とすれば、カマド内出土のもの以外はH-4住居址に伴う遺物ということになる。しかし、ここでは、現地でその確認がなされていないので、一応、本住居址の遺物で記述し、出土位置についてはその旨明記しておく。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器が含まれている。

#### 土師器

**坏形土器** (590~593) いずれもロクロ使用成形であるが、590はカマド燃焼部より出土したが、他の591~593はH-4住居址との重複部分で出土している。590は内面がミガキ後黒色処理されていたらしいが、二次焼成によって黒色処理は消えている。591~593は無処理である。底部切り離し技法はいずれも回転糸切り無調整で、593には切り離し後に高台が付されている。

**甕形土器**(594) ロクロ使用成形で、H-4住居址との重複部より出土している。底部～体部を若干残存しているので詳細は不明である。

#### 須恵器

**甕形土器**(1102・1103) ロクロ使用成形の有無は不明である。1102は外面ヘラナデで内面はヨコナデ状である。1103は外面に格子状平行タタキ目で内面素文のものである。

(高橋与右エ門)

### 59) H-6 住居址

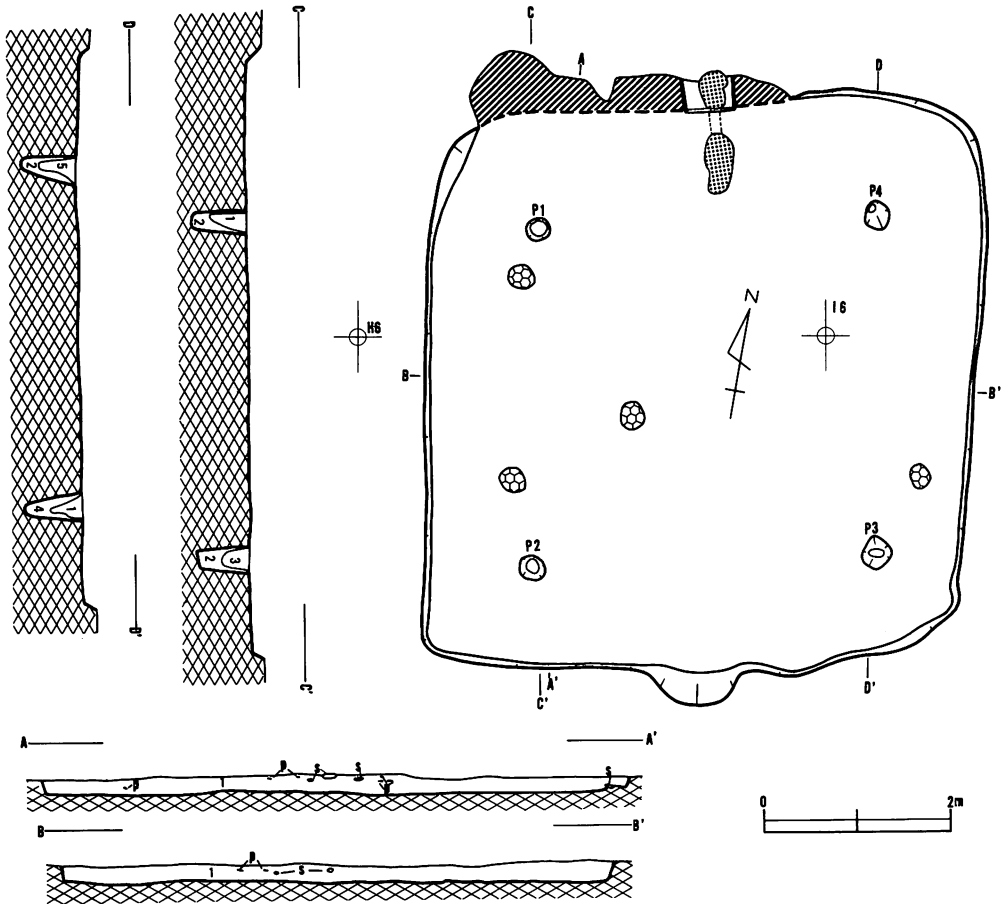
〔遺構〕(第185・186図、P L 34 B)

本住居址は重複遺構もなく単独で検出された。精査中に北壁部分が若干掘りすぎがあったために、一部壁が不明である。

規模は南北約6.2m・東西約5.8mで壁高は約0.2mを測り、壁は床面に対して約95度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は北-南方向にあり磁北に対して5度西に偏している。なお、南壁中央部分は外方に若干張り出している。埋土は黒褐色を呈する粘性の強いシルトの単層で構成され、全体的に褐色のシルト粒や炭化物粒の混入が多く、部分的ではあるが焼土の混入も観察される。埋土最下層や床面直上には炭化材や礫が多く混入しており、炭化材の大きさは長さ30cm～90cmで巾10cm～15cmを測り、礫は粒径10cm～25cmである。炭化材の分布状態は偏在することなく全体に散在する。礫は南半部分に多く偏在し、北半部分は少ない。また、床面中央や東壁寄りの床面では焼土の分布も観察されているが、東壁寄りのものは現地性焼土ではなく、投棄されたものであろう。床面中央のそれは床そのものが焼成を受けた現地性焼土であり、本住居址に直接伴うものである。このような炭化材の出土状況から、本住居址は焼失住居址であろうと考えられるが、上屋の構造を推定する様な残存状態ではない。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面はほとんど起伏もなく、良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>までの土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>ともにほぼ径0.2m～0.3m位で、その中でも径0.25m位のものが多い。深さではP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>はほぼ0.55m～0.6mの範囲であり、P<sub>5</sub>～P<sub>8</sub>はそれぞれ、0.47m・0.3m・0.63m・0.27mと差がある。平面形はP<sub>3</sub>が方形気味である以外は全て円形を示している。埋土についてはP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>しか記録されていないが、黒褐色を呈するシルトで構成されており、混入物によって2層に細分されている。混入物としては炭化物や褐色のシルト粒が観察され、特に、2層には褐色のシルト粒を多量に混入している。いずれの土坑の埋土も粘性が強い。柱当りの確認された土坑はない。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本住居址の対角線上に位置することや、規模がほぼ同一であることから本住居





H-6 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 よく締まっている、粘性あり、少量の炭化物・焼土・褐色シルトの混入あり。

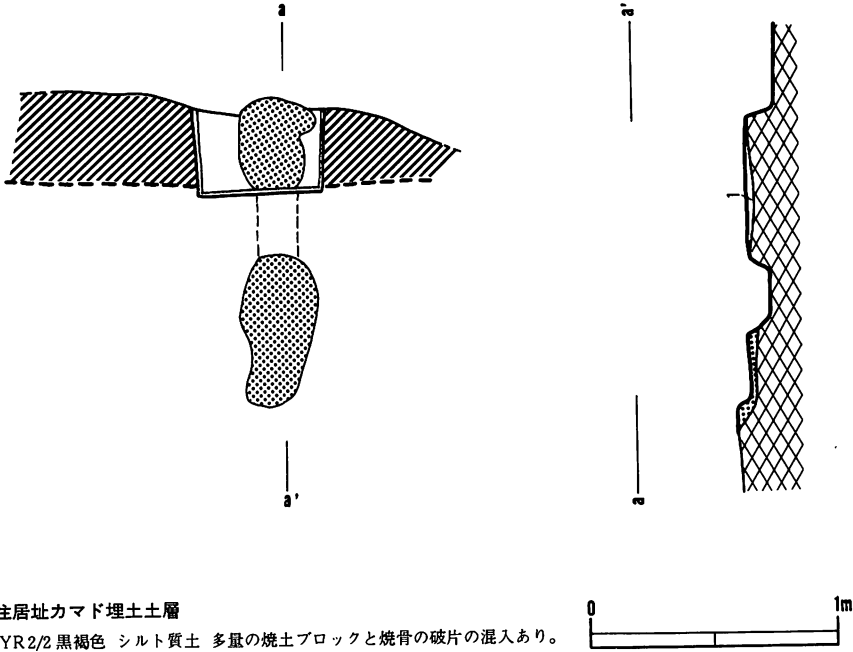
H-6 住居址ピット計測値  
長径×短径 深さ

P <sub>1</sub>	25cm×23cm	57.8cm
P <sub>2</sub>	28cm×26cm	54.5cm
P <sub>3</sub>	33cm×32cm	27.5cm
P <sub>4</sub>	28cm×26cm	58.7cm

H-6 住居址ピット埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり、炭化物・褐色シルトブロックが混入。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 黄褐色の砂質シルトブロックが混入。
3. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 多量の褐色シルトブロックが混入。
4. 非常に多くの炭化物が混入。
5. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり、褐色シルトブロック混入。

第185図 H-6 住居址(遺構一)



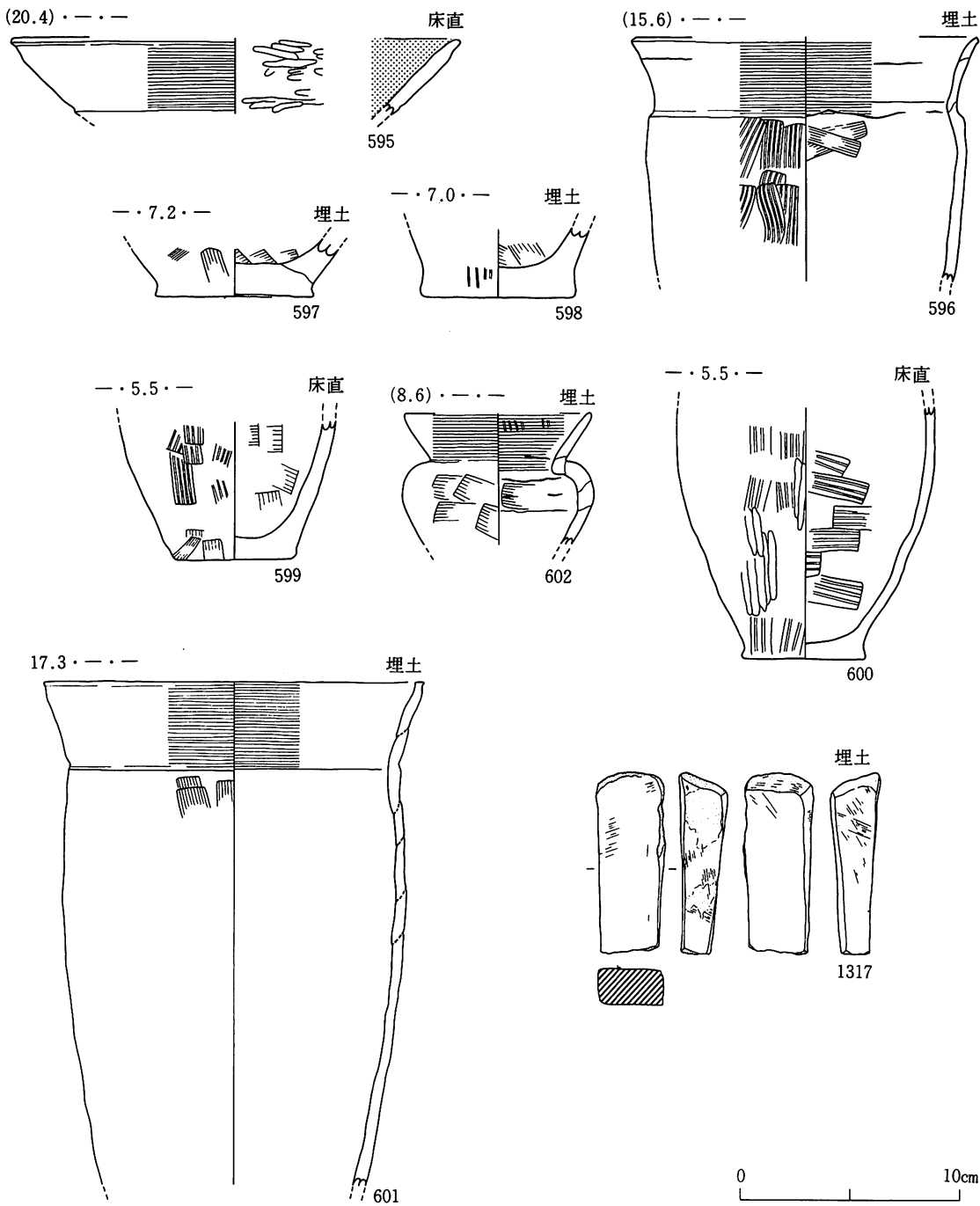
第186図 H-6 住居址(遺構-2)

址の柱穴を構成するであろう。P<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>は柱穴状を呈しているが、本住居址の検出時にその存在が確認されていた土坑であり、すべて本住居址に直接伴わない。

本住居址では明らかにカマドといえる様な施設は検出されていない。しかし、本住居址の床面直上では前述の焼土以外に北寄りでも焼土が検出され、精査の結果現地性焼土であったことから、この位置をカマド燃焼部の残痕と断定した。従って、この焼土以外にカマドに関連する遺構は検出されていない。北壁中央より0.15m東に寄って位置し、0.6m×0.3m位の分布範囲をもち、層厚は2cm位である。また、この焼土北側の壁外でも現地性焼土が検出され、前述の焼土と連続しているものと推定される。焼土の分布範囲の周囲には焼骨の小破片が多く散布していたが原形を残しているものはなかった。精査中に袖部と考えられる土層変化は確認されていないが、黒色を呈するシルトの貼り付けのみによって構築されておれば、精査中に掘り取ってしまった可能性がある。煙道部や煙出部は検出されていない。おそらく、長い煙道部をもたない住居址であろう。

[遺物](第187図、P L 121C・122A)

精査中に埋土内より多く出土しているが、小破片が主体を占めており、図化されたものは少



第187图 H-6住居址(遺物)

ない。床面直上よりの出土は少なく、出土したのも破片のみであり完形土器は含まれていない。種類は土師器と石製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・小型土器・砥石が含まれている。

### 土師器

**坏形土器**(595) ロクロ未使用成形のもので、体部に段をもつものらしい。小破片では他にも出土しているが、図化できるものは他にない。底部は出土していないので、底部形態は不明である。体部～口縁部は体部段の位置より直線的に外反し、口唇部は丸味をもっている。調整技法は体部～口縁部外面ヨコナデで内面はミガキ後黒色処理される。

**甕形土器**(596～601) ロクロ未使用成形のもののみである。底部より外傾する体部は、中位～上位に最大径をもち、頸部で軽い段をもつて若干窄み、口縁部は頸部段の位置より直線的に若干外反する。601の口縁部上端は幾分内弯して口唇に移行し、口唇は平らである。596は直線的に外反した口縁部がそのまま口唇に移行し、口唇は平らである。大きさは大型(601)・中型(596)・小型(600)があるらしい。底部周囲には軽い突出が付き、底面は良くナデられ木葉痕のものはない。調整技法は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部は外面ハケメ(596・599)・ハケメ後ミガキ(601)・ヘラナデの入るもの(597・601)があり、内面はハケメ(600)・ナデ(596～599)がある。なお、596と601には体部に積み上げ痕を明瞭に残している。

**小型土器**(602) ロクロ未使用成形のもので、小型壺に近いものである。底部を欠失しているので底部形態は不明であるが、底部より外傾する体部は肩部に最大径をもち、頸部で強く窄んでいる。口縁部は頸部より直線的に大きく外反して口唇に移行し、口唇は丸味をもっている。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ後ヨコナデで、体部は内外面ともヘラナデである。なお、体部には積み上げ痕を明瞭に残している。

### その他

**石製品**(1317) 4面に使用面をもつ砥石である。断面が長方形で、平面形が細長いものである。  
(高橋与右エ門)

## 60) H-11住居址

[遺構](第188・189図、P L 35A)

本住居址は重複遺構もなく、単独で検出された。

規模は、北南6.2m・東西6.0mで壁高は0.2mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は主軸に対して若干縦長で、各壁が外方に張り出す隅丸方形を呈し、主軸は北北西―南南東方向にあり磁北に対して20度西に偏している。埋土は黒褐色を呈する粘土質のシルトで構成され、良く締まって固い。混入物や色調によってカマド部埋土を含めて8層に細分

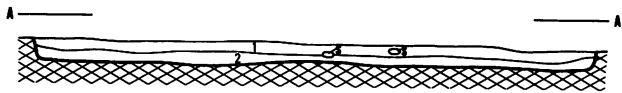
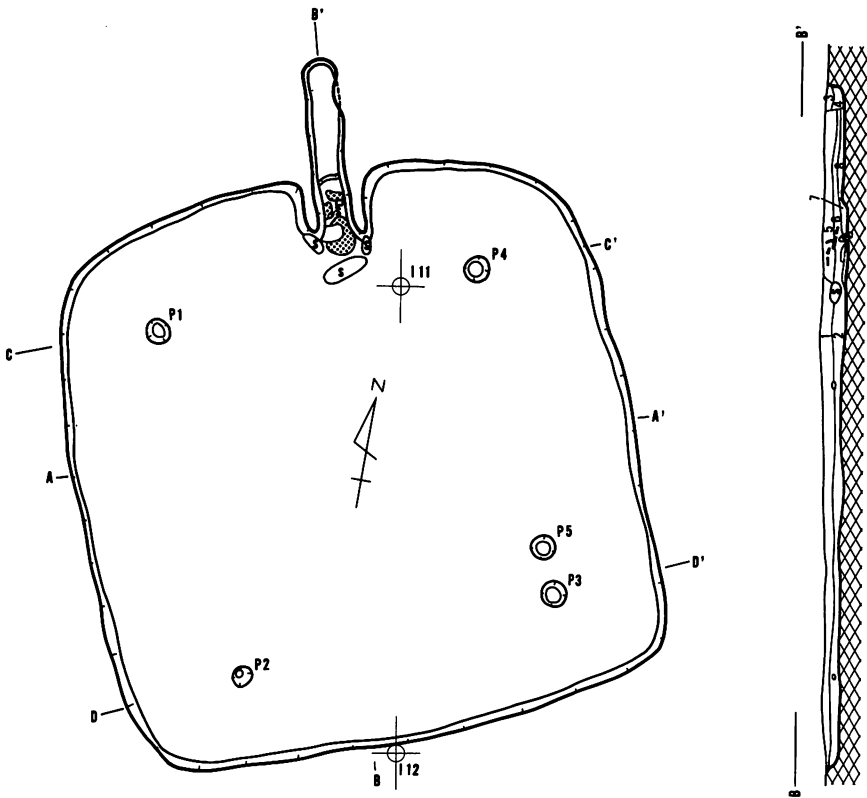
されている。混入物としては全体的に酸化鉄の集積がみられ、他に埋土1層には褐色を呈するシルト粒が混入している。2層下位には粒径10cm～20cmの礫が多く混入している。カマド部の埋土も大差がみられない。床は地山の黒褐色を呈するシルトが主体で構築されているが、南西部～南部の床面には段丘礫層が露出している。北東部では一部が褐色を呈するシルトで貼って床面としている。段丘礫層の露出している床面では若干起伏がみられるものの、総じて平坦であり、良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の土坑が検出されている。規模は径0.2m～0.28mの範囲で、深さはP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>では0.25m～0.30mの範囲であるが、P<sub>5</sub>は0.07mである。平面形はいずれも円形または楕円形を呈している。埋土は褐色・黒褐色・黒色等のシルトや粘土質シルトで構成され、色調や混入物によって細分されている。混入物としては褐色を呈するシルト粒が全層に混入し、他に1層には酸化鉄の集積、2層下位には粒径3cm～5cmの礫の混入が観察された。柱痕跡の確認された土坑はない。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本住居址の対角線上に位置することや、規模もほぼ同一であることから本住居址の柱穴を構成しているであろう。P<sub>5</sub>は柱穴状を呈しているが、深さが若干浅いことから支柱穴的性格の土坑と考えられる。貯蔵穴状の土坑は検出されていない。

カマドは北北西壁で検出され、壁中央より0.25m東に寄って位置する。検出された部分は、袖部・燃烧部・カマド埋設土器・支脚・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は地山の削り出しによって構築され、シルトの貼り付けは観察されない。左右両袖部の焚口付近には粒径35cm×10cmの細長い礫が縦位で0.1mほど埋め込まれている。また、焚口部の床面にも粒径50cm×15cmの細長い礫が左右両袖部の間を塞ぐ様な状態で1個横転していた。このことから、焚口部は3ヶの細長い礫によって構成され、「□」状に組まれていたものと推定される。燃烧部は掘り窪めもなく、床面とほぼ同位で奥壁まで続き、煙道部とは0.1mの段差で接続している。カマド内には並列で2ヶ体の土師器甕形土器が埋設されており、焚口部に向かって横転していた。埋設土器の大きさは、左側で口径21.1cm・底径7.3cm・器高31.1cm、右側は口径18.7cm・底径6.3cm・器高29.3cmである。左側埋設土器の下には粒径15cm×7cmの礫が縦位で0.1mほど埋め込まれており、支脚として利用していた。燃烧部の焼土は焚口部付近より支脚前付近まで観察される。前庭部や焚口部付近の床面には焼骨の小破片が散在していたが、原形を知る様なものはなかった。煙道部底面は平坦でほぼ水平に近く、煙出部に土坑状の掘り込みは観察されない。

〔遺物〕(第190・191・192図、P L 122 B・123・124・125 A)

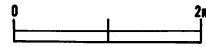
埋土内での出土は少なく、ほとんどの遺物は床面直上より出土した。その中でも、カマド右側より出土したものが多い。種類は土師器・須恵器があり、器種としては坏形土器・甕形土器・



H-11住居址ビット計測値

長径×短径 深さ

P <sub>1</sub>	26cm×25cm	31.5cm
P <sub>2</sub>	22cm×21cm	29.0cm
P <sub>3</sub>	26cm×26cm	25.5cm
P <sub>4</sub>	28cm×27cm	28.5cm
P <sub>5</sub>	25cm×25cm	8.0cm



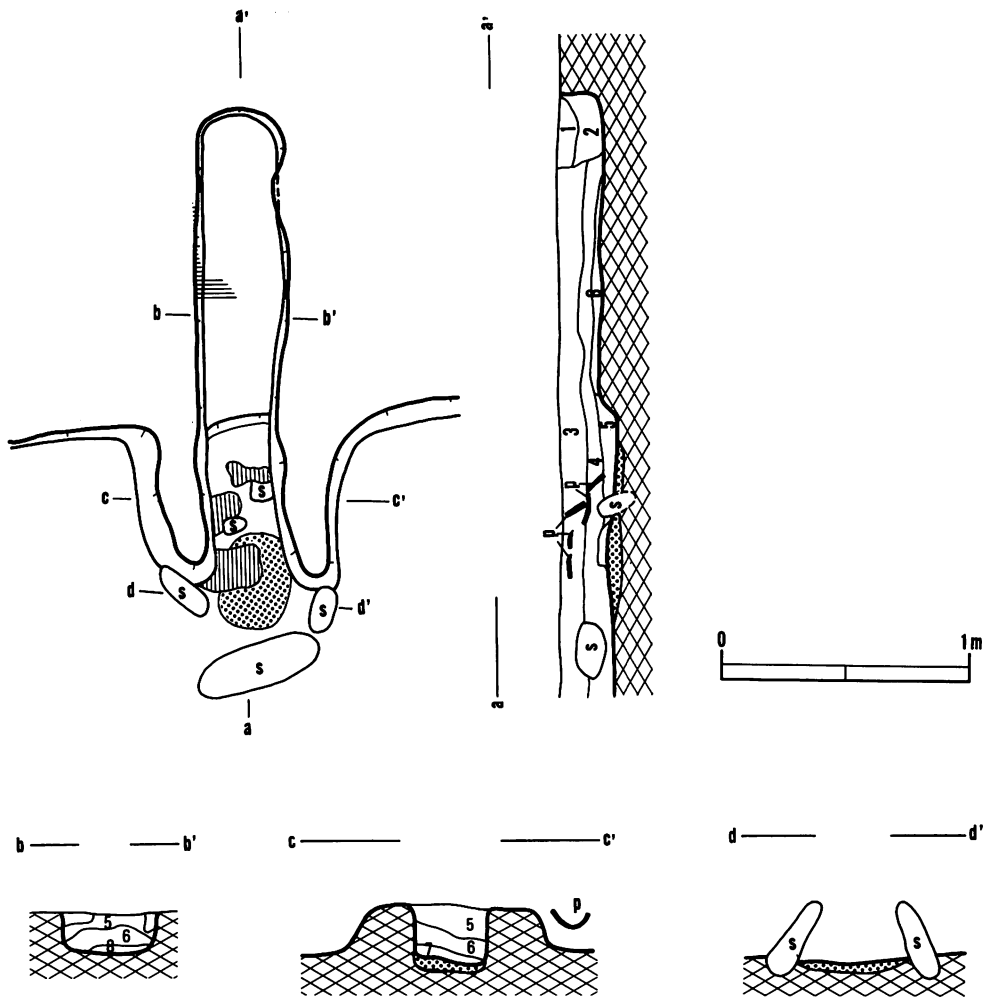
H-11住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に強く締まっている、粘性あり、褐色シルトブロック、水酸化鉄の沈着物が多量に混入。
2. 7.5YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に強く締まっている、粘性あり、水酸化鉄の含有量が1層より多い。
3. 7.5YR2/1~2/2 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、微量の焼土と明褐色シルトブロックが混入。
4. 7.5YR2/1 黒褐色 粘土質シルト 非常に強く締まっている、少量の炭、1mm大の石を混入。
5. 7.5YR2/2~3/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に強く締まっている、明褐色シルトブロックと水酸化鉄分が多く混入。
6. 7.5YR3/2~3/3 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、少量の炭と水酸化鉄分が混入。
7. 7.5YR2/1~2/2 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性あり、水酸化鉄分が多く混入。
8. 7.5YR2/1 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、褐色シルトブロックが若干混入。

H-11住居址ビット埋土土層

1. 7.5YR2/1~2/2 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、褐色シルトブロックと水酸化鉄分が多量に混入。
2. 7.5YR3/2~2/2 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、下部に円礫が混入。
3. 7.5YR3/4~4/4 褐色~暗褐色 粘土質シルト 強く締まっている、褐色土がブロックで混入。

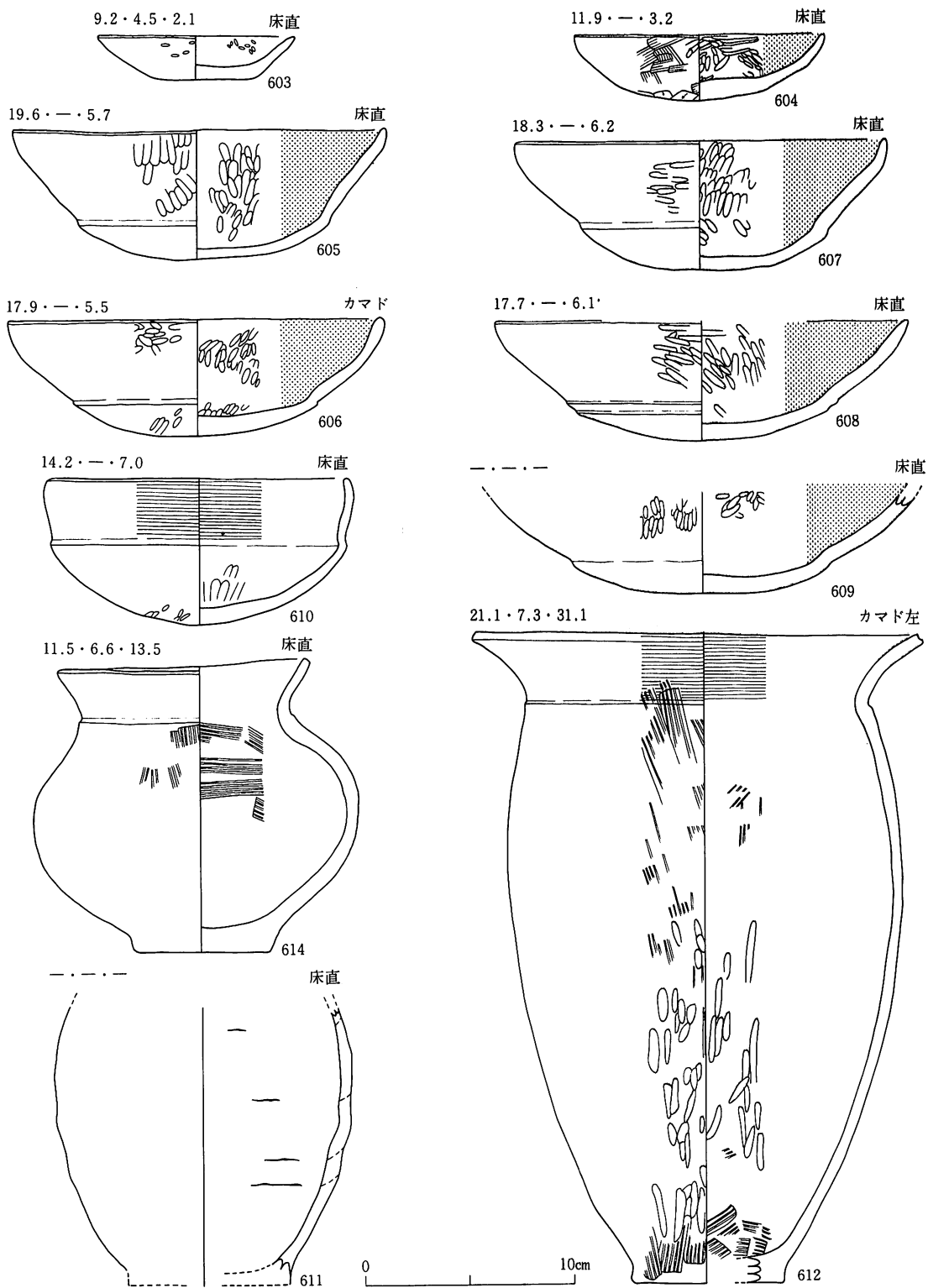
第188図 H-11住居址(遺構一I)



H-11住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR2/1~2/2 黒色 粘土質シルト 強く締まっている、微量の焼土と明褐色シルトブロックが混入。
2. 7.5YR2/1 黒色 強く締まっている、下部に少量の炭と1cm大の石を混入。
3. 7.5YR2/2~3/2 黒褐色 粘土質シルト 非常に強く締まっている、明褐色シルトブロックと水酸化鉄分が多量に混入。
4. 7.5YR3/2~3/3 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、水酸化鉄分と下部に炭を少量混入。
5. 7.5YR2/1~2/2 黒褐色 粘土質シルト 強く締まっている、粘性あり、多量の水酸化鉄分が混入。
6. 7.5YR2/1 黒色 粘土質シルト 強く締まっている、褐色シルトブロックが少量混入。

第189図 H-11住居址(遺構-2)

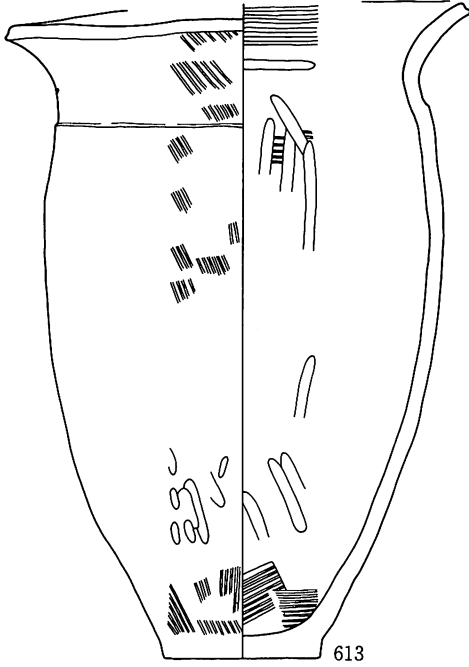


第190図 H-11住居址(遺物-1)



(18.7)・6.3・29.3

カマド右



613

—・12.0・—

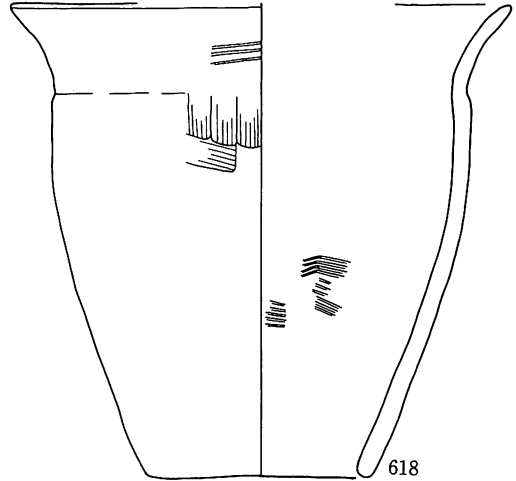
床直



619

(20.2)・9.1・19.0

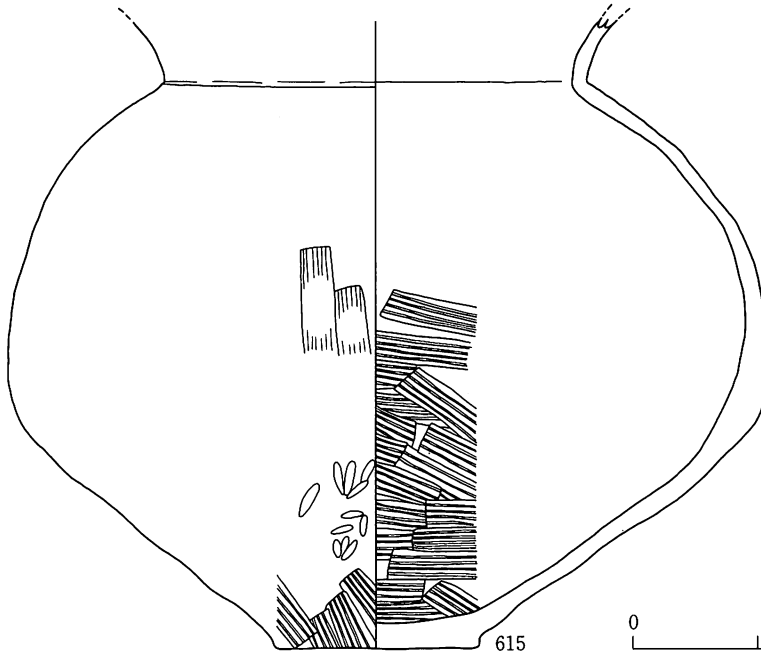
床直



618

—・8.0・—

床直



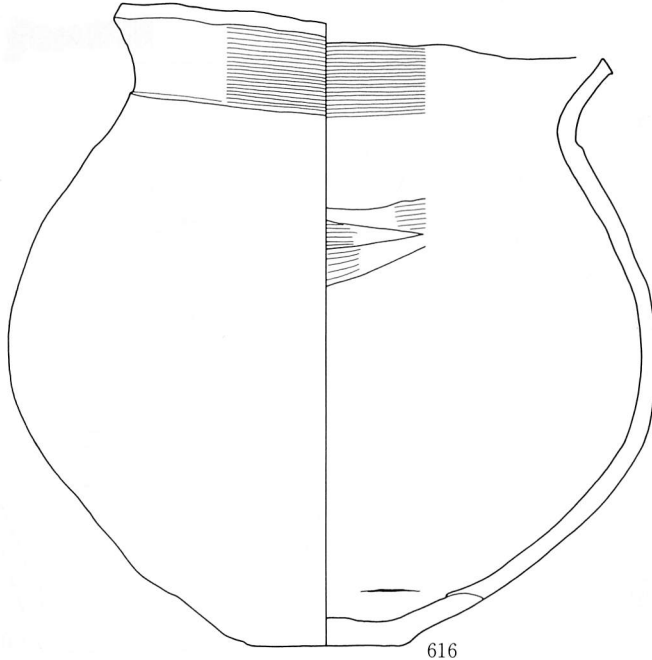
615



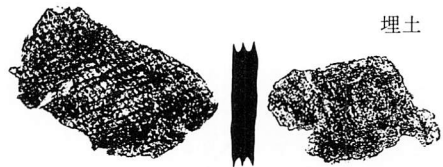
第191図 H-11住居址(遺物-2)

19.5 · 6.2 · 25.0

床直



616

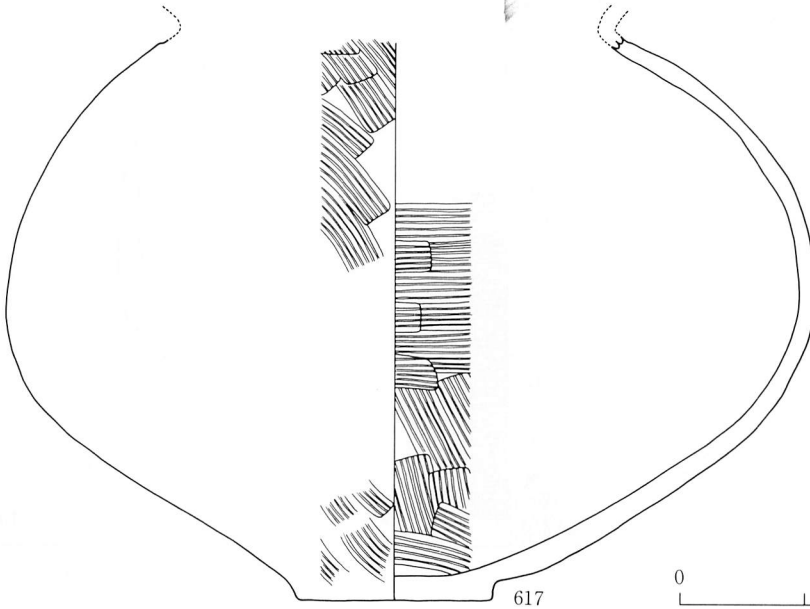


埋土

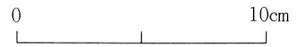
1104

— · 8.0 · —

床直



617



第192図 H-II住居址(遺物-3)

甌形土器が含まれている。

### 土師器

**坏形土器** (603～610) いずれもロクロ未使用成形で、605～610は体部に段をもち、底部形態は丸底のものである。603・604は小型で浅く、体部に段もなく皿形に近い形態のもので、底部形態も603は平底風丸底、604は丸底である。605～609の中では608・609が他より若干大き目であるが他はほとんど同じ大きさである。形態は、体部～口縁部が段の位置より外反し口縁部の上端で軽く内弯するもの(605～609)と段より軽く外反して口縁部に移行し上端で内弯しながら口唇に続き全体的にみると体部～口縁部がほぼ直立気味のもの(610)がある。口唇は丸味をもつもの(606・610)と先細りとなるもの(603～605・607・608)がある。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ(610)・ミガキ(603・605～609)・ナデ(604)のものがあり、底部はケズリ(604)・ナデ一部ミガキ(606・610)・ナデ(603・605・607～609)がある。

**甕形土器** (611～617) ロクロ未使用成形のもののみで、体部が若干膨らむもの(611・612・613)と球胴型のもの(614～617)がある。体部最大径の位置は中位～上位にある。頸部は体部より窄んで段をもっており、口縁部は段の位置より外弯気味に外反するもの(612・613・615)と直線的に外反するもの(614)があり、口唇は平らにナデられ沈線状の凹みをもつもの(612・613)・平らなもの(616)・角張るもの(614)がある。底部周囲に突出はなく、底面は良くナデられ木葉痕のものはない。調整技法は、口縁部は外面がヨコナデ(612・616)・ハケメ後ヨコナデ(613)があり、内面はヨコナデ(612・613・616)である。体部は外面がハケメ後スリケシやミガキ(612・613・615)・ハケメ後スリケシ(614・617)・ナデかミガキとおもわれるもの(611・616)があり、内面はハケメ後ミガキ(612・613)・ハケメ一部スリケシ(615・617)・ナデ(616)のものがある。なお、611の体部には巻き上げ痕を明瞭に残している。

**甌形土器** (618) ロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を取り去った形態で無底型のものである。底部より外傾する体部は中位よりやや直立気味となって頸部に続き、頸部には段をもっている。口縁部は軽く外弯気味に外反して口唇部に続き、口唇は先細りとなっている。調整技法は、口縁部外面と体部内面に一部ハケメを残しているが、他はナデやミガキである。

### 須恵器

**甕形土器** (619・1104) 619は床上約10cm位の埋土内より出土した瓶と考えられる高台の付された底部破片である。高台部は貼り付けであるため、底部切り離し技法は不明である。ロクロ使用の有無は不明である。1104は体部の小破片である。外面に格子目状平行タタキ目・内面は素文の調整痕をもつ。

(高橋義介)

## 61) 1-3 住居址

〔遺構〕(第193図、P L 35 B)

本住居址は重複遺構もなく単独で検出されている。

規模は北西-南東約2.7m・北東-南西約3.1mで壁高は約0.2mを測り、壁は床に対して約120度の角度を示している。平面形は主軸に対して若干横長の長方形を呈し、主軸方向は北西-南東方向にあり磁北に対して55度ほど西に偏している。埋土は黒褐色や黒色のシルトで構成され、褐色のシルト粒の混入程度や色調で2層に細分されている。また、本住居址の埋土は全体的に固く、ボコボコしている。埋土上位より床面直上で粒径15cm~30cm位を測る礫が混入している。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面には起伏もなくほぼ平坦で、良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面では土坑が全く検出されていない。

カマドは北西壁で検出され、壁中央より0.15mほど北に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃焼部・支脚・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は地山からの削り出しによって構築され、シルトの貼り付けはない。左右袖部ともに焚口付近には粒径が左側15cm×5cm位、右側25cm×5cm位を測る各1ヶの礫が向かい合う様な状態で内傾しているのが検出されている。また、焚口部の床面には粒径33cm×15cmの礫が左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの礫で構成され、「□」状に組み立てたものと推定される。燃焼部底面は掘り窪めもなく床面と同位面で奥壁まで続き、煙道部とは段差をもって接続している。なお、燃焼部左側袖部寄りの底面には粒径13cm×5cmの礫が斜位に0.05m位埋め込んで支脚としていた。焼土は前庭部より支脚前付近まで分布し、強い焼成痕を残している。煙道部底面は奥壁部分が若干盛り上がっているものの他は床面とほぼ同位で、起伏もなくほぼ平坦である。煙出部に土坑状の掘り込みはない。

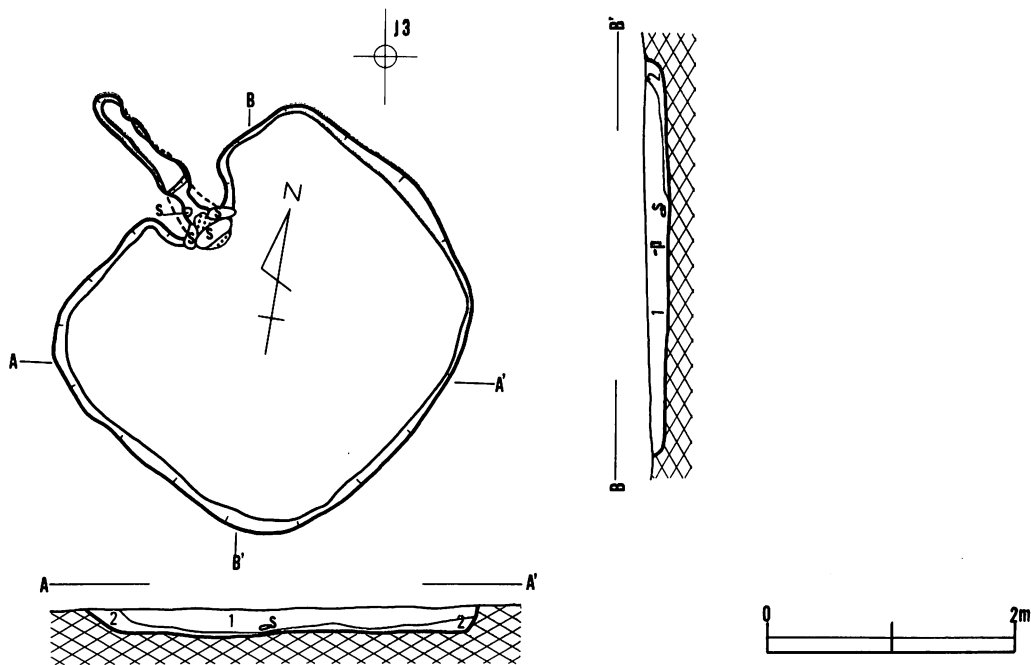
〔遺物〕

埋土内で土器片が7ヶ出土した以外床面での出土はなかった。出土した破片は小破片であり図化できるものは含まれていない。種類は土師器に限定され、器種では坏形土器と甕形土器がある。

**土師器**

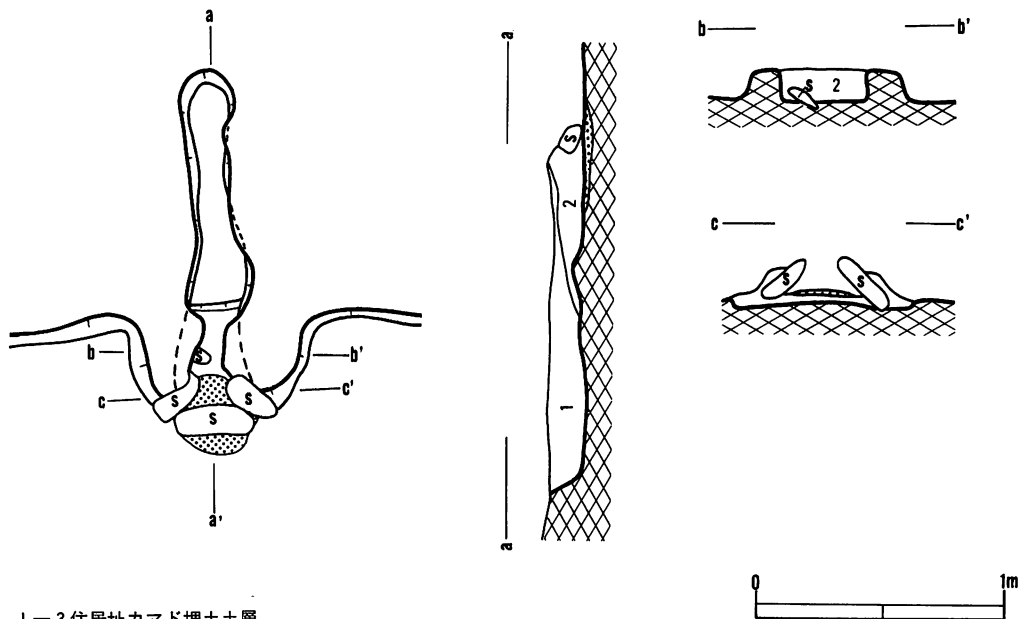
**坏形土器** ロクロ未使用成形のもので、内面が黒色処理されているものであった。底部器形は不明である。

**甕形土器** ロクロ未使用成形のものであったが、体部破片のみであるので、全体的なことは不明である。  
(高橋与右エ門)



1-3 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土 堅くよく締まっている、褐色シルトブロックが混入。
2. 7.5YR2/1黒色 シルト質土 褐色シルトブロックの混入が少ない。



1-3 住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土 締まりなし、炭化物が多量に混入。
2. 7.5YR3/2黒褐色 シルト質土 やや締まっている、少量の炭化物と焼土の混入あり。

第193図 1-3 住居址(遺構)

## 62) I-4 住居址

〔遺構〕(第194・195図、P L 36A)

本住居址は北西側でH-3住居址と重複し、さらに、西側でH-4住居址、南西側でH-5住居址と重複している。重複する遺構との新旧関係は、本住居址が重複するいずれの住居址よりも古い。

規模は北-南約6.3mであるが東西方向は重複遺構による削剝によって不明である。壁高は約0.2mを測り、壁は床面に対して約105度の角度を示している。平面形は明確でないが、検出された部分から隅丸方形かもしくは隅丸長方形を呈するものと推定され、主軸方向は北-南方向にあり磁北に対して約10度西に偏している。埋土は黒褐色や暗褐色のシルトで構成され、色調によって2層に細分されている。混入物は、1層には褐色のシルト粒が混入し、他に南東部や北東隅部には焼土粒の混入が多い。また、下位層には炭化物の混入もみられる。全体的にみると粘性が強く、良く締まっている。埋土最下層や床面直上には粒径30cm×10cm位の礫が多く混入し、さらに、南壁寄りの床面では、巾5cm～15cmで長さ1.0m～1.4mの炭化材の分布が検出されている。この様な状況から本住居址は焼失住居址である可能性が強いが、残存状態から上屋の状態を推定できる様な状況ではない。なお、東壁中央やや北寄りの、東壁際の床面で淡い褐灰色を呈する粘土塊が検出された。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面には起伏もほとんどなくほぼ平坦で良く締まっている。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面の内、検出された部分よりP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の土坑が検出されている。他に重複遺構の範囲からP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が検出され、合わせてP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の土坑が検出されている。規模はそれぞれによって若干差があり、P<sub>1</sub>が約0.6m×0.44m・P<sub>2</sub>が約0.45m×0.35m・P<sub>3</sub>は約0.50m×0.35m・P<sub>4</sub>が約0.4m×0.4mをそれぞれ測り、深さはP<sub>1</sub>が約0.65m、P<sub>2</sub>が約0.57m、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が約0.75mである。平面形は検出面ではいずれも円形や楕円形を呈しているが、底面ではいずれも方形や長方形を呈している。埋土は黒色や褐色を呈する粘性の強いシルトで構成され、色調や混入物で細分されている。混入物としては褐色の砂粒や褐色のシルト粒が観察される。いずれも柱痕跡は確認されていない。これら土坑の性格は、本住居址の対角線上に位置していることや、規模や形状が近似していることから、本住居址の柱穴を構成しているであろう。

カマドは北壁で検出され、柱穴との位置関係からみると、若干東に寄って位置するらしい。検出されたのは燃焼部焼土・煙道部・煙出部であり、袖部と天井部は検出されていない。また、本住居址では煙道部が並列で2基検出されていることから、改築されたものであろうと推定される。袖部が構築されていたと推定される部分については入念に精査したのであるが、その存在を示す様な痕跡は全く観察されていない。土層図でみると右側煙道部前の埋土内には、あ

る範囲の埋土の周囲を取り囲む様に焼土塊が混入しており、何等かの施設（袖部か天井部の崩壊土）に伴う可能性が強い。また、右側の焼土の上面には炭化物や木灰・焼骨の小破片等が混入した土が堆積しており、右側の焼土と右側の煙道部が同時期の遺構と考えられ、新しいカマド跡であろうと推定される。崩壊してしまって袖部が存在しなかったのか、住居址埋土とほとんど同質のシルトを貼り付けて構築したために、精査中に見落としてしまったかのどちらかであろう。燃烧部底面は床面と同位面で奥壁に続き、煙道部とはともに段差をもって接続している。焼土の範囲は左側で径0.3mの円形、右側は0.4m×0.3mの楕円形であるが、北壁との距離は左側で0.9m、右側で0.7m離れている。左側煙道部の底面は煙出部に向かって上がり勾配を示しており、煙出部には土坑状の掘り込みがある。右側煙道部のそれはほぼ水平な状態で煙出部に続き、煙出部には土坑状の浅い掘り込みがある。

〔遺物〕(第196・197図、P L 125 B・126 A)

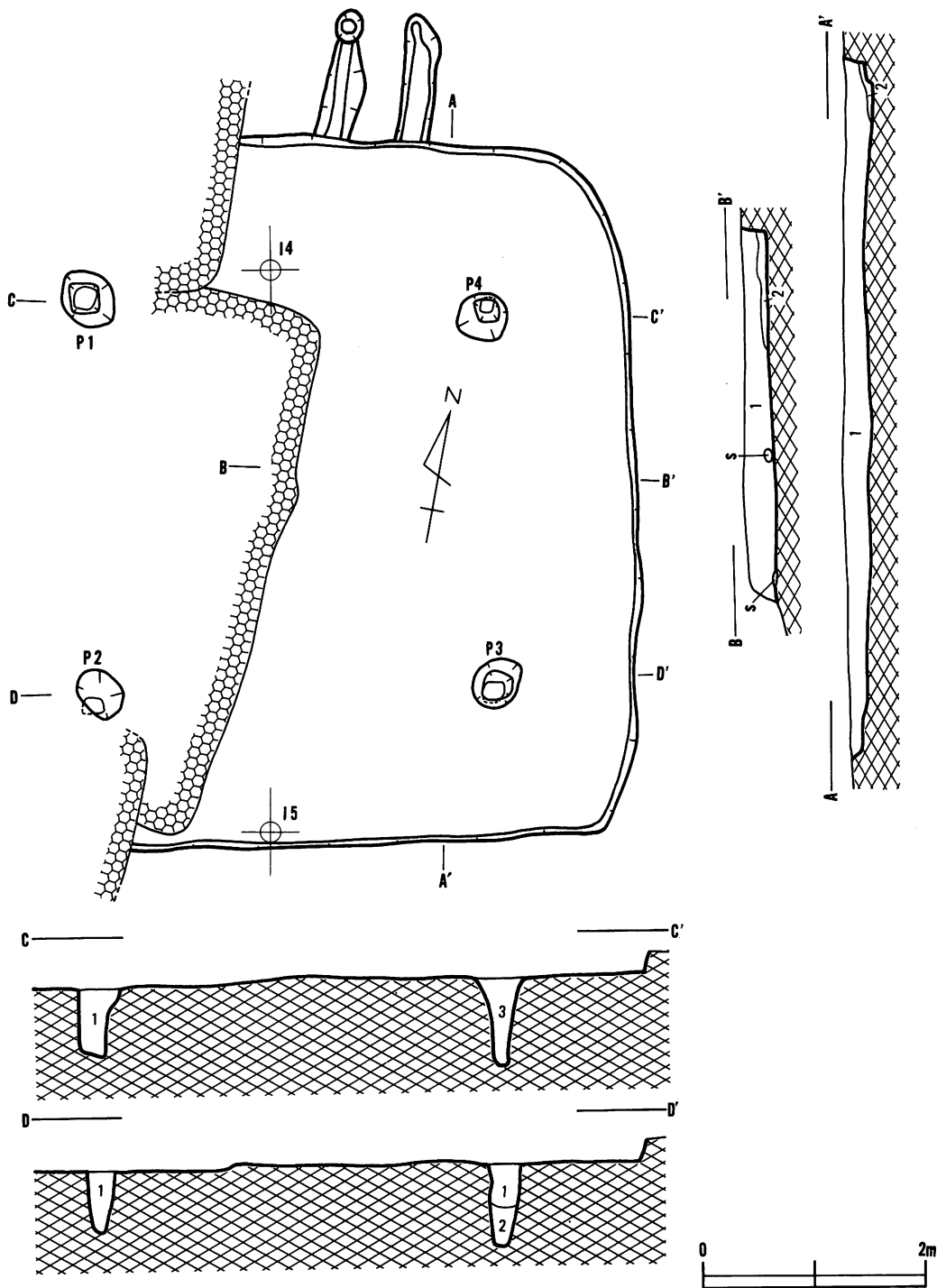
埋土内では多く出土しているが、床面直上での出土は比較的少ない。また、完形品の出土はなく、すべて破片である。種類は土師器・須恵器・土製品・石製品・鉄製品があり、器種では坏形土器・高坏形土器・甕形土器・小型土器・土製勾玉・土製丸玉・土製紡錘車・名称不明土製品・水晶製切子玉・名称不明鉄器が含まれている。

#### 土師器

**坏形土器** (620～628) いずれもロクロ未使用成形で、体部外面に段をもつ底部丸底のものである。体部外面の段に対応する内面には段をもつもの (620～523・625・628) ともたないもの (624・626・627) がある。体部～口縁部は直線的に外反するもの (620・621・623・625・626・628) と内弯気味に外反するもの (622・624・627) がある。大きさでは622は口径22.8cm・628のそれが27.8cmと格段の大きさであるが、他は624・626が若干小き目であるが他はほぼ同じ大きさである。調整技法は、口縁部外面がヨコナデ (620・623)・ハケメ後ヨコナデ (621・625)・ハケメ後ヨコナデで一部ミガキ (627)・ヨコナデ一部ミガキ (622・624)・ミガキ (626) で、底部外面はナデやケズリのもので、622はミガキである。内面はすべて黒色処理されている。

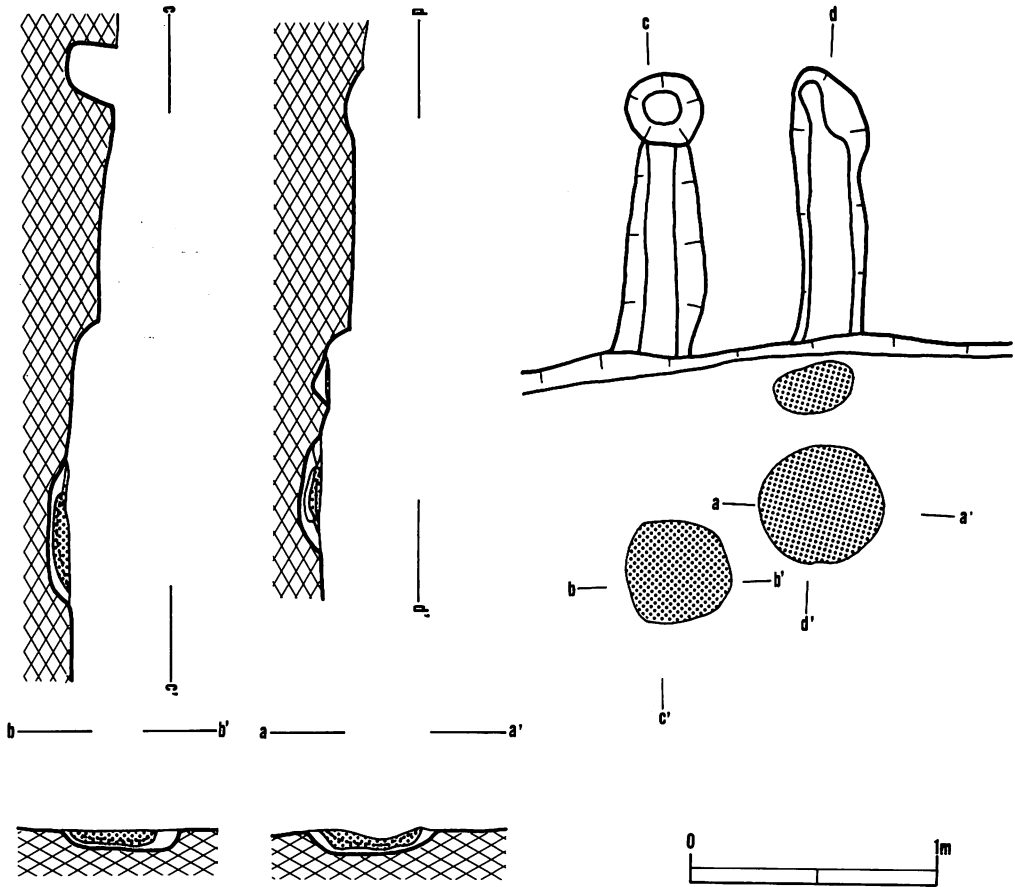
**高坏形土器** (630) ロクロ未使用成形である。口縁部を欠失しているが体部外面に段をもつ底部丸底の坏形土器に脚部を貼り付けたものである。脚部は比較的高く裾部が大きく開いている。坏部の調整技法は坏形土器のそれと同じで、内面は黒色処理されている。脚部のそれはミガキやナデである。

**甕形土器** (631～637) いずれもロクロ未使用成形であるが、完形土器は含まれておらずすべて破片である。631は器高が低く鉢形に近似している。637は体部が膨らみ球胴型のものである。頸部に段をもち、口縁部は外反し、上端で軽く内弯気味となって口唇部へ移行し、口唇部は平



第194图 1—4住居址(遺構—1)





Ⅰ-4 住居址埋土土層

1. 7.5 YR2/2 黒褐色 シルト質土 粘性あり、褐色シルト粒、焼土粒、炭化物、土器片が混入。
2. 7.5 YR3/3 暗褐色 シルト質土 粘性あり。

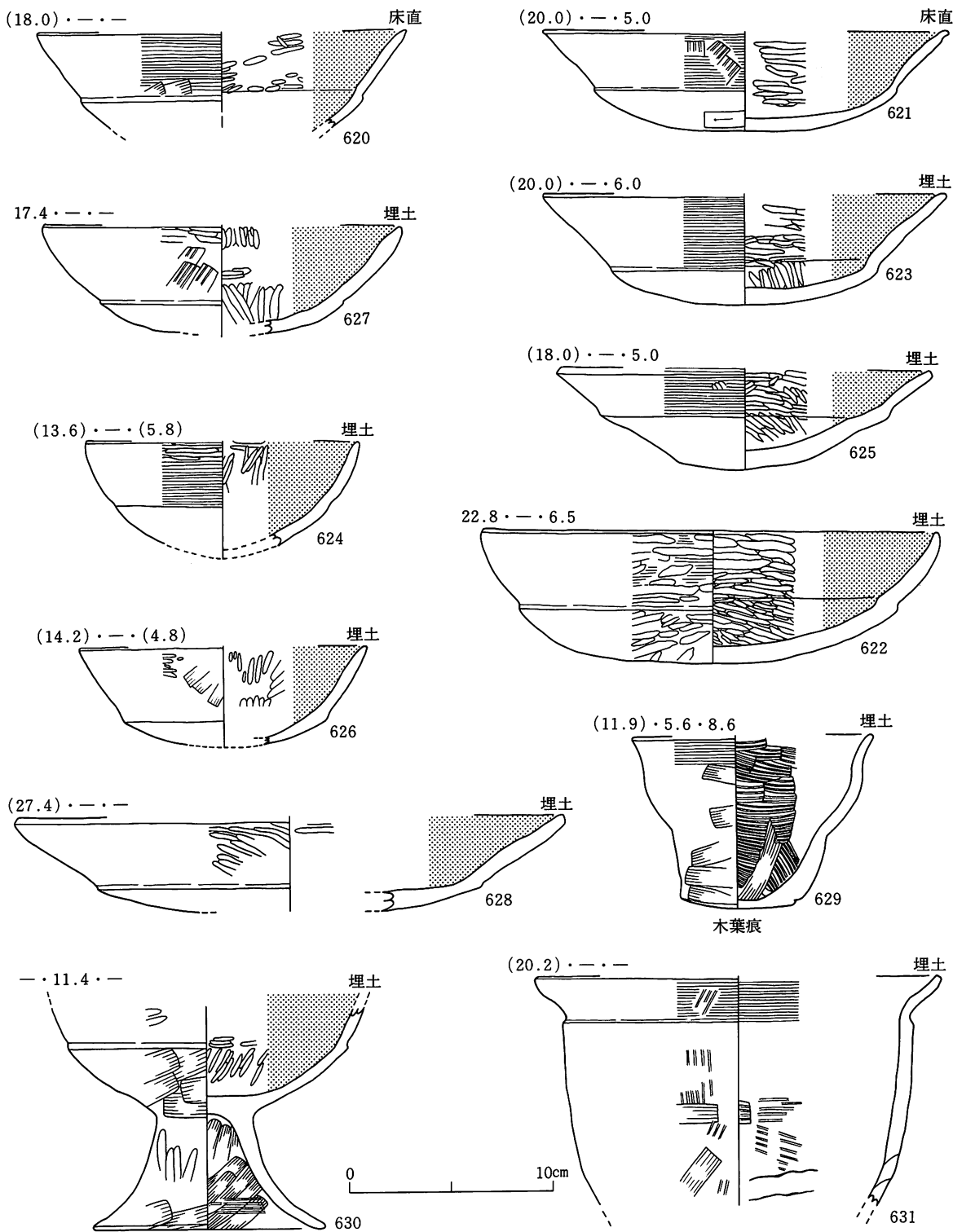
Ⅰ-4 住居址柱'ビット埋土土層

1. 7.5 YR2/1 黒 色 粘土質シルト
2. 7.5 YR4/3 褐 色 砂 質 粘性あり。
3. 7.5 YR2/1 黒 色 粘土質シルト 褐色シルト粒。

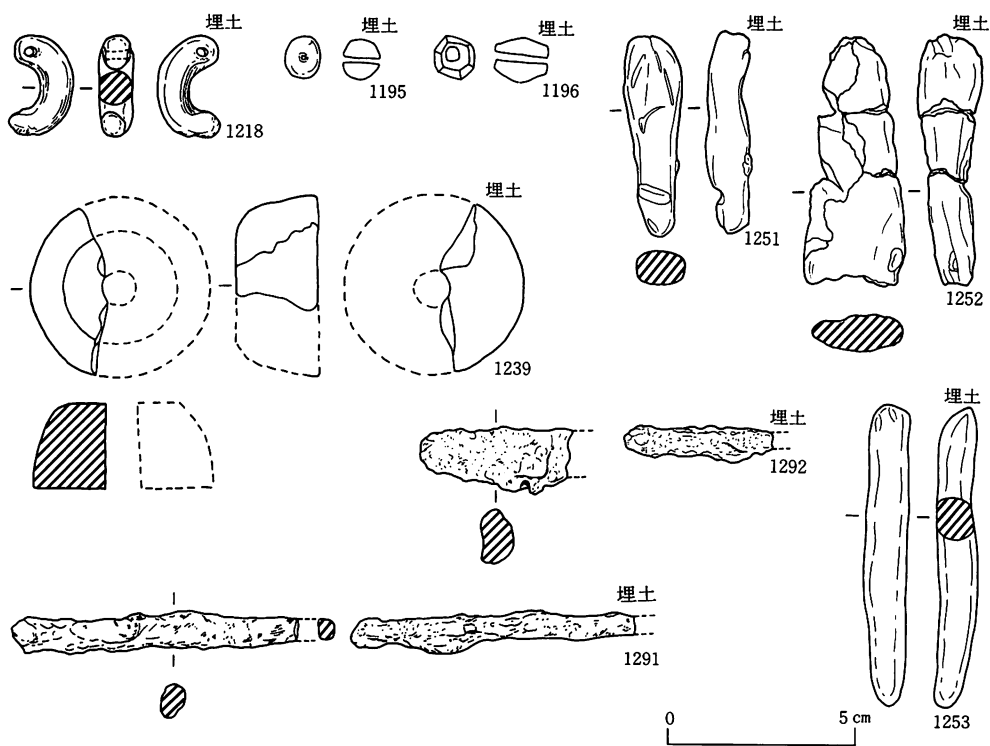
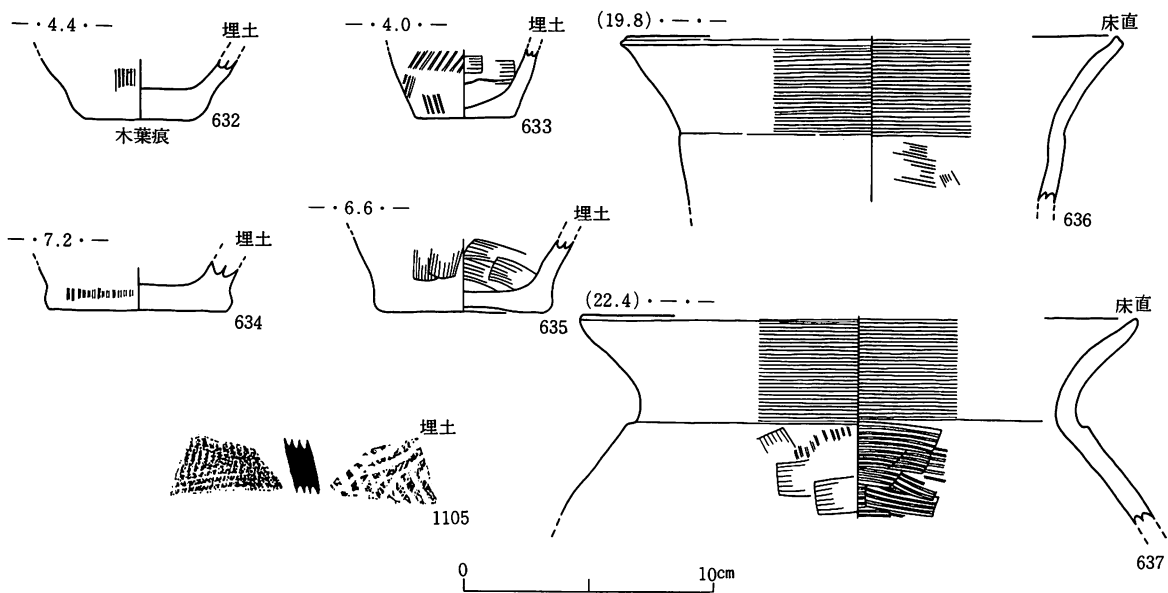
Ⅰ-4 住居址ビット計測値

	長径×短径	深 さ
P <sub>1</sub>	57cm×43cm	65.7cm
P <sub>2</sub>	45cm×33cm	56.8cm
P <sub>3</sub>	49cm×35cm	78.3cm
P <sub>4</sub>	42cm×42cm	76.5cm

第195図 Ⅰ-4 住居址(遺構-2)



第196図 Ⅰ-4住居址(遺物-Ⅰ)



第197图 1-4 住居址(遺物-2)

らなもの(636)・先細りとなるもの(637)・角張るもの(631)がある。底部周囲は突出をもつもの(634)ともたないもの(632・633・635)があり、底面は632が木葉痕をもつが他はナデられている。大きさには大小があるらしいが明確でない。調整技法は、口縁部は内外面ともヨコナデで、体部はハケメ後スリケシやナデが中心らしい。

**小型土器**(629) ロクロ未使用成形で、小型の鉢形に近いものである。底部より軽く外傾する体部は中位で大きく外反し、次第に内弯しながら頸部に移行しているが、頸部に段をもたない。口縁部は軽く外反して口唇部に移行し、口唇部は丸味をもっている。底部周囲に突出をもたず、底面には木葉痕を付している。全体的にみて粗雑な作りである。調整技法は、外面が口縁部ヨコナデで体部ナデ、内面はハケメである。

#### 須恵器

**甕形土器**(1105) 大甕の体部破片と考えられるものである。外面は平行タタキ目後カキ目で、内面は青海波文をもっている。

#### その他

**土製品**(1218・1195・1239・1251～1253) 1218は「C」字形を呈する土製の勾玉で、全面が黒色処理され、上端部寄りに1ヶの貫通孔をもつ。1195は土製の丸玉で、中心部に1ヶの貫通孔をもち、黒色処理されている。1239は一部を欠損する土製の紡錘車である。形態は截頭半球状を示し、中心部に1ヶの貫通孔をもつ。1251～1253は名称不明の土製品である。1251・1253は長さが違うものの形状は良く似ている。いずれも手捏ねで作られ、人為的に焼成を受けた痕跡を残している。

**石製品**(1196) 水晶製の切子玉である。六角形に面取りされ、中央部に最大径をもち、両端に向けて細くなっている。中心部に1ヶの貫通孔をもっている。なお、現在の状態は多くの亀裂が入っており、鑑定の結果、二次的に火熱を受けたものであるという。

**鉄製品**(1291・1292) 1291は断面が楕円形で棒状を呈する。1292は若干巾広で扁平である。正確な名称は不明である。 (高橋与右エ門)

### 63) I-5 住居址

〔遺構〕(第198・199図、P L 36 B)

本住居址は北側隅部がJ-4住居址と重複している。重複するJ-4住居址との新旧関係は、本住居址の方が古い。

規模は北南4.1m・東西4.1mで壁高は0.3mを測り、壁は床面に対して100度の角度を示している。平面形は隅丸のほぼ正方形を呈し、主軸は北-南方向にあり磁北に対して18度西に偏している。埋土は黒褐色・極暗褐色・黒色等を呈するシルトで構成され、色調の差によって3層

に細分されている。混入物としては、全層に褐色のシルト粒が観察され、特に2・3層は量も多く粒子も粗い。その他に2・3層には炭化物粒が混入している。埋土最下層には粒径10cm～20cm位の礫が少量混入している。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は起伏もなくほぼ平坦で、良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居地の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の土坑が検出されている。規模は径0.2m～0.25mの範囲で、深さは0.43m～0.47mの範囲であり、平面形は円形や楕円形を呈する。埋土は黒褐色や黒色を呈する粘土質シルトで構成され、色調によって2層に細分されている。1層には褐色の砂質シルトが多く混入している。2層には混入物もほとんどなく、P<sub>3</sub>には空隙等もみられ、強粘性の土質である。いずれの土坑も中心部分に2層が円形に入り、底面まで達していることから、2層は柱痕跡であろう。それによれば、柱は径10cm～14cm位の円柱と推定される。以上のようにP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本住居地の対角線上に位置することや、規模がほぼ同一で、柱痕跡をも残存していることから、本住居地の柱穴を構成しているであろう。貯蔵穴と考えられる土坑は検出されていない。

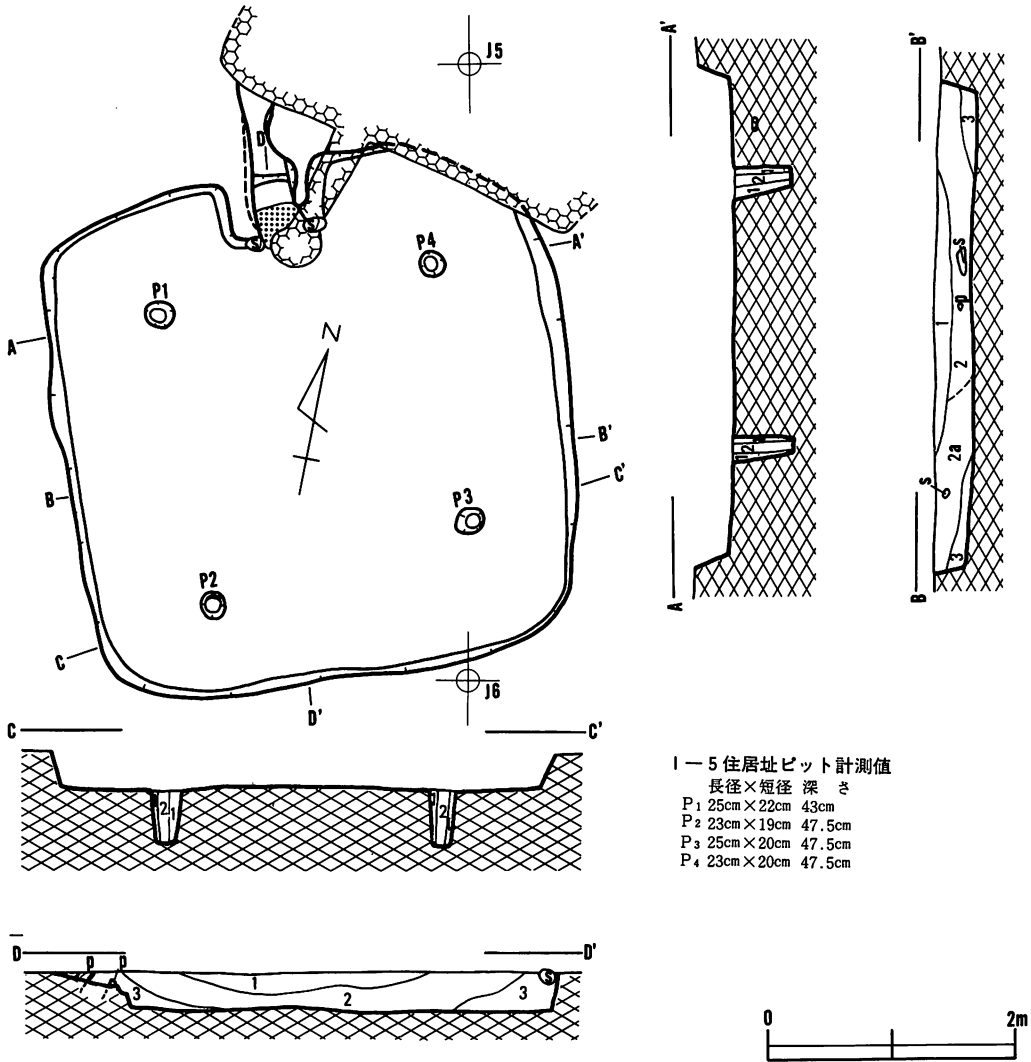
カマドは北壁で検出され、ほぼ壁中央に位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・カマド埋設土器・支脚・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は地山よりの削り出しによって構築され、シルトの貼り付けは観察されない。右側袖部の焚口部寄りの部分はJ-4住居地の旧煙道部によって削剝され、残存状態が良くない。左右袖部ともに袖部の焚口付近には粒径30cm×10cm～35cm×15cm位の礫が各1ヶ縦位で約0.05mほど埋め込まれていた。前庭部～焚口部の一部がJ-4住居地の煙出部によって掘り取られている。燃烧部は若干掘り窪められた後粒径15cm×10cmの礫を縦位で支脚として0.05mほど埋め込んだ後、床面と同位面になるまで埋め戻しており、煙道部とは若干の段をもって接続している。また、燃烧部ではカマドに埋設された2ヶの土師器甕形土器が正立で残存していた。土器の大きさは、左側で口径20.6cm・底径7.6cm・器高29.2cm、右側は口径18cm・底径8.2cm・器高21.3cmである。なお、左側土器の底面下には前述の支脚が入っている。焼土は前庭部～支脚の位置付近まで分布している。煙道部は煙出部に向かって緩やかな下り勾配を示しているが、起伏もなく平坦である。煙出部はJ-4住居地の削剝によって残存していない。

〔遺物〕(第200・201図、P L 126 B・127・128 A)

埋土内での出土は少なく、床面直上で多く出土している。出土状態では、ある部分に偏在することもなく散在していた。種類は土師器・須恵器・土製品・鉄製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・甑形土器・土製紡錘車・各称不明鉄器が含まれている。

#### 土師器

**坏形土器** 埋土内より小破片が出土しているが、図化できなかった。ロクロ未使用成形で体



1-5 住居址ピット計測値  
 長径×短径 深さ  
 P<sub>1</sub> 25cm×22cm 43cm  
 P<sub>2</sub> 23cm×19cm 47.5cm  
 P<sub>3</sub> 25cm×20cm 47.5cm  
 P<sub>4</sub> 23cm×20cm 47.5cm

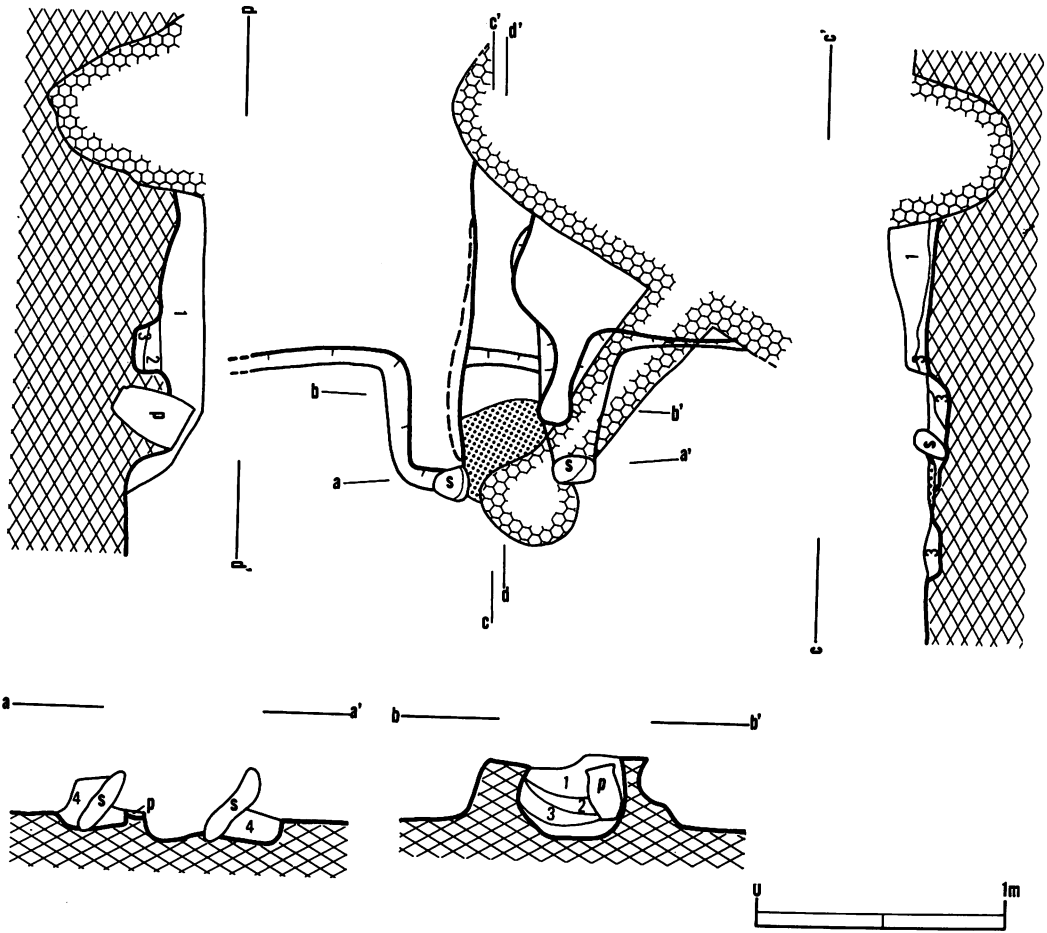
1-5 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質 土 褐色シルト粒が混入。
2. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質 土 炭化物と 3-4 cm の褐色シルトブロックが多量に混入。  
 2 a 層は 2 層より黒色を呈し、褐色シルト混入せず。
3. 7.5YR2/1 黒 色 粘土質シルト 1 cm の褐色シルトブロックと炭化物が混入。

1-5 住居址ピット埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色砂質シルトが混入。
2. 7.5YR2/1 黒 色 粘土質シルト 粘性あり。

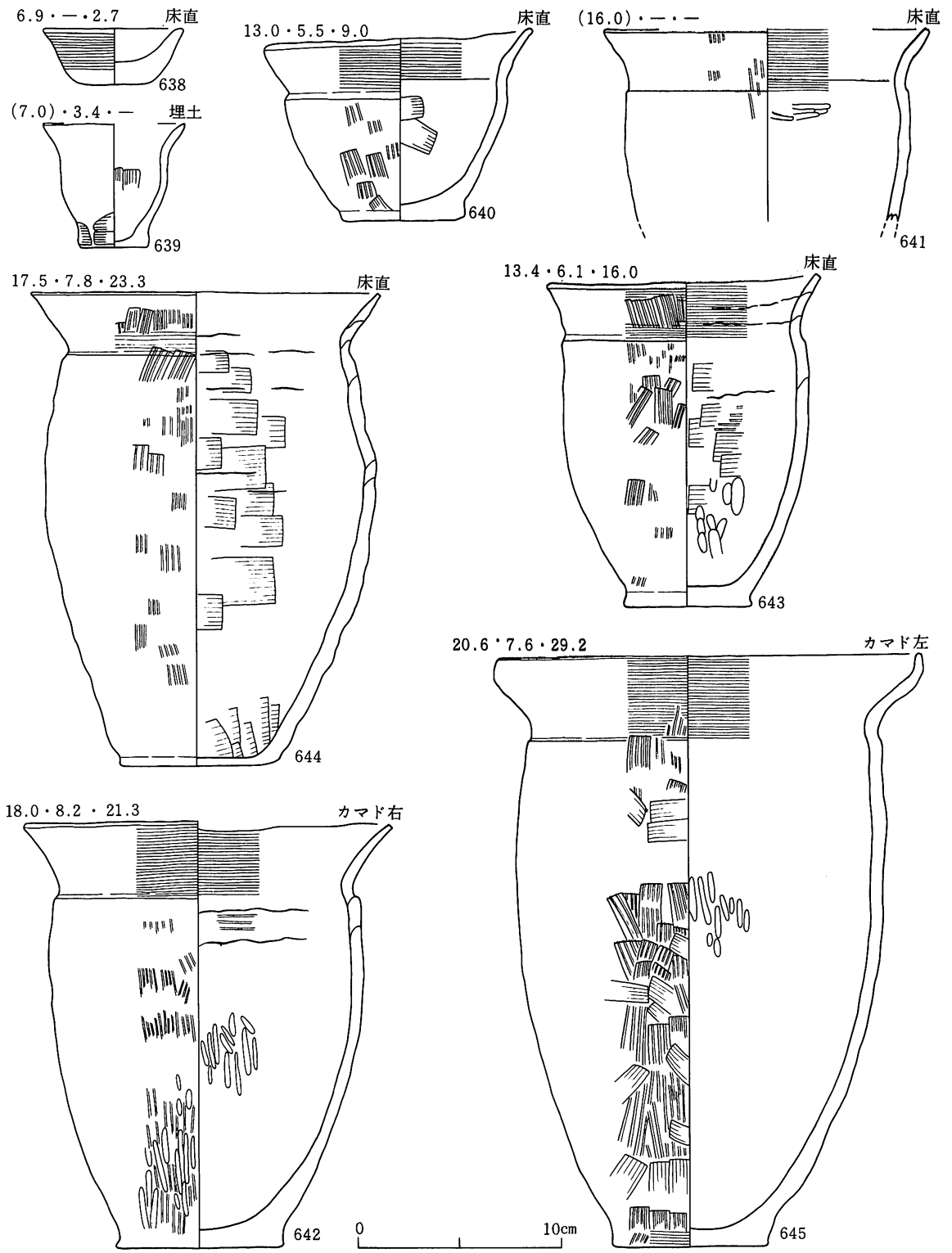
第198図 1-5 住居址(遺構一)



1-5 住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR2/3極暗褐色 シルト質土 褐色シルト粒、焼土粒が混入。
2. 7.5YR3/2黒褐色 シルト質土 褐色シルト粒が多量に混入。
3. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土 粘性あり、焼土、炭化物が混入。
4. 7.5YR3/3暗褐色 シルト質土

第199図 1-5 住居址(遺構-2)

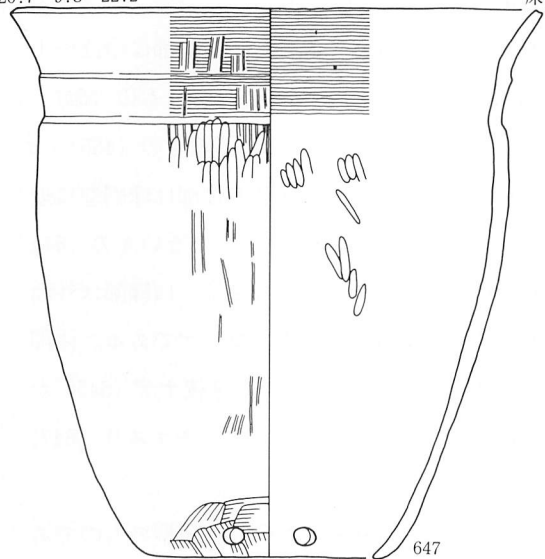


第200図 I-5住居址(遺物-I)



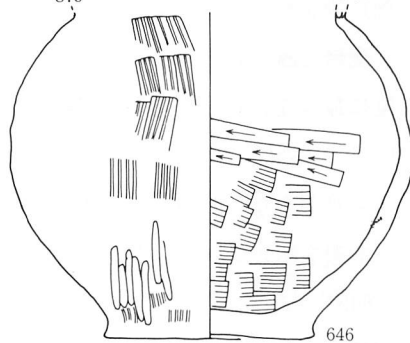
20.7・9.8・22.2

床直



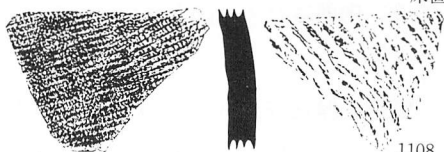
— 8.5 —

床直



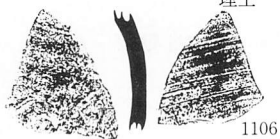
646

床直



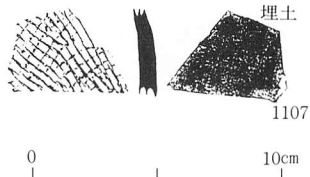
1108

埋土



1106

埋土



1107

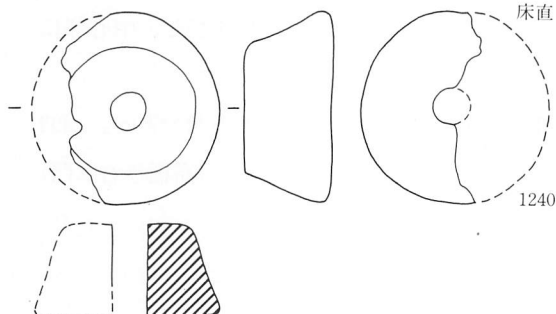
0 10cm

埋土



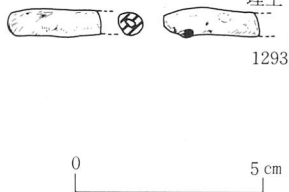
1109

床直



1240

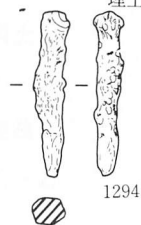
埋土



1293

0 5cm

埋土



1294

第201图 1—5住居址(遺物—2)

部に段をもち、底部は丸底を呈するらしい。その他のことは不明である。

**甕形土器**(641～646) いずれもロクロ未使用成形である。底部より外傾する体部は中位～上位に最大径をもち、頸部で窄む。頸部には段をもち、口縁部は直線的に外反するもの(641～644)と外反した後上端が内弯し受口状となるもの(645)があり、口唇は角張るもの(485)・ナデられ平らなもの(642～644)・丸味をもつもの(645)がある。なお、646の体部は球胴型に近い形態を示している。底部の周囲には突出をもつもの(642・643・646)ともたないもの(644・645)があり、底面はナデによって平らで、木葉痕のものはない。調整技法は、口縁部は外面がヨコナデ(642)・ハケメ後ヨコナデ(643～645)で、内面はいずれもヨコナデである。体部は外面がハケメ後スリケシ(643・644・647)・ハケメ後ミガキ(642)・ハケメ後ナデ(645)があり、内面はハケメ後ナデやミガキ(642・643・645)・ヘラナデ(644)・ナデやケズリ(647)である。

**甕形土器**(647) ロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を取り去った形の無底型のものである。底部より外傾する体部は、上位に最大径をもち、軽く窄んで頸部に移行し、頸部は二ヶ所に段をもっている。口縁部は上位の段より直線的に外反し、口唇は角張っている。調整技法は、口縁部の外面がハケメ後ヨコナデで内面はヨコナデのみである。体部は外面がハケメ後スリケシやミガキ・ナデで、内面はミガキ・ナデが入っている。

**小型土器**(638～640) いずれもロクロ未使用のものである。638は坏形・639は甕形・640は鉢形にそれぞれ近いものである。

#### 須恵器

**甕形土器**(1106～1109) いずれも体部の破片である。1108・1109は外面に格子状平行タタキ目・内面青海波文、1107は外面格子状平行タタキ目・内面素文、1106は外面ヘラケズリ・内面ロクロナデである。

#### その他

**土製品**(1240) 土製の紡錘車である。一部を欠損しているが、截頭円錐形を呈し、中心部に1ヶの貫通孔をもつ。

**鉄製品**(1293・1294) 断面が円形で、細長い棒状のものであるが、名称は不明である。1293は一部を欠損している。(高橋与右エ門)

## 64) I-9 住居址

〔遺構〕(第202・203図、P L 37A)

本住居址は重複遺構もなく単独で検出された。

規模は北南7.7m・東西7.5mで壁高は最も高い南壁で0.15mを測り、壁は床面に対して110

度の角度を示している。平面形は隅丸の平行四辺形を呈し、主軸は北北西—南南東方向にあり、磁北に対して28度西に偏している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色等を呈するシルトで構成され、色調や混入物によって7層に細分されている。混入物としては、褐色の粘土質シルト粒が全層に混入し、他に炭化物の混入や酸化鉄の集積も観察される。床は、南半が地山の暗褐色を呈する砂質シルト、北半は地山の砂礫混じりの砂質シルトでそれぞれ構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は北半が若干小起伏をもつものの総じて平坦であるが、南に向かって緩やかな下り勾配を示し、高低差は0.05mを測る。壁溝は検出されていない。

本住居地の床面では $P_1 \sim P_{11}$ までの土坑が検出されている。規模は $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4$ は径約0.25m～0.35mの範囲であるが、 $P_2$ は径約0.4mとやや大きく、平面形は $P_1 \cdot P_2$ は円形、 $P_3 \cdot P_4$ は方形気味である。 $P_5 \cdot P_6$ は径約0.15mの円形で深さは約0.11m・0.18mである。 $P_7 \cdot P_8$ は径約0.25m・0.30mの円形で深さは約0.4m・0.25mである。 $P_9 \sim P_{11}$ は径約0.20mの円形や楕円形で深さは0.03m～0.20mまでである。埋土は $P_1 \sim P_4$ についてのみ記録されているが、それによれば黒色や黒褐色のシルトで構成され、色調によって2層に細分されている。混入物は土坑それぞれによって差がある。全体的にみると炭化物粒や酸化鉄の集積がみられる。これら土坑の性格は $P_1 \sim P_4$ は本住居地の対角線上に位置することや、規模がほぼ同一であることから本住居地の柱穴を構成しているであろう。他の $P_5 \sim P_{11}$ は柱穴状を呈しているが、本住居地との対応関係については不明である。埋土も住居地の埋土とほとんど差がなく、遺構検出時に時期差を明確にできなかった。

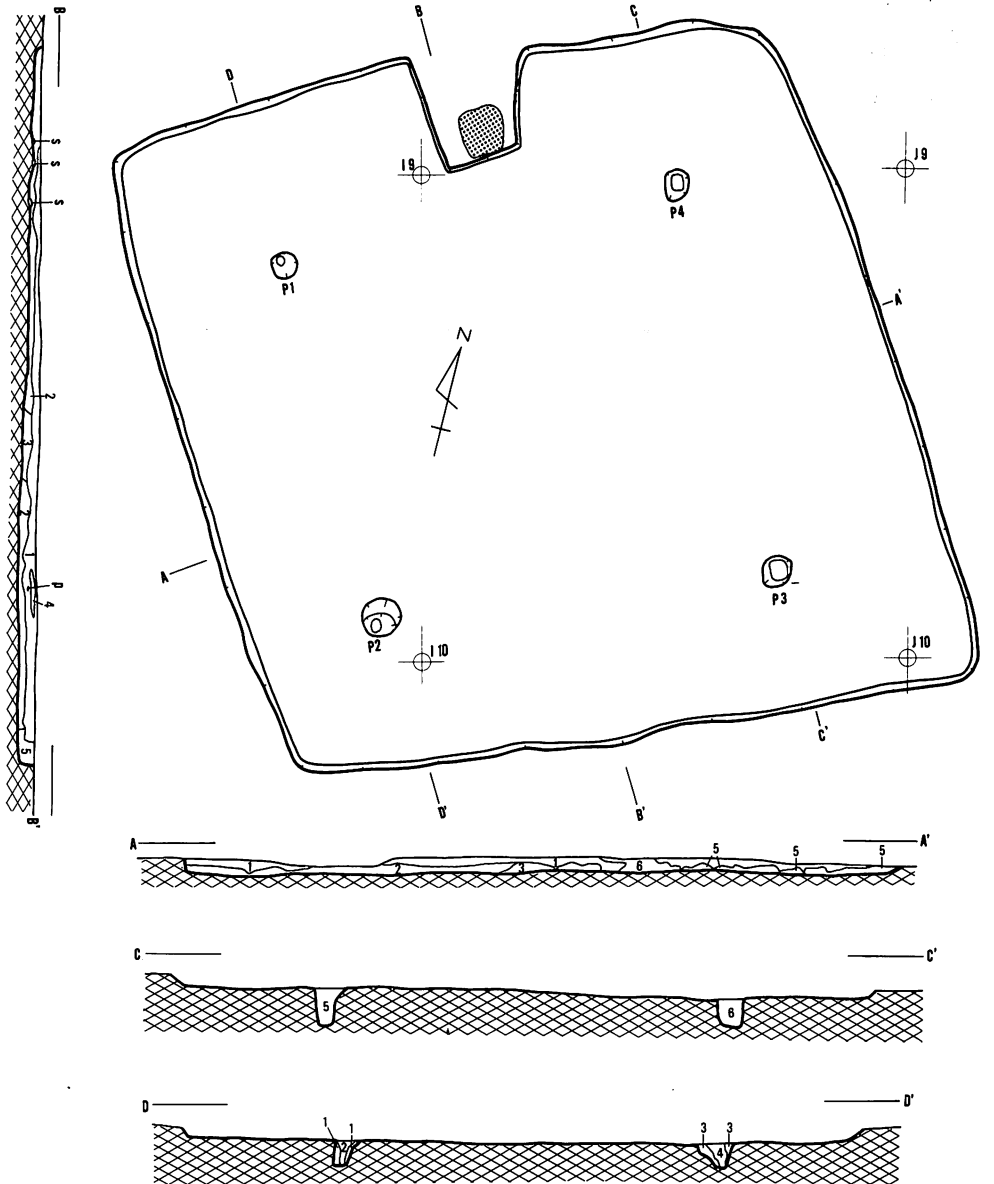
本住居地では明確にカマドといえる施設は検出されていない。床面範囲の中で現地性焼土の検出されているのは北北西壁寄りの部分だけである。この部分の焼土をカマド燃焼部の残痕と断定した。従って、袖部・煙道部・煙出部は検出されていない。精査中に袖部の残痕と考えられる土層変化は全く確認されていない。これは、崩壊して全く残存していなかったか、もしくは、埋土とほぼ同質のシルトを貼り付けて構築されていたために、精査中にその存在に気付かないで掘り取ってしまった可能性も考えられる。焼土は0.45m×0.50mの範囲に分布し、厚さは約0.08mを測る。煙道部や煙出部の状況は不明である。

〔遺物〕(第204・205図、P L 128 B・129)

埋土内での出土はほとんどなく、床面直上からのみ出土している。種類は土師器・須恵器・土製品があり、器種では環形土器・高環形土器・甕形土器・名称不明土製品が含まれている。

### 土師器

**環形土器**(648～652) いずれもロクロ未使用成形である。底部は丸底(648・650・652)や平底風丸底(649・651)があり体部の段はもつもの(648・650～652)ともたないもの(649)があるが、内面はすべて黒色処理されている。体部～口縁部は直線的に外反するもの(649)・



1-9 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/1 黒色
2. 5YR2/1 黒褐色
3. 10YR3/3 暗褐色
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト
5. 10YR2/2 黒褐色
6. 10YR2/2 黒褐色

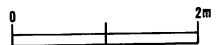
縮まっている、粘性あり、微量の炭化物と水酸化鉄、粘土質シルトを混入。  
 粘性あり、微量の炭化物と粘土質シルトを混入。  
 粘性あり、少量の炭化物と粘土質シルトを混入。  
 少し軟らかい、粘性あり、多量の粘土質シルトと少量の炭化物が混入。  
 少し軟らかい、粘性あり、粘土質シルトと少量の炭化物が混入。

1-9 住居址ビット埋土土層

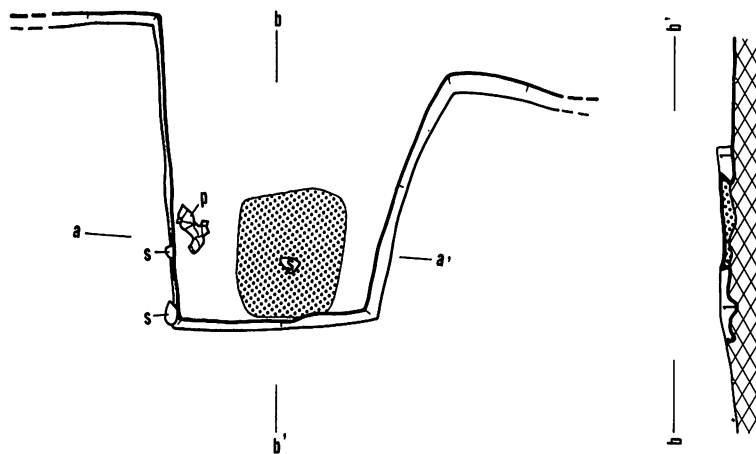
1. 5YR2/1 黒褐色 粘性あり、少量の粘土質シルトと炭化物が混入。
2. 7.5YR2/1 黒色 粘性あり、少量の炭化物と水酸化鉄が混入。
3. 5YR2/1 黒褐色 粘性あり、粘土質シルトが多量に混入。
4. 7.5YR2/1 黒色 粘性あり、少量の炭化物、水酸化鉄、土師器片が混入。
5. 7.5YR2/1 黒色 粘性あり、少量の炭化物、土器細片が混入。
6. 5YR2/1 黒褐色 軟らかい、粘性あり、多量の粘土質シルトと少量の水酸化鉄が混入。

1-9 住居址ビット計測値

	長径×短径	深さ
P1	28cm×28cm	23.6cm
P2	41cm×40cm	34.7cm
P3	35cm×32cm	20cm
P4	32cm×26cm	40.5cm

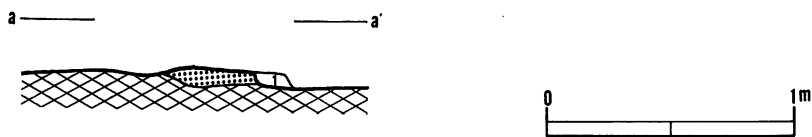


第202図 1-9 住居址(遺構-1)

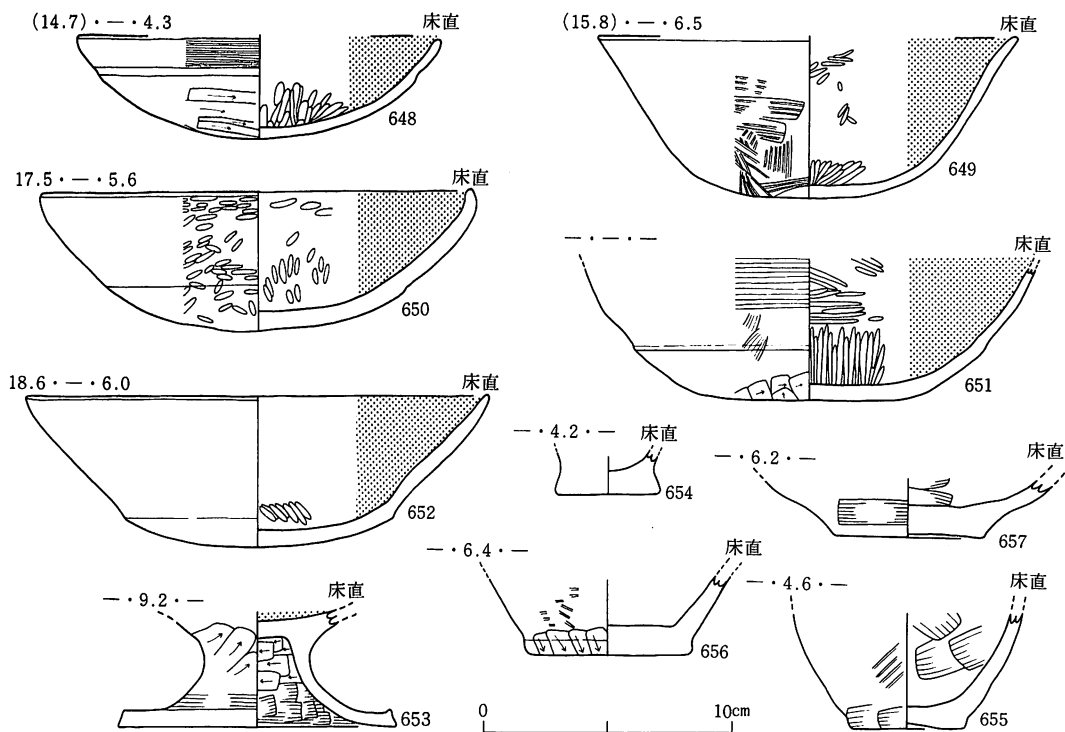


1-9 住居址カマド埋土土層

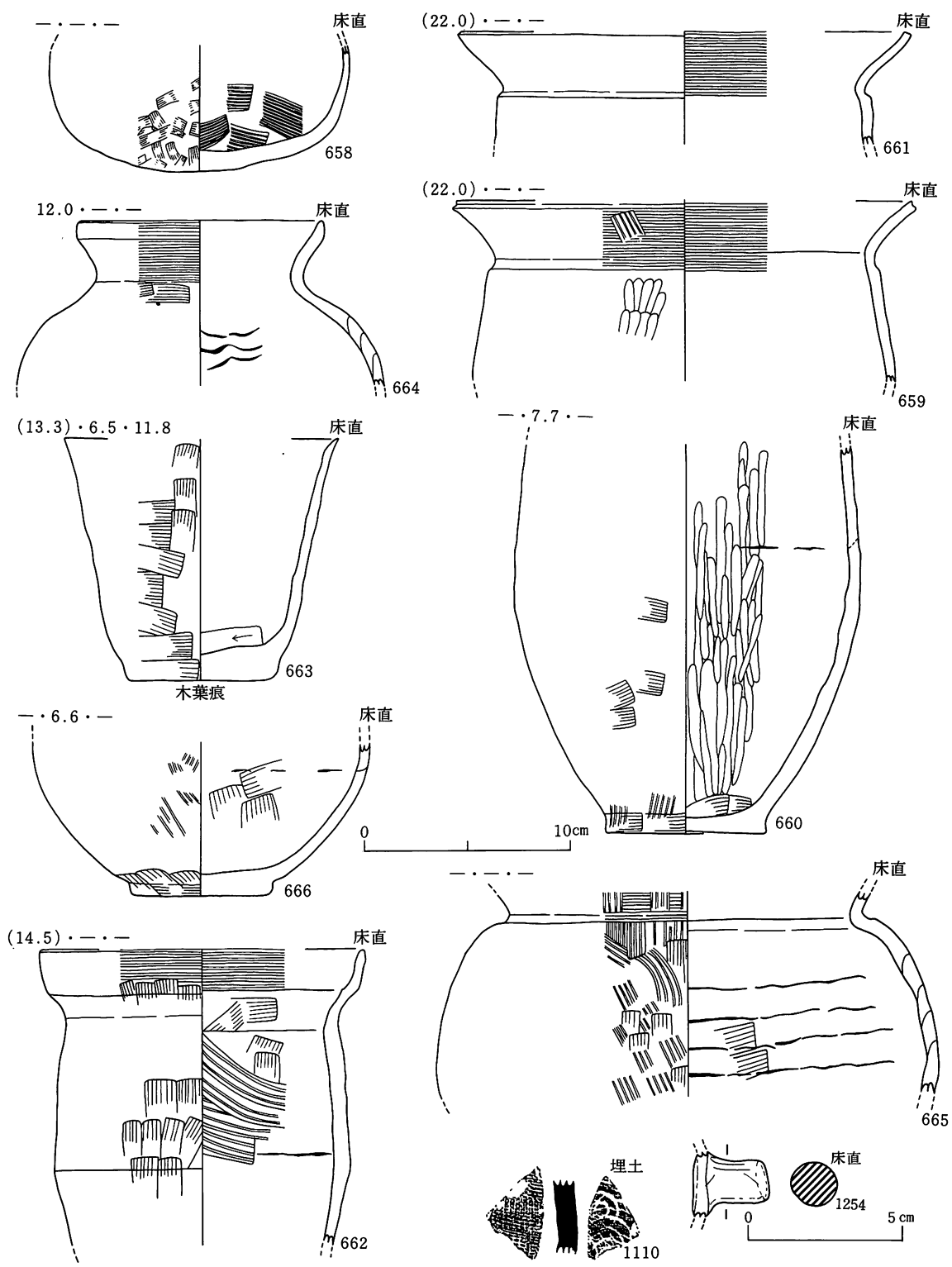
1. 5 YR2/1 黒褐色 粘性あり、多量の焼土、少量の粘土質シルトと炭化材が混入。



第203図 1-9 住居址(遺構-2)



第204図 1-9 住居址(遺物-1)



第205図 I-9住居址(遺物-2)

内弯気味に外反するもの(648・650・652)があり、口唇は652が先細りとなる以外は丸味をもっている。大きさはいずれも大差がない。調整技法は、口縁部の外面はヨコナデ(648・651)・ハケメ(649)・ナデやミガキ(650・652)で、底部はハケメ(649)・ケズリ(648・651)・ナデやミガキ(650・652)である。内面はいずれもミガキである。

**高坏形土器(653)** ロクロ未使用成形である。坏部を欠失し脚部のみが出土している。脚部は比較的低く、裾部は大きく開いている。脚部の調整技法は、内外面ともにヘラケズリやヨコナデであり、坏部の内面はミガキ後黒色処理されている。

**甕形土器(655～662・664～666)** いずれもロクロ未使用成形で、657・658・664～666は球胴型を呈し、その中でも658は底部が丸底を呈していることから壺形となる可能性が高い。662・665・661・659はほぼ同じ器形をもち、体部は底部より軽く外傾し、中位～下位に最大径をもって頸部で窄んでいる。頸部には段をもたないもの(662・664)ともつもの(659・661・665)があり、口縁部は直線的に外反するもの(659)と外反し上端で内弯するもの(661・662・664)があり、口唇は角張るもの(661)・丸味をもつもの(662・664)・角張って沈線状の凹みをもつもの(659)がある。底部周囲には突出もなく、底面はナデによって平らで木葉痕をもつものはない。調整技法は、口縁部外面がヨコナデ(661・664)・ハケメ後ヨコナデ(659・665)・ヨコナデ後ヘラナデ(662)があり、体部の外面はハケメ後ヘラナデやハケメ後スリケシである。口縁部の内面はいずれもヨコナデで、体部の内面は、ハケメやナデ(662)・ミガキ(665)である。なお、664～666の体部には巻き上げ痕を明瞭に残している。

**鉢形土器(663)** ロクロ未使用成形で、小型の甕形土器とも考えられたが、口縁部に段をもたないことや口径と器高がほぼ同一であることから鉢形土器とした。体部はほぼ直線的に外傾し、口縁部は軽く内弯気味である。底部周囲には突出がなく、底面には木葉痕がある。調整技法は内外面ともナデやケズリが入り、全体的に粗雑である。

#### 須恵器

**甕形土器(1110)** 大甕の破片と考えられるもので、外面に平行タタキ目後カキ目、内面に青海波文をもつ。

#### その他

**土製品(1254)** 名称が定かでないが、把っ手部分と考えられるものである。

(吉田 洋)

## 65) J-4 住居址

[遺 構](第206・207図、P L 37 B)

本住居址は南側でI-5住居址と重複している。重複遺構との新旧関係は、本住居址の方が

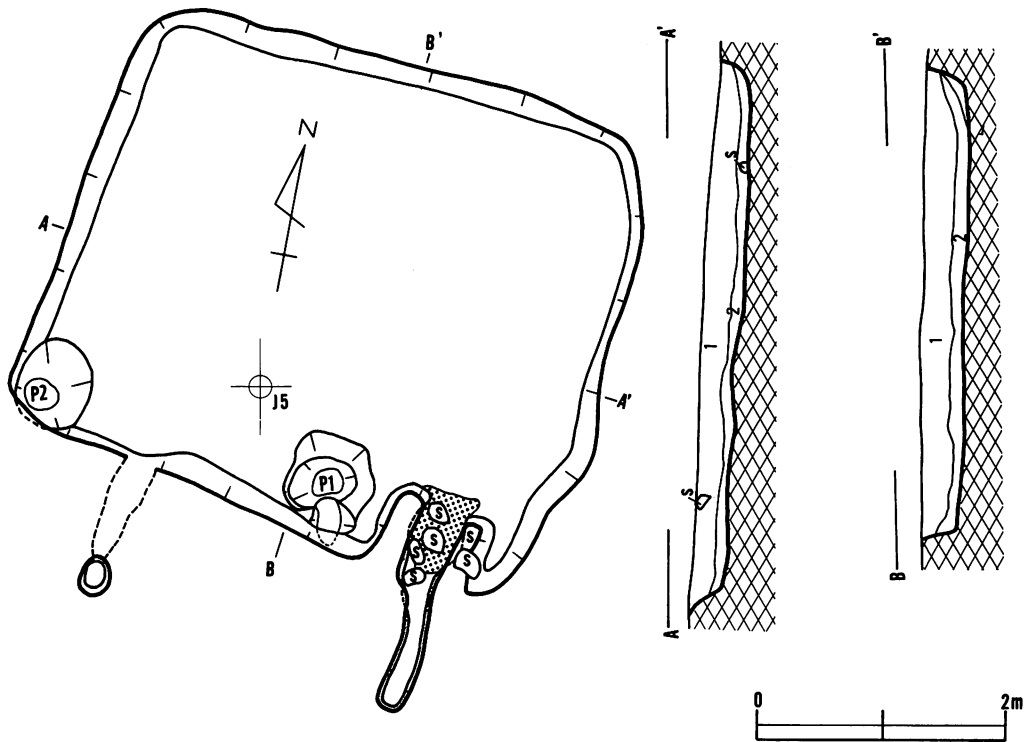
新しい。

規模は南北4.0m・東西4.6mで壁溝は0.30m～0.35mを測り、壁は床面に対して約115度の角度を示している。平面形は主軸に対して横長の長方形を呈し、主軸は南―北にあり磁北に対して193度ほど東に偏している。埋土は黒褐色や極暗褐色の粘土質シルトで構成され、色調によって2層に細分されている。混入物は、褐色のシルト粒や炭化物粒があり、埋土の最下層には粒径15cm～30cmの礫が混入し、一部のものは床面に接している。また、一部の床面には草木灰状の炭化物が堆積する層があり、層厚0.5cm～1cmを測る。この炭化物には木質の炭化材はほとんど含んでおらず、本住居址が焼失する事によって生じた炭化物とは理解しにくく、性格は不明である。床は地山の褐色を呈する砂質のシルトで構築され、部分的に薄く貼って床面としている。北壁と西壁際巾0.1m～0.3m位の床面は床面中央部分より0.05m～0.1mの段差をもって高いが、他の部分はほぼ平坦で良く締まっている。この住居址ではカマド煙道部が2基検出されていることや、前述の様に床面に段差をもつこと等から2棟の重複である可能性が高い。精査中に床面の高い部分に対応する面で床面が確認できなかったことから、低い床面が本住居址に伴う床面であろう。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>ともに径0.6m×0.7m位を測り、深さはともに0.35m位とほぼ同規模であるが、平面形はP<sub>1</sub>が楕円形・P<sub>2</sub>が不整形気味で、断面形はP<sub>1</sub>が鍋底型、P<sub>2</sub>は二段構造である。埋土はP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>では大きく差があり、P<sub>1</sub>は焼土の混入した極暗褐色を呈するシルトの単層で構成されており、人為的に埋め戻された可能性が高い。P<sub>4</sub>は黒色・黒褐色・褐色等を呈するシルトで構成され、色調によって3層に細分されている。1層には焼土や炭化物粒、2層は多量の炭化物、3層には黒色シルト等がそれぞれ混入し、1層と3層は粘性が強い。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>は旧煙道部の右側そしてP<sub>2</sub>は新カマド部の右側といずれもカマド脇に位置していることから貯蔵穴の性格が強いものと考えられる。その中でもP<sub>1</sub>は旧住居址に、P<sub>2</sub>は本住居址に付随する土坑であろう。

カマドは南壁で検出され、壁中央より1.5m東寄りに新カマドが、そして、0.9m西寄りに旧カマドが位置している。ここでは新カマドより記述する。新カマドで検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は床面を貼床した後、床面に暗褐色や極暗褐色のシルトを貼り付けて構築し、壁との接続部分には粒径30cm×10cm・20cm×10cmの礫を各1ヶ埋設して補強している。燃烧部底面は床面と同位面であるが、支脚の位置付近より奥壁に向かって次第に上がり勾配を示しており、煙道部とは明瞭な段差をもたない。燃烧部内には粒径20cm×10cm位の礫が3ヶ転落していたが、どの部分に使用されていたかは定かでない。焼土は焚口部より奥壁部分まで観察され、袖部の内壁にも一部焼成痕を残している。支脚は粒径15cm×10cmの礫を5cm位埋め込んで使用している。煙道部は奥壁との接続部より煙





J-4 住居址埋土土層

1. 7.5 YR 2/2 黒褐色 粘土質シルト よく締まっている、少量の褐色シルト粒、炭化物粒が混入。
2. 7.5 YR 2/3 極暗褐色 粘土質シルト よく締まっている、多量の褐色シルト、15~30cmの河原石、土器片の混入がある。

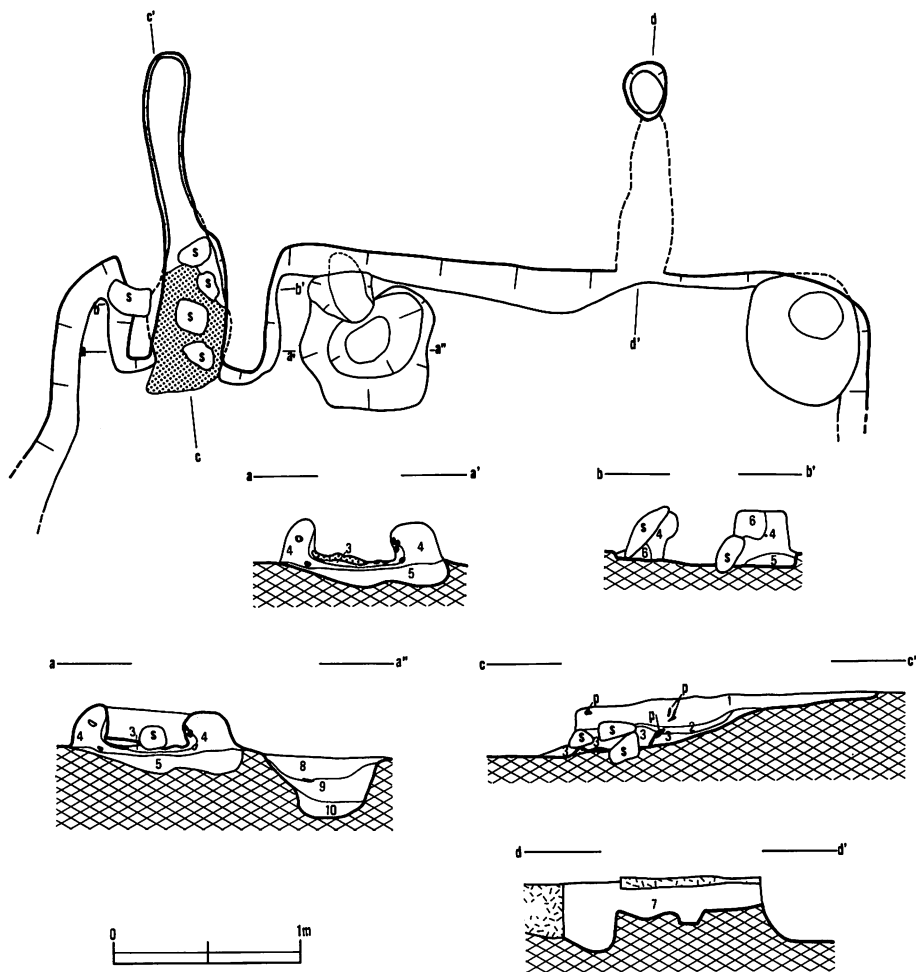
J-4 住居址ピット計測値

長径×短径 深さ  
 P<sub>1</sub> 87cm×70cm 40.5cm  
 P<sub>2</sub> 73cm×60cm 38 cm

第206図 J-4 住居址(遺構一)

出部に向かって緩やかな上がり勾配を示しているが、底面はほぼ平坦である。煙出部に土坑状の掘り込みはない。旧カマドで検出された部分は煙道部と煙出部のみであり、袖部や燃焼部・天井部は残存していない。おそらく、本住居址を構築の際に削剝されたものであろう。この煙道部は壁中央より0.9m西に偏しており、割り貫き型のものである。煙出部はI-5住居址の右側袖部と焚口部付近に位置し、土坑状の掘り込みをもっている。

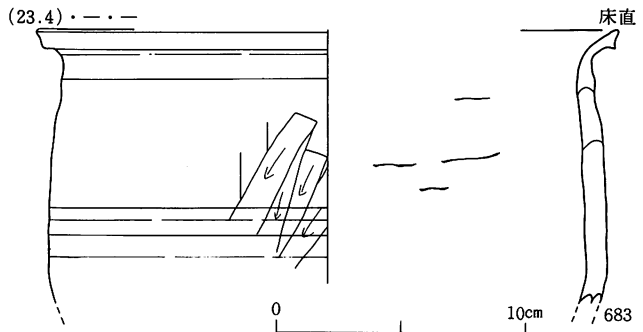
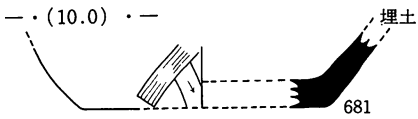
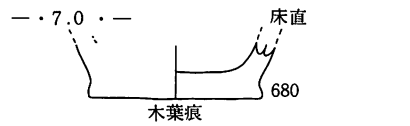
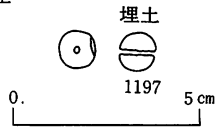
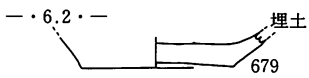
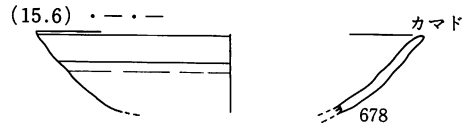
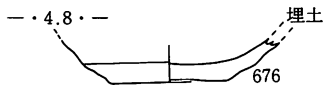
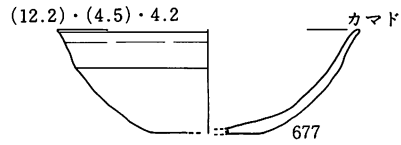
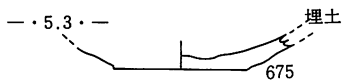
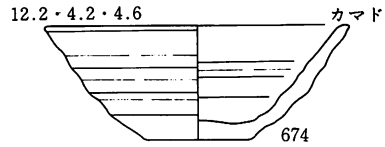
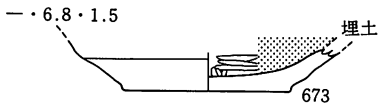
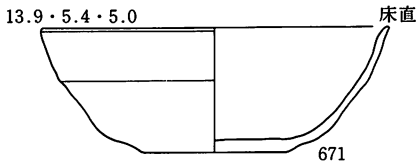
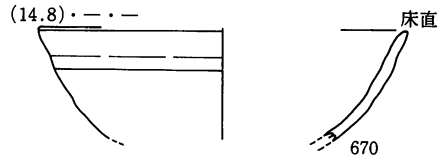
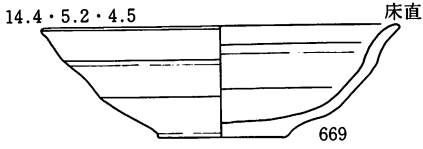
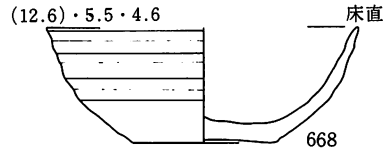
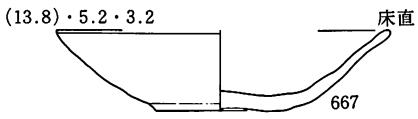
以上の様なことから、本住居址は2棟が重複している可能性が強く、旧住居址は高い床面と旧カマド煙道部やP<sub>1</sub>、そして、西壁と北壁が関連し、本住居址は低い床面と新カマド部やP<sub>2</sub>、そして、南壁と東壁が関連するらしい。おそらく、旧住居址は本住居址の前身住居址であろう



J-4 住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色 粘土質シルト 少量の焼土粒と褐色シルト粒の混入あり。
2. 7.5YR2/1黒色 粘土質シルト
3. 7.5YR2/1黒色 粘土質シルト 焼土粒が混入。
4. 7.5YR2/3極暗褐色 砂質シルト 炭化物粒混入。
5. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土 褐色シルトブロックが混入。
6. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土
7. 7.5YR2/2~2/3  
黒褐色~極暗褐色 粘土質シルト 褐色シルト粒、焼土ブロック粒が多量に混入。
8. 7.5YR3/2黒褐色 シルト質土 粘性あり、焼土、炭化物粒を混入。
9. 7.5YR2/1黒色 シルト質土 多量の炭化物を混入。
10. 7.5YR4/4褐色 シルト質土 黒色シルトが混入。

第207図 J-4 住居址(遺構-2)



第208図 J-4 住居址(遺物)

と推定される。

〔遺物〕(第208図、P L 130 A)

埋土内での出土も少なからずあったが、小破片が多かったことから図化できなかった。床面直上では比較的多く出土したが、完形となるものが少なく、破片からの図化が多い。種類は土師器と須恵器があり、器種は環形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**環形土器**(667～679) いずれもロクロ使用成形で、底部切り離し技法が回転糸切り無調整のものである。内面はミガキ後黒色処理のものが1ヶ(673)あるが、他のものはいずれもミガキも黒色処理もされないものである。大きさには大小がある様であるが、大差はない。器形は体部が直線的に外傾するもの(674)・外弯気味に外傾するもの(667・672)もみられるが、他のもの(668・669・670・671・677・678)は内弯気味に外傾している。

**甕形土器**(680・683) 683はロクロ使用成形のものであるが、680はロクロ未使用成形である。680は床面直上より出土しているが、紛れ込んだ遺物の可能性が強い。680は底部周囲に突出をもち、底面には木葉痕をもつ。683は頸部より若干膨れる体部をもち、口縁部は頸部より大きく外反し短い。口唇部は挽き出しによって縁帯状を呈している。調整技法は、体部外面にヘラケズリをもち、内面はロクロナデのみである。なお、683は体部には粘土紐の巻き上げ痕を明瞭に残しており、紐巻き上げロクロ仕上げ成形である。

#### 須恵器

**甕形土器**(681・682) いずれも体部と底部を若干残存する破片である。外面にヘラケズリやヘラナデをもっている。(高橋与右エ門)

### 66) J-6 住居址

〔遺構〕(第209図、P L 37 C)

本住居址は東側部分でJ-6土坑と重複している。重複遺構との新旧関係は、本住居址の方が古い。

規模は北南が約4.1mであるが、東西はJ-6土坑の削剝によって不明である。壁高は約0.24mを測り、壁は床面に対して約95度の角度を示している。残存部分から推定される平面形は隅丸方形で、主軸は北-南方向にあり磁北に対して約6度西に偏している。埋土は黒褐色を呈するやや粘性のある砂質のシルトで構成され、暗褐色のシルト粒や炭化物粒・焼土粒が混入している。また、少量であるが礫の混入もみられる。床上0.03m～0.05m位の面で、炭化材が検出されている。炭化材の大きさは巾5cm～15cm・長さ10cm～60cm位までみられ、北壁寄りでは炭化材と同位で焼土の範囲も確認されていることから、本住居址は焼失住居址である可能性が大

きい。床は地山の極暗褐色を呈する粘土質のシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面には高低差2cm～3cmの小起伏がみられるが、総じて平坦で良く締まり固い。壁溝は検出されていない。検出された部分は袖部と燃焼部のみで、天井部・煙道部・煙出部は検出されていない。その中で、煙道部についてはそれらしき部分が検出されたが、精査の結果明確に出来なかった。袖部は、床面上に黒褐色を呈し褐色シルト粒や土師器片を混入する粘土質シルトを貼り付けて構築している。燃焼部底面は床面と同位面で奥壁まで続き、煙道部との接続は不明である。燃焼部の焼土は非常に薄く、範囲も小さいことから、長期間に亘って使用された結果ではないものと理解される。煙道部や煙出部は前述の通り定かでない。

本住居址の床面では土坑が全く検出されていない。おそらく、柱穴・貯蔵穴ともにもたない住居址であろう。

カマドは北壁で検出されているが、壁のどの位置に存在するかは不明である。

〔遺物〕(第210図、P L 130 B)

床面直上での出土は非常に少なく、大半は埋土内よりの出土である。それも、小破片のものが中心で完形となるものは含まれていない。686もほぼ半分を残存するのみである。種類は土師器と須恵器があり、器種は坏形土器・小型土器がある。

#### 土師器

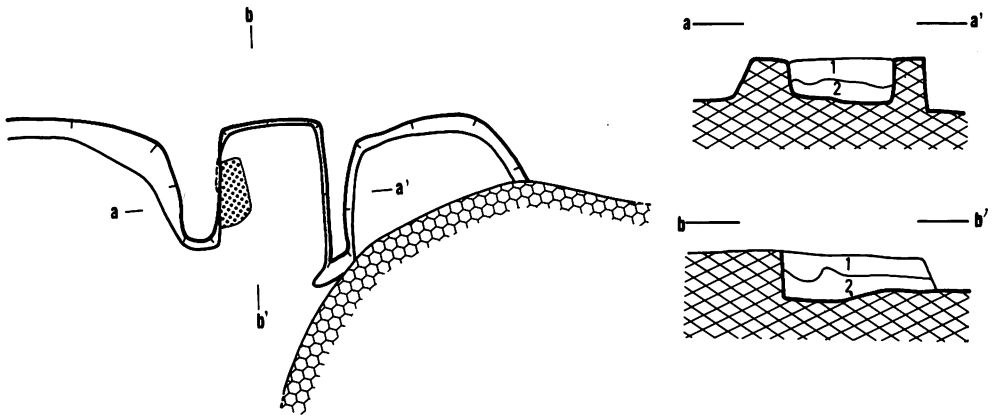
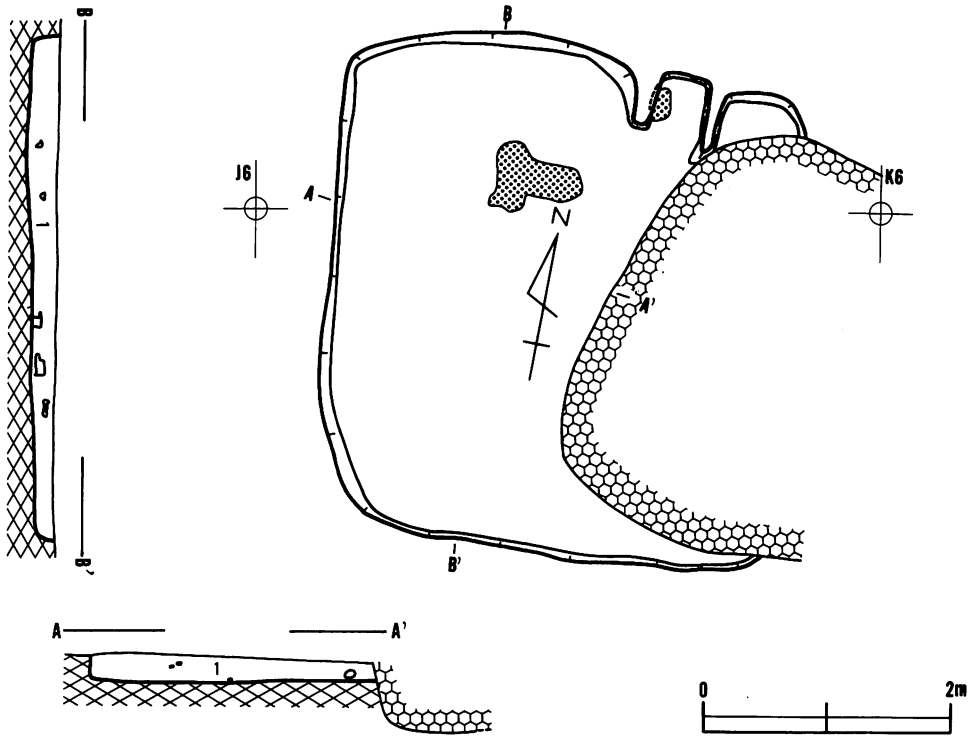
**坏形土器**(684・685) いずれもロクロ未使用成形で、体部外面に段をもち底部が丸底のものである。体部～口縁部がほぼ直線的に外反するもの(684)と大きく外反し次第に内弯しながら口唇部に移行するもの(685)があり、深さでは684が若干浅いものの口縁部径はほぼ同一である。調整技法は、口縁部外面はヨコナデが主体であるが685は上端部分にミガキが入っている。底部外面は684の場合はヘラケズリであるが、685は不明である。内面は、684の口縁部が若干ヨコナデを残しているが、他は全面ミガキで後黒色処理されている。

**小型土器**(686) ロクロ未使用成形された、小型の鉢形土器に近いものである。底部周囲に突出をもって、高台状を呈しており、体部は軽く内弯気味に外傾して口唇部に移行し、口唇部は先細りとなっている。器高より口縁部径の方が大である。底面は平らにナデられている。調整技法は体部外面は不明瞭であるがナデが若干みられ、底部の括れ部分にはヨコナデが入っている。内面はヘラナデである。

#### 須恵器

**甕形土器**(1111) 大甕の体部破片と考えられるものである。外面には斜格子平行タタキ目・内面に青海波文をもつものである。

(高橋与右エ門)



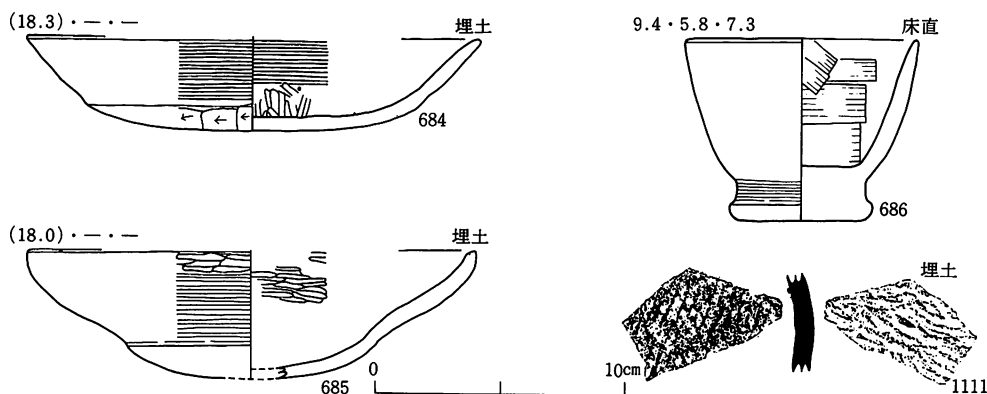
J-6 住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色 粘土質シルト 褐色シルト粒と炭化物少々を混入。
2. 7.5YR2/3極暗褐色 シルト質 土 褐色シルト粒を多量に混入。

J-6 住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色 砂質シルト やや粘性あり、暗褐色シルト粒、炭化物粒、少量の焼土粒と礫が混入。

第209図 J-6 住居址(遺構)



第210図 J-6住居址(遺物)

### 67) J-7住居址

〔遺構〕(第211・212図、P L 38A)

本住居址は重複遺構もなく単独で検出されている。

規模は北南約6.8m・東西約6.7mで、壁高は北壁で約0.25m・南壁で約0.08mを測り、壁は床面に対して約110度の角度を示している。平面形は若干歪んではいるもののほぼ隅丸方形を呈し、主軸は北-南方向にあり磁北に対して9度西に偏している。埋土は黒色～黒褐色を呈するシルトの単層で構成され、砂粒・小礫・炭化物等が混入している。なお、埋土最下位～床面直上では粒径5cm×5cm～20cm×30cm位の礫が多く混入し、特に、床面中央部分で多くみられた。粘性はあまりなく、締まり良く固い。床はほぼ地山の極暗褐色を呈するシルトで構築されているが、南壁沿いの部分は地山の黄褐色の砂質シルトに細礫～小礫の混入した土で構築され、この部分では一部礫が露出している。床面は貼床せずに地山面をそのまま床面としており、南壁沿いの礫の露出している部分には若干起伏があるものの、総じて平坦である。しかし、南壁沿いの方から北壁沿いに向かって下り勾配を示しており、高低差は約0.11m～0.12m位を測る。また、床面中央付近に現地性焼土の範囲が観察されている。おそらく炉跡と考えられる。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>がほぼ径0.25m～0.3m・深さ0.2m～0.3m位を測り、P<sub>5</sub>は規模が径約0.4m×0.35m・深さ約0.13mである。埋土はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は黒褐色のシルトと黒色の粘土質シルトの2層からなり、1層には砂粒が多く混入し、2層は強粘性であるという特徴をもつ。P<sub>3</sub>は極暗褐色のシルトでP<sub>4</sub>は黒褐色のシルトで、それぞれ単層で構成されている。P<sub>5</sub>は黒褐色を呈するシルトの単層である。なお、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の

2層を構成する黒色の粘土質シルトは柱痕跡を表わしており、観察によれば径約10cm～15cm位の円形を呈している。これら土坑の性格は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本住居址の対角線上に位置することや、規模もほぼ近接していることから、本住居址の柱穴を構成しているであろう。P<sub>5</sub>は柱穴状を呈しているものの、位置がずれていることから、柱穴か否かは明確でない。

カマドは北壁で2基検出されているが、壁ほぼ中央に煙道部と燃烧部焼土が、そして、中央より0.75m西に偏して、袖部等も残存する別のカマドが検出され、残存状態から考えると、西に寄る方が新しいカマドで、壁中央に位置する方が古いカマドと推定され、改築されたものであろう。ここでは新しい方から記述していく。新しいカマドに関連する遺構として検出されたのは、袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は、床面を0.05m～0.1m掘り込んで基底部とし、掘り込んだ部分に左右両袖部ともに巾10cm～15cm・長さ30cm～35cmの礫を縦位で各4ヶづつ並べ、その両側に褐色のシルトと黒色のシルトが混じり合ったシルトを貼り付けて構築している。礫はお互いに向かい合う様に軽く内傾している。また、焚口部には左右袖部の上部を跨ぐ様に横架された粒径48cm×10cmの扁平で長い礫が1ヶ検出されたことから、焚口部は3ヶの礫を利用して「冂」状に組み立てていたことが判明した。燃烧部底面は床面より若干掘り窪められており、奥壁に向かって緩やかな下り勾配を示し、煙道部とは段差で接続している。燃烧部焼土は焚口部より奥へ約0.5m位の位置まで分布し、層厚も約0.05mと厚い。なお、カマド埋土内で燃烧部焼土とほぼ同位置に焼土層が検出されているが、燃烧部焼土とは間層を挟んでおり、おそらく、天井部の焼土が崩落したものであろうと推定される。また、燃烧部底面には土師器甑形土器の破片が若干散乱していたが、完形とはならなかった。支脚やカマド埋設土器は検出されていない。煙道部の底面は中央部が若干高く煙出部と奥壁に向かって緩やかな下り勾配を示しているものの、煙出部に土坑状の掘り込みはない。古いカマドに関連する遺構として、燃烧部焼土・煙道部・煙出部であり、袖部は残存していない。左側袖部の位置は新カマドの右側袖部に接する様な位置と考えられることから、新カマドを構築する際に除去したものであろう。燃烧部焼土は新カマドのそれより若干低い面に位置していることから、燃烧部は床面より若干掘り窪められていたものと推定される。また、底面は、焼土の位置より奥壁に向かって緩やかな上がり勾配で奥壁へ続き、煙道部とは段差がない。焼土の位置が新カマドのそれより壁に寄っていることから、新カマドより袖部が短かった可能性が考えられる。範囲は新カマドより広く、層厚はほぼ同様である。煙道部は割り貫きによって構築され、断面形が「逆台形」に近い形を呈している。底面は起伏もなく平坦でほぼ水平である。煙出部底面には土坑状の掘り込みはない。

〔遺物〕(第213・214・215図、P L 130C・131・132)

埋土内での出土は比較的少なく、床面直上よりの出土が多い。しかし、完形となるものは少



なく破片が多かった。出土位置は偏在することなく、ほぼ全体に散在している。種類は土師器・土製品・鉄製品があり、器種は坏形土器・甕形土器・甌形土器・小型土器・土製紡錘車・土製丸玉・名称不明土製品・名称不明鉄製品等がある。

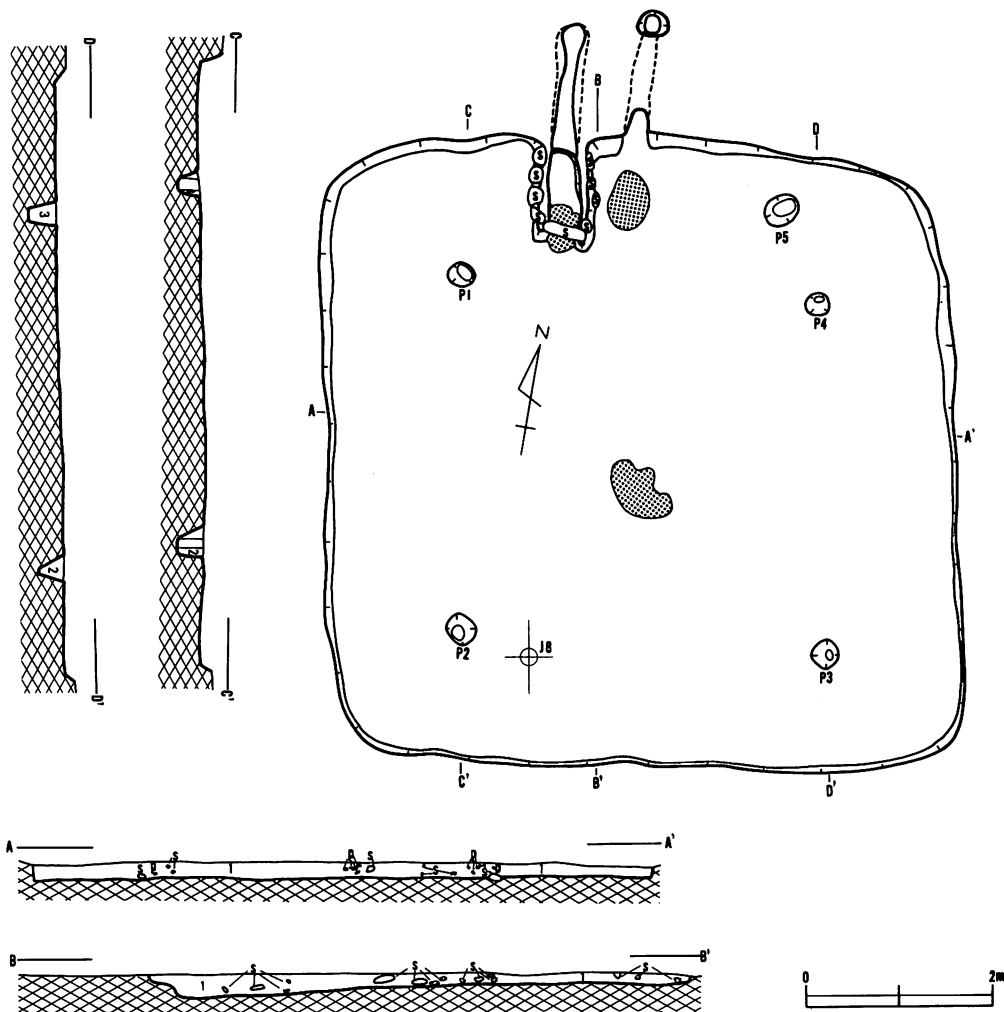
### 土師器

**坏形土器** (687～695) いずれもロクロ未使用成形で、体部に段をもち底部形態が丸底のものであり、体部段に対応する内面にも稜をもっている。体部～口縁部は直線的に外反するものが主体で、口唇部は玉縁状を呈するもの(691)・口縁部上端が外削ぎされ先細りとなるもの(690)・丸味をもつもの(688・689・692・695)等がある。大きさは口縁部径19cm前後とほぼ同じである。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ(693)・ナデやケズリ後ヨコナデ(690・695)・ヨコナデ後ミガキ(691・692・694)・ヘラナデ(688)等があり、底面はヘラケズリとヘラナデのみであり、ミガキのものはない。内面は全面ミガキされた後黒色処理されている。

**甕形土器** (698～705) いずれもロクロ未使用成形のものである。体部が若干膨らむもの(701・704)と膨らまないもの(702)があり、大きさでは大型(701・703)・中型(702)・小型(699・704)がある。底部より外傾する体部は中位～上位に最大径をもち、頸部で軽く窄むが、頸部には段をもつもの(701)ともたないもの(702・703・705)がある。口縁部は頸部より直線的に外反するもの(701・703・705)と内弯気味に外反するもの(702)があり、口唇部は角張るものと丸味をもつもの・先細りとなるものがある。底部周囲には軽い突出をもつもの(698・701)ともたないもの(699・700・702・704)があり、底面は良くナデられ木葉痕をもつものはない。調整技法は、口縁部の外面はハケメ後ヨコナデかヨコナデ、内面がヨコナデである。体部は外面がハケメまたはハケメ後スリケシが主体で、内面はハケメが主体でハケメ後スリケシのものもみられる。

**甌形土器** (706・707) ロクロ未使用成形のもので、甕形土器の底部を除去した様な形態の無底型のものである。706はほぼ完形であるが、体部は軽く外反し、内弯気味に頸部へ移行し、頸部には軽い稜がある。口縁部は外弯気味に外反し、口唇部は丸味をもっている。底部は内側に突出する様な形態を示す。707は体部下位～底部にかけての破片であるが、体部下端付近に向かい合う様に各1ヶの貫通孔をもつ。調整技法は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面ハケメ後ヘラナデ、内面はハケメ後スリケシかヘラナデである。

**小型土器** (697・698・708) いずれもロクロ未使用成形のもので、697は小型の鉢形を、そして708は小型の壺形を呈している。697は底部より直線的に外傾する体部をもち、頸部には段がつけられ、口縁部は直線的に外反している。底部はそのほとんどを欠失しているので定かでない。調整技法は、口縁部の外面がヨコナデされる以外は定かでない。おそらく、ナデかミガキが入っているものであろう。708は体部が球胴型に近く、底部形態が丸底である。体部最大径は肩



J-7 住居址ピット計測値

	長径	短径	深さ
P <sub>1</sub>	29cm	25cm	26cm
P <sub>2</sub>	33cm	30cm	30cm
P <sub>3</sub>	30cm	29cm	39.5cm
P <sub>4</sub>	27cm	25cm	40.5cm
P <sub>5</sub>	40cm	30cm	13cm

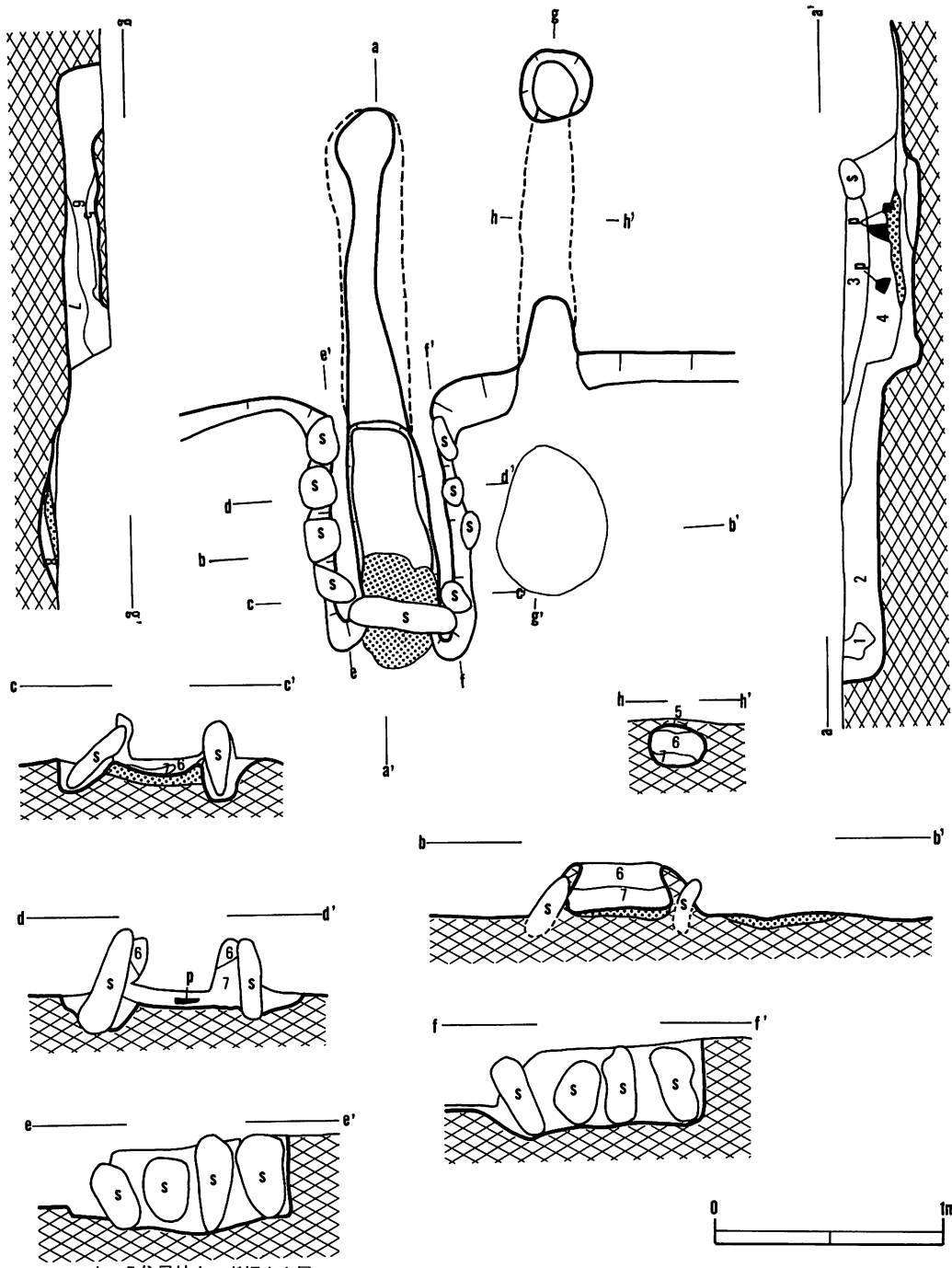
J-7 住居址埋土土層

- 7.5YR1.7/1~2/2 黒色~黒褐色 砂質シルト 堅くよく締まっている、粘性あり、炭化物と若干の小礫が混入。

J-7 住居址ピット埋土土層

- 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 よく締まっている、砂粒の混入あり。
- 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質土 少量の石が混入。
- 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質土 よく締まっている、褐色シルトブロックが斑状に混入、砂粒も混じる。

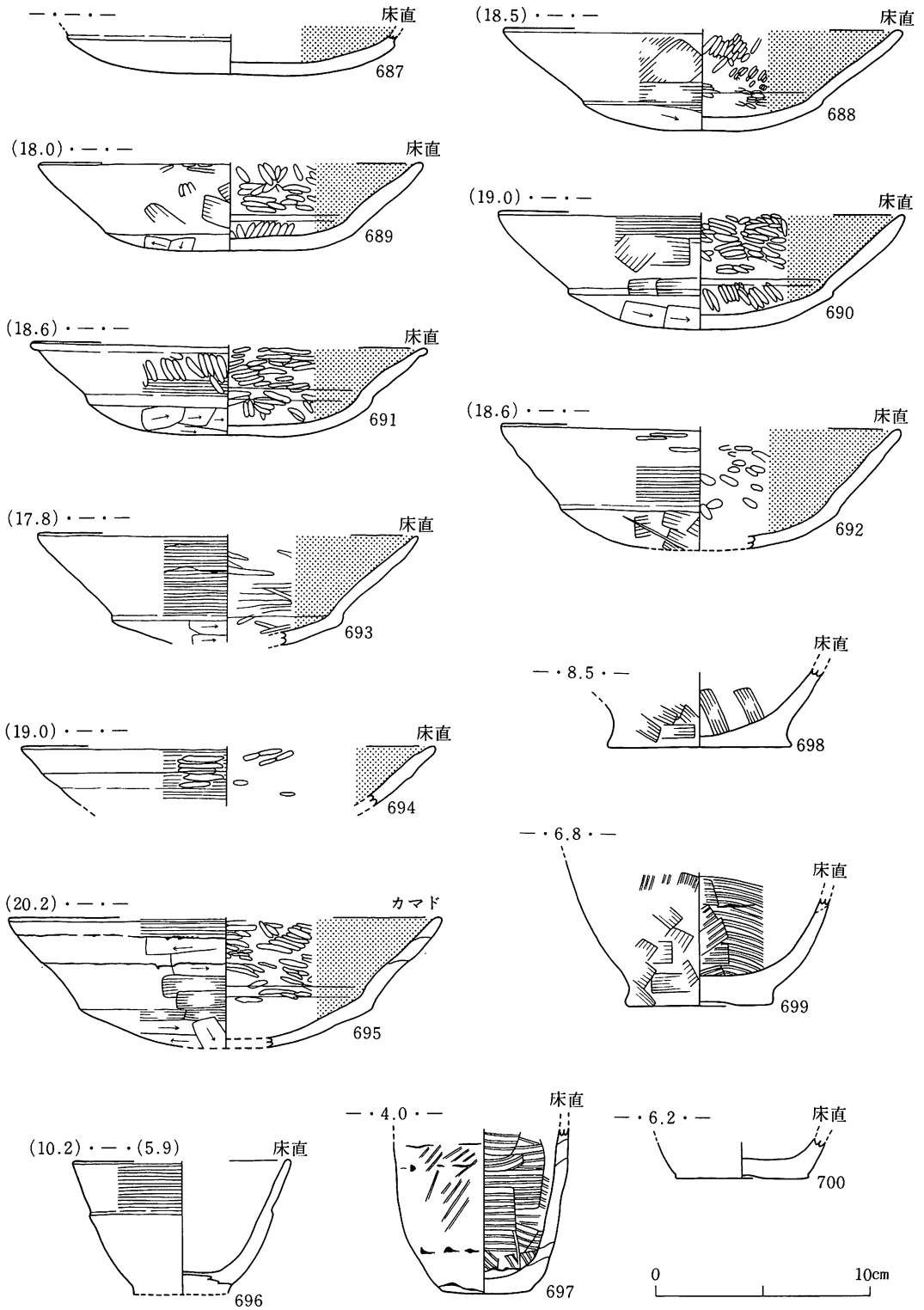
第211図 J-7 住居址(遺構一)



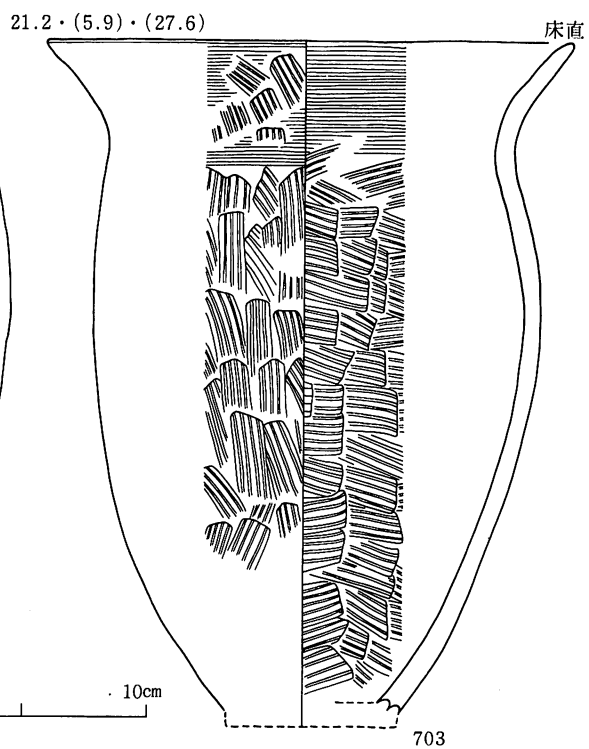
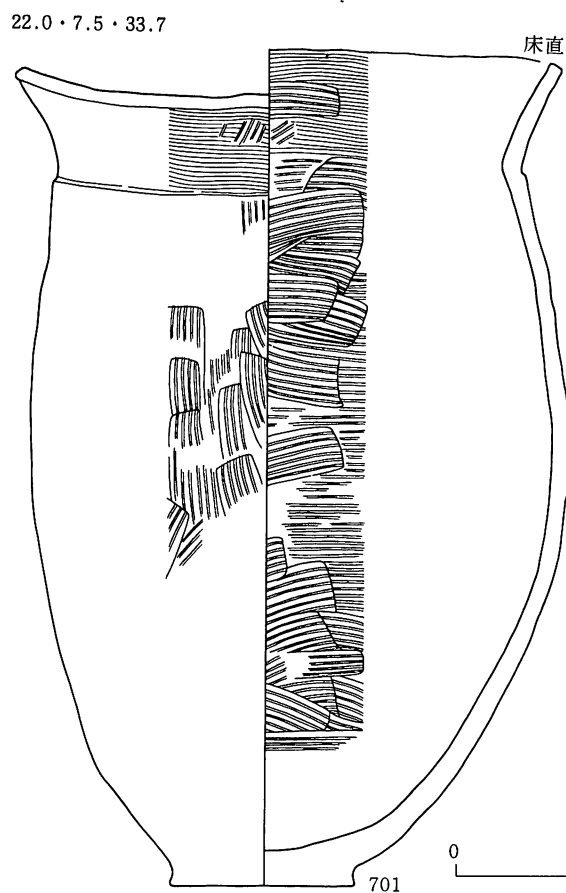
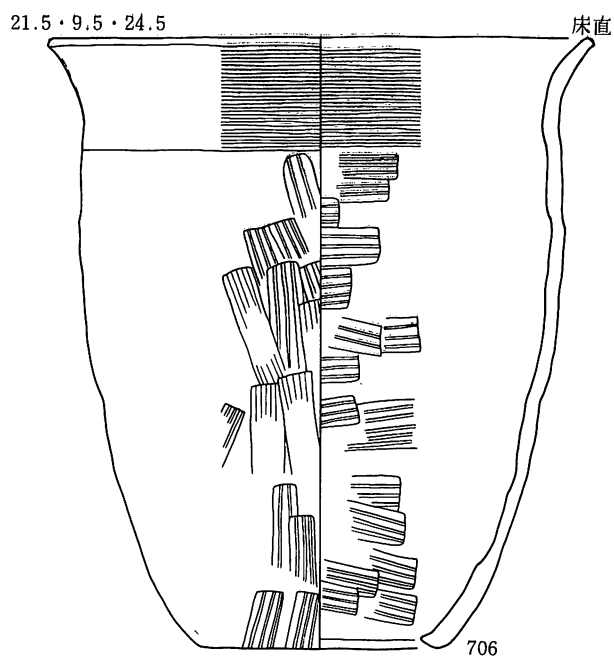
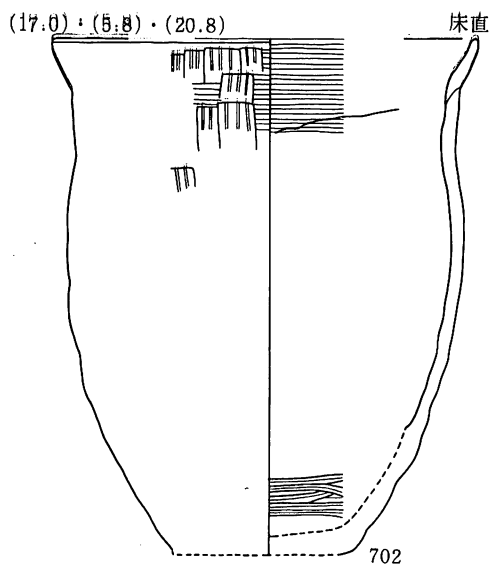
J-7 住居址カマド埋土土層

- |                     |        |                        |
|---------------------|--------|------------------------|
| 1. 5 G-10 G2/1 暗緑灰色 | 砂質シルト  | 締まっている、黒色シルト粒が混入。      |
| 2. 7.5 YR2/1 黒色     | 粘土質シルト | 軟らかい、褐色シルト粒と少量の焼土粒を混入。 |
| 3. 7.5 YR2/2 黒褐色    | シルト質土  | 褐色シルトの小粒が多量に混入。        |
| 4. 7.5 YR2/2 黒褐色    | シルト質土  | 焼土ブロックが多量に混入。          |
| 5. 7.5 YR2/3 極暗褐色   | シルト質土  | 暗褐色シルト混入。              |
| 6. 7.5 YR2/1 黒色     | シルト質土  | よく締まっている、やや粘性あり。       |
| 7. 7.5 YR2/1 黒色     | シルト質土  | よく締まっている、焼土粒を多量に混入。    |
| 8. 7.5 YR5/6 明褐色    | 土      | 火熱を受けて赤色変化。            |

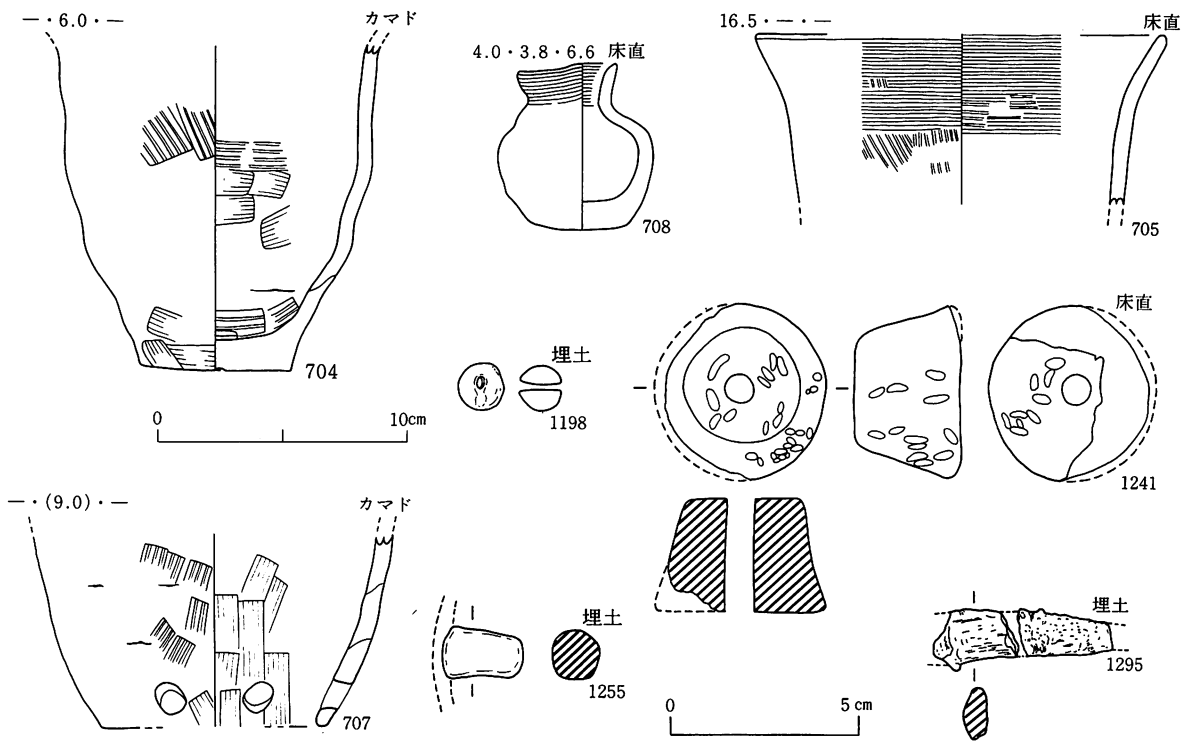
第212図 J-7 住居址(遺構-2)



第213図 J-7住居址(遺物一)



第214図 J-7住居址(遺物-2)



第215図 J-7住居址(遺物-3)

部にもち、頸部は大きく窄み、口縁部は直線的に軽く外反する。調整技法は、口縁部内外面にヨコナデが観察される以外は定かでない。おそらく、ナデカミガキが入るものであろう。

#### その他

**土製品** (1198・1241・1255) 1198は土製の丸玉で、中心部に1ヶの貫通孔をもち、全面が黒色処理されている。1241は土製の紡錘車で、截頭円錐形を呈し中心部に1ヶの貫通孔をもつ。1255は把手付土器の把手部かとも考えられるが、名称は定かでない。断面は円形である。

**鉄製品** (1295) 断面が扁平で、やや長くなる様であるが、大半を欠失していると考えられることから、名称は不明である。

(高橋与右エ門)

## 68) K-3 住居址

〔遺構〕(第216図、P L 38 B)

本住居址は南側部分がK-4住居址やK-5住居址と重複しているが、重複遺構との新旧関係は、重複するいずれの住居址よりも本住居址が新しい。また、本住居址は北側の段丘崖沿いに位置していることから、遺構全体が検出されておらず、その大半は崖の崩壊によって削剝されている。

規模は東西が約4.5mを測るものの、南北は不明である。壁高はもっとも高い南壁で約0.3mで、壁は床面に対して約110度の角度を示している。平面形は定かでないが、検出された部分から推定すると隅丸方形を呈するものと考えられ、主軸は東-西方向にあり磁北に対して約95度東に偏している。埋土は暗褐色を呈するシルトの単層で構成され、土性は、やや締まり良く粘性はない。混入物としては埋土下位に礫が2~3ヶ混入していた以外はほとんどない。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は南西隅部~南壁沿いが他の面より若干高いものの、総じて起伏もなくほぼ平坦で、良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

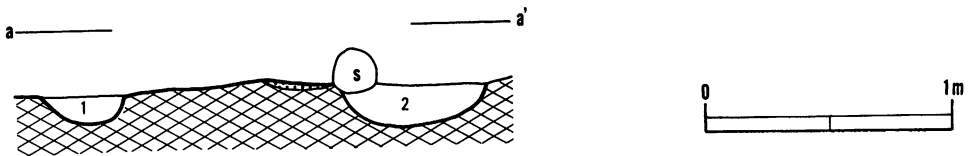
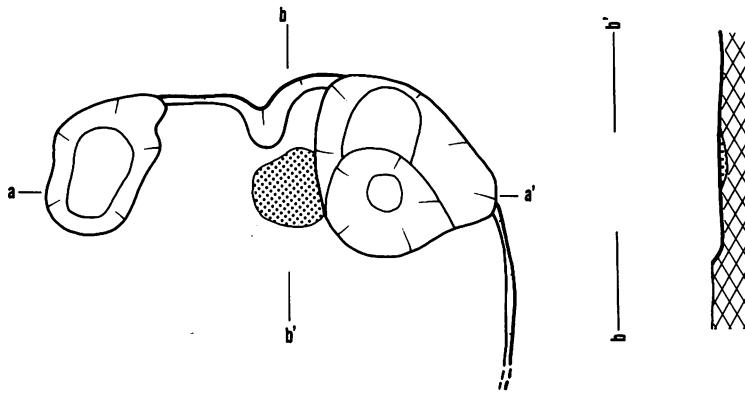
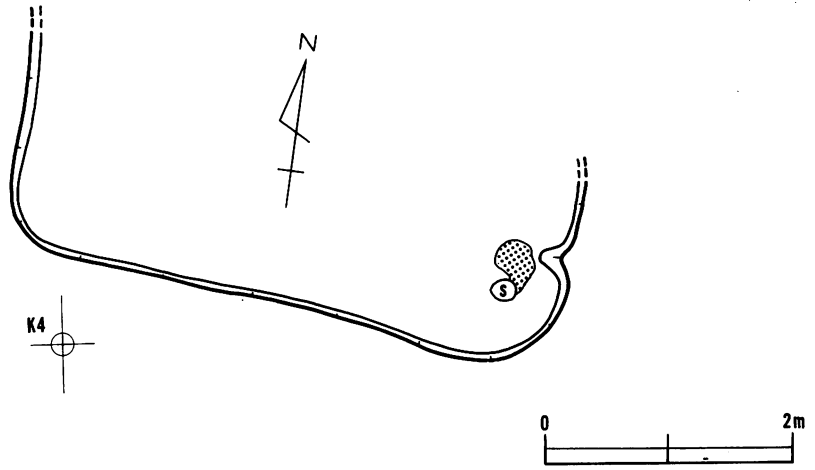
本住居址の床面では、 $P_1$ ・ $P_2$ の土坑が検出されている。 $P_1$ の規模は長径約0.55m×短径約0.38mで深さ約0.08m、 $P_2$ のそれは径約0.7mで深さ約0.35m位である。平面形は $P_1$ が楕円形で $P_2$ は不整楕円形を呈し、断面形は $P_1$ が擋鉢型で $P_2$ は2段構造となっている。埋土は $P_1$ が極暗褐色のシルトであり粘性がなく、褐色シルト粒が混入している。 $P_2$ は黒褐色の粘土質シルトで構成され、焼土ブロックや褐色シルト粒が混入している。これら土坑の性格は、 $P_1$ と $P_2$ がカマドを挟んで対峙していることや、 $P_2$ が南東隅部に位置していることから、本住居址に伴う貯蔵穴であろうと考えられる。なお、柱穴と考えられる土坑は検出されていない。

本住居址では明らかにカマド跡といえる様な遺構は検出されていない。しかし、東壁の南東隅部寄りで見地性の焼土面が検出され、他にこの様な焼土面が検出されていないことから、この焼土面をカマド燃焼部の残痕と推定した。従ってここではこの位置をカマドとして記述する。焼土以外のカマドに関連するとおもわれる遺構は全く検出されていない。焼土の位置は東壁より約0.45m・南壁より約0.8mの距離を測る。焼土範囲は径約0.3mで、右脇には焼成を受けて欠損した礫が1ヶ在る。それ以外の袖部・煙道部・煙出部等は検出されていない。

〔遺物〕(第217・218図、P L 133 A)

埋土内ではほとんど出土していない。大半のものは床面直上で出土しているが、特にカマド周囲での出土が多かった。種類は土師器と須恵器があり、器種は坏形土器・甕形土器だけである。

### 土師器

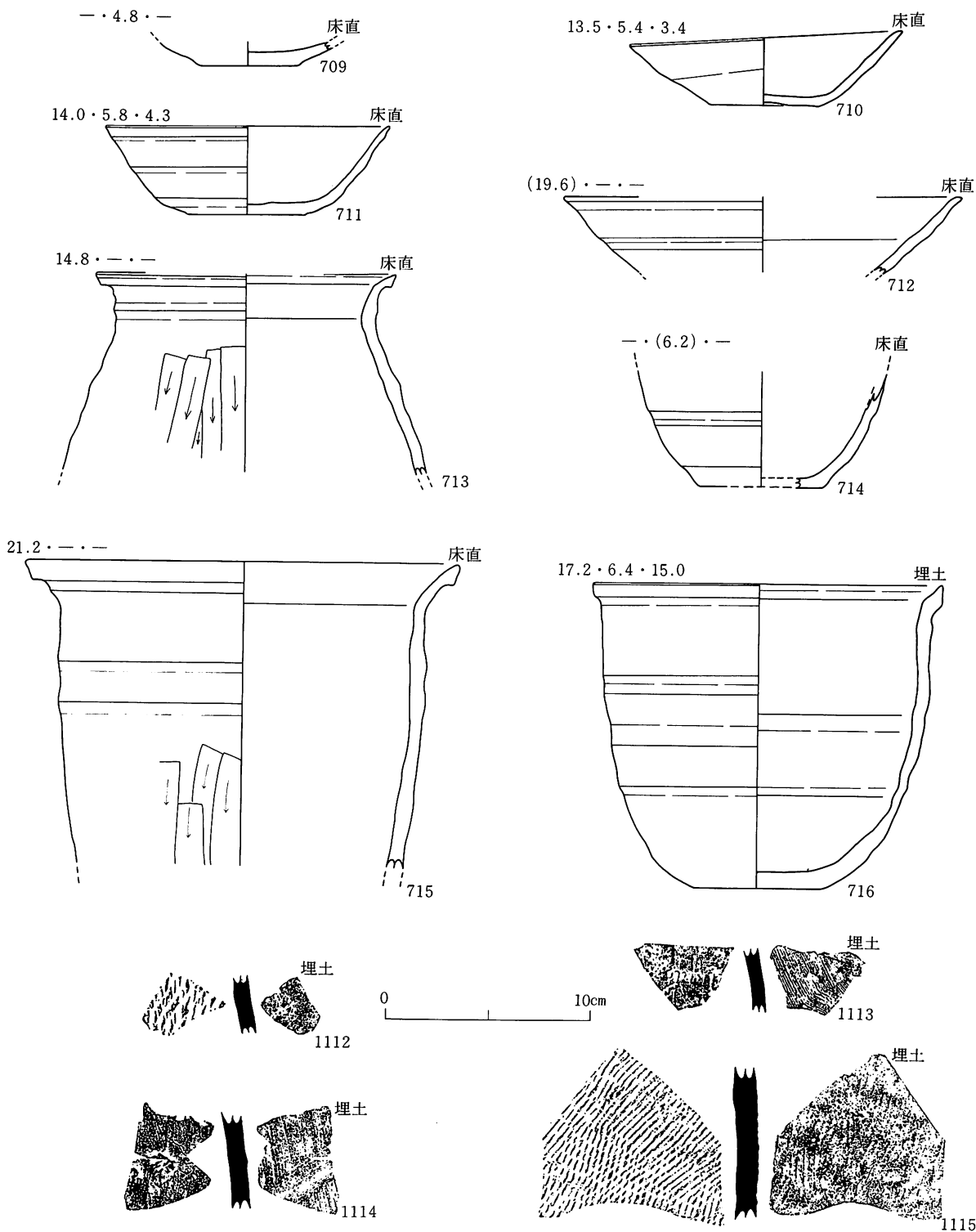


K-3 住居址カマド埋土土層

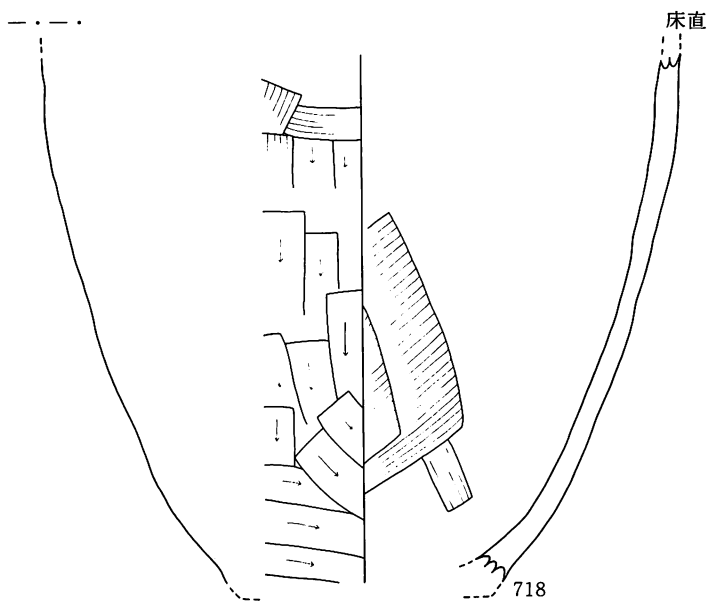
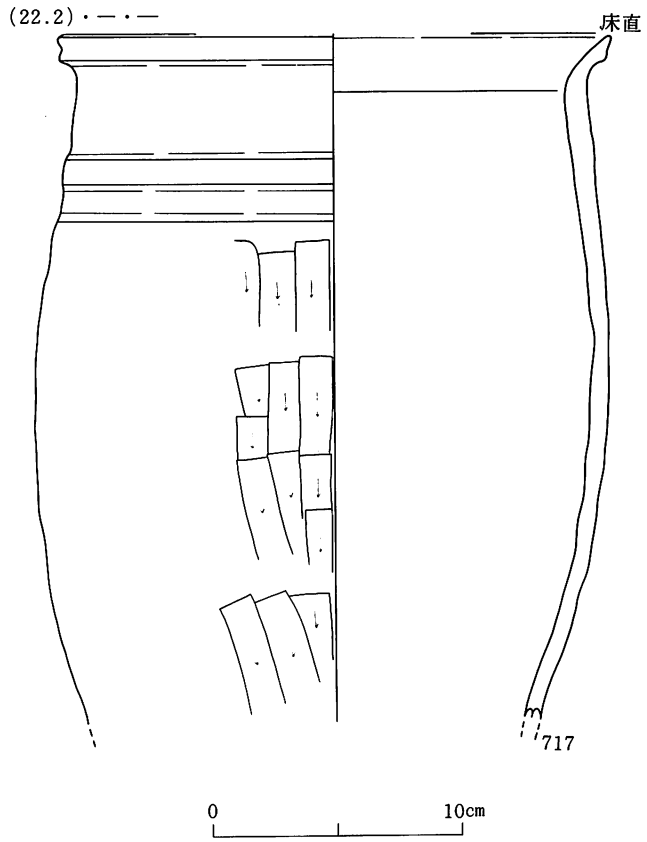
1. 7.5 YR2/3 極暗褐色 シルト質 土 粘性なし、褐色シルト粒の混入あり。
2. 7.5 YR2/2 黒褐色 粘土質シルト 褐色シルト粒と焼土ブロックが混入。

第216図 K-3 住居址(遺構)





第217图 ·K-3 住居址(遺物一)



第218図 K-3住居址(遺物-2)

**坏形土器**(709～712) いずれもロクロ使用成形のもので、内面黒色処理のものはない。底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。体部～口縁部は直線的に大きく外傾し、器厚は口唇に向かって次第に先細りとなる。712は他のものより口縁部径が大きいものの、他のものはほぼ同じである。調整技法は内外面ともロクロナデ以外に再調整はない。

**甕形土器**(713～718) いずれもロクロ使用成形で、体部が若干膨らむもの(713)とそうでないもの(715～718)があり、大小では大型(717・718)・中型(713・715)・小型(714・716)があり、小型のものの底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。口縁部は短いもの(716・717)とやや長目のもの(713・715)があるが、それほどの大差はない。口縁部上端～口唇部は若干挽き出されて縁帯状を呈している。調整技法は714・716の小型のものはロクロナデ以外の再調整はない。それ以外のものは、外面は体部上位～中位以下がヘラケズリ調整され、内面は一部にナデやミガキが入っている。

#### 須恵器

**甕形土器**(1112～1115) 大甕や甕の体部破片と考えられるものである。1112と1115は外面に平行タタキ目をもつが、内面は1112は無文で1115は平行タタキ目をもつ。1113と1114は外面がヘラケズリであるが、内面は1113がカキ目・1114がヘラナデである。

(高橋与右エ門)

### 69) K-4 住居址

〔遺構〕(第219図、P L 39A)

本住居址は北側部分でK-3住居址そして東側部分～南側部分がK-5住居址と重複している。重複遺構との新旧関係は、K-3住居址は本住居址より新しく、K-5住居址は本住居址よりも古い。

規模は東西約4.0m・南北はK-3住居址によって削剝を受けているが、残存する西壁では約4.4mを測り、壁高は約0.25mで壁は床面に対して約110度の角度を示している。平面形は主軸に対して若干横長の隅丸長方形を呈し、主軸は東-西方向にあり磁北に対して約100度東に偏している。埋土は黒褐色を呈するシルトで構成されるが、混入物によって3層に細分されている。1層は締まり良く、少量の褐色を呈するシルト粒が混入し、2層は締まり良く粘性が強い。3層は褐色を呈するシルト粒や炭化物粒が多量に混入している。また、2層下位と3層には粒径10cm～20cm位の礫が多く混入し、床面に接しているものも多い。床は地山の極暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は東壁に寄るほど低くなり高低差約0.07mを測るものの、総じて起伏もなくほぼ平坦で良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>が径約0.8m×0.7mで深さ0.25m、P<sub>2</sub>は径約0.65m×0.6mで深さ0.4mをそれぞれ測り、平面形はP<sub>1</sub>が楕円形でP<sub>2</sub>は円形を呈している。P<sub>1</sub>の埋土は黒褐色のシルトで構成され、P<sub>2</sub>のそれは強粘性の黒色を呈するシルトで構成されている。これら土坑の性格は、P<sub>2</sub>はカマド右脇に位置することから本住居址の貯蔵穴であろうと考えられるが、P<sub>1</sub>は性格が定かでない。しかし、床面出土の土器とP<sub>1</sub>内出土の土器が接合していることから本住居址に伴う土坑であろう。

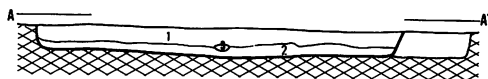
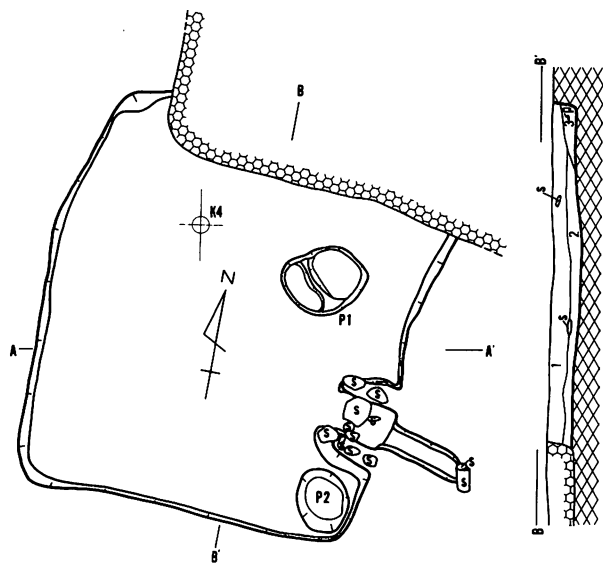
カマドは東壁で検出され、壁の中心より南に寄っており、南東隅部より1.25m北に寄って位置する。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は基底部の掘り込みもなく、床面に直接左側袖部で粒径25cm～10cm位の礫を3ヶ、右側袖部では粒径30cm～10cmの礫を9ヶそれぞれ横積みし、空隙には両側から黒褐色のシルトと黄褐色のシルトが混合した土を詰めて補強している。なお、焚口部には左側袖部で粒径約30cm×10cm、右側袖部には粒径約30cm×15cmの礫が各1ヶ縦位で配置されている。また、燃烧部内には粒径約30cm×30cmの扁平な礫が落ち込んでおり、この礫は焼成を受けた痕跡を残していることから、天井部を構成した礫である可能性が大きい。燃烧部は床面より若干高く、奥壁へ向かって緩やかな上がり勾配を示し、煙道部とは段差がない。焼土は焚口部分に若干観察されたのみで、範囲も狭くそして層も薄い。燃烧部の奥壁寄り左側袖部脇には粒径約15cm×7cmの礫が1ヶ縦位で埋め込み支脚としていた。また、支脚礫には土師器の小型甕形土器(736)が伏せて被せられているのが検出され、支脚が補強されたものであろう。煙道部は検出時には非常に不明瞭であったが、位置を推定して立割りの結果、底面が起伏もなく平坦であることが判明した。煙出部に土坑状の掘り込みはないが、壁に粒径約20cm×35cmの礫を1ヶ縦位で埋めて補強していた。

[遺物](第220・221・222図、P L 133 B・134・135 A)

埋土内や床面直上で出土しているが、いずれも破片が多く完形となるものは少ない。量的には床面直上より出土の方が多い。種類は土師器・須恵器・土製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・土製勾玉がある。

#### 土師器

**坏形土器**(719～733) 727はロクロ未使用成形であるが、他はいずれもロクロ使用成形のものである。おそらく、727は本住居址と重複するK-5住居址に伴う遺物で、調査時に紛れ込んだものであろう。底部切り離し技法は回転系切りで、731と733は再調整されているが、その他のものは無調整である。内面はミガキ後黒色処理されるもの(728～731)とロクロナデのみでミガキも黒色処理もないもの(719～722・724～726)があり、底部再調整はどちらにもみられる。底部より外傾する体部は直線的に立ち上がるもの(720・721)と内弯気味に立ち上がるも

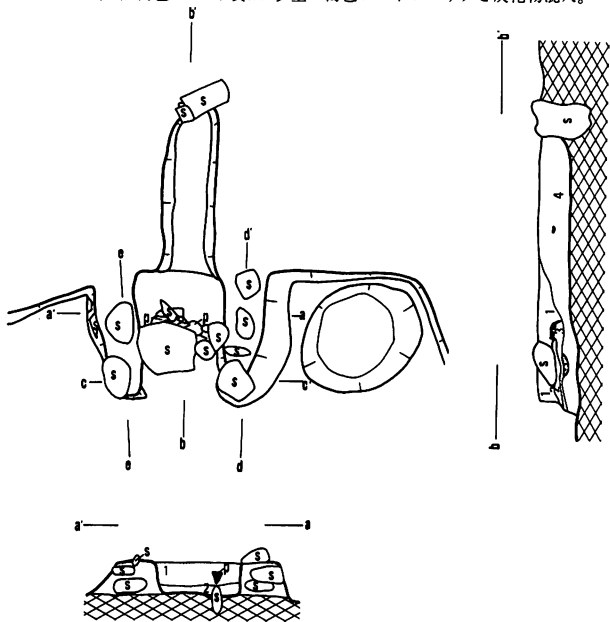
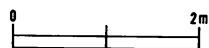


K-4 住居址埋土土層

1. 7.5YR3/2黒褐色 シルト質土 よく締まっている、少量の褐色シルト粒が混入。
2. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土 よく締まっている、粘性あり。
3. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土 多量の褐色シルトブロックと炭化物混入。

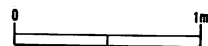
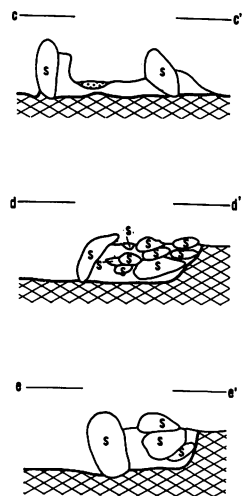
K-4 住居址ピット計測値

長径×短径 深さ  
P<sub>1</sub> 91cm×69cm 25.5cm  
P<sub>2</sub> 70cm×56cm 42.3cm

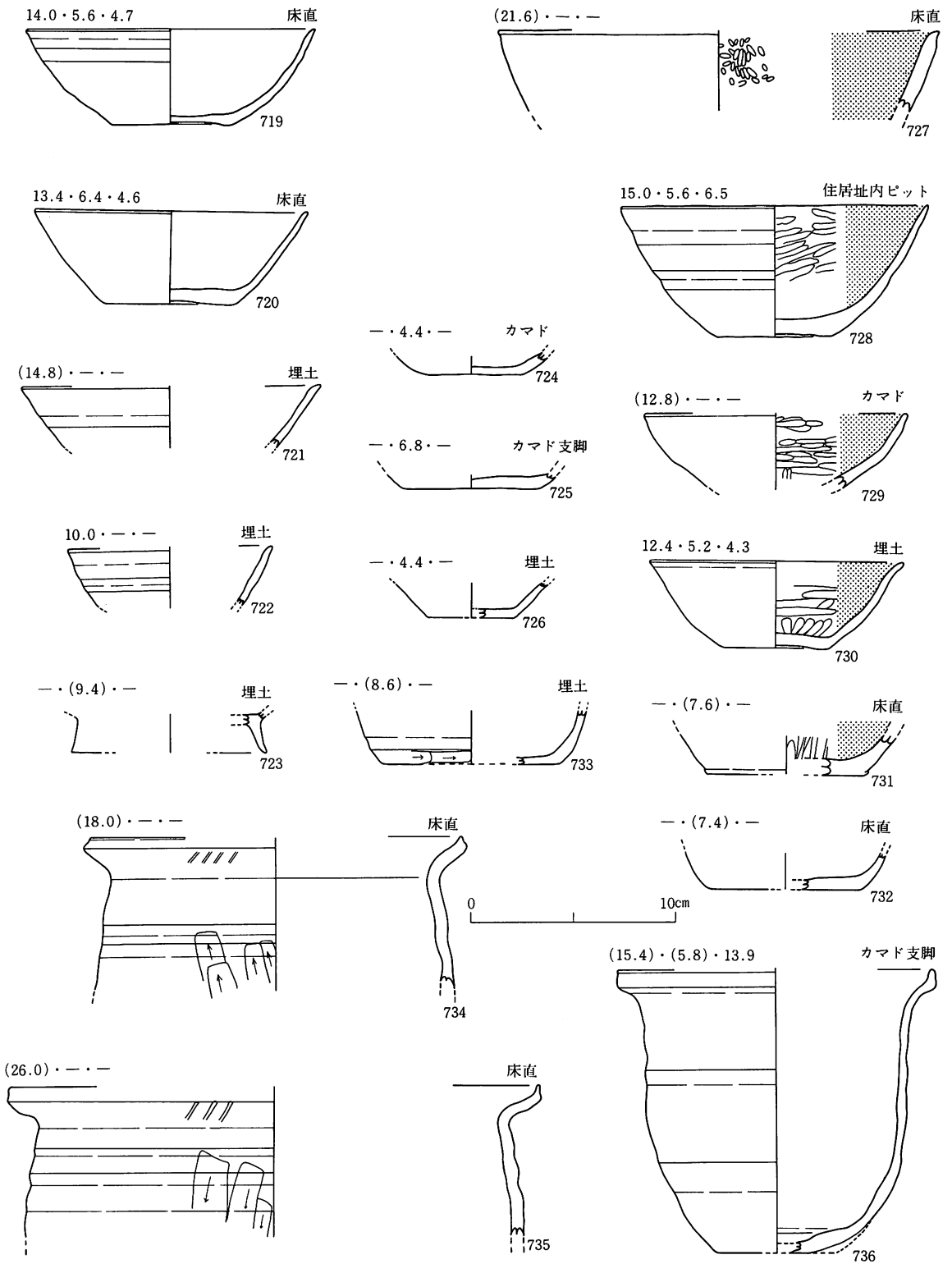


K-4 住居址カマド埋土土層

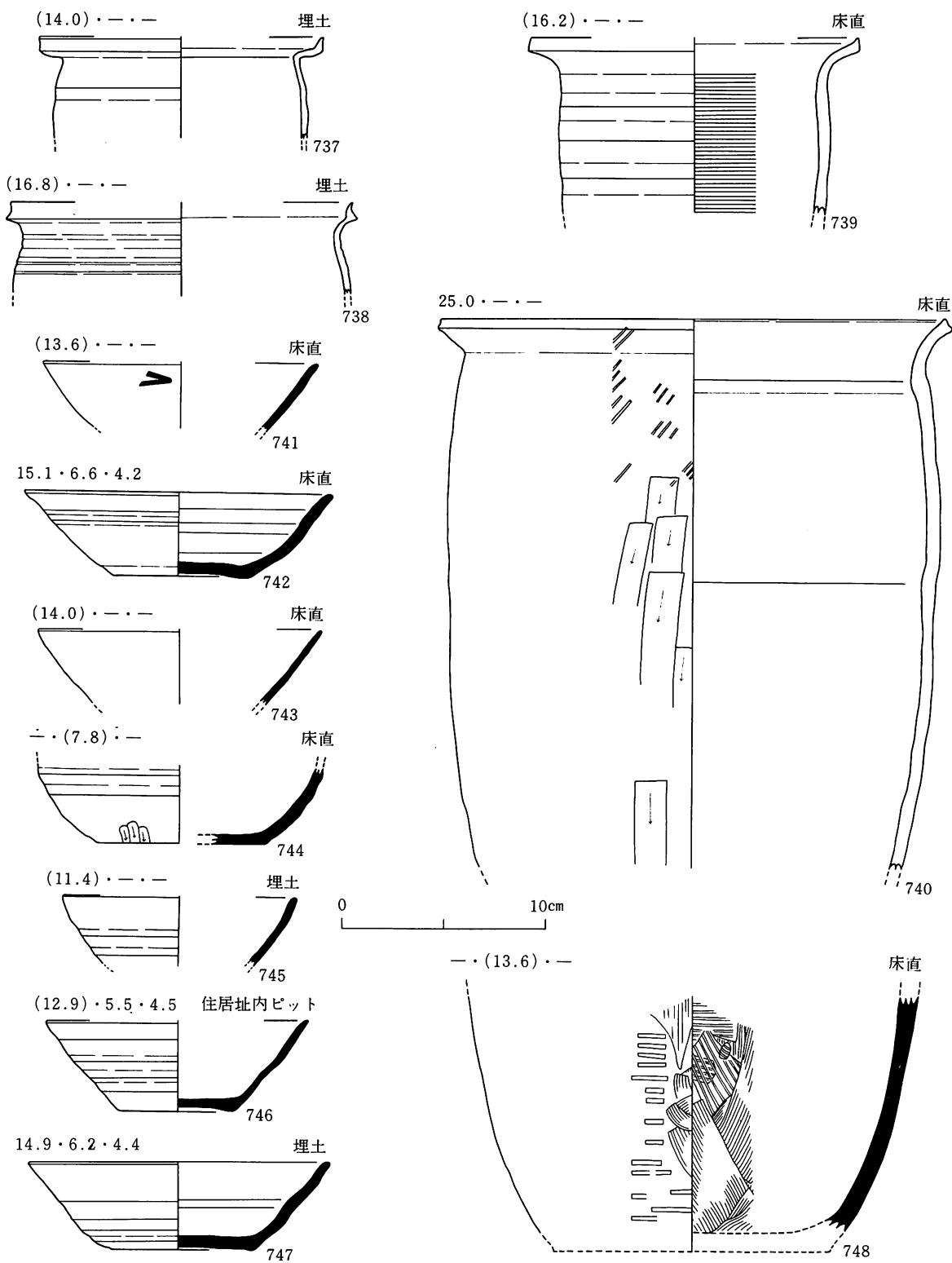
1. 7.5YR2/1黒色 シルト質土 褐色砂質シルトブロックと焼土粒の混入あり。
2. 7.5YR2/1黒色 シルト質土
3. 7.5YR2/1黒色 多量の焼土粒が混入。
4. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土



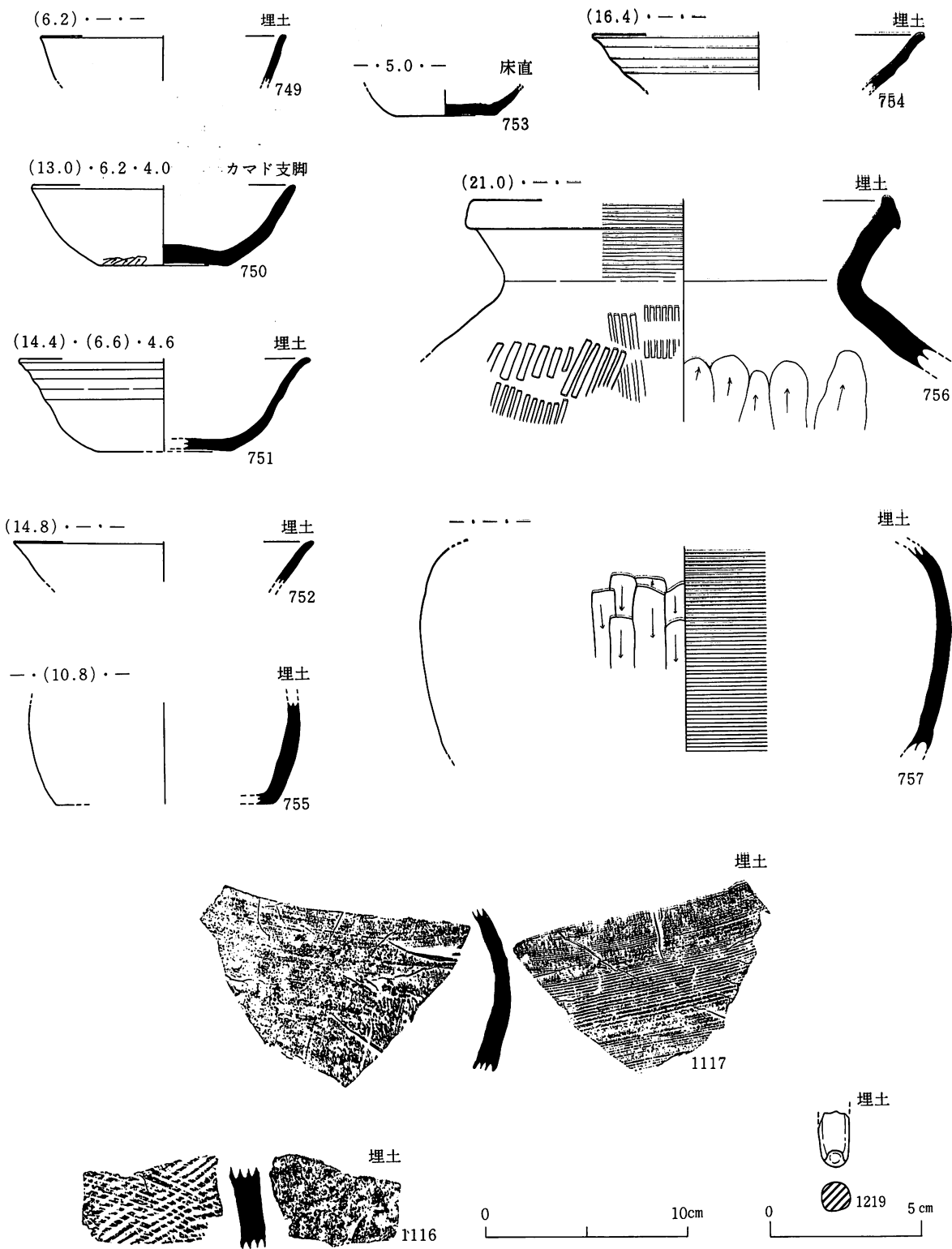
第219図 K-4 住居址(遺構)



第220図 K-4 住居址(遺物-I)



第221図 K-4 住居址(遺物-2)



第222図 K-4 住居址(遺物-3)



の(719・728・729・730)がある。大きさでは大小がある様であるが、明確でない。全体の $\frac{1}{2}$ 以上残存するものには大差はない。

**甕形土器**(734~740) いずれもロクロ使用成形で、大型(735・740)・中型(734)・小型(736~738)のものがある。体部は若干膨らみ気味のもの(734・735)がみられるもの他は頸部や肩部に最大径をもっている。口縁部は頸部で強く外反しやや長いもの(735・737)・外弯気味に外反しているもの(734・736・738~740)があり、口唇は挽き出されて受口状のもの(735~739)と強い挽き出しがなく角張り沈線状の凹みをもつもの(734・740)がある。736の底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。調整技法は、小型のものは、739の内面にカキ目をもつ以外はロクロナデのみで調整され、大型や中型のものはロクロで成形されたのち体部上位~中位以下をヘラケズリ調整をしている。また、後者のものは頸部や体部上位に平行タタキ目を残しており、調整の順序を復元すると、最初に粘土紐を巻き上げた後タタキシメを行う。次いでロクロ回転を利用して成形の後、仕上げ成形と口縁部挽き出しを行う。最後に体部下位の器厚を揃えるためにヘラケズリ調整で仕上げということになる。

#### 須恵器

**坏形土器**(741~747・749~754) いずれもロクロ使用成形のもので、器形的には土師器坏形土器とほぼ共通している。体部は直線的に外傾するもの(741・743・746・747)と内弯気味に外傾するもの(742・744・750・751)がある。底部切り離し技法はいずれも回転糸切りで、750が若干再調整される以外は無処理である。

**甕形土器**(748・755~757・1116・1117) 756・757はロクロ使用成形であるが、他のものは不明である。いずれも破片であるため全体的な器形は不明であるが、756は壺形、757は瓶形となる可能性が大きい。748は体部下半の破片であるが、外面平行タタキ目後ヘラナデ、内面ヘラナデがある。756は頸部で大きく窄み、口縁部は直線的に外反し、挽き出されて縁帯状の口唇部がつく。調整技法は外面に粗い平行タタキ目をもち、内面はヘラケズリである。757は肩部~体部中位にかけての破片である。調整技法は外面ヘラケズリ、内面カキ目である。1116・1117は体部の小破片であるが、1116は外面平行タタキ目・内面ケズリ、1117は外面ケズリ・内面ナデ後カキ目のものである。

#### その他

**土製品**(1219) 土製の勾玉であるが、上位部分を欠失している。平面「C」字形・断面が円形である。

(高橋与右エ門)

## 70) K-5 住居址-1

〔遺構〕(第223図、P L 39 B)

本住居址は北西隅部でK-4住居址・北側部分でK-3住居址・北東隅部でL-3住居址とそれぞれ重複している。また、本住居址とほぼ同位置でK-5住居址-2とも重複している。これらの重複遺構との新旧関係は、K-4住居址・K-3住居址・L-3住居址は本住居址よりも新しく、K-5住居址-2は本住居址より古い。

規模は北南が約7.9m・東西約7.3mで、壁高は0.15m～0.25m位を測り、壁は床面に対して約110度の角度を示している。平面形は主軸方向に対して若干縦長の隅丸長方形を呈し、主軸は北-南方向にあり磁北に対して13度西に偏している。埋土は黒褐色と極暗褐色のシルトで構成され、色調によって2層に細分されている。混入物として少量の炭化物粒や褐色のシルト粒が観察される。また、埋土最下層には粒径10cm～20cm位の礫が多く混入し、床面に接している場合が多かった。床は地山の極暗褐色のシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は北に寄るほど低くなる傾向がみられ、高低差約0.07m位を測るものの、全体としては起伏もほとんどなくほぼ平坦で良く締まり固い。また、床面中央付近で現地性焼土が検出されたが地床炉として使用されたものであろう。壁溝は検出されていないが、P<sub>3</sub>と東壁の間の床面には巾25cm位・深さ約0.06m・長さ1.7mの溝が1条検出されている。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>までの土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径24cm～40cmとほぼ同一であるが、深さではP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>が0.4m台、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>はともに0.5m以上で幾分差がある。P<sub>5</sub>は規模が径0.6m×0.7mで深さは0.17mである。平面形はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は円形や楕円形を呈しているが、P<sub>5</sub>は隅丸方形気味を呈している。埋土は黒褐色の粘土質シルトの単層によって構成されている。これら土坑の性格はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本住居址の対角線上に位置することや規模がほぼ近似している等から、本住居址に伴う柱穴を構成しているであろう。P<sub>5</sub>は貯蔵穴的な役割をもつものと理解しておく。

本住居址では明らかにカマドといえる遺構は検出されていない。しかし、北壁沿いの床面で2ヶ所の現地性焼土が検出され、他に壁際にある焼土は検出されていないことから、この焼土のいずれかが本住居址に伴うカマドの燃焼部焼土の残痕と考えた。検出された焼土のうち1ヶ所は北壁より南へ約0.5m・西壁より約1.8mに位置し、範囲は約0.5m×0.5mである。もう1ヶ所は北壁のほぼ中央約1m南寄りに位置し、焼土範囲は約0.8m×0.6m位である。以上2ヶ所の位置関係からみた場合、後者の方がカマドに伴う焼土と考えるのが妥当であろう。この位置はK-3住居址・K-4住居址との重複部分であることから、重複する部分の遺構は削剝されたものであろう。従って、本住居址のカマドは燃焼部焼土以外には全く検出されていない。右側袖部は重複部分より若干東にずれているので削剝を受けていないものと考えられることか

ら、精査の際に留意したのであるが、その存在を確認することができなかった。このことは、崩壊して全くその痕跡を残していなかったか、もしくは、埋土の土質と大差のないシルト貼り付けによって構築されていたために、精査の際にその存在に気付かず掘り取ってしまったかのどちらかであろう。焼土面は周囲の床面より若干盛り上がってはいるが、ほぼ同位面である。煙道部・煙出部はK-3住居址によって削剝されている。

〔遺物〕(第224・225・226図、P L 135 B・136)

埋土内と床面直上より出土しているが、復元可能なものは床面出土のものに多い。埋土内よりの出土も量的には比較的多かったが、小破片が多く、復元や凶化されたものは少ない。種類は土師器と鉄製品であり、器種では坏形土器・高坏形土器・甕形土器・名称不明鉄器がある。

### 土師器

**坏形土器**(758～762) いずれもロクロ未使用成形で、体部外面に段や稜をもつものである。底部形態は平底風で体部が稜をもって立ち上がるもの(758・761)と丸底のもの(759～762)がある。体部～口縁部は直線的に外反するもの(759・762)と外弯するもの(758・760)がある。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ一部ミガキで底部はヘラケズリやナデである。内面はいずれもミガキ後黒色処理されている。なお、760の底部には輪積み痕を明瞭に残している。

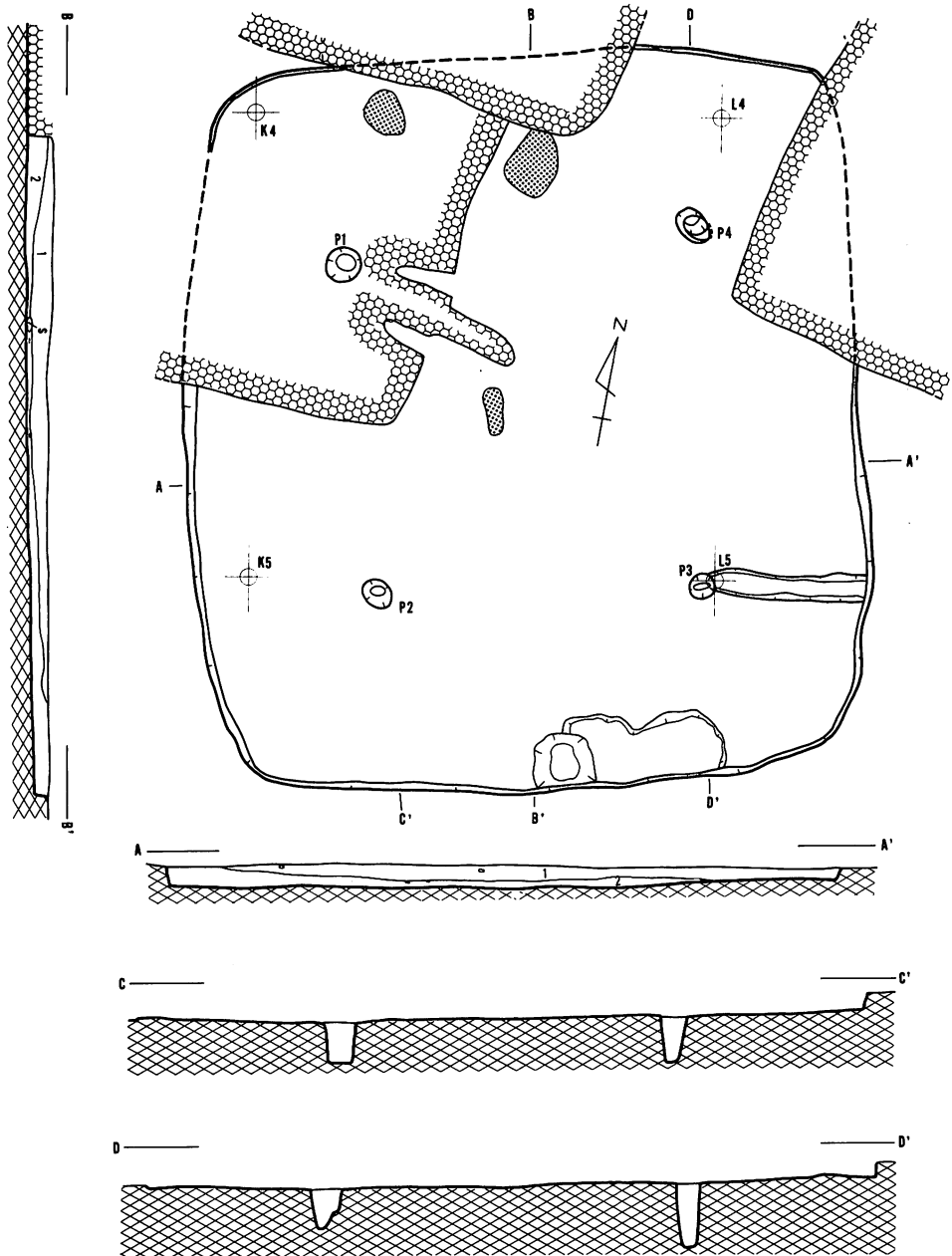
**高坏形土器**(763) ロクロ未使用成形のもので、坏部の大半を欠失しており、脚部のみを残している。比較的低い脚部で、柱部もやや太目で、裾部に段をもっている。坏部内面は黒色処理されている。調整技法は、外面はハケメ後ヨコナデ、内面は粗いミガキである。

**甕形土器**(764～777・1118) いずれもロクロ未使用成形のものである。器形は頸部付近に最大径をもち底部に向かって窄むもの(767・775)と体部が若干膨らみ中に最大径をもつもの(766・772～774)・体部が球胴型に近いもの(776)があり、頸部には段をもつもの(767・772～774・776・777)とともたないもの(766)がある。口縁部は直線的に外反するもの(767・772・774・777)・外弯するもの(765・766)・外弯した後上端部で内弯するもの(776)がある。大きさでは大型(766・767・772～774・777)・中型(765・775・776)は明確であるが、小型のものは明らかでない。底部は周囲に軽い突出をもつものが主体であるらしい。底面はナデられており、木葉痕をもつものはない。調整技法は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がハケメ後ナデやスリケシが中心で一部にミガキ、内面はハケメやハケメ後ナデまたはスリケシである。1118は頸部の小破片であるが、平行する2本の沈線で鋸歯状の文様を描いたものである。全体の器形や詳細は不明である。

### その他

**鉄製品**(1296) 断面形が円形や楕円形で、平面棒状を呈しているが名称は不明である。

(高橋与右エ門)



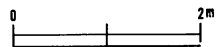
K-5 住居址-I ビット計測値

長径 × 短径 深さ

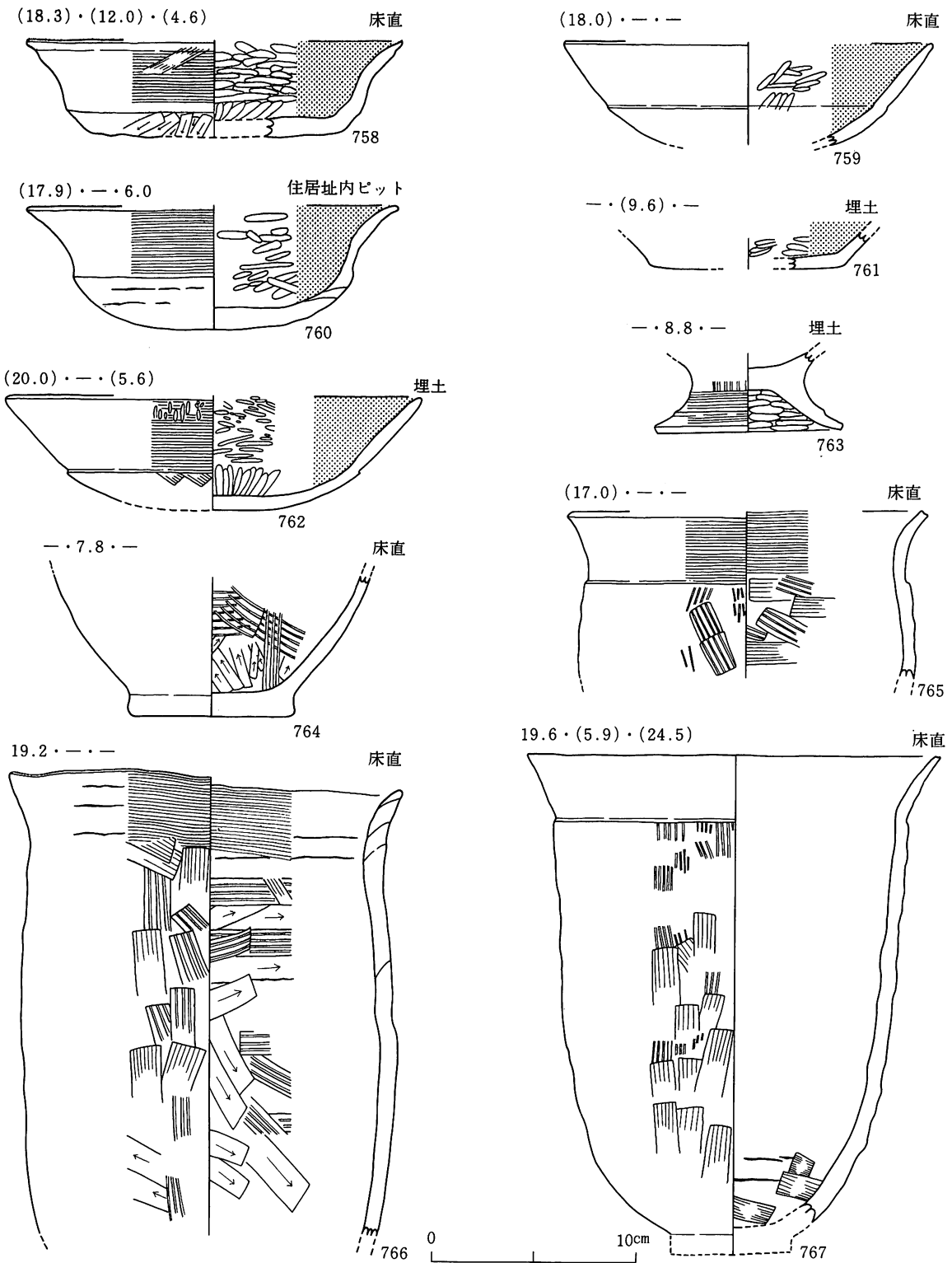
P <sub>1</sub>	41cm × 35cm	45cm
P <sub>2</sub>	36cm × 27cm	52.5cm
P <sub>3</sub>	28cm × 26cm	69.7cm
P <sub>4</sub>	41cm × 30cm	48.5cm

K-5 住居址-I 埋土層

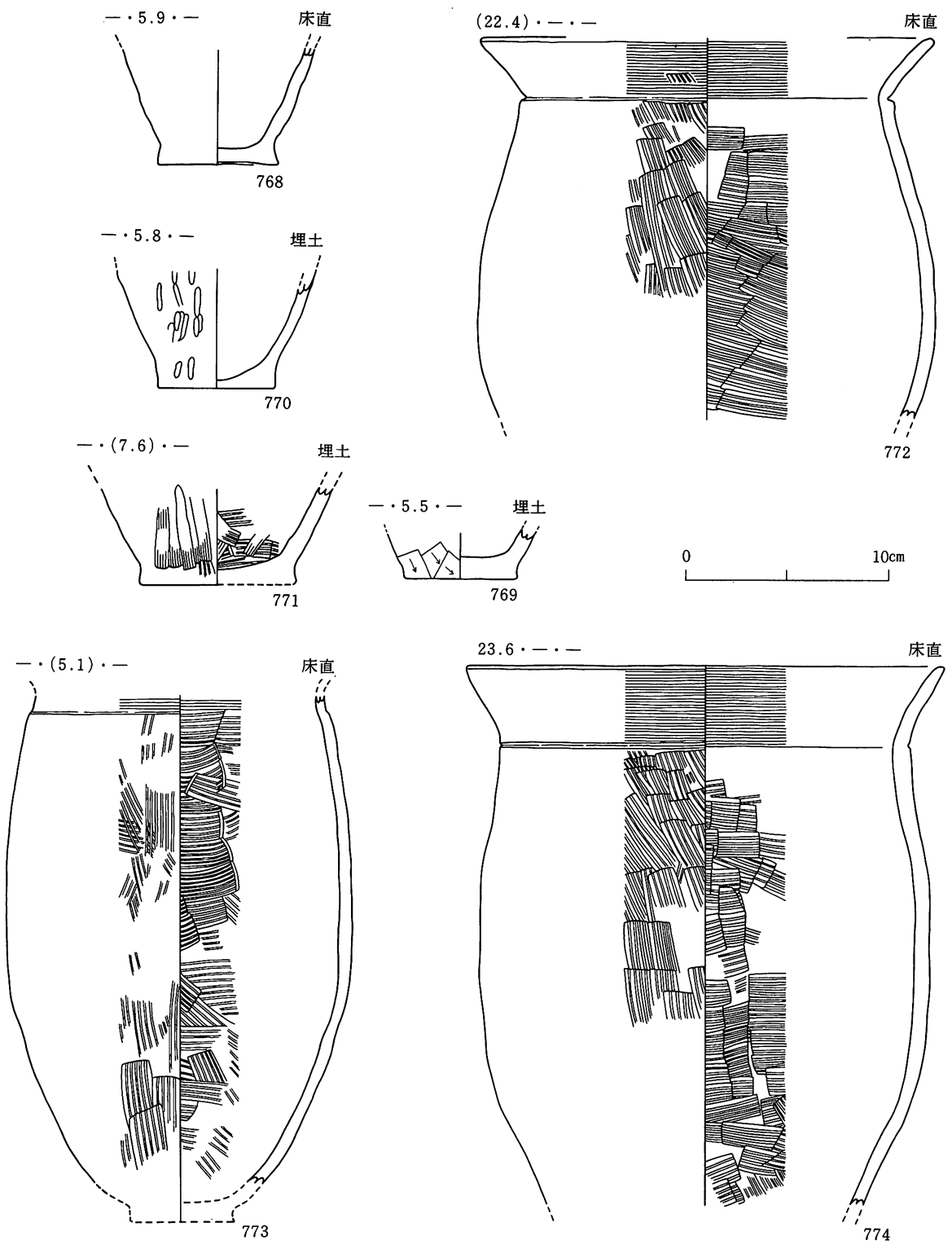
- 7.5 Y R2/3 極暗褐色 シルト質 土 粘性なし、多量の褐色シルトと少量の土器片、炭化物粒が混入。
- 7.5 Y R2/2 黒褐色 粘土質シルト よく締まっている、土器片と少量の炭化物粒が混入。



第223図 K-5 住居址-I (遺構)



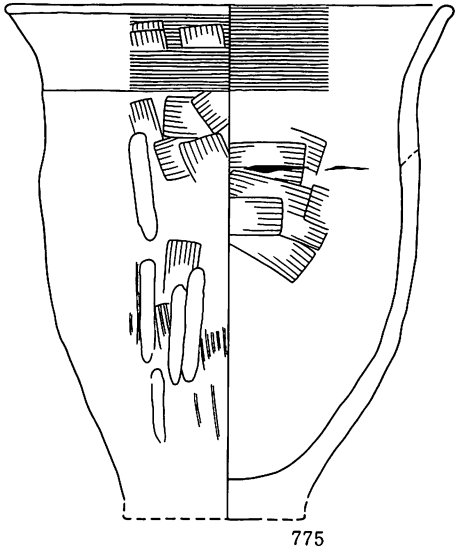
第224図 K-5 住居址一 I (遺物一 I)



第225図 K-5 住居址-1 (遺物-2)

18.0 · (7.3) · (20.7)

床直

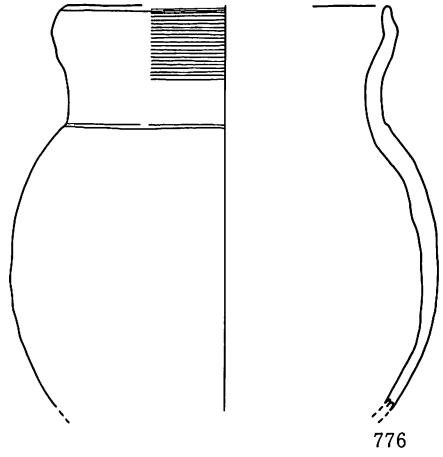


775

0 10cm

(12.8) · - - -

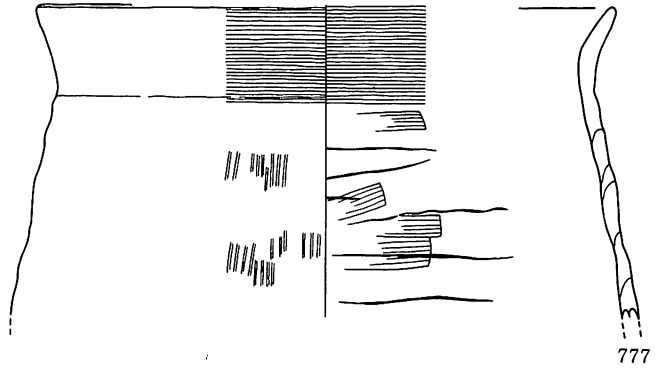
床直



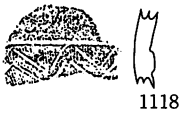
776

(23.2) · - - -

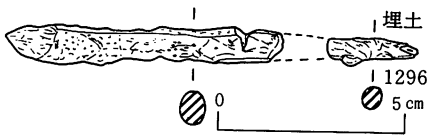
床直



777



1118



埋土

1296

0 5cm

第226图 K-5 住居址-1 (遺物-3)

## 71) K-5住居址-2

〔遺構〕(第227図、P L 40A)

本住居址はK-5住居址-1の床を精査中にK-5住居址-1の西壁を共用している住居址の存在が確認された。従って、本住居址はK-5住居址-1より古い住居址である。規模は北南約7.0m・東西約6.3mで壁高は西壁で約0.3m・南壁や東壁で約0.05mを測り、壁は床面に対して約110度の角度を示している。主軸は北-南方向にあり、磁北に対して約13度西に偏している。埋土は極暗褐色を呈するシルトの単層で構成されている。混入物としては褐色のシルト粒や炭化物粒が観察される。床は地山の褐色を呈するシルトで構築されており、貼床せずにそのまま床面としている。床面は一部低い所もあるが全体的にはほぼ平坦で良く締まり固い。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の土坑が検出されている。P<sub>1</sub>の規模が約0.3m×0.34mと他より若干大きい、他のP<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>はほぼ径約0.25m位である。深さはP<sub>1</sub>-0.45m・P<sub>2</sub>-0.56m・P<sub>3</sub>-0.50m・P<sub>4</sub>-0.32mとそれぞれによって差があるものの、北壁寄りに位置するP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>が他のものより浅い。平面形は方形気味のもの(P<sub>1</sub>)、楕円形(P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>)、円形(P<sub>4</sub>)等がある。埋土は黒褐色の粘土質シルトで構成されていたが、柱痕跡等は明確でなかった。これらの土坑は本住居址のほぼ対角線上に位置することや、規模も良く近似していることから本住居址に伴う柱穴を構成している。

本住居址では明らかにカマドといえる遺構は検出されていない。しかし、北壁際に近い床面で現地性焼土が検出され、本住居址の範囲内でこのような現地性焼土が他に検出されていないことから、この焼土を本住居址カマドの燃焼部焼土と断定した。この焼土は北壁中央より0.6m位東に偏し、北壁より南へ0.9m位に位置している。分布範囲は径約0.6m位の円形で、層厚は0.05m位を測る。焼土面は床面より若干盛り上がり、周囲や上面には炭化物粒・焼土粒・焼骨の小破片等が散乱している。以上の様なことから袖部や煙道部・煙出部・天井部はK-5住居址-1の削剝によって残存していない。袖部については基底部分が残存していた可能性があるが、精査で確認できなかった。

〔遺物〕

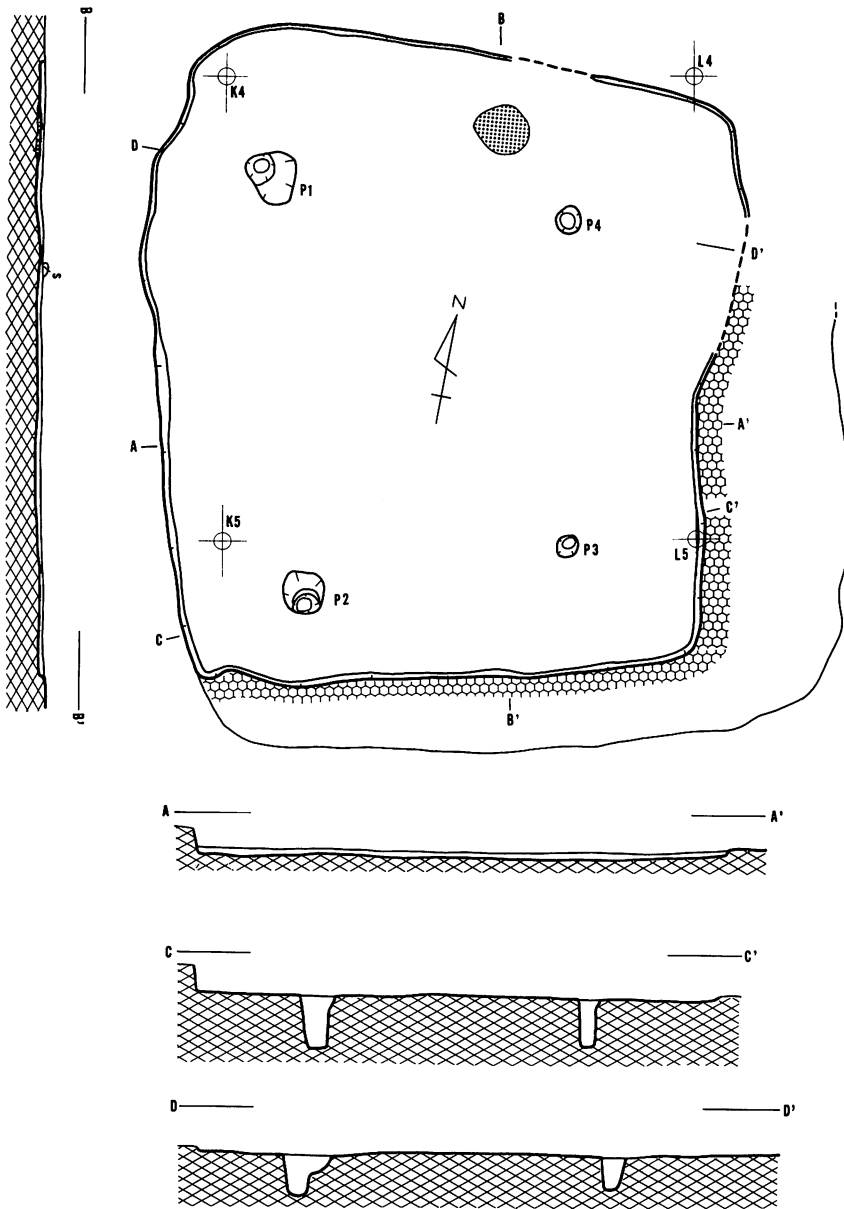
埋土内より3ヶの破片が出土した以外は出土していない。小破片であるので図化できなかったが、種類は土師器であり、器種は甕形土器だけである。

### 土師器

甕形土器 ロクロ未使用成形のものである。体部破片であるのでその他は不明である。

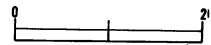
(高橋与右エ門)





K-5 住居址-2 ピット計測値

	長径×短径	深さ
P1	63cm×50cm	46cm
P2	52cm×47cm	57.6cm
P3	28cm×24cm	50.5cm
P4	29cm×28cm	32cm



第227図 K-5 住居址-2 (遺構)

## 72) K-6 住居址-1

〔遺構〕(第228図、P L40B)

本住居址は南側部分がK-6住居址-2と重複しているが、新旧関係は本住居址の方が新しい。規模は南北約4.6m・東西約4.5mで壁高は約0.15mを測り、壁は床面に対して約120度の角度を示している。主軸は南南東-北北西方向にあり磁北に対して159度東に偏している。埋土は暗褐色を呈する砂質シルトの単層で構成され、少量の炭化物粒や褐色のシルト粒等が混入している。比較的締まりは良いが、粘性はほとんどない。また、埋土最下位には粒径10cm~20cmの礫が若干混入し、そのほとんどが床面に接している。床は地山の暗褐色のシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は南東隅部が高く他の3方向に向かって次第に緩やかな下り勾配を示し、もっとも低い北西隅部との高低差は約0.2mである。しかし、小起伏はほとんどなく全体的にみれば平坦である。締まりはあまりなく、やや軟弱である。壁溝は検出されていない。

本住居址の範囲内では土坑は検出されていない。カマド燃焼部で検出されたそれは本住居址が埋没後に掘り込んだ土坑であり、本住居址とは直接的に関連しない。従って、本住居址では柱穴・貯蔵穴ともに検出されていない。

カマドは南壁で検出され、壁中央より1.3m西に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃焼部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。また、燃焼部は後世の柱穴状土坑によって一部破壊されている。袖部は、立ち割りの結果地山よりの削り出しで構築したのか、シルトを貼り付けて構築したのか判然としなかった。いずれにしても、埋土と同じ層相のシルトが上層で、その下層には暗褐色や褐色の砂質シルトが堆積しており、単純に考えるならば、基底部に一部地山を残し、その土にシルトを貼り付けたものとも解釈ができ、どうもこの可能性が強いものと考えられる。燃焼部は床面と同位面で奥壁まで続き、煙道部とは段差をもたないで接続しているらしい。焼土はほとんど観察されない。煙道部底面は煙出部に向かって次第に上がり勾配を示し、煙出部には土坑状の掘り込みをもたない。

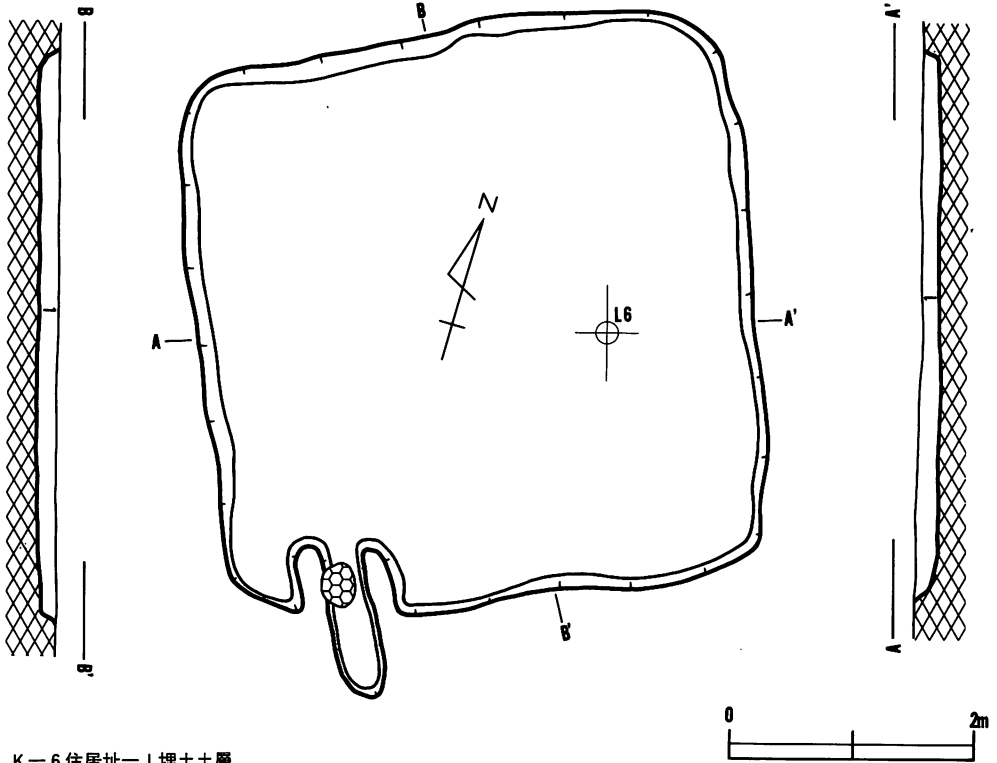
〔遺物〕(第230図、P L137A)

本住居址での出土遺物は床面直上・埋土内ともに非常に少ない。出土したのも小破片のみであり、実測できる様なものは1ヶもない。種類としては土師器と須恵器があり、器種では坏形土器・甕形土器がある。

### 土師器

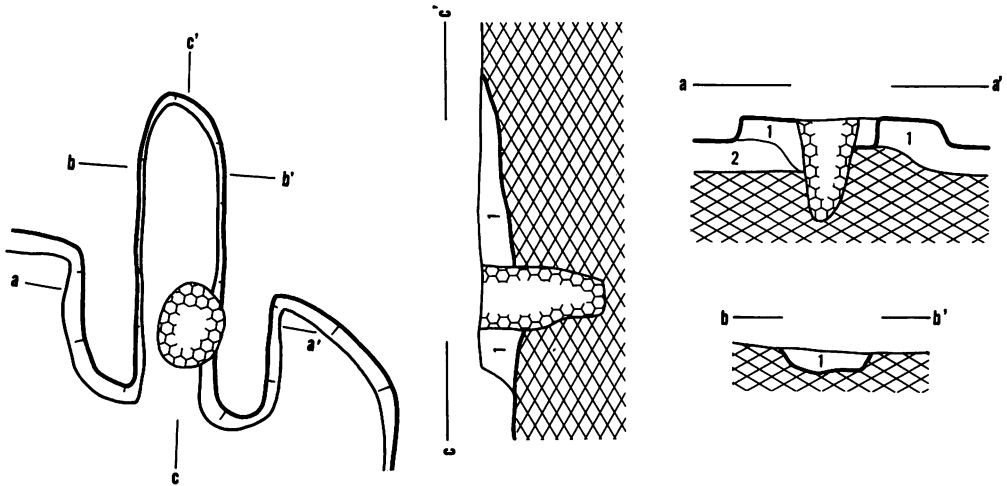
**坏形土器** 小破片が5ヶほど出土している。いずれもロクロ使用成形のもので、内面が黒色処理されている。底部切り離し技法は回転糸切り無調整らしい。その他は不明である。

**甕形土器** 体部破片のみが7ヶ出土している。いずれもロクロ使用成形のものである。体部



K-6 住居址-I 埋土土層

1. 7.5YR3/3暗褐色 砂質シルト よく締まっている、粘性なし、褐色シルトブロックと少量の炭化物が混入。



K-6 住居址-I カマド埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土 粘性あり、少量の褐色シルト粒が混入。  
2. 7.5YR3/4暗褐色 砂質シルト

第228図 K-6 住居址-I (遺構)

上位にロクロナデ痕を残し、体部下半はヘラナデ、もしくは、ヘラケズリである。底部切り離し技法や口縁部等は不明である。

#### 須恵器

**坏形土器** 図化されていないが破片が3ヶ出土している。詳細は不明である。

**甕形土器**(1119) 体部の破片が1ヶ出土している。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデの調整痕をもつ。  
(高橋与右エ門)

### 73) K-6 住居址-2

〔遺構〕(第229図、P L 41A)

本住居址はK-6住居址-1と重複している。新旧関係は本住居址の方が古い。

規模は北南約3.5m・東西約3.6mで壁高は約0.1m～0.13mを測り、壁は床面に対して約110度の角度を示している。平面形は明確ではないが、検出された部分から推定すると隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸方向は不明であるが、西壁は磁北に対して約31度西に偏している。埋土は極暗褐色の粘土質シルトで構成されているが、混入物の違いによって2層に細分されている。1層には橙色の砂質シルトが混入し、2層は褐色シルトの混入によって斑状を呈している。礫の混入は少ない。床は地山の褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面はほとんど起伏もなく平坦で良く締まっている。壁溝は検出されていない。

本住居址の床面では土坑が全く検出されていない。従って、柱穴や貯蔵穴は不明である。

本住居址ではカマドは検出されていない。おそらく、K-6住居址-1との重複部分に位置し、削剝を受けたものであろう。

〔遺物〕

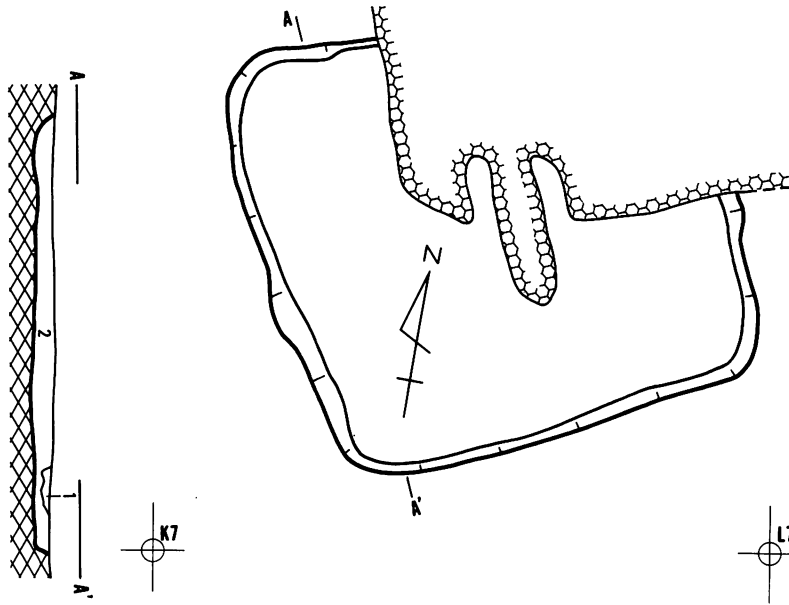
埋土内・床面直上ともに非常に少ない。種類は土師器のみで、器種は坏形土器と甕形土器がある。

**土師器**(第230図B、P L 137A)

**坏形土器**(778) ロクロ未使用成形である。体部～口縁部の破片であるので、体部段の有無や底部形態は不明である。体部～口縁部は直線的に外反している。調整技法は外面は単位が明確でないがナデやミガキが入り、内面はミガキ後黒色処理される。

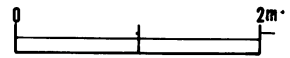
**甕形土器**(779) ロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を除去した形の無底型のものである。この破片は体部下位～底部にかけての破片であるので、体部中位～口縁部については不明である。体部は内弯気味に外傾しているらしい。調整技法は内外面ともナデである。

(高橋与右エ門)

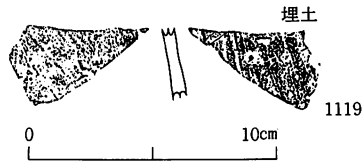


K-6 住居址 - 2 埋土土層

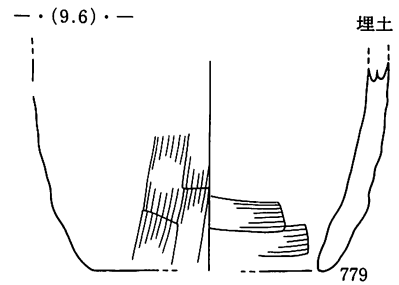
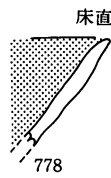
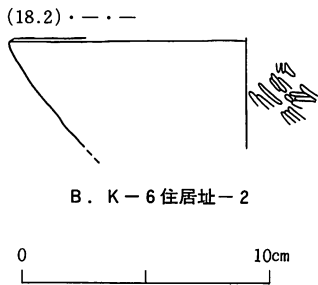
1. 7.5YR2/3極暗褐色 粘土質シルト 橙色の砂質シルト混入。
2. 7.5YR2/3極暗褐色 粘土質シルト 褐色シルト粒が斑状に混入。



第229図 K-6 住居址-2 (遺構)



A. K-6 住居址-1



第230図 K-6 住居址群(遺物)

## 74) K-11住居址

〔遺構〕(第231図、P L 41 B)

本住居址は全体規模の北側約 $\frac{2}{3}$ 弱がI-11溝跡によって削剝されているため、規模・形状等不明な点が多い。

規模は東西が約7.2mを測るものの、南北は前記の理由により不明である。壁高は約0.1mを測り、壁は床面に対して約100度の角度を示している。平面形は定かでないが、検出された部分の形状から推定すると隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸方向は不明であるが、東壁は磁北に対して8度位西に偏している。埋土は黒褐色を呈する粘土質シルトの単層で構成される。砂粒を多く混入するとともに、酸化鉄の混入が多くみられ、銹赤色の縞文様が入っている。礫や炭化物・焼土の混入はほとんどない。床は地山の褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は起伏もなく、平坦で良く締まり固い。壁溝は検出されていないが、P<sub>1</sub>-西壁の間とP<sub>2</sub>-東壁の間の床面には巾0.1m~0.15mで深さ0.07m~0.1m位の溝が検出されている。長さは西側は1.45mで東側のそれは1.2mである。おそらく、間仕切り壁等の内部構造に関連する溝であろうと推定される。

本住居址ではP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の土坑が検出されている。規模はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>ともに径約0.3mで深さ約0.4mを測り、平面形はともに楕円形である。埋土は、P<sub>1</sub>が黒色の粘土と黒褐色の粘土質シルトによって構成され、P<sub>2</sub>は後者のみによって構成されている。P<sub>1</sub>の黒色を呈する粘土の分は柱痕跡であり、径約12cmの円柱である。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は本住居址の対角線上に位置しているらしいことや、規模がほぼ同一であること等から、本住居址の柱穴を構成する一部であろうと考えられる。

本住居址ではカマドは検出されていない。おそらく、I-11溝跡によって削剝を受けた部分に位置していたものと推定される。

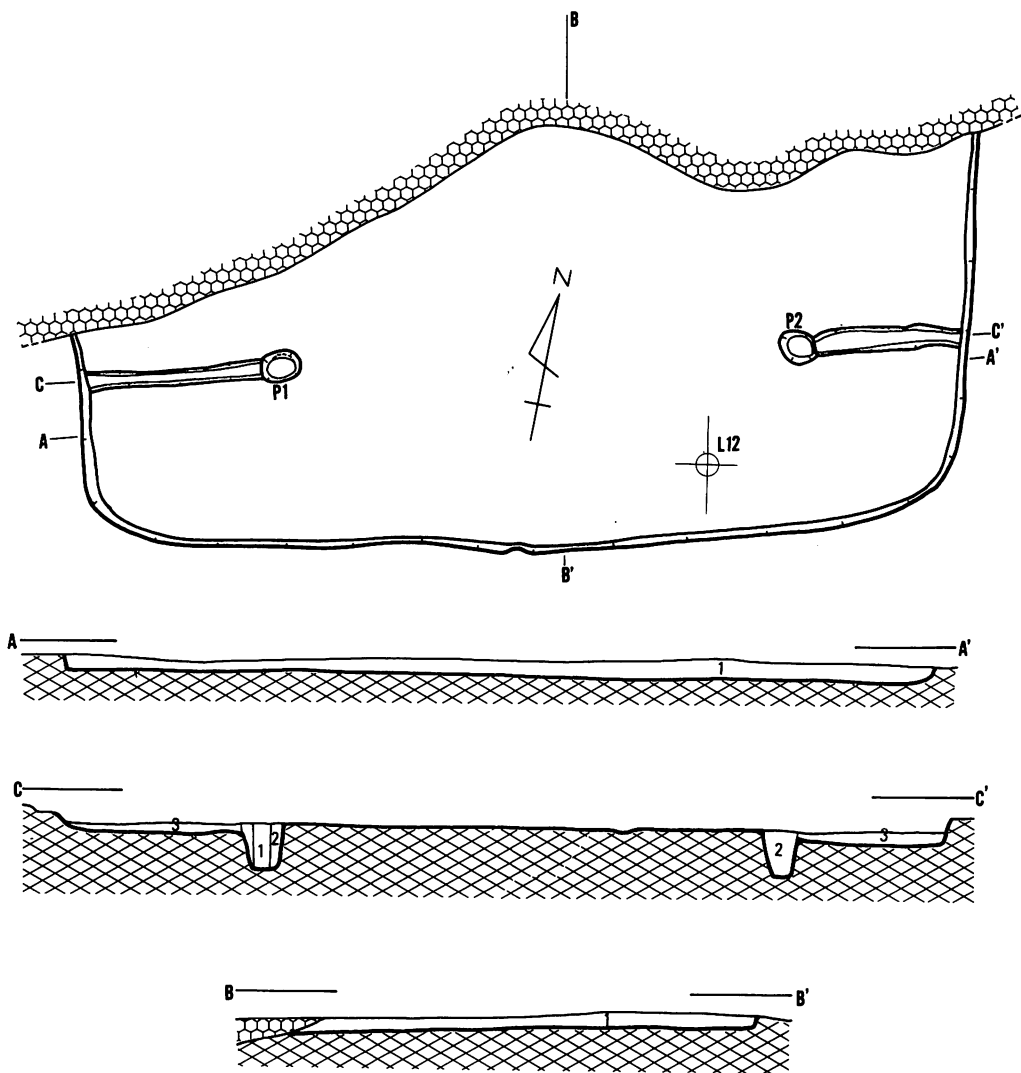
〔遺物〕(第232図、P L 137 B)

掘り込みが浅かったために埋土内ではほとんど出土せず、南壁沿いの床面直上で少量出土したのみである。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器・甕形土器・小型土器がある。

### 土師器

**坏形土器**(780・781) いずれもロクロ未使用成形で、体部外面に段や稜をもち底部形態は丸底のものである。体部~口縁部は直線的に外反するもの(781)と内弯気味に外反するもの(780)がある。調整技法は口縁部外面がヨコナデのもの(781)とミガキが入るもの(780)があり、底部は摩滅により不明である。内面はミガキ後黒色処理のもの(780)とミガキのみのもの(781)がある。

**小型土器**(782) ロクロ未使用成形で、小型の壺形を呈している。底部は平底風丸底で、体部に明瞭な巻き上げ痕を残している。調整技法は不明である。



K-11住居址埋土土層

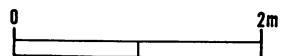
1. 7.5YR2/2黒褐色 シルト質土 やや粘性あり、多量の砂粒と水酸化鉄が混入。

K-11住居址ピット埋土土層

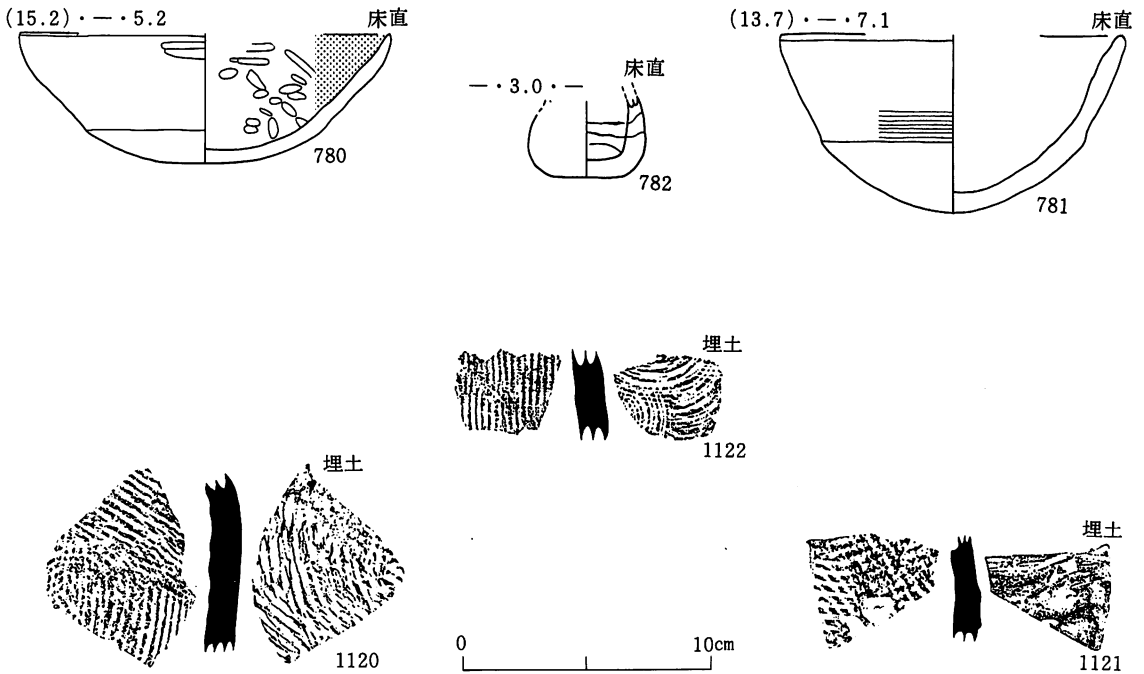
1. 7.5YR2/1黒色 粘土質
2. 7.5YR2/2黒褐色 粘土質シルト
3. 7.5YR2/3極暗褐色 砂質シルト よく締まっている。

K-11住居址ピット計測値

長径×短径 深さ  
 P1 29cm×24cm 40cm  
 P2 31cm×25cm 40cm



第231 図 K-11住居址(遺構)



第232 図 K-11住居址(遺物)

須恵器

甕形土器 (1120～1122) いずれも大甕の体部破片である。3ヶとも外面に平行タタキ目を持ち、1120・1122は内面に青海波文を、そして1121の内面に凸面の当て道具痕を残している。

(高橋与右ヱ門)

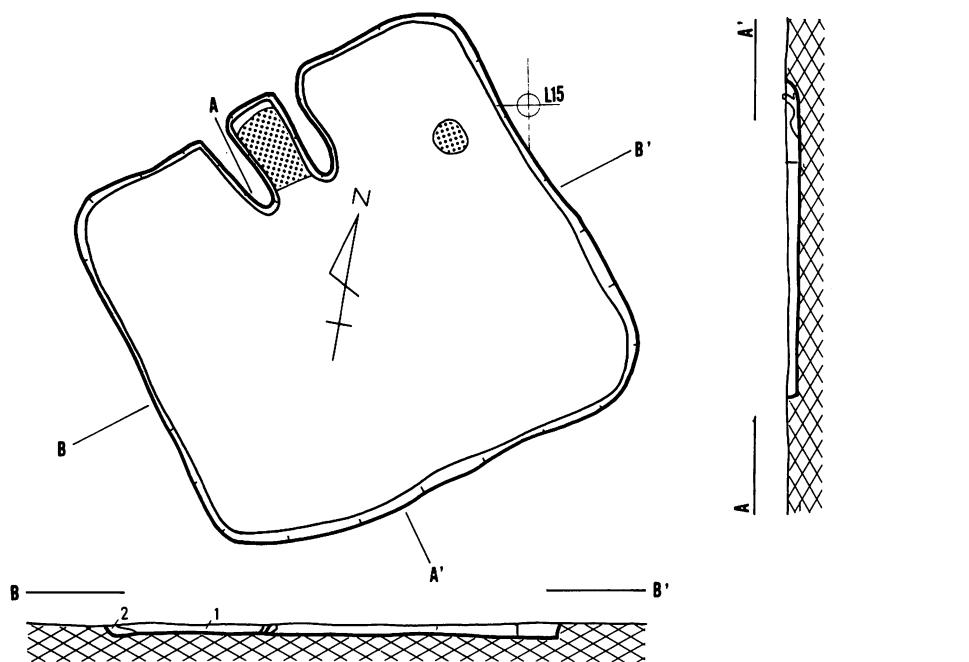
75) K-15住居址

〔遺 構〕(第233図、P L 42A)

本住居址は他遺構との重複もなく単独で検出された。

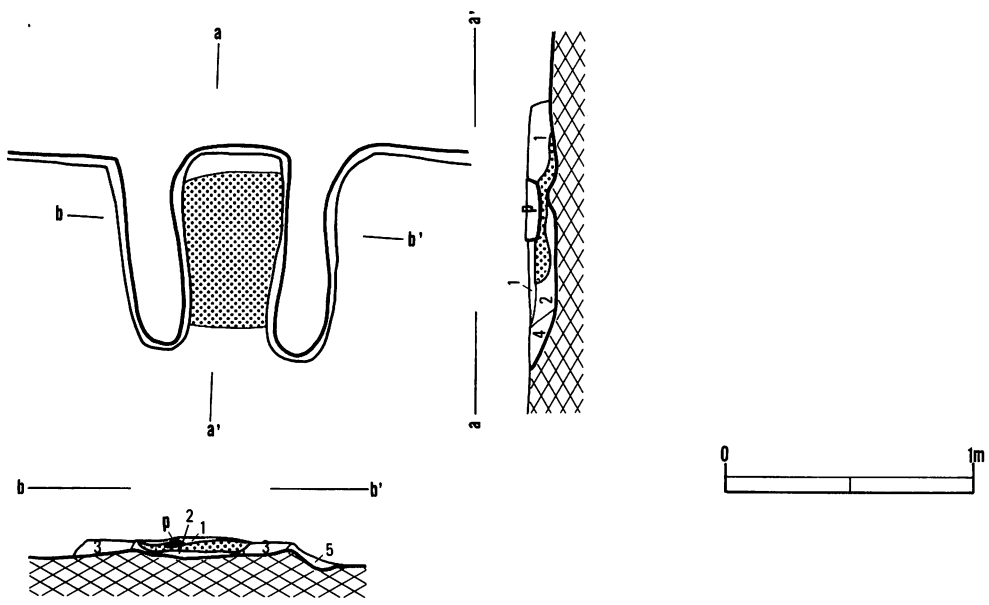
規模は北西-南東が約3.5mで北東-南西が約3.6mを測る。壁高は0.1m位で壁は床面に対して約120度の角度を示している。平面形は若干歪んだ隅丸方形を呈し、主軸方向は北西にあり磁北に対して約38度西に偏している。埋土は黒色を呈するシルトで構成され、混入物によって2層に細分されている。1層には少量の炭化物が混入し、酸化鉄の集積が多い。2層では褐色を呈する粘土質シルト粒が多く混入し、酸化鉄の集積もみられる。1・2層ともに粘性が強いという共通要素をもっている。床は褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずにそのま





K-15住居址埋土土層

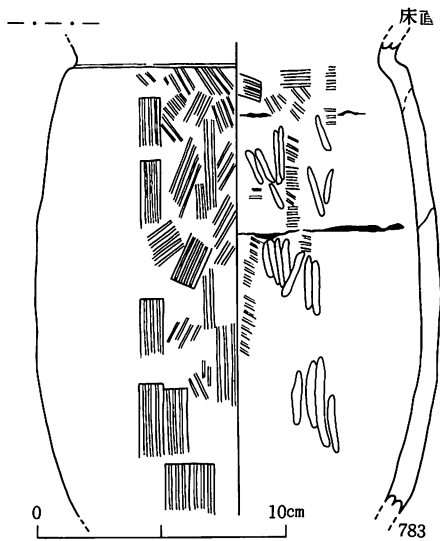
1. 5 YR1.7/1黒色 粘性あり、少量の炭化材と多量の水酸化鉄が混入。
2. 5 YR1.7/1黒色 粘性あり、多量の粘土質シルトと少量の水酸化鉄が混入。



K-15住居址カマド埋土土層

1. 5 YR1.7/1黒色 粘性あり、少量の炭化物と多量の水酸化鉄が混入。
2. 10 YR2/2黒褐色 非常に軟らかい、粘性あり、多量の焼土粒と炭化物が混入。
3. 7.5 YR2/1黒色 粘性あり、多量の水酸化鉄が混入。
4. 7.5 YR1.7/1黒色 粘性あり、少量の炭化物と微量の粘土質シルト、多量の水酸化鉄が混入。
5. 10 YR2/3黒褐色 粘性あり、多量の粘土質シルト、細礫、水酸化鉄が混入。

第233 図 K-15住居址(遺構)



第234 図 K-15住居址(遺物)

へ向かって次第に上がり勾配を示しており、煙道部とは軽い段で接続するらしい。焼土は焚口部より若干奥に入った位置より奥壁の手前まで分布し、層厚は厚い所で約0.05mである。なお、焼土面には火熱を受けた土師器甕形土器(783)の破片が散乱しており、カマド埋設土器であった可能性が強い。煙道部・煙出部は前述の様に検出されていないので不明である。

〔遺物〕(第234図、P L137C)

埋土内で土師器甕形土器の破片が数ヶ出土したのみで、前述の土器以外に図化できるものはなかった。種類は土師器のみであり、器種は甕形土器のみである。

#### 土師器

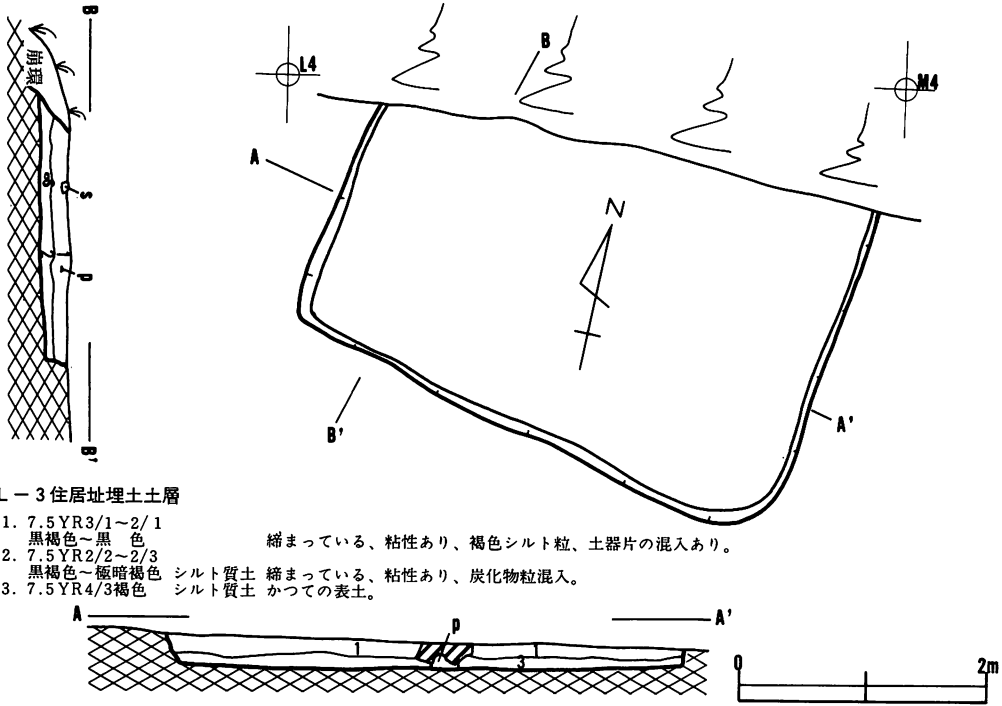
**甕形土器(783)** ロクロ未使用成形である。破片からの復元実測である。口縁部と体部下位～底部を欠失している。底部より外傾する体部はほぼ中位に最大径をもち、次第に窄みながら頸部に移行し、頸部には段をもっている。口縁部は頸部より外反しているらしい。調整技法は体部外面がハケメ後スリケシで内面はハケメ後ミガキである。

(吉田 洋)

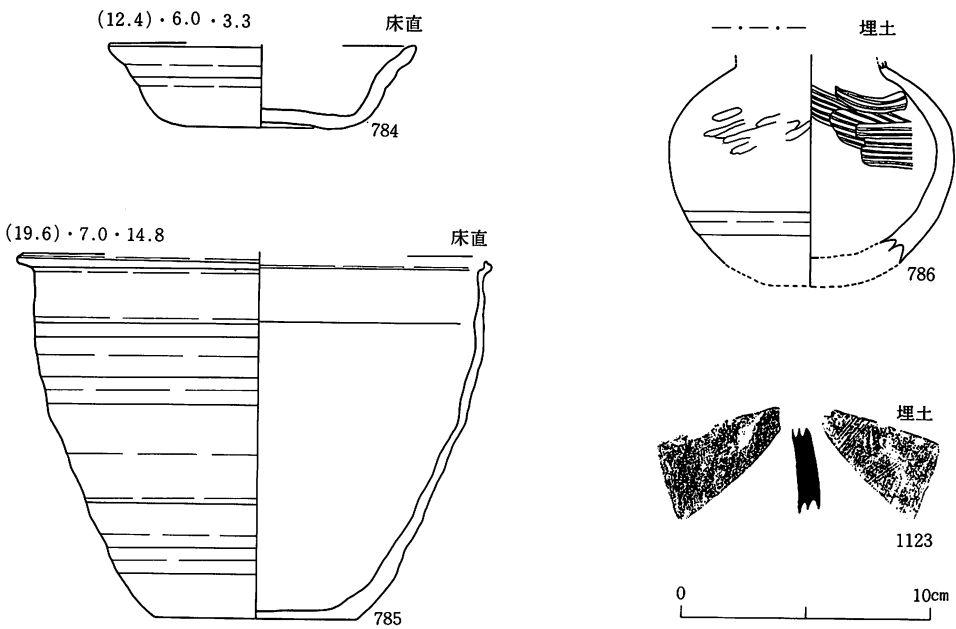
#### 76) L-3住居址

〔遺構〕(第235図、P L42B)

本住居址は西側部分がK-5住居址と重複している。K-5住居址との新旧関係は本住居址の方が新しい。また、北側は段丘崖に延びていることから、北側部分の約1/2弱が崩壊している。



第235図 L-3 住居址(遺構)



第236図 L-3 住居址(遺物)

規模は東西が約4.1mであるが、南北は前述の様な理由により不明である。壁高は約0.2mを測り壁は床面に対して約110度を示している。平面形は定かでないが、検出された部分から推定すると、隅丸方形を呈するものと考えられる。埋土は黒色や極暗褐色を呈するシルトで構成されるが、色調と混入物によって2層に細分されている。1層は黒色土を主体とし、褐色のシルト粒が混入した粘性のあるシルトである。2層は極暗褐色を主体とし、炭化物粒が比較的多く混入した粘性をもつシルトである。床面は地山の極暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は良く締まり、起伏もなく平坦である。壁溝は検出されていない。

本住居址では土坑が全く検出されていない。従って、柱穴・貯蔵穴ともに不明である。

カマドは検出されていない。おそらく、崩壊した部分に位置しているものと推定される。

〔遺物〕(第236図、P L 138 A)

埋土内と床面直上より出土しているが、量的には非常に少ない。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器**(784) ロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切り再調整のものである。内面はロクロナデ調整のみで、黒色処理されていない。底部径が比較的大きく、口縁部径との比が小さいものである。体部は底部より外傾し、口縁部上端付近で外弯する。

**甕形土器**(785・786) 785はロクロ使用成形であるが、786はロクロ不使用成形である。785は底部より外傾する体部が次第に内弯気味で上部に移行し、口縁部は短くそして強く外反し、口唇は上方に挽き出されて受口状を呈している。底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。体部は内外面ともロクロナデ調整である。786は球胴型のもので壺形に近い形態を示している。底部と口縁部を欠失している。調整技法は外面ミガキで内面ハケメである。

#### 須恵器

**坏形土器** 図化されていないが、3ヶの破片が出土している。小破片であるとともに、底部を含んでいないので、全体的なことは不明である。

**甕形土器**(1123) ロクロ使用の有無は不明であるが、大甕もしくは大壺の体部破片である。外面にヘラナデの後巾広の平行タタキ目、内面にナデの調整痕をもっている。

(高橋与右エ門)

### 77) L-7 住居址

〔遺構〕(第237図、P L 43 A)

本住居址は重複遺構もなく、単独で検出された。

規模は北南が約6.2mで東西約6.1mを測り、壁高はもっとも高い北壁で0.15m位で、壁は床面に対して約105度の角度を示している。平面形は若干歪んだ隅丸方形を呈し、主軸は北-南方向にあり磁北に対して約15度西に偏している。埋土は上層より黒褐色・黒色・暗褐色の3層からなる。全層に炭化物が混入しているが各層によって多少の差がある。その他の混入物としては褐色の粘土質シルト粒が2・3層にみられ、さらに、3層には酸化鉄の集積もある。全体的に粘性が強い。礫の混入は全くない。床は地山の褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。西壁沿いの床面は他より若干高く東壁に向かって緩やかな下り勾配を示しているものの、起伏はほとんどなく、総じて平坦で良く締まっている。壁溝は検出されていない。また、床面中央南寄りで1.15m×0.45mの分布範囲をもつ現地性焼土が検出されている。おそらく炉として使用されたものであろう。

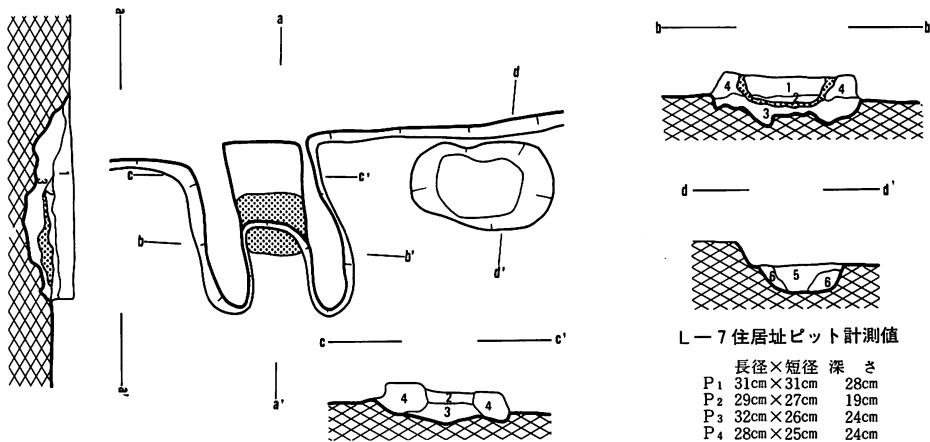
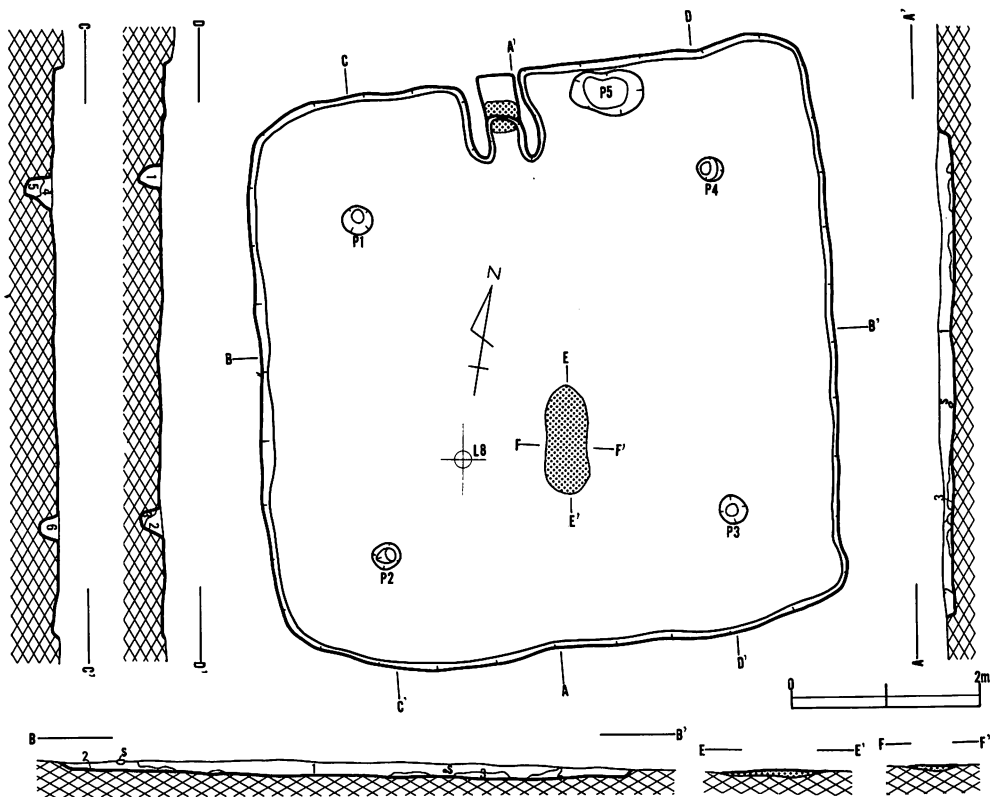
本住居址ではP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の土坑が検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は径0.3m前後の規模を測り、平面形は円形(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)と楕円形(P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>)がある。深さはP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が0.24m・P<sub>1</sub>が0.28mと0.2m以上の深さをもつが、P<sub>2</sub>は0.19mと浅い。埋土は黒褐色や黒色のシルトで構成され、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>は2層に細分され、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>は1層のみである。いずれの埋土にも炭化物粒や褐色のシルト粒が混入し、粘性が強い。P<sub>5</sub>は約0.76m×0.46mの規模をもち、深さは0.18mを測り平面形は楕円形を呈している。埋土は黒色と黒褐色のシルトで構成され、多量の炭化物が混入している。P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>ともに柱痕跡は検出されていない。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の土坑は本住居址の対角線上に位置していることや規模もほぼ同一であることから本住居址の柱穴を構成するであろう。P<sub>5</sub>は性格があまり明確でないが、カマド右側の北壁沿いに位置することから、貯蔵穴的な役割をもつ土坑であろうと考える。

カマドは北壁で検出され、0.3mほど西に寄って位置している。検出されたのは袖部と燃烧部のみであり、煙道部・煙出部・天井部は検出されていない。カマド構築範囲の床面を若干掘り窪め、一度埋め戻して平らにした後、黒褐色のシルトを貼り付けて袖部を構築している。燃烧部底面は焚口部より若干低くなっているが、中央付近より奥に向かって緩やかな上がり勾配を示している。焚口部付近には焼土が全く観察されず、燃烧部中央部分に多く観察され、袖部の内壁にも焼成痕を残している。しかし、全体的に焼成痕が弱い。煙道部や煙出部は検出されていないので不明である。

〔遺物〕(第238・239図、P L138 B・139 A)

掘り込みが浅いこともあってか埋土内での出土はほとんどなく、図化されたものはすべて床面直上より出土したものである。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器・高坏形土器・甕形土器がある。

#### 土師器

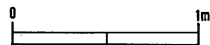


L-7 住居址ピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	31cm×31cm	28cm
P <sub>2</sub>	29cm×27cm	19cm
P <sub>3</sub>	32cm×26cm	24cm
P <sub>4</sub>	28cm×25cm	24cm
P <sub>5</sub>	76cm×40cm	19.5cm

L-7 住居址カマド埋土土層

- 7.5 YR2/2 黒褐色 やや締まっている、粘性あり、多量の焼土がブロック状に混入。
- 5 YR2/1 黒褐色 粘性あり、少量の炭化物と多量の粘土質シルトが混入、微量の焼土も混入。
- 7.5 YR2/1 黒色 粘性あり、少量の炭化物と多量の粘土質シルトが混入。
- 10 YR2/3 黒褐色 強く締まっている、粘性なし、微細礫、微量の炭化物、水酸化鉄混入。
- 7.5 YR2/1 黒色 粘性あり、微量の粘土質シルトと多量の炭化材混入。
- 7.5 YR2/2 黒褐色 粘性あり、多量の粘土質シルトと少量の炭化物混入。



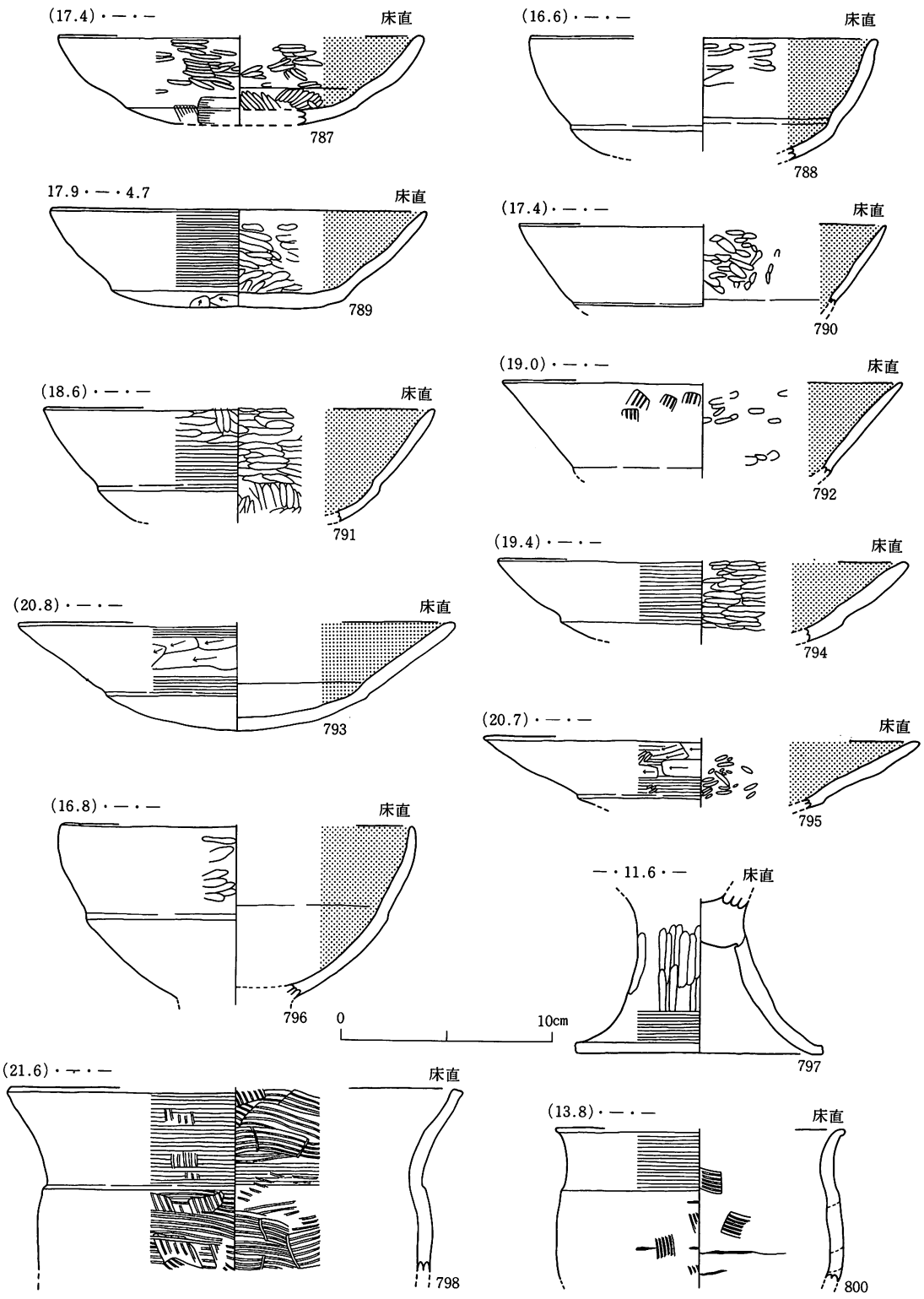
L-7 住居址埋土土層

- 5 YR2/1 黒褐色 粘性あり、微量の炭化物と多量の水酸化鉄が混入。
- 7.5 YR2/1 黒色 非常に軟らかい、粘性あり、少量の炭化物と多量の粘土質シルトが混入。
- 7.5 YR3/3 暗褐色 よく締まっている、粘性あり、微量の炭化物と少量の水酸化鉄と多量の粘土質シルトが混入。

L-7 住居址ピット埋土土層

- 7.5 YR3/1 黒褐色 粘性あり、多量のシルト粒と少量の炭化物を混入、底部に小礫あり。
- 5 YR2/1 黒褐色 粘性あり、多量のシルト粒と微量の炭化物を混入。
- 7.5 YR2/1 黒色 非常に軟らかい、粘性あり、シルト粒と炭化物が少量混入、底部に小礫あり。
- 7.5 YR3/1 黒褐色 粘性あり、少量の炭化材と粘土質シルトが混入。
- 10 YR2/2 黒褐色 非常に軟らかい、粘性あり、多量の粘土質シルトと微量の炭化物、小礫、細礫混入。
- 5 YR2/1 黒褐色 粘性あり、粘土質シルトと炭化物が混入。

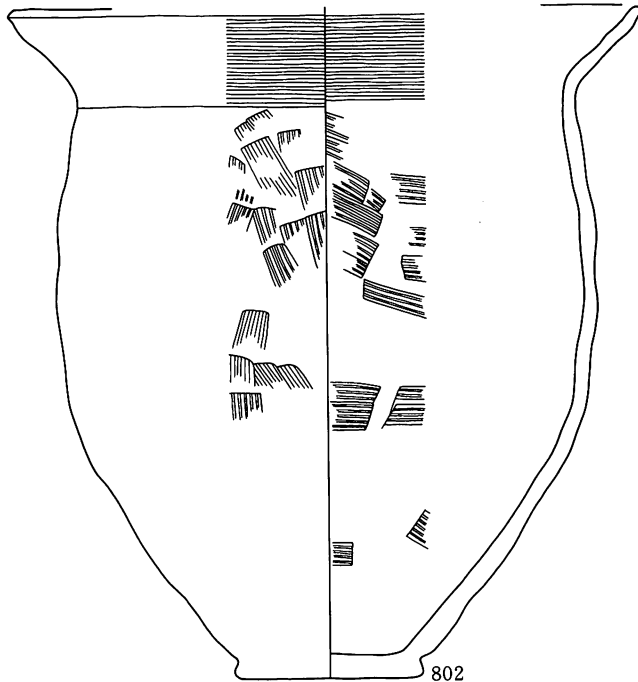
第237図 L-7 住居址(遺構)



第238图 L-7住居址(遺物-1)

(25.4) · 7.0 · —

床直

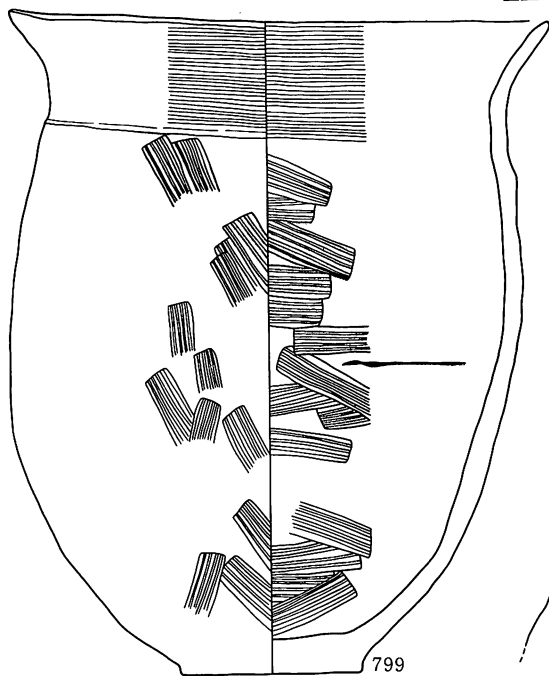


802

0 10cm

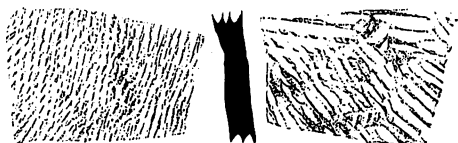
21.7 · 7.0 · 26.5

埋土



799

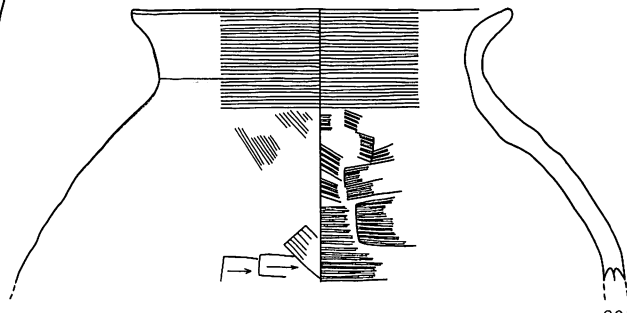
床直



1124

15.2 · — · —

床直



801

第239图 L-7 住居址(遺物-2)



**坏形土器**(787～795) いずれもロクロ未使用成形のもので、体部外面に段をもち底部形態が丸底や平底風丸底のものである。体部～口縁部は段の位置より直線的に外反するもの(790～795)と内弯気味に外反するもの(787～789)があり、口唇は先細りのもの(790・792)と丸味をもつもの(787～789・791・793～795)がある。調整技法は、口縁部の外面はヨコナデのもの(789・794)・ヨコナデ後ナデやケズリ(793・795)・ヨコナデ後ミガキ(791)・ミガキ(787)・ハケメを残すもの(792)等があり、底部はヘラケズリやヘラナデである。内面はいずれもミガキ後黒色処理されている。

**高坏形土器**(796・797) いずれもロクロ未使用成形で、796は坏部のみ、797は脚部のみがそれぞれ残存している。796は底部が丸底でやや深目の坏形土器に脚部をつけた形態のもので、体部～口縁部は体部段の位置で軽く外反し上端部で内弯している。調整技法は、口縁部外面がミガキで底部は単位が不明であるがナデが入っている。内面はミガキ後黒色処理されている。797は比較的高い脚部で、裾部が大きく開いている。調整技法は、柱状部外面ミガキで裾部にヨコナデが入る。内面はナデのみである。坏部は内面ミガキで黒色処理されていたらしいが、消失している。

**甕形土器**(798～802) いずれもロクロ未使用成形で、体部が若干膨らむもの(799・802)と球胴型のものがあり、体部最大径を中位～下位にもつ。口縁部は直線的に外反するもの(799・801・802)と外弯気味のもの(798・800)がある。口唇は平らにナデられるもの(798)と丸味をもつもの(799～802)がある。底部周囲には弱い突出が付き、底面は平らにナデられ木葉痕をもつものはない。

#### 須恵器

**甕形土器**(1124) 大甕の体部破片である。内外面ともに平行タタキ目をもつものである。

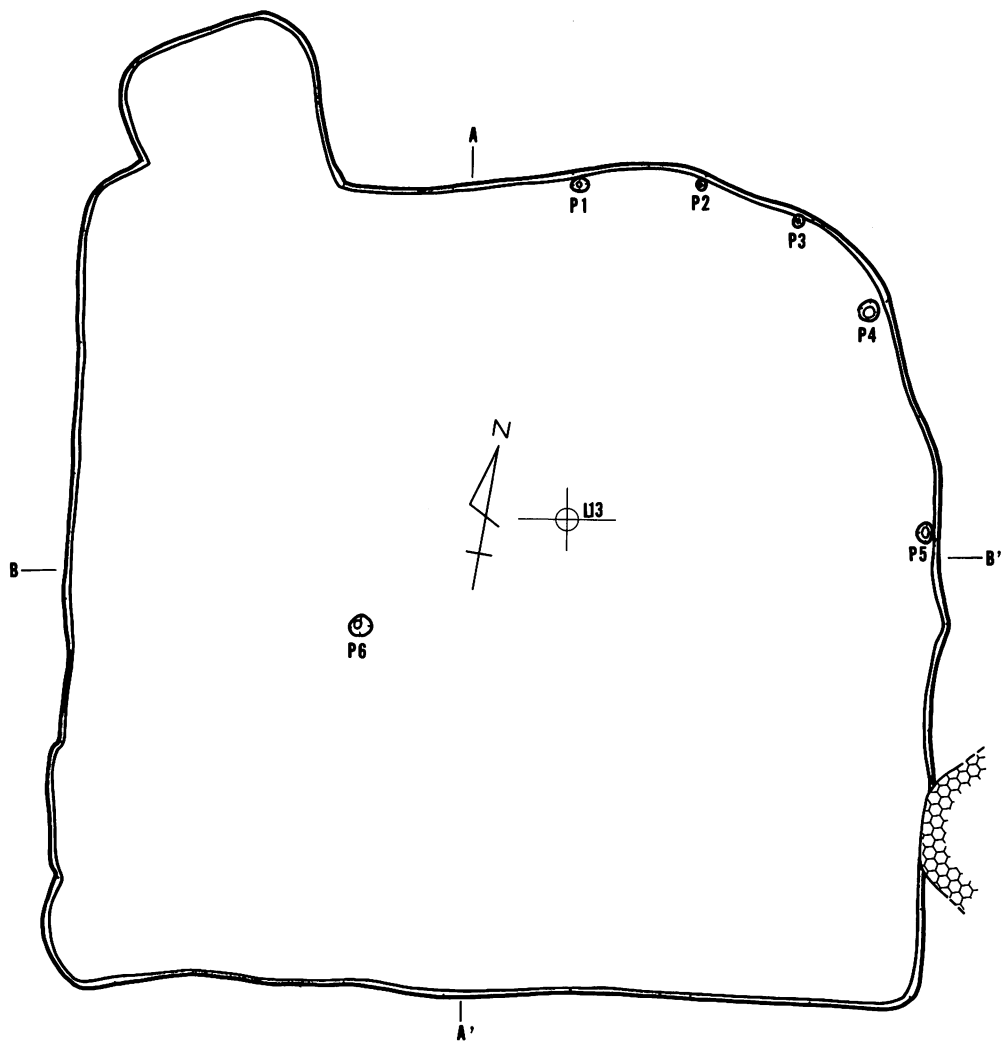
(吉田 洋)

### 78) L-13住居址

〔遺 構〕(第240図、P L 43B)

本住居址は東側でL-13土坑と重複している。重複による新旧関係はL-13土坑の方が新しい。当初住居址として認定するかどうか問題となった遺構であるが、北東壁沿いに柱穴状の小土坑がほぼ等間隔で5ヶ検出されたことから、住居址となるものと断定した。

規模は、南北約6.6m・東西約7.1mを測り、壁高は0.08mであり、壁は床面に対して約120度の角度を示している。埋土は褐灰色を呈する粘土質シルトの単層で構成され、酸化鉄が集積している。床は地山の褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面には若干凹凸があり、あまり平坦とはいえない。あまり締まりもなく、どちらかとい

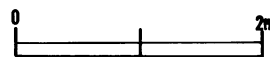


L-13住居址ビット計測値

長径×短径	深さ
P <sub>1</sub> 14cm×14cm	13cm
P <sub>2</sub> 8cm×8cm	2.7cm
P <sub>3</sub> 8cm×8cm	5cm
P <sub>4</sub> 18cm×17cm	11cm
P <sub>5</sub> 17cm×13cm	18cm
P <sub>6</sub> 20cm×17cm	10cm

L-13住居址埋土土層

1. 10YR5/1褐色 粘性少しあり、少量の水酸化鉄が混入。



第240図 L-13住居址(遺構)

うと軟弱である。本住居址の北壁西寄りには南北1.5mで東西1.8mを測る隅丸方形の張り出し部がある。埋土・床面の高さともに本住居址のそれと共通しており、本住居址に付随するものであろうが性格は不明である。

本住居址の床面ではP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の土坑が検出されている。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>の規模は径約0.08m、P<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>が約0.14m、P<sub>4</sub>が約0.18mで、深さはP<sub>1</sub>—0.12m・P<sub>2</sub>—0.03m・P<sub>3</sub>—0.05m・P<sub>4</sub>—0.11m・P<sub>5</sub>—0.18mと、規模・深さともにそれぞれによって差がある。P<sub>6</sub>は径約0.18mで深さは約0.09mである。平面形はいずれも円形や楕円形を呈している。埋土はどの土坑も褐灰色の粘土質シルトによって構成され、柱痕跡は検出されていない。土坑の断面形が「V」字形に近い形態であることから、埋め込みではなく打ち込みによるものであろう。

カマドや焼土は検出されていない。

#### 〔遺物〕

本住居址では埋土内・床面直上ともに遺物が全く出土していない。

(高橋与右エ門)

### 79) M—5住居址—1

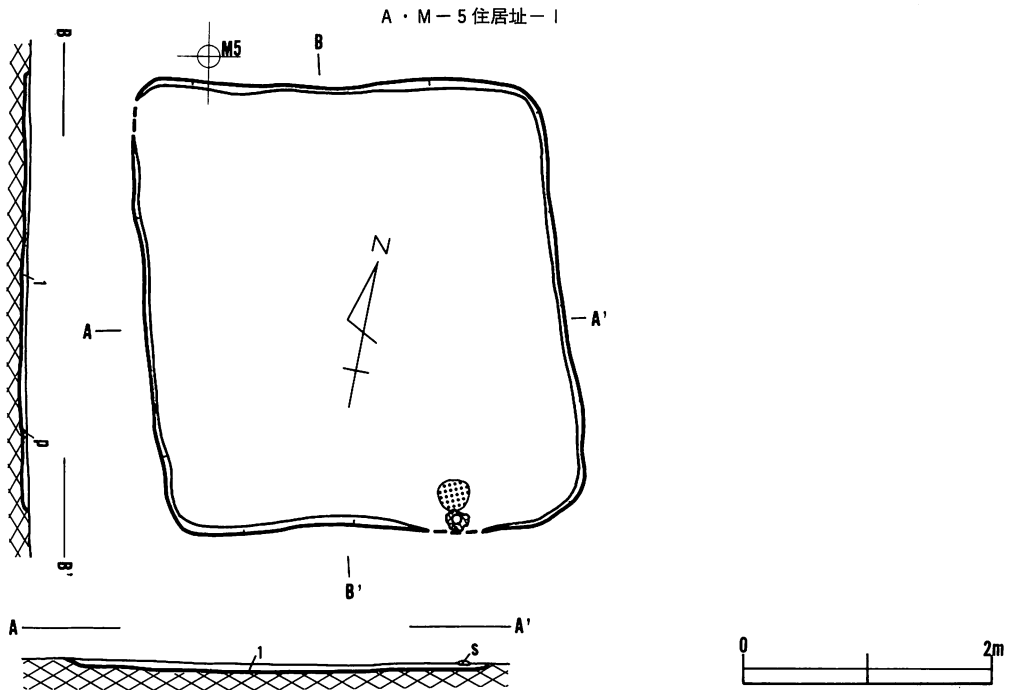
#### 〔遺構〕(第241図A、P L 44A)

本住居址はM—5住居址—2・M—5土坑と重複している。重複する遺構との新旧関係は本住居址がもっとも新しい。

規模は南北約3.7mで、東西は約3.3mを測り、壁高は0.04m～0.05m位であり、壁は床面に対して約120度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は南南東—北北西にあり磁北に対して約161度東に偏している。埋土は暗褐色を呈する粘土質シルトの単層で構成され、全体的に炭化物や褐色のシルト粒の混入が多く、締まりは比較的良好。床面は地山の暗褐色を呈する砂質シルトとM—5土坑の埋土によって構築されている。M—5土坑との重複部分には薄い貼床がみられたが、他の部分はそのまま床面としている。起伏もほとんどなくほぼ平坦である。壁溝は検出されていない。

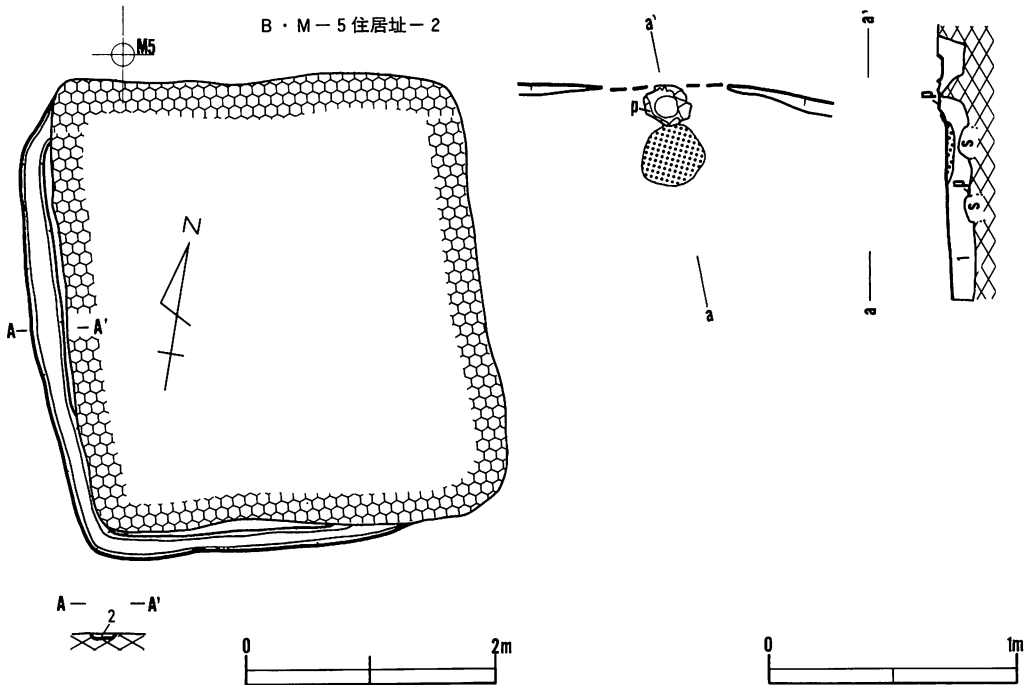
本住居址の床面では土坑が全く検出されていない。従って、柱穴・貯蔵穴ともに不明である。

カマドは南南東壁で検出され、壁中央より0.7mほど東に寄っている。検出された部分は燃烧部と支脚のみで、他の袖部・煙道部・煙出部は検出されていない。袖部はシルトの貼り付けで構築され、住居址の掘り込みが浅いために、その残痕に気付かないで掘り取ってしまった可能性がある。燃烧部底面は床面と同位面で奥壁まで続き、煙道部とは段差で接続するらしい。焼土範囲は径0.25m位の円形で、南南東壁と約0.3mの距離がある。焼土と壁との間には焼土と接する様な状態で2ヶの土師器坏形土器が伏せて置かれ、支脚として利用していた。いずれ



M-5 住居址-1・2 埋土土層

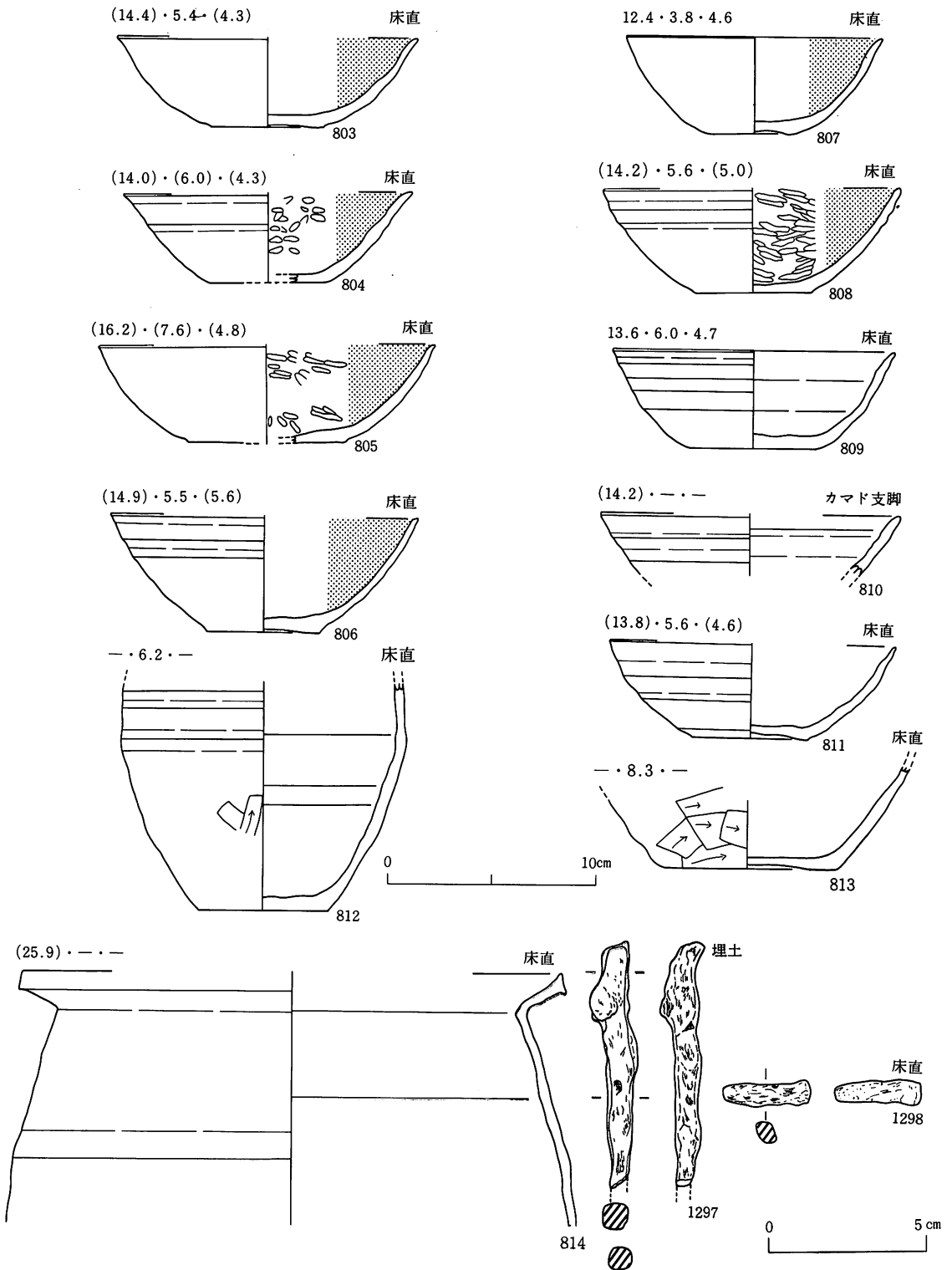
1. 7.5YR3/3暗褐色 粘土質シルト よく締まっている、褐色シルト粒と炭化物の混入多い。
2. 7.5YR3/3暗褐色 粘土質シルト 多量の褐色シルトブロックが混入。



M-5 住居址-1 カマド埋土土層

1. 7.5YR3/2黒褐色 シルト質土 緻密でよく締まっている、焼土、炭化物、少量の土師器片、礫が混入。

第241図 M-5 住居址群(遺構)



第242図 M-5 住居址-I (遺物)

もロクロ使用成形で、内面がミガキも黒色処理もないものである。煙道部や煙出部は検出されていないので不明である。

〔遺物〕(第242図、P L 139 B・140 A)

本住居址は掘り込みが浅いこともあって埋土内では全く出土していない。すべて床面直上よりの出土遺物である。その中でも南東隅部の床面より集中して出土している。種類は土師器と鉄製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・名称不明鉄器がある。

#### 土師器

**坏形土器** (803～811) いずれもロクロ使用成形で、内面が黒色処理されるもの(803～808)・黒色処理されないもの(809～811)がある。体部は底部より内弯気味に外傾し、黒色処理のものも無処理のものも同じ形態を示している。大きさ・深さともにほぼ同一のものである。底部切り離し技法はいずれも回転糸切り無調整である。外面はすべてロクロナデであるが、内面黒色処理のもの内面にはミガキが入り、無処理のものはロクロナデのみである。

**甕形土器** (812～814) いずれもロクロ使用成形のものである。813と814は同地点で出土していることから、同一個体の可能性が大きい。812は小型で底部切り離しが回転糸切り無調整のものである。体部は底部より軽く外傾し中位に最大径をもって頸部に向かって軽く窄む。体部下位に一部ヘラケズリが入っているが、ほとんどはロクロナデのみである。814は若干膨らむ体部をもち、頸部で窄んでいる。口縁部は長くそして直線的に大きく外反し、口唇は縁帯状を呈している。814は内外面ともロクロナデ調整である。813は底部より外傾する体部をもち、底部は平らにナデられている。外面はヘラケズリであるが内面はロクロナデのみである。

#### その他

**鉄製品** (1297・1298) いずれも名称が不明である。1297は断面が方形を呈するらしいことから釘の可能性がある。1298も1297と同じ類いかとおもわれる。

(吉田 洋)

### 80) M-5住居址-2

〔遺構〕(第241図B)

本住居址はM-5住居址-1の西壁と南壁に併行する周溝状の溝跡を住居址の壁溝と認定し住居址として登録したものである。M-5住居址-1と本住居址の壁溝の間には本住居址の床面の痕跡らしき面が残存している。従って、本住居址のほとんどはM-5住居址-1によって削剝されてしまい、壁溝だけが残ったものであろう。以上の様なことから新旧関係を考えると、M-5住居址-1の方が新しいことになる。しかし、あまり時間差のない時期の住居址であらうと推定される。

規模は明確でないが、北南約3.5mで東西約2.8m位と推定される。壁高等は不明である。平面形は定かでないが、検出された部分から推定すると隅丸方形を呈するであろう。主軸方向は不明であるが、西壁が約20度西に偏している。住居址そのものの埋土は不明であるが、壁溝の埋土はM-5住居址-1の埋土と差がなく、暗褐色のシルトで構成されている。壁溝の巾は0.15m～0.20m位で、深さは0.04m位である。床面については不明である。

本住居址では土坑が全く検出されていない。従って、柱穴・貯蔵穴ともに不明である。

カマドは残存していないので不明である。

#### 〔遺物〕

本住居址では埋土内・床面直上ともに遺物が全く出土していない。

(吉田 洋)

### 81) M-6住居址

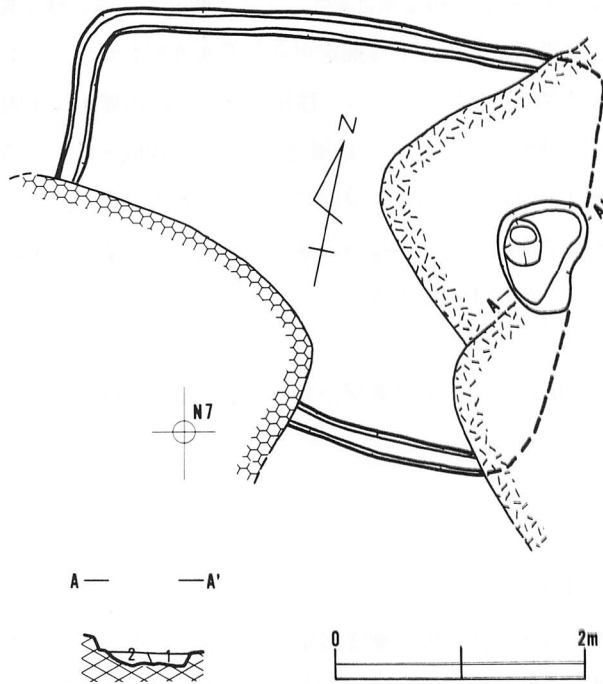
#### 〔遺構〕(第243図、P L 44 B)

本住居址は南西隅部がM-7住居址、東壁部分がN-6住居址・N-7住居址とそれぞれ重複している。重複遺構との新旧関係は、M-7住居址が本住居址より新しく、N-6住居址・N-7住居址は古い。なお、N-6・N-7住居址との重複部分は壁もカマドも検出されていない。しかし、N-6・N-7住居址よりの出土遺物はロクロ未使用成形の土師器だけであり、本住居址よりの出土遺物はロクロ使用土師器である。このことから本住居址を新しい遺構として認定した。本住居址で残存しているのは、壁溝・貯蔵穴のみで他の壁・床面・カマドは検出されていない。おそらく、削剝されたものであろう。

規模は南北約3.4mで東西約4.2mを測り、壁高は不明である。平面形は縦長の隅丸方形を呈し、主軸方向は東-西方向にあり、磁北に対して約90度東に偏している。住居址そのものの埋土は不明であるが、壁溝の埋土は黒褐色の粘土質シルトによって構成されていた。壁溝の巾は0.15m～0.18m位で深さは0.09m～0.05m位で北に寄るほど深くなる傾向がある。床面として検出された面は壁外の面と同位面であることや、カマド跡が不明である等から、前述の通り相当削剝されていることが考えられる。従って、ここでは床面が不明であるとしておく。

本住居址に関連すると考えられる土坑が、N-6・N-7住居址にまたがって検出されている。規模は径約0.9m×0.6mで深さ約0.17mを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は極暗褐色のシルトで構成され、粘性が強く少量の礫や土器片等が混入していた。おそらく、本住居址の貯蔵穴的性格が強いものとおもわれる。

カマドに関係する遺構は全く検出されていない。北壁沿いの床面では焼成痕が全く確認されていない。東壁際には貯蔵穴が検出されていることから、他の同時期（平安時代）の住居址と



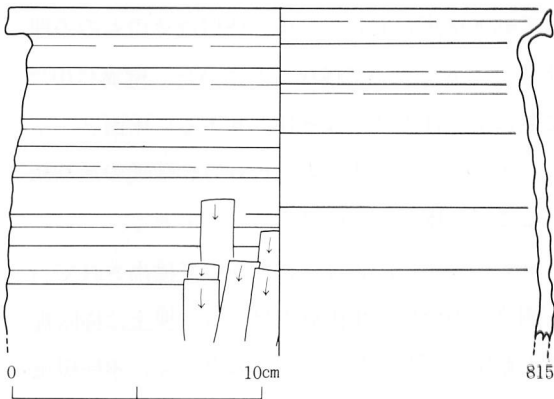
M-6 住居址ピット埋土土層

1. 5 YR2/1 黒褐色 粘性あり、微量の粘土質シルトと水酸化鉄、少量の炭化材が混入。
2. 7.5 YR2/2 黒褐色 非常に軟らかい、粘性あり、少量の炭化物と粘土質シルトが混入。

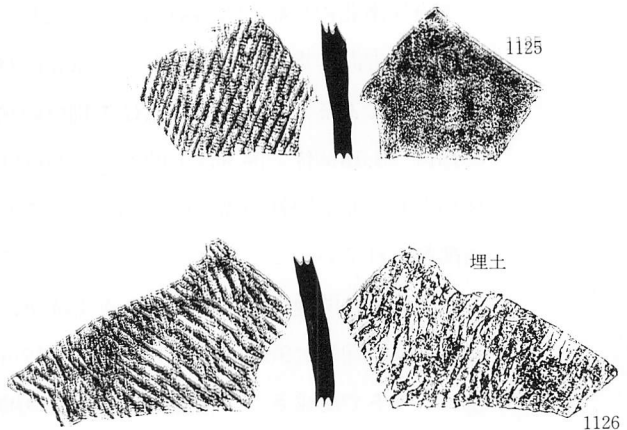
第243図 M-6 住居址(遺構)

22.0 . . . .

床直



815



埋土

1126

第244図 M-6 住居址(遺物)



同じ様に貯蔵穴の脇にカマドを設置していた可能性が強い。

〔遺物〕(第244図、P L 140 B・141 A)

本住居址での遺物は、北側壁溝内より須恵器の破片が出土した以外は、すべて貯蔵穴内より出土している。種類は土師器と須恵器があり、器種は甕形土器のみである。

#### 土師器

**甕形土器**(815) ロクロ使用成形のもので、体部下半を欠失している。若干膨らんだ体部より軽く窄みながら頸部に移行し、口縁部は短く、そして、強く外反し、口唇は上・下方に挽き出されて縁帯状を呈する。体部外面の中位～下位にかけてはヘラケズリ調整されるが、その他は内外面ともロクロナデのみである。

#### 須恵器

**甕形土器**(1125・1126) いずれも大甕の体部破片である。1125は外面平行タタキ目・内面ナデ、1126は内外面とも平行タタキ目をもっている。(高橋与右エ門)

### 82) M-7 住居址

〔遺構〕(第245図、P L 45 A)

本住居址は北東部分がM-6住居址と重複している。重複するM-6住居址との新旧関係は、本住居址の方が新しい。

規模は東西約3.2m・南北約3.2mで壁高は約0.05mを測り、壁は床面に対して約120度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向は不明であるが、北北西壁が約20度東に偏している。埋土は黒褐色を呈する砂質シルトの単層で構成され、部分的ではあるが褐色のシルト粒が混入している。他に粒径5cm～10cmの礫が若干混入している。床面は地山の褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面にはほとんど起伏もなく平坦で、良く締まっている。壁溝は検出されていない。

本住居址では土坑が全く検出されていない。従って、柱穴や貯蔵穴は不明である。

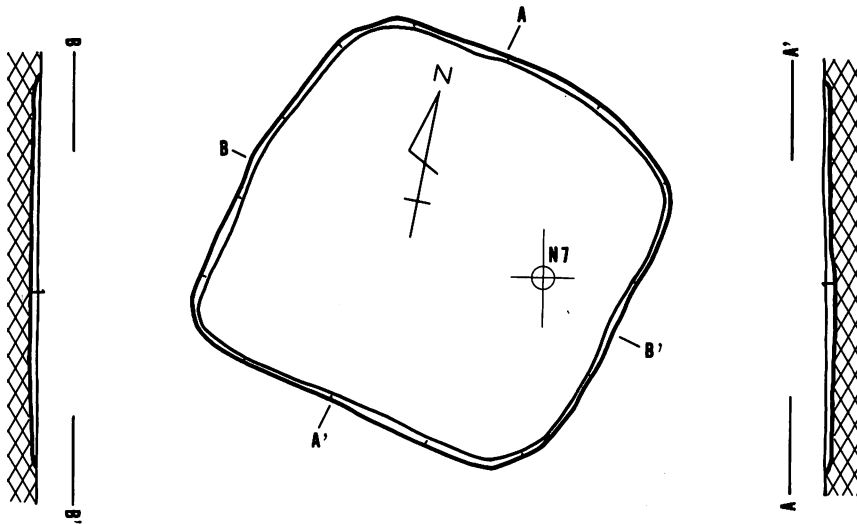
カマドとおもわれる遺構は検出されていない。しかし、床面ほぼ中央に非常に薄い焼土層の存在が確認されている。おそらく、カマドはなく、炉をもつ住居址であろう。

〔遺物〕(第245図、P L 141 A)

埋土内や床面より6ヶの土師器片が出土している。しかし、図化される様なものではなく、小破片であった。種類は土師器と石製品があり、器種は坏形土器・甕形土器・石製紡錘車がある。

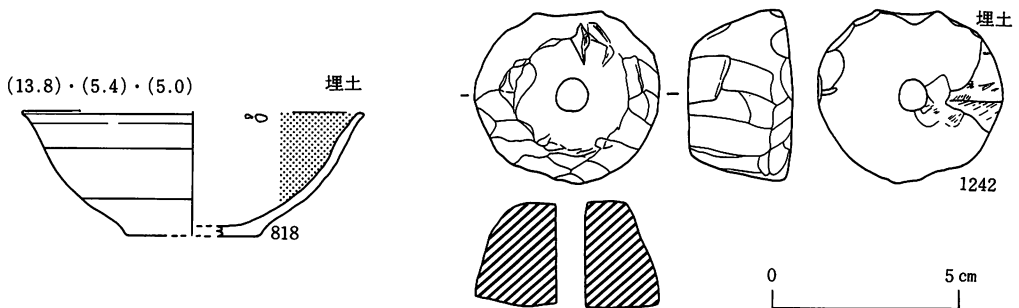
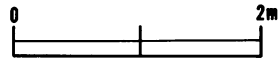
#### 土師器

**坏形土器**(818) ロクロ使用成形のもので、内面が黒色処理され、底部切り離し技法は回転



M-7 住居址居埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色 砂質シルト 褐色シルトブロックと若干の礫が混入。



第245図 M-7 住居址(遺構・遺物)

糸切り無調整である。

**甕形土器** ロクロ使用成形のもので、体部にヘラケズリによる調整痕をもち、口縁部は強い挽き出しはない。その他のことは不明である。

**その他**

**石製品(1242)** 石製紡錘車である。截頭円錐形で中心部に1ヶの貫通孔をもつ。斜面部に粗い鉞削り痕を残している。

(高橋与右エ門)

### 83) M-14住居址

〔遺構〕(第246図、P L 45 B)

本住居址は重複もなく単独で検出されている。

規模は北南が約3.9m・東西が約4.0mで、壁高は約0.1mを測り、壁は床面に対して約135度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は北-南方向にあり磁北に対して約5度東に偏している。埋土は黒色と暗褐色を呈する砂質シルトで構成され、色調によって2層に細分されている。混入物としては、1層には小礫や褐色の砂質シルト等があり、2層には小礫が若干混入している。床は地山の褐色を呈する砂質シルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面にはほとんど起伏がなく、平坦で良く締まっている。壁溝は検出されていない。

本住居址では土坑が検出されていない。従って、柱穴や貯蔵穴は不明である。

カマドは北壁で検出され、壁中央より約0.9m東に寄って位置する。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は床面を若干掘り窪めて基底部とし、その上に少量の炭化物や粘土質シルトの混入した黒褐色のシルトを貼り付けて構築している。燃烧部底面は床面より若干高く、中央部より次第に上がり勾配を示して奥壁に達し、煙道部とは段差で接続するらしい。焼土は焚口部より奥壁までの全面に分布し、一部は袖部の内壁にも焼成痕をもっている。煙道部は奥壁との接続部分より北方約0.5mの部分が検出されていないが、粗掘り中に削剝してしまった可能性がある。検出された部分の煙道部は煙出部に向かって緩やかな下り勾配を示しており、煙出部には土坑状の掘り込みがある。

〔遺物〕(第247図、P L 141 A)

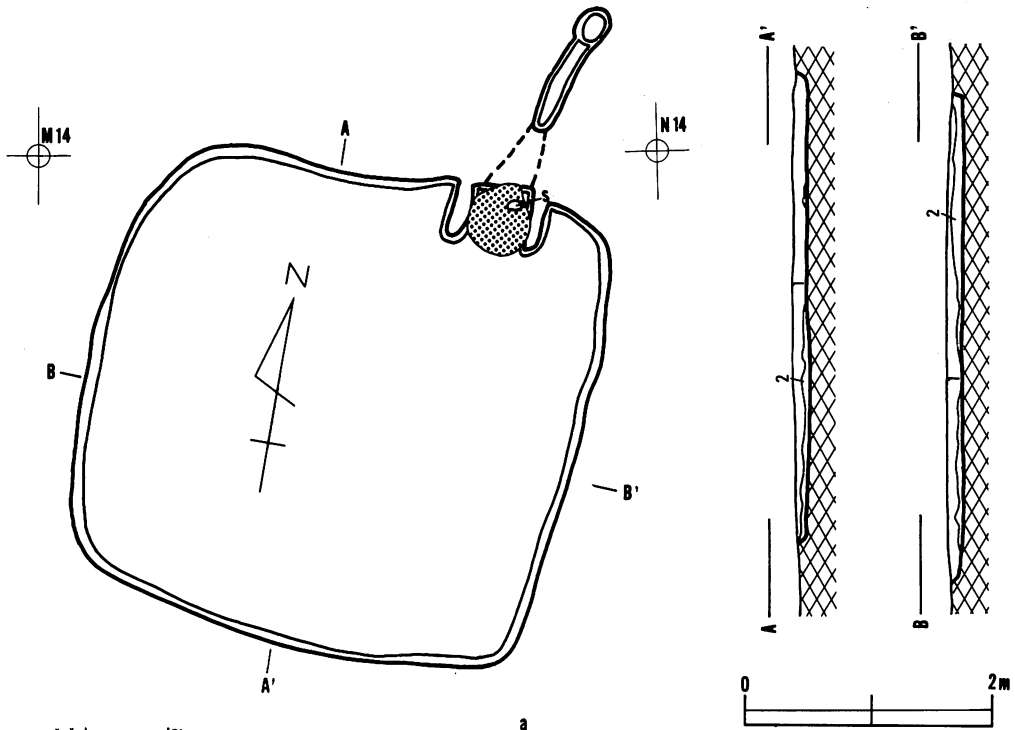
埋土内での出土は全くなく、いずれも床面直上より出土している。その中でも、カマド周囲からのみ出土している。種類は土師器のみで、器種は坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器** 1ヶの破片が出土しているが、小破片のため図化されていない。ロクロ未使用成形で、内面が黒色処理されている。底部形態は丸底を呈するらしい。

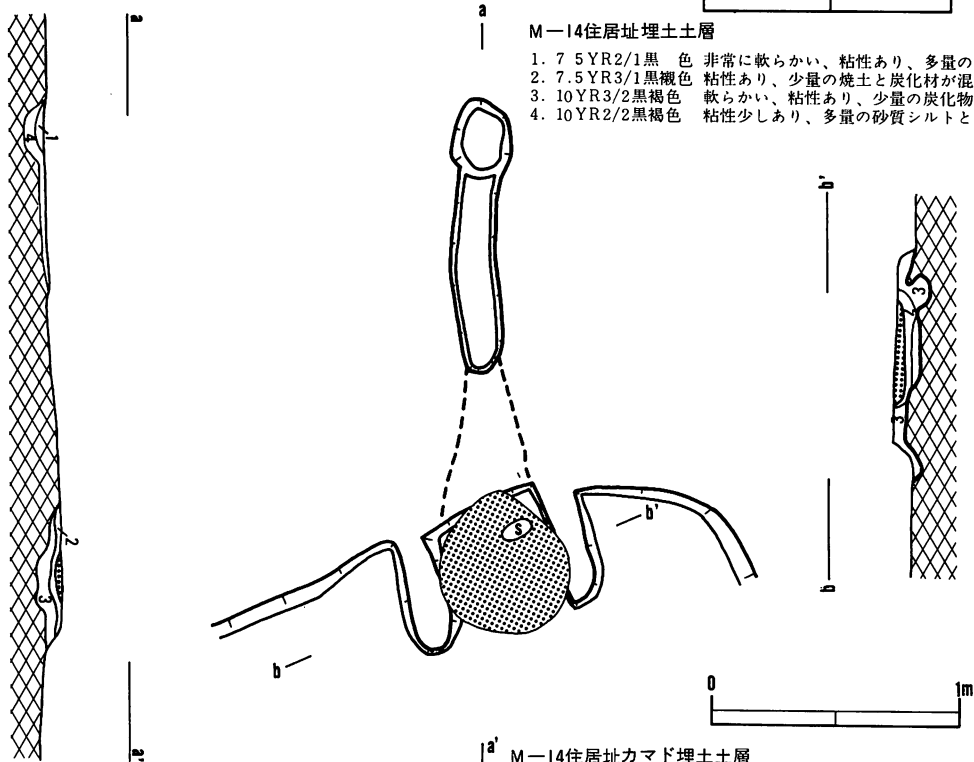
**甕形土器** (816・817) いずれもロクロ未使用成形で、816は小型で817は中型のものである。いずれも体部が若干膨らむらしく、体部最大径は中位～上位にもつらしい。頸部には段が付き口縁部は大きく外弯している。口唇は丸味をもつ。調整技法は、口縁部外面がハケメ後ヨコナデ・内面ヨコナデで、体部は内外面ともハケメ後スリケシである。

(高橋与右エ門)



M-14住居址埋土土層

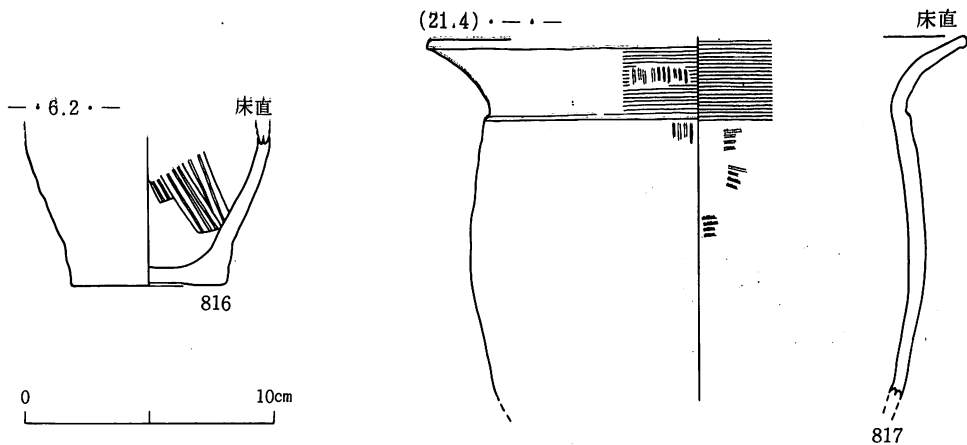
1. 7.5YR2/1黒色 非常に軟らかい、粘性あり、多量の炭化物が混入。
2. 7.5YR3/1黒褐色 粘性あり、少量の焼土と炭化材が混入。
3. 10YR3/2黒褐色 軟らかい、粘性あり、少量の炭化物と粘土質シルト混入。
4. 10YR2/2黒褐色 粘性少しあり、多量の砂質シルトとガラス質、細礫が混入。



a' M-14住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR1.7/黒色 砂質シルト 小礫、褐色砂質シルトの混入あり。
2. 7.5YR3/4暗褐色 砂質シルトに黒色が混入。

第246図 M-14住居址(遺構)



第247図 M-14住居址(遺物)

#### 84) N-6住居址

〔遺構〕(第248図、P L 45C)

本住居址は南東側の部分がN-7住居址と重複し、さらに、西隅部はM-6住居址と重複している。重複遺構との新旧関係は、本住居址は重複するいずれの住居址よりも新しい。特に、N-7住居址は本住居址全体の $\frac{1}{2}$ 強を削剝しているものと推定される。

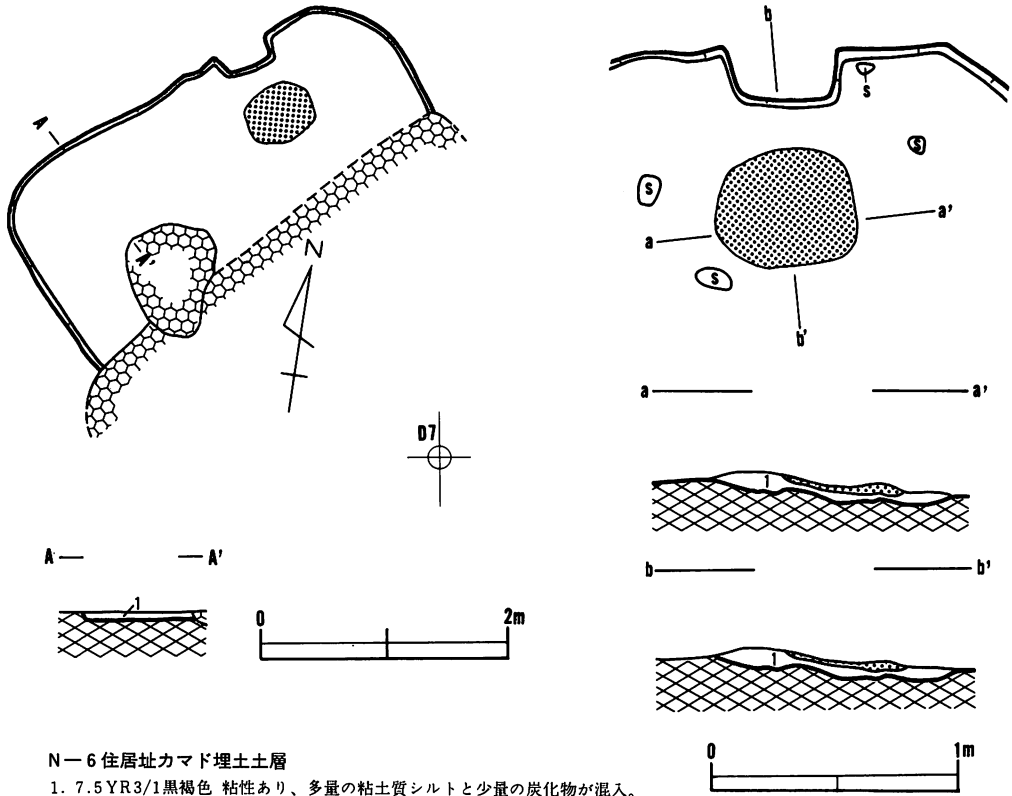
規模は北南はN-7住居址の削剝によって不明であるが、東西は約3.5mを測る。壁高は約0.1mで、壁は床面に対して約115度の角度を示している。平面形は定かでないが、検出された部分から考えると隅丸方形を呈するものと推定され、主軸は北西-南東方向にあり、磁北に対して約42度西に偏している。埋土は暗褐色を呈するシルトの単層で構成され、炭化物・焼骨・褐色のシルト粒が混入している。なお、埋土最下層には粒径5cm~10cm位の礫が混入し、ほとんどのものは床面に接している。床は地山の褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずに直接床面としている。床面は起伏もなくほぼ平坦である。

本住居址では土坑は検出されていない。

本住居址は明らかにカマドといえる遺構は検出されていないが、北西壁東寄りの床面で現地性焼土が検出され、その周囲には多くの焼骨や炭化物が散乱していた。袖部や煙道部・煙出部は検出されていないが、他にこの様な焼土が検出されていないことから、本住居址のカマド燃焼部の残痕であろうと断定した。焼土は壁中央より0.75mほど東方に寄り、北西壁の南方0.65mに位置する。範囲は0.5m×0.5m位の円形で、層厚は0.04m~0.05m位である。

〔遺物〕(第249図、P L 141C)

掘り込みが浅いせいか埋土内での出土は少なく、床面直上よりの出土が多い。しかし、量的



**N-6 住居址カマド埋土土層**

1. 7.5 YR 3/1 黒褐色 粘性あり、多量の粘土質シルトと少量の炭化物が混入。

**N-6 住居址 埋土土層**

1. 7.5 YR 3/4 暗褐色 シルト質土 褐色砂質シルト、炭化物、焼骨が多量に混入。

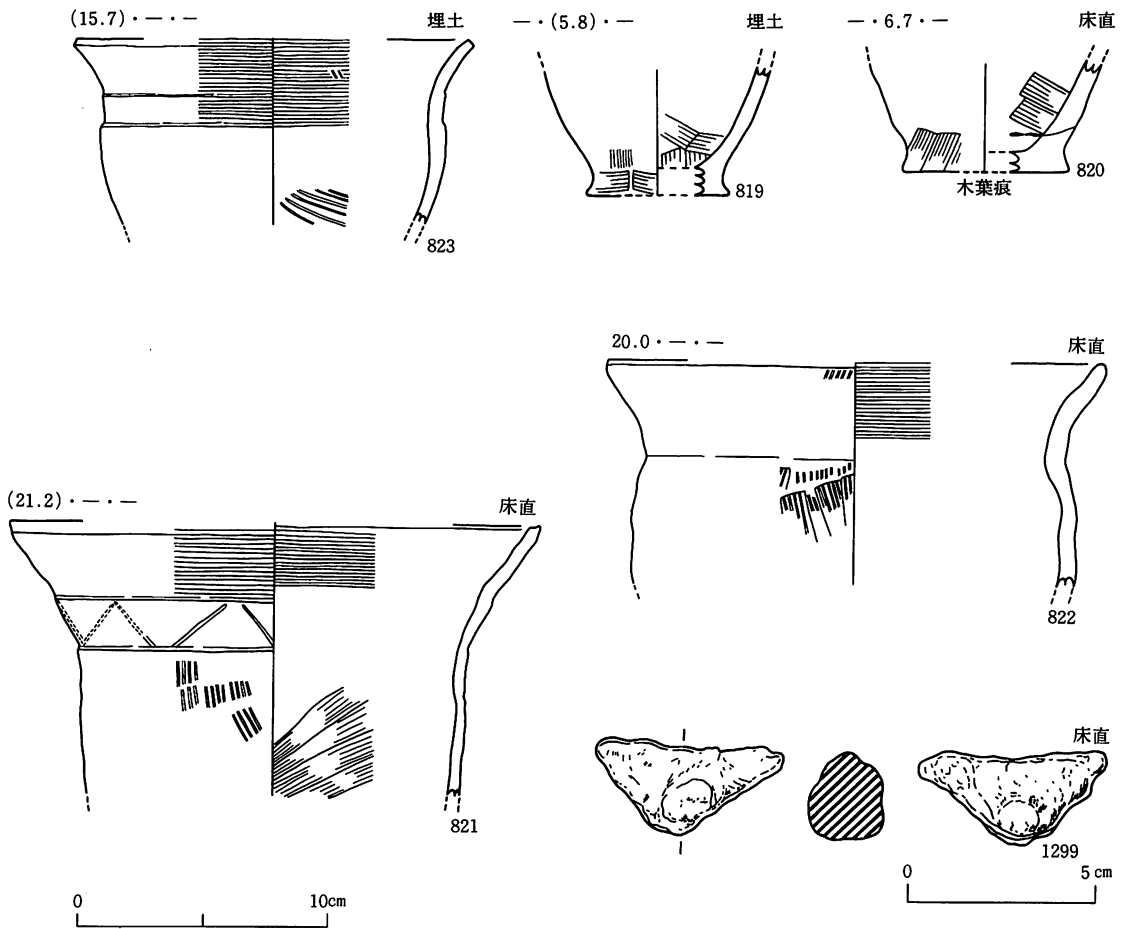
第248 図 N-6 住居址(遺構)

には少なく、それらも破片のみで完形となるものはない。種類は土師器と鉄製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・名称不明鉄器がある。

**土師器**

**坏形土器** 図化されていないが、破片が2ヶ出土している。ロクロ未使用成形で、体部外面に段をもち底部形態が丸底のものである。調整技法は口縁部外面ヨコナデで底部はヘラケズリである。内面はミガキ後黒色処理される。

**甕形土器**(819~823) いずれもロクロ未使用成形である。体部に最大径をもつもの(822・823)と頸部にもつもの(821)があり、頸部に段を2ヶ所にもつもの(821・823)と1ヶ所の



第249 図 N-6 住居址(遺物)

もの(822)がある。なお、821の頸部にはヘラ描きによる鋸歯状の沈線が入っている。口縁部は外弯するもの(823)・直線的に外反するもの(821)・内弯気味に外反するもの(822)がある。口唇は角張るもの(823)・平らにナデられ、沈線状の窪みをもつもの(821)・丸味をもつもの(822)がある。底部周囲には突出がつき、819の底面は平らにナデられるが、820には木葉痕が付されている。大きさでは中型・小型の部類であろう。調整技法は、口縁部は内外面ともヨコナデで、体部は外面がハケメ後ナデかスリケシで、内面はハケメ後スリケシカナデである。

その他

鉄製品(1299) 名称不明の鉄製品である。

(高橋与右エ門)

## 85) N-7 住居址

〔遺 構〕(第250図、P L 46A)

本住居址は北西側でN-6住居址と重複し、さらに、西側でM-6住居址と重複している。重複遺構との新旧関係は、M-6住居址は本住居址より新しくN-6住居址は古い。なお、東側部分が工事によって削剝を受けたために、未調査である。

規模は北西-南東が約4.3m、北東-南西が約3.9mを測る。壁高は約0.1mで壁は床面に対して約120度の角度を示している。平面形は主軸に対して若干縦長の長方形を呈し、主軸は北西-南東にあり磁北に対して約45度西に偏している。埋土は黒色を呈するシルトで構成されるが、混入物によって2層に細分されている。1層には褐色の砂質シルト粒が混入し、やや粘性をもつ。2層にはほとんど混入せず、粘性も弱い。なお、東部の床面には粒径5cm~30cm位の礫が多量に混入し、そのほとんどは床面に接していた。また、一部には巾10cm・長さ20cm位の炭化材も検出されているが、量的に少なく焼失住居址であるかは不明である。

本住居址では土坑が全く検出されていない。従って、柱穴・貯蔵穴ともに不明である。

本住居址では明らかにカマドといえる遺構は全く検出されていない。しかし、北西壁沿いと北東壁沿いの2ヶ所で現地性焼土が検出され、このいずれかがカマド燃焼部に伴うものと推定されるが、どちらも袖部・煙道部・煙出部等が検出されていないために定かでない。北西壁寄りの焼土は壁中央より0.95mほど北東寄り北西壁の推定位置より約0.5m南方に位置し、0.6m×0.3m位の範囲をもつ。焼土の周囲には焼骨の小破片が若干散乱していた。北東壁沿いの焼土は、そのほとんどが未調査区域に延びているので詳細は定かでない。焼土の周囲には炭化物粒が多量に散乱していた。

〔遺 物〕(第251図、P L 141D・142A)

埋土内でも若干出土しているが、いずれも破片である。床面直上出土のものも、破片のみであり完形となるものはない。種類は土師器・土製品・石製品があり、器種では坏形土器・高坏形土器・甕形土器・名称不明土製品・砥石がある。

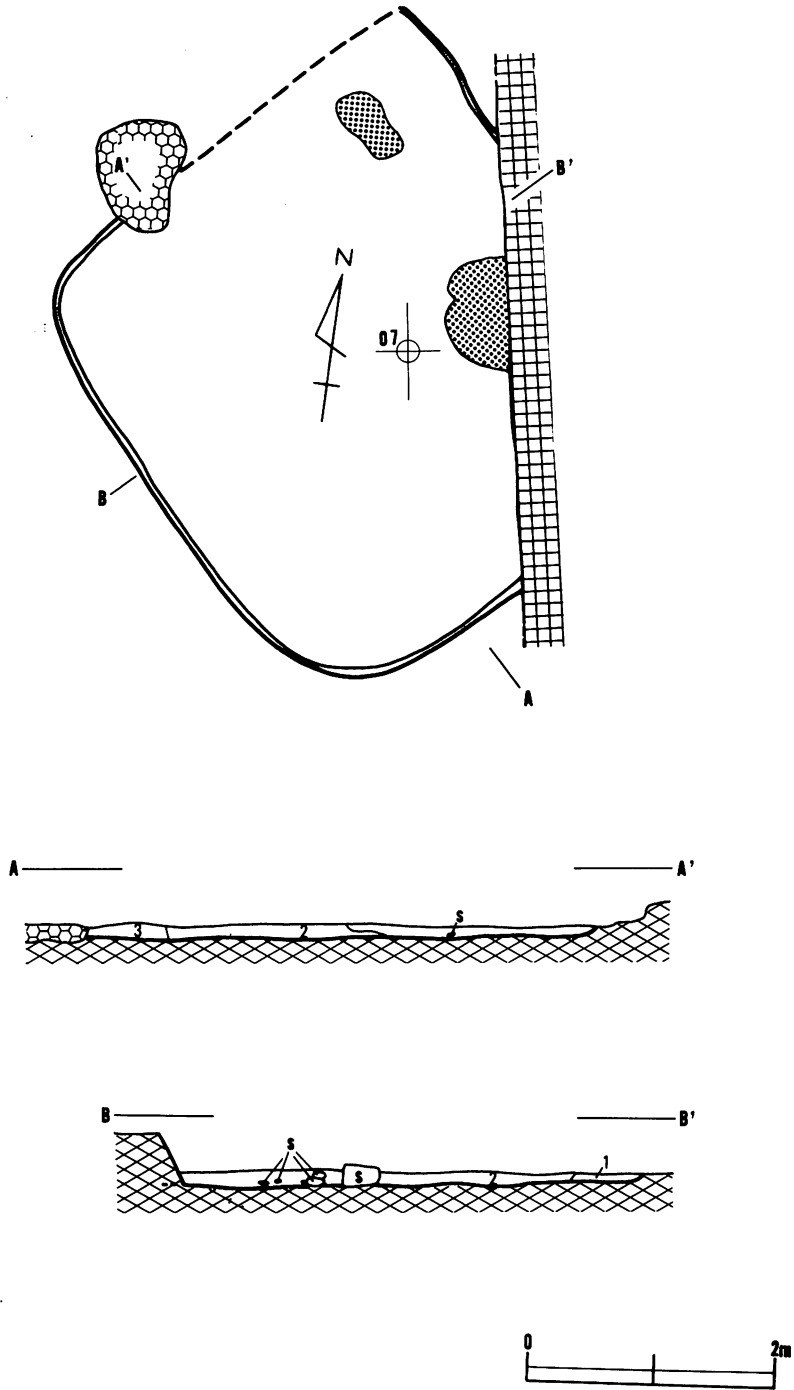
### 土師器

**坏形土器** 破片が1ヶ出土している。ロクロ未使用成形で、内面が黒色処理されているが、他は不明である。

**高坏形土器** (824) ロクロ未使用成形である。底部形態が丸底の坏形土器に脚部を貼り付けた形態のものである。坏部の内面はミガキ後黒色処理されている。脚部は大きく開くらしい。調整技法は、脚部外面はナデ、内面もナデである。

**甕形土器** (825~831) いずれもロクロ未使用成形で、体部に最大径をもつもの(829・831)と頸部付近にもつもの(830)がある。頸部には二ヶ所の段をもつもの(831)と全くもたない

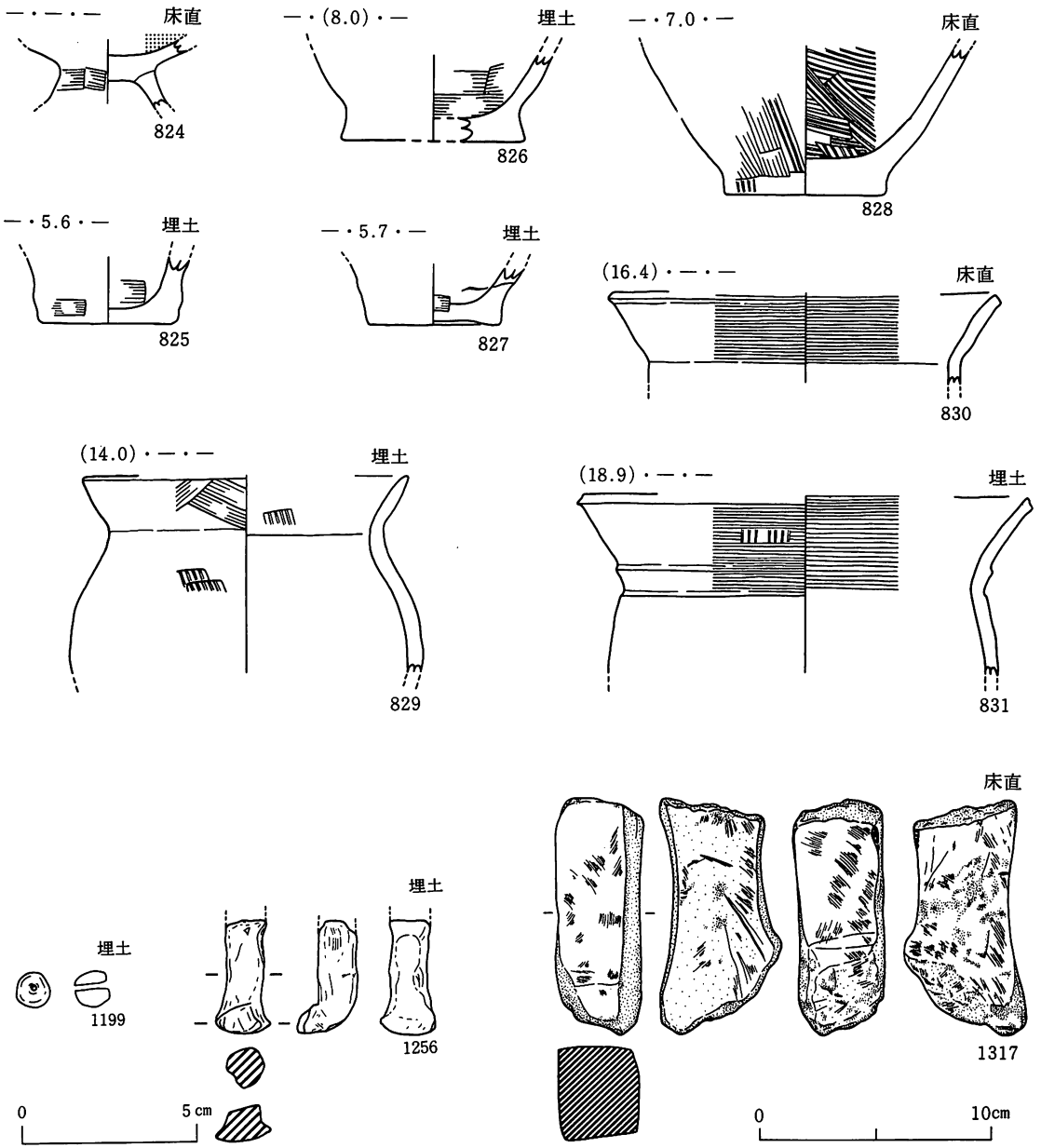




N-7 住居址埋土土層

1. 7.5 YR 2/1 黒色 シルト質土 やや粘性あり、少量の褐色砂質シルトの混入あり。
2. 7.5 YR 2/1 黒色 シルト質土
3. 7.5 YR 2/1 黒色 シルト質土 やや粘性あり。

第250図 N-7 住居址(遺構)



第251图 N—7 住居址(遺物)

もの(829・830)があり、口縁部はいずれも直線的に外反している。口唇は先細りとなるもの(829)と角張るもの(830)・平らにナデられ沈線状の窪みをもつもの(831)がある。底部周囲は突出をもつもの(826)ともたないもの(825・827・828)とがあり、底面は良くナデられ、平坦である。調整技法は、口縁部は内外面ともヨコナデ(830)・外面ハケメ後ヨコナデ(831)・ナデ(829)があり、体部外面はハケメ後スリケシヤハケメ後ナデが多く、内面はハケメヤナデである。

### その他

**土製品**(1199・1256) 1199は土製の丸玉で中心部に1ヶの貫通孔をもつ。黒色処理されている。1256は粘土を棒状にして焼成したもので、種類は不明である。

**石製品**(1317) 3面に使用痕をもつ砥石である。

(高橋与右エ門)

## 86) O-13住居址

〔遺構〕(第252・253図、P L 47A)

本住居址は重複遺構もなく単独で検出された。

規模は北西-南東が約4.75m、北東-南西が4.65mを測る。壁高は0.17m~0.23m位で、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸の平行四辺形を呈し、主軸は北西-南東方向にあり磁北に対して約40度西に偏している。埋土は褐色や黒褐色を呈するシルトで構成され、混入物の種類や程度・色調の変化によって4層に細分されている。しかし、それら4層の間には大差が認められず、いずれも近似した土質である。混入物としては、2層に粒径10cm~30cm位の礫が多く混入している以外に、少量の炭化物も観察されている。礫は床面に接する状態のものは少なく、ほとんどの場合は床面より0.05m位浮いた状態であった。床面は地山の暗褐色を呈するシルトで構築されているが、東側半分のそれには段丘礫層の上面が露出しており、西側部分は極暗褐色のシルトで埋め、その上面を褐色のシルトで貼って床面としている。従って、東側の床面は段丘礫層によって起伏が激しく、西側部分は起伏もなくほぼ平坦であるが、南壁に寄るほど低くなる傾向があり、高低差は0.1m位である。北西壁のカマド右側と東隅部を除いた他の部分では壁溝が検出され、ほぼ全周している。壁溝は巾約0.1m・深さ約0.07~0.1mで、壁溝底面はほぼ平坦である。

本住居址ではP<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>までの土坑が検出されている。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の規模は径0.20m~0.25m位で、深さは0.50m~0.56m位とほぼ同一である。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は規模・深さともにそれぞれによって差がある。平面形はいずれも円形または楕円形を呈する。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の埋土は、黒褐色を呈するシルトが主体で2層に細分された。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は黒褐色のシルトで構成される。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は本住居址のほぼ対角線上に位置することや、柱痕跡は検出されていないが規模がほぼ同一であることから、本住居址に伴う柱穴を構成するであろう。P<sub>5</sub>は本住居址によって北側部分が削剝されているこ

とから、本住居址より古い土坑であるが、遺物を伴出していないので所属時期や性格は不明である。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は浅い窪地状を呈している。

カマドは北壁で検出され、壁中央より0.45m東に寄って位置する。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は地山の削り出しによって構築し、シルトの貼り付けはみられない。焚口付近に左右袖部ともに粒径30cm×10cmの細長い礫が各1ヶ縦位で全長の1/2位埋め込まれている。また、焚口部床面にも粒径40cm×15cmの礫が1ヶ左右袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの礫によって構成され「冂」状に組まれていたものと推定される。燃烧部は掘り窪めもなくほぼ平坦で奥壁へ続き、煙道部とは段差で接続している。カマド埋設土器や支脚は検出されていない。燃烧部の焼土は焚口部付近にのみ観察され、小範囲である。また、左側袖部の焚口付近内壁にも焼成面が観察された。前庭部の床面には焼骨の小破片が散乱していたが、原形を残しているものはなかった。煙道部底面は平坦であるが、煙出部に向かって次第に低くなる傾向がある。煙出部に土坑状の掘り込みはない。

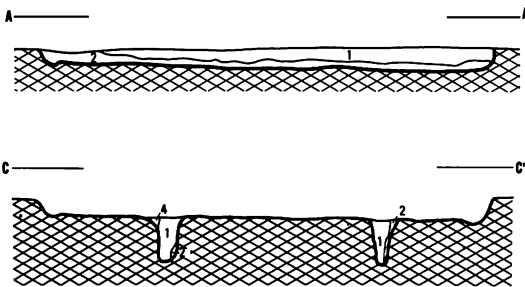
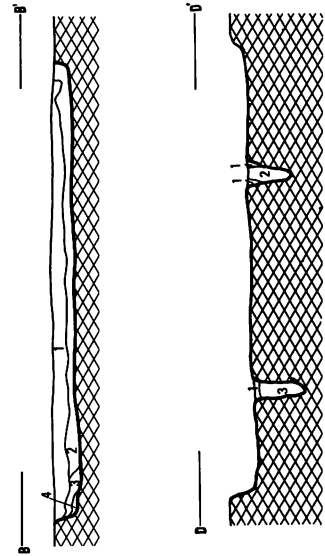
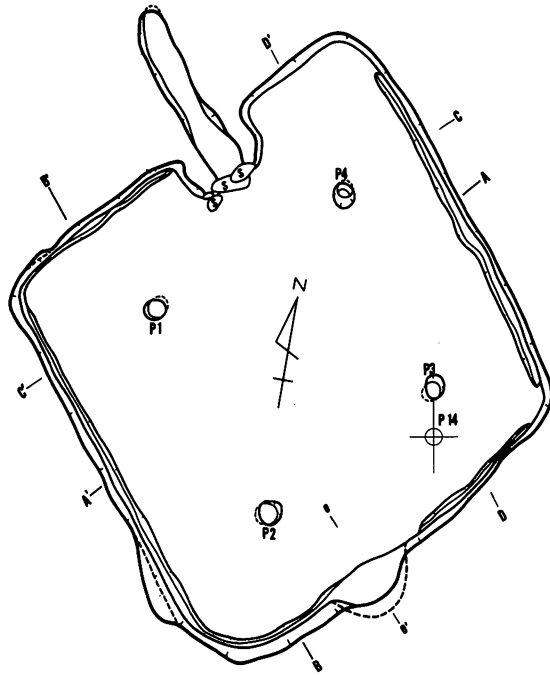
〔遺物〕(第254・255・256図、P L 142B・143・144・145A)

埋土内での出土は少なく、床面直上で多く出土している。特にカマド周囲での出土が多い。種類は土師器と土製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・鉢形土器・小型土器・紡錘車がある。

#### 土師器

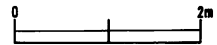
**坏形土器**(832・833) ロクロ未使用成形で、内面が黒色処理されている。833は内弯気味に外反する体部をもち、体部外面には二ヶ所に段状の沈線が付され、底部形態は丸底である。832は直線的に外反する体部をもっているが、破片であるので詳細は不明であるが、体部外面に稜をもち、内面にも対応する位置に稜をもっている。底部形態は不明である。調整技法は、833は外面がナデやミガキで内面はミガキである。832は外面がナデで内面がミガキである。

**甕形土器**(834～849) いずれもロクロ未使用成形で、体部が球胴型のもの(846・849)・体部が膨らむもの(836・844・846)・体部の膨らみも小さくほっそりしたもの(834・837・838・839・848)等があり、さらに、大型(837・839・843・844・847・849)・中型(834～836・839～842・848)・小型(846)がある。体部の膨らむものの体部最大径は中位～肩部にあり、球胴型は下位にもつ。頸部には、839・840・848以外は段をもち、口縁部は直線的に外反するもの(836・841・845・847～849)・外反した後内弯するもの(835・837・838・846)・外弯するもの(839・840)があり、口唇部は丸味をもつもの(835・836・838・839・846・847・849)・平らなもの(837・841)・先細りとなるもの(840・845・848)がある。底部周囲には突出をもつものが主体を占めているが、844・847・849にはない。底面は837・839・842・844・847には木葉痕



0-13住居址ピット計測値

	長径×短径	深さ
P <sub>1</sub>	23cm×19cm	50cm
P <sub>2</sub>	28cm×22cm	45cm
P <sub>3</sub>	25cm×22cm	54cm
P <sub>4</sub>	26cm×21cm	52cm



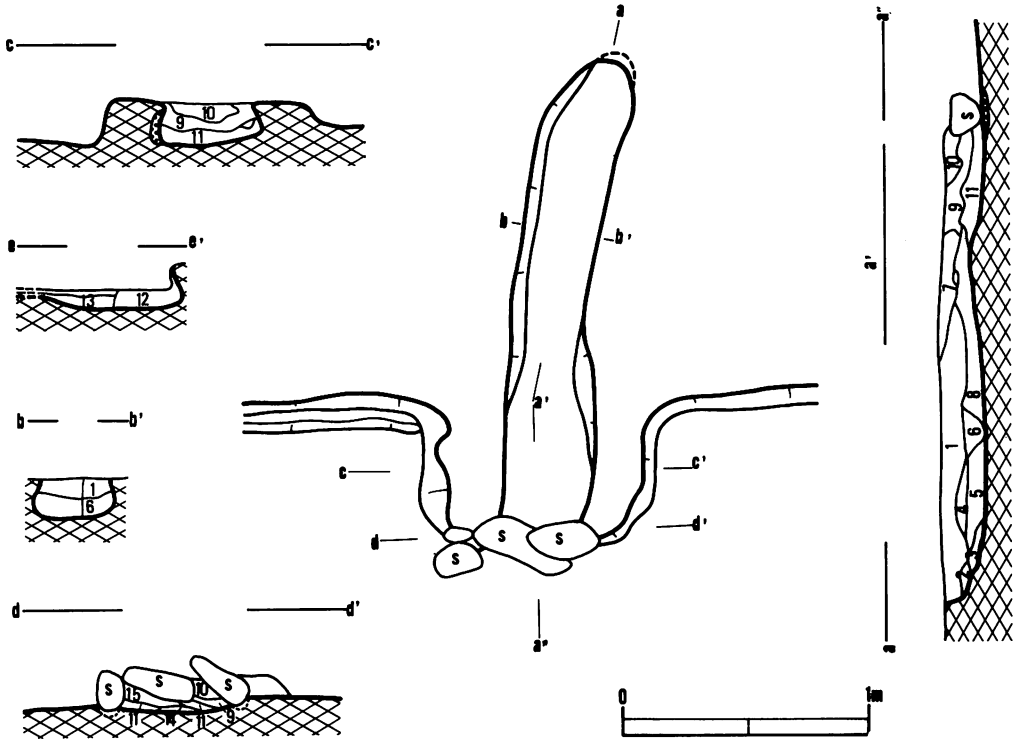
0-13住居址埋土土層

- |                  |                        |                              |
|------------------|------------------------|------------------------------|
| 7.5 YR3/2 黒褐色    |                        |                              |
| 1. 7.5 YR4/6 褐色  | よく締まっている、粘性少しあり、       | 黒色シルトに灰褐色砂質シルトが斑点に混入。 斑状に混入。 |
| 2. 10 YR3/3 暗褐色  | シルト質土 よく締まっている、粘性少しあり、 | 木炭粒、砂利が混入。                   |
| 3. 7.5 YR2/2 黒褐色 | シルト質土 よく締まっている、粘性少しあり。 |                              |
| 4. 7.5 YR4/6 褐色  | よく締まっている、粘性少しあり、       | 明色のシルトと黒色シルトが混入。             |

0-13住居址ピット埋土土層

- |                     |                        |
|---------------------|------------------------|
| 1. 2.5 Y3/1 黒褐色     | 粘性あり、酸化鉄の赤斑あり、少砂利少量混入。 |
| 2. 7.5 YR3/3 暗褐色    | 砂利を多量に混入。              |
| 3. 2.5 Y3/1~3/2 黒褐色 | 粘性あり、砂と砂利を少量混入。        |
| 10 YR4/6~3/6        |                        |
| 4. 褐色~黄褐色           | 砂質シルト 砂利が混入。           |

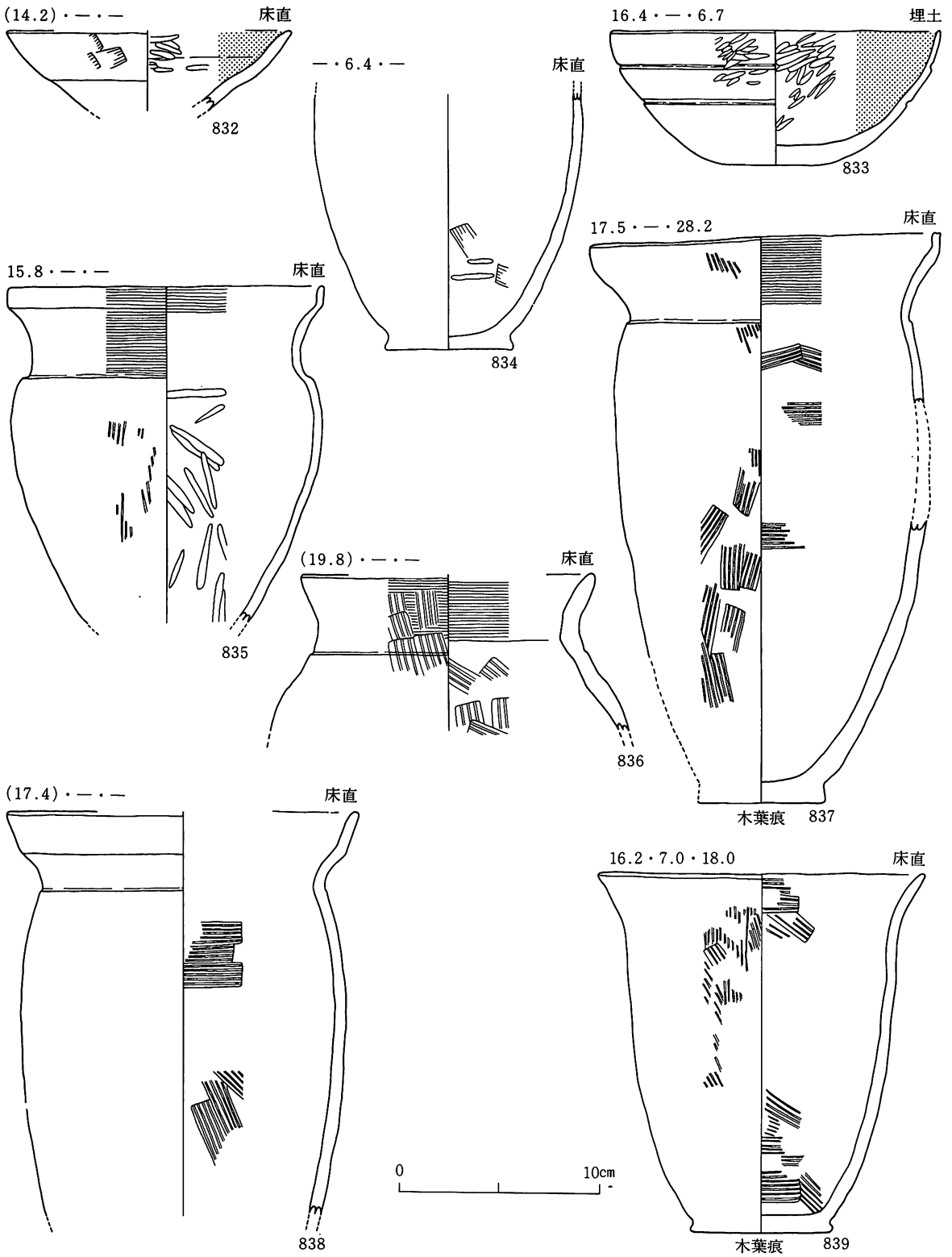
第252図 0-13住居址(遺構一)



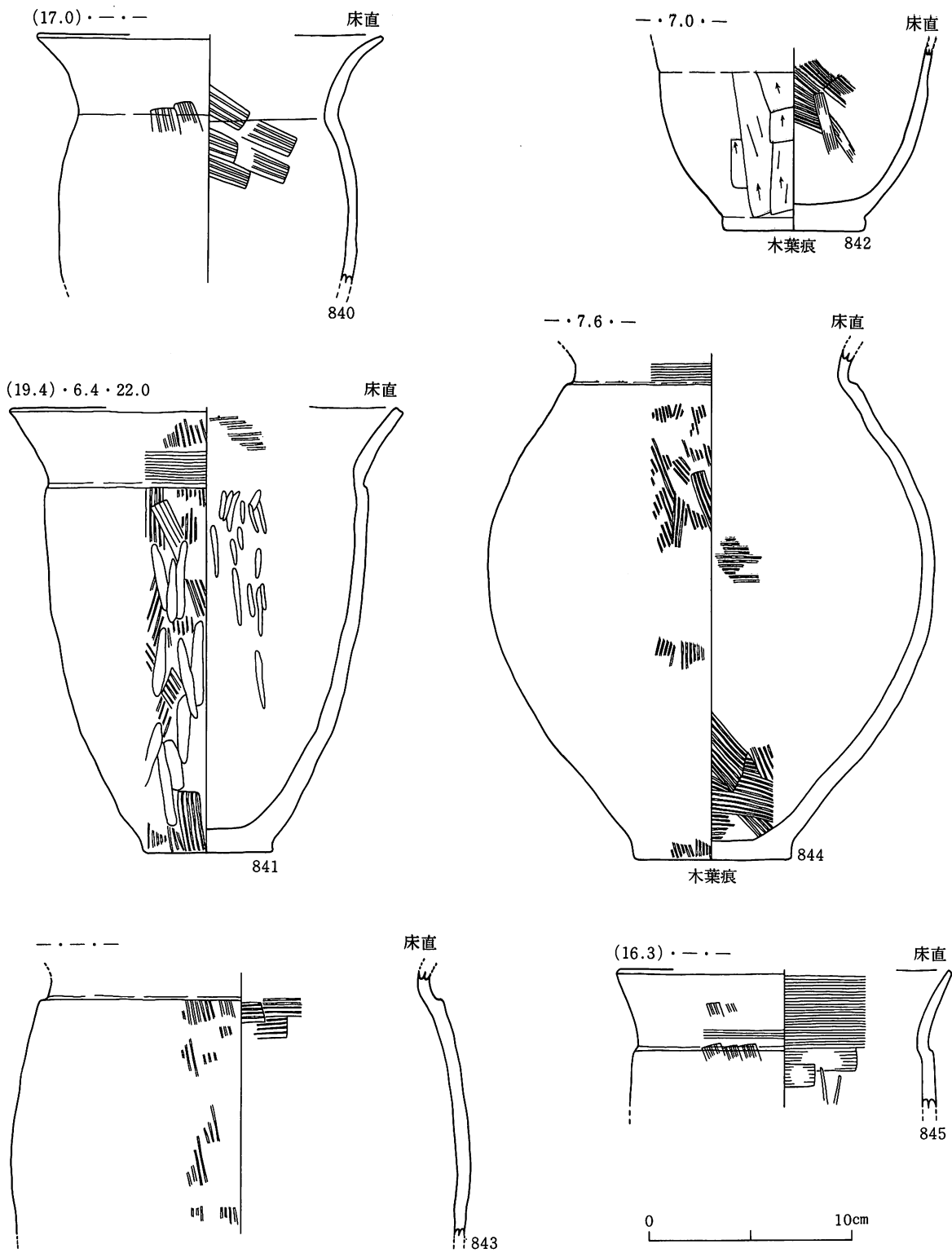
0-13住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色シルト質土 よく締まっている、小礫、砂質土が斑状に混入。
2. 7.5YR2/2黒褐色シルト質土 よく締まっている、甕の口縁部片混入。
3. 7.5YR3/2黒褐色シルト質土 少し軟らかい、粘性ややあり、木炭片混入。
4. 7.5YR2/2黒褐色砂質シルト よく締まっている。
5. 7.5YR3/4暗褐色砂質シルト よく締まっている。
6. 7.5YR3/2黒褐色粘土質シルト 非常に軟らかい、粘性あり。
7. 7.5YR3/2黒褐色砂質シルト よく締まっている、粘性ややあり、暗色シルトが混入。
8. 7.5YR3/3暗褐色粘土質シルト 少し軟らかい、明暗の斑あり。
9. 7.5YR4/6褐色 よく締まっている、微粒の砂混入。
10. 7.5YR2/3極暗褐色シルト質土 よく締まっている、少し粘性あり。
11. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト 軟らかい、木炭片、焼土片、小骨片を混入。
12. 7.5YR2/2黒褐色シルト質土 よく締まっている、粘性少しあり、酸化鉄が混入。
13. 7.5YR2/3極暗褐色 灰褐色砂質土ブロックと赤褐色シルトブロックが混入、小砂利混入。
14. 2.5YR4/8赤褐色 焼土
15. 7.5YR3/3暗褐色シルト質土 締まっている、粘性ややあり、焼土粒、木炭粒を混入。

第253図 0-13住居址(遺構-2)

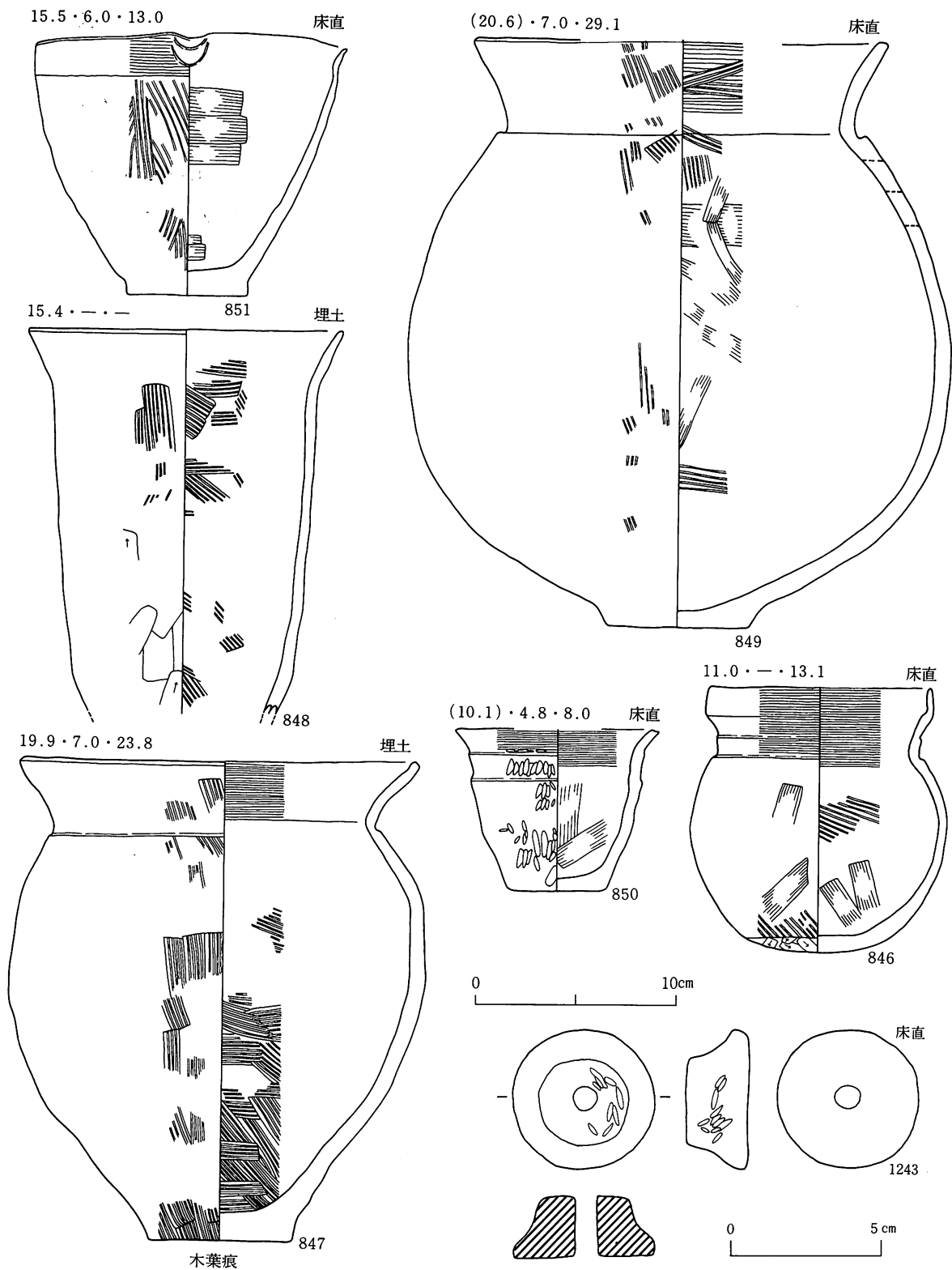


第254図 O-13住居址(遺物-1)



第255図 O-13住居址(遺物-2)





第256図 O-13住居址(遺物-3)

が付され、他のものは平らにナデられている。なお、846の底部形態は丸底風である。調整技法はいずれも大同少異で、口縁部は一部にハケメを残しているものもあるが、内外面ともヨコナデが主である。体部は、外面はハケメ後スリケシやミガキ・ナデで、内面もほぼ同様である。

**鉢形土器 (851)** ロクロ未使用成形で、口縁部に片口が付されている。体部は軽く内弯しながら外傾し、頸部には微かな段が観察され、口縁部は軽く外弯する部分と内弯気味の部分がある。底部周囲に突出がなく、底面は平らにナデられている。調整技法は、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ハケメ後スリケシ、内面はナデである。

**小型土器 (850)** ロクロ未使用成形で、小型の鉢形を呈している。底部よりほぼ直線的に外傾する体部をもち、頸部には二ヶ所に段が付され、直線的に外反する口縁部をもっている。底部周囲に突出はなく、底面は平らにナデられている。調整技法は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面ミガキ、内面ナデである。

#### その他

**土製品 (1243)** 土製の紡錘車である。截頭円錐形に近い形態を示し、中心部に1ヶの貫通孔をもつ。(遠藤勝博)

### 87) O-15住居址

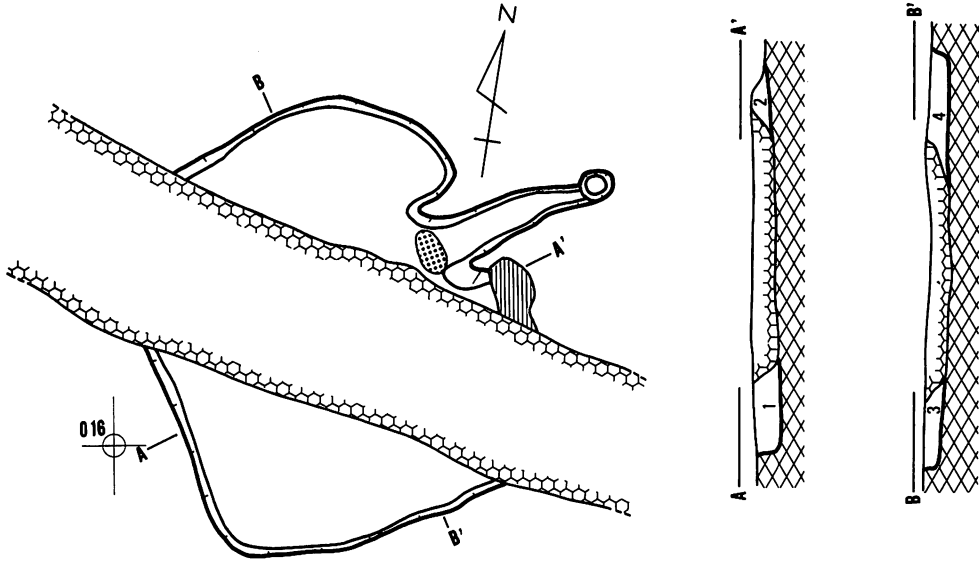
[遺構](第257図、P L 46B)

本住居址はO-15溝跡と重複しているが、新旧関係は本住居址の方が古い。O-15溝跡との重複している状態は、本住居址の西隅部より東隅部にかけての部分で削削している。従って、この部分の状況は不明である。

規模は北東-南西が約2.9m、北西-南東が約3.4mで、壁高は0.15m~0.2m位を測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は主軸に対して横長の胴張隅丸長方形を呈し、主軸は北東-南西方向にあり磁北に対して約57度東に偏している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色を呈するシルトで構成され、混入物や色調によって4層に細分されている。カマド右側には焼土や炭化物の混入が多い。全体的に粘性が強く、褐色のシルト粒が混入する。床は地山の褐色を呈するシルトで構築されているが、北隅部と南隅部付近の床面には貼床されていたらしい形跡が観察されたが、明確に検出できなかった。床面はほぼ平坦であるが、壁に寄るほど若干高くなる傾向がみられ、中央部分が若干浅く窪んでいる。壁溝は検出されていない。

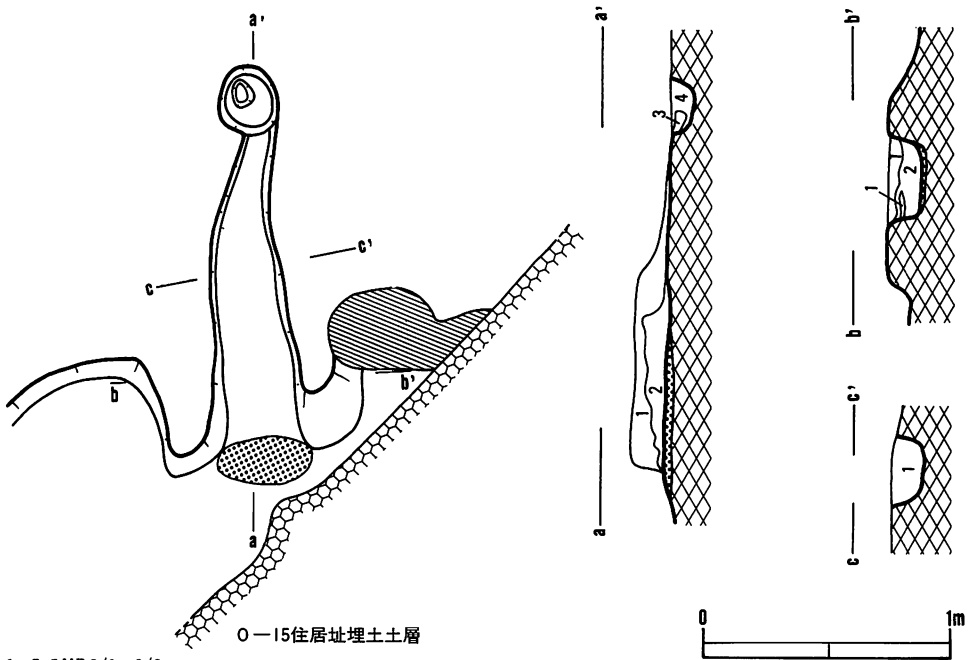
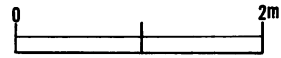
本住居址では土坑は検出されていない。従って、柱穴や貯蔵穴は不明である。

カマドは北東壁で検出され、壁中央より0.25mほど北に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は地山よりの削り出しによって構築され、シルトによる貼り付けは観察されない。また、他の住居址でみら



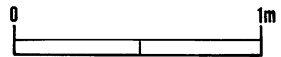
0-15住居址カマド埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色 粘土質シルト
2. 7.5YR4/4~3/4 褐色~暗褐色 粘土質シルト 微粒の砂が少量混入、沼鉄若干混入。
3. 7.5YR4/3~4/4 褐色 粘土質シルト
4. 7.5YR2/1~4/4 黒色~褐色 粘土質シルト 明色、暗色が斑状になっている。



0-15住居址埋土土層

1. 7.5YR2/1~2/2 黒色~黒褐色 粘土質シルト 明色の粘土質シルトが斑状に混入。
2. 7.5YR2/2黒褐色 粘土質シルト 焼土片、木炭片混入。
3. 7.5YR3/3~3/4 暗褐色 明色の砂質シルトに暗色粘土質シルトが斑状に少量混入。
4. 7.5YR2/2黒褐色 明色の破質シルトに暗色粘土質シルトが斑状に少量混入。
5. 7.5YR2/1~2/2 黒~黒褐色 暗色の粘土質シルトに明色シルトが縞状に混入。
6. 7.5YR3/3~3/4 暗褐色



第257図 0-15住居址(遺構)

れる様な焚口部への礫の埋め込みはない。燃焼部は掘り窪めもなく、床面と同位面で奥壁へ移行し、煙道部底面ともほぼ同位面で接続している。燃焼部の焼土は焚口部に若干その痕跡を残しているのみで、強い焼成は受けていない。焚口部付近の床面には焼骨の小破片が点在していたが、原形を保っているものはない。カマド埋設土器や支脚は検出されていない。煙道部底面には起伏もなくほぼ平坦で、煙出部に土坑状の掘り込みがある。

#### 〔遺物〕

埋土内・床面直上ともに出土が少なく、僅か7ヶの破片が出土したのみである。出土した遺物も小破片だけであるため、図化されたものはない。種類は土師器のみで、器種には環形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**環形土器** 破片が1ヶ出土している。ロクロ未使用成形で、内面が黒色処理されている。その他の詳細は不明である。

**甕形土器** 体部の破片のみである。ロクロ未使用成形で、外面ハケメ後スリケシ、内面ハケメの調整痕をもっている。 (高橋与右エ門)

### 88) P-11住居址

〔遺構〕(第258・259図、P L 47 B)

本住居址は重複遺構もなく、単独で検出された。

規模は北西-南東・北東-南西ともに約4.0mで壁高は0.20mを測り、壁は床面に対して110度の角度を示している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は北西-南東方向にあり磁北に対して20度西に偏している。埋土は明褐色や黒褐色を呈するシルトで構成され、色調や混入物によって3層に細分されている。埋土最下層には粒径10cm~15cmの礫が混入し、それ以外に炭化物の混入も多い。炭化物は床面直上でも多く検出され、それには木材や萱材が混在していた。炭化材の大きさは、長さ10cm~60cm・巾5cm~20cmであるが、長さ30cm~40cm・巾10cm位のものが多い。残存状況から上家構造を想定させる様な配列状態ではなく、散乱していた。また、西壁沿いの床面には焼成を受けた痕跡が観察された。以上の様な状況から本住居址は焼失住居址である可能性が強い。床は一部で段丘礫層の上面が露出しているが、ほとんどは地山の褐色を呈するシルトで構築され、貼床せずにそのまま床面としている。床面は若干起伏がみられるが、総じてほぼ平坦である。壁溝は検出されていない。

本住居址では、P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>の土坑が検出されている。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の規模は径約0.25m前後で深さは0.40m~0.65m位である。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は径0.15m前後で深さは0.05m位である。平面形はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は円形を呈し、P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は楕円形を呈する。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の埋土は暗褐色や黒褐色を呈する粘土質の

シルトで構成され、色調や混入物によって何層かに細分されている。P<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>の埋土は黒褐色を呈するシルトの単層である。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の性格は、本住居地の対角線上に位置していることや、規模がほぼ同一であること等から、本住居地の柱穴を構成しているであろう。P<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>は浅い窪みである。

カマドは北壁で検出され、壁中央より約0.2m東に寄って位置している。検出された部分は袖部・燃烧部・煙道部・煙出部であり、天井部は検出されていない。袖部は地山からの削り出しによって構築されている。焚口付近には粒径10cm×30cmの礫が各1ヶ縦位で約 $\frac{1}{2}$ ほど埋め込まれている。また、焚口部床面にも粒径10cm×40cmの礫が1ヶ、左右両袖部の間を塞ぐ様な状態で横転していた。このことから、焚口部は3ヶの細長い礫で構成され、「□」状に組まれていたものと推定される。燃烧部は床面より若干掘り窪められ、中央部付近より奥壁に向かって次第に高くなって奥壁に続き、煙道部とは段差がない。燃烧部焼土の分布範囲は焚口部付近より中央部に及んでいる。カマド埋設土器や支脚は検出されていない。また、燃烧部や焚口部付近の埋土最下層や床面には多くの焼骨が観察されたが、原形を残しているものはなかった。煙道部底面には起伏もなくほぼ平坦である。煙出部に土坑状の掘り込みはない。

〔遺構〕(第260図、P L145 B・146 A)

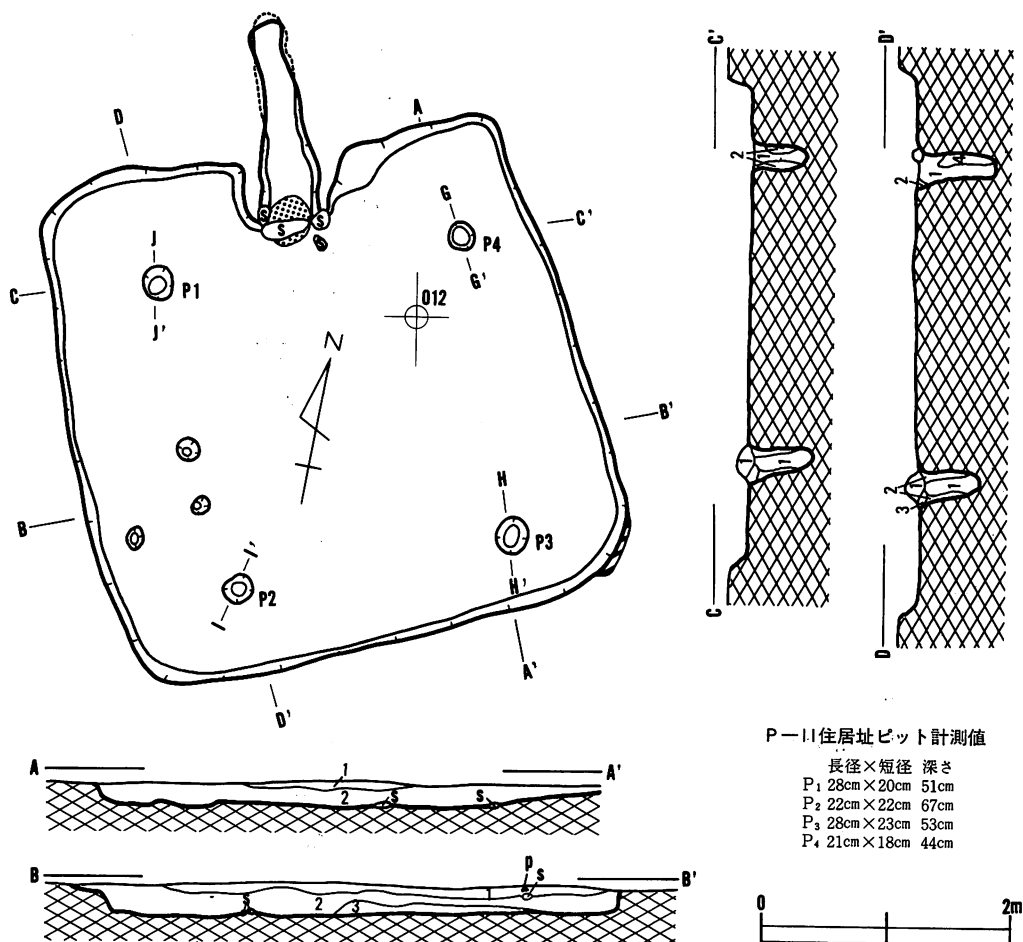
床面直上や埋土内から出土しているが、埋土内のものは量も少なく、しかも、小破片が多く図化されたものは少ない。床面直上出土のものには完形品も含まれ、特にカマド右側付近での出土が多い。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器・甕形土器・甑形土器・器台形様土器がある。

### 土師器

**坏形土器** 小破片であるので図化されていないが、1ヶ出土している。ロクロ未使用成形で、内面が黒色処理されている。その他は不明である。

**甕形土器**(854～858) いずれもロクロ未使用成形で、体部が若干膨らむもの(857)と比較的ホソリしたもの(858)がある。大きさでは大型(854・856～858)と小型(853・855)がある。底部より外傾する体部は中位～上位に最大径をもち、頸部で窄む。頸部にはいずれも段をもち、口縁部は直線的に外反するもの(855・856・858)と外弯するもの(857)・内弯するもの(854)がある。なお、854・858の頸部には2ヶ所に段をもっている。底部周囲は突出するもの(857)としないもの(855)があり、855・857の底面には木葉痕が付されている。調整技法は、口縁部が外面ハケメ後ヨコナデやヨコナデで、内面はヨコナデやハケメである。体部は外面ハケメ後スリケシで、内面もほぼ同様である。

**甑形土器**(859) ロクロ未使用成形で、甕形土器の底部を取り除いた様な形態の無底型のものである。体部上位～口縁部を欠失しているので詳細は不明である。調整技法は外面がハケメ



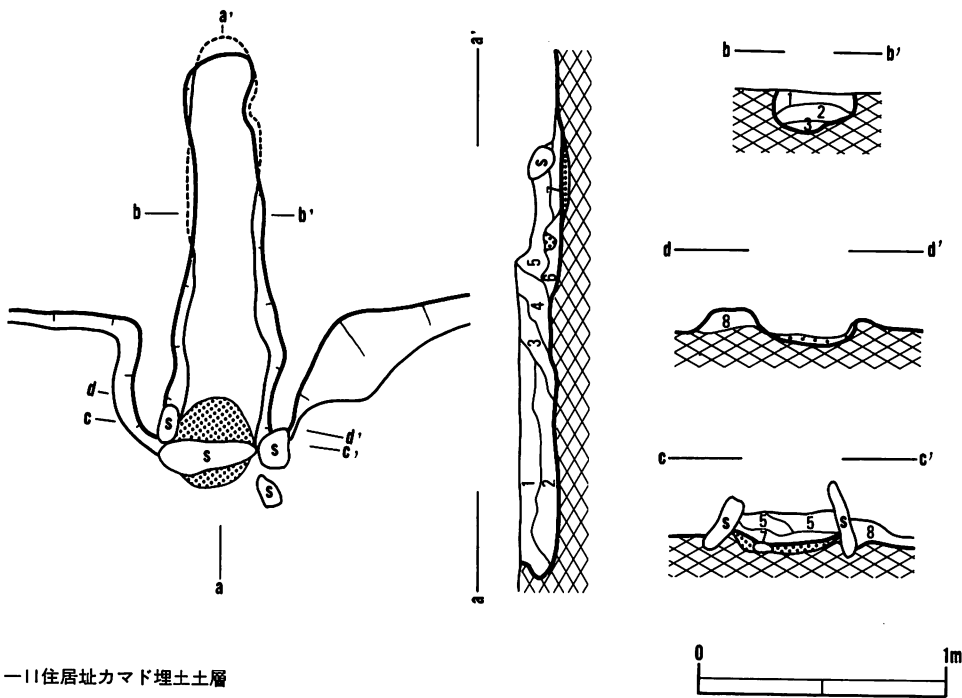
**P-II住居址埋土土層**

1. 7.5YR5/6~4/6 明褐色~褐色 砂質土 小砂利を少量、暗褐シルトを斑状に混入。
2. 7.5YR2/3極暗褐色 シルト質土 よく締まっている、少し粘性あり、木炭粒を若干混入。
3. 7.5YR3/1~3/2黒褐色 シルト質土 軟らかい、粘性あり、木炭粒を多量に混入。

**P-II住居址ピット埋土土層**

1. 7.5YR2/2黒褐色 粘土質シルト 少し締まっている、粘性あり、20cm位の木炭片を少量混入。
2. 7.5YR3/2黒褐色 粘土質シルト 地山のシルト片、小砂利が少量混入。
3. 7.5YR3/3暗褐色 砂質土 締まっている。
4. 7.5YR3/4~4/4 暗褐色~褐色 砂質土 軟らかい、粘性あり、泥と砂の混合層。

第258図 P-II住居址(遺構一I)



P-11住居址カマド埋土土層

- |                    |        |                             |
|--------------------|--------|-----------------------------|
| 1. 7.5YR2/2黒褐色     | 粘土質シルト | 締まっている、粘性あり、焼土粒をわずかに混入。     |
| 2. 7.5YR3/1~3/2黒褐色 | 粘土質シルト | 軟らかい、粘性少しあり、木炭粒、焼土粒を多量に混入。  |
| 3. 7.5YR3/4暗褐色     |        | 締まっている、粘性少しあり、明色と暗色のシルトが混入。 |
| 4. 7.5YR3/3暗褐色     | 粘土質シルト | 軟らかい、粘性少しあり、砂質土の小ブロック混入。    |
| 5. 7.5YR3/4暗褐色     | シルト質土  | 締まっている、粘性少しあり、木炭粒、焼土小片が混入。  |
| 6. 7.5YR4/3褐色      | シルト質土  | 軟らかい、粘性少しあり、焼土粒を多量に混入。      |
| 7. 7.5YR3/3暗褐色     | 粘土質シルト | 軟らかい、粘性少しあり、焼土粒を多量に混入。      |
| 8. 7.5YR2/3極暗褐色    | シルト質土  | 締まっている、粘性少しあり、小石、砂質シルトが混入。  |

第259図 P-11住居址(遺構-2)

後スリケシで、内面は単位が不明であるがミガキである。

**小型土器(853)** ロクロ未使用成形で、小型の甕形を呈している。体部中位~口縁部を欠失しているので詳細は不明であるが、底部より外傾する体部をもち、底面はナデられ中央部が凹んでいる。調整技法は甕形のそれと同様である。

**器台形様土器(852)** ロクロ未使用成形である。破片であるので全体的なことは不明であるが、器台形に近い形態のものらしい。調整技法は甕形土器と同じである。

**須恵器**

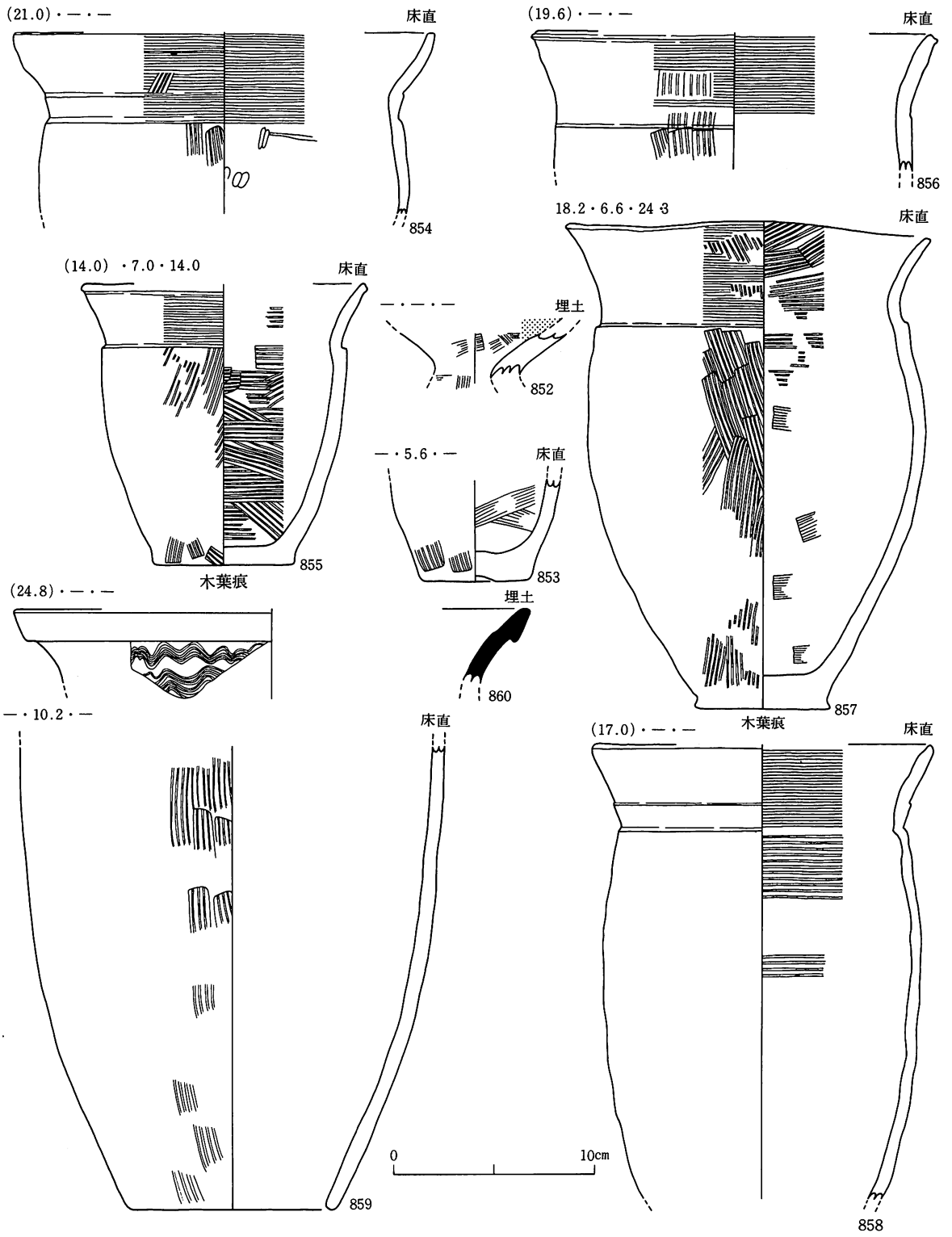
860は大甕の口縁部破片である。端部が折り返えされ複合口縁である。櫛描波状文を付す。

(遠藤勝博)

89) P-13住居址

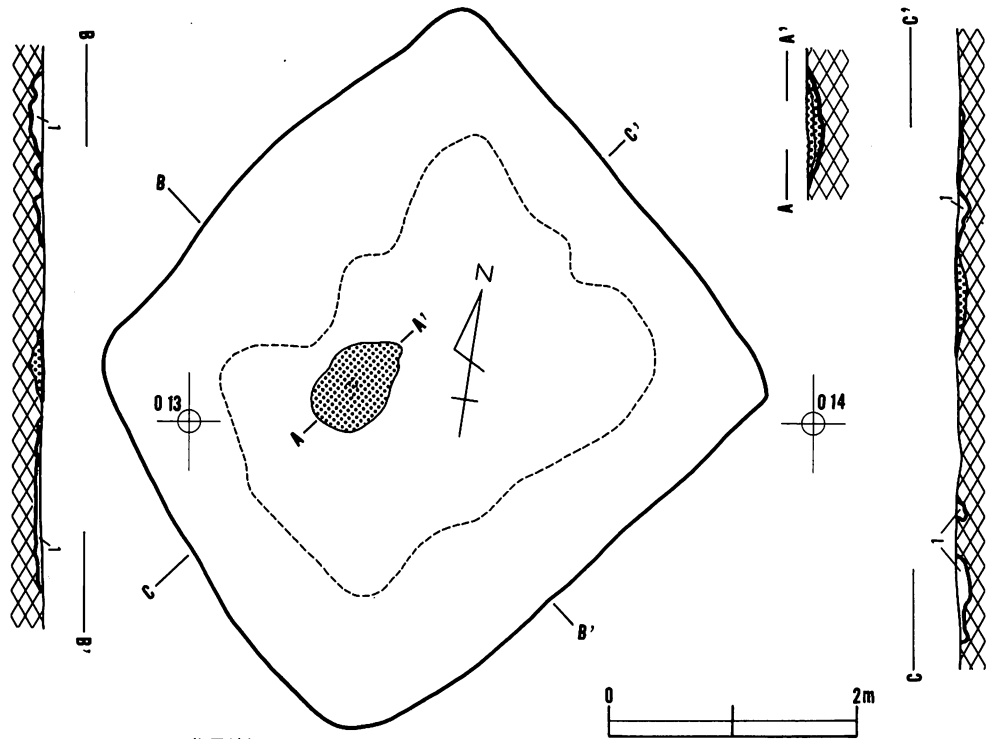
[遺構](第261図)

本住居址は重複遺構もなく単独で検出されているが、壁やカマド等他の関連施設が検出されて住居址としたものではない。粗掘り後の遺構検出の際に、地山面で黒褐色を呈し歪んだ隅丸方形を示す方形周溝状の土層変化部分が検出された。さらに、土層変化範囲の中央やや西寄り



第260図 P-II住居址(遺物)





P-13住居址埋土土層

1. 7.5YR2/2黒褐色 締まっている、粘性少しあり、褐色シルトが斑状に混入。

### 第261図 P-13住居址(遺構)

に焼骨や炭化物の混入した現地性焼土が残存していたことから、この土層変化を示す部分を住居址の掘り方痕跡として断定し、本住居址の存在を認定した。

検出された規模は北東-南西方向で最大4.5m位で最小4.2m、北西-南東方向はほぼ4.0m位である。外周縁より内側に最大1.3m・最小0.7mの巾で溝状に全周し、掘り込みの深さは0.1m位である。主軸方向は不明であるが、北東壁で磁北に対して約50度西に偏している。内周縁の内側は地山の褐色を呈するシルトが露出している。従って、正確な規模・壁・埋土・床面・壁溝等は不明である。

本住居址の範囲内では土坑が検出されていないので、柱穴や貯蔵穴は不明である。

焼土は0.9m×0.5mの分布範囲をもち、層厚は0.03m位である。焼土の検出位置が床面中央やや南東寄りであることから、カマド燃焼部に伴う焼土と考えるには距離的に離れすぎており、炉跡に伴う焼土と考えるのが妥当であろう。

#### 〔遺物〕

掘り方の埋土内より数片の土師器片が出土している。しかし、小破片であるので図化されていない。器種は甕形土器である。

#### 土師器

**甕形土器** ロクロ未使用成形で、体部にハケメ痕を残す。その他は不明である。

## 2 掘立柱建物跡

本遺跡の調査で掘立柱建物跡として登録されたのは4棟である。しかし、それ以外にも柱穴状土坑が多く密集する地点が4ヶ所あり、その中のK-19柱穴状土坑群とO-18柱穴状土坑群には柱列が検出されていることから、他にも掘立柱建物跡が存在する可能性が大きい。また、検出された4棟の掘立柱建物跡の掘り方には円形を呈し小型のものと方形で大型のものがあることから時代的に差があるかも知れないが、ここでは分けていない。調査範囲の西方に位置する遺構から順次記述していく。なお、「掘立柱建物跡」という遺構名は、今後、「建物跡」と省略することにする。

### 1) B-7建物跡

〔遺構〕(第262図、P L 48A)

本建物跡はB-7溝跡と重複して検出された。B-7溝跡との新旧関係は、溝跡が本建物跡の掘り方を削削していることから、本建物跡の方が古い。

本建物跡に関連する掘り方は9ヶ検出され、規模は桁行(2間)全長4.17m・梁行(2間)全長3.19mを測る総柱である。棟方向は磁北に対して7度位西に偏している。桁行・梁行ともに柱位置に若干動きがみられ、直線上に載らない掘り方もみられる。桁行の柱間寸法は④通りと⑤通りの間隔が2.06m、⑤通りと⑥通りの間隔が2.11mである。梁行の柱間寸法は①通りと②通りの間隔1.56m、②通りと③通りの間隔は1.63mである。以上のことから、桁行2.08mの等間、梁行は1.59mの等間で建設された建物跡と推定される。

掘り方の規模は径0.4m~0.5m位で深さは0.5m~0.6m位を測り、平面形は隅丸方形を呈している。規模・深さ・平面形ともに、それぞれによって若干差がみられる。埋土は黒色や褐色を呈するシルトで構成されており、礫等の混入はない。堆積状況には斉一性もなく乱雑に埋め戻され、版築状を呈する掘り方はない。すべての掘り方で柱痕跡が観察され、それによれば径15cm位の円柱と推定され、いずれも掘り方底面に達している。

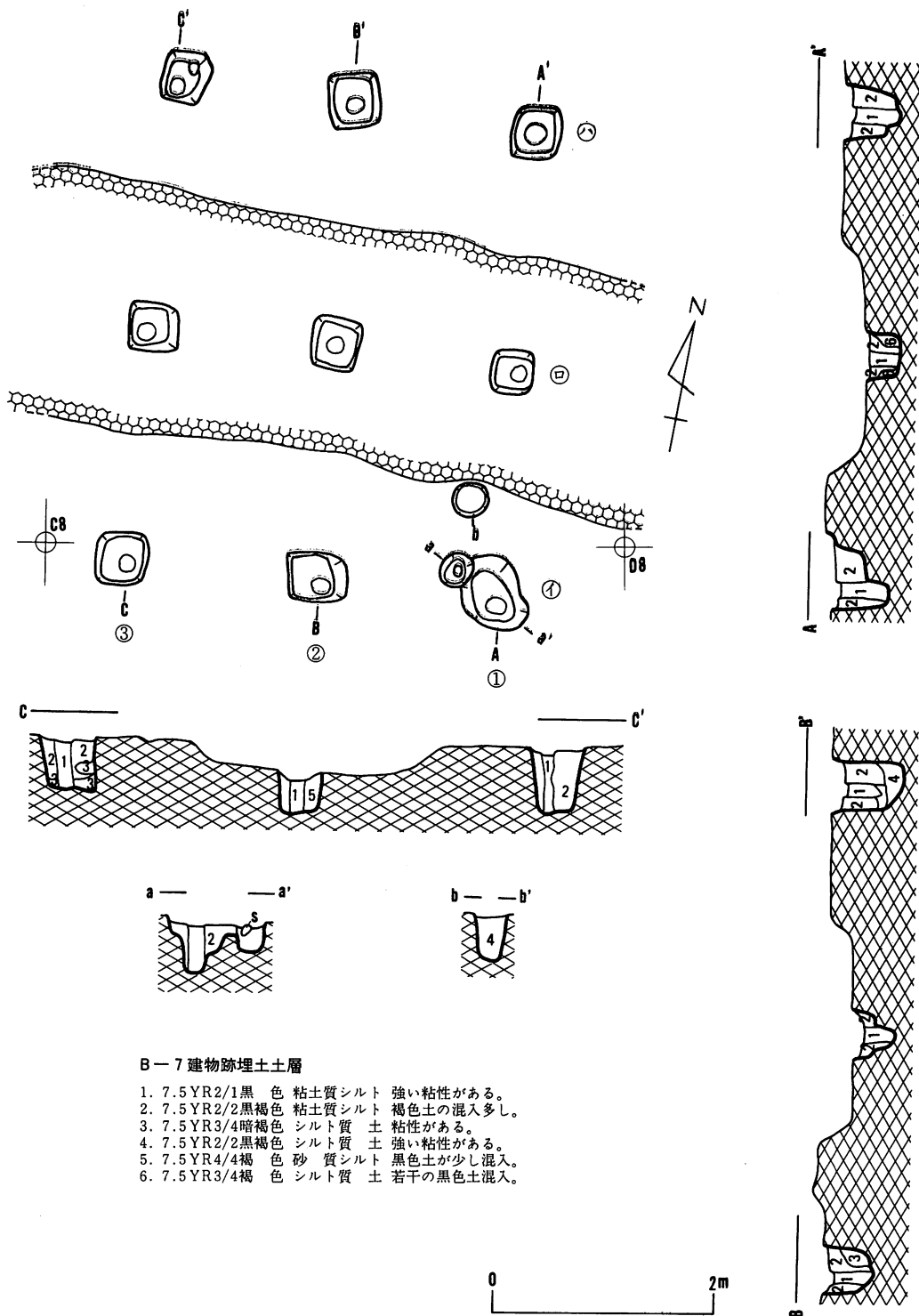
桁行・梁行の全長を尺貫法に換算すると、桁行14尺前後・梁行10尺8寸前後と推定される。

〔遺物〕(第266図A、P L 146B)

本建物跡に伴う遺物は、掘り方埋土より出土した土師器や須恵器があるが、いずれも小破片が多く、図化されたものは1ヶのみである。器種では坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器** ロクロ使用成形のものであるが、小破片のため図化されていない。内面が黒色処理されているが、他の詳細については不明である。



第262図 B-7 建物跡(遺構)

**甕形土器** 体部の破片であるので詳細は不明である。ロクロ使用成形のものでヘラケズリが入っている。

#### 須恵器

**甕形土器(869)** 底部破片であるので、全体的なことは不明である。外面にヘラケズリ、内面にナデの調整痕をもっている。底部切り離し技法はナデによって不明である。

(高橋与右エ門)

## 2) C-6 建物跡

### 〔遺 構〕(第263図)

本建物跡はC-6住居址と重複して検出された。C-6住居址との新旧関係は、C-6住居址の埋土内に本建物跡の掘り方が掘り込まれていることから、本建物跡の方が新しい。

本建物跡に関連する掘り方は8ヶ検出され、規模は桁行(2間)全長西側4.7m・東側5.3m、梁行(2間)は北側4.1m・南側3.9mである。棟方向は磁北に対して8度西に偏している。桁行・梁行ともに2間に分割されているが、各柱間とも寸法が違い統一されていない。また、桁行の間柱は直線上よりズレている。桁行の間尺は西側北より2.4m+2.3mで東側は北より2.7m+2.6mを測る。梁行は北側西より2.2m+1.9mで南側は西より1.9m+2.0mを測る。

掘り方の規模は径0.3m位を測る場合が多く、深さはそれぞれによって差がみられるものの、梁行を構成する掘り方は深く、桁行間柱(P<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>)は浅い。掘り方の平面形は隅丸方形もしくは円形を呈している。埋土は暗褐色を呈するシルトと黒褐色を呈するシルトの混合土で構成され、版築状を呈するものはない。礫等の混入もなく、良く締まって固い。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>を除く他の掘り方では柱痕跡が確認され、それによれば、柱は径10cm位の円形を呈し、底面に達している。柱痕跡部分の埋土は黒色の粘土質シルトである。

桁行・梁行の全長を尺貫法に換算すると、桁行西側16尺・東側18尺、梁行は北側14尺・南側13尺2寸位と推定される。

### 〔遺 物〕

本建物跡に伴う遺物は全く出土していない。

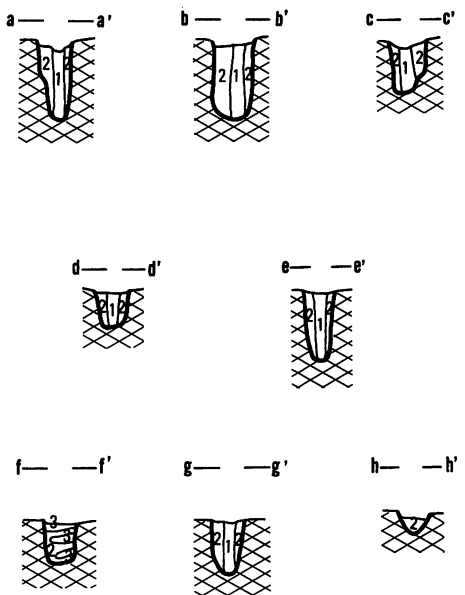
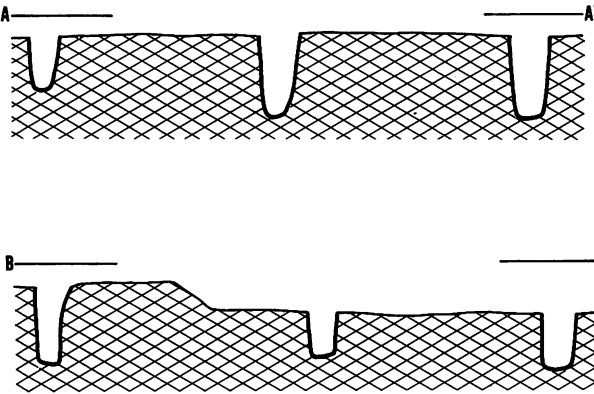
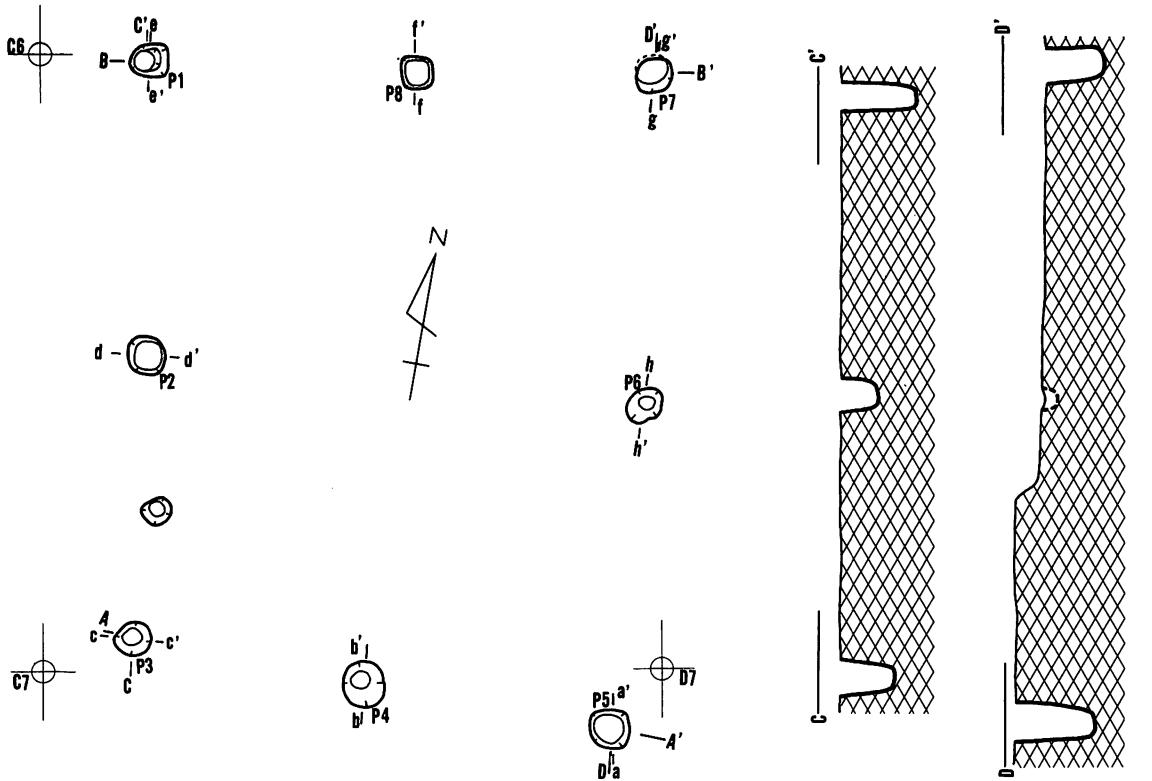
(高橋与右エ門)

## 3) G-6 建物跡

### 〔遺 構〕(第264図、P L 48 B)

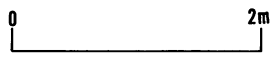
本建物跡はB-7溝跡・F-5住居址・G-6住居址と重複して検出された。重複遺構との新旧関係は、B-7溝跡より古く、F-5住居址とG-6住居址よりは新しい。

本建物跡に関連する掘り方は9ヶ検出され、規模は桁行北側(2間)5.89m・南側(3間)

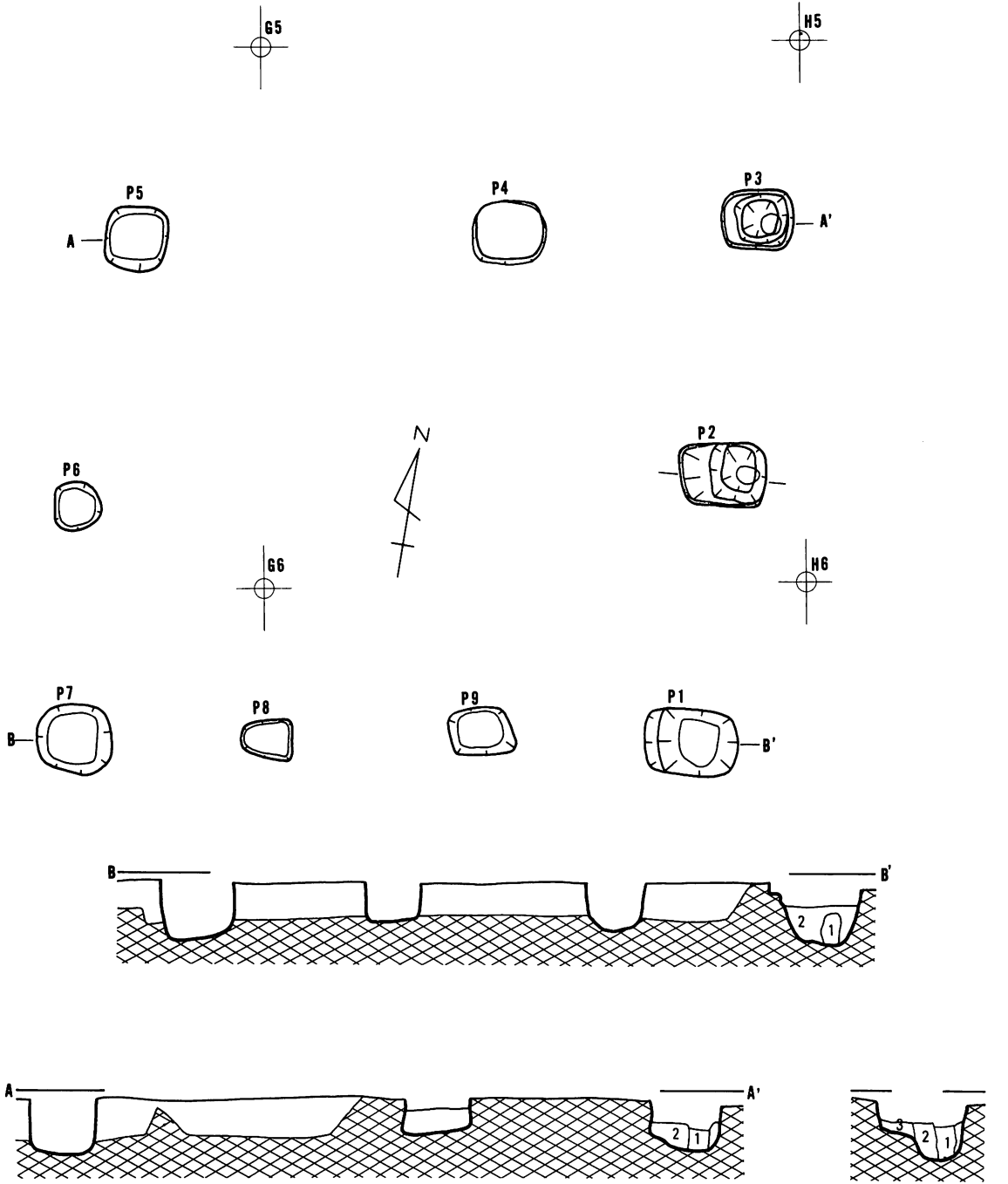


C-6 建物跡埋土土層

1. 7.5YR2/1 黒色 粘土質シルト 軟かい、柱痕跡。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 炭化物の混入あり、縮って固い。
3. 7.5YR3/4 褐色 砂質シルト 縮って固い。



第263図 C-6 建物跡(遺構)



G-6 建物跡埋土土層

1. 7.5 YR2/1 黒色 粘土質シルト 軟かい、微量の炭化物混入、柱痕跡。
2. 7.5 YR2/2 黒褐色 固く締っている、掘り方埋土。
3. 7.5 YR3/3 暗褐色 地山シルト



第264図 G-6 建物跡

5.79m、梁行東側（2間）4.84m・西側（2間）4.71mを測り、全体の遺構平面が歪んだ平行四辺形を呈し棟方向は磁北に対して約100度西に偏している。個々の柱間寸法についてみると、桁行北側は東より2.42m+3.45m・南側が東より2.03m+1.99m+1.77mで、梁行の東側は北より2.34m+2.50mで西側が北より2.56m+2.15mと、それぞれの柱間によって寸法が違う。しかし、桁行の北側柱列と南側柱列はほぼ平行しており、梁行と直交するものとして計測すると、東側が全長で4.76m・西側のそれが4.62mである。

掘り方の規模もそれぞれによって差があり、特にP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は遺構検出時にその存在が確認されていたが、他のP<sub>4</sub>～P<sub>9</sub>は重複遺構の範囲内で検出され、微かにその痕跡を残しているにすぎない掘り方もあった。その中でP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>は正確な規模が計測されているが、P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>は計測値に自信がない。従って、ここではP<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>は除外しておく。計測値の正確な掘り方の規模は0.55m×0.75mの範囲で、深さを底面の高さでみるとP<sub>4</sub>を除くとほぼ同じである。平面形は個々で若干差があるものの、ほぼ隅丸方形を呈している。埋土はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>だけ記録されたが、それらは黒色や黒褐色・暗褐色等を呈するシルトで構成され、堆積状況に版築を示すものはない。その中で1層としたのは柱痕跡である。

桁行・梁行の全長を尺貫法に換算すると桁行北側20尺位・南側19尺5寸位となり、梁行は歪んだ状態では東側16尺3寸・西側15尺8寸位となる。しかし、梁行を桁行に直交させると、東側16尺位・西側15尺5寸位となり、ほぼ完数尺となる。

〔遺物〕(第266図B、P L146C)

掘り方埋土内より出土している。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器**(870) ロクロ使用成形で、内面が黒色処理され、底部切り離し技法が回転糸切り無調整である。体部は内弯気味に外傾し、上端部は軽く外反気味を呈している。

**甕形土器** 体部の小破片であるので図化されたものはない。体部がヘラケズリされるらしい。

#### 須恵器

**坏形土器**(871・872) ロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。底部破片だけが出土しているので全体的なことは不明である。

**甕形土器**(873・1135～1138) 873は体部下位～底部若干を残存する破片である。外面が平行タタキ目後ヘラケズリで、内面はナデである。1135～1138は大甕の体部破片であるが、いずれも外面に平行タタキ目をもつ。内面は、1135がナデ、1136は青海波文、1137は同心円文、1138は凸面の当て道具痕をそれぞれもつ。

(高橋与右エ門)

#### 4) O-18建物跡

〔遺構〕(第265図、P L 49A)

本建物跡はO-18溝跡と重複して検出されたが、新旧関係は本建物跡の掘り方が、溝跡の埋土の中に掘られていることから、本建物跡の方が新しい。

本建物跡に関連する掘り方は6ヶ検出され、規模は桁行(2間)全長4.08m、梁行(1間)4.13mを測る。棟方向は磁北に対して104度東に偏している。桁行は2間となっているが、間柱が直線上に載らず若干外側にズレている。従って、間尺は㊶通りと㊷通りはほぼ等しいが、㊸通りの間尺が0.18mほど広がっている。また、桁間の相対する間尺は等しい間隔であることから等間と考えられるが、㊶～㊸の間尺と㊹～㊷の間尺では0.18m位の差があり、㊹～㊷の間尺が広い。

掘り方の規模は径0.2m～0.3mを測り、深さは0.25m～0.45mと差があり、東に寄るほど底面の高さが低くなる傾向がある。平面形は円形もしくは楕円形を呈している。埋土は粘土質シルトで構成され、色調は褐色や黒色を呈している。版築状の堆積状況を示す掘り方はなく、乱雑な堆積状況を示しており、埋土内に礫が混入しているのが1例みられた。全ての掘り方で柱痕跡が観察され、それによれば径10cm位の円柱と推定され、全て底面に達している。

桁行・梁行の全長を尺貫法に換算すると、桁行・梁行ともに13尺5寸前後と推定される。

〔遺物〕

埋土内より2ヶの破片が出土している。種類は土師器・須恵器があり、器種では環形土器と甕形土器がある。

**土師器**

**環形土器** 小破片であるので図化されていないが、ロクロ使用成形で、内面が黒色処理されている。その他のことは不明である。

**須恵器**

**甕形土器** 体部破片が1ヶ出土している。拓本が掲載されていないが、外面平行タタキ目で内面にナデ痕をもつ。(高橋与右エ門)

#### 5) B-2区付近柱穴状土坑群

〔遺構〕(第267図)

この付近には19ヶの柱穴状土坑が密集して検出されている。これらの土坑はA-1住居址やB-2住居址・B-2溝跡等と重複し、いずれの場合も重複遺構の埋土の中に掘り込まれている。

規模は、径0.2m前後のものが最も多く11ヶを数え、その他0.3m位が6ヶ、径0.1mと径0.4



m位のものが各1ケの比率である。深さを底面レベルで比較すると、標高53.7m～53.4m位の範囲である。平面形は円形や楕円形である。埋土は暗褐色・黒褐色・黒色等を呈する粘土質シルトで構成されているが、それぞれによって差があり、中には複数に細分されている場合もある。なお、19ケの中で12ケについては柱痕跡が確認されている。これらの位置関係をみると、規則的配列関係をおもわせる様な状態も観察されるが、明確に把握されていない。

〔遺物〕

この付近の柱穴状土坑の埋土内よりは全く出土していない。(高橋与右エ門)

## 6) D-4区付近柱穴状土坑群

〔遺構〕(第268図)

D-4住居址付近では26ケの柱穴状の土坑が検出されている。これらの土坑はD-4住居址と重複しているが、すべてD-4住居址の埋土内に掘り込んでおり、深いものではD-4住居址の床面に達している。

規模はそれぞれによって差があるが、径0.2m～0.3mを測るものが12ケと最も多く、他は0.3m-3ケ・0.1m-1ケ・0.5m-1ケである。深さは底面の高さでみると標高53.3m～53.9mまでみられるが、集中する部分がなくそれぞれに分散している。平面形は円形や楕円形のもが主体であるが、一部に方形気味のものもみられる。埋土は黒色・暗褐色・黒褐色等の粘土質シルトで構成され、複数に細分されているものもある。なお、この中の3基では柱痕跡が確認されている。

これらの土坑の位置関係をみると規則的な配列状態を見出すことができない。

〔遺物〕

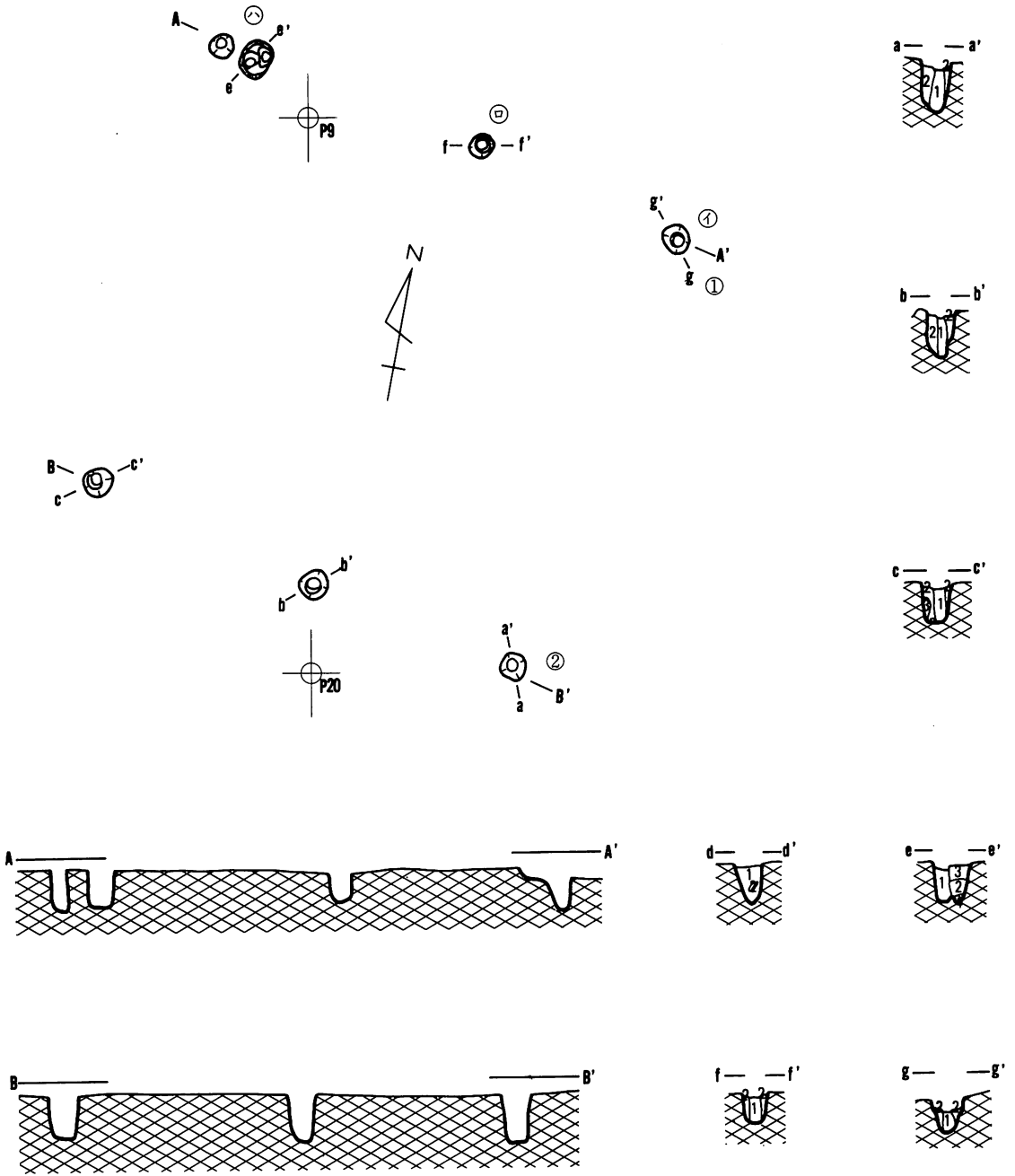
これらの土坑よりは遺物が出土していない。(高橋与右エ門)

## 7) K-19区付近柱穴状土坑群

〔遺構〕(第269図、P L 49 B)

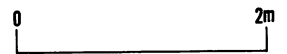
この付近では東西に長く分布する状態で40ケの柱穴状土坑が検出されている。これらの土坑は他の遺構と重複することもなく、散在している。

規模はそれぞれによって一様ではないが、径0.2m～0.3m位の土坑が多く、深さもそれぞれによって差がある。埋土はほとんど黒褐色の粘土質シルトで構成されている場合が多い。平面形は、大半が円形や楕円形を呈しているが、中には方形を呈するものもみられる。これらの中にはP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を結ぶ柱列と、P<sub>5</sub>～P<sub>8</sub>を結ぶ2条の柱列が含まれている。この2条の柱列はお互いに相対し平行しており、磁北に対して約82度西に偏している。柱列は全長6.5mが3間に区



O-18建物跡埋土土層

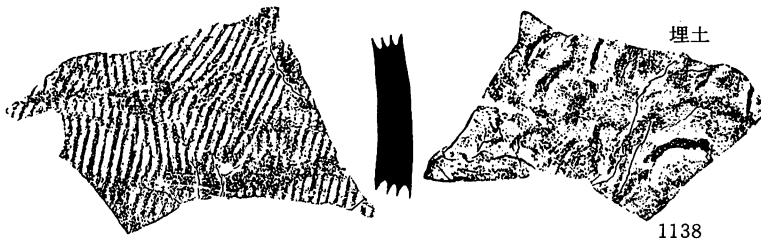
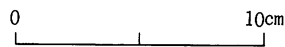
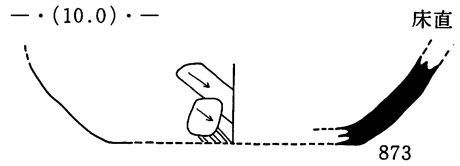
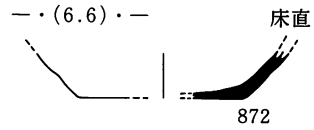
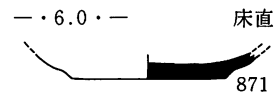
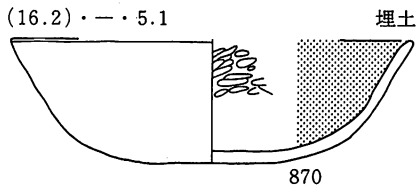
1. 10 YR2/1 黒色粘土質 や、硬め、締る。
2. 10 YR2/1 黒色粘土質 " " 粘性大、砂混り。
3. 10 YR3/3~4/4 暗褐色褐色シルト質土 硬い、粘性中。
4. 10 YR4/4~4/6 暗褐色褐色シルト質土 軟かく締る、粘性大、砂混り。



第265図 O-18建物跡(遺構)

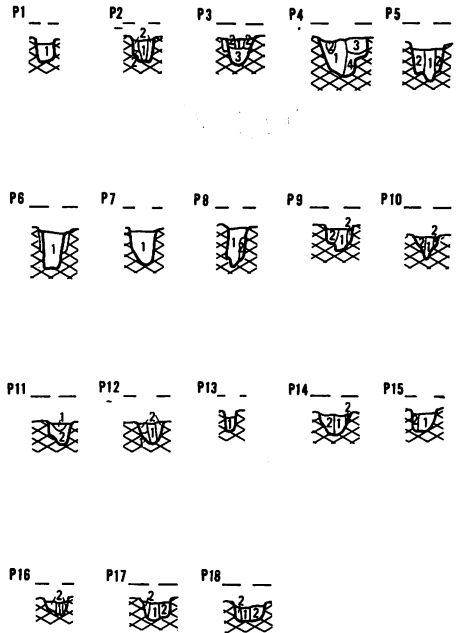
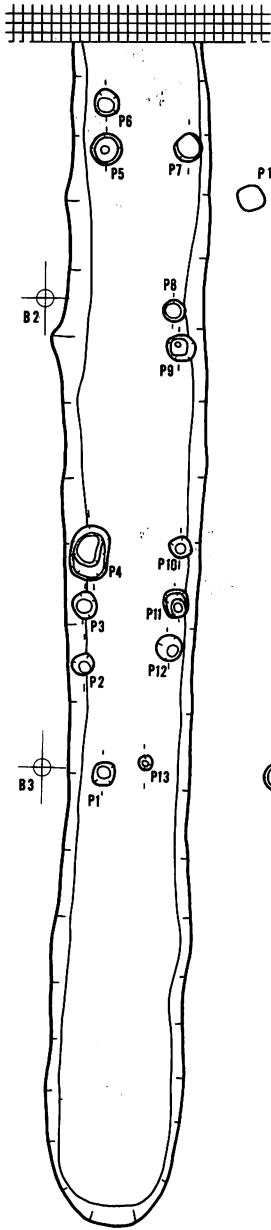


A. B-7 建物跡



B. G-6 建物跡

第266図 B-7 建物跡・G-6 建物跡(遺物)



**B-2 区付近柱穴状土坑群**

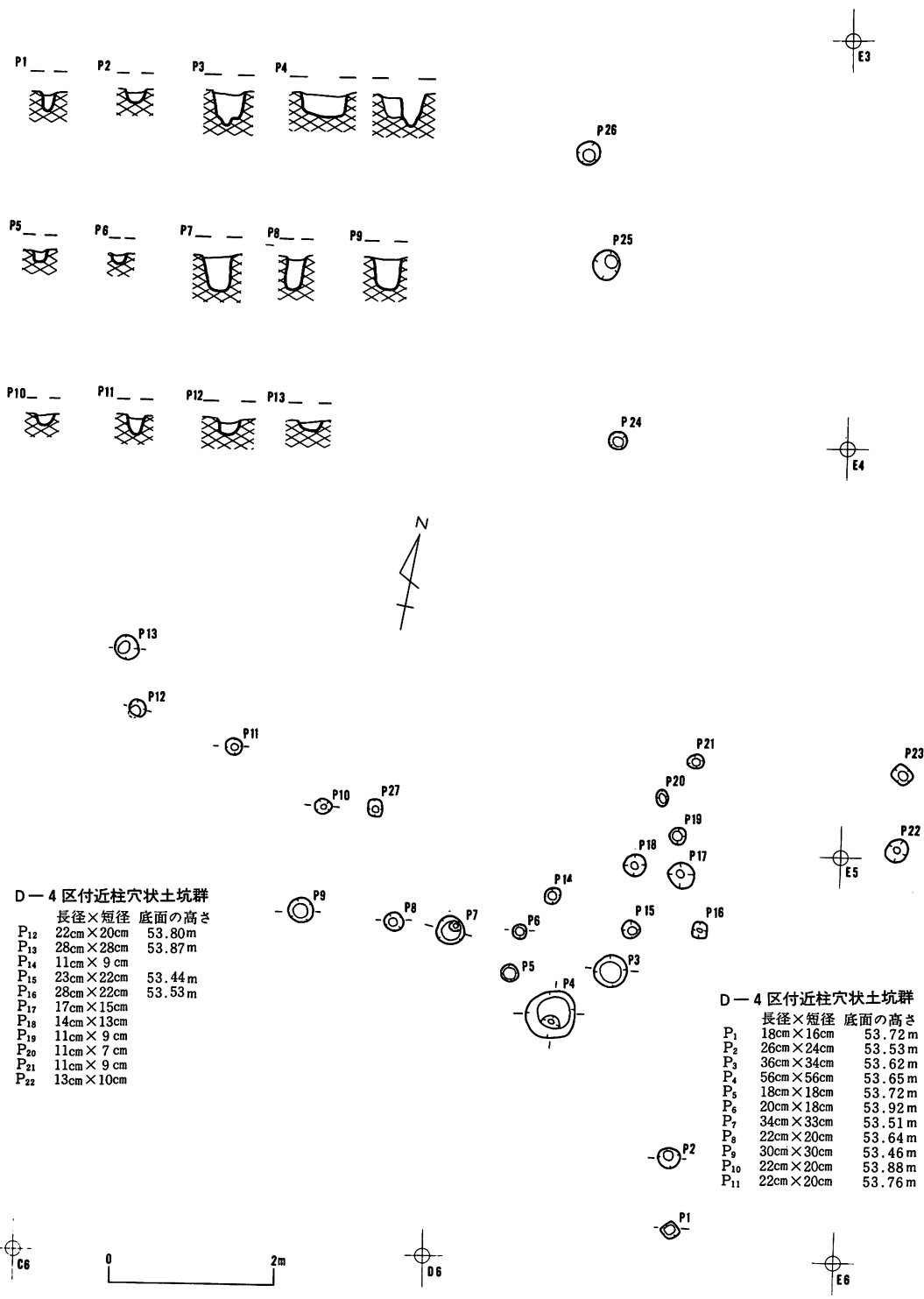
	長径×短径	底面の高さ
P <sub>1</sub>	22cm×22cm	53.69m
P <sub>2</sub>	22cm×24cm	53.71m
P <sub>3</sub>	28cm×26cm	53.69m
P <sub>4</sub>	56cm×40cm	53.58m
P <sub>5</sub>	33cm×32cm	53.52m
P <sub>6</sub>	26cm×26cm	53.45m
P <sub>7</sub>	30cm×28cm	53.42m
P <sub>8</sub>	22cm×20cm	53.49m
P <sub>9</sub>	30cm×28cm	53.64m
P <sub>10</sub>	22cm×22cm	53.55m
P <sub>11</sub>	28cm×24cm	53.61m

**B-2 区付近柱穴状土坑群**

	長径×短径	底面の高さ
P <sub>12</sub>	26cm×18cm	53.63m
P <sub>13</sub>	14cm×14cm	53.74m
P <sub>14</sub>	36cm×30cm	53.72m
P <sub>15</sub>	28cm×25cm	53.75m
P <sub>16</sub>	28cm×28cm	53.77m
P <sub>17</sub>	34cm×34cm	53.74m
P <sub>18</sub>	36cm×33cm	53.74m



第267図 B-2 区付近柱穴状土坑群



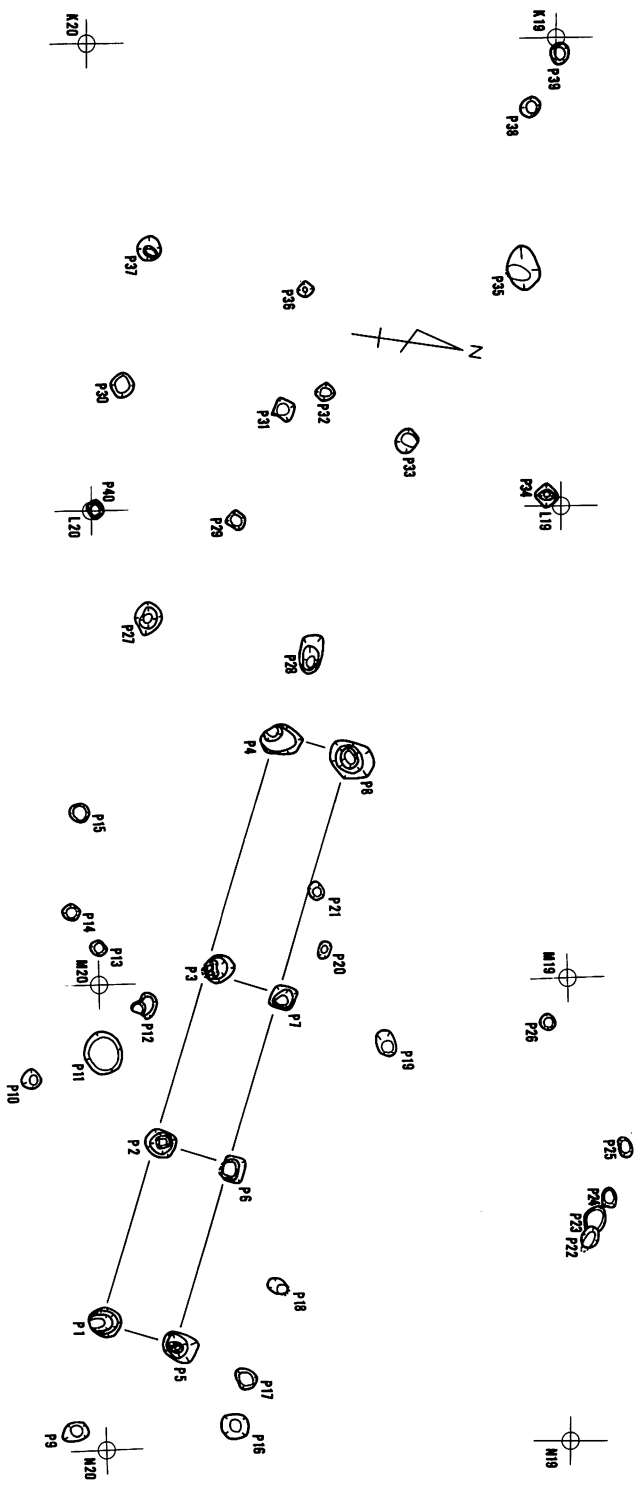
D-4 区付近柱穴状土坑群

	長径×短径	底面の高さ
P12	22cm×20cm	53.80m
P13	28cm×28cm	53.87m
P14	11cm×9cm	
P15	23cm×22cm	53.44m
P16	28cm×22cm	53.53m
P17	17cm×15cm	
P18	14cm×13cm	
P19	11cm×9cm	
P20	11cm×7cm	
P21	11cm×9cm	
P22	13cm×10cm	

D-4 区付近柱穴状土坑群

	長径×短径	底面の高さ
P1	18cm×16cm	53.72m
P2	26cm×24cm	53.53m
P3	36cm×34cm	53.62m
P4	56cm×56cm	53.65m
P5	18cm×18cm	53.72m
P6	20cm×18cm	53.92m
P7	34cm×33cm	53.51m
P8	22cm×20cm	53.64m
P9	30cm×30cm	53.46m
P10	22cm×20cm	53.88m
P11	22cm×20cm	53.76m

第268図 D-4 区付近柱穴状土坑群

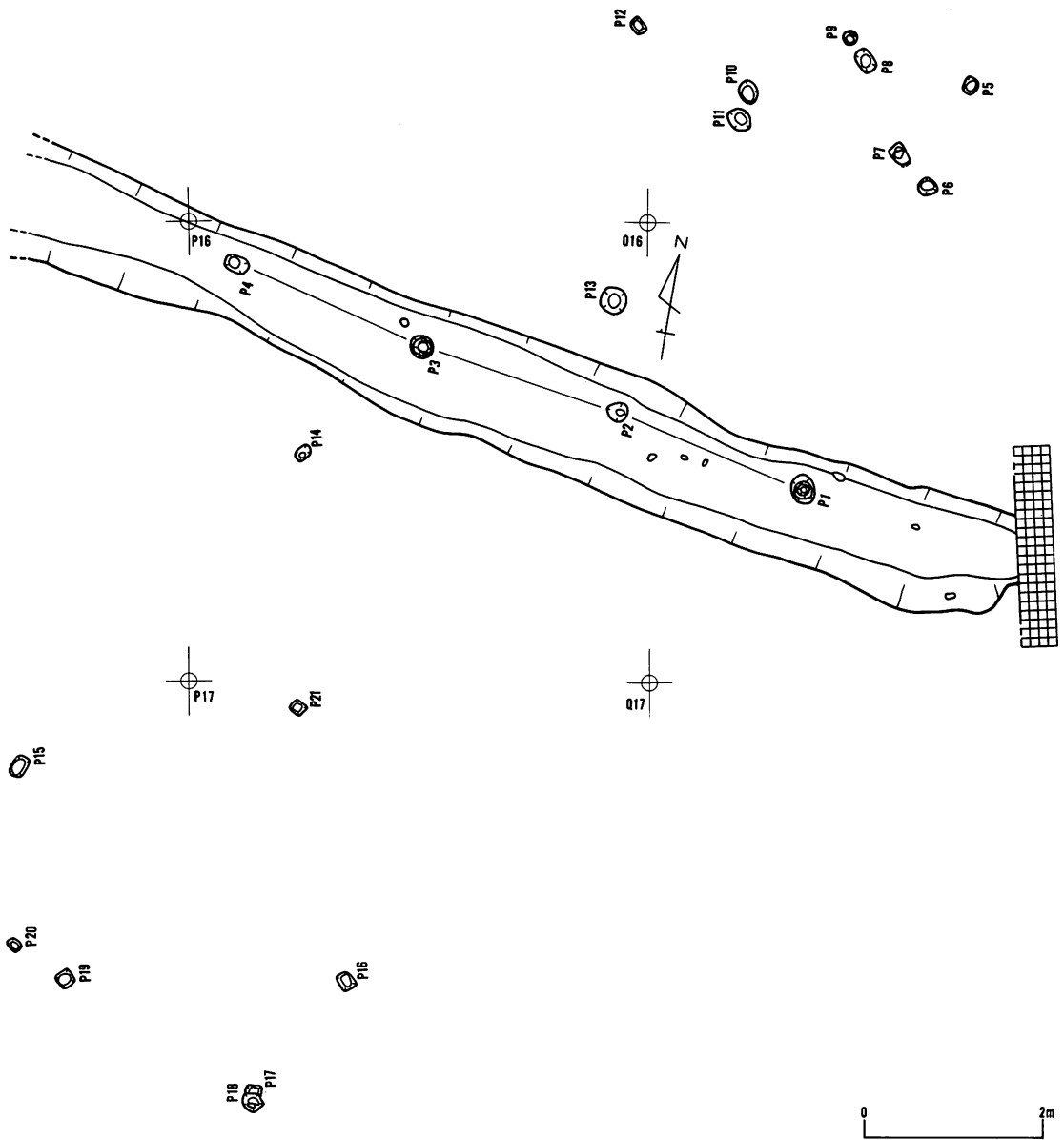


K-19区付近柱穴群

	長径×短径	底面の高さ
P <sub>1</sub>	33cm×30cm	53.460m
P <sub>2</sub>	30cm×30cm	53.484m
P <sub>3</sub>	32cm×28cm	53.478m
P <sub>4</sub>	45cm×33cm	53.488m
P <sub>5</sub>	38cm×30cm	53.468m
P <sub>6</sub>	28cm×24cm	53.475m
P <sub>7</sub>	31cm×25cm	53.472m
P <sub>8</sub>	41cm×24cm	53.468m
P <sub>9</sub>	28cm×21cm	53.496m
P <sub>10</sub>	20cm×20cm	53.499m
P <sub>11</sub>	45cm×41cm	53.517m
P <sub>12</sub>	22cm×19cm	53.475m
P <sub>13</sub>	18cm×16cm	53.509m
P <sub>14</sub>	19cm×15cm	53.512m
P <sub>15</sub>	20cm×19cm	53.491m
P <sub>16</sub>	31cm×29cm	53.469m
P <sub>17</sub>	23cm×20cm	53.478m
P <sub>18</sub>	22cm×16cm	53.497m
P <sub>19</sub>	28cm×21cm	53.485m
P <sub>20</sub>	16cm×12cm	53.510m
P <sub>21</sub>	18cm×16cm	53.518m
P <sub>22</sub>	22cm×18cm	53.496m
P <sub>23</sub>	25cm×23cm	53.514m
P <sub>24</sub>	20cm×14cm	53.492m
P <sub>25</sub>	20cm×13cm	53.492m
P <sub>26</sub>	18cm×15cm	53.507m
P <sub>27</sub>	35cm×29cm	53.483m
P <sub>28</sub>	32cm×24cm	53.468m
P <sub>29</sub>	25cm×17cm	52.705m
P <sub>30</sub>	25cm×22cm	53.511m
P <sub>31</sub>	25cm×18cm	53.510m
P <sub>32</sub>	20cm×16cm	53.521m
P <sub>33</sub>	25cm×23cm	53.494m
P <sub>34</sub>	25cm×19cm	53.512m
P <sub>35</sub>	45cm×32cm	53.442m
P <sub>36</sub>	16cm×13cm	53.512m
P <sub>37</sub>	25cm×23cm	53.512m
P <sub>38</sub>	20cm×18cm	53.508m
P <sub>39</sub>	19cm×18cm	53.509m
P <sub>40</sub>	19cm×16cm	53.512m

分され、柱間寸法は東より2.04m+1.94m+2.52mを測る。柱列と柱列の距離は約0.8mで、東端・西端とも同じである。掘り方の形状は方形気味のものが多く、規模も径0.25m~0.30mと近接しており、底面の標高を比較しても0.1m位の差がみられるもののほぼ近接した数値を示している。精査中に建物跡であろうと考え検出に努力したが、対応関係をもつ掘り方が検出されなかった。しかし、位置関係に規則性がみられることや掘り方の規模

第269図 K-19区付近柱穴状土坑群



0—15溝付近柱穴計測値

	長径×短径	底面の高さ
P <sub>1</sub>	29cm×28cm	52.705m
P <sub>2</sub>	23cm×20cm	52.650m
P <sub>3</sub>	24cm×23cm	53.688m
P <sub>4</sub>	26cm×18cm	52.805m
P <sub>5</sub>	18cm×14cm	52.847m
P <sub>6</sub>	22cm×19cm	52.815m
P <sub>7</sub>	20cm×18cm	53.695m
P <sub>8</sub>	24cm×18cm	53.714m
P <sub>9</sub>	16cm×15cm	53.697m
P <sub>10</sub>	24cm×21cm	53.682m
P <sub>11</sub>	26cm×23cm	53.686m

0—15溝付近柱穴計測値

	長径	短径	底面の高さ
P <sub>12</sub>	18	cm×14	cm 53.712m
P <sub>13</sub>	30	cm×27	cm 53.707m
P <sub>14</sub>	17	cm×14	cm 53.713m
P <sub>15</sub>	23	cm×16.5cm	53.105m
P <sub>16</sub>	18	cm×15	cm 52.955m
P <sub>17</sub>	16.5cm	× 9.5cm	53.095m
P <sub>18</sub>	21.5cm	×20	cm 53.025m
P <sub>19</sub>	18	cm×16	cm 53.726m
P <sub>20</sub>	14	cm×12.5cm	53.727m
P <sub>21</sub>	15	cm×13	cm 53.724m

第270図 0—15溝付近柱穴状土坑群

も近接していることから、建物跡の一部である可能性の強いことを付記しておく。

〔遺物〕

これらの土坑から出土した遺物はない。

(遠藤勝博)

### 8) O-15区付近柱穴状土坑群

〔遺構〕(第270図)

この付近には20ヶの柱穴状土坑が検出されている。その中でP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>はO-15溝跡と重複して検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>とO-15溝跡の新旧関係は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が溝跡の埋土内に掘り込まれていることから、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の方が新しい。規模はそれぞれによって若干差があるものの、径0.2m~0.3mを測るものが多く、深さも個々によって差があり一様ではない。埋土は黒色の粘土質シルトで構成される場合が多く、他に極暗褐色を呈するものもみられた。20ヶの柱穴状土坑の中にはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の柱列が含まれている。柱列は全長6.67mを3間に分割し、柱間寸法は東より2.18m+2.24m+2.25mであり、磁北に対して約78度西に偏している。精査中には建物跡になるとの想定で他の対応する掘り方の検出に努力したが、対応関係を明確にできなかった。しかし、柱間寸法や規模が近接していることから、ただ単なる柱列ではなく、建物跡の一部である可能性が強いことを付記しておく。

〔遺物〕

この付近の土坑からは遺物が全く出土していない。

(高橋与右工門)

### 9) その他

D-8住居址の南側部分や西側部分、C-6住居址の周囲でも柱穴状土坑が比較的まとまって検出されている。規模・形状・深さ・埋土ともに他の密集地域に在る土坑と大同小異でほとんど差がない。遺物もほとんど伴出していない。

(高橋与右工門)

## 3. 土 坑

### 1) B-5土坑

〔遺構〕(第271図、PL50A)

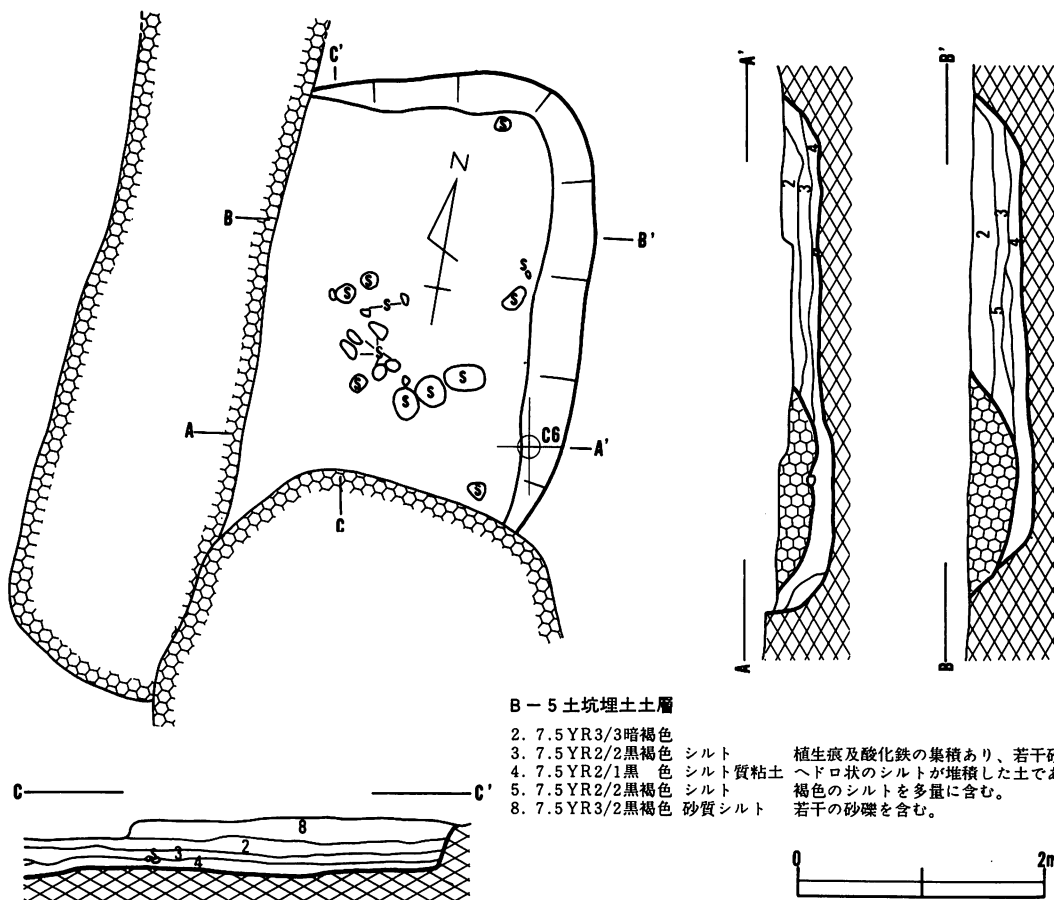
この土坑は調査時には住居址として登録したのであるが、精査の結果、柱穴やカマドが検出されないことと共に、掘り込みの深さや床面の状況等から判断して、住居址と認定するには不十分であることから、本報告では土坑として記述する。また、本土坑はB-6住居址・B-6土坑・C-2溝跡と重複しており、これら重複遺構との新旧関係は、B-6住居址とC-2溝



跡は本土坑より新しい遺構であることが確認されているが、B-6土坑との関係は平面的にも、埋土土層図でも明確にできなかった。埋土土層図でみると埋土最下層がそれぞれに共通しており、同時に堆積した様相を呈していることから、本土坑とB-6土坑は同時に存在した可能性が強い。

検出された状態で計測される規模は南北約3.3m・東西約2.6m・深さ約0.4m前後を測る。平面形は明確でないが、検出された部分から推定すると隅丸長方形を呈するものと考えられ、断面形は浅い皿状を示す。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色等を呈するシルトやシルト質粘土で構成され、混入物や色調の変化によって4層に細分された。埋土下位に行くに従って粘性が強くなる傾向があり、埋土4層は強粘性の粘土質シルトが堆積した土層である。埋土3層と4層の間には粒径10cm~30cmの礫が混入している。また、全層に炭化物の混入が観察される。坑底は地山の褐色を呈する砂質シルトを直接利用しており、貼床はない。底面は起伏もなくほぼ平坦であるが、壁に向かって次第に高くなる傾向がみられ、高低差は0.05m位を測る。

〔遺物〕



B-5土坑埋土土層

- 2. 7.5YR3/3暗褐色シルト
- 3. 7.5YR2/2黒褐色シルト
- 4. 7.5YR2/1黒色シルト質粘土
- 5. 7.5YR2/2黒褐色シルト
- 8. 7.5YR3/2黒褐色砂質シルト

植生痕及酸化鉄の集積あり、若干砂粒混入。  
 ヘドロ状のシルトが堆積した土である。  
 褐色のシルトを多量に含む。  
 若干の砂礫を含む。

第271図 B-5土坑(遺構)

破片が若干出土しているが、図化されたものはない。全層で少しづつ出土しており、上層から下層まで遺物の種類や出土状況に変化がない。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器** ロクロ使用成形のものが主体を占めているが、少量のロクロ未使用成形のものも含まれている。ロクロ使用成形のものは底部切り離し技法が回転糸切り無調整のものである。内面は黒色処理のもの・黒色処理のないものも含まれている。ロクロ未使用成形のものは内面が黒色処理され、底部丸底のものである。

**甕形土器** ロクロ使用成形であるが、小破片のみであるため、細部は不明である。少量ではあるが、ロクロ未使用成形らしい破片もみられる。

#### 須恵器

**坏形土器** 小破片であるので細部については不明であるが、底部切り離し技法が回転糸切り無調整のものである。

**甕形土器** 大甕と考えられる体部破片が出土している。内面・外面とも平行タタキ目をもつ。  
(高橋与右工門)

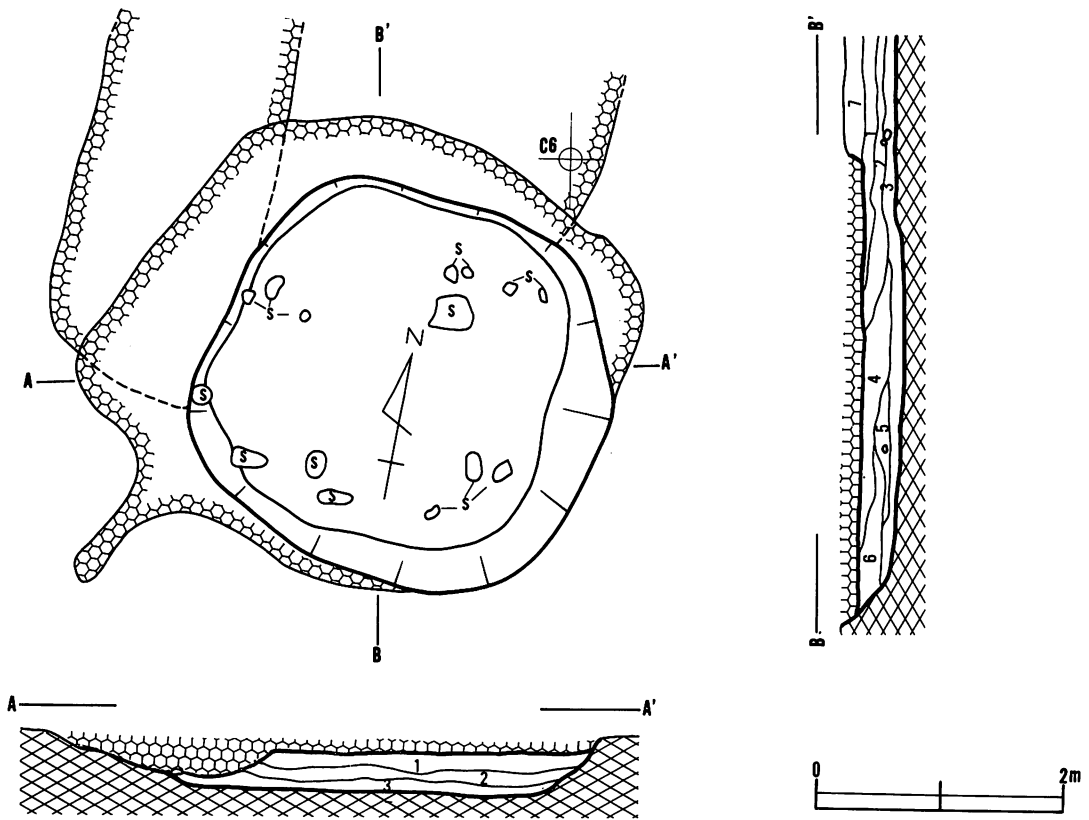
## 2) B-6 土坑

[遺 構](第272図、P L 50 B・C)

本土坑も B-5 土坑と同様に、当初、住居址として登録していたが、B-5 土坑と同じ理由により、土坑としたものである。なお、B-6 住居址・B-5 土坑・C-2 溝跡の各遺構と重複しているが、新旧関係は B-6 住居址・C-2 溝跡は新しく、B-5 土坑は同時存在であったものと考えられる。

規模は南北径約3.0m・東西径約3.2m・深さは約0.4mを測る。平面形は胴の張る隅丸方形を呈し、断面形は浅い皿形を呈する。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色等を呈するシルトや粘土質シルトで構成され、土層図では5層に細分されているが、小ブロックが間層として観察されることから、基本的には3層で構成されるものであろう。下位に行くに従って粘性が強くなる傾向がみられ、最下層の4層は強粘性の黒色を呈する強粘性のシルト質粘土が堆積したものである。また、3層と4層の間には粒径10cm~30cm位の礫が点在しており、その他に埋土全体に炭化物が混入している。坑底は地山の褐色を呈する砂質シルトを直接利用しており、貼床はない。底面は起伏もなくほぼ平坦であるが、壁に向かって次第に高くなる傾向がみられ、高低差は0.05m~0.1mである。

[遺 物]



B-6 土坑埋土土層

1. 7.5 YR 3/3 暗褐色
2. 7.5 YR 2/2 黒褐色 砂質シルト 酸化鉄の集積による褐色のしまりあり。
3. 7.5 YR 2/1 黒色 シルト質土 ヘドロ状のシルトが堆積した土で非常に粒子が細かい。
4. 7.5 YR 2/2 黒褐色 シルト質土 褐色のシルトを多量に含む。
5. 7.5 YR 2/1 黒色 シルト質土 褐色シルト混入。
6. 7.5 YR 4/4 褐色 シルト質土 若干サラサラしたシルト多量に含む。
7. 7.5 YR 3/2 黒褐色 シルト質土 若干の砂礫を含む。

第272図 B-6 土坑(遺構)

埋土内で出土しているが、小破片のみであるため図化されていない。種類としては土師器と須恵器があり、器種は坏形土器と甕形土器がある。B-5 土坑の遺物の様相とほぼ同様である。

#### 土師器

**坏形土器** ロクロ使用成形のもの、ロクロ未使用成形のものが混在しているが、ロクロ使用成形のものが主体を占めている。ロクロ使用のものは内面が黒色処理されるものと無処理のものが、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。ロクロ未使用成形のものは内面黒色処理で、底部形態は丸底らしい。

**甕形土器** ロクロ使用成形のものが主体を占めているが、ロクロ未使用成形のものも若干混入している。小破片のみであるので、細部については不明である。

#### 須恵器

**坏形土器** ロクロ使用成形のもので、底部切り離し技法が回転糸切り無調整である。他は不明である。

**甕形土器** 大甕の破片が出土している。内面・外面ともに平行タタキ目をもつ。

(高橋与右エ門)

### 3) B-8土坑-1

[遺構](第273図A、P L 51A)

本土坑は北東隅部がB-8土坑-2と重複し、さらに、西側は調査区域外に延びている。B-8土坑-2との新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は南北が約5.5mを測るものの、東西は不明である。壁高は約0.08m前後と浅く、壁は床面とほぼ直交している。平面形は明確でないが、検出された部分から推定すると隅丸方形を呈するものと考えられる。埋土は、褐色・黒色・黄褐色等のシルトで構成され、色調や混入物によって3層に細分された。混入物は、1層には焼土粒や炭化物粒、2層は炭化物を主体とした薄層で、3層には混入物がほとんどない。2層の炭化物は小枝状や茅状の植物性のものが多く含まれている。その他、粒径23cm×14cmの礫や、須恵器とロクロ使用土師器の破片も同一面で出土している。

なお、底面では規模が径約0.18m×0.18mで深さ0.27mを測る小土坑が検出されている。この小土坑に対応する他の土坑が検出されていないことや、位置がずれていること等から、本土坑の柱穴を構成するとは考えられない。壁溝やカマドは検出されていない。

[遺物](第274図、P L 147A)

埋土内から出土している。特に2層の炭化物層から出土した遺物が多い。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器** ロクロ使用成形のものであるが、図化されたものはない。内面が黒色処理されている。その他は不明である。

#### 須恵器

**坏形土器**(861) ロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切りのものである。

**甕形土器**(1127~1129) 大甕の体部破片である。1127は外面平行タタキ目で内面ナデ、1128は外面ヘラケズリで内面カキ目、1129は外面平行タタキ目で内面青海波文のタタキ痕や調整痕をもっている。

(山口了紀)

#### 4) B-8 土坑-2

〔遺構〕(第273図B、P L 51 B)

この土坑は南東隅部でC-9住居址と、そして、南西隅部がB-8土坑-1と重複している。重複遺構との新旧関係はいずれも本土坑より新しい。

規模は、東西3.8m・南北2.6mで、深さは最も深い中央部で0.4m前後であるが、壁高は0.2m位を測り、壁は床面に対して113度の角度を示している。長軸方向は東西にあり、平面形は隅丸の長方形を呈している。埋土は色調や混入物の相違から4層に大別されている。1層は弱粘性の褐色を呈するシルトが混入して斑状を示す黒ボクが主体で、礫や土師器の破片が混入している。2層は1層より褐色のシルトが多く混入し、粘性が強い。3層は2層とほぼ同質であるが、2層に比較して、粘性が少なくパサパサしている。4層は褐色のシルトを主体とした中に黒ボクが少量混入している。坑底は地山の褐色を呈する粘土で構築されており、全体的に軟らかい。底面の中央部には2.4m×1.4mの規模を測る窪みがあり、さらに、その中に一段下って0.6m×0.5mと1.0m×1.0mの規模の窪みが隣り合っている。底面は中央部から壁際に向かって次第に高くなっている。

〔遺物〕(第274図、P L 147 A)

埋土上位層より出土したものだけで、底面より出土したものはない。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

##### 土師器

**坏形土器** ロクロ未使用成形のものであるが、小破片であるため図化されていない。内面が黒色処理され、体部外面に段をもっている。底部は残存していないが、丸底を呈するらしい。

##### 須恵器

**甕形土器**(1130・1131) 大甕の破片である。いずれも外面平行タタキ目後カキ目で内面に同心円文や青海波文をもっている。

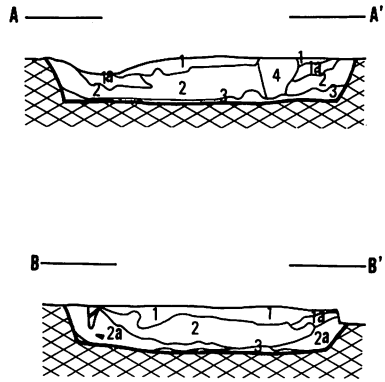
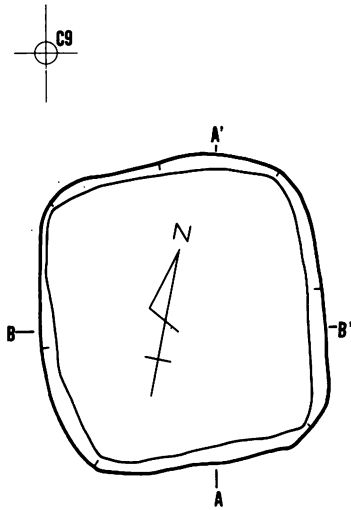
(山口了紀)

#### 5) B-9 土坑

〔遺構〕(第275図、P L 52 A)

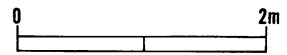
この土坑は東壁がC-9住居址と重複しているが、新旧関係ではC-9住居址の方が新しい。規模は南北約2.4m、東西約2.3mで、壁高は約0.18mを測り壁は床面に対して115度の角度を示している。平面形は隅丸の方形である。埋土は黒褐色を呈するシルトを基調とし、混入物によって3層に細分されている。1層には黄褐色のシルト粒を含み、2層には褐色のシルトブロックを混入している。3層には黒色のシルトが混入している。坑底は地山の褐色を呈する粘土で構築され、底面はほぼ平坦であるが、あまり固くない。床面から土坑は検出されていない。



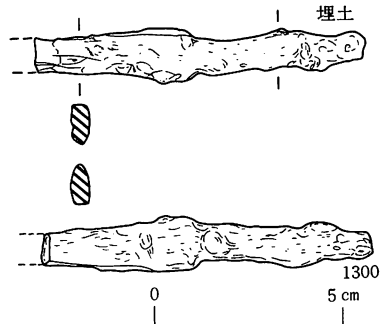
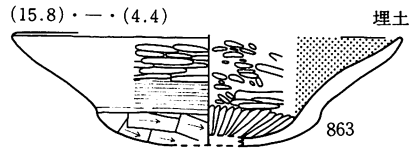
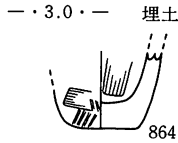
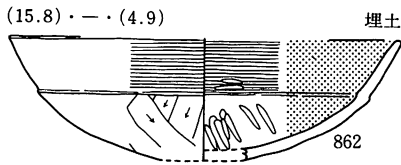


B-9 土坑埋土土層

- 1. 7.5 YR2/2 黒褐色 シルト質土 硬い、粘性弱い、粒状シルトをわずかに含む。
- 1a 7.5 YR2/2 黒褐色 シルト質土 硬い、 "
- 2. 10 YR4/4 褐色 シルト質土 " "
- 2a 褐色 シルト質土 粒状。
- 3. 10 YR2/1 黒色 シルト質土 粒性あり。
- 4. 7. YR2/2 黒褐色 シルト質土 粒状の炭化物、焼土を含む。



第275図 B-9 土坑(遺構)



第276図 B-9 土坑(遺物)

〔遺物〕(第276図、P L 147 B)

若干の土師器や須恵器が出土し、器種では坏形土器や甕形土器がある。その他に鉄製品がある。

#### 土師器

坏形土器(862) ロクロ未使用成形で、体部に段をもち底部形態が丸底のものである。口縁部は直線的に外反し、口唇は丸味をもつ。調整技法は、口縁部内外面ともヨコナデ、底部外面ヘラケズリで内面ミガキ後全面黒色処理されている。

#### 須恵器

甕形土器(1132・1133) 大甕の体部破片である。1132は内外面とも平行タタキ目で、1133は外面平行タタキ目で内面が同心円文の調整痕をもつ。

#### その他

鉄製品(1300) 名称が定かでないが断面が扁平で細長いことから刀子ではないかと考えている。(鈴木恵治)

### 6) B-10土坑

〔遺構〕(第277図、P L 52 B)

この土坑はC-10溝跡と重複しているが、新旧関係ではC-10溝跡の方が新しい。また、西側部分は調査区域外に延びているため、規模や形状が明確でない。

規模は南北が約4.0mであるが東西は不明である。壁高は0.25m～0.3mの範囲で、壁は床面に対して100度の角度を示している。埋土は黒褐色を呈するシルトで構成されているが、粘性や混入物等によって8層に細分されている。混入物としては焼土や炭化物が多かれ少なかれ混入し、その他に褐色のシルト粒や砂粒がある。なお、埋土最下層には粒径5cm～20cm位の礫が多く混入しており、ほとんどが床面に接していた。坑底は地山の褐色を呈するシルトで構築され、起伏もなくほぼ平坦であるが、やや軟らかい。

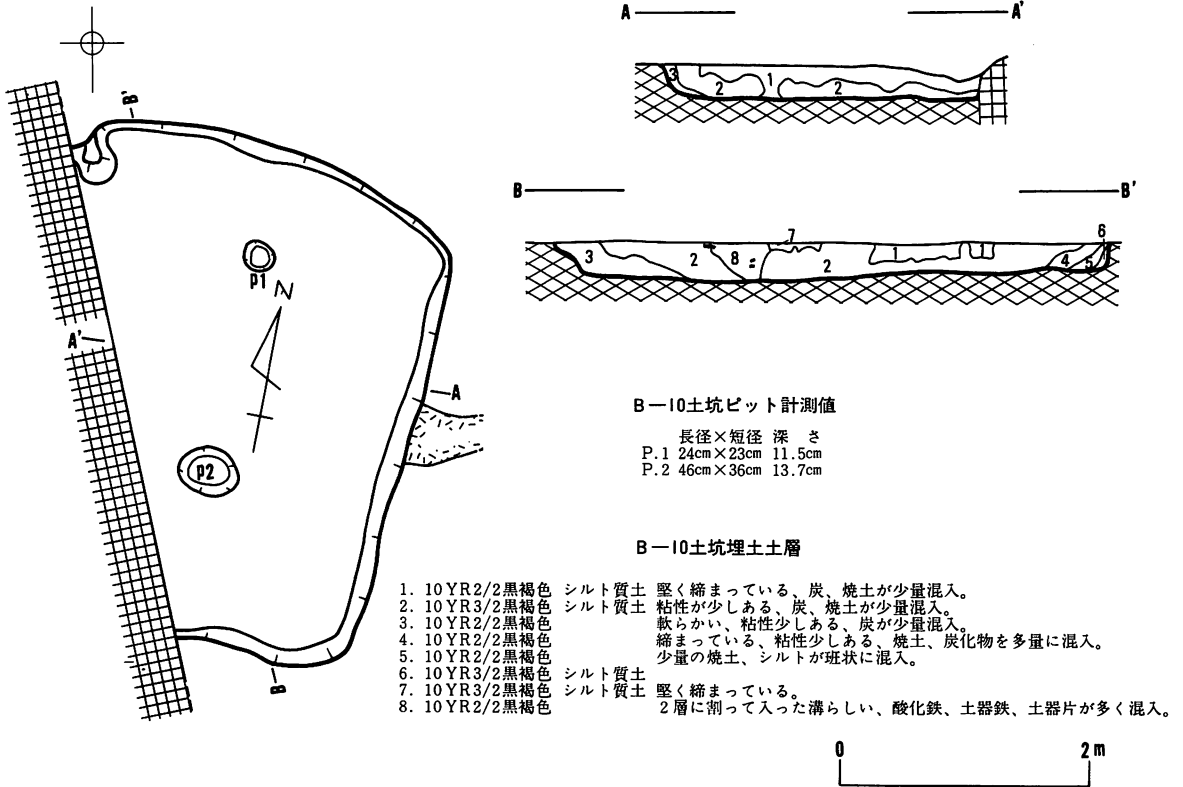
本土坑の底面からはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の小土坑が検出されている。規模は、P<sub>1</sub>が約0.24m×0.24mで深さ0.12m、P<sub>2</sub>は約0.26m×0.45mで深さ0.08mである。埋土はいずれも本土坑のそれとほぼ同一である。壁溝やカマドは検出されていない。

〔遺物〕

全く出土していない。

(吉田 洋)



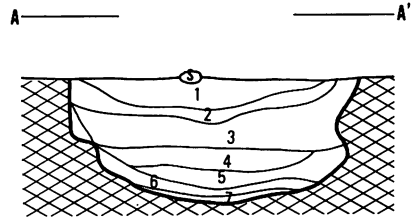
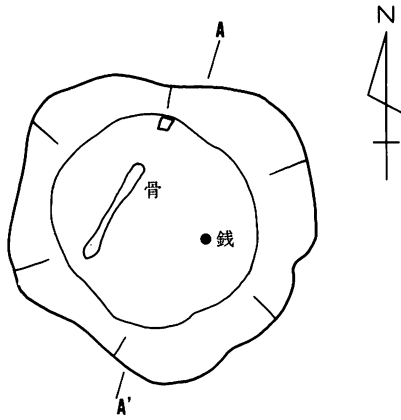


第277図 B-10土坑(遺構)

### 7) C-1土坑(墓塚)

[遺構](第278図、P L-53A)

本土坑はC-1住居址・C-2溝跡と重複しているが、本土坑がいずれの遺構よりも新しい。規模は径約1.2m×1.2mで深さは0.5mを測り、平面形は楕円形、断面形は鍋底形を呈している。埋土は黒色や暗褐色を呈する粘土質シルトや砂質シルトが主体で構成されており、混入物や色調によって7層に細分された。混入物は、全体的に地山の褐色を呈するシルト粒がみられ、他に炭化物の混入もみられた。埋土6層と7層の間には藁で編んだ藪が敷かれており、その上面で少量の骨片が検出された。骨の残存状態は非常に悪く、大腿骨の一部と膝関節の一部が残存していたにすぎない。他の部分は腐蝕・分解したものと推定される。骨片と同位面で銭が出土している。

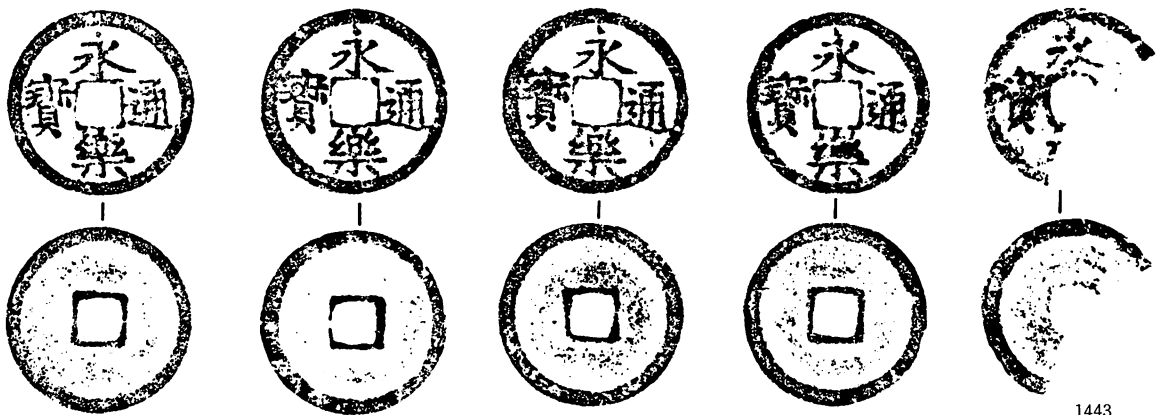


C-1 土坑埋土土層

- |                  |        |                      |
|------------------|--------|----------------------|
| 1. 7.5YR2/3 極暗褐色 | 砂質シルト  | 若干粘性あり。              |
| 2. 7.5YR3/3 暗褐色  | 砂質シルト  | " "                  |
| 3. 7.5YR3/2 黒褐色  | 砂質シルト  | 粘性あり、ブロック混入。         |
| 4. 7.5YR3/2 黒褐色  | シルト質土  | 粘性あり。                |
| 5. 7.5YR2/2 黒褐色  | 粘土質シルト | 粘性は強い。               |
| 6. 7.5YR2/1 黒色   | 粘土質シルト | ヘドロ状の泥が堆積したと同じ土質である。 |
| 7. 5Y2/2 オリーブ黒   |        | 粘り少しあり、湿っていて極めて軟かい。  |



第278図 C-1 土坑(遺構)



実大

1443

第279図 C-1 土坑(遺物)

〔遺物〕(第279図、P L 147C)

前述の銭5枚(1443)以外に共伴したものは無い。銭の銭文は「永樂通寶」で、背は無文である。5枚とも同じ銭文で、大きさも同じである。(高橋与右工門)

8) C-9 土坑-1

〔遺構〕(第280図A、P L 53B)

この土坑はB-9土坑の埋土内に掘り込まれていることから、B-9土坑より新しい。

規模は径約0.80m×0.70mで深さは約0.12mを測り、平面形はほぼ円形を呈し断面形は浅い皿状を示す。埋土は褐色・暗褐色・黒褐色のシルトで構成され、最下層は炭化物層である。色調や混入物・土性で5層に細分されている。底面はB-9土坑の埋土で構築され、南東部の底面が若干低く、北西部に向かって上がり勾配を示している。

〔遺物〕

出土していない。(鈴木恵治)

9) C-9 土坑-2

〔遺構〕(第280図B、P L 54A)

この土坑はC-9住居地の床面ほぼ中央に現地性焼土が検出され、この焼土を精査の結果、下部に土坑をもっていることが判明し、C-9住居地と関連しない単独の土坑として認定した。

完掘した状態での規模は約1.05m×1.0mで深さは0.1mを測り、平面形はほぼ円形を呈し、断面形は皿状を示す。埋土の状況は記録されていないが、最上層にC-9住居地の床面より盛り上がる様な状態を示す焼土が堆積している。坑底と焼土層との間層については不明である。

〔遺物〕

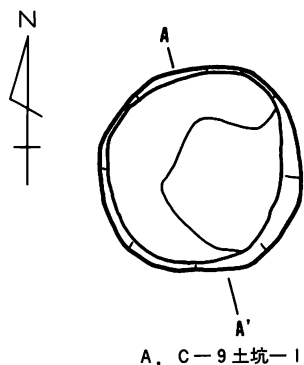
出土していない。(高橋与右工門)

10) E-7 土坑

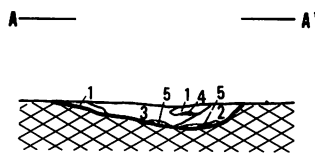
〔遺構〕(第280図C、P L 54B)

この土坑はE-7住居地の東壁と重複している。検出時にはE-7住居地の一部として考えたが、精査中の土層の観察によって、単独遺構でありE-7住居地より新しいことが判明した。

規模は南北約1.4m×東西約0.65mで深さは約0.4mを測り、平面形は長円形を呈し、断面形は鍋底形を示す。埋土は黒色や黒褐色を呈する粘土質シルトが主体で構成され、色調によって2層に大別され、さらに、2層は細分されている。混入物は酸化鉄や褐色の粘土質シルト粒がある。埋土最下層には粒径5cm位や10cm×20cm位の礫が混入し、坑底に接している。

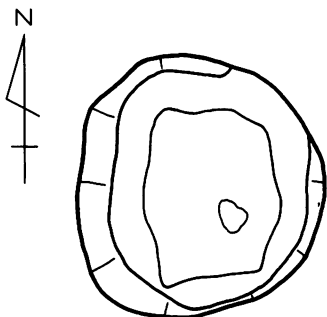


A. C-9 土坑-1

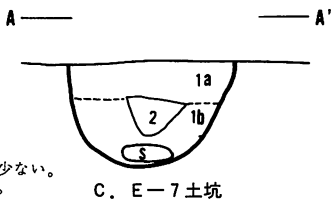
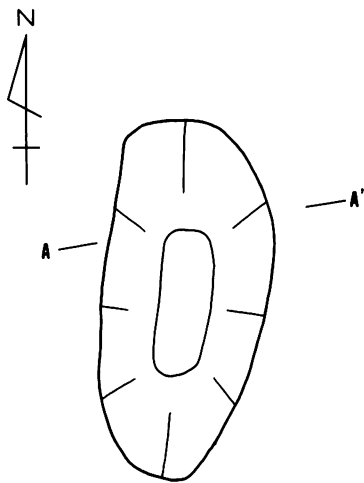


C-9 土坑-1 埋土土層

- |                  |        |                      |
|------------------|--------|----------------------|
| 1. 10 YR 3/4 暗褐色 | 粒 状シルト | 堅く粘性は弱い。             |
| 2. 10 YR 3/4 暗褐色 | 指先火シルト | 堅くしまっており、粘性は弱いがや、ある。 |
| 3. 10 YR 2/2 黒褐色 | シルト質 土 | 堅い。                  |
| 4. 10 YR 4/4 褐色  | 炭化物混入。 |                      |
| 5. 黒 色           |        |                      |



B. C-9 土坑-2

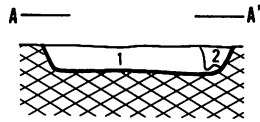
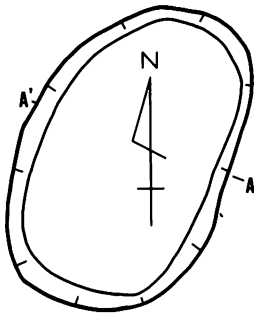


E-7 土坑埋土土層

- |                   |        |                           |
|-------------------|--------|---------------------------|
| 1a 7.5 YR 3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 上半は4層とほとんど同じ、僅かに鉄分の量が少ない。 |
| 1b 7.5 YR 3/4 暗褐色 | 粘土質シルト | 下半は鉄分目立たず、(植生コンによる分離か)。   |
| 2. 7.5 YR 3/4 暗褐色 | 粘 土 質  | 明色の粘土質ブロックが集中している。        |

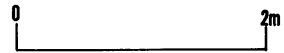


第280図 C-9 土坑群・E-7 土坑(遺構)



G-13土坑埋土土層

1. 2.5 YR1.7/1 赤褐色 シルト質土 粘性あり、土師器片が混入。
2. 7.5 YR3/1 黒褐色 シルト質土 " " "



第281図 G-13土坑(遺構)

〔遺物〕

出土していない。

(高橋義介)

11) G-13土坑

〔遺構〕(第281図、P L 56A)

この土坑は重複もなく単独で検出された。

規模は北西-南東が約1.55m、北東-南西約2.55mで深さ約0.2mを測る。平面形は長楕円形を呈し、断面は皿状を示しており、長軸が約25度東に偏している。埋土は赤黒色や黒褐色を呈する砂質シルトで構成され、色調によって2層に細分されている。坑底は地山の暗褐色を呈する砂質シルトで構築され、良く締まり平坦である。

〔遺物〕

埋土内より少量の破片が出土している。種類は土師器のみである。器種は甕形土器である。

土師器

**甕形土器** 小破片のため図化されたものはない。体部にハケメ痕を残していることから、ロクロ未使用成形のものと考えられるが、詳細は不明である。

(高橋与右工門)

## 12) I-13土坑

〔遺構〕(第282図、P L 56 B)

この土坑はO-18溝跡の西端部より派生して北東方向に延びる溝跡と重複しているが、新旧関係では本土坑の方が新しい。

規模は東西約4.4m・南北約4.7mで、深さは0.06m～0.07m位を測り、平面形は楕円形を呈し、断面形は皿形を示す。埋土は黒色や黒褐色を呈しているが、質的には差がなく単層である。混入物は酸化鉄や炭化物粒がみられる。なお、床面直上には粒径10cm～30cm位の礫が多くあった。底面は暗褐色の砂質シルトで構築され、平坦で良く締まっている。

〔遺物〕(第283図、P L 148 A)

埋土内より土師器や須恵器の破片が出土している。器種は甕形土器のみである。

### 土師器

**甕形土器**(866) ロクロ使用成形で、体部下位～底部を残存している。体部外面はヘラケズリされ、内面はナデである。底面は平らにナデられている。

### 須恵器

**甕形土器**(1134) 体部の破片である。内外面ともにナデやケズリのものである。

(高橋与右エ門)

## 13) J-6土坑

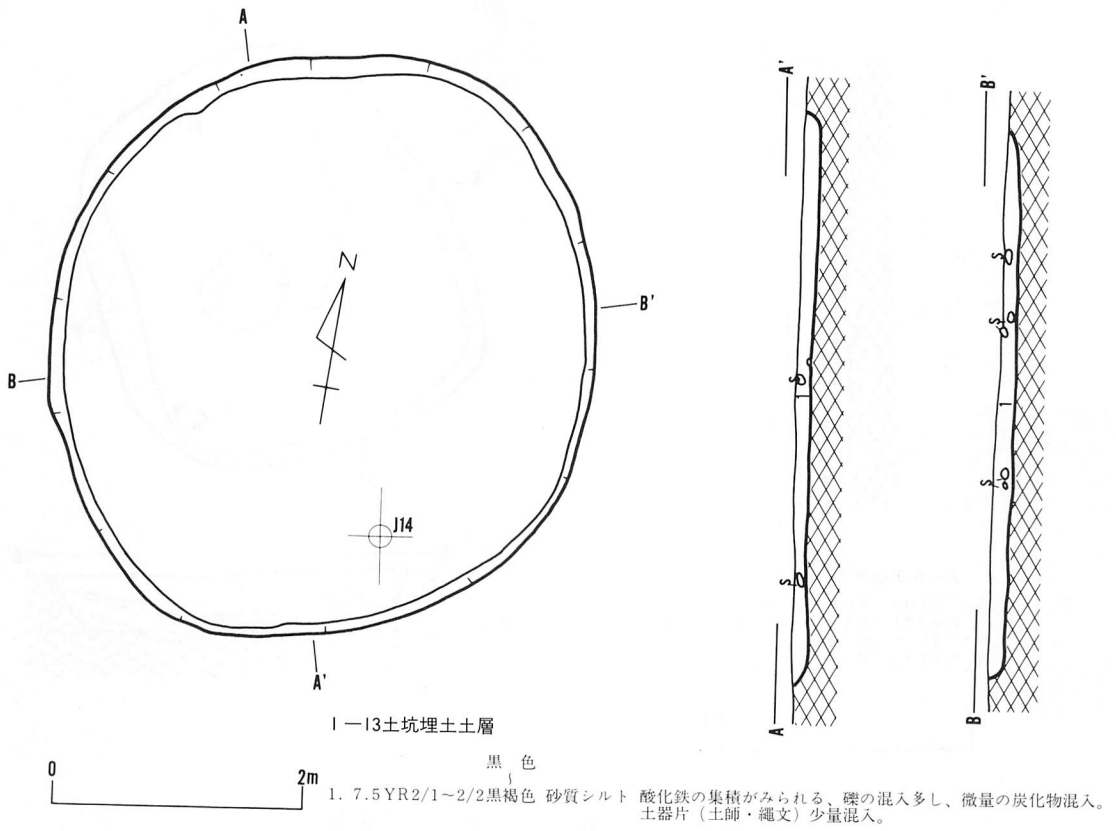
〔遺構〕(第284図、P L 55 A)

本土坑は西側部分がJ-6住居址と重複している。重複による新旧関係は本土坑の方が新しい。

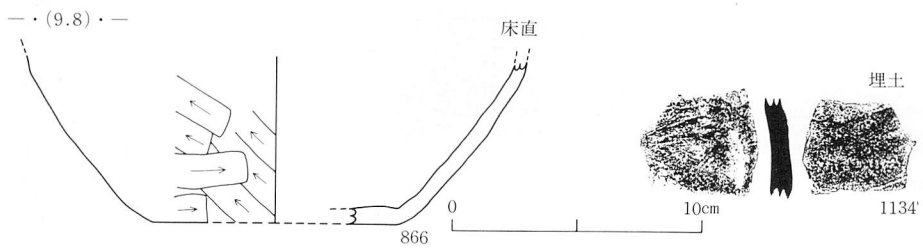
規模は、東西約3m・南北約3.3mで深さは0.34m～0.5mを測り、平面形は若干歪んでいるが、隅丸の長方形を呈し、断面は皿形を示す。埋土は黒色・黒褐色・極暗褐色を呈するシルトで構成されているが、色調や混入物によって4層に細分されている。混入物としては炭化物や褐色の砂質シルトがある。坑底は地山の褐色を呈する粘土質シルトで構築され、貼床はない。底面には径0.2mと0.25mを測り、深さ0.05m～0.1mの土坑状の掘り込みが検出されている。また、底面中央部や東壁寄りには炭化物が貼り付いていた。しかし、木材質の炭化物とは認められず、茅類似のものである。

〔遺物〕(第285図、P L 148 B)

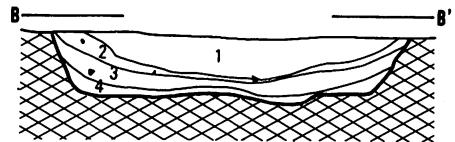
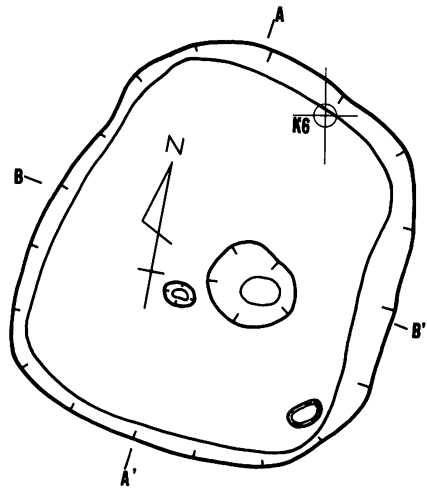
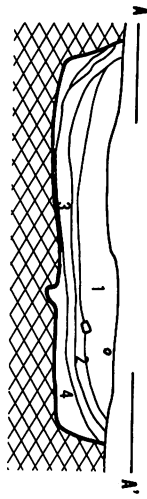
埋土内で若干の土師器が出土しているが、小破片が多く図化されたのは1ケのみである。特に南西部寄りの埋土で多く出土した。種類は土師器に限られるが、器種では坏形土器と甕形土器がある。



第282図 I-13土坑(遺構)

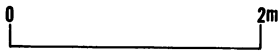


第283図 I-13土坑(遺物)

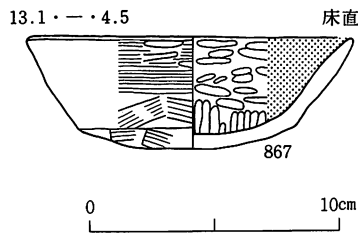


J-6 土坑埋土土層

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質 土 炭化物多く混入。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質 土 粘性強い、炭化物少し混入。
3. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト質 土 や、粘土質 //
4. 7.5YR2/1 黒色 粘土質シルト //

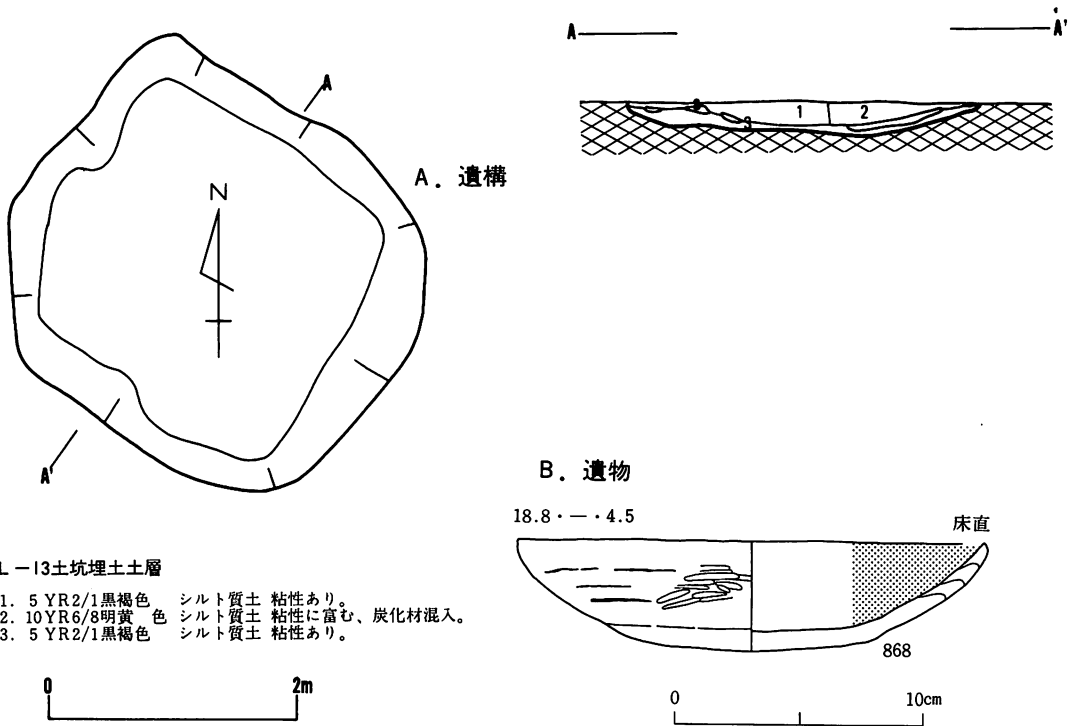


第284図 J-6 土坑(遺構)



第285図 J-6 土坑(遺物)





第286図 L-13土坑(遺構・遺物)

### 土師器

**環形土器(867)** この土器は坑底直上より出土した完形のものである。ロクロ未使用成形で、体部に稜をもち底部形態が丸底である。体部～口縁部はほぼ直線的に外反している。調整技法は、口縁部の外面ヨコナデ後一部ミガキ、底部はナデやケズリで、内面は全面ミガキ後黒色処理されている。

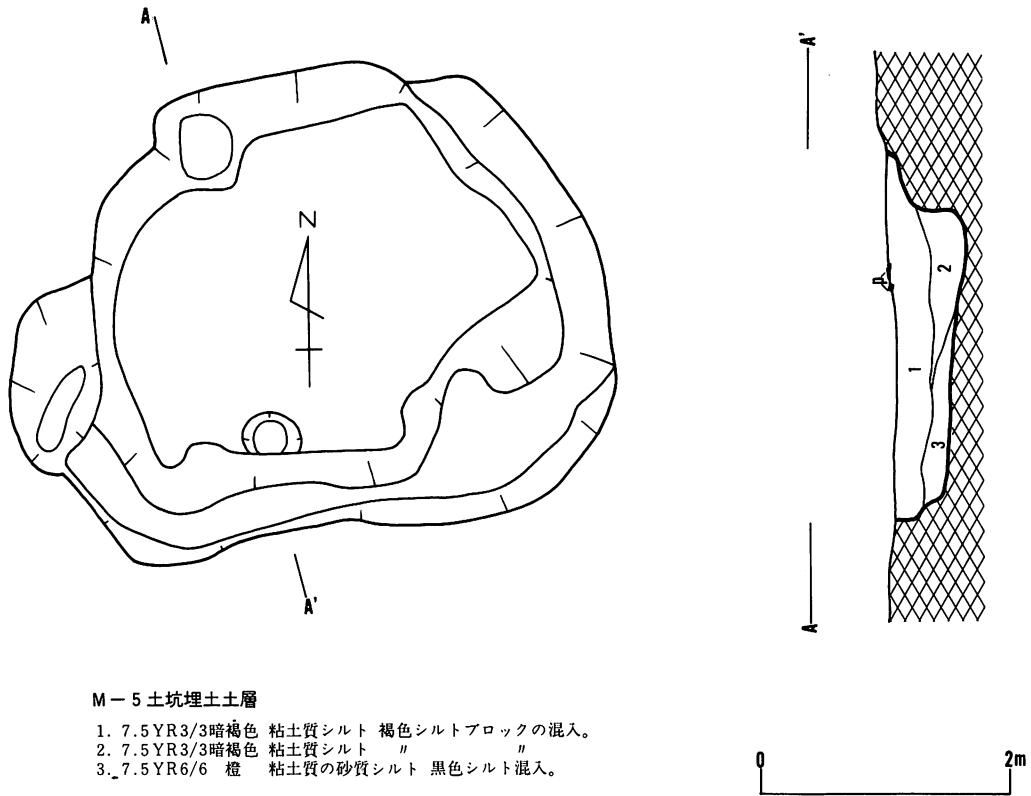
**甕形土器** 図化されたものはないが、すべてロクロ未使用成形のものだけである。体部破片だけであるので詳細は不明であるが、内外面ともにハケメのものが多い。(高橋与右エ門)

### 14) L-13土坑

[遺構](第286図A、P L 55B)

この土坑は西側でL-13住居址と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は北東-南西約1.5m・北西-南東約1.7mで深さは0.07m~0.1m位であり、平面形は幾分歪んだ隅丸方形を呈し、断面形は浅い皿状を示す。埋土は黒褐色と明黄褐色を呈するシル



第287図 M-5 土坑(遺構)

トで構成されるが、混入物によって4層に細分されている。3・4層の上面には炭化物が多く分布し、炭化物層を形成していた。この炭化物は木質部をほとんど含まず、草や茅類の炭化物である。坑底は地山の褐色を呈する粘土質シルトで構築され、貼床はない。底面には若干起伏がある。

〔遺物〕(第286図B、P L148C)

埋土内より土師器が出土している。器種には坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器**(868) ロクロ未使用成形で、体部に軽い段をもち、底部形態は丸底である。体部～口縁部は内弯気味に大きく外傾し、上端部は外削ぎによって先細りとなっている。調整技法は口縁部外面がヨコナデ後ミガキ、底部外面ナデやミガキで、内面はミガキ後黒色処理であるが、

二次焼成によって一部消失している。

**甕形土器** 図化されたものはないが、すべてロクロ未使用成形のものである。小破片のため全体的なことは不明である。体部にハケメ痕をもつ。(高橋与右エ門)

## 15) M-5 土坑

[遺構] (第287図、P L 55C)

この土坑はM-5住居址の床面下より検出され、M-5住居址によって削剝された土坑である。

規模は、東西約2.25m・南北1.85mで壁高は0.3m～0.35mを測り、平面形は東西に長く若干歪んだ楕円形を呈する。埋土は暗褐色と橙色を呈する粘土質のシルトで構成されているが、混入物によって3層に細分されている。坑底は地山の褐色を呈する粘土質のシルトで構築され、底面には若干の起伏がみられる。

[遺物]

埋土内より土師器の破片が出土している。器種は坏形土器のみである。

### 土師器

**坏形土器** 図化されていないが、ロクロ使用成形で、内面が黒色処理されている。その他の詳細は不明である。(高橋与右エ門)

## 4. 溝跡

### 1) B-2 溝跡

[遺構] (第288図、P L 57A)

本溝跡はA-1住居址・A-2住居址・B-2住居址とそれぞれ重複しているが、新旧関係はそれらいずれの遺構より本溝跡が新しい。

この溝跡はほぼ南北方向に直線的に掘削されているが、全長で約12.6mを測り、北端部は段丘崖に達している。巾は南端部で約1.4m・北端部で約1.5mを測り、深さは南端部で約0.15m・北端部で約0.1mであり、断面は浅い皿状を示す。方向は溝の中軸線で磁北に対して約8度西に偏している。埋土はシルトで構成され、色調は黒褐色を呈する。混入物によって2層に細分され、埋土1層には酸化鉄の集積、2層には炭化物の混入がそれぞれ観察される。溝底は地山の褐色を呈するシルトで構築され、貼床は観察されない。底面は良く締まって固く、平坦でほぼ水平に近い。なお、北側部分では多くの柱穴状土坑が本溝跡の埋土や溝底を掘り込んでいる。

[遺物] (第294図、P L 148D)

埋土内で出土しているが、量的には少ない。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器** 小破片であるので図化されていないが、ロクロ使用成形のものが出土している。内面が黒色処理されている以外は不明である。

#### 須恵器

**坏形土器**(874) 小破片であるので全体的なことは不明であるが、ロクロ使用成形で底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。

**甕形土器**(1139・1140) 1139は頸部の破片であるが、内外面に平行タタキ目をもつ。1140は体部破片であるが、内外面にヘラケズリやヘラナデ痕をもつ。 (高橋与右エ門)

### 2) B-4 溝跡

〔遺構〕(第288図、P L 57B)

本溝跡はA-4住居址・A-5住居址と重複している。重複遺構との新旧関係はいずれの遺構より新しい。

この溝跡の北端部はB-4グリッドに位置し、B-5グリッド北端部分で西方向に折れて調査区域外に延びており、本溝跡の北端部は約2mの距離でB-2溝跡の南端部と対峙している。従って、実際に調査した部分はほぼ4m位である。巾は最大で約1.6m・最小で約1.2mで、深さは最深部分で0.15m位を測る。溝の方向は中軸線で約9度東に偏している。埋土は黒褐色を呈する砂質シルトで構成されているが、混入物によって2層に細分されている。溝底は地山の暗褐色を呈するシルトで構築され、貼床はない。底面はほぼ平坦である。

〔遺物〕

埋土内より少量の破片が出土している。種類は土師器のみに限られ、器種は甕形土器だけである。

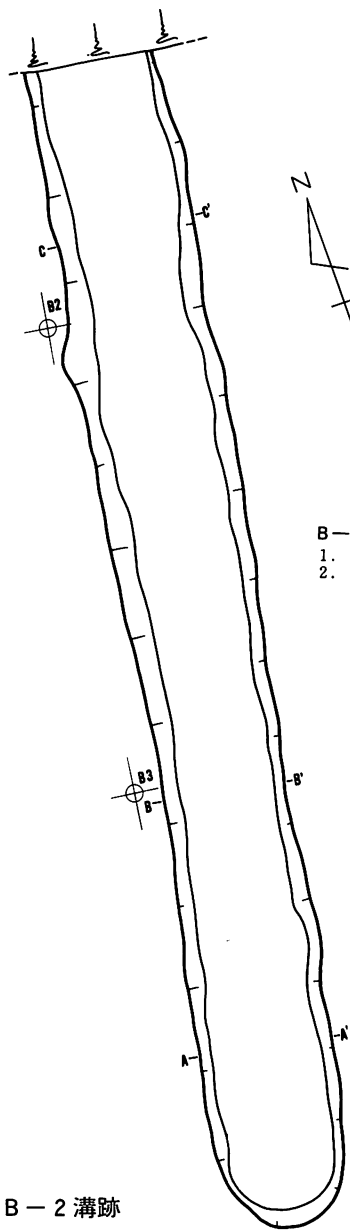
#### 土師器

**甕形土器** 図化されていないが、ロクロ使用成形の体部破片が出土している。詳細については不明である。 (高橋与右エ門)

### 3) B-7 溝跡

〔遺構〕(第289図、P L 57C)

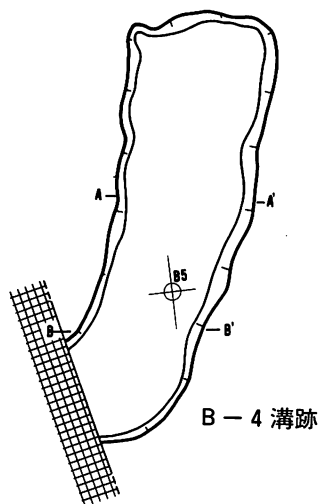
この溝跡は西端がB-7グリッドに位置し、東端のF-8グリッドで北方向に折れて段丘崖に達している。従って、重複遺構も多く、B-7住居址・G-6住居址・G-4住居址・F-



B-2 溝跡

B-2 溝跡埋土土層

1. 10Y R2/2 シルト質土 硬い。乾燥している。クラーク底まで。土器少量。酸化鉄。
2. 10Y R2/2 シルト質土 硬い。粘性微。炭化材微。
3. 10Y R2/2 シルト質土 硬い。粘性小。



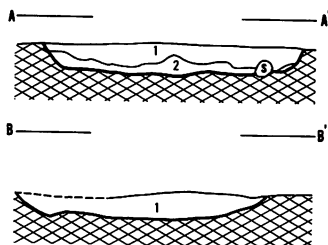
B-4 溝跡

B-4 溝跡埋土土層

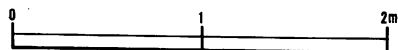
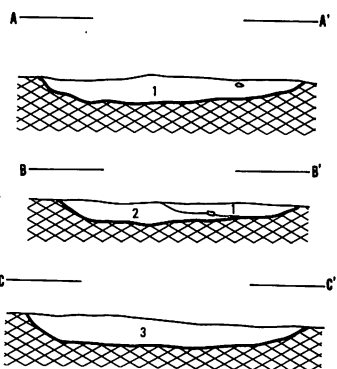
1. 10Y R2/2 シルト質土 硬い。乾燥している。土器少量混入酸化鉄。
2. 10Y R2/2 シルト質土 硬い。粘性微。炭化材微。



B-4 溝跡



B-2 溝跡



第288図 B-2 溝跡・B-4 溝跡(遺構)

3住居址－1・F－3住居址－2の各住居址や、B－7建物跡・G－6建物跡の各建物跡と重複し、本溝跡が重複するすべての遺構を削削している。

溝跡の長さは、東西方向分が約21.2mで磁北に対してほぼ東西方向を指している。南北方向分は約25.2mで、磁北に対して約4度西に偏している。巾は西端と北端が約2.2mと若干広いが、他の部分は1.8m～2.0mとほぼ一定している。深さは検出面からの計測では若干差があるが、底面の高さを比較するとほとんど水平に近い状態を量し、断面では皿状を示している。埋土は上位層がシルトで、下位層が粘土質シルトで構成され、色調は暗褐色・黒褐色・黒色等を呈する。3層は草木灰の堆積層であるが、いわゆる木材の炭化灰ではなく、小柴材や草類の炭化灰である。この様な灰層は全体に分布するものではなく、南北方向分のG－5グリッド～G－6グリッドにかけての部分にのみ分布し、それも、2層が堆積した後に堆積したものである。東西方向分には全く分布しない。溝底には粒径0.1m～0.3m位の礫が点在しており、特に、B－7～B－8・G－4～G－6の各グリッドにかけて多くみられた。

[遺物](第294・295図、P L149A)

前述の様に各種の遺構と重複しているために、多くの遺物が出土している。種類は土師器・須恵器・土製品・鉄製品・磁器・磨製石斧等があるが、磁器と磨製石斧は別項で説明する。器種は環形土器・高環形土器・甕形土器・小型土器・土製丸玉・土製紡錘車・鉄製品がある。

#### 土師器

**環形土器** 破片では多く出土しているが図化されたものはない。ロクロ使用成形のものとロクロ未使用成形のものが混在している。ロクロ使用成形のものは、内面黒色処理のものと黒色処理のないものがあり、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。ロクロ未使用のものは内面が黒色処理され、体部外面に段をもっている。底部形態は丸底と推定されるが明確でない。**高環形土器**(875) ロクロ未使用成形で坏部と脚部を若干残存している。坏部内面は黒色処理されている。詳細については不明である。

**甕形土器**(876～879・881・882)いずれもロクロ未使用成形のものである。破片からの実測であるので詳細なことは不明であるが、体部外面にハケメ痕を残すものが多く、877と879の底面には木葉痕をもつ。881は口縁部破片であるが、頸部に軽い段をもち、直線的に外反する口縁部をもち、口唇は丸味をもつ。口縁部内外面にはヨコナデ痕を残す。

**小型土器**(880) ロクロ未使用成形で、小型の鉢形を呈する。器高の中位に段をもち、軽く内弯気味に外傾する口縁部をもつ。調整技法は摩滅によって定かでない。

#### 須恵器

**環形土器**(884～886) ロクロ使用成形で、底部切り離し技法が回転糸切りのものである。その他のことは不明である。

**甕形土器**(1141～1146) いずれも体部の破片である。1141・1143・1144・1146は外面に平行タタキ目を持ち、1142・1145はケズリやナデである。1143・1144・1146は内面にも平行タタキ目を持ち、1146はさらにカキ目をもつ。1141・1142・1145はナデである。

#### その他

**土製品**(1200・1244) 1200は土製の丸玉で、中心部に1ケの貫通孔を持ち、全面が黒色処理されている。1244は土製の紡錘車である。截頭円錐形を呈し、中心部に1ケの貫通孔をもつ。

**鉄製品**(1301) 器種が不明の鉄製品である。 (高橋与右工門)

#### 4) C-2 溝跡

[遺構](第289図、P L 58A)

この溝は南端部がB-6グリッドに位置し、北端部は段丘崖に達し、全長は約25.4mである。また、A-5住居址・B-2住居址・B-3住居址・B-5住居址・B-6住居址・C-1住居址・C-2住居址・B-5土坑・B-6土坑等多くの遺構と重複し、いずれの遺構も本溝跡の方が新しい。巾はC-4グリッド付近が最も狭く、1.25mを測るが、南端部が1.6m・北端部で2.65m位である。深さは、北端部～C-4グリッド付近までは約0.2m～0.25m位でほぼ平坦であるが、C-4グリッド付近からは南端部に向かって下り勾配を示し、高低差は約0.30mを測る。長軸方向は中軸線で6度東に偏し、ほぼ直線的である。埋土は、北端部と南端部では若干差がある。北端部はシルトで構成され、色調は黒褐色や黒色を呈する。全体的に若干粘性を持ち、埋土最下位層には粒径5cm～15cm位の礫が多数混入している。南端部は粘土や粘土質シルトが主体で構成され、色調は黒色や黒褐色を呈する。礫の混入程度は北端部寄りの部分より少ない。なお、C-2・C-3グリッド付近の埋土には1層と3層の間層として草木灰層が堆積している。この草木灰層には木材の炭化灰は含まず、茅類似の草類だけの灰層である。

[遺物](第295・296図、P L 149B)

埋土内より出土しているが量的には少ない。種類は土師器と須恵器・鉄製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・名称不明鉄器がある。

#### 土師器

**坏形土器** 図化されたものはないが、ロクロ使用成形のものと同く未使用成形のものがある。ロクロ使用成形のものは内面が黒色処理されるものと、無処理のものがある。底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。ロクロ未使用成形のものは、体部外面に段を持ち、内面が黒色処理される。底部形態は丸底と推定されるが定かでない。

**甕形土器** 図化されたものはない。いずれもロクロ未使用成形で、体部にハケメ痕を残す。その他のことは不明である。

## 須恵器

**環形土器** 図化されていないが、5ヶの破片が出土している。底部切り離し技法が回転糸切り無調整のものである。その他のことは不明である。

**甕形土器**(1147～1149) 大甕の体部破片である。1149は内外面ともに平行タタキ目をもち、1148は外面平行タタキ目で内面凸面当て道具痕、1147は内外面ともにナデやケズリである。

## その他

**鉄製品**(1302) 名称不明の鉄器である。断面が方形で若干細長い形態を示す。

(高橋与右エ門)

## 5) C-10溝跡

〔遺構〕(第290図、P L 58 B)

本溝跡はB-10住居址と重複しており、検出時の土層変化によって、住居址より新しいことが確認されている。

溝跡は東西方向に走っており、溝の西端は調査区域外に延びている。調査された全長は約11mで、巾は、東端で0.24m・中央付近0.3m・西端0.24mを測り、ほぼ一定巾を保っている。検出面からの深さは、東端で0.06m、中央付近で0.06m、西端で0.05mと僅かの差ではあるが東方に向かって下り勾配を示している。断面形は「U」字状を呈している。埋土はクロボクを中心とした中に、焼土粒や褐色シルトが混入した暗黒色土である。底面は褐色のシルトであり、凹凸がない滑らかな面となっている。溝跡の性格は不明であるが、断面形や底面の状況からみて人為的に掘削されたものといえる。

〔遺物〕

埋土内より土師器の小破片が出土しているが、詳細は不明である。

(山口了紀)

## 6) D-6溝跡

〔遺構〕

この溝跡は磁北に対して約10度西に偏し、ほぼ南北方向に走っている。北端部はE-6グリッドポイント付近で、南端部はE-7グリッドポイント付近に達し、全長は約6mである。巾は最も狭い位置で0.15m位で、最も広い位置では0.25m位を測る。検出面よりの深さはほぼ0.05m位で、底面は起伏もなく、ほぼ平坦である。埋土は極暗褐色のシルト単層で構成される。炭化物や礫等の混入物はない。

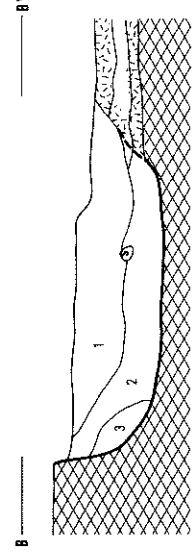
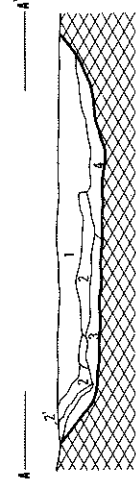
〔遺物〕

全く出土していない。

(高橋与右エ門)



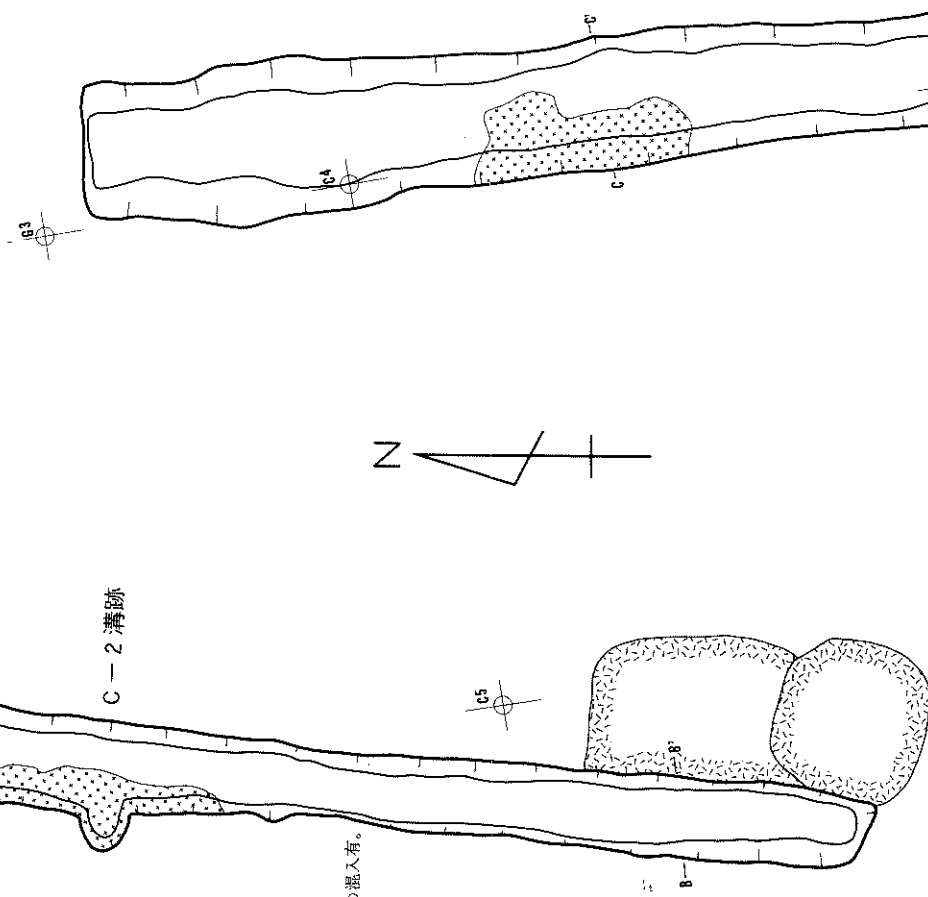
C-2 溝跡



C-2 溝跡埋土土層

1. 10YR2/2黒褐色 シルト質土 軟かい。粘性有。粘土層よりシルトの入りが多い、粘性有。
2. 10YR3/3暗褐色 シルト質土 軟かい。粘性有。粘土層よりシルトの入りが多い、粘性有。
3. 10YR2/3暗褐色 シルト質土 軟かい。粘性有。粘土層よりシルトの入りが多い、粘性有。
4. 10YR3/4暗褐色 シルト質土 軟かい。粘性有。粘土層よりシルトの入りが多い、粘性有。

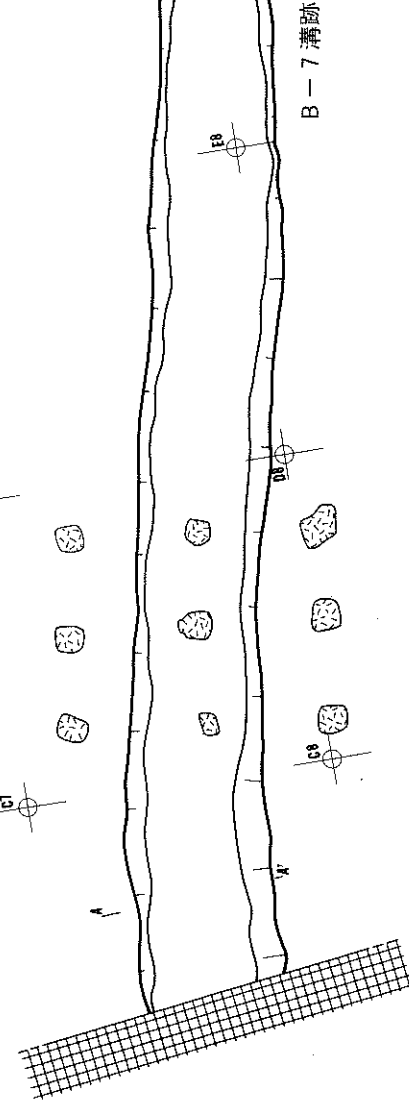
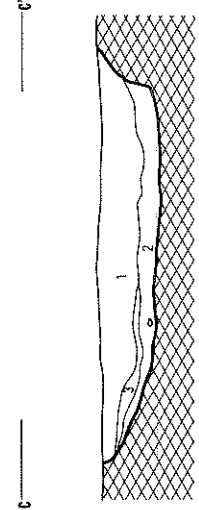
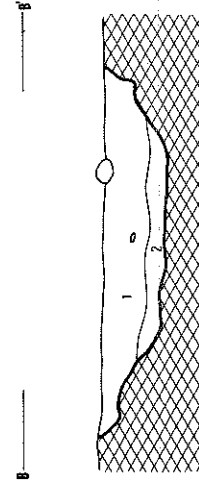
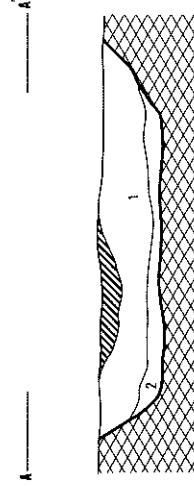
C-2 溝跡



B-7 溝跡埋土土層

1. 7.5YR3/2黒褐色 シルト粘土質 しまりよく、水酸化鉄の凝集有、シルトブロックの混入有。
2. 7.5YR2/2黒褐色 シルト粘土質 軟らかく、緻密。混入物無。
3. 7.5YR3/4暗褐色 シルト粘土質 粉状の草灰堆積層有。

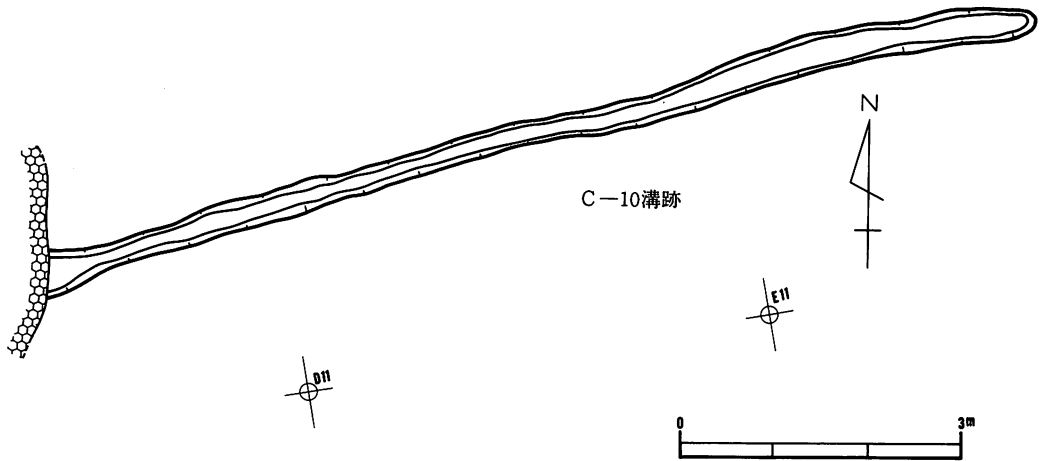
B-7 溝跡



B-7 溝跡



第289図 溝跡(遺構)



第290図 C-10溝跡(遺構)

## 7) D-17溝跡

〔遺 構〕(第291図、P L 58C)

この溝跡は西端部がD-17グリッドに位置し、さらに、調査区域外に延びており、東端部がJ-19グリッドポイントの東方2.5mで南方に折れ、南端部はH-25グリッドに達し、さらに調査区域外に延びている。また、この溝跡はJ-19溝跡とO-15溝跡と重複しており、これらの溝跡がいずれも本溝跡より新しい。検出されたのは東西方向が約18.5mで、磁北に対して約92度西に偏している。南北方向は約35.5mが検出され、磁北に対して約8度東に偏している。巾はほぼ1m~1.2mと一定巾を保ち、検出面よりの深さは約0.4m~0.5m位であるが、底面の高さはほぼ水平に近く、断面は「L」形を呈する。埋土は上層が黒色の粘土を主体として、下層に若干の黒褐色や褐色の粘土が堆積している。

〔遺 物〕(第296図、P L 149C)

埋土内より少量出土している。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

### 土師器

**坏形土器(887)** ロクロ使用成形で、内面に黒色処理がなく、底部切り離し技法が回転糸切り無調整のものである。図化されていないが、他にロクロ使用成形で内面黒色処理のものと、ロクロ未使用成形で内面黒色処理のものがある。

**甕形土器(888)** ロクロ未使用成形で、体部が膨らむ器形らしい。体部にハケメ痕を残し、内面にはナデ痕をもっている。底部はヘラナデ痕をもつ。

#### 須恵器

**坏形土器(889)** ロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転ヘラ切りで、周縁部に回転ヘラナデによる再調整痕をもつ。口径に比して底径が大きい。体部は若干内弯気味を呈しながら外傾している。

**甕形土器(1150)** 大甕の体部破片である。外面が平行タタキ目を、そして、内面に青海波文をもつ。  
(高橋与右エ門)

### 8) D-19 溝跡

#### 〔遺 構〕(第292図)

本溝跡は北東から南西方向に走っているが、西端が調査区域外に延びているため、溝の全容は不明である。調査された全長は約2.8mで巾は0.4m位を測り、検出面からの深さは約0.07mである。断面は浅い皿状を呈している。埋土は黒ボクの単層であり、多量の酸化鉄が集積していた。底面は地山の褐色シルトであり、凹凸もなく平坦である。東端寄り北側に0.6m×0.3mの範囲に、土師器甕形土器の破片が多数散乱していたが、埋設された痕跡はなかった。

#### 〔遺 物〕

溝底より土師器甕形土器が出土しているが、磨滅が激しく凶化できる様な状態に復元されていない。しかし、ロクロ使用成形のもので、体部にヘラケズリ痕をもっている。(山口了紀)

### 9) E-6 溝跡

#### 〔遺 構〕

この溝跡はE-7住居址の西壁と重複して検出されている。新旧関係では本溝跡の方が新しい。D-6溝跡の約1.2m東方をD-6溝跡とほぼ平行して南北に走り、北端部はE-7グリッドポイントの北方約2.2mに位置し、南端部がE-7グリッドポイントの南方約2.4mで、全長約4.6mである。巾は約0.3mとほぼ一定し、深さは0.05m~0.1mと若干起伏があると同時に北に向かって僅かに下り勾配を示している。埋土は極暗褐色のシルト単層で構成され、炭化物や礫の混入はない。

#### 〔遺 物〕

全く出土していない。

(高橋与右エ門)

## 10) F-4 溝跡

〔遺構〕(第293図、P L 58D)

この溝跡南端部がE-5グリッドに位置し、北端部は段丘崖に達し、方向は磁北に対して約3度東に偏し、若干蛇行している。また、E-2住居址-1・E-3住居址-1~2・E-4住居址・F-4住居址-1~2等の住居址と重複しており、これらとの新旧関係は、E-4住居址・F-4住居址-1~2より新しく、E-2住居址-1やE-3住居址-1~2より古いことが確認されている。全長は約14.6mを測り、巾はほぼ0.5mと一定を保ち、深さでは検出面より約0.45mで、断面形は「U」字形を示している。埋土は黒褐色を呈する粘土質シルトの単層で構成される。底面は地山の褐色を呈する砂質シルトで構築され、ほぼ平坦で、水平に近い。

〔遺物〕

全く出土していない。

(高橋与右エ門)

## 11) G-15 溝跡

〔遺構〕(第291図、P L 59A)

この溝跡は南西端がO-18溝跡と、そして北東端がI-11溝跡とそれぞれ合流し、磁北に対して約57度西に偏し、若干蛇行している。南西端はG-14グリッドに位置し、北東端はJ-11グリッドに達し、全長約25.6mである。巾はほぼ1mと一定しているが、深さは0.1m~0.15mであるが、I-13グリッド付近を境にして両端に向かって下り勾配を示している。埋土は黒色や黒褐色を呈するシルトで構成され、全体的に粘性が強く、褐色のシルト粒が混入している。溝底は地山の褐色シルトで構築され、起伏もなくほぼ平坦である。

〔遺物〕(第296図、P L 150A)

埋土内より出土しているが、小破片が多く図化されたものは少ない。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

### 土師器

**坏形土器** 図化されたものはないが、ロクロ未使用成形のものだけで占め、体部外面に段をもち、内面が黒色処理されている。

**甕形土器** 小破片だけであるので図化されたものはない。体部にハケメ痕を残している。

### 須恵器

**甕形土器**(890・891・1152) 890・891はともにロクロ使用成形された口縁部破片である。890は外弯気味に外反し、口縁部上端は挽き出されて縁帯状を呈し、1条の沈線状の窪みが全周している。891もほぼ同様である。1151は体部の破片であり、外面に平行タタキ目・内面にナデ痕

## D-17 溝跡埋土土層

- |    |                 |     |     |        |                           |
|----|-----------------|-----|-----|--------|---------------------------|
| 1. | 7.5 Y R3/1 ~2/1 | 黒   | 褐色  | 粘土質シルト | 沼鉄がまばらに入る。                |
| 2. | 7.5 Y R2/1      | 黒   | 褐色  | 粘土質シルト | 沼鉄が若干入る、明色の粘土質小ブロックが若干入る。 |
| 3. | 7.5 Y R4/2      | 灰   | 褐色  | 粘土質シルト | 細砂が混入。                    |
| 4. | 7.5 Y R2/1      | 黒   | 褐色  | 粘土質シルト | 明色の粘土質シルトブロック状に混入、沼鉄若干あり。 |
| 5. | 7.5 Y R4/2 ~3/2 | 灰褐色 | 黒褐色 | 粘土質シルト | 細砂が微量混入。                  |

## G-15 溝跡埋土土層

- 5 Y R1/1 黒色 軟らく、粘性有り、少量水酸化鉄が滲透する。
- 5 Y R2/1 黒褐色 粘性小、多量の細礫や砂混入。
- 10 Y R3/1 黒褐色 軟らく、粘性強。多量の水酸化鉄が滲透する。

## I-11 溝跡埋土土層

- 7.5 Y R2/3 極暗褐色 シルト質土 固く、粘性小。
- 7.5 Y R2/3 極明褐色 シルト質土 シルトブロックが混入。
- 7.5 Y R1.7/1 黒色 黒色の粘土。

## O-15 溝跡埋土土層

- |    |                 |       |        |              |
|----|-----------------|-------|--------|--------------|
| 1. | 7.5 Y R2/1 ~2/2 | 黒～黒褐色 | 粘土質シルト | 粘性小。         |
| 2. | 7.5 Y R2/2      | 黒褐色   | 粘土質シルト | 粘性小。細砂が若干混入。 |
| 3. | 7.5 Y R2/2      | 黒褐色   | 粘土質シルト | 粘性小。細砂が若干混入。 |
| 4. | 7.5 Y R2/1 ~2/2 | 黒～黒褐色 | 粘土質シルト | 粘性強。混入物無。    |
| 5. | 7.5 Y R2/1 ~2/2 | 黒～黒褐色 | 粘土質シルト | 4層にはほぼ同じ。    |

## J-18 溝跡埋土土層

- 灰褐色 砂質シルト 混入物無し。

## O-18 溝跡埋土土層

- 7.5 Y R1.1 黒色 堅く、粘性有り、水酸化鉄滲透する。
- 7.5 Y R3/1 黒褐色 軟らく、粘性有り、多量の水酸化鉄が滲透する。
- 7.5 Y R2/2 黒褐色 砂質シルト 軟らく、粘性有り、多量の砂、細礫、少量の炭化材混入。少量の水酸化鉄が滲透する。

をもつ。

(高橋与右工門)

## 12) G-17 溝跡

[遺構](第293図・P L 59 B)

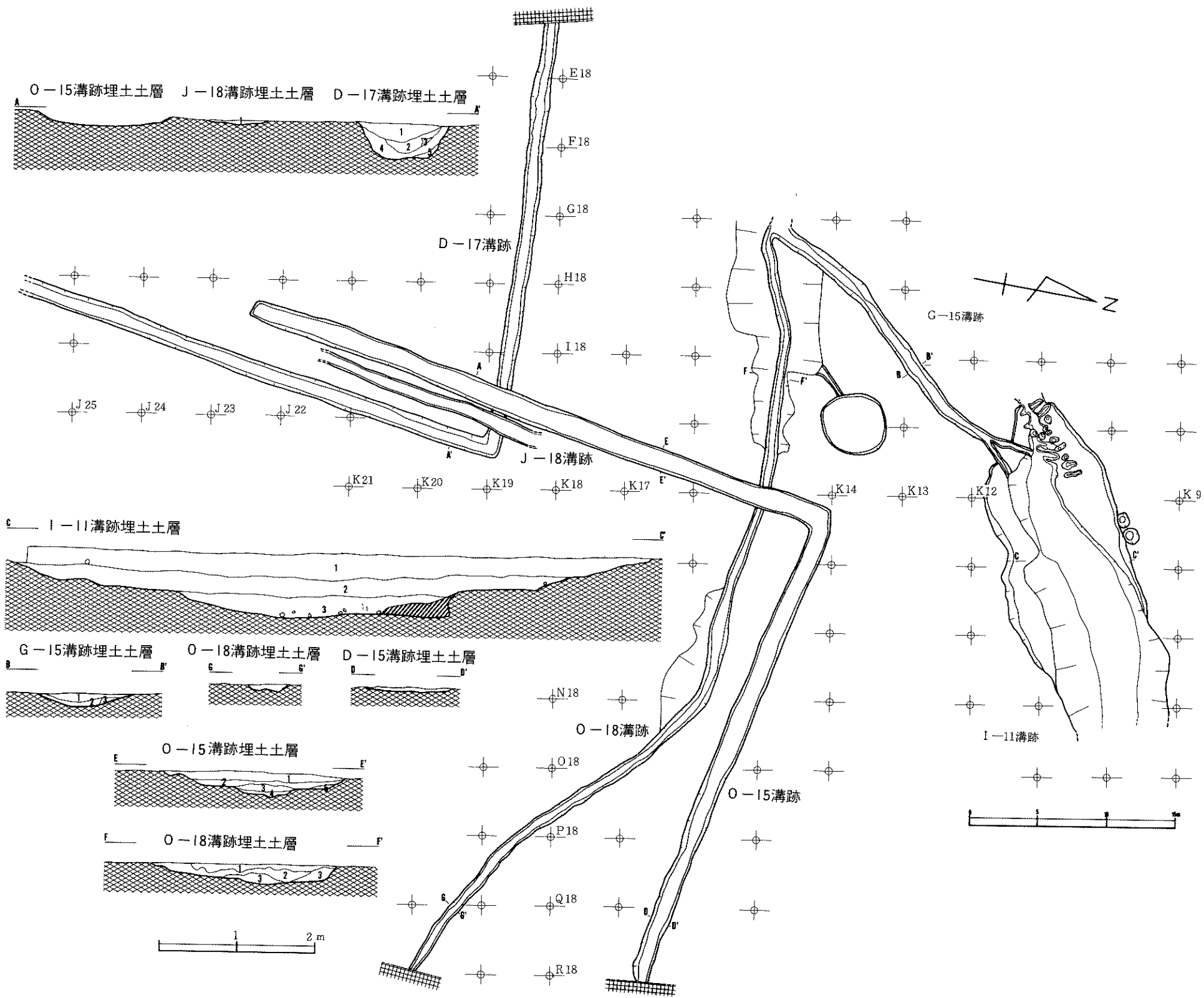
この溝跡はO-18溝跡の西端部と重複し、北端部はH-14グリッドに位置し、南端部がG-17グリッドに達し若干弯曲している。検出された全長は約15mで、ほぼ磁北を指し南北方向に延びている。巾はほぼ0.3mと一定巾を保ち、深さは0.04m~0.22mと若干差があり、底面の高さが中央部が低く、両端に向かって次第に上がり勾配を示している。埋土は黒色のシルトで構成されているが、混入物によって2層に細分されている。溝底は地山の褐色を呈する粘土質シルトで構築され、ほぼ平坦である。

[遺物](第296図、P L 150 B)

埋土内より出土しているが、量的には多くない。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

### 土師器

坏形土器 図化されていないが、ロクロ未使用成形のものが出土している。内面が黒色処理



第291図 溝跡(遺構)

されているが、他は不明である。

**甕形土器** 体部の小破片であるので、図化されていない。体部にハケメ痕を残すものがある。

#### 須恵器

**甕形土器(892)** 口縁部破片が出土している。頸部より外弯気味に外反し、上位と中位に断面「丸型」の突帯が全周しているらしい。突帯の上・下位には、ロクロ使用成形によるとおもわれる浅いカキ目を持ち、その上に上位に2段そして下位に1段の櫛描波状文が付されている。口唇部は上・下方に軽く挽き出され、中央部に隆帯状の突帯をもつ。なお、この破片と同個体と考えられるものが、D-8住居址-1・D-17溝跡・G-15住居址・O-18溝跡等からも出土しており、その中で本溝跡出土のものが数が多いことから、本溝跡の項で取り上げた。

(高橋与右エ門)

### 13) H-3 溝跡

[遺 構] (第292図)

この溝跡はG-3住居址・H-2住居址-2と重複して検出され、新旧関係ではG-3住居址が古く、H-2住居址-2が新しい。南西端部がH-4グリッドポイント西側に位置し、北東端部はH-3グリッドに達し、方向は磁北に対して約33度東に偏している。検出された長さは3.8mで、巾は0.3m~0.5mまでみられる。深さは0.3m位を測り、底面は凹凸もなくほぼ水平で、断面は「V」字形に近い。埋土は黒褐色のシルト単層で構成され、褐色のシルト粒や炭化物粒が混入している。

[遺 物] (第295・297図、P L150C)

埋土内より少量の土師器破片や鉄製品が出土している。

#### 土師器

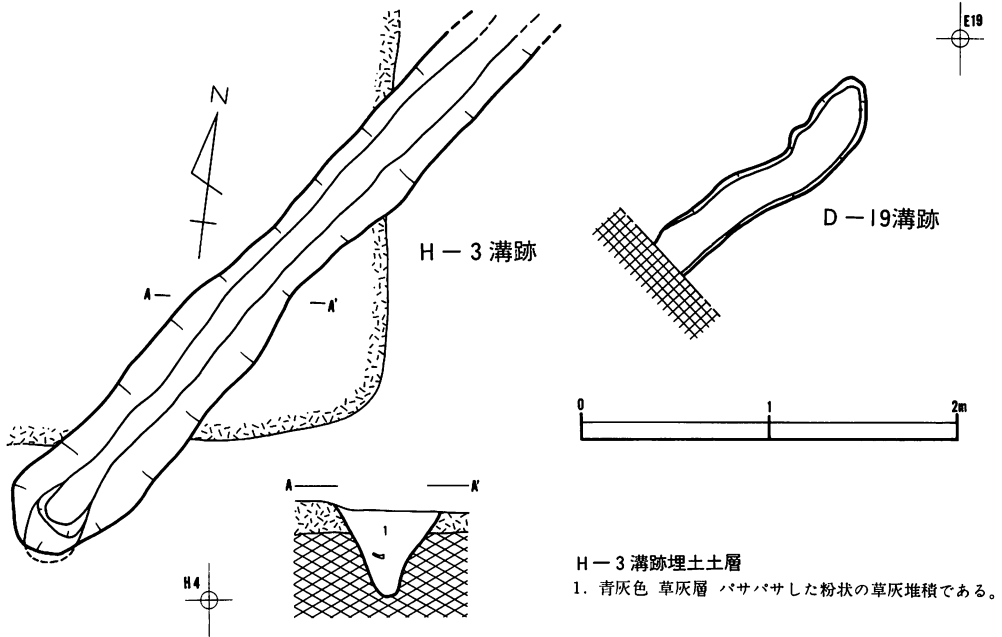
**甕形土器** ロクロ未使用成形のものであるが、小破片のため図化されていない。体部にハケメ痕を残すものがある。

#### 須恵器

**坏形土器(893)** ロクロ使用成形のもので、口縁部のみを残存しているので、詳細は不明である。

#### その他

**鉄製品(1303)** 直線的な丸い棒状のものに、円鏢状のものがついていっているらしい。出土したものには円鏢状の部分が半欠している。轡金具の一部である可能性がある。(高橋与右エ門)



第292図 溝跡(遺構)

#### 14) I-11 溝跡

[遺構](第291図)

この溝跡は西端部がH-11住居址と重複し、東端部は段丘崖に達している。さらに、G-15溝跡の北東端が本溝跡と合流している。また、西部の南側でK-11住居址とも重複している。これらの重複遺構との新旧関係は、H-11住居址は新しく、K-11住居址は古い。G-5溝跡との関係は明確に把握されていないが、溝底の高さを比較すると、G-15溝跡の方が高いことから、G-15溝跡を削削している可能性が強い。

本溝跡の方向は磁北に対して約67度東方に偏し、検出された全長は約23mである。巾は西端部が最も狭く約0.5mであるが、東に寄るに従って広くなりグリッド軸Nライン付近では約7.2mと広がっている。深さについても巾と同じ様なことがいえ、西端が約0.2mであるのが東端では0.8mと東方に向かう下り勾配を示している。断面を検討すると、西端部では「箱薬研」に近いのが、東端では、皿状に近くなり、法面に中段状の平坦面をもつなど、非常に不規則になる。このことは、掘削当初は西端部で計測された規模の溝であったものが、流水によって浸蝕され



たり、雨裂崩壊等で、次第に巾が広くなり、底面も低くなっていったことを表しているであろう。埋土は、極暗褐色のシルトと黒色の粘土で構成されるが、混入物によって3層に細分されている。1層は粘性も少なく固く、2層は1層とはほぼ同様であるが褐色のシルト粒が混入している。3層は黒色の粘土で、最下層には粒径5cm～10cmの礫が混入している。壁や底面は段丘礫層や地山の褐色を呈する砂質シルトである。

#### 〔遺物〕

埋土全体で出土してはいるが、量的には多くない。西端部で出土した土師器はロクロ未使用成形のものだけであるが、東端部では上層より出土する土師器はロクロ使用成形のものが混入し、下層より出土するものにはロクロ使用成形の破片を含まないという特徴をもっている。種類は土師器だけで、器種では坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器** 図化されていないが、ロクロ使用成形のものと、ロクロ未使用成形のものがある。ロクロ使用成形のものには内面が黒色処理されるものと無処理のものがあり、底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。ロクロ未使用成形のものは、体部の外面に段をもち、内面が黒色処理される。底部形態は丸底を呈すると考えられるが定かでない。

**甕形土器** ロクロ使用成形のものとロクロ未使用成形のものがあるが、図化されたものはない。いずれも体部の破片のみであるので詳細は不明であるが、ロクロ使用成形のものにはヘラケズリ、ロクロ未使用成形のものはハケメ痕をそれぞれ残している。 (高橋与右工門)

### 15) J-18溝跡

#### 〔遺構〕(第291図、P L 60 B)

この溝跡はD-17溝跡の南北分とO-15溝跡の南北分の中間に位置し、前二者と平行している。しかし、この溝跡は底部が微かに残存しているのみで、壁の立ち上がりや、長さ、規模は全く不明である。検出された規模は全長約16m、巾1mで深さ0.04m位である。埋土は灰褐色のシルトに酸化鉄が混入した土層で構成される。

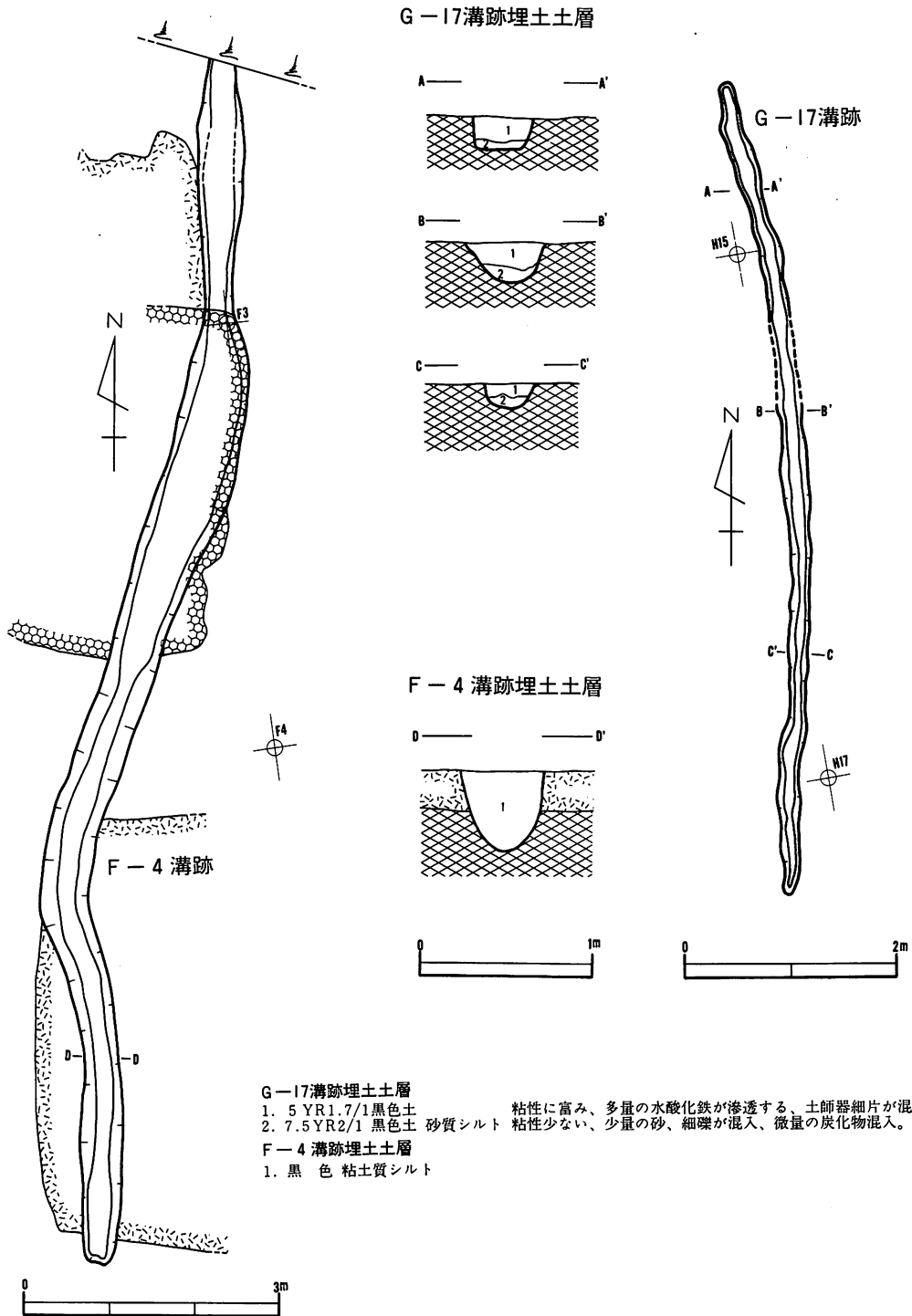
#### 〔遺物〕

全く出土していない。 (高橋与右工門)

### 16) O-15溝跡

#### 〔遺構〕(第291図、P L 59 C)

本溝跡は南端部がH-22グリッドに位置し、K-14グリッドで東方に折れ、東端部はO-16グリッドに達し、さらに調査区域外に延びている。検出されたのは南北方向分が約44.5m・東



第293図 溝跡(遺構)

西方向分約35mで、全長約79.5mである。方向は、南北が磁北に対して約10度東に偏し、東西方向は約102度東に偏している。巾は約1.2mとほぼ一定巾を保ち、深さは検出面より0.1m～0.15mを測り、溝底の高さはほぼ水平である。埋土は黒色や黒褐色を呈する粘土質シルトで構成される。

〔遺物〕(第297図、P L 150 D)

埋土内より若干出土している。種類は土師器と須恵器があり、器種では坏形土器と甕形土器がある。

#### 土師器

**坏形土器** 図化されていないが、ロクロ使用成形のものが出土している。内面が黒色処理されているが、他は不明である。

**甕形土器** 体部の小破片が出土している。外面にハケメ痕を残していることから、ロクロ未使用成形であろう。

#### 須恵器

**坏形土器(894)** ロクロ使用成形で、底部切り離し技法は回転糸切り再調整であるが、その他のことは不明である。(遠藤勝博)

### 17) O-18溝跡

〔遺構〕(第291図、P L 59 D)

本溝跡は東端部がO-19グリッドに位置し、さらに調査区域外に延びており、西端部はG-14グリッドに達し、未調査ではあるがさらに西方に延びている。また、O-15溝跡・G-15溝跡と重複しており、それらとの新旧関係はO-15溝跡は本溝跡より新しく、G-15溝跡との関係は不明である。検出された長さは約63mで巾は0.7m位を測りほぼ一定巾を保っているが、M-16グリッド付近や、西端部分は壁が崩壊しており、上縁巾が広がっている。方向は、東端よりN-16グリッド付近までは磁北に対して約52度西に偏し、N-16グリッド以西ではさらに西に折れ、磁北に対して約91度西に偏している。深さは位置によって若干差があるものの、ほぼ0.1m～0.2m位である。埋土は黒色の粘土質シルトで構成され、粒径10cm位の礫が混入し、底面に接している。

〔遺物〕(第297図、P L 150 E)

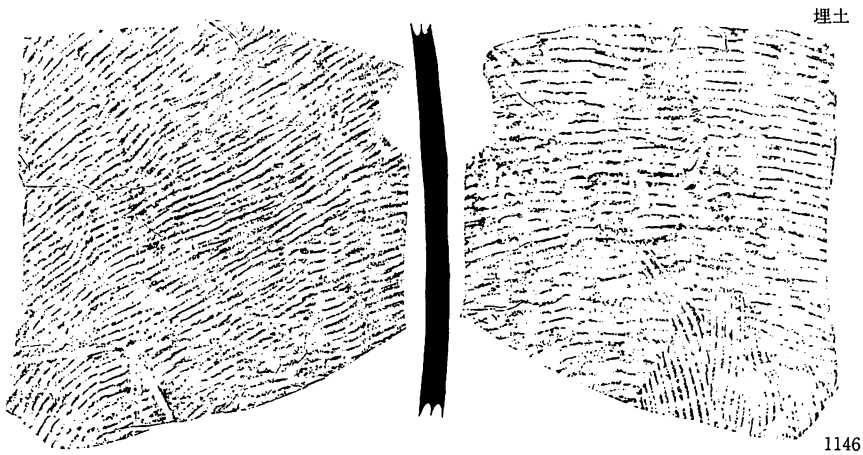
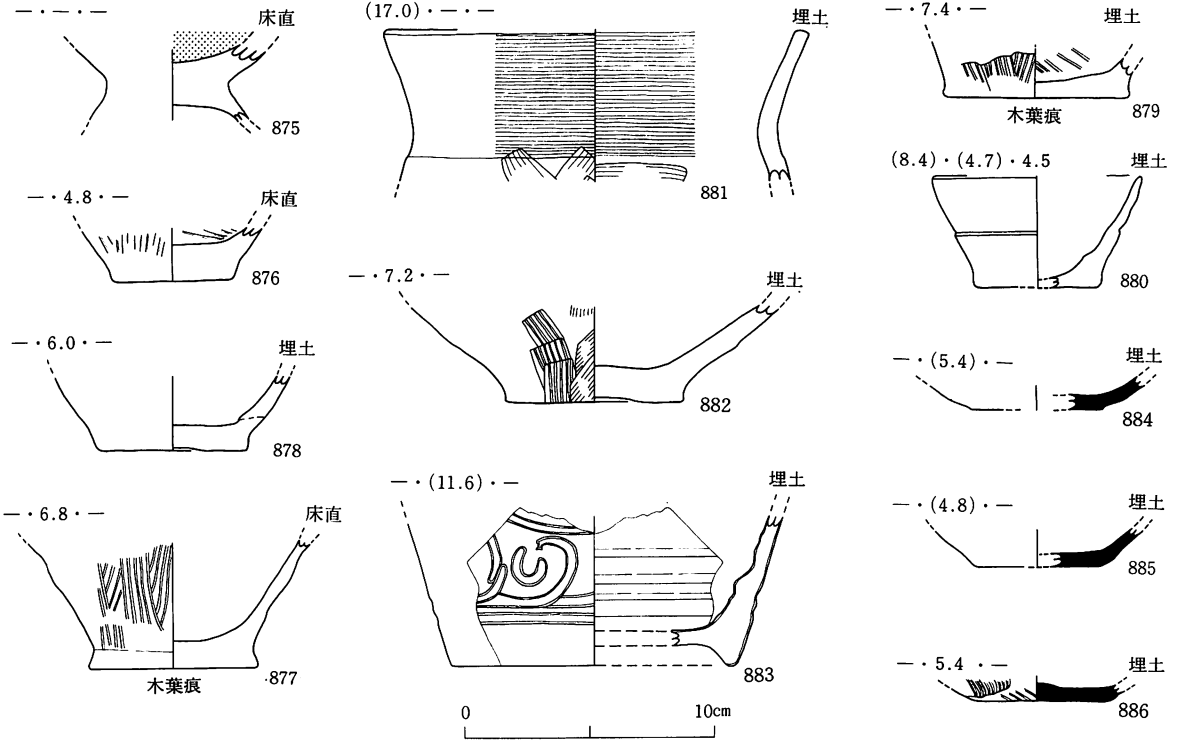
埋土内より若干出土している。種類は土師器と須恵器・土製品があり、器種では坏形土器と甕形土器・壺形土器・土製丸玉がある。

#### 土師器

**坏形土器** 図化されていないが、ロクロ未使用成形のものが出土している。内面が黒色処理

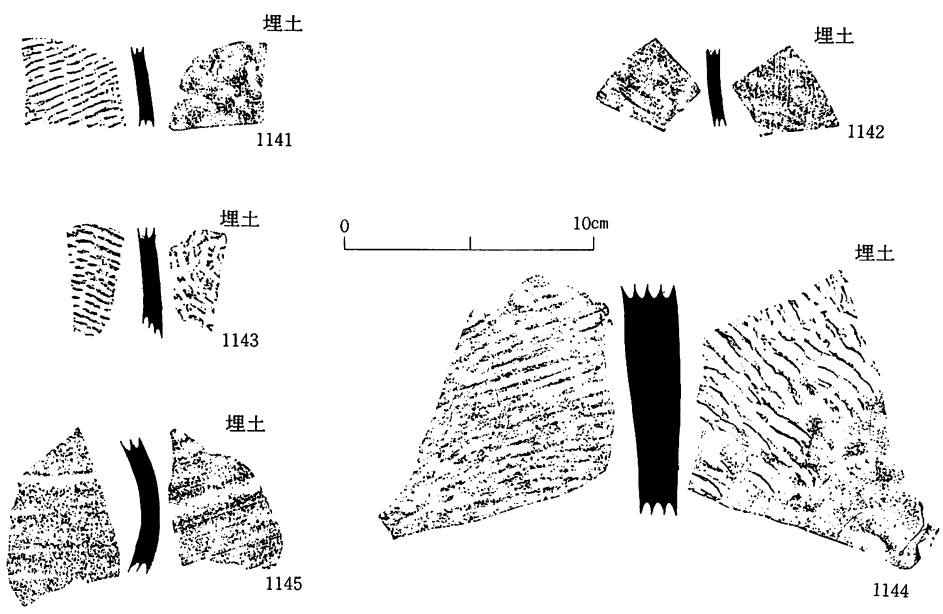


B - 2 溝跡

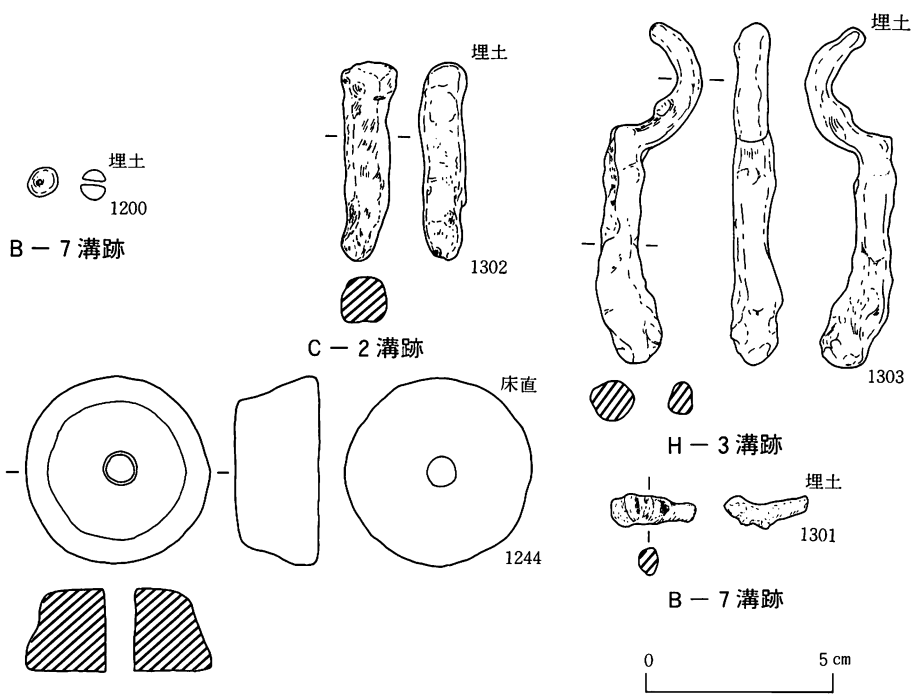


B - 7 溝跡

第294図 溝跡(遺物)



B-7 溝跡

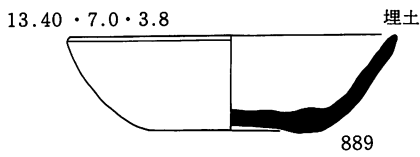
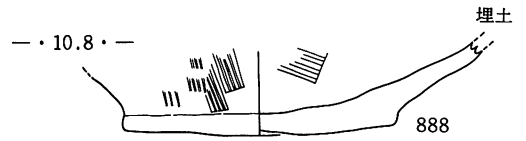
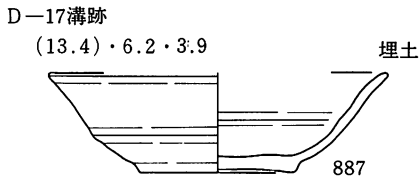


B-7 溝跡

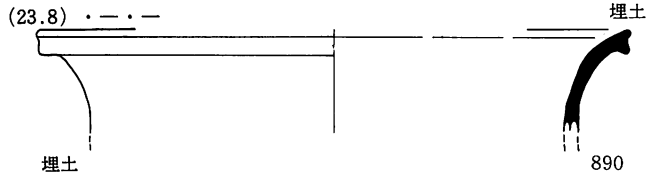
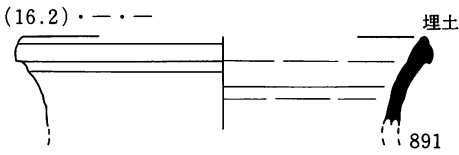
第295図 溝跡(遺物)



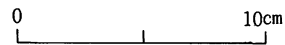
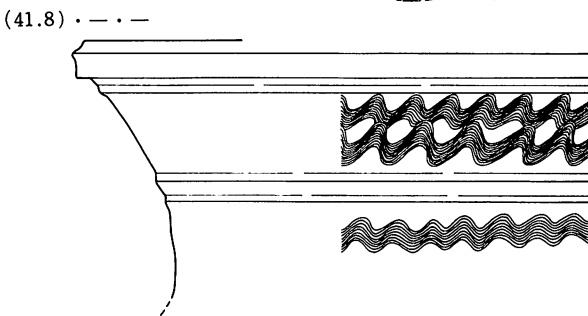
C-2 溝跡



D-17 溝跡

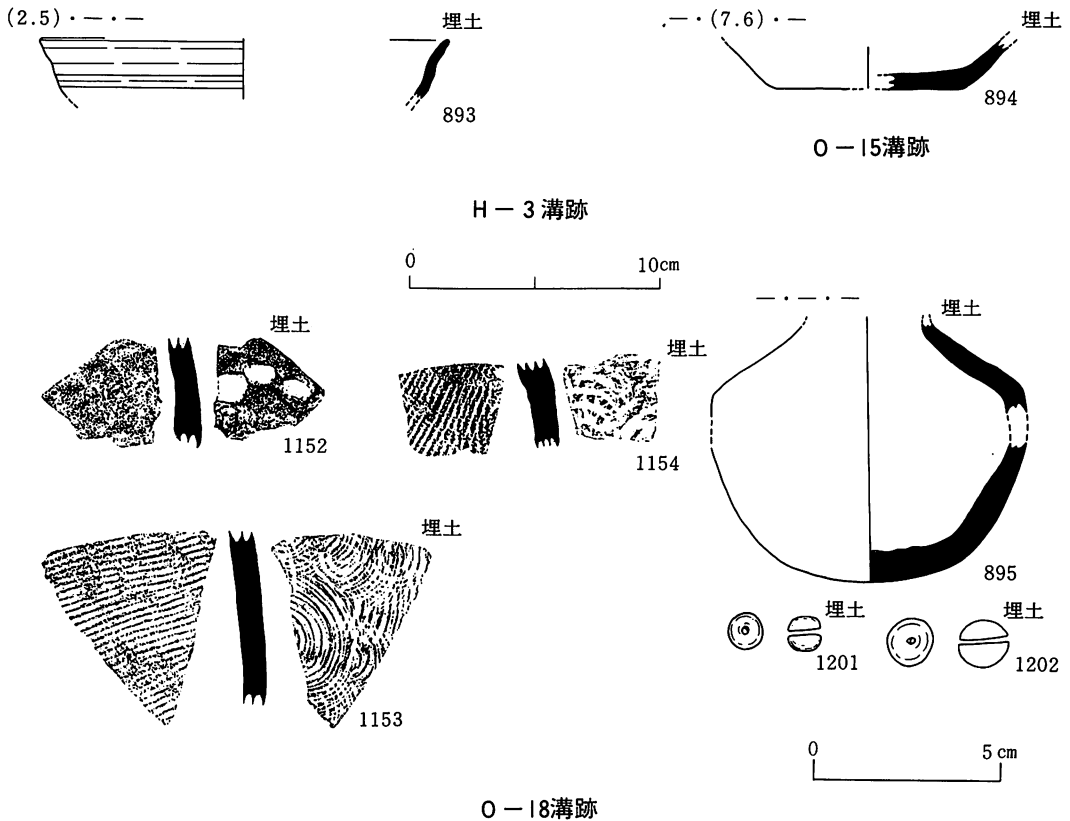


G-15 溝跡



G-17 溝跡

第296図 溝跡(遺物)



第297図 溝跡(遺物)

され、体部外面に段をもつものである。他は不明である。

**甕形土器** 小破片のため図化されていないが、ロクロ未使用成形のものが出土している。全体的なことは不明であるが、体部内外面にハケメ痕を残すものが多い。

**須恵器**

**甕形土器(1152~1154)** 大甕の体部破片である。1152は外面ヘラナデ・内面ナデ、1153と1154は外面平行タタキ目で内面青海波文をもつ。

**壺形土器(895)** この壺はロクロ使用成形のもので、底部~体部の破片と肩部~頸部の破片が出土している。図上で復元された器形は、罍形となる可能性もあるが、ここでは短頸壺としておく。底部はヘラケズリ調整されている。

**その他**

**土製品(1201・1202)** 土製の丸玉である。中心部に各1ケの貫通孔をもつ。 (遠藤勝博)

## 5. 遺構不明の出土遺物(第298・299図、P L 151A)

この項で扱う遺物は、明らかに遺構内より出土しているが、整理作業の勝手から出土した遺構が不明となったものである。従って、この中には完形土器も含まれている。種類としては土師器・須恵器・土製品・鉄製品があり、器種では坏形土器・甕形土器・土製丸玉・名称不明鉄器がある。

### 土師器

**坏形土器**(1304～1307) ロクロ使用成形のもの(1304・1306・1307)とロクロ未使用成形のもの(1305)がある。ロクロ使用成形のものには内面が黒色処理のもの(1304・1307)と黒色処理のないもの(1306)がある。底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。なお、1307には墨書があるが、解読不能である。1305は体部外面に段をもち、底部形態は丸底で内面は黒色処理されている。

**甕形土器**(1308～1314) ロクロ使用成形のもの(1310・1315)とロクロ未使用成形のもの(1308・1309・1311～1314)のものがある。ロクロ使用成形のものには口唇部に挽き出しがなく、直線的に軽く外反する口縁部をもつもの(1310)と、口唇部が上方に挽き出され、外弯気味に大きく外反する口縁部をもつもの(1315)がある。ロクロ未使用成形のものには、大型(312～314)・中型(1309・1311)・小型(1308)がある。頸部に段をもち、口縁部は直線的に外反するもの(1312・1314)と外弯気味に外反するもの(313)がある。1309の底面には再調整の痕跡を明瞭に残し、1311には木葉痕が付されている。1314は体部下位に体部最大径をもつ。

### 須恵器

**坏形土器**(1316) ロクロ使用成形のもので、口縁部破片である。全体的なことは不明である。

**甕形土器**(1317～1321) ロクロ使用成形で、1318・1319・1321は口縁部破片で、1317・1320は底部破片である。なお、1317は高台が付されている。

### その他

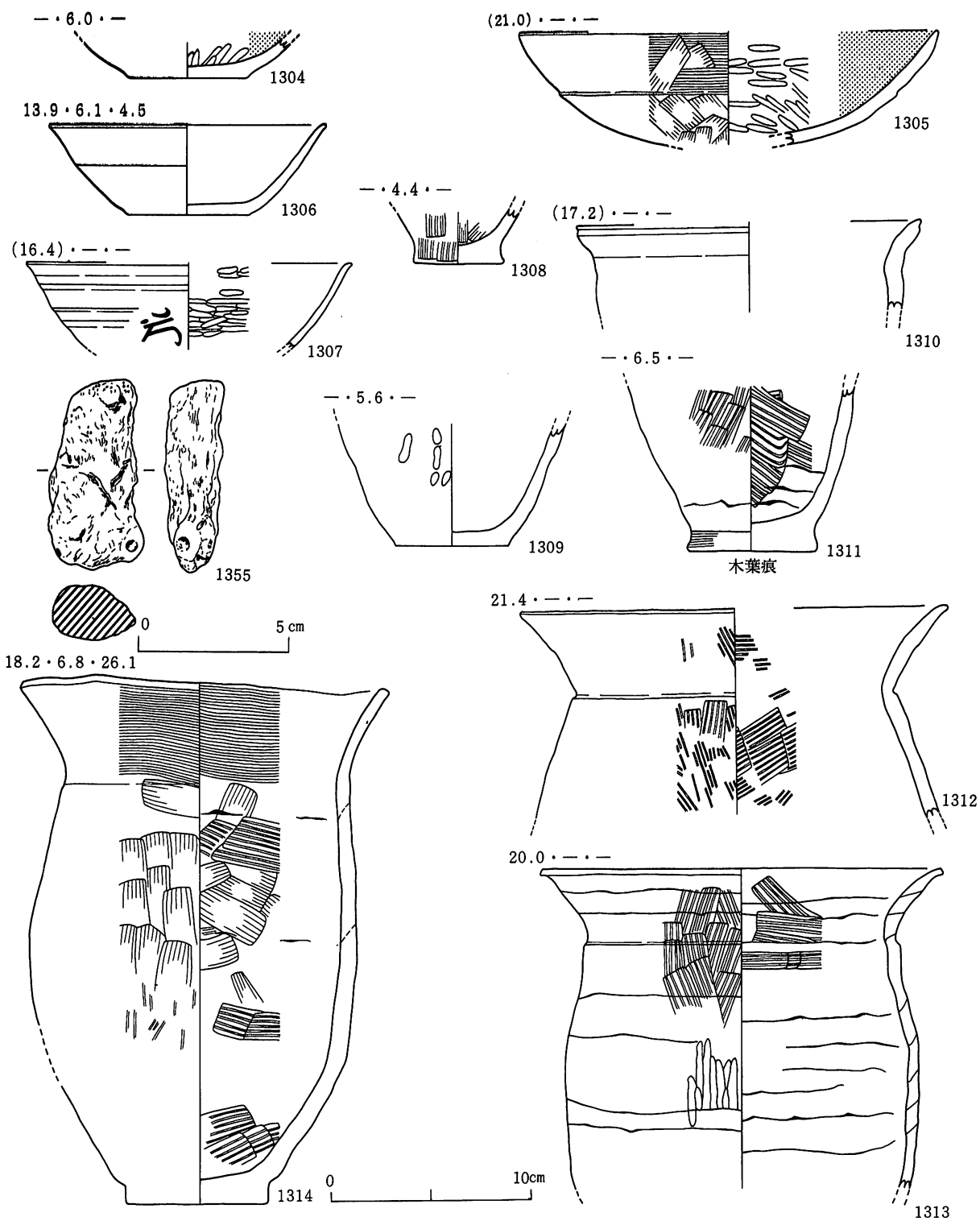
**土製品**(1349) 土製の丸玉で、中心部に1ヶの貫通孔をもつ。

**鉄製品**(1355) 名称不明の鉄器である。 (高橋与右工門)

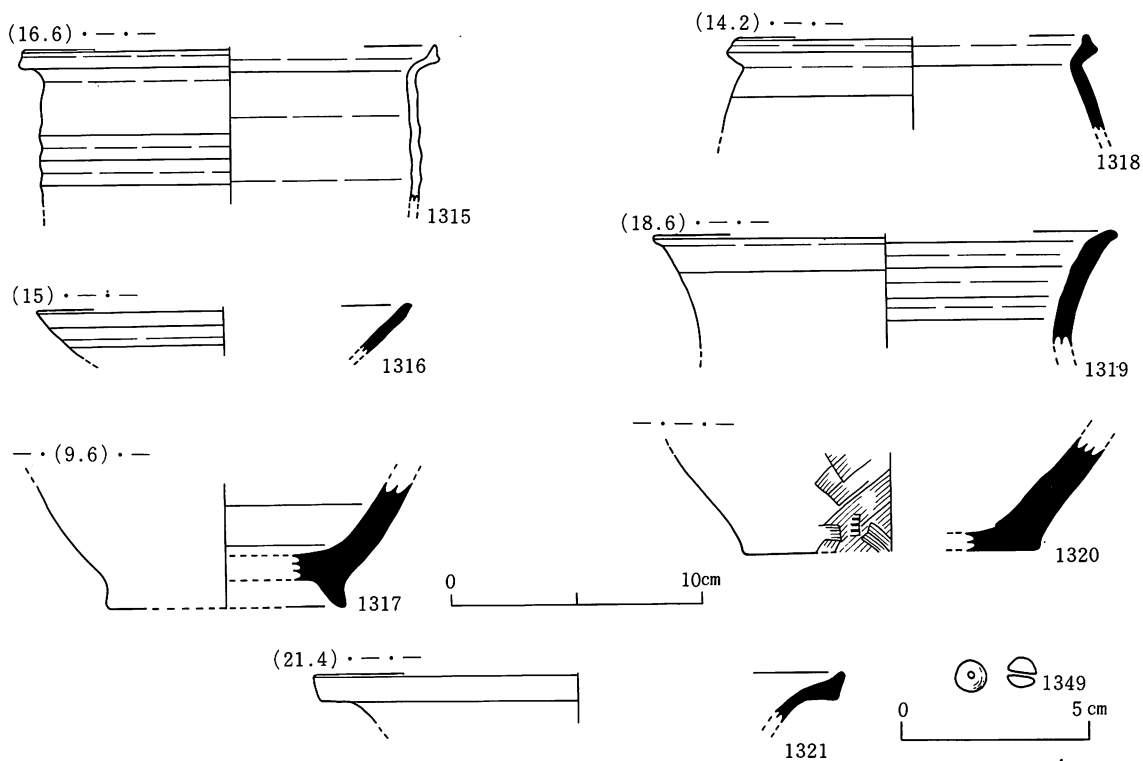
## 6. 表採や粗掘り中の出土遺物(第300・301図、P L 151B・152・153)

ここに紹介する遺物のほとんどは粗掘り中に出土したものである。遺物の種類としては、須恵器の破片が最も多く出土しているのであるが、図化できる様な破片がほとんどない。この様





第298図 遺構不明



第299図 遺構不明

なことから、須恵器の破片を中心に、土製品・石製品・鉄製品を掲載した。

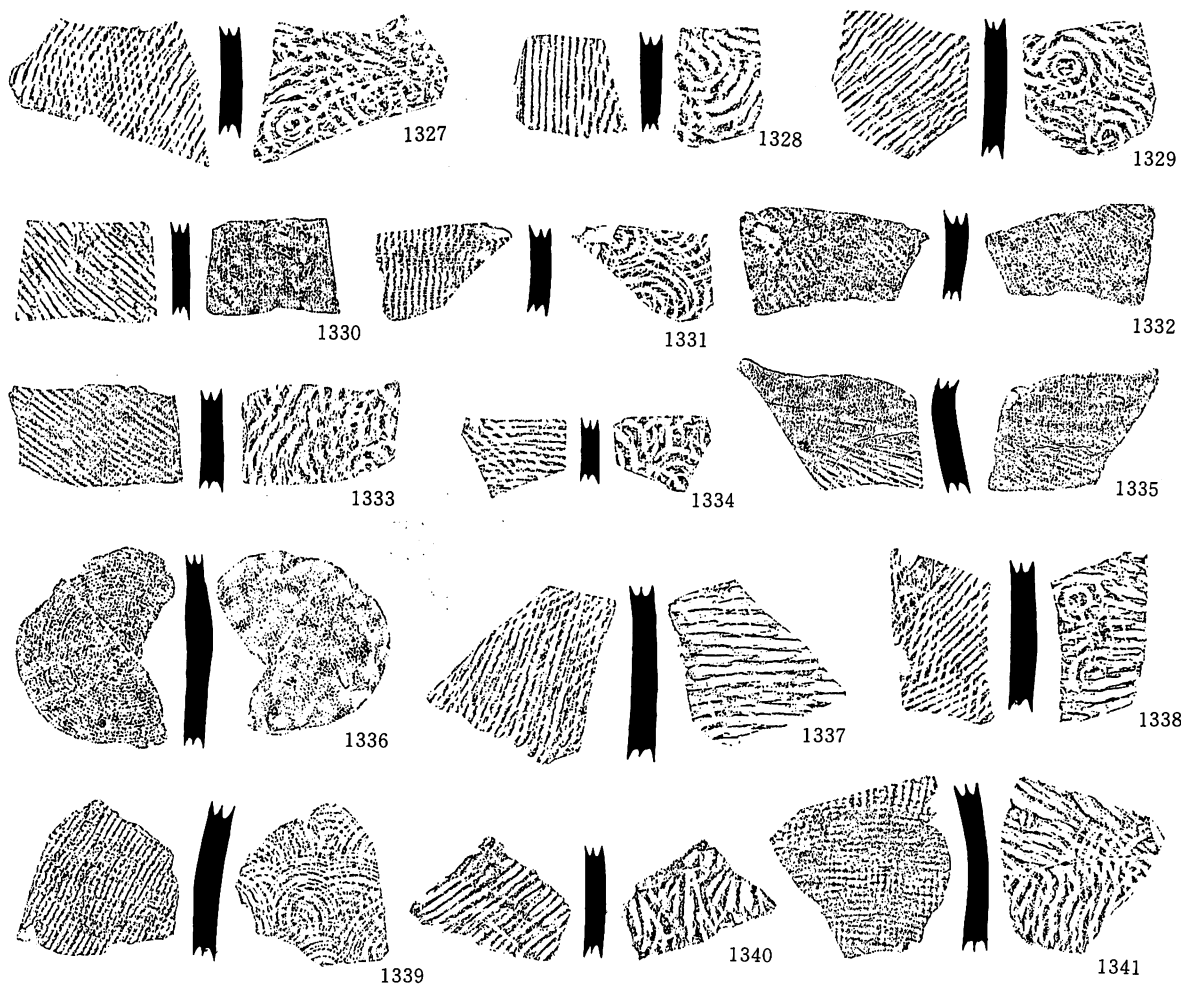
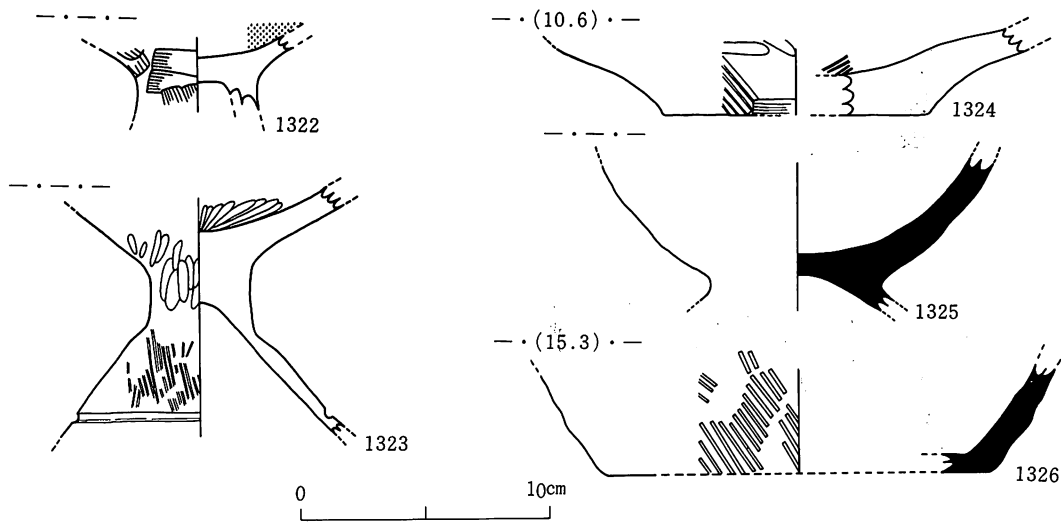
**土師器**

**高坏形土器**(1322・1323) いずれもロクロ未使用成形のもので1322は柱状部のみを残存し、1323は柱状部～裾部を残存している。特に、1323の柱状部は方形を呈し、裾部が大きく開くものであり、比較的大形である。両者とも坏部内面は黒色処理されている。

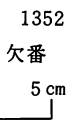
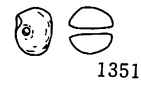
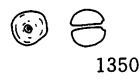
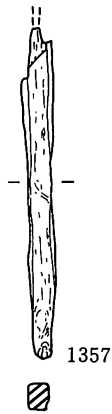
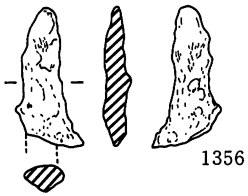
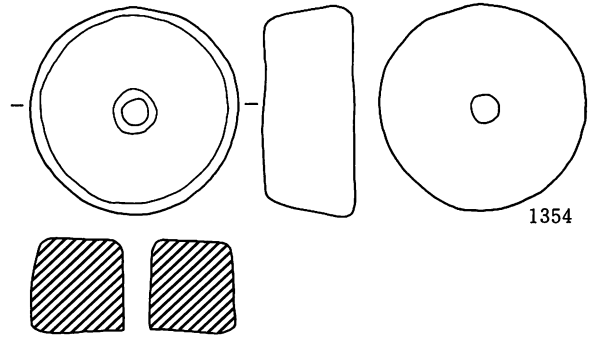
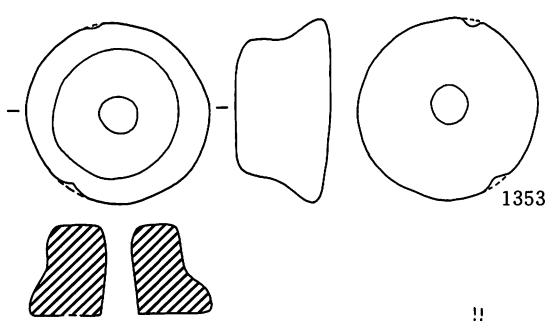
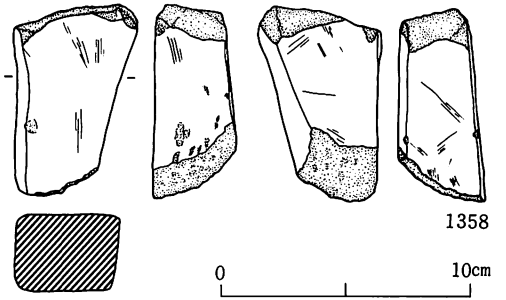
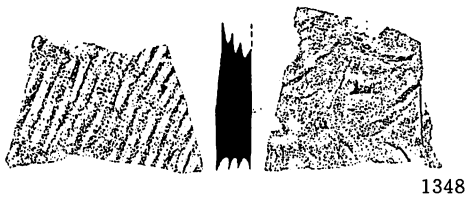
**甕形土器**(1324) ロクロ未使用成形で、底部～体部下位の一部を残存している。

**須恵器**

**甕形土器**(1325～1348) 1325は高台の付く底部に丸味をもって立ち上がる体部をもっている。1326は底部～体部下位を若干残存しており、外面に平行タタキ目をもつ。1327～1348は、1336を除くと他は大甕の体部破片である。1336は提瓶の体部破片である。外面の叩き技法は、1336



第300图 表採・粗掘



第301图 表採・粗掘

以外は例外なく平行タタキ目で、その中には1341の様に、縦位と横位を重ねているために格子状を呈するものもある。内面は、青海波文・円文・平行タタキ目・放射状タタキ目・カキ目等の種類がある。1336は外面が同心円状のカキ目、内面指ナデである。

#### その他

**土製品**(1350～1354) 1350・1351は土製の丸玉で、各1ケの貫通孔をもつ。1353・1354は土製の紡錘車で、中心部に1ケの貫通孔ももつ。

**石製品**(1358) 砥石である。4面に使用面をもち、断面が方形である。

**鉄製品**(1356・1357) 1356は刀子の先端部とおもわれるものである。1357は断面方形で細長い棒状を呈することから、釘かとおもわれる。(高橋与右工門)

### 7. 集落に先行する遺物 (第302・303・304・305・306・307・308図、) PL153B・154・155・156・157A)

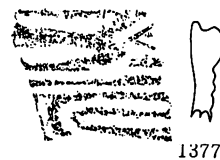
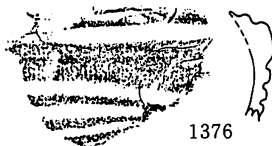
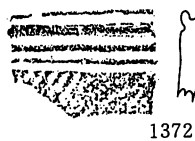
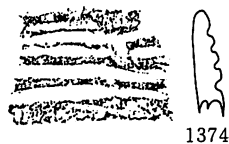
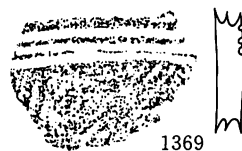
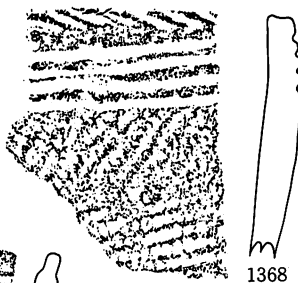
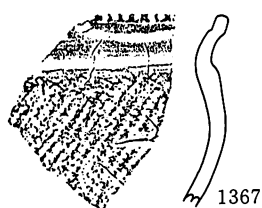
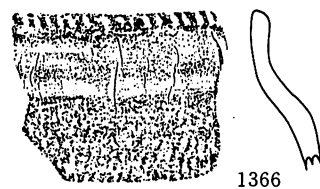
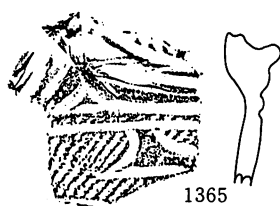
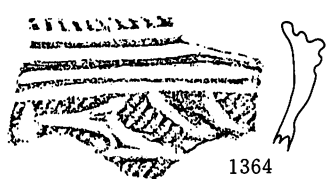
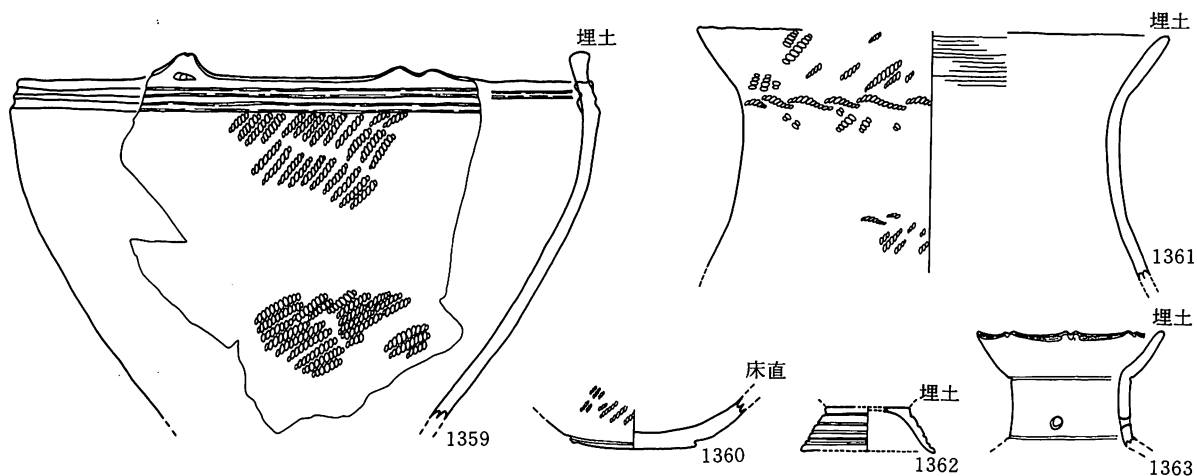
ここには、縄文時代や弥生時代に属すると考えられる土器や石器を入れた。これらの遺物は粗掘り中や遺構検出作業中のみならず、遺構の埋土内からも1ケ・2ケと出土し、集中して出土する地点もなく、ほぼ遺跡全域で出土している。しかし、検出された遺構の中に、これらの遺物が該当する遺構は含まれていない。調査区域外にこの期の遺構が存在する可能性はあるものの、その実体は不明といわざるを得ない。ここでは土器と石器に大別して記述するが、土器の所属時期については大雑把に触れるに止める。

#### 1) 土 器

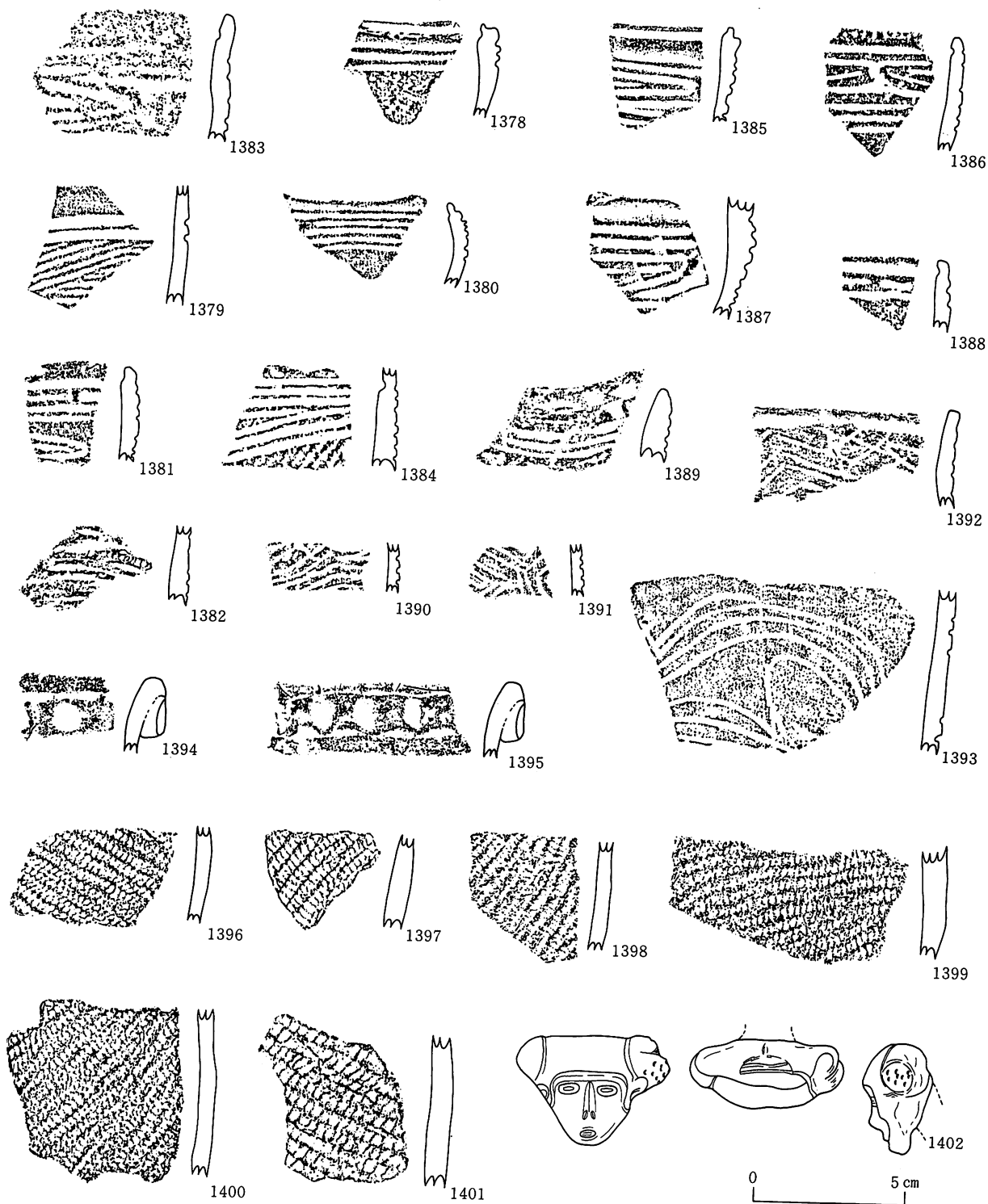
実測可能なものが3ケ含まれていたが、他のものはすべて破片であることから、これらについては拓本図で掲載した。

##### [縄文時代晩期に属する土器]

この時期の土器は実測図1359・1360・1362と拓本図1364～1389が該当する。1364・1365の口縁部文様は大腿骨文を主文様とし、口縁部には山形突起をもつとともに、上端には沈線による刻み目をもつ。1366・1367は頸部が若干窄み、無文帯を形作っている。口縁部上端には沈線による刻み目をもつ。1368・1369は口縁に複数の平行沈線を巡らし、上端には口縁に対して沈線による斜位の刻み目を付している。1370～1372・1374・1380・1381・1388は口縁部に小突起をもつ波状口縁で、口縁部には沈線と細隆起線とによって工字文的な文様を付している。口縁部内面には沈線をもつものもたないものがある。1377・1382は流水文的な文様をもつもので、1370等のグループより文様帯が広がる。1373・1376・1378・1379・1383～1387はいわゆる工字文的な文様の施文されたものであるが、これらの文様は沈線と隆帯の組み合わせで施文した



第302図 集落に先行する遺物一 ①



第303図 集落に先行する遺物一 ②

ものである。1386は沈線のみによって工字文が付されている。

#### 〔弥生時代に属する土器〕

この期に属する土器は、実測図1361・1363と拓本図1390～1395が該当するが、1390と1391および1394と1395は同一個体の破片らしい。これらの土器は大別すると①沈線を主体とした文様（1390～1393）②隆帯をもつもの（1394・1395）③縄文のあるもの（1361）④全く無文なもの（1363）になる。

#### 〔粗製土器〕

拓本図1396～1401が該当するが、この種の土器は単独で所属時期を決定することは不可能である。原体はRL・LRともにある。

#### 〔土偶〕

1点（1402）が出土している。頭部のみが残存しているので、体部は不明である。顔面の表現が非常に写実的で、目・鼻・口・耳ともにはっきり表出している。髪は両側頭部に束ねている。

## 2) 石器

縄文時代や弥生時代に属すると考えられる石器は全部で39点である。その中に①石鏃 8点、②石匙 2点、③スクレパー 1点、④石筥状石器 1点、⑤磨製石斧 5点、⑥扁平打製石器的な石器 1点、⑦石刀 1点、⑧石鋏 5点、⑨敲き石 2点、⑩磨石 10点、⑪有孔礫石器 2点、⑫凹み石 1点、⑬砥石的な石器 1点、等が含まれている。

#### 〔石鏃〕（1403～1410）

全部で8点出土しているが、その中の2点（1403・1404）は無茎であるが、1403は基部が軽く凹み、1404は大きく凹んでいる。1405～1409は有茎のものである。1410は側縁に抉りを入れて基部を作り出したもので、いわゆる「アメリカ式石鏃」である。

#### 〔石匙〕（1411・1412）

1411は粗雑な二次的剝離調整で刃部を作り出し、やや大き目のつまみをもつ。1412は刃部調整を全くしていないものであるが、つまみ部を作り出しているものである。

#### 〔スクレパー〕（1413）

小型の剝片の側面を剝離調整したものである。

#### 〔石筥状石器〕（1414）

周囲に粗い剝離調整をもつものであるが、いわゆる「石筥」とは若干差がありそうである。

#### 〔磨製石斧〕（1415～1419）

1416は頭部を欠失しているが、他のものはほぼ完形である。1419は磨耗や風化が激しく、刃



部も丸味をもっている。1415は他より小型である。

〔扁平打製石器的な石器〕(1420)

縄文時代前期～中期前葉にかけての遺跡から良く出土する半円状扁平打製石器に形態が近似しており、扁平な礫の周縁に敲打剝離調整を加えたものである。

〔石刀〕(1421)

一部を欠失しているらしいことから、全体的なことは不明である。断面が扁平で、細長く先端部に向かって次第に細くなり、先端は尖るらしい。

〔石鋏〕(1422～1426)

全部で5点出土しているが、左右対象のもの(1422・1423・1425)と非対象のもの(1424・1426)がある。扁平な礫を使用し、周縁を敲打剝離調整したものである。

〔敲石〕(1427・1428)

1427は両先端に磨滅面や敲打剝離面を残している。1428は先端部を大きく欠失していることから、敲き道具として使用されたものであろう。

〔磨石〕(1429～1439)

断面が扁平で、円形を呈する礫が全面に磨滅痕をもち、滑沢なものである。この中の1430・1433・1434・1437・1438は割れている。特に、1437・1438は割れた破片がお互いに接合している。

〔有孔礫石器〕(1439・1441)

自然礫の一端に貫通孔をもつもので、孔の内面が若干磨滅した痕跡を残している。石錘的な用途に使用されたものと考えられる。

〔凹み石〕(1440)

自然礫の両面に使用による凹みをもつものである。

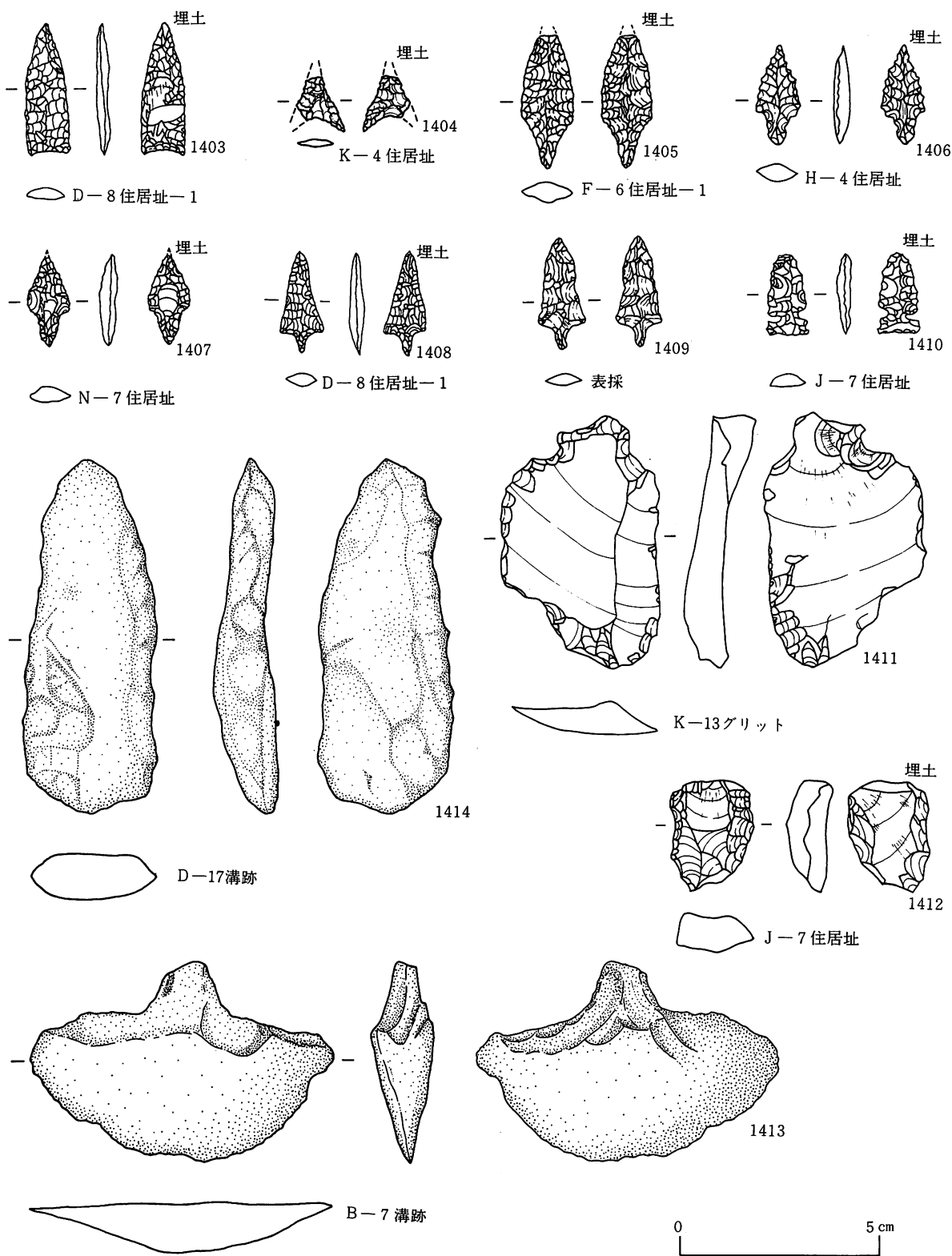
〔砥石的な石器〕(1442)

多孔性の礫であるが、一部に磨滅痕をもつことから砥石として使用したものであろう。

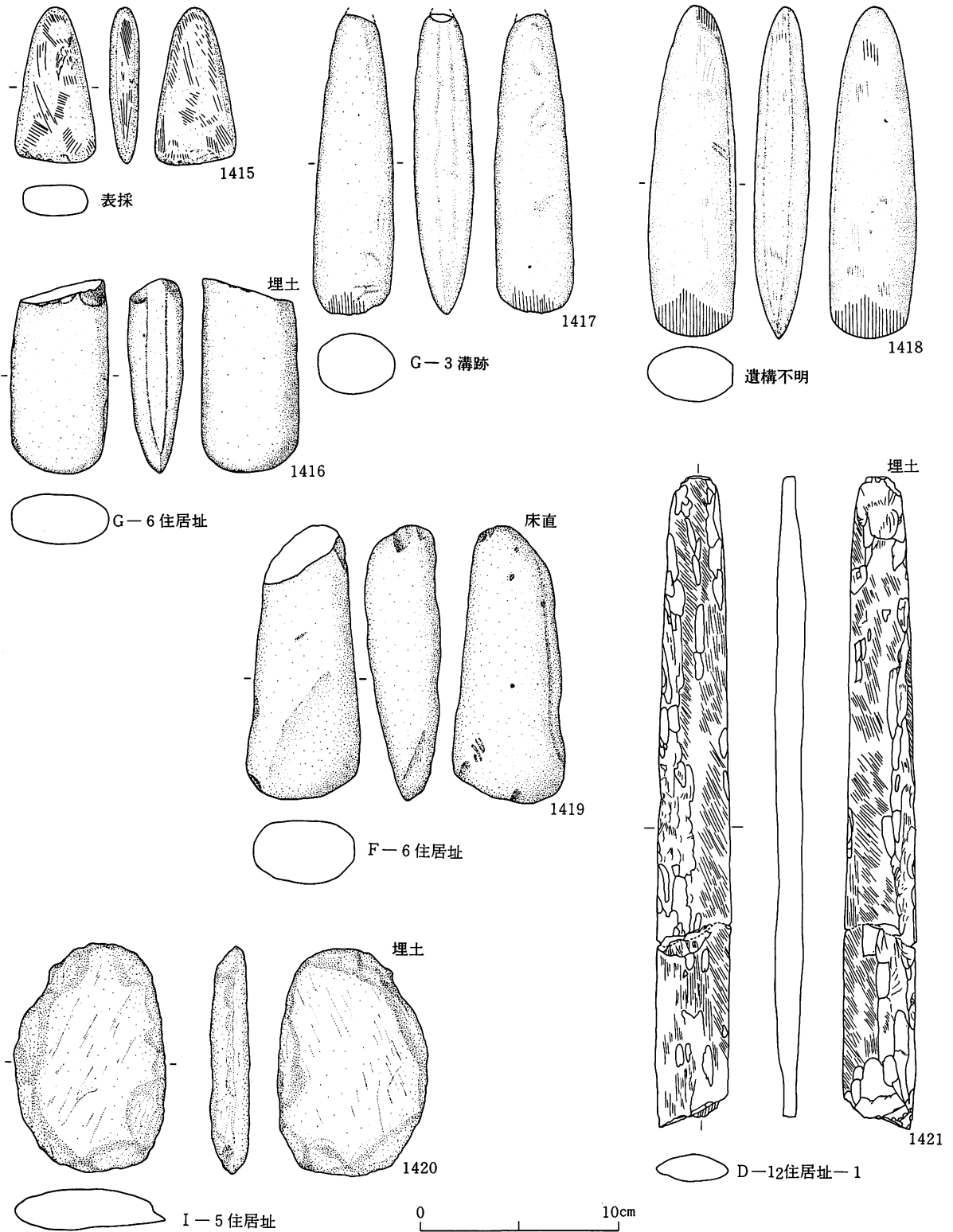
(高橋与右工門)

## 8. 磁 器

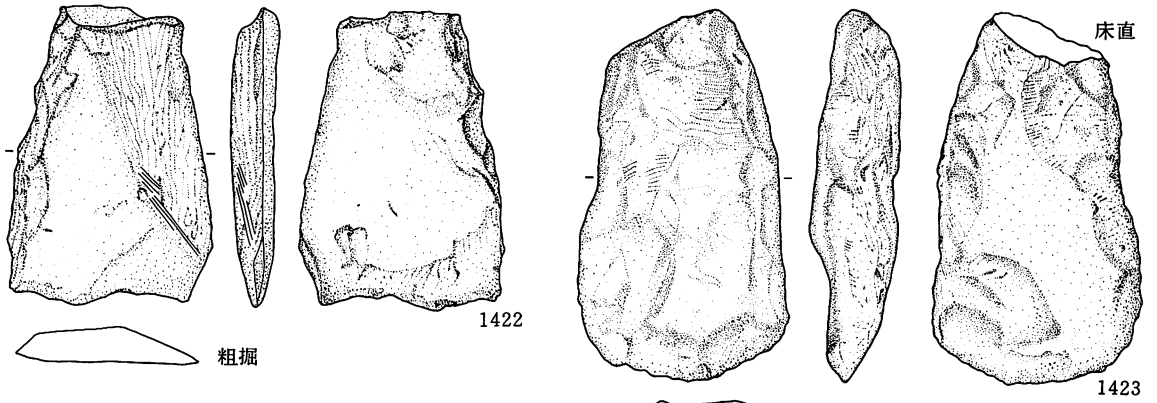
本遺跡の調査では、舶載と考えられる青磁や青白磁の破片が出土している。P L103 - 1443の破片は青磁で皿か碗の底部寄りの一部分と考えられる。P L132-1444は青磁碗の破片である。体部は丸味をもっており、口縁部は小さく外弯している。体部に平行する微かな沈線がある。1443・1444ともに釉は均一にかけられ、色調も淡い緑色でほぼ共通し、全面に貫入がみられる。



第304図 集落に先行する遺物— ③



第305図 集落に先行する遺物一 ④



床直

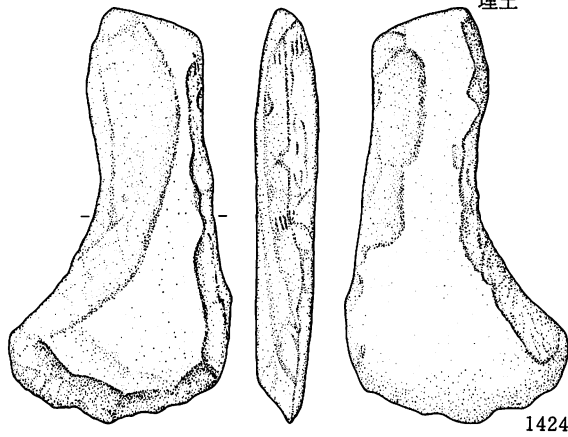
1422

1423

粗掘

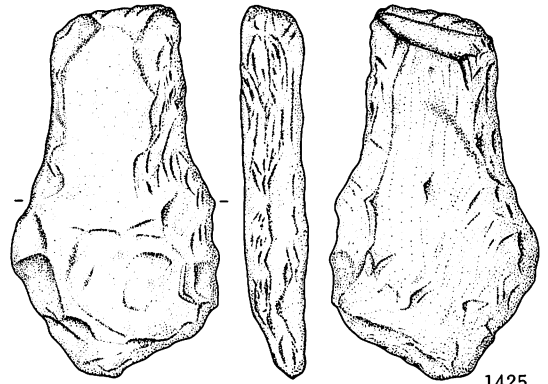
J-7 住居址

埋土

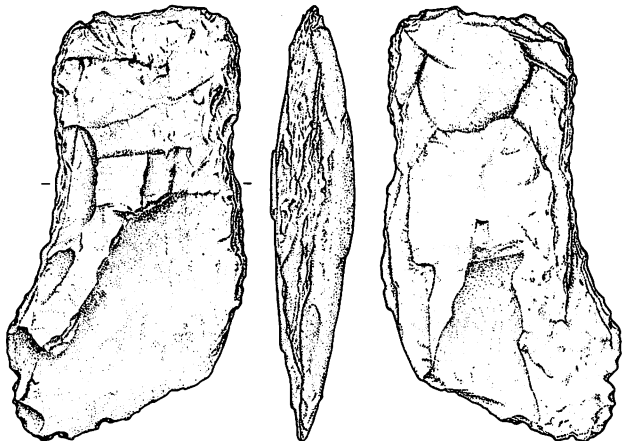


1424

C-3 住居址



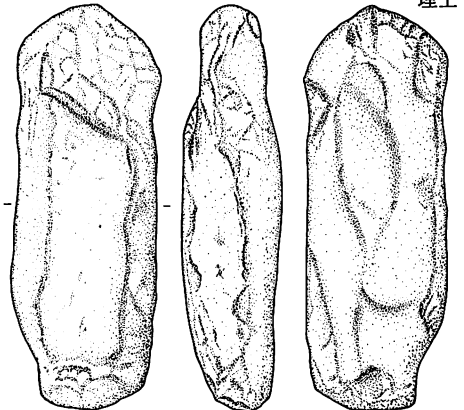
1425



1426

遺構不明

埋土

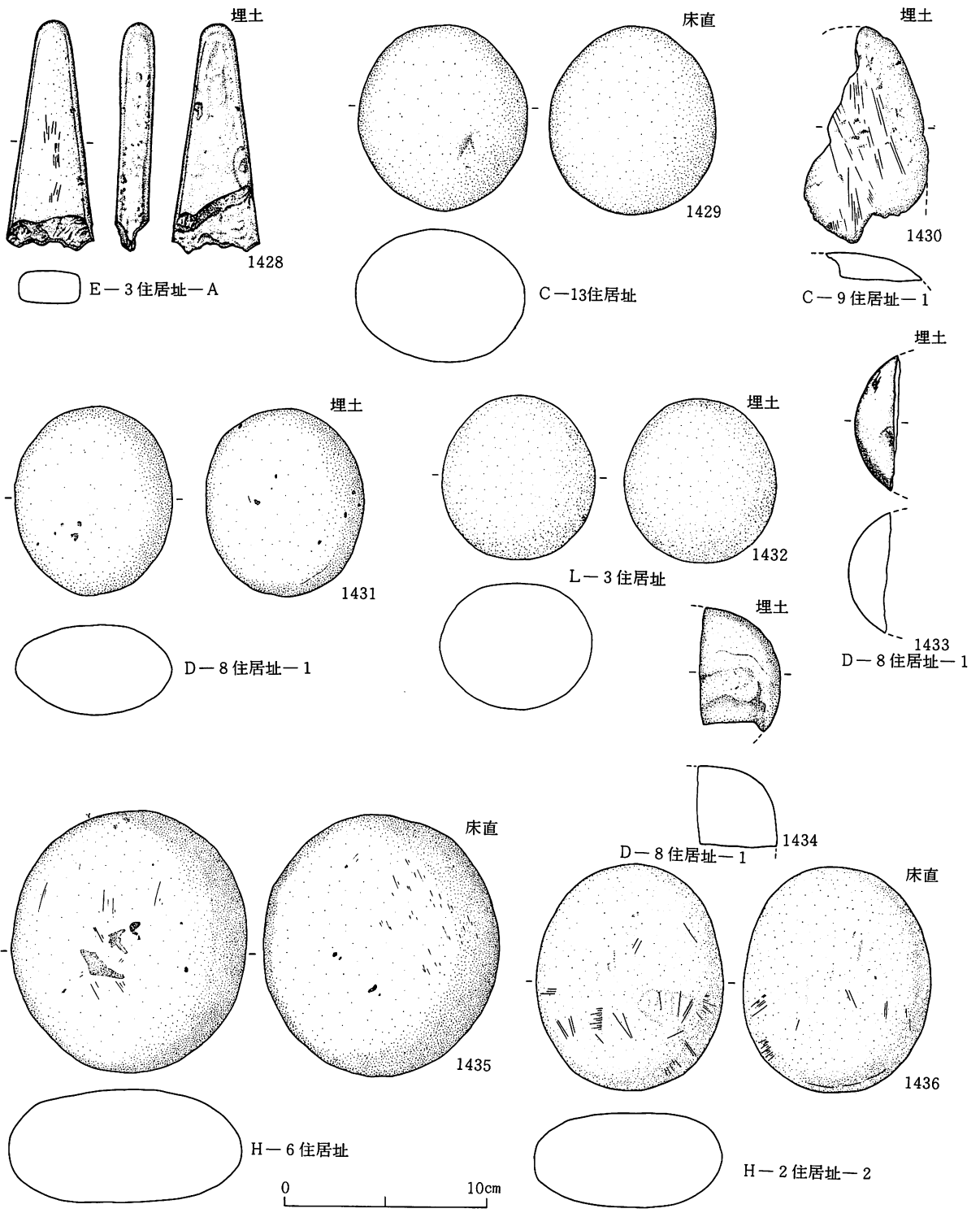


1427

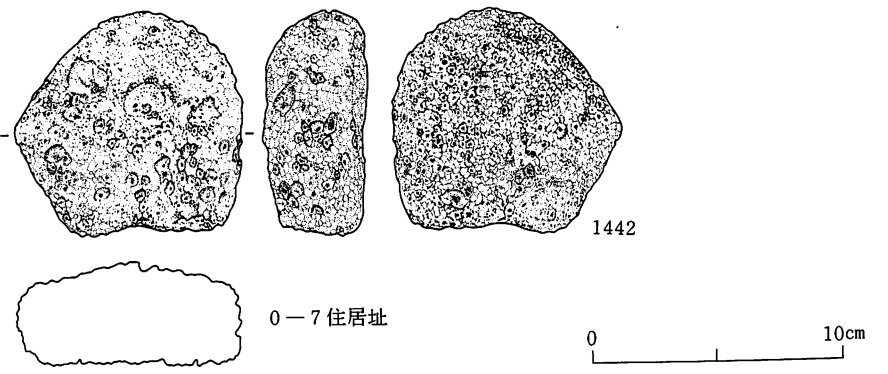
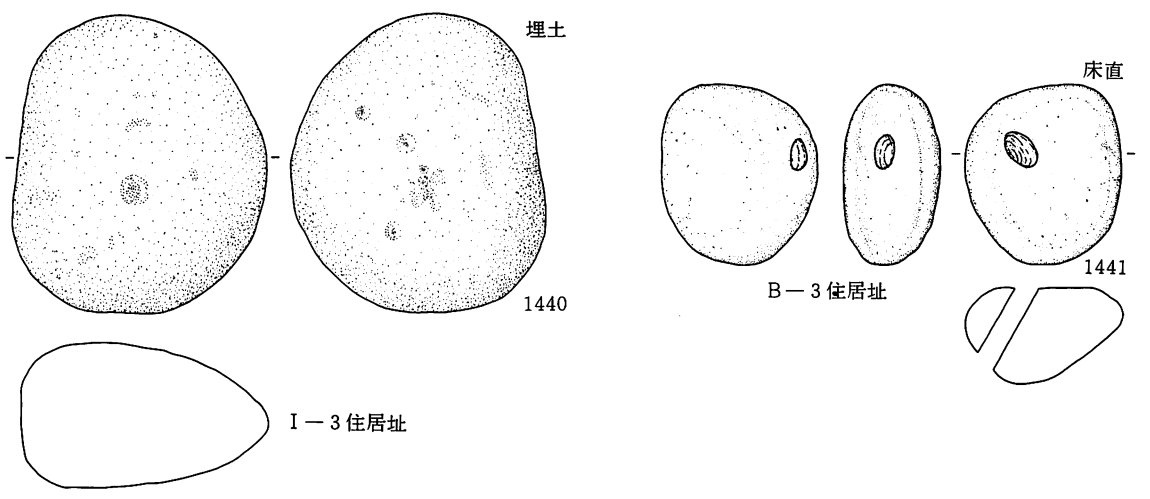
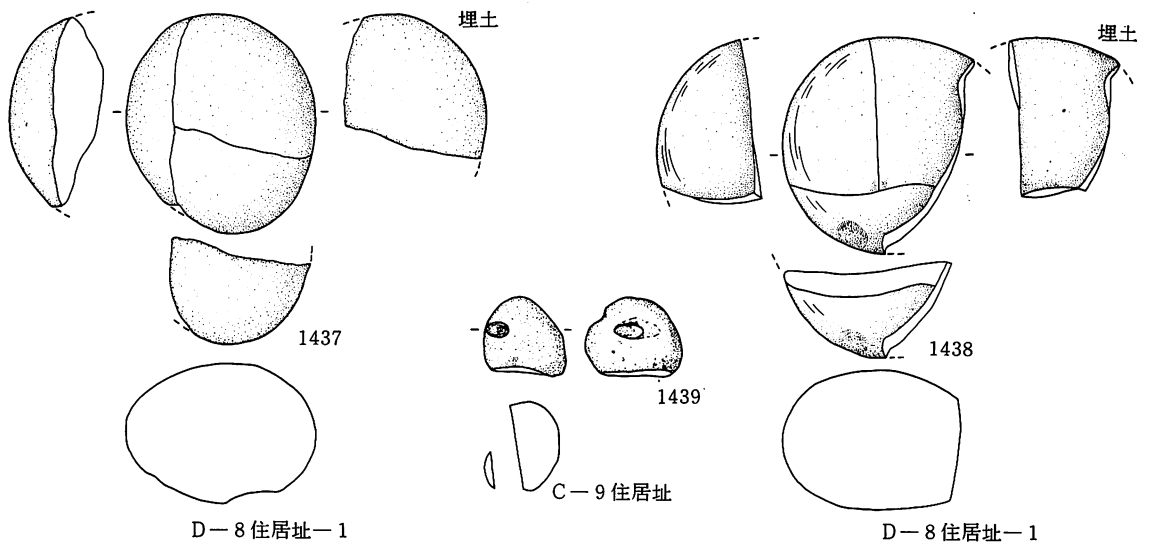
J-6 住居址

0 10cm

第306図 集落に先行する遺物一 ⑤



第307図 集落に先行する遺物— ⑥



第308図 集落に先行する遺物— ⑦

PL149-883は梅瓶の破片である。作り方は全体的に粗雑で、底部は上げ底となっている。外面には平行沈線で描かれた唐草文が施文されており、沈線部分は陰青となっている。釉はほぼ均一であるが、外部底面にはかけられていない。色調は前二者よりは濃色であるが、淡い緑色で濃淡のムラがあり、全面に貫入が入っている。

これらの遺物は、1443は住居址の埋土内、1444は遺構検出面、883は溝跡埋土の最上層でそれぞれ出土している。

(高橋与右エ門)